

鬼滅の東刃～Another of Slayer～

トーニオン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも鬼滅の刃に東方projectのキャラクターが組み込まれたら、

それが鬼滅の刃の運命をわずかに変えることがあるのでは

そしてもつと戦いが熱くなれば

そんな「東方キャラIN鬼滅の刃」的なものがあればのお話です。

原作の内容にオリジナルを追加する場合があります

目次

かまぼこ隊結成編

残酷な日と2人の剣士 | 1

育手と弟子と | 6

修行と最終試験 | 9

最終選別と白髪の少女 | 13

浅草と因縁 | 19

遺品整理と姉弟子 | 26

下弦討伐編

糸と人形 | 31

雷の呼吸ときょうだい | 36

兄と鬼 | 42

驕りと強い女 | 50

二年前と隊律違反 | 53

南東の島と生首 | 57

下弦と正体 | 61

蝶屋敷編

兄の意地と柱合裁判 | 65

お館様と禰豆子の試練 | 70

蝶屋敷と同期一同 | 74

夜中と柱たち | 78

機能回復訓練と強さの秘密 | 84

酒の臭いと夢遊者 | 89

全集中・常中と日輪刀 | 95

新たなる任務と4人の旅立ち | 99

十二月月会議録

103

無限列車編

うな重と土地の主

107

煉獄さんと夢の思い出

110

妖夢の記憶と戦う理由

115

夢を使う鬼と250人の人質

120

下弦の鬼と上弦の鬼

126

煉獄さんの実家と呼吸の話

131

複数の始祖と師の最期

137

猗窩座と生き残りの鬼

140

空白の4ヶ月編

継子会と7人の少女

143

大きな屋敷と黒一点

148

三人の鬼とそれぞれの火蓋

152

屋敷の秘密と自分の弱さ

154

誰かの記憶と運命の行方

161

善逸の思いと誕生日

166

柱合会議と新たな希望

170

吉原遊郭編

人さらいと祭りの神

175

潜入任務と3人の嫁

180

鯉夏花魁と屋敷の違和感

186

箸と手がかり

190

京極屋と太夫の存在

194

失踪者と太夫の本性

199

ミミズ帯と集まる仲間たち	204
太夫の変貌と二つの限界	210
暴走ともう1人の鬼	216
兄妹鬼と決戦	221
兄鬼と攻略法	225
誇りの崩壊と涙を流すもの	229
共存願望と兄妹の最期	234
崩壊した吉原と新たな戦いの兆し	238
炭治郎覚醒までのそれぞれ編	
善逸とこいし	242
死亡志願者と初日の出	245
幽々子の過去と形見	249
伊之助とアオイ	252
貧民街の鬼とカナヲの因縁	256
刀鍛冶の里編	
夢の誰かと目覚めたこと	260
刀鍛冶の拒否と禰豆子の催眠	265
刀鍛冶の里とさいかいの同期	269
霞柱と縁壺零式	276
ウザったい鎧鴉と小鉄くんの決意	280
小鉄くんの鬼畜戦闘訓練と渾身の一撃	285
鬼の計画と鍛えすぎた鋼鐵塚さん	290
玄弥とにとり	294
時透さんと分裂する鬼	299
喜怒哀楽と敵の特性把握	303

うるさい隊士と魚の化け物

307

入り乱れる戦いと絶体絶命

311

狂気の芸術家と無一郎の不思議な感覚

316

恋柱と義足

320

爆血刀と鬼の本体

325

玄弥の過去と鬼の変貌

330

無一郎の記憶と覚醒

335

被害者面の鬼と成長する鬼。

341

新たなる刀と悪口合戦

346

策士の溺れと巡り巡り

352

恋柱の過去と新たなる覚醒

357

みんなの力と奇跡

362

勝ちどきと空里

367

柱稽古編

緊急柱合会議とそれぞれの思惑

371

お見舞い客と柱稽古の報せ

381

説得大作戦と繋ぐべきこと

387

しのぶの作戦とそれぞれの動向

394

柱たちの条件と4つの試練

400

太刀筋訓練と伊黒さんの過去

406

玄弥と文の大作戦

412

不死川さんと花柱を継ぎたい隊士たち

418

岩柱さんの試練と同期の集合

422

悲鳴嶼さんの過去と反復動作

427

最後の試練と透き通る世界

433

無惨の過去と本当の目的

439

猗窩座と勇儀

443

不死川さんの好物と最終決戦の予兆

448

無限城編

鬼を統べし者と鬼狩を統べし者

453

無惨の奥の手と無限城

458

雷の宿敵と繋ぐ2人の戦い

463

二体の武人と二つの開戦

469

唾吐きと強い者のするべきこと

474

妹紅の苦悩と乱入者

479

戦場の女と本当の透き通る世界

484

封印と恋

488

運命のめぐりあいと奇跡の最期

492

禰豆子の脱走と育手たちの覚悟

497

1万人の教祖としてのぶの怒り

502

童磨の過去と裏切り者

506

伊之助の過去と乱入者

510

童磨の崩壊と私の役目

515

甘露寺の暴走と鳴女の涙

520

鳴女の過去と無惨への愛

525

上弦の剣士と集まる柱たち

530

泥酔の稀血と実弥の過去

535

永琳の過去と全ての因縁

540

黒死牟の畏怖と無一郎の決死の採取

544

二つの月と玄弥の覚醒。

549

黒死牟の焦燥と永琳の決死策	554
上弦の壱と絶望の真実	559
さとのりの過去とフランの血鬼術	563
爆血合戦と禰豆子の刻限	567
玄弥の銃と上弦の壱の弱点	570
上弦の決着と無惨の復活	574
悲しき死と鬼の目の涙	578
目覚めぬ炭治郎と肉の壁	582
遺伝の記憶と縁壱の過去（前編）	587
遺伝の記憶と縁壱の過去（後編）	594
婚前隊士の撤退と無惨攻略の糸口	597
希望と絶望	602
鬼の始祖の史実と全ての因縁の敵	607
始まりの夜と終わりへの戦い	611
最後の戦いの地と十三の型	615
円環の先と命の終わり	619
無惨の願いと太陽のある空	623
最後の任務と新たな未来へ	626
青い彼岸花と最後の鬼殺隊	632
お館様の思いと鬼殺隊の終焉	635

かまぼこ隊結成編 残酷な日と2人の剣士

1913年1月の終わり

いつものように炭売りを終えた俺は家へ帰ることにした。

しかし夜も遅いということもあり山の入り口に住む三郎おじさんの家に泊めてもらうことにした。

この選択が全ての始まりだったということが分かるのには少し時間がかかったのだ――

夜が明け今は7時ごろだろうという時に俺は三郎おじさんに別れを告げた。

「気をつけてな」

「行つてきます！」

そして俺は家へと向かった。

しかし家へと進むごとに何か変な臭いがしてきた

血の臭いだ――

血の臭いがするときには良くないことが必ず起きる。

俺は急いで家へと走った。

そして日が丁度正午くらいを指し始めたであろう時、

俺は全てを察した

家の前には血溜まりができ俺の家族が血塗れになって倒れているのを見て言葉にならない叫びを上げていた。

(誰か！生きててくれ！)

その思いも虚しく命の火は消えていた。

たった一人長女の禰豆子を除いて――

「まだ息がある！医者に見せなきゃ！ここからだ！一番近いのは氷川だ！」

そう思い俺は山を駆け下りた。

しかし何故か後ろから変な声がしてきた。

「ウウウウウウウウウウアアアア！」

俺はとつさに焦り禰豆子を下ろそうとして雪に滑った。
背中から離れた禰豆子は大丈夫かと思いい俺は雪をほろろのも忘れ
雪だらけになりながら振り向いた。

そこには呻き声を上げる禰豆子、大丈夫か？痛くないか？

と俺は思い禰豆子に近づくと

しかし禰豆子は俺を振り払い顔をあげた。

そこには獣のような目をし鋭い牙を剥き出しにし噛み締めている
禰豆子がいた。

これは昨日三郎おじさんから聞いた鬼のようだ

しかしまだ日は高い鬼は昼間には活動しないはず

そう思っている間に禰豆子は襲ってきた。

俺はとつさに焦る。

いつものように持ち歩いてきた斧の柄を妹に噛ませた。

しかし首を振り離せとばかりに暴れる。

(俺は鬼になった妹に食い殺されるのか?)

そう思い必死で抑える。

しかし少し抑えていた時顔に何かが当たった。

涙だ

禰豆子は泣いていたのだ。自分の兄を殺そうとしたことを悔いる
かのように。

そして俺がそれを察した直後禰豆子は余所見をした。

それに気づき立ち去るその瞬間俺は斧を振り禰豆子をどかした。

その瞬間目の前を横切る残像――

日本刀だ。禰豆子が危ない！

俺は守ろうとする。

その時刀により束ねた部分の髪は斬られて落ちる。

そのまま転がり木に背を打つそこにはやや背丈の高い男と背の小
さい女の子が刀を持って立っていた。

「なんだ…誰だ…」

「何故かばう…そうまでしてかばうものか」

妹を守る俺に男は訊いてきた

「妹なんだ！彌豆子は大切な妹なんだ！」

そう返した時女の子は言う

「守ったって何にもなりませんよ。彼女は鬼になったのだから」

その瞬間斬撃が来ると思い焦った俺は妹を守ろうと屈んだ。

しかし妹はいない。どこだと辺りを見回すと女の子に背を掴まされて身動きできない彌豆子がいた。

妹は振り解けと動く。

「動くな、俺たちの仕事は鬼を斬ることだ」

「鬼がどれだけ悪さをしているか知らないんですね」

二人はそう言った

「じゃあ、妹さんの首刎ねちゃいますね。この世に至って報われませんからね。人を何人も殺す悪くいやつですから」

「ああ」

「待ってくれ！彌豆子は誰も殺してなんかいない！妹は俺を襲おうとしたが踏みとどまった！」

刀を首に当てようとした俺は全力で言った。

「あら、じゃあ何故妹さんは鬼になったんですかね？おそらくですが鬼になるには鬼の血を傷口に浴びたか、あるいは大量に血管に打ち込まれたからか」

「人喰い鬼はそうやって増えていく」

その答えに俺は驚いた。だがすぐに答える

「彌豆子は人を食ったりしない！俺のことはちゃんと分かっているはずだ！さつきだって俺を見て泣いていた！」

男と女は言う

「今し方食われそうになっておきながらそれか。」

「食われそうになっておきながら何をほざいているんですか？

兄弟愛もここまで来ればバカバカしいですね」

俺は答える

「俺は誰も傷つけさせない！それに鬼になった彌豆子が人間に戻る方法がきつとあるはずだ」

「鬼になったら人に戻ることは無い」

「じゃあどうするんですか？助かる方法なんて用意できるんですか？」

俺は答えを返さないと妹は殺されると焦り返した

「探す！必ず方法を見つけられるから殺さないでくれ！家族を殺した奴も見つけるから！だから！やめてください。もう家族を失いたくないんです」

「あなたは死にたいんですの！生きるか死ぬかの時に土下座など甚だしいは！そんな時に物を乞うなんて最低だと思わないの！他人に主導権なんか握らせるんじゃないよ！しかも妹を戻す方法を探すなんてバカじゃないの！弱者になんか何も選択権なんてないわ！そんな奴は強者に潰されるだけよ！それにあんたみたいな弱者の尊重なんてしないわ！鬼なら知ってるとは思うけどそんな鬼など存在しないわ！だって鬼が人間に戻ったことなんか見たこともない！」

それを聞いた俺は絶望としていたしかしこうやっていても始まらない。

妹を今救う方法はないかと考える。

しかし考えるよりも体が動いていた。

突き刺そうとしている女の子めがけ走りながら雪を投げそしてさらには男の方には石をさらに投げつけた

しかし二人はかわした。

そして俺はすかさずその隙に飛びかかった
だが抑えられた。

弱い物の行動など単純なように見えるのかもしれない

しかしそれは違う俺はあと二つ悟られない行動をしていた

「愚かだな」

「バカバカしいわ」

しかし男は気がつく

彼は羽織りを着ておらずオノも持っていない

その瞬間男は前が見えなくなり、斧が飛んでくると思い男は焦り避けそして木に頭を打つ

女の子は「ヒツ」と声を上げた

そう彼女には斧を投げつけ当たるようにしていた

そして女の子が避けようと一瞬手を緩めるた隙に俺が禰豆子を奪い取ろうとした

だが俺が倒されては意味がないと気がつくのには時間がかかった

「危ないじゃないの！しかしその攻撃方法はさすがね」

禰豆子はそれを見て涙を流した：俺がお兄ちゃんであると認識している

そんな気が微かに臭いで伝わる

「まあ仕方ないわね彼女の心は本気でお兄ちゃんのことを思ってるみたいだし。どうする?」

「ああ流石に俺も焦った。しかも殺す気は一切ないように感じる」

その瞬間禰豆子は女の子の手から離れ男を突き飛ばす

そして俺のことを守るように盾になった。

「兄弟愛もここまで素晴らしいとは感心ね。いいわ今回は一つだけ教えるわ」

「ここから北の狭霧山の麓に鱗滝左近次というものを訪ねろ。その時には富岡義勇と古明地さとりから匿って欲しいと言われたと伝える。」

そして禰豆子は首を手刀で叩かれ気絶した。

そして俺が起き上がると妹は竹筒に木の棒が刺さった猿轡のような物をかまされ横たわっていた。

その後2人の剣士「富岡義勇」と「古明地さとり」は俺に告げる

「鬼である以上妹は絶対に日の光を当ててはならない」

「鬼が日の光を浴びたら死んじゃいますからね」

それを知った俺はこのまま夜になるまで妹を近くの穴に入れた

そして夜に家に戻り家族を埋葬し妹のために籠を作りそして家を出た。

場所は北の狭霧山の麓へ向かった。

育手と弟子と

俺は北の方にある狭霧山の近くにある荒れ寺まで来た。

山をいくつか越え道に迷いつつもなんとか辿り着けそうだ。

しかしここまで妹を籠に入れて何日も歩くのはきつい。

休もうと思いい寺を覗くとそこには何人かの子供を食う鬼がいた。

鬼はバリボリと音を立てて食べている。

気がつかれないように俺はそつと逃げようとした。

しかし運の悪いことに俺は足元の板を軋ませてしまい鬼は気がついてしまう。

「なんだ〜人の臭いがするぞ〜。いい餌がやってきたなあんじやもう一食分も獲りにいくか！」

俺は全力で逃げた。しかし鬼は全力で追っかけてきた。

逃げなきゃ！せつかく近くまで来たのに鬼に殺されるのはやだ！

そう思い逃げる。

数分すると何故か鬼が追ってこないことに気づく。

撒いたかと思いい安心しようとしたその隙、

「まて〜そこの餌〜」

撒けてなかった。やばいと焦ったその瞬間何かにより首がスパンと切れる。

鬼も驚いたのか突然体が倒れ頭がこつちに飛んでくる。

「待て〜こら〜俺は首だけだろうとにがさねえ〜」

そうして鬼は首から腕を生やし追ってくる。

俺も全力で逃げる。

そして木の方に噛み付いた隙に俺は斧で頭を狙った。

鬼の頭は木に縛り付けられるように斧で打たれた。

しかし安心したはいけない。

鬼の胴体は動き出し再び追ってくる。

「へへへ〜お前を捕まえればこつちのもんよ〜」

そして全力で逃げた先は崖。

やばいと思いい崖の直前で近くの木に飛ぶ。

鬼は胴体だけならわからないのでそのまま崖の下へ落ちていった。
安心したのも束の間

鬼は大声で叫んだ

「俺の体！貴様！食い殺してやる！そしたらまた体も元どおりだ」

しかし髪の毛が絡まってはまず動けない

そこに天狗の仮面の男があらわれる

「私の山の罠に仕掛けた罠に鬼が引っかかるとはなあ。まあ稀にあるものだ」

そして振り返り

「その少年！鬼にとどめは刺さぬのか」

驚いた。俺に気がついていたのか。

まあ罠に引っかかる奴がいれば他には気がつくと思えば木を降りた

「少年この石で鬼の頭を何度も打ち付けて砕け！」

しかし俺は迷った。この鬼も元は人間なんだろう治す方法もあると。

「迷うことはないだろうさあ砕け」

数分間止まる

（優しすぎる、こいつは鬼を殺すような心を持ってない）

時間が経つものの炭治郎は悩むその姿に天狗の面の男は思う

（もうすぐ夜明けだ、一体いつまで待たせる気だ）

そして日が登ってきた瞬間に鬼は焦る

「ヤツベ、ってうわああああああああ」

日の光に照らされた鬼はものすごい勢いで灼けて消えた。

俺は驚いた。鬼は日の光を当たると灼け死ぬ。それを見て察した。

富岡さんや古明地さんの言ったことがなんなのかわかった。

察した直後平手打ちが飛んでくる。

「判断が遅い！そんなんじや鬼を殺すことを妹を守ることもできない
い」

それを聞いて気がつくこの面の男こそ鱗滝左近次だということ。

その後、その山の麓におりると1人の少女が家の前に立っていた。

「師匠く遅すぎるので探しに行こうと思ってました」

青髪の少女はこういうおそろく見た目的に彌豆子より小さい。

そんな娘の頭を撫でながら左近次は言った。

「富岡義勇と古明地さとりが言つてた竈門炭治郎だ。そして妹で鬼になった彌豆子は炭治郎が背負っている籠に入っている」

少女は「ほうこいつがかあ」という感じで見てくる。

そして少女は名乗る。

「あたいは氷川智溜乃。よろしく！そして師匠は鱗滝左近次って言うんだ！」

「こら、名乗るくらいならワシでもできる！こいつはいつもいつも一言多い」

こうして俺の地獄の修行が始まった。

修行と最終試験

修行の朝は早く夜明けの直前に起き
すぐに近くの山を登る。

しかも山には道などあまりなくけものみちばかり。
しかもあちこちに罿が仕掛けられており一歩間違えば死ぬかもし
れない。

そして日が出るまでに山頂にたどり着いたら朝日を拝みそして全
力で山を下りる。

その山は関東でもかなり高い山であり山頂が近づくとかなり空気
が薄くなる。そうなると思が苦しくなる。

それでも負けじと姉弟子を追う。

そして下りてからすぐにご飯を食べさらに滝行や体幹修行と忙し
い。

でも禰豆子のためだと思ひ諦めない。

そんな日が一年半過ぎた

そしてその夜

「お前に教えることはもうない」

そう鱗滝さんは俺に伝えた。

「明日は智溜乃もここを発つ。それにお前には最後の試験を与える」

そう言つて俺は近くの山に連れてこられた。

そして森の深いところには大きな岩があつた俺の背丈の倍ありそ
うな大きさだ。

「この岩をこの刀で斬ってみせろ。ワシの育てたものは何人も同じほ
どの大きさの岩を斬ってきた。そう、姉弟子の智溜乃もだ。」

これを斬れと、しかも刀でなんて斬れるわけないと思つた。

しかし鱗滝さんに育てられた人は何人も斬っているだと。

嘘のような臭いはしないおそらく鱗滝さんは本当のことを言つて
いる。

「はい、わかりました！」

そうして俺は何日もかけて岩を斬ろうとした。

しかし斬れない。

そうこうしてるうちに年を越えていた。

そんなある日だった2人の子供が俺の目の前に現れた。

2人は狐の面をつけていた。

2人は「錆兎」と「真菰」

2人は俺に優しくも指導してきた。

そしてそれから少しして錆兎は俺に真剣で挑めと言われたのでそれに答える。

お互い真剣、これが初めての手合わせだ。

「よし、いくぞ」「ああ」

そしてコインが投げられるそれが地面に落ちた瞬間が試合開始だ。

「チンツ」

俺は全力で錆兎に斬りかかった。

しかし相手も速い。でも負けたくない。落ち着け。勝つ方法を考えるんだ。

そうやって深く呼吸をし一気に刀を振るう。

すると錆兎の面は落ちた。

その顔は優しい顔をしていた。

どこか悲しい笑顔を見せた後、突然消え、そして岩が真つ二つになっっていた。

岩が斬れたことで真つ先に鱗滝さんの元に向かった、あまりの嬉しさに疲れていることを忘れて。

鱗滝さんの家に着いた時、鱗滝さんは静かに佇んでいた。

「やつと、できたか」

「そう言い、俺の頭を撫でてくれた。」

「……………」

「……………」

「……………」

その日、夕飯の時に俺に鱗滝さんは言う。

「お前には、無理難題を押し付けてしまってますまん。岩を斬ったのは何人もと言ったが斬ったのは、たった4人だけだ。そしてお前で5人

目だ。よくやった。」

飯の支度をし煮物を囲炉裏の火にかけた時、鱗滝さんにきく。

「その4人は、誰なんですか？1人は姉弟子ですが」

鱗滝さんは一瞬置いて返す。

「富岡義勇、田島錆兎、高山真菰、そしてお前の言う通り姉弟子の氷川智溜乃だ」

やはりだと思ったそして、義勇さんもこの育手に育てられたんだと知った。

「ワシが育手になってから生きて帰ってきたのは2人だけだがな」

おかしい、なぜ2人しかいないのか気になったのできく。

「なぜ2人なんですか？4人も合格したのに」

鱗滝さんは少し辛そうな感じをしながら答える。

「いいだろう、教えるぞ、お前には最終選別という鬼殺隊の試験に向けて育てていた。その最終選別で生き残ったのが2人だけだ。それが義勇と智溜乃だ」

その答えに俺はゾツとしたつまり俺に教えていた錆兎と真菰は最終選別で死んでいたということだった。

そんな試験に行くことになるのかと心が折れそうになるが踏みとどまる。

鱗滝さんのためだ、お兄ちゃんとしても耐えなきや、そう思い聞き返す。

「錆兎と真菰が生き残らなかったのは、何故ですか、師匠、お願いしま

す」
「最終選別で、特に辛いことがあって死んだ。だがこれから先は教えん。あと鱗滝さんは良い状態だ。籠もかなり良いものにしておいた。来週の最終選別に向けて明後日には出発になるから、明日は気を引き締めるために休め」

鱗滝さんはそう言って一切返さなかったそれに察した俺は聞き返さなかった。

「よし、ここが藤襲山か、麓には博麗神社の鳥居。この石段を登ればい

いんだな」

こうして俺は最終選別へと向かった。

最終選別と白髪の少女

石段を登り神社の拝殿前に着いた。

そこには俺と同じ最終選別を受けるものがぎつと見る限り30人ほどだろう。

みんな選別で受かりたいと躍起になっている。

そしてしばらく待つと2人の子供が現れた。

「みなさん、今日は最終選別にお越しいただきありがとうございます。どうぞごいいます。

今回の選別の責任者のきりやと申します。」

きりやと名乗る黒髪の子はそう言ってみんなを鎮めた。

そしてもう1人の白髪の子が説明をする

「今回は31人もの受験者がお越しくださいました。それでは、この選別の条件をお伝えします。決まりは二つあります。

一つはこの山で7日後の朝まで生き残ること。もう一つはその前に下山をすれば失格ということ。以上」

そう言うのと黒髪の子がさらに説明する

「この山には藤の花が五合目まで一年中狂い咲いており鬼たちはこの山から下りれません。おには藤の花を嫌がるので六合目から上にかいません。ということ。試験はこの藤襲山の六合目から上ということになります。ただ六合目から上には百を超える鬼がいます。それではみなさんこの先の門をおくぐりください。試験開始はこの門をくぐってから開始です」

「それでは」

「ご武運を」

こうして7日間の最終選別が始まった。

—————
—————

「今日で6日かゝ、生き残るのも大変だなあ。まあ何体かは仲間割れしてたけど」

日が出てる時は山で食べ物を獲得し昼前には寝るそして夕時には起きそして夜は鬼から身を守るそんな日が続けてきた。

鬼は人を食うためなら仲間さえも潰し合うこともある。

そう言う運も少しあるのか。わからないがここまであまり疲れていない。山の入り口で引いたおみくじが中吉だったのもあるだろう。そんな中1人の少女が近づいてきた。

白髪をリボンで結った少女がこちらに向かって来る。

「ご飯をく、ご飯をくれ」

素晴らしい剣を構えたが少女は手前で倒れ込んだ。

「大丈夫か！どうしたんだ！」

少女の顔を見ると少し頬が痩けておりおそらくあまり食べてないんだろうと思った。

そこで残っていたおにぎりを一つ食べさせた。

「すまないです。空腹の中、おにぎりまで与えてくださるなんて」

白髪の少女はものすごい勢いでおにぎりを食べ終えそして俺に感謝していた。

「そんな、謝ることもないよ。どうせ、これから選別を生き抜く同志なんだから」

俺は少女にそう言った。そして名前を聞いていなかったたので尋ねた。

「そういえば自己紹介をしてなかったね。俺の名前は竈門炭治郎。よろしくな」

「魂魄妖夢です。年齢は15です。よろしくお願いします」

こうして2人はこの後の夜に備えいろいろと計画を立てた。そしてその夜。

鬼を倒しながら2人は息を合わせて行動した。

しかし先の方には何やら怪しい臭いがする。

しかも今までのようなものじゃない。もっと強い何かだ。

怪しいと思えば木陰から見ると手が大量に生えた鬼がいたしかもかなり大きい。

「おそろくたまにいる大食らいの鬼だと思いますね。あの大きさだと

食った志願者は50は下らないと思います。」

妖夢はそう分析した。となると、試験前に言っていた志願者たちの情報と明らかに違う。

焦る、しかしその鬼はこちらの方を向いてきた。

「そこにいるんだろう！」

そう言つて木がなぎ倒される。

そして鬼はこう言つた

「今は何年だ？」

「大正4年ですよ！鬼さん」

妖夢はそう答えた。

そして鬼は叫んだ！

「ああああ元号が！元号が変わつてる！元号がまた変わつていく！」

そう言つて鬼は体を揺らした。

「あの鱗滝の野郎に閉じ込められて48年も経つのか！あいつめ！あいつめ！」

そして鬼は俺の顔を見る。

「その面、その面は鱗滝の弟子だな。あいつは必ず弟子には狐の面をつけさせる」

そう言つて俺の方に手を伸ばしてきた。

しかしここで妖夢が斬りかかる。

魂の呼吸 三ノ型—— 霊割り。

危うく死ぬところだったのを妖夢が助けてくれた。

「貴様、俺の邪魔をするな！」

そしてさらに手が襲つてくる。

それをお互いで刀でいなしながら手を斬り落としていく。

しかし鬼はかなりの速さで回復をする。

これではキリがない。

そんな時妖夢は俺に向かって言つた。

「鬼の頸！鬼の頸をその刀で斬り落とせば鬼は消える」
そうか鬼にも弱点はあるのか。

それを知った俺は鬼の首を斬ろうとする。

しかし鬼の方も首元を守るように腕を回したため決定打にならない。

鬼はさらに別の手で払い俺は吹っ飛ばされる。

そして木に背中を打ち付けられる。

「炭治郎！大丈夫!？」

「ああ、なんとか大丈夫」

俺は少し頑丈である。それに俺は長男だ。痛みには耐えられる。

そう思いながら立ち上がる。

それを見て鬼は話す。

「俺はあいつのことが憎い。だからあいつの弟子を何人も食った。

そう、お前を食べれば14人目だ。鱗滝の野郎もバカだなあ。その面のせいで俺に弟子が喰われているともなあ。食われたやつで印象に残っているのは宍色の髪のとつと面に花が描かれた女の子だな、あと、あいつの弟子で食い逃したのは今までおそらく2人だけだろうなあ。1人は髪を縛ったやつともう1人は半年前に狐の面を木に忘れていったやつかな」

俺はキレた。

奴はもう生かしておく事などあり得ない。

そう思い呼吸を整えて向かう。

水の呼吸。壺ノ型 水面斬り

そうして鬼は守ろうとするものの妖夢も技を繰り出す

魂の呼吸。壺の型 乱魂

妖夢は首回りの手を斬り落とす。

そこにすかさず水面斬りが決まり、鬼の頸は吹っ飛ぶ。

こうして長きにわたる鱗滝の弟子の因縁は断ち切られた。

「はあ、さつきはびびりましたよ。あの時私も合わせて技を出していなければ頸は落とせてなかったんですよ?」

「ごめん、俺もあの時はものすごくブチ切れてて、すっかり周りが見えてなかったよ」

「まあ、倒せただけ十分ではないですか?これで今まで食われた人々

の魂も報われますよ」

「そうだな。じゃあもうすぐ夜が明ける。そしたらこの選別も終わら
だな」

「何はともあれ、あなたにもこれで昼の恩を返しましたからね」

「ああ、ありがとう」

こうして妖夢と夜が明けたあと、山を下りた。

下りた先にいたのは

目つきの悪そうな奴

何かぶつぶつ言う奴

髪を右側で結ぶ少女

銀髪の少女。

そして人形を抱えた栗色の髪の少女。

つまり生き残ったのは見る限り7人。

「今回の選別は終わりです。皆さまお疲れ様でした」

「今回の合格者は8人。あと先ほどさっそく1人だけ用を済ませて山
を下りて行きました。」

「今回の合格者は、我妻善逸、十六夜咲夜、竈門炭治郎、魂魄妖夢、不
死川玄弥、栗花落カナヲ、嘴平伊之助、曲戸アリス、以上の方が合格
です。おめでとうございます。」

「合格者の方には鬼殺隊の隊服、そして伝達用の鴉、そして少し遅れま
すが日輪刀を支給します」

そして石のようなものと袋が目の前に置かれる。

「こちらは日輪刀を作るための玉鋼、そしてこちらが合格者の皆様に
渡すお給金でございます。」

各々が玉鋼を選びそしてお給金が渡される

袋の中には500円が入っていた。

みんなが石段をおりていく中で俺は妖夢に話しかける。

「次会う時はおそらく任務の時かもな。それまではここで別れる。

ありがとう」

「いえ、私こそ今度会う時はよろしくお願いしますね。では」

こうして最終選別を終え俺は彌豆子の待つ狭霧山へと向かった。

浅草と因縁

桜の花が咲く頃

俺は浅草に任務で来ていた。

この短期間で3つ目だ。さすがに忙しすぎる。

そう思いながらも挫折せずに頑張る。これも禰豆子のためだ。

そう引きしめたがさすがに疲れた。

そんな時ちようど屋台をみつける。

水池屋という屋台。

「すみません、鶏そばください」

「あいよ！鶏そばね」

俺の生まれた東京でも思ってたのとは大違いだ。

浅草は発展していた、派手すぎる。

しかも見た事もない乗り物まで走っていた。

街に飲まれそうなのを抑えながら、鶏そばを待つ。

「あいよ！鶏そば一丁！ついでに月見も入れといたからね」

小豆色の髪の女性が持ってきてくれた。可愛い。

そう思い鶏そばをあと少しで食べ終わろうとしたその時、

鬼の臭い。

しかも、俺の家で嗅いだ臭いと同じ。

鬼の臭いに驚きのあまり井を落とす。

そして剣を持ち籠を背負い、追う。

「おい、そばの代金は貰ってないぞ！」

「ごめんなさい、席のところに置いてあります。」

素晴らしい全力で雷門の方に向かう。

「ちよつとすみません。」

人をかき分ける。そして、その臭いの元の肩に手をかける。

「ん、どうしたんだい？」

「どうしたの？お父さん」

「いや、心配ないよ」

驚いた、こいつ、人間のフリをして暮らしている。

しかも子連れ。

知らないのか、こいつが人を食う鬼だつて、それを見せられ一歩退く。

「あら、どうしましたかね？」

人間だ。このおばあちゃんと子供は人間だ。家族なんか作っている。

そして一瞬のすきに通る人を2人爪で切る。

そしてその家族は急いで逃げる。

待て、という前に人混みへ消えていく。

そして後ろからは唸り声がある。

切られた人は鬼のように暴れだした。

やばい、この状況では大変なことになる。

2人を抑え込むがなかなか止まらない、暴れる。

そこに警察が駆けつける。

「おい、どうしたんだ！色々騒がしいぞ！」

「2人が切られてそこからいきなり暴れだしたんです。」

暴れる2人を抑えていると、突然猫がこっちに来て、こっちに来ないと誘ってくる。

それを追いかけていくと突然行き止まりにぶつかる。

しかし猫は通り抜ける。

俺はその壁に手を当てた。

偽物の壁、その壁は水のように波紋を描いた。

その壁をくぐると桜の散り舞う屋敷があった。

猫はさらに屋敷に入っていく。俺も上がっていくと3人がいた。

1人は和服の女性、1人は頭巾を被る紫の髪の子、そして俺と同じくらしい男だ。

和服の女性は俺に声をかけた。

「あなた、あの男について少し話をして欲しいのです。そう、洋服の男、鬼舞辻無惨という鬼について、私たちは鬼舞辻無惨を抹殺したいんです」

そして、すかさず男の方も話す。

「お前が背負ってる籠には鬼が入っているな、しかも、女の鬼だな」
そう敵意を示してきた。

「そういえば名乗っていませんでしたね。私は珠世、そしてこの子はパチュリーと愈史郎、2人はあなたの背負った鬼とは同じ族に分類されます。しかし、私たちは、鬼舞辻無惨とは全く違う鬼なのです。」
珠世さんはそう話した。

「私たちは鬼から人に治す方法を研究しています。それにその後ろの鬼も何か鬼舞辻無惨とはまた違う種族の鬼のようです。そう私たちは鬼舞辻無惨の呪いの付いていない鬼というものでしょう。」

色々と説明を聞いていき、わかったことは

鬼は鬼舞辻無惨が始祖であること、

鬼舞辻無惨の血には呪いが含まれていること、

その呪いを解除したのは珠世さんが最初ということ、

鬼舞辻無惨は十二鬼月という幹部組織を従えていること、

その鬼たちは今まで戦った鬼とは別格の強さを誇るということ、

そしてともにいる2人は結核により死にかけた所を珠代さんの血で助けたということだった。

そして珠世さんはここが1番重要と言う。

「鬼を人間に戻すには少なからず検体が必要です。そのためにはあなたが倒した鬼の血を回収して欲しい。そうすれば妹さんを鬼から人に戻すことが出来るかもしれない」

そこには希望の光が射したと思った。

彌豆子を人間に戻す方法が見つかるかもしれない。

そう話していると後ろから物音がする。

「花札の耳飾りをつけたやつがいると聞いて足跡を辿ったらこのとおりだ！いるんだろ！さあ出て来いよ！さあさあ出てこないならこの建物ごと潰しちゃうよ！」

やばいと思いい外に出る。

すると鬼は1人、鞆を持った鬼だ。

そして鞆を投げる。

しかしその鞆は有り得ない動きがしていた。

鞠は不規則な動きをし、
そして後ろの屋敷の窓を割る。

「ははは！花札のような耳飾りをした鬼狩りは貴様だなあ。さあ、遊ぼう！」

何個も鞠が投げつけられる。

襲いかかる鞠をいくつも斬る

しかし不規則な動きのせいで珠世さん達を守るだけで精一杯だ。
そんな中ひとつ斬り漏らした鞠が愈史郎の首を飛ばす。

「愈史郎さん！」

「大丈夫よ、私たちは鬼ですから、それよりも鞠の鬼を、」
珠代さんを心配する中で愈史郎が言う。

「矢印が見えないのか！矢印を。見えないのなら俺の札で見えるようにするからな！」

額に札がつく。

そして鞠の軌道が見えた。

それに矢印の向きを予測し矢印を斬る。

そうなる鞠は真っ直ぐにしか飛ばなくなる。

それに気づいた。

そして兄の危機を感じたのか禰豆子は籠から出てくる。

「禰豆子！矢印はあの左斜めの桜から飛んでくる。そこに別の鬼がいる！」

「ん！ん！ん！」

禰豆子とともに息を合わせて鬼と戦う。

禰豆子は桜を蹴り倒した。

すると鞠からは矢印が消える。

そのスキに鞠を斬りそして鬼の腕も斬る。

「うああああ」

鬼は桜から落ちる。

「ちっ、あいつ、俺の矢印が見えるんだな、ならばここで交代だ、俺はあの耳飾りのやつをやる。お前はあの禰豆子というやつをやれ」
「そうじゃのう。さあ遊ぼう」

俺は矢印の鬼の方を彌豆子は鞠の鬼の方を倒す。
目を合わせ通じる。

矢印の方を切ろうとするものの刀が触れれば軌道を変えられる、
しかもかなり痛い、

そんな中1人の女の子がこちらに来る。

「あなたの攻撃見せてもらったわ。なんともずるい手なこと。ただあなたは大きな弱点をお持ちなのね。矢印の向きが変わえられるのは60。までだということ」

「ほう、よくぞ見破った、だがそれがなんであろうと言うんだ」

「簡単よ、その角度と向きを言えば炭治郎くんも対処出来る」

頭巾の女の子は、矢印の鬼と言葉を交わす。

「あたしはパチュリー・ノーレッジ、珠世さんに救われた鬼よ」

「ふっ、ということとは逃れものの珠代も近くにいるということか。
だったら話しは早い聞かせてもらおうか！その珠世の居場所を」

「あんたなんか教える筋合いはないわ、ただ、ひとつ教えるわ。この少年は既にあなたの技をどうするかをわかっていると」

そして俺は刀を構えるそして向かう。

「矢印がわかったところで何がわかるというのだ！」

矢印の鬼は切れていくつもの矢印を出す。しかし向きがわかればこっちのもの。

更には言ってくれる女の子もいる。

「矢印、右、そして40。上」

「後ろ、25。左」

こうして教えてくれる女の子のおかげで体が慣れてコツを掴んできました。

矢印は曲げることができるならば緩やかな曲がりを使い巻きとることもできる。

それに気づかなかった使い手の隙の糸それが見えた。

そうして矢印を巻きとり、斬る！

水の呼吸。陸の型　　ねじれ渦

そしてそのまま巻きとった矢印を使う。

水の呼吸。弐の型 改 横水車

「ぐはあ！」

鬼の首は吹っ飛びそのまま燃え尽きる。

「ありがとう。パチュリーさん。向きを教えてください」

「いいのよ。感謝しなくても。あと、珠世さんなら今は屋敷の奥で私の血鬼術でまもられているし」

こうして矢印鬼を倒した俺たちは彌豆子の方に加勢に向かった。

くくく

「きやはは、お主はなかなかの蹴鞠の上手さじゃのう。ワシに勝てると思うのか！」

彌豆子と鞠鬼は

鞠はどんどん速度を上げる。

そして彌豆子が力いっぱい蹴った鞠は凄まじい速さで鬼の後ろの壁へとぶつかり、壁に穴を開ける。

それにより鞠鬼は一瞬止まる。

「相手は鬼としても強者、鬼舞辻無惨の直属となれば、一溜りもない、ならば私はここから出てやるしかない」

珠世さんはそういうとパチュリーの血鬼術の箱から出て、彌豆子の前に立つ。

「はあ、女は引っ込んでくれ」

「一つだけ、お聞かせください。鬼舞辻無惨をご存じですか。あいつはいつも臆病で、そして狡いものです。弱いのを誤魔化すように、そう鬼たちを操作してるのです。」

「黙れ！あのお方は凄まじく強い！誰よりも素晴らしいお方だ、あのお方、鬼舞辻無惨様は！あ…」

鞠鬼は鬼舞辻無惨の名を言う途端に顔が蒼白としてきた。

「言っちゃいましたね、鬼舞辻無惨の名を、そう、鬼舞辻無惨の名を口外すれば、どうなるかを」

鞠鬼は手を口で抑え一歩退く。

すると突然鞠鬼の身体から腕が突き破ってあらわれた。

そしてその場で鞠鬼の体を粉々にしていく。

「これが…鬼舞辻無惨の呪い」

愈史郎は驚いた。

こんな異形の呪いを発動させるようなものが鬼の始祖。

ならばどれだけ恐ろしいものなのか容易に想像できた。

「鬼舞辻無惨は必ず鬼になるものにはこの呪いをつけます。そして名を口外すれば即、粛清されると」

それを遠くで見た俺はあまりの酷さに吐きそうになった。

そして粛清され粉々になりまともに残ったのは右手だけだった。

その手に珠世さんは注射針を刺し血を採る。

そして珠世は俺に話す

「あの鬼は2人とも十二鬼月では無いです。十二鬼月ならば目には数が刻まれているはず」

そう思い出した、あの鞠鬼も矢印鬼も両方とも目に数は刻まれている。

「しかし、随分と濃い血のようですし、おそらく候補にまでは上がっていません。」

こうして夜が明ける前に珠世さんたちと屋敷の地下室に入り色々渡された

「この小刀は刺せばすぐにでも血を採取できます。ほら、禰豆子さん、腕を出してください。」

そうすると禰豆子に珠世さんは半尺サイズの小刀を刺した。

すると血が小刀に彫られた溝から血が吸われていくのがわかる。

こうして鬼の血を採取するためという任務も受けることになる。

それもこれも禰豆子の為だと。

遺品整理と姉弟子

鼓屋敷での激闘の後、

俺たちは屋敷で戦った響凱の遺品を整理していた。

「炭治郎くこういうのも片付けるのか？」

「ああ、こういうのも鬼殺隊の仕事だからな、鬼のいた跡も残さない。そう出ないと次この屋敷に入る人に申し訳ないからな」

「ちっ、おめえに負けなきや、こんな雑用、する必要もねえのに、いてて」

3人でやっている、タンスからある手紙を見つけた。

「誰だろう、差出人、姫海棠はたて」

「あれ、そういうの、見てもいいのか？」

「俺は字が読めねえからそういうのには興味ねえ」

俺は気になったのでその手紙を開ける。

そしてその手紙にはこう書いてあった。

拝啓、生命力に満ちた寒椿が活力を与えてくれる嚴冬の候、
いよいよご活躍のこととお祝い申し上げます。

さて、あなたの作品を読み、感動致しました。

響凱先生の作品は、色々なものがあり、

中でも私は「久しき師へ」という作品がとても好きです。

師を思う心そして、師に見限られようとも諦めない主人公には何度
も心を打たれました。

私も仕事で何度も辛いことがあります、

諦めてしまいそうでしたが、私は先生の作品でこれから夢に必死に
しがみついています、そう決めることが出来ました。

先生の作品がもし世に認められないとしても、

私のような読者がいることを忘れないで欲しい。

そう思っています。

先生の作品は何年かかってもいいので待っています。

敬具

宇多響凱先生の1番の読者、姫海棠はたてより

1907年1月28日

8年前に書かれたファンレターを読んで響凱にも色々あったんだなあと思いいこれを善逸にも読ませたところ、突然泣きながら原稿用紙を纏めだした。

「これ、もじがずると、ぎようがいぜんぜえのじがいぎぐだったのがも」

そうして、色々整理をしながらも響凱の作品を纏めると40編はあるのではという数に驚いた。

「これは、藤の屋敷に行った時に屋敷の人に新聞社に送ってもらおう」

「そうだね。これはとても良い作品だから、きつと報われるよ」

「はっ、文字の読めねえ俺への当て付けか！勝手にしろ！」

俺と善逸は藤の屋敷に作品の入った箱を持っていった。

文字の読めない伊之助はさっぱり分からないので終始怒っていたがな。

「はあ、今日はほんとに疲れた」

「まああのぐるぐる回る屋敷は目が回りそうだったな」

「ただ、あの屋敷にいた鬼はそんな強くなかったがな」

鼓屋敷での戦闘は本当に辛かった。

しかも、俺の戦った鬼は目に数字が刻まれていたし。

もしかすると十二鬼月だったのかもと思える。

そして、2日が過ぎたその夜、

「炭治郎、暇だから1つ遊びでもやらないか？」

確かに暇だった。

安静にしろとは言われたが、ここまで何もすることがないと刀を手入れするしかない。

それに伊之助もうずうずしている。

そんな時だった。

障子が突然開く。

「話は、聞かせてもらったぜ！」

「ぎゃああああ！って、姉弟子じゃないか」

善逸に姉弟子？俺にも姉弟子はいるがまさか善逸にもいるとは、

「おお、善逸じゃん、元気だったか？あたしのこと忘れちゃったとはいわせねえぜ！」

「ああ忘れねえとも、俺の事散々、扱いてくれたの、絶対忘れねえよ！」

2人はなんか色々ありそうなので聞いてみる。

「あの、善逸の姉弟子さんですね、お世話になっております。善逸の同期の竈門炭治郎と申します。」

「おう、あたしは霧雨魔理沙だぜ。善逸の同期かなりいるって聞いていたのだな」

「ということはここで休息に？」

「ああ、実は半月前に膝を捻挫してなあ。もうそろそろ完治してここを出るって所かな」

まさかの姉弟子の魔理沙さんという方もいたとは、しかも俺たちよりずっと前、ということは俺たちのことも影で見っていたのではと疑う。

「ああそうそう、善逸はなあ、3年前に」

「いいよ！俺が自分で話すから！」

そして善逸は過去の話をし始めた。

「実は俺、3年前まで新宿の鉄火場にいたんだ。だが、その時の客の女の子に惚れたんだが、その子が駆け落ちしたいって言うんでお金を渡したら、その子が駆け落ちした後俺に借金を肩代わりするように仕向けててそれで、俺は鉄火場の人達に袋叩きにあつてた所を競馬場帰りのじいちゃんに助けてもらったんだ。それからはお前は強くなれだとかすげえ扱かれたよ、特に姉弟子なんかは、俺にきつく当たってたし」

「あれは、修行から逃げ出したいとか、鬼が怖いんだとか泣き叫んでたくせに」

「うるさいよ！話の腰を折るなよ！まあそれでも俺は一の型は習得したし、他にも式から陸まであつたけど、それは出来なかつたけど、まあ

そんな姉貴も、なんか新しい型だーって漆ノ型を創作して俺に教える
わで、扱き出したし！まあそれでも休みの日にはじいちゃん姉貴の
2人で競馬場に行くことは楽しかったけどー！」

そんな過去があつたのかと関心する、今の善逸はヘタレだがやる
きややるような男だ。

「それで気になったんですが、競馬場ってなに？」

「ああ、馬が集まって速さを競い合ってそれで勝つ馬を当てるため
にお金をかける所」

そんな所があるのかと驚く。東京ってほんと栄えてるんだなあ
実感した。

「ところでさあ姉貴、なんでこっちに来たの？」

「ああこんな時は花札つてので遊べばいいぜ、それにさあその猪の
頭のやつは字が読めないって聞いてたからさあ、花札なら絵合わせで
覚えれば簡単だしさ、そこの炭治郎くんの耳飾りも花札みたいだし。」

そう言われると簡単な気もする。

ということと魔理沙さんに色々と教わることにした。

「まずはこいこい、これは2人用の遊びだ。これは役が出来ればいい、
ただ役ができてこいこいをすれば続行そしてまた役がどちらかに
できるまでは札が切れるまで終われないってやつだ」

そうして遊びが深まっていく、これには伊之助も割と覚えやすいも
のだと思う。

「そしてこっちは馬鹿花だこれは3人で遊べるやつでこっちは役を覚
えなくてもいいってやつだ」

そうしているうちに俺たちは花札にハマっていた。

暇さえあれば花札で3人で遊んでいた、時には禰豆子も交えた。

そして4日が過ぎた時、

「おう、ということであたしは失礼するぜ。お前たちも完治するまで
はあんまり動くんじゃねえぞ」

そう言つて魔理沙さんは次の任務へと向かった。

こうして休みの時は俺たちは花札で遊ぶようになった。

そして完治した直後、藤の花の屋敷を出ると、鎧烏達が来た。
「次は、南的那田蜘蛛山！鬼殺隊の剣士が多く向かっている！」
そして俺たちは那田蜘蛛山へ向かった。
この後その恐ろしい全貌を見ることになろうとは。

下弦討伐編

糸と人形

那田蜘蛛山につく頃には、すっかり日も暮れていた。

そして山の入口には鬼殺隊の1人が倒れていた。

「大丈夫ですか！」

「ああ、なんとか、というより那田蜘蛛山は恐ろしい、ここには既に30人以上の隊士が既に潜入して、俺は4組目で入ったら、隊士同士は何かには操られてお互いを斬り合い出したんだ。そしてなんとか俺は背中を浅く斬られたものこのこまで来れた。ここにいる鬼は桁違いだ、柱でも来ないと…」

心配なので手当をしようとすると、

「あつ、やっぱり俺にも付いてたんだ！あああああああ」

そうして隊士は気にぶつかりながら山の中へとひきづりこまれた。

「炭治郎くさっきの隊士も言ってたし俺たちじゃ何も出来ないよ。やっぱり柱を呼びに」

「ガタガタ言ってるじゃねえ。強え鬼がいるんだ。俺がぶっ倒してやるー！」

「あつ、待てよ伊之助！早まるんじゃない」

「猪突猛進！おめえらはガタガタしながら山の入り口でも守ってる」

そう言っって伊之助は猛スピードで山へと入っていった。

それを追うように俺は山へと入る。善逸は置き去りにして、

「ちよつとく、俺をここに置いてくくなよ」

山の奥へと入っていくと伊之助は気がつく。

「あれ、なんかネバネバするなあ」

辺りを見回すと木々には大量の蜘蛛の巣が張っている。

おそらく那田蜘蛛山には蜘蛛が大量にいるんだろう。

そう思っていると右奥のほうから悲鳴がする。

「あああ！助けて！誰か！」

駆けつけると何人もの隊士がまるで操り人形のように吊るされていた。

「あああああ！助けてくれ！糸が！糸が！」

そういうと何人かから骨が折れる音がする」

まさに地獄のような様だ。こんな酷いことをする鬼がこの山にいるのかと噛み締める。

さらに奥からもまた人が来る。その人々は隊士。だがほとんどは意識がなくのらりくらりとしてる。

「危ないぞー！そいつらを操ってる親玉がいるんだ。こつちへ来い！」

木の影から隊士が呼ぶ。

そして伊之助と俺は隊士の方に行く。

「ここで起きた話をしよう。この山に最初に入った俺たちは、ある白髪の子供を見たんだ。そうしたら1人の隊士が切り刻まれた。そして他の隊士が突然変な動きをしたらから慌てて俺だけは逃げた。そしてそれから2日が経ち今はなんとか生き延びられている状態だ。」

「は、逃げ回るとかふぎけてんのか？この弱味憎が！」

説明されているのに殴ろうとする伊之助を止めながら話を聞く

「そういえば、階級はなんだ、俺は村田誠壹、階級は庚、」

「俺は竈門炭治郎と申します。階級は壬」

「ふん、階級なんか興味ねえ」

伊之助は鬼殺隊をやっているよりも鬼を倒して強さを証明したって気持ち強いのかこういう感じに時々なる。

「壬、こんなどこに来てもあんまり意味が無い、何せここに来た隊士のほとんどは壬だ。それでも全く状況が進んでない。こうしてる間にも何人も隊士が招集されては死ぬ。そんなのあんまりじゃないか」

とても危険な状況なのはわかった。だが、突破口を見つけられない限り罅が明かない。

そんな時とてつもない刺激臭がする。鬼、しかもかなり強いもの。

そして見ると大量の蜘蛛が足元にいた。

蜘蛛が操り糸を出していたのか。

「蜘蛛だ。蜘蛛が操っていたんだ。」

「ということとは、蜘蛛を皆殺しにすればいいんだな！」

「それじゃダメだ、しかもかなりいる。こうなると鬼の居場所を探るしかない」

鬼がどこにいるかは分からない。そんな時伊之助は刀を地に指し、両手を広げた。

獣の呼吸。漆の型 空間色覚

「見つけた、そこか！」

「そうか！すごいぞ伊之助！」

こうして俺たちは鬼の方へ向かう。

その時だった、突然、大きな音がする。

後ろをむくと、首なしの大男のような人形が刀を振り回していた。木々は折れる。

「伊之助！気をつけろ！」

「ああわかってるよ！」

糸を切るしかしすぐにまた糸が付く。

これではキリがない。

「袈裟斬りだ！これなら広範囲に斬ることが出来る！」

伊之助は猛攻撃を躲す。しかし、糸が伊之助に絡みつく。

「しまった！蜘蛛がいた。」

伊之助の絶体絶命に俺はすかさず糸を斬る。

すると伊之助は少し気が抜けた感じをした。だがすぐ、

「てめえ！これ以上俺をホワホワさせるんじゃねえ！」

「伊之助！ここは力を合わせよう！伊之助！俺を踏め！」

そうして伊之助は俺の背中の箱に乗り大男の腕をとばす。

「伊之助！飛べ！」

その隙に俺も

全集中 水の呼吸。 打ち潮

両足を斬り、膝をつく。そして伊之助は袈裟斬りを決める。

伊之助は一瞬止まったあと。刀を置いて俺に向かってきた。

「おめえにできることはおれにもできるわばけ！」

そして俺はおもいきり上空まで投げ飛ばされる。
そして上空で鬼の匂いを嗅ぐ。

「そうか伊之助！そういうことか！」
そして鬼の方向に向かう。

鬼は何かを悟ったかのように、さあ斬ってくださいと全てを捧げてる。

そう、死を受け入れる鬼には痛みをなくやさしく斬る技がある。

水の呼吸。伍の型 干天の慈雨

斬られた鬼は安らかな顔をしていた。

「十二鬼月がいる。気をつけて…」
そう言つて塵へと帰つていった。

十二鬼月は鬼舞辻無惨に近い存在。その血を珠世さんのところに送れば、禰豆子が鬼に戻る可能性も高まる。

そう思い心に強く決めた。

その時だった。

「あら、私も倒そうと思つてたけど少し遅かったかしら」

女の子の声がある。

振り向くと、栗色の髪少女がいた。肩には小さい人形が乗っている。

「あら、そういえばあなた、素晴らしい技をお持ちね。」

満更でもなかったがここは凛とする。

「あら、こちらから名乗るのが筋かしら、曲戸アリスよ。この人形は、蓬萊。あたしの守り神なの。」

「俺は竈門炭治郎って言います。そういえば、君も俺と同じ最終選別にいたよね。」

「ええ、あの時はものすごい鬼を倒したんだなあつて物陰から見てたんですよ。」

さすがに手鬼を倒していたのを近くで見ているとは思わなかった。

そうしてると思い出す。

「そうだ伊之助！大丈夫かな！」

2人で伊之助の元に向かう。

「倒したかあ」

伊之助は仁王立ちしていた。さすがにほっぴり出していたのは悪かったと思う。

「あらあら、血が出ていますわ、手当をしないと」

「なんだ、そのアマ、気安く触んじゃねえ」

「アマとはなによ、アマとは、せっかく手当してあげるのにその口の利き方はなんなの！」

2人はなんか色々言い争っているので伊之助を1発殴って黙らせた。

アリスは伊之助にやさしく手当をしていた。

手当が終わると3人で他の鬼を探しに行った。

あと置いてきた善逸は今何してるんだろうと思いつながら。

雷の呼吸ときょうだい

（俺、嫌われてるのかな。普通、山の入り口に置いてくか？説得しない？仲間なら。説得してくれたら行ったよ。なのに、2人ですたころさっさかよ）

「ちゅん！ちゅんちゅん！」

チユン太郎がなんか話しかけてくる。だけど、俺には雀が何言ってるのか全く分からない。

「お前は、気楽でいいよな。」

そういうとちゅん太郎はつついてきた。

「いてててて！何するんだよ！お前可愛くないよ！ほんとそういうとこー！」

そして気がつく。炭治郎は彌豆子ちゃんを背負ったまま山に入っただけを。

それに気づいた俺は全力で彌豆子ちゃんのいる山へと入っていた。

山へと入っていき、少し息切れてきたので足を遅める。

「彌…彌豆子…彌豆子ちゃん…どこ…」

探しても誰もいない。

「彌豆子ちゃん！炭治郎！猪！どこにいるんだよ！」

叫んでもどこにもいない。

悲しくなる。チユン太郎は肩にずっと乗っていたので呼ばなかった。

そうして探すと手に痛みを感じる。

「いて、なんだよう！彌豆子ちゃんも炭治郎も見つかんないし。

なんだろう、だんだん腹たってきた。みんなを見つけたらさっさと山なんか降りてやる。」

カサカサと音がする。

しかもかなり多い。ここは蜘蛛が相当いるんだな。そう思うと後ろから大きな音がする。

振り向くと人間の坊主頭をつけた大蜘蛛がいた。

「そんなことってあるか〜！イヤ〜〜〜！」

俺は全力で逃げる。

こんなのが夢なら醒めてくれ。

だけどさつき痛みがあつたせいで夢ではないと思わされる。

そして逃げた先には多くの隊士が吊るされていた。

あるものは手足が蜘蛛のようになり。

またあるものは髪が全て抜け落ちている。

その状況に俺は焦る。

しかも吊るされた隊士たちの中央には家が浮いていた。

しかもなんか糸みたいなものに乗っかってるようなものだ。

そしてその家から蜘蛛が出てくる。しかもでかい。

「おめえみたいなのやつなんかとは口聞かないからな！」

そして来た道を引き返そうとする。

しかし、来た道に何かがあぶつかる。糸の壁だった。

「ひ、もうわかってんだろ！お前は既に食われるか蜘蛛になるかの運命なんだって」

「蜘蛛になるかって、ってこれは…」

左手を見ると所々色が変わっているのに気がつく。

「毒だ！噛まれたよな、蜘蛛に」

そして俺は怯える。

「これは時計だ！お前は毒によつて2時間で蜘蛛の仲間入りだ！15分で痺れが出てきて、30分でめまいと吐き気、更には40分で、激痛が加わり体が縮んできて失神！目が覚めたらお前は蜘蛛だ！」

怯えて逃げる、そして木の枝に飛び乗り幹にしがみつく。

「怯えるんならなあ毒を追加されて！」

「ひいひい」

幹にしがみついているとあの頃を思い出す。

「しつかりしろ！泣くな！逃げるな！そんな行動に意味が無い！」

「いや、もう死ぬと思うので！」

「おーい、早く降りてこいよ！」

じいちゃんたちとの修行時代にもこんな事あったなど。

俺が根性なしの弱虫で修行での強く当たられるとよく逃げていた。

「でも、俺はじいちゃんのごとは大好きなんだ！俺も期待に応えたいよ！こんな俺でもよ！本当は全然寝ずに何度も練習してる！でも結果が出ないんだよ」

そう、泣きながら木の上にいると姉貴が木を揺らしてくる。

「おい、降りろよ。おめえのごとは師範が一番信頼してる！あの兄弟子がなんかおめえに当たってるのも分かるけどさあ」

「落ち着け、善逸、魔理沙の言う通りお前には才能がある」

そうやってしていると天気が変わりだし、雲行きが怪しくなる。

「もう俺は、」

ドカーーーーン

「あああああ！」

「ひやあああああ」

俺は雷に打たれた。姉貴も気を揺すっていたせいで被雷する。

「善逸！魔理沙！」

（雷に打たれて、俺も姉貴も髪の色が黄色になっちゃうしさあ、その後兄弟子にはバカにされるし散々）

（俺は、自分のことが一番好きじゃないちゃんとしなきゃと思うのに、逃げるし、怯えるし、泣きまくるし、もうサイアクだ。変わりたい。ちゃんとした人間になりたい。なのにこんな所で坊主頭の蜘蛛で一生終えるのなんかもつと最悪だ）

逃げない、そう決めて立ち向かおうとする。

すると、足元に髪の毛が数本落ちてくる。俺の髪だ。

もうこんなに早く効果が出てくるのか。

「ひひい、思ったより早く効果が出てくるんだな」

それを聞いた俺は失神する。

その直後、女の子が壁を越えてくる。

「あ、まだ蜘蛛の生き残りがいたんですね。」

銀髪の女の子が、同じ鬼殺隊の隊士。

「そこに失神している。隊士の方はなんか情けないですが、私がお相手しましょう。」

そういうと刀を取り出す。

そして兄の方へ向かう、

花の呼吸。壺の型、椿落ち

縦に刀を振るう。

そして周りに吊るされていた隊士たちが地面に落ちる。

そして俺はもう1人の”俺”への変わる。

剣を構え、そして兄蜘蛛へと斬りかかる。

雷の呼吸。壺の型……

斑毒痰

吐き出した鬼の毒を身を捻り避ける。

そして、すかさず避けた俺に対し、鬼は大量に蜘蛛を寄せ付けていく。

「危ないですよ、あなたは確実に蜘蛛にターゲットにされています」

「ああ、わかっているよ」

大量に寄ってくる蜘蛛を避けながら、俺は集中して構えを止めない。

そして、放つ。

雷の呼吸。壺の型 霹靂一闪 六連

そうして俺は逃げる兄鬼を狙い、

そして、斬る！

「なんだと！俺は斬られたのか。あんな奴に」

兄鬼は断末魔をあげて消える。

「素晴らしい、お見事です。」

銀髪の女の子はそういう、そうしてると。

「うるさいわねえ、さつきからガタガタ、お腹の子供にも悪いわ」

突然、家の中からお腹の大きい女の子が出てくる。

その子は、嫌な顔でこつちを見る。

「まだ鬼がいましたの。はっ、」

銀髪の女の子と俺は周りを蜘蛛が固めていた。

「ここは、早くしないと」

「いや、俺が何とかする。あんたはあの女を切ってくれ」

「わかった、じゃあそうします！」

雷の呼吸。壺の型 霹靂一閃

花の呼吸。壺の型 椿落とし

こうして道が開ける。

「あなた、もしかしてこの山の蜘蛛の母親ですか？」

「まあそんなもんね、でも私にはすごく強いお兄ちゃんがいるから」

「あなたの兄ならたしか死んだはずですが？他にも兄はいるんですか？」

「ええ、私にはもうひとりいるわ。しかも、十二鬼月の！」

蜘蛛鬼の女の子は糸を大量に出し身を守る。

銀髪の女の子の攻撃を止める。

しかし銀髪の女の子も負けない。

花の呼吸。伍の形 徒の芍薬

九連撃を打ち出しそして、糸玉を粉々にする。

さらにすかさず、技を放つ。

花の呼吸。壺の型 椿落とし

妹蜘蛛の頸を斬り落とす。

そうして地面に落ちる。

「ヤマメ、お兄ちゃんみたいになりたかった。でも私が死んでも腹の中の蜘蛛はまだ生きているよ。」

そして、蜘蛛が大量に妹蜘蛛の腹から湧いてくる。

そこに向かい、俺は、

雷の呼吸。壺の型 霹靂一閃

斬撃により一瞬で燃え尽きる。そして周りの蜘蛛もそれを見て逃げ出す。

終わった。なんとか切り抜けた。

俺は目を覚ますと、銀髪の女の子に背負われていた。

「あれ、どうして、俺は…」

「安静にしましょう。ここは柱の人たちが来るまでやり過ぎすために山を下りましょう。」

体が動かない。体には激痛、思っていたよりも重症だ。

「今、何時？」

「ええっと、11時34分です。」

時計を出された時のことを思い出す。

あの時の時刻は10時57分。

つまり37分もたっていた。

やばい、もうすぐ俺は蜘蛛になる。そう慌ててしまう。

そんな時だった。

「あ、柱だ、しのぶさん！こつちですよ！こつち側に隊士がたくさん倒れてます！あと、背中 of 彼にも、早く治療を」

そうして背中から下ろされて横たわる。

「まだ、意識はありそうですね。ちよつとチクツとしますけど、これであなたの毒を治療しますからね」

しのぶさんという人が俺の腕に針を刺す。

「はい、終了。しばらくは安静にしててくださいね。」

こうして俺は何か安心感を感じ眠りについた。

兄と鬼

「いま、雷の音がしなかったか？」

「知るか！」

雷の臭いも雨の臭いもしない。

刺激臭があまりに強すぎてわからない。

伊之助は川を渡ろうとするところに話しかける。

「伊之助。俺はちよつと向こうに行つて見ようと思う。あと伊之助は山を下りて応援を頼んできてくれ」

「は？何でだよ！死ね！」

伊之助は先程の戦闘であちこちに切り傷ができていた。

「あ、あそこに鬼がいるわ」

アリスは川の向こう岸に女の鬼がいることに気がつく。

その鬼はこつちに気がつき急いで森の奥へと逃げていく。

「しゃあなあああ！ぶつた斬つてやるぜ！鬼ゴラァ！」

伊之助は全力で鬼を追うように川を渡る。

その時大きな影が伊之助に近づく。

伊之助は退くと蜘蛛の顔の鬼が川に飛び降りてきた。

すると鬼は、

「俺の家族に、近づくな！」

そういうと川にあった岩を拳で砕く。

そして伊之助に殴りかかってくる。

水の呼吸。弍の型 水車

その腕を斬り落とそうとするも刃が通りきらない。

そこに伊之助もすぐに双刀で応戦するもやはり斬りきれない。

そして思い切り振り払われる。

そして鬼が俺に襲いかかる所を伊之助はさらに斬りかかる。

「くっそ、通らねえ」

腕にあたるも振り払われる。その時に伊之助の喉に拳があたる。

伊之助は痛そうに喉を押さえながら川に倒れ込む。

そしてもう終わったかと鬼の方はこつちに向かって来る。

「鬼さんごちうー！」

アリスが川上の方で煽る。

そしてやや速足で逃げる。

でもこの速さなら周りの木を斬れば鬼にあたる。

そう思い木を切り倒す。

水の呼吸。 弐の型 改 横水車

斬った大木は鬼へとぶち当たる。

「やったわ。」

アリスは喜ぶ。

そして伊之助は川から起き上がる。

伊之助はそれを見ると鬼が溺れているのに気がつく。

こうなれば、決めるしかない。水の型の最強の技を。

全集中 水の呼吸。 拾の型

斬りかかろうとすると鬼は木を押し上げそして木を振り回す。

避けようにも間に合わず俺は吹っ飛ばされる。

「金太郎！」

「伊之助！アリス！そいつは十二鬼月だ！死ぬな！絶対に死ぬな！」

高く吹っ飛ばされた俺はなんとか着地しようと型を使う。

水の呼吸。 弐の型 水車。

なんとか受身をとって着地する。

そして辺りを見回すと女の子の泣き声がする。

「お願い！やめて！痛い！痛い！痛い！うっうっうっ」

木の影から見るとさっきの女の子の鬼が顔を押しえて泣いていた。

その近くには小さい鬼らしき男の子が立っている。

「何見てるの？見せもんじゃないんだけど」

気づかれた。なら話しかけるしかない。

「何してるんだ。君たちは仲間じゃないのか」

「仲間？そんな薄っぺらいもんじゃないよ。僕たちは家族だよ。それに、これは僕と姉さんの問題だよ」

姉の鬼は泣きながら正座している。

「余計な口出しするなら切り刻むよ」

鬼は周りの木々をバラバラにする。

「姉さんもこうなりたくないなら早く俺たちの邪魔するヤツらを倒すんだ」

これに姉鬼は萎縮する。

「家族も仲間も強い絆で結ばれていれば、どちらも同じように尊い。血の繋がりのあるなしで薄っぺらいなんて、そんなことは無い。それに、強い絆で結ばれていれば信頼の臭いがする。だが、お前たちには憎しみと恐怖と嫌悪の臭いしかない。こんなのは絆とは言わない。紛い物。偽物だ！」

鬼たちはなにかを感じたように動揺する。

「おまえ、なんて言ったの？おまえ、今言ったこと、もう一度言つてよ。」

「お前らの絆は偽物だ！」

俺はそう言うのと弟の鬼は怒りを微かにあらわにしながら糸で俺に向かって切りかかる。

速い。しかもかなりの糸をだす。

あちこち避けながらも糸は容赦なく吹くの端も肌も切り刻んでいく。

恐らくかなりの鬼だこつちが十二鬼月かもしれない。

「言っとくけど、お前は一息では殺さないからね。ズタズタにして苦しみながら殺す。でも、さっきの言葉を取り消さば一息で殺してあげる。」

「取り消さない！俺の行ったことは間違っていない。間違っているのはお前だ！」

構える。しかも糸の匂いはいいつが1番強い。これなら戦える。

鬼は糸を何本も出してくるが、避けられなくない。

そして俺は全力で斬りかかる。

全集中 水の呼吸。

技を使おうとすると糸が飛んでくる。

糸は俺の日輪刀を折る。

やばいと思ひ避けるが糸は顔から左肩にかけて浅く斬られ背負っていた籠の片方まで斬る。

一瞬して見ると背中も軽く刀も折れている。

「どう、まださっきの言葉を取り消さない？なら、ズタズタにしてあげる」

蜘蛛の巣状に切れる糸が張り巡らされ俺の方へと向かう。

やばい、避けきれない。

その瞬間兄のピンチに気づいた禰豆子は籠から出て俺の盾になる。

禰豆子は傷だらけになる。

そして禰豆子は倒れ込む。

「禰豆子！兄ちゃんを庇って！」

禰豆子は俺を庇った。ボロボロになり傷もあちこち深い。

これでは死ぬかもしれない。

それを見た姉鬼は驚く。

「あの女の子、鬼みたい、もしかしてあれは兄妹なの？」

弟の鬼は

そう思っていると男の子は動揺する。

「兄妹…兄妹…妹は鬼になっているのか、それなのに身を呈して…」

姉鬼は何かおかしいと呼びかける。

「る…累？」

「本物の絆だ！欲しい！あんな妹よりも強い絆！」

「ちよつと待って、」

糸がものすごい勢いで走る。その糸は姉鬼を巻き込む。

「結局、お前たちは自分の役割をこなせなかった。妹のキスメ以外、いつも…」

「待って、ちゃんと私は姉さんだったでしょ。挽回させてよ」

「だったら今、山のかなをうるちよろする奴らを全員皆殺しにすればいい。そうしたらさっきのことも許してあげる。」

「わかったわ。皆殺しにすればいいのね。」

あの姉弟は完全に上司と部下のような状態だ。ただ、指示をされる

しかない役立たずの姉とそれを指揮する弟。

そんな場所に絆など存在しない。
すると弟はこっちに向かってくる。

「坊や、僕はね感動したんだよ。君たちの絆を見てね。でも君たちは殺されるしかない。でもそれだと悲しいよね。だけどたつた一つだけ、助かる方法がある。それは、妹の交換、君は子作りしか能の無い蜘蛛鬼の妹、そして僕はその鬼の女の子。どう、それならいいんじゃない」

狂つてると思った。妹をモノ扱い。そんなことをしても絆なんて一生手に入らない。なのになぜ気づかない。

「そんなことを承知するわけない。それに彌豆子はモノじゃない。自分の思いも意思もあるんだ。お前との妹交換なんて」

「心配いらない。僕は強いんだ、恐怖の絆で結ばれば最高じゃないか。」

俺はそれを聞いて激昂した。

「ふざけるのも大概にしろ！恐怖で雁字搦めにするのを家族の絆とは言わない！その根本的な心得違いを正さなければ、絆とは呼べない！」

「大声出さないでよ、合わないね。君とは」

「彌豆子をお前なんかには渡さない」

「いいよ、殺してでもとるから」

「その前にお前の頸をとる！」

「いいねえ、楽しくなってきたよ。僕に勝てるかねえ、十二鬼月、下弦の伍の僕にね」

下弦の伍、やっぱりこの子が本物の十二鬼月、でも折れた刀でどう頸をとる。糸が刀より硬い場合。

「もしかして、僕に勝つつもりかな！」

糸は妹を高い所へと引き上げ、そして何本の糸で絡めて肌を切り刻む。

「彌豆子！」

「うるさいよ、しばらくは死にやしないだろ、鬼なんだから、最悪日の

血鬼術。 爆血

糸が焼ききれる。

すかさず俺も頸に刀を当てる。

「俺と禰豆子の絆は、誰にも引き裂けない。」

「えっ」

鬼の頸がとぶ。

そして体も地面に倒れ。頭は転がる。

それを見て安心したのか気が抜けて倒れ込む。

「禰豆子、勝った。」

なぜ技として出せたのかは分からない。家に代々伝わるヒノカミ神楽。

それを伝承してくれた父さんのおかげだ。

おかげで勝てた。

だが呼吸を使いすぎたせいで這うこともままならない状況だ。伊之助も助けに行かなきゃならない。視界もぼやける。

そんな時、鬼の血の臭いが濃くなる。

まだ倒せてない？

いつもなら灰になるような臭いがするはずなのに。

まさか！

「危なかったよ。僕はあの時自分の糸で頸を刎ねた。あと少し斬るのが速かったら僕を殺せてただけだね。まあいい、こんなに怒ったのは久々だよ。2年振りかな、じゃあ、君たちをなんの未練もなく殺してやるよ。」

腕が上がらない。呼吸もまとまらない。死ぬ！

そんな時だった。

水の呼吸。拾の型 生生流転

糸が全て切れる。

「俺が来るまで、よく堪えた。あとは任せろ」

義勇さんだ。水の呼吸を使うのはやはり。

そう思い振り向くと鬼は血鬼術のようなものを放つ。

しかし、

水の呼吸。拾壹の型 凧

全ての技が消える。

拾壹の型なんて初めてみた。恐らく智溜乃さんのようなオリジナルの型なのかもしれない。

そうして義勇さんが歩き出すと”凧”の間合いも動き下弦の伍の頸が斬られて落ちる。

体の方は俺の方に向かって歩いていくが少しづつ灰になっていく。そしてその体は俺のところまで倒れ込む。その体からは悲しみと憧れの臭いがした。

小刀がどこからか刺さる。おそらく、愈史郎さんかパチュリーさんの使いが血を取りに来たんだろう。消えゆく体から血が吸い取られ。そして体は全て灰となり小刀だけがポツンと残る。

ちよつとそれは無いでしょとは思ったが辛かった。

そんな中、義勇さんが残った服を踏む。

「人を食った鬼に、情けをかけるな。小さい子供だろうと何十年も何百年も生きている、醜い化け物だ。」

俺は酷いと思いいり返す。

「殺された人達の無念を晴らすため、これ以上被害を出さないため、もちろん俺は容赦なく刃を振ります。だけど、鬼であることを苦しみ、過去の行いを悔いてるものを踏みつけなんかに出来ない。鬼は俺と同じ人間だったんだから。醜い化け物なんかじゃない。虚しい生き物なんだ。悲しい生き物なんだ、だから、踏みつけにしないでください」

そういうと義勇さんは足を退けて俺の背中の方を見る。

何かを思い出したようにはっとする。

その直後、ものすごい勢いでなにかが来る。

それを義勇さんは思い切り跳ね除ける。

女の子だ。蝶の髪飾りをつけた女の子だ。

驕りと強い女

やべえ、どうする。

俺と女は隠れていた。

さすがにヤバすぎる。

あんな強いヤツにどうしろって言うんだ。

考えろ、ぶっ倒す方法を。

「危ない！」

女がそういうと俺は避ける。

避けた直後木が粉々になる。

女も色々と策を練ってるように逆に逃げる。

逃げなきや、そのまま逃げるとふと、思う。

刀二本あるの忘れてた。しかも考えて逃げるなんて俺じゃねえ。

「ぶざけんじゃねえぞー！」

俺は鬼に向かっていき刃を入れる。

「待って、そんなんじゃ斬れないわ」

女言うことを気にせず俺はもう一本の刀で叩き込む。

すると鬼の腕は斬り落ちた。

「さすが、力技ね」

鬼は腕を斬られたので即逃げる。

「待ちやがれ！」

俺は追う。

女はそれを見て心配したのか俺を追ってくる。

追った先で何かヤバい臭いがする。

鬼をぶった斬らないと、そう思い。

獣の呼吸。漆の型 空間識覚

いた。しかもかなり高え木の上にいた。

恐れをなして逃げたんだと思うと、なんか鬼の動きがおかしい。

鬼はものすごい声を上げて脱皮しやがった。

しかもかなり大きい。

俺は死ぬかと思うと焦る。

恋の呼吸。忒の型 懊惱巡る恋

女は危ないと思ひ鬼を斬る。すると左腕が地に落ちる。

「かなり強えじゃねえか。バルス」

「アリスよーそんなところよりなに突っ立ってんのよ！」

「すまねえ。」

女がまだそんな技持つてるのかと感心したが、そうはいってられねえ。

俺は獣だ。強いんだ。そう言い聞かせながら斬り込む。

しかし鬼はかなり速くなっている。だがまだ見えねえってわけじゃねえ。

獣の呼吸。 参の牙 喰い裂き

頸を落とそうと技を出すのが刀が折れる。

それに気づいたのか右腕で振り弾かれる。

カウンターがきまり俺の喉にぶちあたる。

あまりの痛みを受け身も取れず背中を強く打つ。

ガハッ

「伊之助さん！」

鬼は俺が動かないと思ひ女に攻撃をしようとする。

「伊之助さんをこんな目に合わせるなんて、許せない！」

女はぶちギレたように目を見開いた。完全に化け物のようだ。

俺も任務で何人か女がキレるのを見た事があるがあいつは違う。

勝てるかと踏んでる。

そう思うと俺は情けなくなる。

「あんたは切り刻んで死ねばいい」

恋の呼吸。 忒の型 初恋のわななき

女は鬼の手足をだるまにする。

そして女はこういう。

「あらあら、こんな姿になっちゃって、さあ安らかに死になさい！」

そういうと女は鬼の首を切り落とした。

こんなすげえ奴がいたとは、俺は焦った。そして決めた。女は怒らせると怖えと。

そうすると女、いや、アリスは俺の事を担いだ。

「さあ、炭治郎さんのところに向かいますよ」

1匹も倒せなかった。しかも女に助けられるなんて、屈辱だ。

そうするところつちに向かってくる奴がいる。男だ。髪を後ろで縛った男だ。

「あ、富岡さん、さっきあつちの方に吹っ飛ばされた炭治郎さんの方に向かってくれませんか？彼、もしかすると大変なことになってるかも知れませんが」

「わかった、あつちの方へ行く。それと、怪我してる奴は山の入口付近に連れていけ。そこに隠が居る。」

そういうと男は去っていった。

喉も潰され声が出せない俺はアリスというヤツに担がれながら山の入り口まで運ばれた。

二年前と隊律違反

「よく頑張って戻ったね。私の子供たちはほとんどやられてしまったね。柱を行かせなければならぬのか。十二鬼月がいるかもしれない。柱合会議前にすまないね。義勇、しのぶ」

お館様はそういう。

「御意」

俺としのぶは同意する。

「人も鬼もみんな仲良くすればいいのに、富岡さんもそう思いませんか？」

「無理な話だ。鬼が人を喰らい続ける限りは」

こうして俺としのぶは那田蜘蛛山へと向かった。

「方角はここから南ですね。今隊士は100人近く入山してるそうですよ」

しのぶは鎧鴉から聞いた情報を俺に話す。

ここから行けば恐らく7時間ほどでつくことが出来る。間に合うか。

那田蜘蛛山に入ると隊士が何人かが倒れており隠も手が追いついていない状況だった。

あまりの惨状に俺は少し考える。

これほどまでに隊士が死ぬのはいつ以来か、恐らくカナエさんが死んだ時以来だと思う。あの時に比べればまだ死人は僅かに少ないが。

そうして俺としのぶはさらに奥へと行くと仲間同士の殺し合いの跡を見つける。

こうして隊士たちは殺されたのか。そう認識する。

「この辺りに生存者はいないようですね。報せでは癸や壬の隊士も数名入山したようですけど、もう死んでるかもしれないですね」

俺は決めた。この山の鬼を全て斬り殺すと。

「ゆくぞ」

「はっ」

さらに山の奥へと進んでいく。

「せっかく2年振りの一緒の任務なんですから仲良くしましょうよ」
さすがにしのぶは話しすぎだと思った。

「俺は鬼を斬りに来た。それだけの事だ。」

「つれないですね。じゃあ私は西から回ります。」

「承知した」

俺は東へ向かう。すると、猪の被り物をした隊士とそれを担ぐ栗色の髪の女の子が歩いてくる。

その子は先程父鬼を倒したこと、そして炭治郎が吹っ飛ばされて今は行方しれずになっていることを教えてくれた。

炭治郎。もしや二年前に鱗滝さんのところに紹介したあの少年。

そう思い急いで向かう。

向かった先には倒れた少年がいた。刀も折れている。

しかも奥には恐らく十二鬼月と思われる鬼がいた。

ならば助けるしかない。

そう思い俺はその鬼の糸を切り、

あっさりと斬り伏せこんなものかとおもう。

これが十二鬼月なのかと思えば弱いな。まあ俺も柱まで登り詰めたのであれば価値観違いかもしれないが。

そして鬼の服を踏みつけ少年に訊ねる。

すると少年は言い返してくる。

優しすぎる少年だと思った。

その少年の奥を見ると鬼の女の子が寝ている。

その瞬間二年前を思い出す。

あの時、兄を助けようと盾になった妹の鬼、つまり、こいつが炭治郎。

そう気づいた瞬間遠くから襲ってくる気配を感じる。

危ないと思い刀でいなす。

するとそこにはしのぶがいた。

しのぶは先程別の方へ行っただはずじゃないか。

しかし、俺は炭治郎や禰豆子を守る義務がある。二年前、鬼の妹を

人間に戻すと誓い、そしてそのために鬼殺隊に入った勇氣ある隊士、彼のその努力をどうか繋がなければと、そう決めた。

「どうして邪魔をするんです？富岡さん、鬼とは仲良くできないって言っただくせに何なんでしょうか。そんなんだから、みんなに嫌われるんですよ」

しのぶはこう言い放った。あまり話したくないだけだ。

「さあ富岡さん、どいてくださいいね」

「俺は嫌われていない」

しのぶはなにか変なことに気がついたようだ。

「すみません、嫌われている自覚がなかったんですね。余計なことを言っってしまったて申し訳ないです。」

ふざけるな。俺はただ話すのが面倒なだけだと思っている。

必要最小限でいい。嫌われる理由などない。

そう思っていると炭治郎はしのぶに話しかける。

「妹なんです。俺の妹で、それで」

「その子は鬼ですからね。じゃあ私のやさしい毒で苦しまずに死んでもらいますね。」

炭治郎は動けるようだ。

「動けるようだな。妹を連れて逃げろ」

俺がやったことだ。柱合裁判でとやかく言われようと、この先もしかするとより良い事に繋がる。そう思った俺は炭治郎と妹を逃がした。

「これ、隊律違反なのは」

しのぶは全力で刃で問いかける。

俺はそれを全力で止める。

「本気ですのね富岡さん。柱が鬼を庇うなんて」

柱になったばかりの時にさとりと俺で見逃した事だ。

俺は罰をうける覚悟は出来ている。

「あなたがその気だろうと、私はここで時間稼ぎに付き合う気はありませんので」

そう言っしてしのぶは炭治郎を追っていった。

止めなければ、この先の芽を潰してしまうかもしれない。全力で追いかけ、そしてしのぶにヘッドロックをかける。

「富岡さん、鬼を斬りに行くための私の行動は正当ですから違反にはならないと思いますけど、富岡さんのこれは隊律違反です。鬼殺の妨害ですから、もし、理由があるのなら仰ってください。」

話すか、まあ聞いて貰えないと思うが。

「あれは二年前の冬の日……」

「そんなところから長々と話されても困りますよ。嫌がらせでしょうか。嫌われているって言うってしまったこと、根に持ってます?」

何度言うんだ。それこそうるさいにも程がある。

かなりカンに触った俺はヘッドロックを強める。

するとしのぶは隠し刃を出し俺に刺そうとする。

そんな時、

「炭治郎! 鬼の禰豆子! 両名を拘束! 本部へ生きて連れ帰るべし!」

鎧鴉が叫ぶ。やはり、俺の行動は正しかった。

これで炭治郎達の思いは繋がった。しのぶはせっかちすぎる。

こうして俺は炭治郎や禰豆子を助けることは出来た。

危なかった。もし一瞬遅ければ刃が刺さって流血してたかもしれない。

その後治療中の隊士達を荷車にのせ、俺は明後日の柱合裁判へと向かうこととなった。

口下手な俺でもお館様はわかってくれるだろうか。

南東の島と生首

「みよん、鬼殺隊は忙しすぎて疲れる。」

私は那田蜘蛛山に向かう予定だ。

そんな時だった。

「南東の島に鬼の気配！鬼の気配！隊士が既に向かったが、数人が消息不明！直ちに向かえ！」

鏖鴉がそう言った。

この前といい今回と言い色々振り回されている気がする。

私は東の島へと向かうことにした。

その道中。

「あんた、南東の島に向かいたいんだが、その場合近道はどっちだ？」
金色の髪の鬼殺隊の隊士が道を聞いていた。

「その道をまっすぐ行くと海に出る。そしたら砂浜のところの道を海伝いに南に行けば着くよ。」

「ありがとう。それじゃ失礼するぜ」

同じ場所に行く隊士か、気になったので声をかける。

「あの、すみません、お名前をお聞きしてもよろしいですか？」

「あ、もしかして、同じ鬼殺隊？あたしの名前は霧雨魔理沙、階級は己だ。で、あんたは？」

「魂魄妖夢と申します。階級は癸です。」

魔理沙さんという人は陽気な感じだった。姉御肌なのかな。

そう思った私は訊ねる。

「もし次の任務が南東の島なら一緒に遂行しませんか？」

魔理沙さんは返す。

「おおそうか、おめえもあたしと同じところか。こりや楽しくなりそうだぜ。」

こうして魔理沙さんと私は南東の島へ向かった。

島の近くまで来ると一人白黒の羽織の隊士が港で待っていた。

「ああ、おせえなあ、こんな所まで来るのにいつまでかかってんだあ？」

強い鬼がいるって話で来てみりや一人も隊士がいねえし」

なんかネチネチと文句でも言う隊士だなあと思った。

「遅くなつてすみません。道に迷つてしまいました。」

魔理沙さんはそう弁解する。

「ああ？道に迷つていた？そんなことじゃ鬼殺隊の風上にも置けねえなあ。」

すぐくネチネチと叱る人だ。この人はなんか嫌。そう思うと私に話しかける。

「その隊士、最近入つたつていうやつか。この任務じゃあ足でまといになるかもしれないね。」

私はそう言われても我慢するしか無かった。

先輩の言うことはしっかりと守る。これは隊士としての勤めだとしっかりと心得ている。

「まあいい、それじゃあの島にいる危険な鬼を殺しに行くよ。」

そうして私たち3人は島へと渡った。

島へ上陸するとすぐに大きな屋敷のようなものが建っていた。

恐らくここの島の持ち主だろう。

その屋敷の門を開けると予想外のものが目に映る。

首のない死体だ。しかも何十人も山積みにされている。

その中には鬼殺隊の隊服を着たものもいた。

あまりの光景に私は吐き気を催す。

「そんなんじや鬼殺隊なんか勤まらないよ。こんなのよくある事だ」

白黒羽織の隊士はそう言う。

よくある事、つまり何人もの人が死ぬ場所に強い鬼がいる。

そう理解させられる。

屋敷の奥へ行くと廊下の壁際には大量の生首が置いてある。

しかもそれがひとつずつ箱詰めになされて、

「ああ、これは予想以上だな。十二鬼月の一人が居てもおかしくないな」

聞いたことがある。十二鬼月は鬼舞辻無惨という鬼の始祖が率いている十二体の強い鬼のことだ。

となるとこれほどの隊士が死ぬのも不思議ではないと。
そして大きな間に着く。

するとそこには誰もいなかった。

しかし声が聞こえ出す。

「私を退治しに来たというの？哀れね。大人しくしてればあなた達は私のコレクションにしてあげる。」

そういうと突然なにかが飛んでくる。

それを私は刀で斬ろうとすると、なにか重くなる。

首が噛み付いてきたのだ。しかも、死体の首が、

「チツ、厄介な血鬼術を使ってくるやつだな。お前ら、気をつけろよ」
白黒羽織の隊士の人は素晴らしい襲いかかる生首をどんどん切って進んでいく。

その人の日輪刀は波打っていた。

「あの人が全力で斬り進んでくれている。あたし達もやるよ」

「はい」

こうして私と魔理沙は飛び交う首を斬り払いながら屋敷を探索して行った。

探すこと2時間、私と魔理沙さんは30個程の首を斬り刻みながら屋敷内を回ったが鬼の姿は見えなかった。

「どういうことだ？屋敷を探し回ったが鬼はいねえ。なのに首はあちこちから飛んでくる。ほんとどういうことだよー！」

「もしかするとまだ探していない部屋があるんですかね」

そう話していると白黒羽織の隊士さんがこつちに来た。

「あっちの間の真ん中の畳が浮いていた。おそらくあそこに何かある。」

隊士さんが見つつけてくれた。ならばそこに隠し部屋がある。

そう思い私たちはその間へと向かう。

そのこの畳を何枚か開けると穴が空いていた。

その下には大きな土穴も空いている。

もしかするとその先に鬼がいるかもしれない。

そう思い私たちは穴へと入っていった。

下弦と正体

穴を降りていくとそこには大きな空間が広がっていた。

そしてその大きな空間には何人もの人が礫にされている。

まだ生存者もいる。

そんな時だった。

「は、私のコレクションの製作所を見つけると、賢いね」

また声がある。しかも今度はかなり大きい、もしかすると近くにいるのかもしれない。

そう思った私たちにまた生首が飛んでくる。

しかも今度の生首は同じ顔をしている。

それを斬ろうとした瞬間消える。

そして後頭部にぶつかる。

速い、今までよりも段違い。

何とかこの生首をしとめなきやそう思うと魔理沙さんは言う。

「ここはさすがに私の呼吸でも使うか。まあ周りの人は気絶すると思うけどじゃあ、行くよ」

そして魔理沙さんは放つ。

雷の呼吸。漆の型 大放雷

魔理沙さんの技に電撃が一気に斬撃として放たれる。

「は、見たか、私の呼吸だ。私のオリジナルの技だ」

そう偉そうに語るのも魔理沙さんっぽい。

「おい、敵前で余裕に語るとはいい度胸だな」

白黒羽織の人がツツコミを入れる。

すると奥から一人の小さい女の子がやってきた。

「私のコレクションになる予定の人達が気絶しちゃった。まあいいわ、あなた達がコレクションになればいいのよ。」

そして女の子は髪をかきあげる。

そこには十二鬼月の下陸の文字が刻まれていた。

こいつか、こいつがこの屋敷の主か。

そう思っていると、白黒羽織の人が話しかける。

「ふうん、下弦の陸なんかよわいな。思ってたよりやるって程度かな。」

するとその人はいきなり間を詰めた。

蛇の呼吸。弍の型 狭頭の毒牙

決まったかに思えた。

しかし、生首が刃を止めている。

咄嗟に引き抜き退く。

「へえ、なかなかやるね。まあこれくらいは予想出来たよ。その2人、俺が戦っている間に磔になってる人を助けろ。」

指示を受けた私たちは急いで魔理沙さんと磔から解放に向かう。

そうこうしていると生首が私の頭に飛んできた。

避けきれず頭をかすめる。かすり傷だが割と痛い。

「そうやって油断してやられるから、新人は嫌いなんだ」

あの白黒羽織の隊士さんはネチネチとこっちにも行ってくる。

そして磔になった人をほとんど解放する。

あと残るは5人。

そうしようとした時、手に痺れが起き始める。

すると下弦の陸が言う。

「あら、私の生首はゼーんぶ毒でできてるの。傷口に入ったら神経が麻痺して、それで動けなくなるの。磔にした人はみーんなそれで動けなくしたのよ。」

やばいと思う。それでも助けなきやと思いき出そうとするも

ふと気がつく。

今の声、羽織の隊士さんの方からじゃなく、天井の方から聞こえた。

もしかして、

そう思い、私は魔理沙さんに言う。

「魔理沙さん、上に向かつて、斬撃を放ってくださいませんか？」

魔理沙さんはなんか不思議そうに思うも上に放つ。

天井にヒビが入る。そして崩れ落ちる。

すると大量の生首が落ちてくる。

「うわあ、こんなにあったのか。」

私と魔理沙さんは驚いた。

その生首を眺めていると。もごもごと声がする。もしかして、と思い生首をかきわけると一つだけ動ける生首がいた。

こいつが本体の首か、つまり、羽織の隊士が戦っているのは偽物。それをつかみあげると生首は逃げようとする。

「ちよっと、離しなさいよー私は十二鬼月なんだから」

こんなのが十二鬼月なのか。私は呆れる。

白黒羽織の隊士さんはこっちに來て生首をみじん切りにした。すると日輪刀により体の方は塵となって消えた。

数刻後、隠達が來て色々片付けを行う。

そんな時、私は白黒羽織の隊士さんに話しかけられる。

「お前、あの時よく気がついたな。まあ、俺もこの鎬丸に探させていた気がついていただけ」

そういうが明らかに強がりだと思った。

私は言い返そうとするが留まり、そしてふと思い出したことを話す。

「そういえば名前聞いてなかったですね。あなたは」

「蛇柱、伊黒小芭内。なに、それだけ？」

魔理沙さんはそれを聞くと全力で私を土下座させた。

「すみませんでした。柱のお方でしたか。今まで酷い口の利き方をして申し訳ございません。」

魔理沙さんは焦って謝る。私はなぜ魔理沙さんが全力で謝るのか分からなかった。

魔理沙さんは頭を何度も地面に擦りつける。

押さえつけられすぎて私は気絶する。

「いいから、知らないのも無理ないね。あと、その子、完全に意識ないよ」

「あ、やりすぎました。失礼します」

あとから魔理沙さんから聞いたことだが柱は鬼殺隊でもかなり強

い人達のことを言うので私みたいな新人が知らないのは教育的にもなっていないんだと言われた。

魔理沙さんはその後減給処分になったんだとか。

こうして私の初めての柱との共同任務は終わりを告げた。

あと行きそびれた那田蜘蛛山の方はどうなったのかな？

蝶屋敷編

兄の意地と柱合裁判

逃げなきや、逃げないと禰豆子もこれも大変なことになる。俺は全力で禰豆子を抱え、片方が切れた籠を持ち逃げた。いくら妹とはいえ鬼を連れている隊士なんて認められない。もしかするともう鬼殺隊にはいられなくなるかもしれない。色々な最悪なことが過ぎる。

そんな時、背中に強い衝撃を受け、倒れ込む。

あまりの勢いで転んだせいで禰豆子落としてしまう。

禰豆子、大丈夫か。そう思うと女の子の鬼殺隊の隊士が1人、目の前に現れる。

危ない、禰豆子が、禰豆子を助けないと。

「禰豆子、逃げるんだ。」

そういうと禰豆子は全力で逃げる。

鬼殺隊の隊士は追って行こうとする。

俺はその足を掴む。

するとその隊士は倒れ込む。その子はスカートがめくれ上がり下着が見える。

その女の子を逃がさないとするが手から離れ、首に強い衝撃が走る。

あまりの痛さに俺は気絶した。

禰豆子はもしかするとその女の子に殺される。そう思い、起きる。すると俺は縛られて石畳にうつ伏せになっていた。

すると大人数の人影が目映る。だが太陽のせいによく見えない。

「なんだ、この人た…」

「また口を挟むなバカ野郎。誰の前にいると思ってるんだ。柱たちの前だぞ」

こんなにも多くの人がいる。柱ってなんなんだ。そしてここはどこだ。

「ここは鬼殺隊の本部です。竈門炭治郎君。あと、君の犯した罪の説明を…」

「裁判の必要などないだろう。鬼を庇うなど明らかに隊律違反！鬼もろとも斬首する！」

しのぶさん、が言うのを黄色い髪の人が遮る。

「ならば、俺が派手に首を斬ってやろう。誰よりも派手な血飛沫を見せてやるぜ！」

「ああなんというみすぼらしい子供だ。可愛いそうに」

2人の大男はそういう。だけど禰豆子はどこだ。

辺りを見回すがどこにもいない。

「お前、柱が話をしているのにどこを見ている。このお方達は鬼殺隊でも最もくらしいの高い11名の剣士だぞ」

だが、そんな場合じゃいられない。

みんなはどこだ。禰豆子、善逸、伊之助、アリス、村田さん。

身を捻りあたりを見回すと木の上に誰か人がいる。

「そんなことより富岡はどうするのかね。拘束もしていない様に俺は頭痛がしてくるんだが、胡蝶めの話によると、隊律違反は富岡も同じだろう。どう処分をとる。どう責任を取らせる。どんな目に遭わせてやろうか」

そうか、おれや禰豆子のせいで、富岡さんまで言われなきやならないのか。

「まあ、いいじゃないですか。大人しくついて来てくれましたし、処罰は後で考えましょう。それよりも私は坊やの方から話を聞きたいですよ。坊やが鬼殺隊員の身でありながら鬼を連れて任務にあたっている。そのことについて当人から説明を聞きたい。もちろんこのことは、鬼殺隊の隊律違反ですからね。そのことは知っていますよね。」
知ってるも何も鬼を連れて任務をする隊員はあまりにおかしすぎる。

でも、俺は妹を連れて任務にあたっている。仕方ないことなんだ。

俺と一緒にいなきや禰豆子は人間に戻る前に誰かを食べてしまう。

そんなのを防ぐためにも俺は妹を守る。

妹と一緒にいたこともあって俺はここまで生きてこれた。

ならば、説明しなきゃ。

「俺の、俺の妹は…ゲホツゲホゲホ」

むせてしまった。ここまで水を飲んでこなかったんだろう。

そう思っているとしたのぶさんがひょうたんをこつちに向ける。

「水を飲んだ方がいいですね。顎を痛めていますからゆっくり飲んでください。鎮痛薬が入っているから楽になります。」

俺は必死に水を飲んだ。

「怪我は治ったわけでは無いので無理はいけませんよ。では、竈門炭治郎くん」

飲み干し息をついた俺は呼吸を整え話す。

「鬼は俺の妹なんです。俺が家を留守にしている時に鬼に襲われて、家族はみんな死んでいて…妹は鬼になったけど、人を食ったことはないんです。そして、今までも、これからも、人を傷つけることは絶対にしません」

そういうも柱は誰も信じてくれない。

でも聞いてくれないければ話にならない。

「聞いてください！俺は禰豆子を治すために剣士になったんです。」

禰豆子が鬼になったのは2年以上前のことで、その間禰豆子は人を喰ったりしてない」

そういうと銀髪の女性が指摘してくる。

「話が堂々巡りですよ。口先だけならどうぞ、もしそれが証明できるのならしてみなさい」

そう言われると言葉が止まる。

確かに証明は出来ない。半年間山に籠って岩斬りの修行中に何かあったかもしれない。

そんな時桃色の髪の人が悩んだように話す。

「あのお、でも疑問があるんですけど…お館様がこのことを把握してないとは思えないです。勝手に処分しちゃっていいんでしょうか？いらつしやるまでとりあえず待った方が…」

そう言われて柱の人々は考え込む。

「ここで言わなきや。

「妹は俺と一緒に戦えます！鬼殺隊として人を守るために戦えるんです！だから！」

そういうとこちらに歩みよる人がいた。傷だらけの険しそうな顔の男が。

「オイオイ、なんだか面白いことになってるなあ。鬼を連れてたばかりたいいんはそいつかい？一体全体どういうつもりだ？」

その男の手には禰豆子の入った籠。やばい、このままじゃ。

「不死川さん勝手なことをしないでください」

しのぶさんはキレているようだ。それを煽るように傷だらけの男は刀を取りだし籠に刀を突き刺す。何度も、何度も、すると籠から血が滴り落ち、中から呻き声がある。

禰豆子は中に入ってる。太陽に出られない状況でやるなんて非道だ。

怒りに任せ抑えてた人を蹴り傷だらけの男の近くまで行く。

そして言い放つ。

「俺の妹を傷つけるやつは、柱だろうがなんだろうが許さない！」

「そうかい、よかったなあ」

傷だらけの男は煽ってくる。こうなりや一矢報いるしかない。

俺は全力で向かう。

すると、

「やめろーもうすぐお館様がいらっしやるぞー！慎めー！」

そう言われて一瞬怯んだ様子を見せる。

ならばここしかない、俺は跳んで、そして思いっきり頭突きを食らわせる。背中をうつ。でも相手が痛みに悶える間に、そして俺は禰豆子の籠の紐を後ろ手で掴む。

「善良な鬼と悪い鬼の区別もつかないなら、柱なんて辞めてしまえー！」

俺はもう怒りの限界まで来ていた。

こうなれば俺も鬼殺隊を辞める覚悟だ。

そう思っていると屋敷の方から女の子達が現れる。

「お館様のおなりです」

そういうと柱達は急いで整列する。

そして立ち膝をつく。

「よく来たね、私の可愛いこどもたち、おはよう皆、今日はとてもいい天気だね、空は青いのかな？顔ぶれも変わらずに半年に一度の柱合会議を迎えられたこと、嬉しく思うよ。」

病気なのか傷なのか、顔が焼け爛れたような人が現れる。

すると一人の柱が俺の頭を地面に叩きつける。

「お館様の前よ、頭を垂れなさい」

その柱は桃色の髪の子だった。

思い出した、2年前、俺を助けてくれた剣士だ。

しかも、何かを隠すかのように少し汗をかいている。

「もしかして、あなたは」

「私語は慎みなさい。」

そう言われて俺は黙った。

お館様と彌豆子の試練

傷だらけの男が沈黙を破る。

「お館様に置かれましては御壮健で何よりです。益々の御多幸をお切にお祈り申し上げます。恐れながら柱合会議の前に、この竈門炭治郎なる鬼を連れた隊士について、ご説明いただきたく存じますがよろしいでしょうか」

知性も理性も無さそうだったのにすごいきちんと喋りだしたぞ。この人は。

お館様は返す。

「そうだね、驚かせてしまつてすまなかつた。炭治郎と彌豆子のことは私が容認していた。そして皆にも認めて欲しいと思つている」

だが柱たちでも反対する人達ばかりだった。

何とかして打開策を出してください！お館様！

そして、傷だらけの男は発する。

「鬼を滅殺してこそその鬼殺隊、竈門、富岡の両名の処罰を願います。」

やはり、そうなるとは思つた。柱の人達は鬼殺隊のエリート、つまり鬼を連れているなどありえない。

するとお館様の傍についている女の子が手紙を出す。

「こちらの手紙は元水柱である鱗滝左近次様から頂いたものです。一部抜粋させて頂きます。」

炭治郎が鬼の妹と共にあることをどうか御許してください。

彌豆子は飢餓状態であつても人を喰わず、

そのまま2年以上の歳月が経過致しました。

にわかには信じ難い状況ですが紛れもない事実です。

もしも彌豆子が人に襲いかかった場合は、

竈門炭治郎及び、鱗滝左近次、氷川智溜乃、古明地さと、富岡義勇が腹を切つてお詫びします。

ありがとうございます。鱗滝さん。ありがとうございます。古明地さと、富岡義勇さんまで一緒に庇つてくれて。

義勇さん以外の柱の人達は一斉にさとりさんの方を見て、そして前

を向き直す。

「切腹するから何だと言うのか、死にたいなら勝手に死に腐れよ。何の保証にもなりません」

「不死川の言う通りです！人を喰い殺せば取り返しがつかない！殺された人は戻らない。」

柱の2人はそう話す。

「確かにそうだね。人を襲わないという保証ができない、証明ができない。ただ、人を襲うこともまた証明ができない。彌豆子が2年以上もの間人を喰わずにいるという事実があり、彌豆子のために五人の者の命が懸けられている。これを否定するためには、否定する側もそれ以上のものを差し出さなければならぬ。皆にその意思はあるかな」

否定する側の柱は黙る。何も言い返せないようだ。

さらにお館様は付け足す。

「それに、この竈門炭治郎という隊士は鬼舞辻無惨と遭遇している」

柱たちは動転する。そして俺に向かって色々質問をなげかける。

だがガツツリ頭を抑え込まれては話すに話せない。

すると御館様は人差し指を口元に当てる。

それで柱達はいっせいに立ち戻る。

「鬼舞辻はね。炭治郎に向けて追っ手を放っているんだよ。その理由はたんなる口封じかもしれないが、私は初めて鬼舞辻がみせた尻尾を掴んで離したくない。恐らく彌豆子にも、鬼舞辻にとって予想外の何かが起きているのだと思うんだ。わかってくれるかな？」

不死川という柱が異を唱える。

「解りません御館様人間ならば生かしておいてもいいですが鬼は駄目です。これまで鬼殺隊がどれだけ戦ってきたと思うんですか。承知できません。」

すると不死川という柱は腕の包帯を外す。

包帯からは血が流れでる。

「お館様、証明しますよー俺が、鬼というものの醜さを！」

血を籠の上に垂らしていく。だが彌豆子は籠から出てこない。

太陽の下なら自分が死ぬかもしれない。それをわかっている。

「禰豆子！」

「あの子、必死に耐えてるわ、お兄ちゃんのためにもって」
さとりさんはそう俺に教えてくれる。

蛇を首に巻いた柱は不死川という柱に告げる。

「不死川、日なたではダメだ。日陰に行かねば鬼は出てこない」

不死川という柱は失礼仕ると言うと言敷の日陰の所に行く。

そして籠に何度も刀を突き刺し。そしてひっくり返す。

すると禰豆子は怯えながらゆっくりと籠から出てくる。

そして腕から流れ流される血をじーっと見つめる。

「禰豆子ー」

禰豆子はじつと腕を見つめるが何かと葛藤してるように両手で握りこぶしを作りながら気をつけの状態を抑えている。

すると禰豆子は兄の声に答えたかのようにそっぽを向いて離れる。

やった。禰豆子は人を襲わない。それが証明された瞬間だった。

「不死川様に十度も刺されていましたが、目の前の血塗れの腕を突き出されても我慢して、噛まずに離れました」

あの状態にまでされてよく耐えた。兄として誇らしいとは思った。

「炭治郎、それでも禰豆子のことを快く思わない者もいるだろう。だから証明しなければならぬ。これから、炭治郎と禰豆子が鬼殺隊として戦えること、役に立てること」

俺はそう言われると無意識に土下座をしていた。この人の声のせいであたまがふわふわする。不思議な高揚感を感じる。

「十二鬼月を倒しておいで、そうしたら皆に認められる。炭治郎の言葉の重みが変わってくる」

そう言われて俺は心に決めた。

「俺は…俺と禰豆子は鬼舞辻無惨を倒します！俺と禰豆子が必ず！悲しみの連鎖を断ち切る刃を振るう！」

「今の炭治郎にはまだ出来ないからまず十二鬼月を1人倒そうね」

「はい…」

恥ずかしくなり赤面する。何人かは失笑する。

「鬼殺隊の柱たちは当然抜きん出た才能がある。血を吐くような鍛錬

で自らを叩き上げて死線を潜り、十二鬼月をも倒している。だからこそ柱は尊敬され優遇されるんだよ。炭治郎も口の利き方には気をつけるように」

「は…はい」

「それから実弥、小芭内、さとり、あまり下の子に意地悪しないこと」「二御意」

みんなが認めてくれた。それだけでも嬉しかった。

「炭治郎の話はこれで終わり、下がっていいよ。じゃあそろそろ柱合会議を始めようか」

すると2人の柱が手を上げる。

「でしたら竈門くん達は私と八意さんの屋敷でお預かり致しましょう。」

「じゃあ、隠の方たち、連れて行ってください」

そう言われると隠の人が俺を背負って立ち去ろうとする。

だが不死川という柱に無性にイライラしてきたので振りほどく。

そして戻る。

「ちよつと待ってください！その傷だらけの人に頭突きさせてもらいたいです！絶対に！禰豆子を指した分だけ絶対に！頭突きなら隊律違反にならないはず…」

そう言ってる途中に拳大の石を投げつけられる

「お館様のお話を遮るのはいけませんね。」

頭がフラフラする。

「申し訳ございません。お館様、八意様」

そう隠の人が言う俺を背負い立ち去る。

背負われた瞬間お館様が俺に言う。

「炭治郎、珠世さん達によろしく」

その後隠の人に全力で怒られ謝るしか無かった。

蝶屋敷と同期一同

「ごめんくださいませ」

「全然誰も出て来ねえわ」

「つてあ、こっちは永遠屋敷だったわ」

「やっべ、蝶屋敷は隣だったわ」

隠の人も間違えるんだなあ。

そう思いながらもしばらく隠の人に背負われていた。

「お前、自分で歩けよな」

「すみません、ホントもう体中痛くて」

背負われながら蝶屋敷に着くと庭に人がいた。

「あ、いるわ。あの人は、継子の方だ。あれは確か…」

「ツグコってなんですか?」

「栗花落カナヲ様だ。」

思い出した。最終選別の時の女の子だ。

「継子つてのはなあ、柱が育てる隊士だよ。相当才能があつて優秀じゃないと選ばれない。まあ今は全部で6人いるんだけどな。全員女の子だけだ」

へえ、今継子には女の子しか居ないのか。

みんなが集まったら色々とお話でも盛り上がるんだろうなあ。

「失礼致します。栗花落様、胡蝶様の申し付けにより参りました。お屋敷に上がってもよろしいですか?」

隠の人が聞くが彼女はあまり話さず、笑顔で佇むのみ。おそろくいよいよって意味だとは思うのだが。

すると後ろから女性の声がある。

「どなたですか!」

隠の人たちが驚いて取り乱す。

「いえっあの、胡蝶様に…」

「隠の方ですか?怪我人ですね。こちらへどうぞ」

そういうと女性は案内して行った。

「六回!一日六回も飲むの?一日に!?!1ヶ月間飲み続けるのこの薬!?!」

これ飲んだら飯食えないよ！すげえ臭いんだけど辛いんだけど！ていうか薬飲むだけで俺の腕と足治るわけ!?ほんと!?!」

奥から聞いたことのある声がある。

おそろく善逸だな。

「まだ騒いでるな、あの人：静かになさって下さい！」

善逸は怯えまくっている。女性にガミガミいわれて、

「説明は何度もしましたでしょう！いい加減にしないと縛りますからね！」

なんか情けないので俺が呼びかけたら元気にでもなるかと思いをかける。

「善逸！大丈夫か、怪我したのか！山に入って来てくれたんだな！」

「うわああ炭治郎聞いてくれよー。臭い蜘蛛に刺されるし毒ですごい痛かったんだよー。さつきからあの女の子や紫の髪の子にガミガミ怒られるし最悪だよー！」

泣き言を言う善逸に対し少し違和感を感じる。

「善逸、お前なんかちっちゃくなつてない？」

「蜘蛛になりかけたからさあ、俺今手足が短い。」

重傷ではあるが生きててほんと良かった。

あと気になった人も聞く。

「伊之助は？アリスや村田さんは見なかったか？」

「村田って人は知らんけど伊之助なら隣にいるよ。あとアリスって人と俺を助けてくれた咲夜って人は隣の病室だつて」

「あつホントだ！思いつきりいた！猪の頭つけてなくて気づかなかつた！」

伊之助も生きててよかった。

「伊之助！無事でよかった…！ごめん、助けに行けなくて…」

涙が出てくる。俺がぶつ飛ばされたせいで危険なことになってしまった。

「イイヨ…気ニシナイデ」

声が…？伊之助か!?

「なんか喉潰れてるらしいよ。詳しいことはわかんないけど思いつき

り首をガンってやられて、その後アリスって子に助けられて、イライラして絶叫したのが止めだったみたいで、喉がえらいことに」

伊之助はあの後アリスに助けられていたのか。

アリスって以外と強いんだなと感心した。

「落ち込んでんのかすごく丸くなっててめっちゃくちや面白いんだよな。ウィツヒヒヒツイーツヒツヒヒ」

「なんでそんな気持ち悪い笑い方するんだ？どうした？」

落ち込む伊之助を嘲笑ってる感じがなんか酷いと思ったのか善逸は笑うのをやめた。

「ゴメンネ…ヨワクテ」

ここまで縮こまった伊之助はらしくない。

元気出そうと呼びかける。

「頑張れ、伊之助！落ち込むなんてらしくないぞ！」

「お前はよくやったって！すげえよ！って俺2回目の薬飲んだっけ？

飲んでるとこ見た!?誰かー！」

「はい、私が見ていましたよ」

そこに佇む女の子がいた。

見たことある。最終選別以来会う子。お前とまさかここで会うとはな。

「妖夢！久しぶりだな。元気だった？」

「元気も何も、ここにいたら怪我人なのは分かりますよね。まあ私は、

霧雨魔理沙さんという人に付けられた怪我が主な原因ですけど。」

善逸はそれを聞いて焦る。

「ギャー！姉貴がいるとか怖いー！って妖夢じゃん。そういえば浅草の任務以来だな」

「魔理沙さんなら一昨日任務に出かけましたよ。あと私、あの時のこと忘れてませんかからね。鬼との戦闘中も私の体から離れなかったじゃないですか！」

「その時はごめんよー。俺、初任務で2体もの鬼を斬るなんて怖くて全然出来なかったんだよー。しかも、あの鬼たち、めっちゃ気持ち悪いしさあー！」

「あの時はほんと大変だったんですからね。途中まではぎやあぎやあ騒いで逃げ回るしかないし。まあその後気絶したあととは何かに覚醒したかのように強かったですけど」

「あ、もしかして俺じゃない俺つてのがいたりして。なんかこの前も兄蜘蛛に怯えていて気がついていたら兄蜘蛛と妹蜘蛛が倒されてたつての、それ咲夜がさつき教えてくれたわ」

「ほんと、いつもが覚醒状態なら私は安全に任務できたんですけど。まさかの浅草で妖夢と善逸が共同任務をしていたこと、そして別れたあとも結婚しろだのなんだの道行く女の子にしがみついていたの。そう思うと腹が立つ。

「善逸ー！お前つてやつはー！」

怒りのあまり頭突きを食らわす。

「はへ、へろ、へろ〜」

善逸はフラフラしたあと気絶した。

彌豆子には特別な部屋が用意され、

そして俺たちは今日から蝶屋敷という場所にしばらくは入院する。

あと蝶屋敷は隣の永遠屋敷とは二本の廊下で繋がっている。

今朝声をかけた神崎アオイという人に聞いたところ永遠屋敷と蝶屋敷は柱どうしが師匠と弟子なんだとか。柱どうしにもそういうのがあるんだなあ。

そう思つて俺は入院初日を終えた。

善逸は臭いだ苦いだと薬を飲んでたなあ。これでもかなり味を良くするために水飴まで混ぜてるんだとか。

夜中と柱たち

「いやー！もうおなかいっぱいだよー！」

善逸は相変わらぬ薬を何回も飲んでる。

しかも思ってたより重傷だったらしく薬の量が8回に増えていた。

伊之助は3回、俺でも4回つてことは相当だな。

そう善逸を哀れんでいるとお見舞いが来た。

「おつ、元気そうだな！」

「村田さん！魔理沙さん！」

村田さんは元気そうだった。あと魔理沙さんも額に包帯を巻いてるくらいだけどたんこぶを抑えてるだけっぽい。

「あの後姉蜘蛛に糸玉に突っ込まれて大変だった」

「大丈夫だったんですか？」

「体が溶ける寸前まで行っただけど、なんとかな。そっちはだいぶ怪我が重いんだって」

「少し時間がかかるみたいです。」

「あと、隣の綺麗な顔のやつはなんだ？」

「あ、伊之助です。今、猪の被り物は汚れてたので、洗ってもらってます」

「へえ、こういう顔なんだ。荒々しくなかったら普通にモテるんだろうに。あとこいつなんか元気なさそうだな」

「色々あって…そつとしておいて下さい。」

そうやって村田さんと話をしてるとき、魔理沙さんは善逸を弄っていた。

「はっははは、蜘蛛になりかけたって？それで手足が短くなったって？そんなのなかなか強いじゃん。それに2体も鬼を倒すって結構やるじゃねえか。でもよお、薬は実際飲んだ方がいいぜ？飲まないとどんどんまずい薬になるから、そんなのになりたくなくなったら時計を見ながら薬を飲むように！」

「姉貴も酷いよ！いいないから安心してたのにすぐ任務から帰ってきてちやうしきあ…って本音が出ちゃったわ」

「あたしがいないから安心しただって？あたしに向かつていい度胸じゃねえか！」

「ひいひい」

その光景を見ていると村田さんが落ち込む。

「楽しそうでいいなあ。その那田蜘蛛山での仔細報告のために柱合会議に呼ばれたんだけどさあ、地獄だったよ…怖すぎだよ柱…。なんか隊士はめちやくちや質が落ちてるってピリピリして皆、那田蜘蛛山に行った時も命令に従わない奴とかいたからさ…その育手が誰かって言及されててさ…俺みたいな階級にそんなこと言ったってさあ…」

愚痴を村田さんがこぼしているとしのぶさんがそろりそろりとやってくる。

「こんにちは！柱が何かございましたか？」

「あ…胡蝶様！あつどうも、さよなら！」

村田さんはそそくさと帰っていった。

「こういう隊士がいるから質が落ちてるって言われるんですよ。ねえ魔理沙さん？」

魔理沙さんは全力で頷いていた。そして逃げるように病室から出ていく。

しのぶさんはため息をすると俺たちに話しかけてきた。

「調子はどうですか？」

「まだ3日目ですけど、体力は回復してる気がします」

「治療は順調ですね。あと1ヶ月近くは安静ですから、ゆっくり休んでくださいね。あと善逸くん。薬は今度からもっと苦くしますので、間違っても飲み忘れないように」

「は、はい…」

その日の夜、俺はなんか寝付けなかった。憚りからの帰りに病室へ戻ろうとしたら灯りがついていた部屋を見つめる。なんだろうと思いい障子の隙間から覗いてみる。

するとなにかジャラジャラと音がする。

何かで遊んでいるようだ。

しのぶさんや義勇さんなどもいる。

「そこにいるのは誰？」

勢いよく障子を開けられる。

「炭治郎くん、もしかして覗いてました？」

バレたと思った。するといきなり倒される。

「さとりさ…」

「しっ！今は柱たちで麻雀をしてるの！みんなこれからを祈って運を見定めているの！」

「あら、炭治郎くんは麻雀なんて知らないですよ。それにここにいる柱たちの名前と顔を覚えるにはいい機会ですね」

そう言われて俺はさとりさんの横に座った。

「さとりさん、麻雀ってなんですか？」

「麻雀は最近清から入ってきた遊びでこれで柱たちは次の麻雀をどこかの屋敷でやるかを決めるんです」

面白そうな遊びだと思った。だが見る限り4人で遊ぶもの、つまりいつも3人で遊ぶ俺たちにはあまり合わない遊びだ。

「はい、じゃあ皆さん、今回は蝶屋敷にお集まりありがとうございます。半年に一度の柱合会議お疲れ様です。皆さんとこうして無事会議を終えられたこと、これほど喜ばしいことはありません。ですが、やはりこの徹夜麻雀会で皆さんにもゆつくりと楽しんでいただき、一度気を抜くのも大切です。ですので今回の麻雀大会を開催します。皆さんお楽しみください」

しのぶさんがそう言って大会の開始を宣言すると皆がいつせいにくじを引く。

「柱の中で参加しないのは岩柱・悲鳴嶼行冥さん、霞柱・時透無一郎さん、そしてイカサマの全てを見張る私、心柱・古明地さとりよ」

さとりさんはそう教えてくれた。

くじを引いたらそのくじを見て各々が卓に着く

壹卓

蟲柱・胡蝶しのぶ

炎柱・煉獄杏寿郎

水柱・富岡義勇
月柱・八意永琳

式卓

音柱・宇髄天元

蛇柱・伊黒小芭内

恋柱・甘露寺蜜璃

風柱・不死川実弥

この8人で麻雀が始まった。

壹卓

煉獄さんはあまり表情を変えていないが、

煉獄さんはあまり得意じゃないのか良くあがられる。

それもそのはず、しのぶさんがかなりの麻雀強者だった。

そしてこの場にはもう1人危険人物がいた。

それが富岡義勇。彼としのぶさんは前回の徹夜麻雀では決勝にま

で上がった2人だ。

そうさとりさんから教えられた。

やはり強い。

まさにふたりの攻防戦とでも言うべきか。

点の取り合いが凄まじい。

何度も煉獄さんと八意さんの点は尽き。

そうして終わる。

やはり結果はしのぶさんが1位、義勇さんが2位で通過した。

式卓

この麻雀大会を初めて企画したのは宇髄さん。

おそらくこの麻雀がいちばん得意な人だと思った。

だが実際には違った。

派手に役を作ろうとして振り込むことが多い。

それになんか甘露寺さんと伊黒さんは仲が良さそうな感じでやっている。

それに何故か甘露寺さんの方が点が上。
不死川さんは甘露寺さんと伊黒さんの合わせ技。

いや、伊黒さんが全力で点を搾り取り、そして甘露寺さんに点を振り込む。

そんな感じを続けている。

おそらく式卓で1番強いのは伊黒さんだ。

こうして甘露寺さんが1位、2位は伊黒さんという結果となった。

決勝は4半荘で行われる。

それぞれが半荘ごとに席を変える。

そしてその間俺は、さとりにさんに渡された柱の顔と名前の書かれた本を渡される。

さとりさん曰く隊士が育たないのは柱の名前と顔を覚えられないことにある。ならば今7人が蝶屋敷にいるこの時こそ病室に帰ったらみんな覚えて合いするように。

そう言われて俺はずーつと本を呼んで覚えるよう読み込む。

決勝戦

4回戦目南3局

「あら、そういえばもし私が勝てばこれで3連覇ですね。」

しのぶさんは他を煽る。

「前はしてやられたが、今回は絶対に勝つ」

伊黒さんは煽り返す。

(しのぶさん、強いわ、私も強くなりたい。そして伊黒さんをそれに対して抗する姿。カツコイイわ)

甘露寺さんは2人に憧れの目を出していた。

そしてその煽り合いを気にも触れずただ黙々としている義勇さん。そうしているとしのぶさんがほくそ笑む。

「ツモ、立直、三色同順、ドラはないですね。ということで2000—4000です」

「何！これでは俺が3位じゃないか」

伊黒さんは焦る。

「これで私は1位も貰ったも同然ですね」

そして始まる南4局 オーラス

親は富岡さんだ。

そして配牌される。

「私、1位取れるかな？」

「大丈夫だ、満貫を胡蝶にぶつければ勝てる」

2人がそう言っていると突然義勇さんが立ち上がる。

「ちよつと、どういうこと！立ち上がるなんて失礼ですよ」

すると、義勇さんは牌を倒してそのまま立ち去る。

「これで、いいだろ。もう終わったことだからな」

その牌を見た瞬間に3人は驚きそれにみんなが集まる。

「て…天和…あの人、もしかして次死ぬつもりですか？」

「古明地！これはイカサマじゃないだろうな」

さとりさんは震えながら言う。

「富岡さんは最初から最後までヒラで打ってたんですよ。それにあの人は、一回もイカサマを使わない人ですよ。それでこれを出すなんて…」

俺はみんなが驚いているのがさっぱりわからなかった。

こうして俺はさとりさんのくれた本を持ち病室に戻った。

翌日、このことを善逸に話すと、

「やっぱ柱って綺麗ごとばかりじゃないんだな。俺も昔やったけど散々だったよ。勝ち過ぎだ！とか客から巻き上げすぎだ！とか、俺鉄火場育ちだから賭け事に関しては結構知ってるからな。俺に賭け事持ちかけたら痛い目見るよ」

話した相手を間違えたこと、それと自分の無知を反省する俺であった。

機能回復訓練と強さの秘密

「だいぶ、良くなってきましたね。ではそろそろ機能回復訓練に入りましょうか」

「機能回復訓練ですか。」

蝶屋敷に入院して2週間が経過し、怪我はほぼ治りかけでそろそろ体も鈍ってきたころ、しのぶさんから提案された。

その訓練はまさに俺の鈍りきった体を元に戻すにはかなりきつい訓練だった。

「はい、じゃあまずは、寝たきりで硬くなった身体をほぐします。」

これがかなり痛い。隣の伊之助は悲鳴をあげて涙目になっている。「いてててててて…何すんじゃこら！」

伊之助はあまりに硬くなっていったのか今までのような柔軟性は欠片もなかった。鼓屋敷の時の隙間抜けをするなどの軟体はどこへやら。

そんな俺もかなり鈍りきっていたので股や背中がかなり痛い。

「次に反射訓練、湯呑みの中には薬湯や苦茶が入っています。お互いにそれを掛け合うのですが、湯呑みを持ち上げる前に、相手から湯呑みを抑えられた場合は、湯呑みを動かさせません。」

相手が強すぎるのか、俺が鈍りきっているのか、おそらく後者だろうがなかなかカナヲや咲夜は強い。俺と伊之助と妖夢は1回もかけることが出来ずにびしょ濡れになる。

「最後は全身訓練です。端的に言えば鬼ごっこですが、私アオイ、そして鈴仙、咲夜、カナヲが相手です。」

なかなか捕まらない。しかもそうやって何度触れようとしても上手くかわされるばかり、結局、アオイさんしか捕まえることしか出来なかった。

これを3日遅れで入った善逸は最初は天国のようなとこだと言っていたが、1週間後にカナヲや咲夜に叩きのめされたのか、不貞腐れていた。

そして伊之助と善逸はしばらく訓練場に来なかった。

「お疲れ様でした…」

「お疲れ様でした…」

妖夢と俺はそれでも訓練を続けたがカナヲと咲夜には髪1本たりとも触れない。何があるんだろう。

「炭治郎さん、妖夢さん」

考え込んで気が付かなかった。

3人の小さな看護師さんが声をかけていた。

「あの…お疲れ様です。手拭いを…」

渡された俺たちは喜んで汗を拭いていると3人は説明をする。

「お二方は、全集中の呼吸を四六時中やっておられますか？」

ん？…どういうこと？3人は何を言ってるの？…って戸惑う。

「朝も昼も夜も、寝ている間も全集中の呼吸をしますか？」

「やってないです…やったことないです。そんなことできるの？」

「もしかして、私が最近、うるさい蚊を寝ながら叩き落としているのか？」

「それに近いです。それができると出来ないのでは天地程の差が出るそうです」

「全集中の呼吸は少し使うだけでもかなりきついんだが…それを四六時中か…」

「私も…持つて今のところ6時間が限界かな、辛いから2時間余計に寝ちやうし」

それを言われて差を感じた。俺、もしかして抜かれた？しかも同期の妖夢に。

「できる方々は既にいらつしやいます。柱の皆さんやカナヲさん、咲夜さん、水柱の所の智溜乃さん、霞柱の所のこいしさん、風柱の所の文さん、恋柱の所のアリスさん、その他にも甲乙の位の方の皆さんも」

「そんなにいるの。なら俺もやってみるよ」

「私も、全力で会得、頑張ります！」

こうして俺と妖夢は特訓することにした。

しかし…

「全集中の呼吸…全然出来ない！」

3分くらいが限界だ。それを越えようとする、死にそうになる。肺も耳もあちこちが痛む。

これじゃダメだ。こんな調子じゃ。困った時は基本に戻れ。

そうして翌日には5分を超えた。走り込みや息止め訓練。それをやったけどこれじゃ短すぎる。

あの妖夢はすでに9時間を超えた。負けられない。気を引き締めながら自分を鼓舞する。

そして休んでいると、3人の看護師さんが来る。

「瓢箪を吹く?」

「そうです。カナヲさんに稽古をつける時しのぶ様はよく瓢箪を吹かせていました。」

もしかしてそれが訓練方法?音でも鳴らしていたのかな?

「もしかして楽器みたいに吹くとか?」

「いいえ、瓢箪を吹き込んで破裂させました」

「へえー」

ん?破裂?え?破裂ってどういうこと?

「え?この硬いのを?」

「はい、しかもこの瓢箪は特殊ですから通常の瓢箪よりも2倍以上頑丈です。」

そんな硬いのをあんな華奢な女の子が!?

「だんだんと瓢箪を大きくしていくみたいです。ちなみに今カナヲさんが破裂させている瓢箪をお持ちしますね」

3人がかりで持ってきた瓢箪は大きかった。大きさは俺の背丈くらいある。

「あつちなみに妖夢さんはこの大きさです。だいたい3尺くらいのです」

決めた。俺は妖夢に負けないように頑張ろう!

善逸は現実逃避し、伊之助は不貞腐れてる。これが妖夢と同期というのはどうなんだろう?お前ら頑張る気は無いのか?落ちこぼれ

になっても知らないよ？

そうやって俺は屋敷の周りを全力で駆け回り、鱗滝さんの教えを思い出しつつ訓練した。そうして何とか2日間で全集中の呼吸は2時間まで伸びた。一方の妖夢はすでに半日まで来ている。負けてられない。

そうして10日後、かなり体力は戻ってきた。

以前よりも随分と走り込めるし肺が強くなってきたぞ。いい感じ。

瞑想は集中力が上がる。鱗滝さんも言ってた。鱗滝さんも…

あれ、鋼鉄塚さん？

(よくも折ったな！俺の刀を！)

すみません。今刀を打ち直してもらってるけど、ホントに申し訳ないな…

集中だ集中！呼吸に集中！

すると横にしのぶさんがいた。しかも近い。

頑張ってますね。お友達二人はどこかへ言ってしまったのに。1人で寂しくないですか？

「いえ、できるようになったらやり方を教えてあげるので！それに、妖夢には負けられませんし」

そういうとしのぶさんは微笑む。

「君は心が綺麗ですね」

褒められた。嬉しくなる。でも気になったこともあるし聞いてみる。

「あの、どうして俺たちをここへ連れてきてくれたんですか？」

そういうとしのぶさんは語り出した。

「禰豆子さんの存在は公認となりましたし、君たちは怪我も酷かったですしね。それから君には私の夢を託そうと思って」

「夢？」

「鬼と仲良くする夢です。きっと君なら出来ますからね」

そう言われるがしのぶさんからはそうとは思えない臭いがする。

「怒ってますか？なんだかいつも怒ってる匂いがして…ずっと笑顔だけ」

しのぶさんは凶星を指されたような顔をする。そうして話し出す。「そう…そうですね。私はいつも怒っているのかもしれない。鬼に最愛の姉を惨殺された時から、鬼に大切な人を奪われた人々の涙を見る度に、絶望の叫びを聞く度に、私の中には怒りが蓄積され続け膨らんでいく。体のいちばん深いところにどうしようもない嫌悪感がある。他の柱たちもきつと似たようなものです。まあ今回彼らも人を喰ったことがない禰豆子さんを直接見て気配を覚えたでしょうし、お館様の意向もあり誰も手出しすることは無いと思いますが」

そう言うとなにか深いものを思い出すように俯く。

「私の姉も君のように優しい人だった。鬼に同情していた。自分が死ぬ間際ですら鬼を哀れんでいました。私はそんなふうには思えなかった。人を殺しておいて可哀想？そんな馬鹿な話は無いです。でもそれが姉の想いだったなら私が継がなければ、哀れな鬼を斬らなくて済む方法があるなら考え続けなければ、姉が好きだと言ってくれた笑顔を絶やすことなく。だけど少し…疲れまして…」

それを聞くと悲しくなる。

「鬼は嘘ばかり言う。自分の保身のため、理性も無くし、剥き出しの本能のまま人を殺す。炭治郎君頑張ってくださいね。同期の禰豆子さんを守り抜いてね。自分の代わりに君が頑張ってくれていると思うと私は安心する。気持ちが楽になる。」

しのぶさんのことを聞き俺も頑張ろうと思った。

禰豆子は守る。何としても。

「全集中の呼吸が止まっていますよ。」

そう言われて、また集中する。

そんな時だった、

「胡蝶様！永遠屋敷の近くで鬼が現れました！その鬼はこちらに向かっております。」

「なんですか。この近くに鬼ですって！炭治郎君、全集中の呼吸、少し長めに使う特別訓練として私と来てください」

鬼が現れたしかもこの近くに鬼なんて、

そう思った俺はしのぶさんと鬼のいる所へ向かった。

酒の臭いと夢遊者

永遠亭への近くへと向かった俺としのぶさんは八意さんと合流する。

「この近くに鬼がいます。おそらく、かなりの強い方の」

そう聞くと俺は危険だと思った。まだ完治はしていない。

それに日輪刀もまだ打ち直しているところ。つまり俺が来たとしても足手まといにならないか。

考えれば考えるほど重圧が来る。

するとなにか変な臭いがする。

酒、しかもかなり強い臭い。

「酒をよこすえ。ヒック、酒はどこだ」

大きな声がある。でもなんか声が女の子みたいだ。

木の影から現れたのは大きな角を生やした長髪の女の子だった。

しかもかなり小さめである。

「こんな小さな女の子が鬼ですか。かわいいですね」

しのぶさんがそういうと鬼は感に触ったのか怒り出す。

「小さいって言うな」

そういうと木を根っこから引き抜きそして頭上へと持ち上げる。

こんな小さい体のどこにそんな力があるんだ。

「ハッハッハッ あたしはこんなにも強いんだ！」

そういうと木を思い切り投げ飛ばす。

すると他の木にあたり、その木が粉々になる。

「とんでもない鬼ですね。これは、もしかすると十二鬼月かもしれないません」

八意さんは危惧した。十二月月に屋敷を襲撃されれば多くの隊士が命を失う可能性もある。

さらに蝶屋敷は永遠屋敷と繋がってる。

そうなれば治療する場所も、薬を作る場所も失う。

八意さんは日輪刀を鞘から出す。

その刀身は青白かった。まるで月のような色の

八意さんは技を放つ。

月の呼吸。式の型 珠華ノ弄月

すると女の子に直撃した…かにみえた。

だが後ろの木々が砕けただけで鬼は無傷だった。

「あたしは強いんだぞ〜ヒック、そんなにや攻撃効かないよ〜」

しのぶさんと俺は驚いた。こんな奴がいるなんて。

こんな強さの鬼が存在するなんて。

「八意さんは柱の中でも2番目の強さを誇るんですよ。それなのに、効かないなんて」

俺も危険だと判断する。

八意さんは諦めずに何度も切りかかるが、攻撃が効かない。

それに、酒臭い。

数分間戦う頃には八意さんも技を出しすぎて疲弊している。

すると、鬼は髪をかきあげる。その目には下弦の陸が書かれていた。

「あたし、まだ十二鬼月になって数日しか経ってないけど〜ヒック、強いんだからね！」

十二鬼月、しかも技が効かない。

鬼は指を鳴らした。

するとかなり離れていたはずの八意さんとの間合いが一気に詰まる。

「そーれー！」

「ぐっ」

八意さんは思いつきり腹を殴られた。

そして倒れ込みむせる。

しのぶさんも怒ったのか。

技を繰り出す。

蜂牙ノ舞。 真靡き

「ほう、その技はたしかにすごいのお」

鬼は片手で止めていた。

さらに振り払う。

しのぶさんはそのまま地面へと転がされた。

「ハッハッハッ あたしは力が強いんじゃない」

俺は考える。なにかあるはずだ。あの鬼の血鬼術、

なにか、ん、そういうえば、鬼が避けた時や技をとめた時、酒の臭いが圧倒的に強くなる。もしや、

「しのぶさん！八意さん！そいつは血鬼術を出す時に酒の臭いが強くなります！臭いを！よく嗅いでください！」

「臭い。ですか、じゃあそれを見極めればいいんですね」

「了解、それが分かればこっちのもんよ！」

少しずつ鬼の方は押されていく。

やはり酒の臭い。それがあの鬼の血鬼術を出す瞬間だ。

そうして戦っていると、屋敷の方から走ってくる人がいる。

「おーい、万次郎！」

「伊之助！それに妖夢！なんでこっちに来たんだ！」

「ああさつきからあの新達が見えなくてなあ」

「突然気が倒れた音がしたすぐあとに病室から消えたんですよ！」

2人の聞いたことに驚いた。こんな状況で、善逸が病室から突然消えた。

何があつたのか？もしかして怯えて逃げ出した？それとも隠れたのか？

そう思っている時に突然、凄まじい技を感じた。

後ろを振り返ると、そこには目を瞑りながら刀を携え構える善逸の

姿があつた。

雷の呼吸。壺の型 霹靂一閃 二連

技を出し終えた時。鬼の角を一本斬り落としていた。

角を落とされた鬼は一瞬止まり、そして怒る。

「よくもあたしの大事な角を！許さぬ許さぬ許さぬ！」

鬼は間合いを詰めるために指を鳴らそうとするも。それよりも早く善逸は技を出す。

雷の呼吸。漆の型 大放雷

技が放たれると思いきり鬼は傷だらけになる。

善逸は眠ると途端に強くなる。

おそらくこれもそれが現れた結果だろう。

「炭治郎くん。彼、ものすごく強いんですね。もしかして彼がこの前の最終選別の優秀合格者ですか？」

「なかなかつよいわね。あの速さは、下手すればしのぶさんの突きよりも速いかも」

そう言われると何となくわかる。

何せ善逸は、あの最終選別で”2番目に鬼を倒した数が多い”のだから

鬼は善逸の参戦により俺たちはどんどん優勢になる。

十二鬼月でも弱い者もいる。そう思ってた。

そんな時に鬼は言う。

「ああーもう面倒じゃ、ならばこうなるしかないのお」

血鬼術。大伸。

鬼は大きく腕を空へ伸ばすとどんどん大きくなっていった。

「ははは、人が塵のようだな。お前たちにあたしの首は取れんだろうな！」

そしてあたしに殺されるのじゃ！その鬼の名前をお前たちは死ぬ

間際まで覚えておくがいい！あたしの名前は萃香じゃ！」

そう名乗ると周りの木々を蹴り倒しながら進んで行く。

「大きいですねーでもそれだとみんな的ですよー！」

しのぶさんと八意さんは技を繰り返す。

すると足元がドンドン傷だらけになっていく。

しかし鬼はあまり気にしないかのように進んでいく。

そんな時、俺は来る前に持ってきた代借の日輪刀で技を出す。

だが硬い。刃が通らない。

焦る俺に対ししのぶさんが声をかける。

「炭治郎くん。先程の全集中の呼吸で斬ってみてください」

そう言われて俺は技を出す。

全集中 水の呼吸。弐の型 改 横水車

足は斬られて鬼は膝をつく。

そして息を整える。

全集中の呼吸を使ったが、あまり疲れなくなっている。

これが四六時中出来るようになればより強くなれる。

そう実感した。

善逸も霹靂一閃でもう片方の足を切り落とす。

回復が追いつく前にと八意さんは鬼に近づく。

「先程の言葉、そっくりそのまま返します」

こうして八意さんは鬼の頸を斬り落とした。

そうだ、俺も珠世さんに言われた小刀をそっと鬼の体に刺す。

血は吸われていく。

するとしのぶさんがいきなり近づいてくる。

「炭治郎くん。まだ隠してることってありませんか？その小刀はどこでてにいれましたか。」

「竈門くん、言わないのならお館さまのところにも聞きに行きますよ」

やばい、あまり言わないようにしなきゃと思ったが言わなければ全てが崩れる。

ならば言うしかない。

「この前の、柱合裁判の時、覚えてますか？あの時、珠世さんってお館さまが言ったのを」

「はい、覚えてます。お館さまが何か不思議なことをおっしゃっていましたね」

「その人は俺の協力者なんです。禰豆子を人間に戻すための重要な人なんです。2ヶ月前、浅草の任務の時に助けてくれた人なんです。それに、鬼舞辻の血の濃い鬼から血を採取すれば、人間に戻る方法が見つけられるかもしれぬ。そう言われました」

しのぶさんと八意さんは衝撃を受けていた。

「まさか炭治郎くんは本気で禰豆子さんを人間に戻すことを考えていたなんて、それに、その協力者がいると言うことは、助けられない選択肢なんてありません。私たちも協力します。一緒に禰豆子さんを人間

に戻す方法を探しましょう」

「鬼を人間に戻す。その方法が見つかるのであれば、もしかすると私たちが刃を振るわずに救うこともできます。私もお助けします」

こうしてこの戦いでさらに協力者が増えた。

珠世さんも協力者が増えるとより心強い。

そう考えた。

翌日、しのぶさんと八意さんは俺に対して色々話す機会が増えた。

記憶がほぼなかった善逸は羨ましい目で見ていた。

それを伊之助と妖夢は善逸が全力で襲うのを止めながら。

全集中・常中と日輪刀

萃香戦の2日後、伊之助はあれを見て、俺と妖夢と3人で訓練をするようになった。

「ぜってえ、負けるもんか！俺は、落ちこぼれるような奴じゃねえ！」

伊之助は、教えるのが得意な妖夢の指導により、飛躍的に成長した。俺が教えるよりも伊之助は妖夢が合っているようだ。

そして善逸はというと、

「炭治郎く、俺はどうすればいいの〜」

一人だけ訓練に参加していないせいですつと病室で膝を抱えていた。

「善逸、そろそろ訓練に参加しないと強くなれないぞー！」

「努力は嫌いなんだよ〜、俺は努力なんてする強さもないし、もうダメなんだよ〜」

完全にいじけていた。ここまで拗れていたとは、

「あ、いた、善逸くん」

八意さんが善逸がいじけてるのを感じて病室まで来てくれた。

「善逸くん、炭治郎くんたちがやってる訓練が何かかわかればいいんですね」

「そうだけどさあ、炭治郎の説明が下手でわかんないんだよ〜」

「じゃあ私が教えますね。炭治郎くんたちが会得しようとしているのは全集中・常中という技です。全集中の呼吸を四六時中やり続けることにより基礎体力がぐ〜ぐ〜んと上がります。」

「へえ、そんなこと、俺なんてできないよ。」

「君ならできますよ。この前の萃香戦、あなた全集中・常中の基礎、しっかりできてますよ。あとはそれを伸ばすだけですよ」

「え、俺、出来たの？そんな、まさか。」

「善逸くん、一番期待してますよ！あなたなら本当に全集中・常中！」
そういうと八意さんは善逸を抱きしめる。

善逸は喜び、大奮起。

それからというものの伊之助や俺や妖夢でも十日以上もかかった全

集中・常中を、善逸は驚きの6日で会得してしまった。

これを見た妖夢や伊之助も流石に危機を感じたのか、3人で全力の訓練を行う。

そして。

「ふうっ、フーーーーー」

バキッ パーーーーン

「やった！割れたぞ！一番大きな瓢箪が！」

「俺も割れたぞ！俺も強いんだ」

「私もここまで呼吸ができるようになるなんて、強くなったなあ。」

3人は5尺半の瓢箪を割れた。善逸に1日遅れで。

今日は、いける！

見えるぞ。カナヲの動きが！

カナヲが翻ろうとした瞬間、俺は手をつかむ。

ガチッ

「そこまで！炭治郎さんの勝ち」

隙を掴むことができた。

次に反射訓練、カナヲが一番得意なことだ。

カナヲに負けたくない。全集中の呼吸を切らすな！

湯呑みを掴もうとするカナヲの手を押さえ、そして、

湯呑みを掴む！

取れた！

掛けようと思う。しかし理性が働く。

(この薬湯、本当臭いんだよなあ、納豆とかにんにくとかすり潰されて
いるし)

掛けちゃいけない。ならばこうするしかない。

トンッ

カナヲの頭の上に湯呑みを乗せた。

するとカナヲは何が起こったのかわからずキョトンとする。

「やりましたねー！ついにカナヲ様に勝ちましたねー！」

喜びのあまり俺は3人の看護師とともに舞をした。

それからというもの、カナヲを倒す同期が続々と増える。

2番目に妖夢、3番目に善逸、そして伊之助は最後に勝った。
そんな日だった。

鴉から伝言が来る。

「炭治郎、伊之助、妖夢、3人の刀が完成し、ただいま向かっている。
すぐに待ち合わせよ」

それを聞きつけた俺は伊之助や妖夢にも伝える。

そして3人で入り口まで行く。

鋼鐵塚さんの臭いがする。

俺は入り口を飛び出したら3人の刀鍛冶が見える。

「おーいおーい！鋼鐵塚さーん！ご無沙汰してます！お元気でしたか
…」

突然襲いかかってきた。しかも包丁を構えながら。

俺はすかさず避ける。

「はっ…鋼鐵塚さ…」

「よくも折ったな！よくもよくもおおお！」

「すみません！でも本当にあの…俺も本当に死にそうだったし…相手
も十二鬼月ですごく強くって…」

「違うな！関係あるもんかお前が悪い！全部お前のせい！お前が貧弱
だから刀が折れたんだ！そうじゃなきや俺の刀が折れるもんか！」

そう言いながら俺のことを指で突き刺しながら散々文句を垂れて
いた。

そして泣きながら殺してやると叫びながら30分間、鋼鐵塚さんが
八意さんに転ばされるまで追い回された。

「まあ鋼鐵塚さんは情熱的な人ですからね。人一倍刀を愛しているらっ
しやるお方です。あ、私は鉄穴森ともうします。そしてこちらは」

「私は鉄河城にとりです。よろしくお願いします。」

「彼女は鬼殺隊の隊士なんです、私の刀に魅入られてしまい、弟子入
りしてきたんです。そして、今では刀鍛冶の里では4番目に刀を作っ
ている立派な刀鍛冶です。そして彼女は妖夢殿の、そして私は伊之助
殿の刀を打たせて頂きました。戦いのお役に立てれば幸いです」

伊之助と妖夢は刀を持つと色が変わる。

「ああ綺麗ですね。妖夢さんの刀は何も色のつかない真っ白、素晴らしい心を持ってますね。そして伊之助さんは藍鼠色が鈍く光る。渋い色だ。刀らしい良い色だ。」

「よかったな、伊之助の刀は刃こぼれが酷かったから…」

「握り心地はどうでしょうか、実は私二刀流の方に刀を作るのが初めてです…」

伊之助はふと立ち上がり、庭の池のところに行く。

そして、

カン！カン！カン！

突然刀を岩に打ち付け出した！これには鉄穴森さんや鉄河城さんも悲鳴を上げる。

「ぶっ殺してやる！この糞餓鬼が！何しとるんじやオラ！」

「師匠の刀を刃こぼれさすとか地獄でも見てえのかゴミが！」

二人の刀鍛冶を妖夢と俺で抑えるしか無かった。

そんな伊之助はギザギザな刀になったことに満足していた。

3人が帰るとき、俺と妖夢はずっと謝り続けるしかなかった。

新たなる任務と4人の旅立ち

「はい、あーっーん」

「あーっー」

「はい、顎は問題なさそうですね。はい、口を閉じてください」

俺は口を閉じる。

「診察は以上です。体の方はもう大丈夫です。安心して任務に邁進してください」

「はい、ありがとうございます。あ、そうだしのぶさん。最後に一つ聞きたいことがあって」

「なんででしょう」

「ヒノカミ神楽って聞いたことありますか？」

「ありません」

「じゃあ火の呼吸とかは」

「ありません」

ないようだったので自分の過去の話をいろいろとしのぶさんに話した。

「なるほど、何故竈門君のお父さんは火の呼吸を使っていた。私でわかることであれば、炎の呼吸”はありますが、“火の呼吸”ではないということ」

「同じではないんですか？」

「炎柱の煉獄さん曰く、炎の呼吸は火の呼吸とは呼んではならない。そう言われました。ですが、煉獄さんは生憎任務に出ていますし」

煉獄さんは任務に出てるのか、ならば次の機会にでも聞いてみるか。

「なるほど、ありがとうございます。では失礼します」

診察室を出ると廊下の曲がり角からものすごい大きい人が来た。

避けようとするもののぶつかってこられる。

しかし、その人はどこかで見たことのあるような人だった。

最終選別の時の…不死川玄弥！

短期間ですぐく体格に恵まれていると羨む。彼は最終選別の時、俺より少し背が低かったのに。そして何故ここに？

でもなんだろう…匂いが、なんか違うんだよなあ…」

そう違和感を思いながら病室に戻る。

「無限列車の被害拡大！乗客50人以上が行方不明！竈門炭治郎、我妻善逸、嘴平伊之助、魂魄妖夢の4名は、現地の煉獄杏寿郎と合流せよ！場所は、西の東京駅！東京駅に向かえ！」

鎧烏が任務を送ってきた。次は東京駅。しかもさつき話に出た煉獄さんがいる。話が聞ける機会がこつちから来た。

それに俺はウズウズした。

「そうですね、もう行かれる。短い間でしたが同じ刻を共有できて良かったです。頑張ってください。お気をつけて！」

「忙しい中、俺たちの面倒を見てくれて本当にありがとうおかげでまた戦いに行けるよ」

「お礼など結構です。選別で運良く生き残っただけ、その後は鬼や同期の成長に恐ろしくて戦いに行けなくなっただけなので」

アオイさんはそう思うと布団を下ろしながら項垂れた。

「そんなの関係ないよ。俺を手助けしてくれたアオイさんはもう俺の一部だから、アオイさんの想いは俺が戦いの場に持っていくし、また怪我したら頼むねー」

そうやって俺は次の人にも挨拶しに行った。

縁側でたたずんでいる少女がいた。

「あ、いたいた！カナヲ！俺たち出発するよ！いろいろありがとう。」
「そういうと彼女はお金みたいなものを取り出し、上へと弾いた。
そして手の甲に乗せる。」

「師範の指示に従っただけなのでお礼に言われる筋合いは無いからさようなら」

喋ってくれた！久々に聞いたよカナヲの声。

「今投げたのは何？」

「さようなら」

「それ何？お金？」

「さよなら」

「表と裏って書いてあるね。なんで投げたの？あんなに回るんだね」
そういうと彼女は話す。

「指示されてないことはこれを投げて決める。今あなたと話すか話さないか決めた。話さないが表、話すが裏だった。裏が出たからあなたと話した。さよなら」

「なんで自分で決めないの？カナヲはどうしたかった？」

「どうでもいいの。全部どうでもいいから、自分で決められないの」

「この世にどうでもいいことなんてないと思うよ。きつとカナヲは心の声が小さいんだろうな。指示に従うのも大切なことだけど」

思いついた。カナヲはこれならわかってくれる。

「それ、貸してくれる？」

カナヲは戸惑いながら貸してくれた。

「ありがとう！よし、投げて決めよう！」

「何を？」

「カナヲはこれから、自分の心の声をよく聞くこと」

俺はお金を弾いた。高すぎて見えなくなりそうなくらい。

「表！表にしよう！表が出たら！カナヲは心のままに生きる」

高すぎる上に風が吹いて見失う。

でもすぐ見つけた。

ギリギリで掴む。

取れたことの方に喜ぶ。だが、表が裏かを俺も見えてなかった。

そしてカナヲの前にいき伏せていた手の甲を開ける。

「表…」

「表だー！」

思い切り喜びカナヲの手を掴む。

「頑張れ！人は心が原動力だから、心はどこまでも強くなれる！じゃ、またいつか！」

俺は立ち去ろうとする。そこにカナヲがこれをかける。

「なんで表を出せたの？」

「偶然だよ。それに裏が出て表が出るまで何度でも投げ続けよう」と

思ってたから」

カナヲはそのことに何か留まったかのような顔をした。

俺はお元気でと言い、その場から立ち去り、荷造りに戻った。

そして準備ができ、屋敷を立つ時、みんなが出迎えてくれた。

富岡さんや古明地さんも。

「今から出陣か」

「はい」

「全集中・常中、できるようになったみたいね！やるわ」

そう言つて古明地さんは俺たちの腹を拳で打ってきたが全員止めなかった。

「続けるといい」

「富岡さん、古明地さん、禰豆子のこと、ありがとうございます。命を懸けてくれてたなんて、俺知らなくて、どう感謝を伝えればいいか」

「礼なら仕事で返せばいい。俺たち鬼殺隊は鬼を討つ。それだけだ」

「あなた達には賭けてるんだからね！あなた達こそがあの鬼舞辻無惨を倒す、そしてこの永い永い戦いを終わらせるその素晴らしい逸材なんだからね。あと、お館様からの報告で、炭治郎、妖夢、善逸の3名は戊に昇格、伊之助は己に昇格、以上です。これからも精進するように！」

そう言つて二人は一瞬で立ち去った。

俺達もこれから東京駅という場所へと向かう。

待つててよ！煉獄さん！

十二鬼月会議録

大正四年 七月二日（金曜日）
午後七時十五分開会。

出席者

鬼舞辻無惨

無惨様の妻

黒死牟

童磨

勇儀

猗窩座

半天狗

玉壺

堕姫

妓夫太郎

魘夢

零余子

鳴女

今回は十二鬼月の皆様にお集まりいただきありがとうございます。
無惨

頭を垂れて蹲え。 平伏せよ。

下弦の陸、赤蛮奇、下弦の伍、累、新下弦の陸、萃香が殺された。
なにゆえお前たちは弱いのか。 問いたいものだな。

二年前に大きく改革を執行し、より強くなったのに、

お前らはなぜ、そこまで弱い。

???

あら、あなたも相当追い詰められているようね。私の手下も合わせり、最良の状態であるにもかかわらずこうなる。それはもしかすると、候補が弱い、という事なのかもね。

無惨

そうだな。ここらで大きく強くしたい。そうして鬼が強くなり続けるためにも、青い彼岸花を探さなければならぬ。そのためにも鬼の数は増やさなければならぬ。

???

わかってるわ。それに鬼殺隊も今や十分な戦力をかき集めてしかも短期間に3人も殺されたわ。そりや焦るわね。でも、ここにいる十二鬼月も結構倒して強くなってる。それに、今では鬼殺隊の人数全盛期の8割まで減ったわ。それに累も赤菴奇も頑張つて250人以上殺したんだから、そこは評価するべきよ。

無惨

そうだな。たしかにあの二人はやってくれた。だが、死んでは元も子もない。

それに、十二鬼月の候補も死に、今では候補に上がるものさえない状況、それをどう打破すればいい？

黒死牟

無惨様、先程ですが有望な物を見つけ、そしてこちらに連れてきております。彼は鬼殺隊の上位格であり階級は丙まで来たものです。

さらに、私と同じ呼吸法を使う者です。

どうか新たな十二鬼月の1人として迎え入れては貰えないでしょうか。

無惨

ほう、その者は強そうな者だな。名はなんという。

黒死牟

稲庭獺岳というものです。

彼は雷の呼吸の使い手です。

連れてきましたので、どうかよろしくお願いします。

無惨

では、ここで、新たに十二鬼月の加入を許可しよう。

黒死牟

ありがとうございます。

こちらの男です。今は目を隠して口も封じております。

彼には厳しいですがしばらくは痛みに耐えてもらいましょう。

無惨

では執行する。それと、こいつには黒死牟、お前が指導するように。

黒死牟

はい、無惨様。

???

それと童磨、最近の万世極楽教の調子はどう？

最近信者が増えてお金も集まりやすくなったでしょ。

今は千人を超えたと。

童磨

ありがとうございます。

あなた様のおかげで信者も集まり、鬼たちの食物には困らなくなりました。感謝します。

???

そうねえ、じゃあ今度は二千人まで増やしちゃいませよ。二千人もいればその中からも強い鬼が出てくるかもしれない。それをあなたにかけてるの。だからこそ頑張りなさい。

童磨

はい、ありがとうございます。

無惨

十二鬼月も二年前の血戦から随分と強化されたものだし、膿出しもすんだ。私たちこそがこの世界の覇者となるためにも、鬼殺隊は邪魔である。

お前たち、全力で鬼殺隊を倒し続けろ。

十二鬼月一同

無惨様、ありがたき幸せ。

???

じゃあ、これからもよろしくね！

じゃ。

午後八時三十五分散会。

「無惨様、私よりもあの人を選んでしまうとは、私は悲しいです。私を愛してくれた無惨様はどこへ行ってしまったのでしょうか」

鳴女は泣きながら議事録をまとめていた。

その鳴女の姿は誰も見ていなかった。

無限列車編

うな重と土地の主

夕方も近くなるころ。

「俺たち4人は蝶屋敷を出た時におにぎりを貰い忘れ、へとへとになっっていた。」

「こんなに遠いとは思わなかった」

「炭治郎が道間違えて上野に行っちゃうからさあ」

「たしかにそうですけど善逸さんも最初浅草に寄ってましたよね。」

「え、俺も悪いの?」

「腹減った…飯はどこだ」

東京駅に向かうために上野から南に向かい

日本橋まで来た。

すると屋台があった。

「何、あれ!うなぎ!やった!うな重食べれる」

善逸は大喜びで屋台へと向かう。

「うなぎか…高いんだよなあ」

俺は少し迷う。

「飯が食えるならなんでもいい!」

「そうですね、ご飯が食べられるならなんでもいいですね」

伊之助や妖夢も屋台へと向かうので俺も渋々向かう。

「いらっしやい、いいウナギ入ってるよ!あ、」

「久しぶり!浅草で鶏そば屋やってた時のお姉さん」

「炭治郎、もしかして会ったことあるの?」

「ああ、浅草で任務があった時にこの人が働いている屋台で食べてたら鬼舞辻無惨が通りかかったんだよ。その時の屋台の人」

「まあ、今は独立してうなぎ屋ですし、師匠は今横浜の方にいますからね」

それからというものの4人でうなぎを食べながら俺たちは色々と語り合う。

「へえ、うなぎ屋をやっているしもうそろそろ土用の丑の日があるから稼ぎ時だと」

「そうなんですよ、それに結構儲かっちゃって、出前屋台とかも始めようと思ってるんですよ。そうだなあ吉原とかそっちの方でも回るかもしれない」

「吉原か、遊女とかお金もってるからね」

「善逸はそっちの方に行きたがってましたね」

「え、俺綺麗な人見たかっただけだよ？」

「私みたいな女がいながらなぜ興奮しないのですか？」

「え、がきつだし、ガミガミ言うし、面倒いし」

「善逸、女の子に向かって失礼だよ。その言い方は特に」

「うめえうめえ、あんなヌルヌルしたやつがこんなうめえのになるなんて」

「伊之助！手づかみで食べるのは行儀悪い！」

「伊之助さん、箸の使い方とか習わなかったんですか？」

「俺は山の王だ！箸なんか使ったことねえ！」

こうして4人で食事を済ませたあとと会計を見る。

「180円か…かなり食べたなあ」

「いいだろ、美味しかったんだし」

180円はかなりの大金だった、昇級してなかったら払えなかったかも。

そう思いながら、俺たちは東京駅へと向かった。

「すげえ！なんだよあれ！人が多い！こんな多くいるのか」

「東京駅は去年にできたばかりの新しい駅だからね。それに、ここから俺たちは東海道本線ってのに乗るんだよ」

「善逸、東京駅ってやっぱり東京だからすごい駅なのか？」

「そうだよ。国の偉い人がここは国の偉い人が凱旋したとか何とか」

東京駅の凄さを知った俺たちは都会の凄さに酔いそうになる。

善逸と妖夢は都会育ちだから酔わなかったが。

「なんだ！あの生き物は！こいつはあれだぜ！この土地の主…この土地を統べるものこの長さ、威圧感、間違いねえ。今は眠ってるようだ」

が油断するな！」

「これ、列車ですよ？生き物じゃないですし乗り物ですよ」

「シッ、落ち着け！まずは俺が1番に攻め込む」

「いや、攻め込まなくていいし、なんならこれ、切符あれば誰でも乗れるし」

「猪突猛進!!」

「待ってください！これは生き物じゃないです！」

「そうやってると遠くから人が向かってくる。」

「貴様ら何してる！」

俺たちを見るなり表情が変わる。

「あいつら刀持ってるぞ！警官だ！警官を呼べ！」

「やばいですよ！逃げましょう！」

「逃げろ〜」

しばらく逃げて、夜も近づき出す頃になり、

「伊之助のおかげで酷い目にあつたぞ。謝れ！」

「そうですよ、謝りなさい！それに私たち鬼殺隊は、政府公認の組織じゃないですからね。廃刀令で40年以上前から持って歩けないんですよ！ホントは」

「そうだよ、鬼がどうのこうの言ってもなかなか信じてもらえんし混乱するだろ」

「一生懸命頑張ってるのに…」

「まあ仕方ないですよ。とりあえず背中に隠しましょう。」

伊之助は背中に合わせて刀を立てる。だが隠れてない。

「丸見えだよ、服着ろ馬鹿」

「あと8分で出発ですよ、そろそろ急ぎましょう」

俺たちは急いで列車に乗り込んだ。

「ふう、何とか乗れた」

ジリリリリリリリリ

こうして俺たち4人の乗り込んだ列車は発車した。

この後この列車にとんでもないことが起きようとは…

入っていた。炎・水・月・風・岩・雷が基本の呼吸だ。他の呼吸はそれから枝分かれや合体してできたもの。霞は風からの派生、心は月からの派生、そして恋は炎と心の合体でできた呼吸だ。竈門少年、君の刀は何色だ！」

「俺は、黒です」

「黒刀か！それはきついな！黒刀の剣士が柱になったのを見たことがない！更にはどの系統を極めればいいのかもわからないと聞く！それに俺のところに来ればもう安心だ。存分に鍛えてあげよう！」

面倒見のいい人だなあ。この人、あの時の裁判とは印象が全く違う。

列車が止まる。

おそらく品川に着いたんだろう。

「この鉄道は特別急行でなあ、このまま行けば明日の朝には神戸まで行ける。次は横浜まで止まらない」

「へえ、詳しいですね」

「俺はこの列車に8日も乗り続けた！だからこの列車の止まる駅は全て覚えた！」

「え！じゃあ風呂とかは？雪隠とかは？」

「雪隠は8号車の方にある。風呂は、東京駅の近くの銭湯で済ませてきた！それに、この列車にのみ、鬼が出るという情報があつてな。いつ出るかも分からないしなかなか気が抜けぬ！」

善逸は焦り出す。

「嘘でしょ！鬼出るんですか！この列車！嫌ああああ！俺降りたい！」

「善逸！今回は煉獄さんの任務に手伝うんだぞ！そんなに慌てるな！」

「あのく私、これから熱海の方の任務なんですが大丈夫ですかね。」

咲夜さんが煉獄さんにきいてきた。

「咲夜殿は別任務の方だったな！今回の任務で鬼も討てば2つの任務もできて一石二鳥だな！」

「嫌——！俺咲夜さんの方の任務につきたかった」

「じゃあこの任務が終わったら私の方の手伝いもしてくださいね」
「ありがとう、助かるよ」

「切符：拝見致します」

パチッ

「拝見致しました：」

ん？なんだろう、あの車掌さんから嫌な臭いがする。

「炭治郎：なんか眠くなってきた」

「俺もだ：なんか眠い」

そう言われるとバタバタと人が眠りに落ちていく。

そして俺も、意識が落ちた。

「はっ！ここは！」

見慣れた景色だ。忘れもしない。もしま。

そうして俺は全力で走る。

そこには俺の住んでいた場所、それに俺の家族が生きている姿があつた。

「兄ちゃん、おかえり！」

「お兄ちゃん！また炭完売したんだ！すごい！」

俺は泣きながら抱きついた。

家族が、生きていた。嬉しいことは無い。

「それで急にお兄ちゃんが泣き出すからびっくりしちゃった。」

「炭治郎は無理しないで、今日は休みなさい」

「大袈裟だよ、平気だから、なんか悪い夢でも見てみたいだ」

…う！

「彌豆子は？どこいった？」

「山に山菜を取りに行ってる！」

「昼間なのに！大丈夫か！」

「何言ってるんだよお兄ちゃん」

「あ、ははは、そうかそれもそうだな」

「炭治郎、お風呂の準備するからお水汲んで来て」

「わかったよ！母さん、じゃあ川に行ってくるね」

…がう！

「なんだろう…あの箱、なんか見なかったか？」

「見てないよ」

違う！

「じゃあ行ってくるね！」

起きろ！これは夢だ！目覚めろ！現実じゃない！戦え！

そうだ、思い出した！俺は列車の中。今は眠っているだけだ。

「兄ちゃん！竹雄がお兄ちゃんのおかずばかり取ろうとする！」

だめだ！まだ目覚めてない！どうすれば出られる。夢だと気づけたのに！

どうすればいい！

すると突然、俺が燃え始め服装が一気に変わる。隊服だ。鬼殺隊の隊服だ。

そうだ、俺は、覚醒してる。いや、禰豆子の炎で、覚醒されかけている。

「お兄ちゃん、どうしたの？その格好」

「行かなきゃならないところがある。俺は、早く戻らないといけない。ごめんな」

俺は家を飛び出す。

「お兄ちゃん！山菜いっぱい取れたよ！」

禰豆子！でもこれは現実じゃない！

「炭治郎、どうしたの、何かおかしいわ」

ここに居たかった、振り返って戻りたい。本当ならずっとこうして暮らせていたはずだった。本当ならみんな今も元気で、禰豆子も日の光の中で、青空の下で、本当なら俺は今日もここで炭を焼いていた。刀なんて触ることもなかった。

でも、もう俺にはそんな未来は無い。戻ることなんて出来やしない。

ならば、俺はたった1人の妹、禰豆子を人間に戻すために、俺は明日に向かうしかない。

悲しいけど、もう一緒にはいられない。たくさんのありがとうとたくさんのごめんを思う。でも俺の家族はどんなときも心のそばにいてくれた。だから許してくれ。

俺は全力で走った。もう家族の幸せを見ることができないと思いつながら。

山の奥まで来た。でもいない。鬼がどこにもいない。臭いはするんだ。

でもなんだこれは…膜がかかっているようだ。どこからでも鬼の臭いがする。どうすれば目が覚める。

「炭治郎、刃を持って、斬るべきものはもうある」

そうだ！禰豆子の箱、背後に現れた父の言葉、それは俺自身の本能の警告、既に気づいているはずの手がかりを俺がわかっていないため別の姿を借りて警告した。

そうか、だが賭けるしかない。もし違ったら俺はここで死ぬ。取り返しがつかないかもしれない。

でもやるんだ！夢の死が現実の覚醒に繋がる。そう斬るべきものは、

俺自身の頸だ！

俺は気合を入れて首を斬り裂いた。

妖夢の記憶と戦う理由

私は小さい頃、不思議な子だとして育てられた。

生まれつき髪の毛が白いから？それともみんなに聞こえない声が聞こえるから？

それなのかわからないが私は友達がなかなかできなかつた。

髪の毛が白い

そんな私の両親は軍人だつた。

父は、とても厳しく、母も神経質だつた。

毎日毎日喧嘩ばかり、そんなのを見る。

そんな父は私が5歳の時、日露戦争で死んだ。

父親が死んだときは私は泣くきにもならなかつた。

それから私は喧嘩に明け暮れていった。

「はっ、私に勝とうなんて10年早いわ！」

「ちきしょう！覚えてろ！」

私は近所の子どもたちの中でも一番強くなつていた。

「ちよつと、はしたないからやめなさい！」

「いいでしょ、父さんが戦争で死んだのは弱かつたからでしょ？なら

私は父さんよりも強くなる！そして憎い敵国のやつを倒すんだ」

「あんたみたいな女は軍に入つても嫌われるわ。だから、あんたは女らしく優しくなりなさい」

母さんの言うことは絶対に信じたくなかつた。私は強くなりたい。

そう思つていた。しかし、そんな日も終わりを告げることになる。

7年前のあの夜、突然何か家に入り込んできた。

私は、その音に気が付き、家を逃げ出した。

母さんは私が逃げた直後、悲鳴を上げながら何かに襲われているのを聞いた。

翌日の夜、家に戻ると、母は無残な姿になり、近くには鬼がいた。

その鬼はあまりにも奇妙な姿をしていた。あまり思い出したくない。

私は逃げる。

それを鬼が追っかけてくる。

すると、数珠をつけた剣士が何かの武器をふるい、鬼をぐちやぐちやにする。

鬼はそのまま消え去り、そして剣士の人は私に言ってくれた。

「おう、母を失いながらも、その胆力を持つものよ。あなたは生きなさい。だが、今のままではまとも生きられぬ。預ける場所を紹介しよう。」

この場所へ向かうが良い。」

そう言っただけ渡された場所は霊園の近くの寺だった。

預けられた私はその剣士さんにすごく憧れた。

あの人のようになりたい。

そう思い私は預けられた寺で木刀を振るう日々だった。

そんなある日、霊園の手入れをしていると一人の女性が墓に拜んでいる。

その姿はゆったりとした服で桃色の髪をしている。それに背も高く、優しそうな人だった。

「あら、私に変なものついている?」

「いえ、なんでもありません。」

「あら、そう、ところでお嬢ちゃん、なんかちよつと変わってるね?」

「気にしないでください、私は髪の毛が白いからって白い目で見られるんですよ!」

「あらあら、洒落がお上手なんですね。フッフ、私も変わっているから、変わり者同士仲良くしましょう」

そう言った女性は、何やら変な雰囲気を出していた。

私にはそのときは全くわからなかった。

「妖夢! 女の子なんだから木刀など降らず女の子の遊びもしなさい!」

「うるさい! 私は強くなりたいたいんだ! 軍人になって父のようにもなりたいし、私を助けてくれた剣士のようにもなりたい。だから私は強くなるんだ」

そう言っただけ木刀を振り続けること5年。

私はかなり強い剣士になっていた。

そんなある日、道場を訪れたある剣士に決闘を申し込まれる。

そいつは私より弱そうな体をしていた。

だが、決闘した時、私は相手に圧倒される。

「こんなに非力な子のどこにその力があるの」

「剣の筋も全部見切れてるよ！甘い甘い！」

私は圧倒され続けボロボロになる。

「そこまで！」

決闘の審判があまりにもひどい様を見て止める。

私はボロボロになりながら相手に問う。

「どうすれば、そんな非力そうな体から、とんでもない力を出せるの？」

「あ、知らないの？呼吸だよ呼吸。呼吸法があるんだよ。」

「え、呼吸法、なにそれ」

私は呼吸法というものを知る剣士に教えを乞うことにした。

このときは私にとって今まででいちばんの屈辱だった。

一年が過ぎ、私は呼吸法を会得した。

だがその剣士からは見込みがないと言われ。結局まともに、技などは教えてくれなかった。

私は、悲しくなり、霊園の手入れを泣きながらしていると。

あの時の大きな女性が、墓に寄りかかっていた。

「やめてください、墓石が傾きます。」

「いいのよ、それに、私、あなたに伝えたいことがあるの」

「私、鬼殺隊って言うところにいるの。あなた、6年前に鬼に母親を殺されたんだって？あなたも私のところに入りたいとは思わない？」

いきなり鬼殺隊とかわからない。

なのでその人に色々と聞き続けた。

「なるほど、つまり鬼を討つための組織がある。そこは鬼に家族や大切な人を殺された。そんな人が集まるところか、でも私には大切な人なんていないですよ？」

「あなた、よく木刀を振っている時言ってるわね。父のような軍人になるために強くなるんだ！って」

「なんでそんなこと知ってるの？このこと知ってるの寺の住職の人くらいですよ？」

「フフフ、私は知ってるのよ。それにあなたのお父さん、実は戦争で死んだんじゃないとしたらどう思う？」

「え、どういふことですか？父さんは戦争で亡くなったんじゃないんですか？」

衝撃の事実を知らされた私は食うように聞く。

「戦争で亡くなったんじゃないならなにで亡くなったんですか？」

「それはね、あなたのお父さんは、日露戦争から帰ってくる途中、新潟で鬼に食べられちゃったのよ。それに、私もその場所にいたんだから」

「どういふことですか？鬼に喰われた。しかもあなたはその場所にいた？私そんなこと聞かされてないですよ？」

「聞かされたもなにもあなたのお父さんが日露戦争で死んだって話したの、私だし。」

色々収集がつかなかった。父は戦死ではなく鬼に喰われた。それに、その場にこの女性は居合わせていた。何がなんだかわからない。

「私、あなたみたい強い人こそ鬼殺隊に入るべきよ。あなたみたいな逸材がいれば日本の鬼もいなくなるし、お国のためにもなるのよ。それに日本軍に入隊したとしてもはつきり言って慰安婦か看護婦が関の山よ、それに日本軍でああなたのお母さんは看護婦だったんだからね。」

私は泣いた。鬼に両親は殺され、しかも鬼狩に私は一度助けられた。

それに私は答えるしかないじゃないか。

「私、鬼殺隊に入りたいです。」

「ありがとう、それと、鬼殺隊に入るためにも呼吸法と型を学びなさい。鬼殺隊で生き残るにはそれしかないわ」

私はすでに覚悟を決めていた。

鬼殺隊に入り、両親の仇を討つ。いや、お国のために頑張る。

「あと、私はあなたに大切なことを伝えるわ。この墓石をどかしなさい」

墓を明かすのは縁起でもないが私は墓石をずらした。

するとそこには刀が一本あった。

「それは日輪刀、鬼を斬るための刀よ、これに呼吸法と型をのせて鬼の頸を斬るそれが鬼殺隊の務めよ。」

「わかりました！じゃあ、私は型を学びたいです。でもどうすればいいんですか？」

「あなたには既に型ならあるわ。おそらく剣士の人が見る目がなかっただけよ。それに、あなたの技は磨けばもっと強くなるわ」

背中を押された私の心は決まっていた。

「あ、鬼殺隊の最終選別は3月と9月の2回だけよ。あと名乗ってなかったわね。私は西行寺幽々子、私は鬼殺隊の隊士だったんだけど、半年前に鬼の毒で死んじゃったのよ。それであなたに、全部を伝えるために現世にとどまっていたの。じゃあこれで」

その女性は私の前から消えた。

「え、ええええええええー！」

私はその叫びとともに驚愕した。

死んだ人が見えていた。ならば受けるしかない。

鬼殺隊になるんだ。

そう決めた私は最終選別へと向かった。

「ここが藤襲山か〜」

最終選別に向かうために階段を上る。

しかし、私は階段を途中で踏み外し、転がり落ちた。

夢を使う鬼と250人の人質

「うわああああああああ」

「ああああああああ」

ゴンッ

「いてて…すごく硬いんですね。痛かったですよ」

俺は目を覚ました瞬間にほぼ同時に目覚めた妖夢に頭をぶつけてしまう。

妖夢の頭からは血が滲む。

でも生きていた。やはり、夢の破り方はこれだったか。

「妖夢…夢に落とされたら夢の中で自分の頸を斬れ！破り方だ」

自分の頸を斬る、そして何度も夢の中で自殺する。こうすれば夢から現実に戻る。

禰豆子の燃える血の臭いと何か違う臭いを嗅ぎとる。

「ん、なんだこれ、腕に縄が、焼ききれてる」

「私も焼ききれてます。どういことですか?」

「俺が寝てる間に禰豆子の血鬼術で縄を焼いたんだ」

「禰豆子さんってそんな術使うんですか?え、炭治郎さんって鬼連れてたんですか!鬼を連れて任務に出るとかどういいう神経してるんですか?」

「まあこれには深い事情があって、この前の柱合裁判で禰豆子は特別隊員として認められたから大丈夫だよ。それに、俺が付いたら禰豆子は人なんか絶対に食べないし」

「まあ、この任務が終わったあと詳しく聞きますからね」

「わかった」

周りを見渡すと善逸や伊之助、咲夜さんや煉獄さんも眠っている。

煉獄さんの方は何やら2人の少女の首を両手で締めている。

戦闘での本能でそう動いたんだろう。

「禰豆子頼む…この縄を全て燃やしてくれ!」

俺は日輪刀では切ってはいけない。もしかすると意識が眠っている人の夢の中に取り残される可能性がある。

「善逸さん、伊之助さん、起きてー！」

妖夢が思い切り二人の頬を叩くが全く起きる気配がない。

それに善逸は何故か嬉しそうな顔をしている。

俺も他の人を起こそうとする。すると、

「死ねー！」

女の子が錐を振り回して襲ってきた。

すかさず俺は避ける。

鬼にでも操られているのかとよぎる。

「邪魔しないでよ！あんたらが来たせいで幸せな夢を見せて貰えないじゃない！」

自分の意思で襲いかかってきたのか。それに周りの子供たちも何人か目覚めだす。

「何してんのよ！あんたも起きたなら加勢しなさい！白血病だが高んだけ知らないけど、ちゃんと働かないならあのお方に言つて夢見せてもらえないようにするからね！」

まだ居たのか。おそらく俺と繋がっていた人だろう。涙を流している。

白血病…病気なんだ。可哀想に…許せない鬼だ。人の心に付け込み幸せな夢に釣られて人殺しに走る。辛い、辛すぎる。

でも子供たちには同情してる暇はない。

「ごめん、俺たちは戦いに行かなきゃならないから」

周りにいた子供たちを気絶させ、俺たちは1号車側へと進んだ。

車両の分岐点の戸を開けると石炭の臭いに混じり鬼の臭いがする。

こんなにも臭っていたのか。俺は密閉されていたから気が付かなかったが気づくのが遅かった。

鬼の臭いは風上からする。

先頭車両の方が。

俺は急いで向かうために列車の屋根に登る。

「禰豆子は来るな。危ないから待ってろ！みんなを起こせ！切符だ！

切符を血鬼術で燃やせ！」

「じゃあ私は列車の中から先頭を目指しますね！」

「ありがとう妖夢！そつちも頼んだ！」

俺は先頭車両に向かい走る。

すると2号車の屋根に影が見える。

「あれえ起きたの？おはよう、まだ寝ててよかったのに」

こいつが乗客を眠らせていたのか。

「せっかくなかい夢を見せてやっていたでしょう？お前の家族みんな惨殺する夢を見せることも出来たんだよ？今度は父親や祖母が生き返った夢も見せてやろうか？フフフ」

何故俺の家族のことまで知っている。お前は”下弦の参”十二鬼月か。それに俺は家族の思い出を玩具扱いされることに怒りが込み上げてきた。

「人の心の中2度速で踏み入るな！俺はお前を許さない！」

水の呼吸。拾の型 生生流転

血鬼術強制昏倒催眠の囁き

俺は一瞬夢に落ちる。だがその夢があまりに酷い様を見せられ俺はさらに怒りが込み上げてくる。こんなの見たくない。それは何度も自決する。

「なぜ、なぜ効かない。そうか、何度も自決しているのか。素晴らしいね。何度も死ぬる勇気があるって」

「俺の家族を弄ぶな！俺の家族を侮辱するなああああ」

全力で鬼の首を刎ねる。しかし手応えが弱い。もしやこれは夢？それともこの鬼は累という鬼よりも弱かった？

俺は色々なことを勘ぐる。そして振り向く。

「あのお方が柱に耳飾りの君を殺せつて言った気持ちすごくわかったよ。存在自体が何か癩に触ってくる感じだよ。」

死なない!?しかもなんだあの肉塊は。

「素敵だねその顔、そういう顔を見たかったんだよ。頸を斬つたのにどうして死なないのか教えて欲しいよね。いいよ、俺は今、気分が高揚しているから、赤子でもわかるような単純なとき。その体がもう本体ではなくなっていたからだよ。今喋っているこれもそうさ。頭の形をしているだけで頭じゃない。君たち鬼殺隊がすやすやと眠つ

ている間に、俺はこの列車と完全に融合した。この列車が全て、俺の血であり肉であり骨となった。わかるよね。この列車の乗客250人が俺の餌であり人質だよ。」

俺は恐ろしいことを聞いてしまった。250人全員が人質。このままじゃ乗客全員死ぬ。それだけは避けなくては。

「ねえ守りきれる？君と下を全力で走ってる女の子のたった2人で、俺におあずけさせられるかな？フッフッフ」

どうする。一人で守るのは2両が限界だ。それ以上の安全は保障できない。

「煉獄さん！妖夢さん！善逸！伊之助！寝ている場合じゃない！起きてくれ頼む！」

その声に呼応するように五号車が炎に包まれる。

「ついて来やがれ子分共！猪突猛進！伊之助様のお通りじゃあー！ー！」

光が見えてきた。これなら機会もある。

「伊之助！この列車にはもう安全なところが無い！眠っている人たちを守るんだ！この列車じたいが鬼になっている。」

やはりな…俺の読み通りだったわけだ。俺が親分として申し分なかったわけだ！」

獣の呼吸。伍の牙 狂い裂き

「どいつもこいつも俺が助けてやるぜ、須らくひれ伏し。崇め讃えよこの俺を！」

伊之助は3号車と4号車を守ってくれていた。

俺も1号車と2号車を守るんだ。

すると何やら大きな音がする。電車も飛び跳ねる。

なんだ？

受身をとると目の前には煉獄さんがいた。

「竈門少年無事で何よりだ。」

「煉獄さん！」

「ここに来るまで斬撃を入れてきたので鬼側も再生に時間がかかると思う。それに俺が寝ている隙に、掛川まで来てしまったようだな。」

この列車は客車八両の九両編成だ。俺は5号車から後方を守る！

残り4両のうち3号車と四号車は咲夜と妖夢が、1号車と2号車は黄色い少年と竈門妹が守る。君と猪頭少年はくまなく鬼の頸を探せ！」

「でも今この鬼は…」

「どのような形になろうとも鬼である限り急所は必ずある！俺も探りながら戦う。君も気合いを入れろ！」

そういうと煉獄さんは凄まじい速さで5号車の方へと向かった。

伊之助はどうなったんだ。伊之助ならわかる気がする。

「伊之助！どこだ！」

「うるせえぶち殺すぞ！なんかギョロ目に指図された！なんかすげえし腹立つう！」

屋根の上を全力で走っていた。

「伊之助！急所はどこだ！」

「前の煙が出てるところだ！そこがこの主の急所だ！」

前の煙、つまり先頭の石炭が積まれているところか。

俺と伊之助は先頭の車両へと向かった。

バキツバリバリバリツ

「怪しいぜ！この辺りがなあ！」

「なんだお前は！出ていけ！」

「下がってろ！斬られてえのか！」

気持ち悪い手が大量に生えてくる。

水の呼吸。陸の型。ねじれ渦

間に合った。伊之助も危なっかしい。先頭車両の扉を刀で破壊するのはいいがその扉の木の破片がやたらと飛んできていた。

鬼の臭いは足元からする。

「伊之助！この真下が鬼の頸だ！」

「俺に指図すんな！わかったよ！」

獣の呼吸。 忒の牙 切り裂き

切り裂かれた床には骨が見える。しのぶさんが言っていた。首の

骨は七つある。

しかも、今見える骨も七つ。つまり鬼の頸はここか！

水の呼吸。捌の型 滝壺

しかし、生えてくる手が肉壁となり防がれる。

さらに裂け目が塞がる。再生がかなり速い。

骨を断つには露出をさせるものと断つものの2人が必要。ならば

「伊之助！連撃だ！肉を斬るものと骨を断つものに分かれよう。」

「なるほどな！いい考えだ。褒めてやる！」

「ありがとう！行くぞ！」

俺は何度も血鬼術かかりそうになるが、伊之助には何故か手ばかりが襲いかかる。

もしかして伊之助は猪の面を被っているせいで目を当てる事が出来ていないんだ。

「ははは、俺は山の主だ！目え合わせられなく手しか出せねえとか、雑魚だな！」

獣の呼吸。肆の牙 切細裂き

今だ、ここの一撃で決める！

ヒノカミ神楽。碧羅の天

俺は思いきり骨を断った。

下弦の鬼と上弦の鬼

血しぶきが上がる。

それと共に列車が斬り飛ぶ。

「ギャアアアアアアア!!」

凄まじい断末魔を上げながら列車はのたうち出す。

列車は何度も跳ねながら肉を纏いだし横転する。

「大丈夫か！しつかりしろ！」

「何とか大丈夫だ。他のみんなは」

「単一は肩になんかが刺さってる。あとの奴らも列車からはじき出されてる。だが大丈夫みたいだ」

「良かった。あと車掌さんはどうした？」

「あいつなら黒いものに下半身が埋まってるぜ」

「なら助けよう。」

俺と伊之助は車掌を助けるために石炭をどかしていく。

「くそつ、こうなれば1人でも食ってやる！」

「まだ生きていたのか？でもその姿だともう死ぬ間際ってとこだな！」

獣の呼吸。忒の牙 切り裂き

「ぎゃあ、こんなの悪夢だ！俺は、まだ、本気を出していなかつ…」

鬼は切り刻まれてそのまま塵になった。

「大丈夫か、竈門少年！猪頭少年！」

「煉獄さん、大丈夫です。」

「見たところ大丈夫ではなさそうだな。太腿から血が出ている。もつと集中して呼吸の精度をあげるんだ。体の隅々まで神経を行き渡らせろ。そこに血管がある。破れた血管を呼吸で止血しろ！」

俺は集中する。太ももに錐が刺さっている。太腿に集中をし止血をする。

「呼吸を極めれば様々なことが出来るようになる。なんでもできる訳では無いが昨日の自分より確実に強い自分になれる。それに、乗客は全員生きている。怪我人は大勢だが命に別状は無い君は無理せずに

休め！」

「はい！」

すると何か気配がする。そしてものすごい音と土煙が上がる。煙が晴れると、そこには白髪の短髪の男がいた。

その目には”上弦 伍”が刻まれている。

どうしてここに上弦が現れた。

「浜松で待ってりや列車は来ねえから思い切って来てやったらこのザマか、所詮、下弦の参なんかこの程度つてもんだな」

そういうと殴りかかってきた。すかさず煉獄さんが刀を振る。

炎の呼吸。弐の型 昇り炎天

男の腕は斬り飛ぶ。だがすぐに回復する。

「いい刀だ。それに、その太刀筋、気に入った！」

回復が速すぎる、これが上弦の強さか。

「お前に話がある。そうだな、お前も鬼にならないか？」

「ならない」

「見ればわかる。お前の強さ、その闘気、かなり練り上げられている。至高の領域に近い。」

「話を持ちかけるのもいいが、俺は既に君のことが嫌いだ。」

「おっと、そりや名乗らねえで攻めりや嫌われるな！俺は猗窩座。上弦の伍だ。」

「俺は炎柱、煉獄杏寿郎だ。」

「杏寿郎、なぜお前が至高の領域に踏み入れられないのか教えてやろう。それは人間だからだ。老いるからだ。死ぬからだ。そこにいる弱そうな餓鬼だっけいつかは死ぬ。なら鬼になろう杏寿郎、そうすれば何百年何千年と鍛錬し続けられる。強くなれる。それに、世界だつて救える」

何を言っているんだ。あの鬼は、強くなれるだと？世界だと？さっぱりわからない。

「老いることも死ぬことも人間という儂い生き物の美しさだ。老いるからこそ、死ぬからこそ、堪らなく愛おしく尊いのだ。強さというものは肉体に対してのみ使う言葉ではない。それに、この少年は弱くな

い。侮辱するな。何度でも言おう。君と俺とでは価値基準が違う。俺は如何なる理由があろうとも鬼にならない」

「そうか、残念だな。なら、殺す！」

術式展開。破壊殺・羅針

炎の呼吸。壱の型 不知火

凄まじい速さで煉獄さんと猗窩座がぶつかり合う。

目で追えない、それぐらい激しいぶつかり合いだ。

俺は立ち上がろうとするも太腿の刺し傷が痛む。

「今まで殺して来た柱たちに炎はいなかったな。そして俺の誘いに頷く者もなかった。何故だろうな？同じく武の道を極める者として理解しかねる。選ばれたものしか鬼はなれないというのに、素晴らしき才能を持つ者が醜く衰えてゆく。俺は辛い、耐えられない、死んでくれ、杏寿郎。若く強いままに」

猗窩座が何を言っているのか分からない。俺は加勢しようとする。

「動くな！傷が開いたら最悪歩けなくなるぞ！待機命令！」

俺は驚き留まる。そうだ。脚が動かなくなっては元も子もない。

「弱者に構うな杏寿郎！全力をだせ！俺に集中しろ！」

激しい刀と拳のぶつかり合い。ここまでの速さを見るに付いていけない。

「すげえ、なんか分からねえけどすげえ！」

伊之助は感心していた。

しかし押されている気がする。技の威力も僅かに小さくなっている。

土煙が晴れると、煉獄さんは左目がつぶれ、体のあちこちに傷ができていた。

「生身を削る思いで戦ったとしても全て無駄なんだよ杏寿郎。お前が俺に喰らわせた素晴らしい斬撃も既に完治してしまった。だがお前はどうか。潰れた右目、吹き飛んだ左耳、砕けたあばら骨、傷ついた内臓、もう取り返しがつかない。鬼であれば瞬きする間に治る。そんなもの鬼ならばかすり傷だ。どう足掻いても人間では鬼に勝てない」
加勢しようにも足に力が入らない。ヒノカミ神楽はまだ体に馴染

んでいない。助けに入りたいのに……俺はどうすればいいんだ。

「俺は俺の責務を全うする……ここに居る者は誰も死なせない！」

「素晴らしい闘気だ……それほどの傷を負いながらその気迫、その精神力！一部の隙もない構え、さすがだな！やはりお前は鬼になれ杏寿郎。俺と永遠に戦い続けよう。」

術式展開。破壊殺・滅式

炎の呼吸。玖の型・煉獄

止まった？土煙で見えない。

煉獄さん。大丈夫か？

土煙が晴れるとそこには右太腿に腕が貫通している姿だった。

一瞬にして腹を刺すと察した煉獄さんは捻っていた。

「くっそ！ずらしやがったな！」

「君の技を少し見させてもらった。だが君の技は単調だ！」

「抜けねえ！畜生が！」

煉獄さんは絶対に逃がさないその思いで太腿に力を入れていた。なら今この隙に俺は頸を斬らなければ。

「伊之助！煉獄さんのために動け！」

煉獄さんはさらに刃を頸に突き刺す。だが、こちらも動かない。

拮抗した状態でお互いが耐え合う。今しか機会はない。

猗窩座は何かを察すると突然腕を砕いた。

煉獄さんの刀を首でへし折りながら。

「ちっ、しゃあねえ！」

猗窩座は全力で走り去る。

俺は追いかけてやろうとするも煉獄さんは俺を引き止めた。

「奴は陽の光を見て焦ったんだろう。追うべきではない。それに、夜も明ける。奴は今頃追ってくるものだと思って逃げている。それに、俺たちはここに居る人々を助けた。それに、下弦の参も倒した。これだけでも良い結果では無いか」

「そうですね。俺、本当に悔しかったんです。何も出来ずにただ見ているだけしか出来なくて。だから俺、あの猗窩座をいつか倒してみせます。だから」

「うむ、お主の活躍にも期待している。強くなれ！上弦を倒せるくらい強く」

「はい、頑張ります！」

こうして、俺たちは無限列車で誰一人として死人を出さずに人質を助け出すことが出来た。

「ところでだ、ここから磐田駅まで運んでくれぬか？あいにく右脚が動かなくて歩けない。どうか頼む。」

手当を終えたあと、俺たちは磐田駅まで煉獄さんを運んで行った。

煉獄さんの実家と呼吸の話

無限列車での激闘から1週間が経ち、

俺たちは蝶屋敷に入院していた。

「はい、みなさん無限列車での任務お疲れ様です。上弦の鬼と対峙しながら生きて帰って来れたこと。素晴らしいです。みなさん、これからも頑張って鬼を退治しましょう。あと、炭治郎さんと伊之助くんは昇格しました。という事で私は失礼します」

そう言っつて八意さんは病室から出ていった。

「なんで炭治郎と伊之助は昇格したんだ。俺だつて頑張ったのに」

「なあに！俺は鬼の頸を斬るために貢献したからな！」

「そうですよ。今回の下弦の参を仕留めたのは炭治郎さんと伊之助さんですよ」

みんなそれぞれで言い争っている、元気そうで何よりだ。

ただ心配なのは煉獄さんだ。

あれだけの怪我をして最後にはみんなに運ばれて、帰ってきたら永遠屋敷に急いで担ぎ込まれた。

おそらく、相当危なかったんだろう。

俺は少し気になって永遠屋敷の方に行くことにした。

渡り廊下を進み永遠屋敷に入ると、ものすごく薬の臭いがする。

おそらく八意さんの大量にある薬の臭い。臭すぎて涙が出てきそうだ。

「あら、炭治郎くん、なにか用でも？」

「しのぶさん、煉獄さんの容態はどうなんですか？」

「そうね、実は煉獄さんはもうここにはいません。今は煉獄さんの実家にいます。療養をする際に家族も周りにいると安心するんだとか」

「お願いします！煉獄さんの家を教えてください！」

「煉獄さんの家なら荏原の駒沢にあります。大きい家なのですぐ分かると思います。」

「ありがとうございます！では行ってきます！」

「いつてらっしやい。ん、炭治郎くんってまだ完治してないはず

じゃ」

何とか着いた。思いつきり大きい屋敷なのに気が付かなかった。
というかデカっ！

屋敷の塀を辿り入口に向かうと掃除をしている子を見つける。

「こんにちは、煉獄杏寿郎さんという方は、いらつしやいますか？」

「はい、私の兄なら、今は自室にいます。よろしければ案内しましょうか？」

一目で分かる。その顔を見れば兄弟だと、本当にそっくりだなあ。
煉獄さんの弟さんに案内される。そして戸を開ける。

「お前にはもつと頑張ってくれ。お前が…おう！竈門少年！久しぶりだなー！」

「煉獄さん！大丈夫ですか？酷い怪我してたので心配だったんですよ！」

「ははは、命さえなくさなければ大丈夫だ！」

「大丈夫って言っておきながら右脚は麻痺して歩けないって言わないあたり強がりすぎますよ。お兄は」

元気で何よりだが右脚は猗窩座の腕が貫通してたせいでボロボロだったのを思い出す。

「おう、そういうえば紹介してなかったな。彼女は藤原妹紅、俺の従兄妹だ」

「お兄からのご紹介に続けます。私、藤原妹紅と申します。階級は甲、年齢は17です。よろしくお願いします」

甲、つまり柱になるための候補というわけか。

「妹紅にはもう少し頑張ってもらえば俺の後に柱になれる。そう思ってた妹紅に話をしていた」

「どういうことですか？煉獄さん」

「俺はもう既に杖なしでは歩けない。それに、八意殿によると肺も傷ついていて呼吸を多用出来ないようになってしまったからな！だから昨日、お館様に柱を辞すと申し入れてきた」

柱を辞す？つまり柱から引退するということか。

「まあ、気を下げるな。俺は柱を引退したものの隠や裏方の方に回る。ただそれだけだ。鬼殺隊は辞めない。安心したまえ」

よかった。でも裏方に回るということは鬼を斬ることはもう出来ない。

弟子になろうと言われたあの時のことが実現出来なくて悲しい。

「そこでだ、俺は刀を振るわなくなる。だからこそ、竈門少年に渡すものがある。俺の日輪刀の鍔だ。いつか必ず使う時が来る。持つていくが良い」

「ありがとうございます」

俺は煉獄さんから鍔を貰った。

「お兄は気分がいいとよく物をやる。この前なんか、馬の蹄鉄なんか上げてたしな」

「馬の蹄は海外では魔除けとして言われているし。それに、産屋敷家の牧場で育てた馬の蹄鉄が古くなった物をあげただけだしな」

え、お館様って馬育ててたの？どうりであの裁判のとき右の女の子から獣の臭いがしたわけか。

「それに、お館様は日本でも屈指のお金持ちだからな。俺たち鬼殺隊を養って貰えるのも、それだけ素晴らしいお方だからな」

入口の方から物音がする。

「おう、帰ったぞ、今日はいいの当ててきたぞ」

「父上が帰ってきたようだ。今日は気分が良さそうだな」

「杏寿郎、今日はお前の好きなきつまいもがどっさりだぜ」

「それはとても嬉しい。今日はさつまいもの天ぷらが良い！」

「そうだな、お、今日はお前の見舞いが多いなあ。ん？」

煉獄さんのお父上がこちらに來ると何かを見てしまったかのように表情が険しくなる。

「その坊主、お前、日の呼吸の使い手だな？そうだろう！」

突然俺の事を指さしながら煽ってくる。

「日の呼吸？なんのことですか？」

「その耳飾り、俺は見た事がある。そう、あの本に書いてあったことだ。始まりの呼吸。1番初めに生まれた呼吸、最強の御技、そして全

ての呼吸が日の呼吸の後追いに過ぎない。日の呼吸の真似をし劣化した呼吸。それは炎も水も風も月も、全てがだ！何故ここにそんな奴がいる。こんな場所に来るべきではない。立ち去れ！」

俺に対して怒りだす。それを妹紅さんが全力で羽交い締めにする。「父上、彼は俺の大切な客人だ！それに、何があつたんだ！突然彼の耳飾りを見て怒り出す！」

「伯父様、お兄のお見舞いに来た人なんだから落ち着いてください」

「すまなかつた。取り乱してしまい」

「まあいいですよ。気にしないでください」

「仕方ない、父上は元炎柱であつたが6年前に引退してから怒りやすくなつてしまつてだな。前までは優しい父上だつたのだが」

「伯父様は、最近競馬か鉄火か酒を飲むしか生きがいを感じていないくらい腑抜けてしまつて、本当に柱だつた威厳はどこへ行つてしまわれたのか」

「妹紅、俺のことそう思つてたのか？お前の親父に言いつけるぞ」「ヒイ」

騒がしい家族の言い争いに俺はここにいていいのか迷う。

「炭治郎くん。では、説明をしよう。実を言うとだな、呼吸法というものは縁壺という剣士によつて編み出されたものだ。今から500年近く前から現在に続く。その剣士は日の呼吸を使つていた。そして彼に弟子としてついたものが5人いた。そこから、その5人がさらに編み出した呼吸こそが、炎、水、雷、岩、風の5つだ。この呼吸を扱うものが鬼殺隊の隊士として基本的に型と合わせて受け継がれる」

呼吸にはそんな始まりがあつたのか、俺は色々気になり煉獄さんの父上に色々聞く。

「俺もあと数年若ければ日の呼吸を会得することも出来た。だが、俺は柱の定年を迎えてしまい、今はこうして隠居生活だ」

「たまにお兄や私にお金を貸してとねだつたりして高酒や博奕につき込むのはさすがにどうかと思ひますが」

「妹紅！さすがにこの場では慎め！」

「はーん」

話を聞いてみると結構重要なことがあった。呼吸を変えて扱うものもある。派生したり合体してできる呼吸もある。それに、鬼殺隊や柱には45歳で定年引退があるということ、鱗滝さんが歴代で1番長く柱に在籍していたことまでわかった。

だがまだ聞けていないことが一つだけある。

「月の呼吸は、いつからあったんですか?」

「は、勘のいいガキだな。教えてやるよ。月の呼吸はそもそも派生ではない。日の呼吸とまた違う呼吸だ。月の呼吸を編み出したのは嚴勝という剣士だ。だから呼吸の中でも特異なもんだよ」

月の呼吸は呼吸が同じでも編み出した人が違う。

そういう経緯もあったのか。

「今回は話をしておさきありがとうございます!」

「いいよ、俺だって日の呼吸の使い手だからって嫉妬しただけだから、その分いい情報でトントンだな」

煉獄さんの父上は随分といい人だった。最初は怒りやすい人だと言う印象があったが、落ち着いて話して下されば普通の人を感じる

「では気をつけてお帰りください」

「いいえこちらこそありがとうございます」

いい話が聞けて本当に良かった。これを蝶屋敷にいる同期のみんなにも話そう。

俺は蝶屋敷に戻るとしのぶさんが顔に青筋を立てながら迎えてくれた。

「炭治郎くん、まだ太腿の傷は完治してないですよ、あまり出歩かないようにしてくださいね」

「申し訳ございません」

俺はすかさずしのぶさんに土下座し謝り続けた。

その後病室へと戻ると、

「おかえり、炭治郎、こんな夕方までどこ行ってたの?」

「ああ、実は煉獄さんの実家にお見舞いと話を聞きに行ってた。それに、煉獄さん、昨日で柱を引退したんだ」

「え、どういうこと？」

「なんだと！俺たちに弟子になれってほざいてたくせに引退だと！許せねえ」

「まあまあ落ち着きましょうよ。それに、煉獄さんには煉獄さんの事情がありますからね」

「そうだぞ。煉獄さんなんて杖なしじゃ歩けないからな。そりや柱として任務には着けない。だから引退した。それだけの話だ」

伊之助は本気で弟子になる気満々だったが引退ならば仕方ない。

俺も伊之助の気持ち少しはわかったような気がする。

ふう、もうすぐ寝るか。そう思い枕の下に手を回す。

ん？枕の下に手紙がある。

手紙を開くと珠世さんからだった。

炭治郎さん、いつも鬼の血を回収して送って下さり

ありがとうございます。

実はこの前あなたが送ってきた鬼の血について単刀直入に話をします。

萃香という十二鬼月から採取したという血なんです、

鬼舞辻無惨の細胞が一切含まれていませんでした。

おそらくこの血は別の鬼の始祖というものが存在する可能性を示唆しています。

そして多くの血を送って下さるのは結構ですが、もしかして私のこと話をしましたか？鬼殺隊の優しい人ならいいですが、もし、鬼舞辻側に話していたのであれば打ち切りますのでご返信をお早くお願いします。

その文を読み俺はもういちども読み直す。

萃香という十二鬼月には鬼舞辻細胞が含まれていない。と、

複数の始祖と師の最期

俺は急いでしのぶさんの元へと向かい、しのぶさんに手紙を見せる。

「この前倒した鬼の中に、鬼舞辻無惨の細胞がありません。そう珠世さんからは送られてきました」

「なるほど、つまり、鬼舞辻無惨以外にも鬼の始祖がいる。というわけですね。これは一大事です。それに、私たちに話したことを珠世さんには伝えていないようですね。なので早くこのことを書きましよう」
鬼の始祖が1人ではなく複数いる場合、鬼舞辻無惨を倒したところで、鬼は根絶やしにならない、つまり鬼殺隊が戦うべき相手が増えてしまったということだ。鬼の始祖というもの、それについても気になることが多い。そうしのぶさんは教えてくれた。

こうして俺たちにはさらなる戦いの可能性に落とされたわけである。

翌日、俺はそのことをみんなに話す。やはり返ってきた反応は俺と同じだった。

「え、俺たち、鬼舞辻無惨とかいう始祖を倒すために戦ってたの？しかも始祖が複数いる？いやーーーーー！こんな戦いが続くななんて俺は嫌だーーーー！」

「始祖だかミソだか知らねえがそんな奴がゴロゴロいるのか。そうと決まれば、そいつらをぶつ倒せばいいんだな！」

「なるほど、鬼の始祖を倒せば全滅するはずだった。しかし、複数いるとなればその鬼舞辻無惨という始祖が倒されようがまだ鬼が出てくるということ、あと、炭治郎さんは、十二鬼月の一体を倒し、その血を珠世さんという協力者の方に送ったんですよね。ということは鬼舞辻無惨とは繋がりのある始祖がいる。これは大変ですね」

俺たちはそのことについてを考えながら完治を待つことにした。

そんなある日。

「チュンチュン！チュン！チュンチュン！」

善逸の鎧雀が飛んできた。

「どうした？ふむふむ、ふむ、え!?」

「炭治郎、どういう話だ。チュン太郎の伝えたいことはなんだ」

俺はそのことを善逸に伝える。

すると、善逸はすぐにお館様のいる本部へと向かった。俺も向かう。

「お館様! どういうことですか? 獺岳が鬼になったって!」

「ああ、善逸くん、本当にすまない。君たちが無限列車で戦ったあの日、稲庭獺岳は鬼になった。いや、正確にはその5日前に上弦の弐に勝てないと踏んで寝返った、だね」

「その通りでございます。それについて、元鳴柱・桑島慈悟郎はもうすぐここで切腹を行う。これは本人が願い出たことです。介錯は霧雨魔理沙が付くことになっています」

「じいちゃん…なんで…なんでだよ…」

善逸は泣き崩れてしまった。

もし、禰豆子が人を食っていれば、おそらく俺がこうなる可能性もあった。

20分後、善逸のじいちゃんは庭に置かれた畳の上に正座していた。

「これより、元・鳴柱、桑島慈悟郎の切腹を執り行います」

「はい」

「霧雨魔理沙と申します。未熟ながら介錯つかまつります」

魔理沙さんは左背後へと周り刀を天へ向ける。

善逸のじいちゃんは小刀を手に取り、そして、腹を十字に斬る。

「じいちゃん! じいちゃん!」

「善逸、落ち着くんだ」

俺は泣いて叫ぶ善逸の手を握り制すことしか出来なかった。

「善逸! ワシの最期、しかと見届けろ!」

善逸のじいちゃんはそう言ってさらにもう一文字斬る。

その状態で、30分耐え続ける。腹から湧き出る血があまりにも辛いものを物語っている。

涙が枯れそうになるほど流す善逸に、俺も涙を流していた。

「し、師範……！」

善逸のじいちゃんの首が皮一枚残し垂れていた。

その後、屏風が立てられ、じいちゃんの死骸は隠された。

屏風が外された時には棺に納まっていた。

善逸は棺に泣きつき、じいちゃん、じいちゃん、と叫んでいた。

「善逸、そろそろ火葬しなければならぬ。退けるんだ」

「俺が棺を持てばいいだろ！それなら、じいちゃんは幸せだと思う。

それに姉貴だって、いちばん辛いんだろ！介錯なんて……」

「あたしも辛い！でも、お別れはしなければならぬ。たとえば、どんな形であろうと」

それを俺はただただ眺めるしか無かった。

もし、俺が今の善逸の立場だったら同じようになっていたかもしれない。

火葬を終えた帰り道、善逸は何かいつもと違う臭いがした。

「俺、獺岳を絶対に斬る。じいちゃんの呼吸、姉貴の教えてくれた技、

そして、俺の日輪刀で」

善逸の目は今までの弱虫のような臭いはほとんど消えていた。

「そうだな。善逸」

俺はそういう言葉しか思いつかなかった。

猗窩座と生き残りの鬼

俺は焦っている。

無限列車での魘夢を救うことができず、しまいには柱も隊士も殺すことが出来なかった。

急いで東京へと向かう、そのためにも森の中を走っていく。

そんな中1人の鬼を見つける。

髪の白い鬼だ。

「たす…け…て…」

俺に対し助けを求める。

「あんた、どうしたんだ」

「鬼殺…隊…の…やつに…毒…を打ち込まれ…て…」

俺は鬼に血を与える。

「飲めよ…解毒するならこれが一番だからな」

その鬼は血を飲むと楽になってきた。

「それで、お前は、どうしてここにいるんだ？」

「私は、那田蜘蛛山からここまで船や馬車に隠れながら、何とかここま
で来た」

「那田蜘蛛山？それって千葉じゃねえか、ここは足柄だぞ？よくそこ
まで移動できたなあ。その精神力、只者じゃないな」

足柄までは海を越えていかないとまずつけない。それに、那田蜘蛛
山といえど5月の半ばに下弦の伍、累が倒されて以来久々に聞いた。

今は7月だぞ。よくそこまで生き延びたなあ。

「俺はこれから東京にいるあのお方のもとに向かう。お前もついて来
るか？」

「もちろんです。上弦の伍の方の提案とあれば私は一緒に行きます」

俺は白い鬼とともに東京のあのお方のもとへ向かった。

「はい、お会計180円になります」

「とても美味だった。私もこんなものがあるとは思わなかった。」

「まさか喜んでうな重二杯もたいらげるとは思わなかったわ」

「そうだな、時々こういう店によって情報を仕入れるのもよい」

屋台から出てきて裏路地へと入るところの無惨様を見つける。

「無惨様、ご報告に参りました。」

「例のものは見つけたのか？」

「調べましたが、確かな情報は無く…存在も確認できず…青い彼岸花は見つかりませんでした」

「で？続きは？」

「ご命令通り柱の一人を無力化して参りましたので、ご安心下さいませよう…」

「お前は思い違いをしているようだな、猗窩座。」

無惨様は怒り出すと、俺の体があちこちにヒビが入る。

「たかが柱一人、それを無力化したからなんと言うのか？鬼が人間に勝つのは当然のことだろう。私の望みは鬼殺隊の殲滅、それに人間の完全なる家畜化だ。鬼殺隊は一人残らず殲滅し二度と私の視界に入らせないこと、複雑なことでは無いはずだ。それなのに未だ叶わぬ、どうということなんだ？お前は得意気に柱を無力化したと報告するがあの場には5人の鬼狩りがいた。なぜ、始末しなかった？わざわざ近くの浜名湖で釣りをしていたお前を向かわせたのに、それに、お前、例のものはどうした？」

鰻釣りをしていたことを思い出し腰に手を回す。うなぎが動いていない。戦闘になった際に誤って死なせてしまったのだろう。

「猗窩座、私の好物の鰻まで使い物にならなくするとはいい度胸だな」

ここまで怒らせてしまうと殺されるかもしれない。

「無惨様！こちらに向かう途中、足柄で那田蜘蛛山の鬼の生き残りを見つけました」

「ほう、そこにいる白い女鬼か、もしや、累が作っていたという家族の一人か？」

「はい、累の姉の綾というものです。この鬼は累から貰った血鬼術を使います」

「なるほど、それは良い報告だな。十二月も候補はおらず既に11人

最近入った獺岳は未だに血鬼術も使えぬ。その時に血鬼術を使えるものを見つけるとは、やるではないか猗窩座」

「ありがとうございます」

「だが、それで先程の件との差で平にするとは思うな。私、いや私たちの命令は絶対だ。今度なにかあればタダではすまぬ」

「はい！」

「ではその綾を置いて下がれ、私が血を入れるために城へと連れていくからな」

「はい。」

その場を立ち去る。

そんな時無惨様は愚痴を零す。

「お前が上弦の伍に落ちた理由は、お前には絶対に分からないだろう」「元上弦の参だったとは信じられない」

あの二年前の大血戦、あの時から全てが変わってしまった。

無惨様があの子を娶ったことにより、今や十二鬼月も鬼も女だらけになってしまった。

それに、列車前での戦い、俺にとどめを誘うとした餓鬼のことを思い出し、怒りが込み上げてくる。

あいつら、次会った時は脳髓ぶちまけてやるからな！

空白の4ヶ月編

継子会と7人の少女

継子会

それは11人の柱の指南を直接受ける者たちである。

現在柱の継子は

蟲柱の弟子で花柱継子、栗花落カナヲ

水柱継子、氷川智溜乃

霞柱継子、古明地こいし

風柱継子、射命丸文、

恋柱継子、曲戸アリス

音柱継子、九十九弁々、同じく九十九八橋

この7名である。

2ヶ月に一度集まりこうやって色々な任務であった事や柱の稽古での苦悩などをお互いで話し合う。

「はあ、うちの師範なんかさあ、喋ってばかりいるな、とかお前の作る飯は少し甘味が少ないってうるさいんだよ。それなら自分で作れって」

そう愚痴るのは風柱継子・射命丸文である。

「いいじゃない、私なんて師匠がいつも宝石が曇っただ。火薬の管理はしっかりしろってうるさいのよ」

同じく師範を愚痴る九十九弁々である。

「そうよね、派手に派手について言ってるのも鼻につく。」

付け足す九十九八橋。

「みなさん結構愚痴りますね。そんなに柱のことよく思っていないんですか？私の師範はともいい人ですよ！私のことを特に気にかけて下さるし、何よりも、柱の中でも一番と言っても過言ではない美貌も兼ね備えてますからね」

一方でアリスは恋柱に対しても尊敬の発言をよくする。

「そんなこと言ったらあたいの師範はすごく強いんだからね！それにほとんど攻撃なんか通らない呼吸つてのも編み出したし」

智溜乃は水柱を尊敬してる。

「でも氷川さんって水の呼吸じゃなくて氷の呼吸だよね？」

「え、そうだけど、でも派生なんだしいいでしょ！」

「そういうえばカナヲはなんか最近変わった感じがするよね」

カナヲはそういうと笑顔になり、話す。

「私、心のままに生きろって言われた。だから、私は自分の意思でこれからは任務でもあの硬貨は使わない。そう決めた」

「それってもしかしてカナヲの竈門炭治郎？ひゃー私もそんな同期が欲しかったなあ」

「文さん、色々煽りすぎですよ。それに、カナヲさんの同期は私の同期でもあるんだからね」

アリスの発言を思い出したのか文は色々語り出す。

「あ、そうだった、アリスとカナヲは同期だもんな、あたしの同期なんかね、最近鬼になったって言う獺岳ですからね、あたしの代から鬼にねがえるやつが出るなんて、本当に酷い、あいつ、いつつもさあ俺は優秀だとか偉つそうにしやがって、それなのにあたしより弱いんだよ？」

「そうだよね、同じ代から出るなんて、まああの獺岳つて人はなんか気に入らなかつたなあ、あたいは同期がめぐまれてるってね。何せあたいが受かってるんだから」

智溜乃は自分のことをよく見せる。

「でも、あんたの代って合格者何人だったっけ？」

「んー、2人だった。それに、歴代でもかなり死人が出た代、あたいともこちゃんくらいしか合格できなかつた」

「そりやそうだろうな、51人最終選別受けて合格者2名、死者49名って代はなかなかないしな、まあその前の代で受けてたら良かったんじゃない？合格者4名だし」

「文さん、確かその代って受けた人8人しかいない代ですよ？しかもそこからこいしさんの師範も出たっていう結構選りすぐりだから

な。まあこいしさんは師範より前に最終選別受けてますしね」

「そうだよなあ、こいしのところって普通逆な気がするんだけどなあ」

「私の師範にそれは禁句だよ」

「こいし、毎回気配消して日輪刀を首に当てるのはやめてくれ」

合格した代とかの話をしているとこいしが文に対して脅してくる。

「へえ、そういう代つてのもあるんだ。私たちはまだ最終選別受けてないからわからないや」

「私たちが受けるのは来月の頭だもんね。受かったら、皆さんのこと先輩つて読んでみたいですよ」

「そのためにも稽古や修行もしっかりしないと。あと、音柱のことなんだけど温泉とか掘ったり水道とか作ったりするのつてアレ修行なのか？」

「あれも修行だよ？体力がなければ話にならない。それに、私たちは選別を受ける前に全集中の呼吸も身につけてるし、おそらく次の選別では受かると思う」

「気をつけてね。私のおいしさんかおにぎり尽きて空腹の中、他の人に恵んで貰って生き残ったのもいたのよ」

「あ、もしかして、この前無限列車で活躍したり、蛇柱と下弦討伐したりと最近伸び盛りの妖夢だっけ？」

「そうそう、あの子、ドジっ子なんだけど結構やる時はやるのよね」

「ドジっ子といえばあたいの師匠も結構ドジだよ。この前なんかおれた大根を縁側に置いといて雪隠に行ったあと取りに戻る時にその大根つまづいてたし。まあ師範は口下手だけどそういう所がまたいいんだよ」

「私の師範はずーっとぼーっとしてるように見えて、結構指導してくれてる。おかげで私、鬼に一切気が付かれずに何体も倒せました」

「こいしの師匠もすごいけど、こいしもなんかすごいよな、この前こいしと同じ任務だったんだけど、万世極楽教の集會行われてる場所にさっと入りこんで思いつきり鬼倒してたし」

「こいしちゃんってなんかそういう所あるよね。もしかしてさとりさんの影響？」

「ううん、私は無意識に鬼を殺してるからね。おそらく過去に何かあったんだけど、忘れちゃった」

「こいしってほんと、時々何考えてるのかわからない時あるから目を離しちゃいけないだろうなあ」

「みんな、ほんと楽しそう、私ももつと話出来たらなあ」

「カナヲはやっぱり変わったよ。今までは何も話さなかったのに、もしかして、彼氏とかできたの?」

「え、カナヲに彼氏? キャー、私より先なんて」

カナヲは赤面する。恋とかよりも鬼殺と修行に明け暮れていた少女とはいえ、女であるということだけは忘れていなかった。

「カナヲちゃん、もしかして、竈門炭治郎って言う隊士でしょ」

「もしかして、この前の無限列車で下弦の首を刎ねたっていうあの額に火傷の傷があるやつか? あれには新聞を読んだ師範も関心してたなあ」

カナヲは凶星だった。その隊士の言葉によってカナヲは変わったのだから。

「恋柱の継子より早く恋をするとは…私も負けてられない」

そうみんなで盛り上がっていると鴉が飛んでくる。

「任務! 任務! 南西の芦ノ湖に向かえ! 鬼殺隊所属の継子の者は全員向かえ!」

「お、こりゃあちようどいい任務が来たねえ、あたしたち継子たちの腕の見せどころだ!」

「ちよつと文! 張り切るのはいいけど、技の手加減間違えてあなたの師範みたいに建物全壊だけはやめてよね」

「わーい、任務だ任務! 鬼を殺せる。」

「あたいの日輪刀もうずうずしてる。これは何かありそうね」

「じゃ、私達は今度の最終選別で頑張るから、任務の成果も教えてくださいささいね」

「では、行ってきます」

こうして、栗花落カナヲ、氷川智溜乃、射命丸文、曲戸アリス、古明地こいしの5人の継子は任務へと向かった。

この任務が大きな転換期になろうとは。

大きな屋敷と黒一点

「炭治郎！芦ノ湖へ迎え！芦ノ湖で多数の隊士が行方不明！急げ急げ！」

俺は急いで芦ノ湖へと向かう。

そんな時だった。

「あ、炭治郎！久しぶり！元気だったか！」

「智溜乃さん！お久しぶりです！」

姉弟子とばったり会う。

「今日はどうしたんですか？」

「あたいたち、実は芦ノ湖に任務があつてさあ、もしかして、炭治郎も芦ノ湖？」

「そうです。俺も芦ノ湖に向かうところなんですよ」

「ほう、彼が炭治郎くんか、なかなか澄んだ目してる」

「いきなりなんですか！」

姉弟子と話していたら黒髪の短髪少女が俺の事を覗いてきた。

「あ、ごめんごめん、あたしは射命丸文。風柱継子だ。それに、恋柱継子のアリス、霞柱継子のこいし、そして、栗花落カナヲちゃんだよ！」

俺はいきなり色々紹介されて動揺する。

「あの、智溜乃さん、この方たちはどういう…」

「ああ、あたいらは継子会の仲間。さつき芦ノ湖に全員で任務に向かえ！って言い渡されたから向かうってこと」

みんな柱の継子だったのか。それに、カナヲはなんか一段と可愛い。

「そうでしたか、ではみんなで鬼を倒しに行きましょう」

芦ノ湖の湖畔に着くとあつてはならないものがあつた。

「え、なに？この大きい建物は」

大きすぎる。巨大な屋敷がたっていた。

「かなり広そうですね。で、入口ってどこにあるんですか？」

みんなは戸惑う。巨大な屋敷であれば普通なら入口はあるはずだ。

しかしこの建物には何故か入口が見当たらない。

「炭治郎、そういえば鼻がきくんだったな。臭いで入口は分かるか？」
「射命丸さんが俺のことを何故か知ってる。よく分からないが俺は鼻を壁に近づけながら壁伝いに回る。」

「あつた、ここだ！ここから微かだけど血の臭いがする」

「あら、炭治郎さん、さすが同期の出世頭ですね」

「アリスさんは俺のことを褒めてくれた。でも出世頭ってどういうことだろう。」

臭いが出る場所を押すとくるりと扉が回転し、屋敷の中に転ぶ。

「ほう、この屋敷はからくりを使ってるのかあ面白そう！」

「鬼の臭いが強い、もしかすると、十二鬼月つてのがいるかも」

「十二鬼月かあ、この前も下弦の参を倒した後にもたまた倒さなければならぬのか。」

「屋敷を進んでいくと鬼がわんさか現れた。しかし、幸いなことにこの部屋は広い。」

「おっしや、いっちょやりますか！」

ち

風の呼吸。壺の型 塵旋風・払い

恋の呼吸。壺の型 初恋のわななき

花の呼吸。陸の型 渦桃

霞の呼吸。式の型 八重霞

水の呼吸。参の型 流流舞い

氷の呼吸。伍の型 岩垂氷

6人の攻撃が大きく効いたのか鬼はすぐさま塵となる。

「よし、いっちょ上がり！」

「そうやって油断していつも文は危なくなるんだよ？」

「うるさいなあ、こいしの言葉はいつもトゲがあるなあ」

「それだけ心配してるんだよ、私も心配される人がいたらなあ」

「アリスは師範にいつも言われてるよなあ。女の子らしさも必要だつて」

「何よ！文だって師範の弟を避けるためだけに継子になれって言われ

た分際で！」

「あのく、俺ってこの話題に入っているのいいのでしょうか？」

「二あなたはカナヲを守るために務めなさい！」

俺は6人の中でたった1人の男隊士、完全に浮いてる。

屋敷を進むと落とし穴に謎解き、からくりの噛み合わせや天井落ちなど色々な仕掛けがあった。

「こいしが謎解きが得意だとは思わなかった。それに、あの扉を開けるのに必要なものが壁際にあつた壺の中にあるとは」

「壹玖壹伍、これって今年の西暦だっけ？まあ、思いついた数字に鍵を合わせただけだし」

「それに引き換え文つたらよく落とし穴に落ちかけてたよね。これだから風柱って焦りやすいのよ」

「あたしの師範にそんなこと言うな！それに、師範は真面目だ！強がってるだけでものすごく優しい人だ！」

「あと炭治郎くんはほんとういう時に役に立つよね。天井を頭で受け止めるって、あなたただけ硬いの？」

「これは母親譲りで、俺の母さんは熊の頭を頭突きで粉碎したり、俺が山で遊んでた時の落石なんか頭でかち割ってたし」

俺がそう話すとカナヲとチルノ以外はすごい目で見ている。

「結構奥まで来たね。この屋敷とんだだけ広いんだよ。柱の屋敷全部合わせた位の広さはあると思わない？」

「そうね、それに今地下何階にいるのか分からない」

「今は地下8階だと思う」

俺は今日初めてカナヲが発した声にびっくりした。

「8階かあ、結構深いねえ、もしかして今、芦ノ湖の下にいるのかも」

俺以外は何故かびっくりせず話を続けている。

もしかすると彼女たちは相当長い間話していたのかもしれない。

ただ、文さんは喋りすぎな気がする。

「道が3つに別れている。ここからは手分けして探索しましょう。」

「じゃあここは、じゃんけんで合った人同士でやろうか！」

智溜乃さんが提案した。

その結果、

「あたいとこいしは左、アリスと文は右、そして炭治郎とカナヲは真ん中の道に行く。これで決まり！」

こうして、俺はカナヲと一緒に真ん中の道を進むことになった。

「カナヲ、この先はおそろしい鬼の臭いがする。」

「キャツ」

「どうした！何かあったか！」

カナヲの手には白い液体がついていた。

三人の鬼とそれぞれの火蓋

白い液体の臭いを嗅ぐ。

「これは、いちよう芋？それに、腐っている」

俺は手拭いでカナヲについたいちよう芋の液を拭く。

「これで大丈夫だ。いちよう芋はかなり痒くなりやすいから呼吸で痛痒神経を押さえるんだ」

カナヲは深呼吸をし、全集中の呼吸で応急手当をした。

「よし、もうすぐ鬼のいる所だ。気を引き締めよう」

俺は大きな扉を開ける。

すると広間には球根がゴロゴロと転がっていた。

その奥に鬼の影。

「へえ、おふたりさんは鬼狩り様か、男女組で来るとは、もしかして恋人同士ってもんかねえ。あたしの相手とか苛立たせたいのか？」

その鬼は2つの角を持つ白い髪の和服の鬼だった。

一方その頃、チルノとこいしは、

「なにこれ、丸い糸玉？それにたくさん垂れ下がっている」

50はあろうかという糸玉が天井から垂れていた。

「鬼の気配を察するに蜘蛛の糸を使うやつみたい」

「そうか、じゃあ蜘蛛鬼がいるんだな。ちよつと、この糸玉、なにが入っているのかわからないし破いてみる？」

「そうだね」

二人は糸玉を次々と破く。

「うわあ、なんかドロッドロしてて気持ち悪い」

「それに、なにこれ、骨！」

「あらく、私の食い物を破壊して、なに遊んでるのかしら？」

その瞬間、声の方を振り向く。

「私が長い時間かけて溶かした人間の汁物、それをどうしてくれる？
なら、あんたらが私のご飯になりなさい！」

その鬼は、白く長い髪に顔には赤い斑点、それに白装束を着ていた。

アリスと文の方は罨が多く、特に文は何度もハマりかけた。

「あなたがいると、ほんと命がいくつあっても足りないわ」

「ごめん、何度も助けてもらって」

「今度引つかかったとしたら助けてやんないからね！」

アリスと文は仲は良い、だがいつもこうやって二人で漫才のような掛け合いをすることが多い。

「お、扉みつけた！ここが鬼の居場所かあ」

「気をつけてね、なにが起るかわからないから」

扉をそーつと開けると、そこには何も無い広間があった。

「あれ、もしかして鬼がいない？」

あたりを見渡すとどこからか声が聞こえる。

「私は、ここだよ！こつちこつち！」

「文、上よー！」

言われたので見上げると鬼が逆さまになって天井に立っていた。

「どうも、私は正邪、最近、十二鬼月に入りました、下弦の陸を名乗らせていただきます。」

「お、十二鬼月か、ちょうどいい、私たちでやっちゃうか！」

「文、珍しく気が合うわね。私も同じことを考えてたわ」

三人の鬼と6人の隊士、それぞれが鬼一人につき二人の隊士それぞれの戦いが始まる。

屋敷の秘密と自分の弱さ

「あなたたち、なかなかやるね！私の血鬼術を避けるとは
俺とカナヲは苦戦していた。」

足元から生えてくる根を避けるだけで精一杯。

それに、その根はヌルヌルした白い液をだす。

床はその液のせいで滑りやすくなっている。

「キャッ！」

「危ない！」

俺はカナヲが転びそうなのを止める。

「ありがとう」

「大丈夫か？足元に気をつけて」

「お前ら二人で何しとんじゃ！私との対決で男女の掛け合いとか許せん！」

鬼は怒り狂い大量の根を床から飛ばす？

とつきに俺とカナヲは飛び上がる。

しかし、避けきれない！

バーン

ものすごい音とともに背中の箱が砕ける。

「禰豆子！」

その根は禰豆子の腹を貫通していた。

「ほほう、背中の箱には女が入っていたか、ん？そいつは鬼じゃないか？」

「あうううううううううう」

禰豆子の腹からは血が吹き出す。

「禰豆子！大丈夫か！」

俺は刺さった根を切り裂き禰豆子を抱える。

「大丈夫か！禰豆子！しっかりしろ！」

「あ、その子、那田蜘蛛山で小さくなったりしてた子だ」

「ええい、3人いたからって何があるんだ！ふざけんな！」

鬼はさらに怒りの頂点に達したのか。より多くの根を飛ばす。

一方、チルノとこいしは蜘蛛鬼の溶解液や糸玉に苦しめられていた。

「はあ、はあ、なんなのこれ、隊服がとけてる」

「それに、糸玉を弾こうとすると途端に柔らかくなる」

「あたしの糸はねえ、柔らかいけど硬いのよ。それに、溶解液だけでも吐き出せるように、なったからね！」

2人の隊服は肩やスカートの裾などあちらこちらが破けている。

「ちつ、こうなりややつてやる！」

氷の呼吸。 氷の型 氷山割り

霞の呼吸。 参の型 霞散の飛沫

斬撃が蜘蛛鬼におそいかかる。

「なーんてね、あんた達の技、さつきより弱くなってない？もしかして肌を出されて恥ずかしいとか」

完全に凶星だった。敵は明らかに服の方を溶かすように技を出している。

「あたいは恥ずかしくなんかない！」

「私もこの体じゃ人を落とすことなんか出来ないし！」

智溜乃はまだ成長期なのでともかくだが、こいしの方は姉よりも少し膨らみが大きい程度であり、しかも17歳なので成長はあまり望めないわけである。そのコンプレックスを指摘されてブチギレる。

アリスと文は悩んでいた。

敵に技を出せば自分にも返ってくる。

それによりあちこちに傷ができていた。

「もしかして私に攻撃が通ってない？あなた達って本当に弱いもんですねえ」

「アリス、やつはおそらく、技を出せば出すほど反転して来る。その技を避けきれるもの以外出すな」

「わかったわ」

「あ、バレちゃいました？でも、私、そんな簡単なの持ってないんです

けど〜」

アリスと文の話に正邪が煽ってくる。

そんな時、正邪が壁の方に向かって行く。

「さあ、おふたりさん！かかってきなさい！」

「くっそ！煽ってきやがって！腹立つ！」

「文、考えがあるわ、これ、もしかすると…」

「そうか、そういうことなら有り得る」

「じゃあ作戦開始よ」

炭治郎はカナヲと禰豆子とともに、苦戦していた。

「炭治郎、打開策はないの！」

俺も困る、カナヲに急かされている。そんな時は手がかりを探さないで、ん、鬼の臭いが3つ？それもかなり近い。

それに、部屋の形がよく見ると四角ではない。

「カナヲ！後ろの壁を壊せ！みんなが近くにいるかもしれない！」

俺とカナヲは鬼の根を出すのを避けつつ壁に攻撃をする。

水の呼吸。漆の型 雫波紋突き

花の呼吸。伍の型 徒の芍薬

ピシッ、パーーン

「なんだ、何かあったのか！」

「ちようどいいところなのに…え？」

読み通りだった。3体の鬼は同じ場所にいた。

それに、壁1枚しか隔たれていない六角形の大広間がこの屋敷の最深部の本当の形だった。

「バレちゃしようがないね！綾！正邪！3人でやるわよ！」

「はい！」

「おつ、炭治郎、こりや、やるもんだなあ、さすが男だぜ。」

「そんなことより、みんなで力を合わせましょう。」

6対3、数では勝ってはいるものの相手は強い鬼。

「その蜘蛛の鬼、下弦の伍だよ！」

「は、私は下弦の鬼、十二鬼月だから強いんだよ！それに、炭治郎って

やつ、那田蜘蛛山の時以来だね」

「思い出した、お前は姉の」

「あたしはね、綾って言う名前があるの。そう、累がつけてくれた名前」

「あつちやくこれは危ないですね。零余子さん、あなたのからくり屋敷、見破られちゃいましたね」

天井に立つ鬼はそう言って煽る。

「だからってなんだと言うの？見破ったからって戦況は変わらない！」

零余子は根を地面から大量に飛ばす。

さらに、綾の溶解液まで纏いあちらこちらに飛び散る。

躲すしかない。

壁に飛び散るとそこがドロドロになる。

隊服に付けば服は溶ける。

3人の鬼があわさった攻撃はかなり強力である。

「どうだい、あたし達の合わせた攻撃は！」

刀で鬼の首を斬ろうとしたが零余子の白液で切れ味は鈍くなっている。

さらに溶解液も合わさり、少しずつ溶けていた。

このままではみんな刀が切れなくなって終わりだ。

そんな時、禰豆子は腹を刺しその手を振り回し周りに血を飛ばす。

それが皆の刀に付着する。

爆血。

「禰豆子！ありがとう」

「ムムー！」

刀についた液は払えた。しかし、俺の刀身は元の3分の1が溶けて無くなっていった。

だが、なんとかなる。そう自分に言い聞かせた。

「正邪は方向も、攻撃も真逆になります。避けられる技を打ってください」

「アリス、ありがとう。そうか、そういうことか」

俺は正邪の方に向かう。

「ははは、私は下弦の陸だよ〜強いんだぞ〜」

「お前は十二鬼月では無いな。それに、それなら目に字が刻まれているはずだ」

相手は凶星だったように焦り出す。

すぐさま右へと移動する。

俺は左に技を放つ。

ヒノカミ神楽。円舞

正邪の首が宙を舞う。

「ギャ、効きませんよ」

正邪の言っていること、それに動きも全く逆だった。

それが正邪の特性。

正邪は塵へと帰った。

「正邪がやられたか。あいつは候補だったけどそれほど強くもなかったし」

「それに、あいつは奴らにとってもハズレくじだったからね」

「はいはい、その油断が命取りだよ」

技を出そうとする。

しかし、5人の足元は大量の粘液で動きにくくなっている。

まともに動けるのは俺だけ、万事休すか。

そう思った矢先、

ドーン

天井から水が噴き出してきた。

「何、ここは湖の底の下よ！崩れないようにしたはずなのに」

「あんたたち、継子だったはずだよね、お兄の言ってたことがよくわかった」

水浸しになる大広間その天井から降りてきたのは黄色と赤の髪を後ろで束ねた人だった。

「妹紅さん！なぜここに！」

「おっ、この前の期待株だな、なんか苦戦してるな？」

「はい、鬼が3体いて一人は刎ねましたが、後の2体は糸と粘液を使う鬼と根を地面から生やしたり、粘液を飛ばす鬼です」

「ほう、面白いやつもいるもんだな」

「私の糸で濡れなかつたけど、一步間違えば水圧で死ぬわ」

「そうね、じゃあ反撃かい…」

そう話している2体の鬼の途中で妹紅さんは技を決めていた。

炎の呼吸。陸の型 星火燎原

技を決めてすぐに2体の鬼の首が落ち、凄まじい燃え上がりとともに鬼は塵となった。

「お前ら、ここから出るぞ！」

「でも、ここって湖の下ですよ？どうやって出るんですか？」

「お前ら泳げんのか？泳いで天井突き破って出るんだよ！」

こうして俺たちはからくり屋敷を泳いで出た。

「はあ、はあ、危なかった」

「炭治郎と智溜乃とカナヲ以外、ほんとだらしねえなあ、泳ぎ方とか習わなかったのか？」

「「そんなの習いません！」」

全員を引っ張りながら湖底から水面まで泳いだ。

それに、禰豆子は口枷のせいもあり息が苦しかったのだと思う。

「まだ2時半か、その妹鬼を太陽から守るために急いで箱を作れ」

「はい！」

俺たちは湖畔に立っていた木を斬り倒し、急いで箱を作った。

「何とか間に合った。禰豆子、ここに入って！」

木の幹をそのまま斬り、そこをくり抜いて籠のようにし、禰豆子が入った時に隊服で包んで、日光を遮る。

「よし、じゃあみんなで帰…」

そこで意識が完全に飛ぶ。

「あちゃー、こりや慣れない呼吸を使って気絶したな。よし、お前らは箱根の藤の屋敷に行け！そこでしばらく休んでろ！」

「はい！」

俺たち6人の任務はここで終わった。

だが、倒れた俺は箱根の藤の屋敷に行くことになった。
そう、継子の5人も一緒に。

誰かの記憶と運命の行方

「お前はなぜ話さない、そのお前はそう無口なのか。はつきりいったらどうなんだ。」

「お前のような者は、生まれてさえ来ないでくれ」

「お前が存在していると、この世の理が狂うのだ」

俺の前で俺に向かって泣きながら怒鳴る男がいる。

「なぜ、お前は特別なんだ。教えてくれ」

「お前のせいで、お前の…」

涙を流しながらうつ伏せになる。

「俺は兄だ。弟よ、兄は強くなければならない。それなのに、なぜ俺よりも腕が立つ」

また場面が変わり、その男は少し背が伸びていた。

「俺の技は、……………だ。お前に負けなくらい、必死に修行したというのに」

男は悔しがりながら、刀を握る。

「俺も強くなりたい。だが、なぜこの差は埋まらない。それに、俺には時間が無い」

なぜ時間が無い。そう思う。

「お前とはもう会いたくない。今後一切、俺の前に顔を見せるな」

「久々だなあ、お前と手合わせできるとは思わなかった」

その男は髪が長くなり後ろを向いている。

「お勞しや」

「うわあ！はあ、はあ、」

目が覚める。身体が汗ばんでいる。不思議な夢を見た。

「お、炭治郎、突然倒れたから心配したんだぞ」

「文さん、ここはどこですか？」

「ここは、箱根の藤の花の屋敷。それに、お前は16時間も寝てたんだぞ。」

「そんなに寝てたんですか！」

俺はあの後カナヲに背負われて、藤の花の屋敷に担ぎ込まれたと説明された。

「それにさあ、あたし達の隊服もあの蜘蛛鬼のせいでボロボロになったから、隊服が戻るまで2泊することになったんだ。あ、それとなあ、炭治郎は1人だけでこの部屋に泊まること、あたし達は女だから別部屋にいる」

俺はホツとする、もしこれで同じ部屋ですって言われてたらおそろく肩身が狭かったかもしれない。

隣の部屋には女の子たちが会話をしている。仕切られているのは襖1枚のみ。

ドキドキはする、しかし見てはいけない。理性が勝たなければならぬ。

そう自分に言い聞かせた。

ここにも仕方ない。よし、風呂に入ろう。

俺は風呂へと向かった。

この藤の花の屋敷は前にお世話になった場所よりも広く、そして風呂も温泉の露天風呂だった。

「ふう、生き返る生き返る〜」

俺は広い露天風呂を独り占めしている。そんな支配感のような気持ちになる。

だが、落ち着いて深呼吸をすると、臭いがする。女の子の臭い。

「もしかして…カナヲ？」

湯けむりが風が吹いて晴れると岩の後ろに女の子がいる。

「カナヲ？」

カナヲは恥ずかしがって出てこない。

「なんかおか…」

パチン

「み…見ないで」

カナヲは俺の両目に手を強く当てがった。

「あ…うん」

臭いでわかった。カナヲは人生で初めて同じ年頃の男に裸を見ら

れた、そうカナヲは臭いで語りかけてきた。

「目をつむって、後ろを向いて」

「わかった」

俺は両目を瞑り、静かにカナヲに背を向ける。

「炭治郎、もしかして、裸、見た？」

「見：少しだけ見えた」

少しだけだがカナヲの胸から上が見えただけで全部は見えてない。

「私、しのぶさんに引き取られてから、男とあまり関わらなくて、それで、ごめん」

「俺もごめん。鈍感で」

俺は反省する思いで俯く。

そんな時カナヲは昔話をする。

「私、小さい頃、親に虐待されてた。お腹がすいた。悲しい、虚しい、苦しい、寂しい、そんな日々ただ生きていた。そしてある時、なにかがプツンとなって何も辛くなくなった。貧しい暮らしの中で兄弟達もどんどん売られて、最後に私が売られた時でさえ、悲しく無くなっていた。そんな時、私はカナエさんとのぶさんに助けてもらった。

だけど、私は何も選べない、何も自分から動かない。そんな私にカナエさんは銅貨をくれた。私は硬貨を投げて表か裏かで決めるように教えられた」

「なるほど、あの時硬貨を投げていたのはそういうことか」

「それから私は硬貨の表裏で全ての選択を決めていた。稽古を受けるのもそう、料理を作るのも、最終選別に行くのも硬貨で決めた。そんな時に炭治郎が心のままに生きる。それに、裏が出たら表が出るまで投げ続ける。その言葉に私は心に温かさを感じた。炭治郎が変えてくれなかったら、私は心の殻に閉じこもっていた」

「カナヲの心に、俺の思いが届いていたんだな」

「それから私は、自分でお手伝いもする。任務も率先してやる。そして、カナエさんを死に追いやった鬼を必ず滅する。そのためにも、私は強くなる。そう心に誓った」

「カナヲは十分強いよ、俺でさえ、まだまだなんだし、カナヲに負けな

いくらい、俺も強くなる。そうしていつか、みんなが鬼に怯えない、そんな世界になったらなあ、なんて、今の俺じゃ高すぎる目標かな」

「ありがとう、私のこと、聞いてくれて」

カナヲは俺にそう伝えた。さ

「俺の方こそ、さつきはほんとごめん。それに、俺よく小さい頃から弟や妹のお風呂で体を洗ってたりしてたから、気にせず話しかけちゃって」

「炭治郎って、禰豆子ちゃん以外に兄妹いたんだ」

「ああ、俺も2年半くらい前までは禰豆子以外にも弟妹がいたんだ。でも、あの日、俺が家へ帰ると、鬼に家を襲われ、家族は禰豆子以外は既に息絶えてた。その禰豆子も鬼の血を傷口に浴びて、それで鬼になった。俺がもしあのことがなければ、今ごろ家族みんなと父さんの墓参りにでも行ってたんだろうなあ。そう思うと、胸が苦しくなる。でもこうして、善逸、伊之助、妖夢、アリス、咲夜、そしてカナヲに会えたこと、そう思うと、この運命も、ありだと思っただ」

「フッフ、この運命がどんなものになろうと、私は炭治郎のおかげ、ありがとう」

「俺もだよ、カナヲ」

「私はそろそろ失礼します。話していると逆上せそうだから」

「じゃ、俺はもう少し入っているよ」

「では、また」

カナヲはそう言って風呂を上がった。

「カナヲは随分と心のままに成長してるなあ」

俺はカナヲのことを思う。すると、少しドキドキしてきた。

おかしいのかな、初めての違和感を感じた。

それから翌日、隊服が届けられた俺たちはすぐに蝶屋敷へと帰った。

「あら、皆さん任務ご苦労さま、芦ノ湖はどうでした？」

「鬼が強い上にからくりが難解だった！それに、いいとこ全部最後に持ってた人がいたわ」

「文は何回も引っかかりすぎ、あれはそんなに難しい仕掛けじゃない

のに」

「あの鬼結構強かったなあ、しかも下弦の伍だし」

「私の隊服をボロボロにしたアイツは許さない」

「ただいま戻りました」

全員数日の休養が与えられた。俺に至っては刀の3分の1が溶けたせいで鋼鐵塚にまた打ってもらおう。

「おのれ、刀を溶かすとはどういう料簡だ貴様アアアア！万死に値する！」

「すみません！ほんとにごめんなさい！」

鋼鐵塚さんはいくつもの包丁を身につけて襲ってきた。

それからしばらく鋼鐵塚さんが気が済むまで俺は追い回された。

善逸の思いと誕生日

最近、善逸が俺に口をきいてくれない。

3人で飯を食おうと誘っても善逸は一切無視。

それに、何か怒りの臭いを常にまもっている。

どうしてなんだろう。

「連日のやつ、なんか最近おかしいな。俺や進次郎の事が嫌いなのか？それに、最近は任務から帰ってくるとイライラしてる。どういうことだ？」

「伊之助もそう感じるか。やっぱり善逸は何かおかしい」

俺と伊之助は善逸のことが心配になってきた。

そんな時、

「なあに考え込んでんだよ！お前らしくないぜ！」

「魔理沙さん！お久しぶりです」

魔理沙さんと会ったのは師範が切腹して以来、それに、師範の介錯を担当したのであれば、かなり辛いはず。だが魔理沙さんは元気そうだった。

「ほほう、なるほど、確かに最近変なんだよなあ。なんかずっとイライラしながら任務してるし、それに、怒りで鬼を斬っているしで今までとかなり変わってるんだよな」

「もしかして師範が亡くなったことが辛いのではないかと」

「それは一理あるなあ。善逸は、師範が火葬されたあと、ずっと遺骨を離さなかつたし」

「どうすれば善逸の気分をよくなるんでしょう」

「あいつはな、可愛くて優しい女の子が近くにいればすぐに良くなる。

それに、ちようどいい奴がいるじゃねえか」

「え？」

「禰豆子と善逸を一晚同じ部屋に過ぐこさせる!?本気ですか!」

「慌てんなよ、一晚だけだぜ？それに、善逸は禰豆子という娘が一番好きだって言ってたろ？あいつなら絶対喜ぶよ」

「兄としてその提案は飲めません！ 禰豆子をあんな危なっかしいやつ
の所に」

「まあまあ、それにさあ、あいつ、そろそろ誕生日なんだよ。あいつの
ためにも何かあげないとならないしな」

誕生日にあげるものが禰豆子との一晩、魔理沙さんのことを洩々受
けることにした。

「禰豆子、善逸はお前のことが一番好きなんだ。だからこそ、兄として
もお前には一晩だけ同じ部屋で過ごす。それだけでいい。頼む、善逸
のためなんだ」

禰豆子は兄のためと思い領いた。

善逸の誕生日の夜、俺は部屋に禰豆子を一人だけに立ち去る。

そして隣の部屋で魔理沙さんとじつと待つことにした。

「魔理沙さん、善逸は喜ぶんでしようか。もしこれで禰豆子に何か
あったら」

「心配ないぜ、こうしてあたしと2人で隣で聞き耳を立てればいい」

「ああ、心配だ〜！ 禰豆子が〜」

「静かに！ もうすぐ善逸が来るから」

善逸が自分の部屋に入る音がした。

「ええ！ 禰豆子ちゃん！ どうしたんだ！ なになにに、今晩は私と一夜を
ともにしましょう。これが私からの誕生日の贈り物です？ わ〜い禰
豆子ちゃんと一緒だ〜」

善逸がものすごく浮かれていた。それを聞いているとイライラす
る。

「禰豆子ちゃん、あのね、俺、今幸せな気がする。禰豆子ちゃんがそば
に居てくれる。それに、笑顔で見えてくれる。それだけでも本当に
嬉しい。でもね、禰豆子ちゃんは鬼なんだよね。でももし、人間に戻
れるようになったとしても、俺は禰豆子ちゃんの事は嫌いにはならな
い。禰豆子ちゃんのことを本当に好きなんだ」

完全に恋愛状態に入っている。禰豆子、口説き落とされるなよ。

「禰豆子ちゃんにこの話をしてもいいと思う。俺には兄弟子がいて、
稲庭獵岳っていうやつだ。そいつはいつも俺に対してゴミだとか

散々言つて追い払つてたんだ。だけど、あいつには俺には出来ない技が使える。それに、俺よりも強かつた。尊敬してたよ。あいつに悪口言つてたやつは必ずそんなやつじゃない。そう言つてた。でも、あいつは俺や姉貴、それに、じいちゃんさえも裏切つて鬼になった。それを聞いた時に、ああ、あいつはそんなやつなんだつて見限つたよ。だから俺は決めたんだ。あいつの頸を俺が刎ねる。そして俺はけじめをつける。同じ雷の呼吸の使い手として」

そうだったのか。善逸は危なくない、それに、優しいし真つ直ぐで、やる時はやる奴だ。禰豆子の籠を守ってくれて頼んだ時、伊之助が何度も壊そうとしていた時でも全力で守ってくれた。それに、物知りな上に心配りもできる。

禰豆子にはもしかするといひ旦那としてなれるかもしれない。

そう思つて、感心していると。突然静かになる。

「炭治郎、姉貴、盗み聞きはご法度だ！」

バレてた。善逸が耳がいいのがここまでとは。

「炭治郎！お前には言いたいことが沢山あるんだよ！任務で一緒になつた継子の人には炭治郎はやる奴だとか炭治郎は強いだとか、何回も何回も言われて腹が立ってるんだよ！」

「じゃあ、もしかして最近イライラしてたのは」

「ああそうだよ！継子の5人とお前だけでこの前任務に出てたとか聞いた瞬間、どんだけ花園なんだよつて、お前はそれなのにふつうに話をしながら鬼を倒したとか？ふざけんなよ！俺だつてそんな任務について行きたかつた！」

「善逸つてその頃」

「そうだよ！霞ヶ浦の方で任務があつて俺はいなかつたんだよ！帰つてきたら継子の女の子全員で箱根で2泊？それに、カナヲちゃんはドキドキしててしのぶさんに質問したらわからないつて言つたからしのぶさんがどんな病気が俺に聞いてきたんだよ！俺は答えたよ！それが恋だつて、ああ腹立つ！炭治郎！1回くらい斬つてもいいよな！」

「善逸！落ち着け！」

「善逸！そうだ、禰豆子との一晩の贈り物はどうだったか？」

「ああ、それは十分楽しんだよ。だがなあ、あの文字、絶対お前が書いたろ！書き癖でわかるんだよ！それに、お前が禰豆子ちゃんを売るはずがないのはわかっている。それが思いつくのは姉貴ぐらいだよ。もうバレバレだよ！」

俺と魔理沙さんは善逸に1時間追い回され、そして気が済んだところで禰豆子との一晩を堪能し、誕生日を終えた。

善逸はそれからは禰豆子一筋なのか、他の女の子にデレデレすることは減った。

柱合会議と新たな希望

大正四年十一月十九日

お館様

おはよう、みんな、今回もこの柱合会議を迎えられて本当に嬉しく思うよ。

蜜璃

お館様に置かれましてもご壮健なによりです。益々の御多幸を切にお祈り申し上げます。

お館様

みんなからの報告をいただく前に私から大事なことを3つ伝えなければならぬ。

それからでも、良いかな。

実弥

お館様の話とあれば、私たち柱はしつかり聞きます。

お館様

ありがとう、では1つ目に、私は医者に診てもらった所、余命は来年を迎えられるかどうかと伝えられた。つまり、私が参加出来る柱合会議はこれが最後ということ、もし次があつたとしても、その頃には私はほとんど動けない体になっていると思う。

だから、私が死ぬ前に、息子の輝利哉に当主の座を譲ることにする。

永琳

お館様、そのご判断、良いと思います。

それに、先程も歩くことさえ厳しい様子でしたので、この先、任務の指示などは出来なくなることをご心配しておりました。

お館様

永琳、心配してくれてありがとう。そこで2つ目の話だ。私と同じように神職家系の妻を迎え入れることにならなければ、輝利哉は20まで生きられず、産屋敷は滅んでしまう。だから、輝利哉には早々に妻を決めてもらった。

蜜璃

あの、その人ってどんな方なのでしょう。

お館様

諏訪大社を代々伝えた一族の1人である。東風谷早苗という娘だ。彼女は優しくそして包容力がある。それに、輝利哉には必ず子孫を絶えさせないためにも、安産型の子であることが大事だった。彼女はまだ15だが、妻として迎え入れるには良いものだ、私は思った。

天元

お館様、やはり安産型の娘は重要。それに、俺の妻たちも安産型だ。良い子供作りにはそれ相応の妻も必要だから。

しのぶ

私みたいな体でも子供は産めますがね。

義勇

しのぶ、慎め。

しのぶ

失礼しました。

お館様

彼女には来月、輝利哉と祝言をあげる。そして私はその後、隠居しようと思う。

こんな体では仕事もできなくなるかもしれない。だが、輝利哉は継ぐだけの実力が既にある。それに、輝利哉は私から教えることはもうほとんどない。それぐらい成長してくれた。

行冥

お館様には長らく仕えて来ました。

私を拾ってくださったこと、盲目的私にも優しく接してくださったこと。

心より感謝を申し上げます。

お館様

そうだね、行冥が一番長い間柱を務めているからね。

行冥がいなかったら、今の鬼殺隊の戦力はかなり落ちていたと思う。

それに、こうして十人まで集められたのも行冥のおかげだ。ありが

とう。

そして、3つ目は、柱についてだ。

小芭内

柱？もしかして

お館様

そうだよ、今回みんなには新しい柱を紹介する。

では、入っていいよ。

???

失礼します。

お館様

紹介しよう。これから新しく柱になる。煉獄妹紅だ。みんなも暖かく迎え入れて欲しい。

無一郎

煉獄？煉獄さんの親族？

お館様

さすがに不思議だとは思うよね。杏寿郎とはあまり似てない。それに彼女は隊士として名乗ってた頃は藤原妹紅だったんだ。けど本当の名前は煉獄妹紅、煉獄杏寿郎の従妹なんだ。

妹紅

お館様に紹介されました。私は煉獄妹紅と申します。藤原は私の母方の姓です。

皆さんにはわからないようにそう名乗ってました。私は煉獄家の分家なので名乗るのは良くないと思っていたからです。

お館様

それに、彼女は下弦の参と伍の頸を取り、100体もの鬼を既に滅している。おそらく両方の条件を達成して柱になったのは行冥と永琳と無一郎の3人だけだったはず。

それに彼女は、おそらく杏寿郎以上の実力を持っている。彼女がいれば無惨討伐の可能性が大きく上がるだろう。

さとり

お館様、妹紅にも期待して良いのですね。

私たちも今まで以上に鬼を滅し、一日でも早く無惨討伐に務めます。

お館様

さとりも随分と成果をあげているし、無惨討伐に向けてこれからも精進してね。

さとり

ありがとうございます。

お館様

では、みんなからの報告をしてもらおう。

まずは誰からはなす？

では、永琳。

永琳

お館様、9月の最終選別で200人も志願し、170人の合格者が出ました。

ここまで志願者や合格者が出るのは久々な気がします。

おそらく、義勇が受けた最終選別の時以来ですか、それに、これ程合格者が出て大丈夫なのでしょうか。

お館様

それは問題ないよ、最終選別は決まりが昔から同じだし。それに、7月の無限列車での事件を機に多くの隊士が志願してきた。これは、おそらく炭治郎たちの活躍があつてだと思う。

永琳

なるほど、これで鬼殺隊の隊員も1400人まで増えましたか。大分大きくなりましたね。

お館様

それに、みんな必ず一体以上鬼を滅していたし、この代も炭治郎たちの代に続いてかなり優秀かもしれない。それに、その炭治郎も下弦の参を倒したし。

実弥

前の会議で隊士の質が落ちたとは言いました。ですが、それは隊士でありながら腑抜けた奴らを何人も見てきたからです。それに、継子

の文から聞きましたが炭治郎はかなり強くなっているそうです。

お館様

炭治郎は順調に成長しているからね。もしかすると、彼が鬼舞辻無惨を倒す逸材になるかもしれない。そんな気がするんだ。では、次の報告を、天元。

天元

お館様、実は私の妻が潜入している吉原で妻達からの情報が途切れました。

もしかすると、十二鬼月がいるかもしれません。

お館様

あそこは無惨が最近まで目撃されていたからね。その可能性もありそうだ。

天元

なので、失礼ですが女性隊士を俺自ら選んで潜入させます。

隊士も何人か心当たりがあるので。

お館様

そうだね、もし十二鬼月がいた場合も考えて選ぶのもいいと思う。

天元

ありがとうございます。

お館様

次の報告は、ないようだね。では、柱合会議を閉会する。

吉原遊郭編

人さらいと祭りの神

秋も過ぎかけ冬も近づき忙しくなる師走の頃

俺は単独任務から帰ってきたところ蝶屋敷が何か騒がしい。

「放してください！私は…この子達は」

「やめてください！放してください！」

大変なことが起きている。

俺は急いで声の方に向かう。

「女の子に何してるんだ！手を放せ！」

どっちが捕まったのが分からないほどもみくちやになっている。少し迷う。

「人さらいです、助けてくださいあい！」

俺は男の方に向かい頭突きをかける。

だが空振る。

そのまま俺は転ぶ。

「愚か者、俺は元忍の宇髄天元様だぞ、その界限では派手に名を馳せた男、てめえの鼻くそみたいな頭突きを喰らうと思うか」

「アオイさん達を放せ、この人さらいめ」

「一体どう言うつもりだ！この麻雀下手！」

「変態！変態！」

「てめーら誰に口利いてんだ！俺は柱だぞ！」

「お前を柱とは認めない！」

柱だろうと女の子に優しくしないのは許せない。

「お前が認めないなら何なんだよ！この下っぱが！脳味噌爆発してるのか!？」

俺は任務で女の隊員が要るからこいつらを連れていくんだよ！継子じゃねえ奴は柱の許可をとる必要も無い！」

「きよちゃんは隊員じゃないです！隊服着てないでしょ」

「あ、そういえばよく見りや着てないな、じゃあいらね」

大男はきよちゃんを投げ捨てる。

何とか俺はきよちゃんを掴んで抱っこする。

「わーん、投げ落とされました!」

「何てことするんだ人でなし!」

「とりあえずコイツらは任務に連れていく、役に立ちそうもねえがこんなので一応隊員だしな」

2人が焦っている。俺も何とか言わないと、

「人には人の事情があるんだから無神経に色々つき回さないでいた
だきたい!アオイさんと鈴仙さんを返せ!」

「ぬるいねえ、このようなザマで地味にグダグダしているから鬼殺隊
もおかしくなっていくんだらうな」

ならばこれならどうだ。

「アオイさんたちの代わりに俺たちが行く!」

すると、善逸が男の前に立ちはだかり、さらに伊之助は男から背
中に貼り付けていたアオイさんを引き剥がし抱きかかえる。

「今帰った所だが俺は力が有り余ってる。言つてやつてもいいぜ!そ
れに、アオイを泣かせたらタダじゃおかねえ」

「鈴仙さんを放してもらおうか、たとえばアンタが筋肉の化け物でも俺
は1歩も引かないぜ!」

「あつそ、じゃあ一緒に来ていただこうかね。ただし絶対に俺には逆
らうなよお前ら」

すぐに呆れたのかあっさり引き下がった。

そういうと鈴仙さんはしりを1発叩かれてほいと投げ落とす。

それを俺が何とか掴む。

すると女の子達はみんな泣きながら抱き合った。

「で?どこ行くんだオツさん」

「フッフ、よくぞ聞いたな、それは日本一色と欲に塗れたド派手な場
所、そして鬼の棲む場所、東京吉原の遊郭だ」

「え、吉原!?もしかして妖夢と一緒に任務をした場所だ!俺も行った
ことあるわ!なんだよ、その白い目は!いいだろ別に、任務だったん

だし！」

善逸は浅草に任務に言つてたが吉原だとは知らなかった。さすがにそんな場所に妖夢が行つていたとは。

「じゃあ、こっちについてこい」

そう言われたので数分ほどついて行く。

すると、大きな馬車が置かれていた。

「これに乗れ、任務に行くためにもそれなりに人はいるからな」

俺たちは馬車に乗るとそこにはアリスと妖夢と2人の女の子が既に乗っていた。

「あら、箱根以来ね、元気だった？」

「お久しぶりです。俺は元気です。アリスこそ元気そうで、それで、ひとつに気になるんだけど、アリスはなんで乗ってるの？」

「私は師範に、恋人を探すためにも色々と経験が大事だからねって言つて送り出されちゃった。師範はいつもキュンキュンしすぎだから私にまでそういうのするのよ」

「アリスの師範って、結構ガツガツな人なんだね。誰なの？」

「甘露寺蜜璃、恋柱であり私の師範、いつも恋してるのよね。私も恋はするけどあの師範程じゃないわ」

「なるほど、苦労してるんだね。それで、妖夢はなぜここに？」

「さつき蝶屋敷に帰る途中で縄でぐるぐる巻きにされて任務に必要なだ！って言われて連れ込まれたんです。幸い、アリスが乗つてたから縄は解いて貰えたけど」

それを聞くと善逸は反応する。

「は、女の子にそんなことしていいの？やりすぎでしょ。そんな奴に彼女とかいねえだろ！」

「俺には嫁がいるんだ。残念だったな。ハハハ」

「とんでもねえやつだ！俺だつて嫁が欲しいよ！禰豆子ちゃんが嫁に来ればすぐにでも見返してやる！」

「ハイハイ、そうやってほざいてられるのも今のうちだな、あと、そこに俺の継子がいるだろ？弁々と八橋が」

善逸が宇髄さんに嫉妬していると、宇髄さんが紹介してくる。

「善逸さん、初めまして、私は九十九八橋と申します。新人隊士ですが、善逸さんのことを尊敬しています。よろしく願います」

「同じく九十九弁々申します。9月の最終選別で入隊しました。善逸さんの評判なら私たちにも来ています」

「キヤー！ー！ありがとう、俺は我妻善逸、位は丁、君たちの先輩さ」
「私達も先輩のように強くなりたいです！新人なのでどんどん教えて欲しいです」

「いいよ、そのかわり、俺の指導はきついよ、めげないでね」

善逸は何故かおだつていた。

「おーい、そいつは俺の継子だから手出したら承知しねえぞ」

それを言われて宇髄さんに噛み付く。

「は、嫁持ちで継子にもこんな可愛い娘たちまでいるとかどんだけ幸せもんなんだよ！」

「まあまあ落ち着け、そうかつかするな」

そう言つて善逸を宥めた。

「説明しよう。俺は神だ！お前らは塵だ！まず最初はそれをしつかり頭に叩き込め！俺が犬になれと言つたら犬になり、俺が猿になれと言つたら猿になれ！もう一度言おう！俺は神だ！」

「なんかやべえ奴だな」

俺は気になつたので問う。

「具体的には何を司る神ですか？」

「いい質問だ、お前は見込みがある、俺は派手を司る神…祭りの神だ」

「この人たち大丈夫か？」

「俺は山の王だ、よろしくな祭りの神」

「何言つてんだお前…気持ち悪い奴だな」

「いやあんたとどっこいどっこいだろ!?引くんだ!?!」

「私たちの師範はいつもこんな感じですよ」

「弁々ちゃん、八橋ちゃん、苦労してるんだね」

「これでよし、お前ら！花街までの道のりの途中で千住という町に藤の家があるから、そこで準備を整える。じゃあ、全速前進！」

宇髄さんは馬車を人力で曳きだした。

「おおー！速いぜ！それに、俺の全速力よりはええ」

「だろ？何せ祭りの神が曳いてるんだからなあ」

伊之助ははしやぎ出す。だが俺たちはかなり揺られており下手すれば転倒しかねない程だ。それに、善逸は完全に怯えている。

「なにこれ、揺れすぎ！怖い怖い怖い！」

そうやって俺たちは藤の家へと向かった。

潜入任務と3人の嫁

「よし、着いたぞ、ここがその家だ」

宇髄さんは息も切らさずに千住まで着いた。

やはり柱つてとんでもない人ばかりなのか？

「ここでの馬車は置いて藤の家で準備して吉原までは歩くぞ」

「はいー」

「いい返事だ」

藤の花の家に着くと家の人が迎えてくれた。

「お帰りなさい、お待ちしておりました」

「ああ、ただいま、じゃあとりあえず鏡と筆とあれを」

何を用意するんだろう。そう俺たちは気になったが、わからないの
で聞かないことにする。

「おーし、この部屋で少し話でもするか、この家はなあ、俺がいつも
使ってる家であ、松平つて言う人がやってるんだ」

それを聞いた瞬間善逸とアリスが驚く。

「松平！も、もしかして、昔の江戸幕府で日本を治めたあの？」

「そうだよ、ここはその一族の親戚の運営してる家だよ」

「ということは、鬼殺隊つて、政府公認だった時代つてあったんですか
？」

「まあちよつと違うけど、そうなるな。鬼殺隊は江戸幕府の公認だつ
た時代があるぜ、しかも、江戸幕府の中でもかなり極秘であ。何し
る鬼殺隊は全盛期2000人はいたんだぜ？それに、俺の先祖も鬼殺
隊の一員だったわけだし」

「どういうことですか？じゃあなぜ、鬼殺隊は今、非公認に？」

「廃刀令だよ、廃刀令、それを出した明治政府のバカ役人が出しやがっ
たんだよ。鬼殺隊のおかげで江戸時代は安定していたのにそれさえ
も剥奪しやがったんだよ」

「そうなんだ、やっぱり国の役人つてバカなんだね」

「そうだよ、そのせいで一時期は鬼殺隊が400人まで減ったことも
あるからな、今は1400人くらいまで盛り返したけど」

俺はさっぱりわからなかった。なので質問する。

「あの、明治政府はわかるけど、江戸幕府ってなに？」

何故か変な目で見られる。

「ああ教えてやるよ、江戸幕府はなあ、50年くらい前まで松平家が治めていた武士と忍びの天国だぜ。しかもその時代は派手な芸術や文化が沢山生まれた時代だよ。俺のこの化粧も浄瑠璃から取ったんだぜ？」

「そうなんですか、すごい時代ですね！」

「そうだよ、俺もあの時代に生きたかったとほんと思っただ。だが俺の生まれた頃には忍びは伊賀と甲賀と川越にしかいなかったからな。俺は川越の生まれだ」

「宇髓さんって川越生まれなんですね！ということは、埼玉ですか。意外と近いんですね」

「まあ、確かに近いな、そんな忍びも今の川越には誰も存在しないがな」

宇髓さんが何か含んだようなことを言ったので妖夢が質問する。

「存在しないとはどういうこと？」

「ああ、俺には兄妹がいたんだが、厳しい修行の末にほとんど逃げ出して、弟と俺しかいなかったんだよ。その弟は政府のためにやるぞって言うって国のところに行っただが、2年前の秋に徳川慶喜が死んだ日に殉死したよ、バカだよあいつは」

「そんなことがあったんですね」

宇髓さんの過去は壮絶だった。派手な性格もその過去を隠すためか、そう思った。

「よし、じゃあ任務を話す。まず、遊郭に潜入したら俺の嫁を探せ。俺も鬼の情報を探すから」

伊之助以外はん？ってなる。

そして善逸が沈黙を破る。

「とんでもねえ話だ！ふざけないでいただきたい、自分の個人的な嫁探しに部下を使うとは！」

「はあ？なにを勘違いしてやがる」

「アンタみたいな奴が夫とか嫁はひどいやつなんだろうな！」

そう言われたので宇髓さんは善逸の腹を殴る。

「馬鹿かテメエ！俺の嫁は必死に情報収集に励んでんだよ！定期連絡が途絶えたから俺も行くんだっての？」

「いてて、なに言ってるのこの人」

「じゃあ証拠を見せてやるよ！これが鴉經由で届いた手紙の数々だ！」

宇髓さんは部屋の押し入れを全て開ける。

すると、大量の手紙が崩れてくる。

「こんなにあつたの？すごい！」

「ずいぶん多いですね。かなり長い期間潜入されてるんですか？」

「俺には3人の嫁がいるからな、それに、潜入は9月からだよ」

さらりと宇髓さんは善逸に引つかかることを言う。

「三人!?嫁：：テメエ!!なんで三人も嫁いんだよざっけんな！」

善逸はまた思い切り腹を殴られる。

「何か文句あるか？」

「あの：：それって三人とも姉妹ってことですか？」

妖夢は怒る宇髓さんに質問する。よくその魂胆があるなと感心する。

「ちげえよ、今は三人とも宇髓だが、旧姓は近江、大坂、伊勢と違うからな。それに、三人とも9年は一緒にいる」

「そうですか！わかりました」

妖夢に続き俺もきく。

「あの：：手紙で来る時は極力目立たぬようにと何度も念押ししてあるんですが：：具体的にどうするんですか？」

「そりや変装よ。不本意だが地味にな、お前らにはあることをして潜入してもらう。俺の嫁は三人共優秀な女忍者、つまりくの一だ。花街は鬼が潜むのに絶好の場所だと俺は思ってたが、俺が客として潜入した時は鬼の尻尾は掴めなかった。だから客よりもっと内側に入ってもらったわけだ。既に怪しい店は三つに絞っているからお前らは

そこで俺の嫁を探して情報を得る。一つはときと屋の須磨、二つ目は萩本屋のまきを、最後に京極屋の雛鶴だ。この三人は2週間前にはつたりと連絡が途絶えた。だから1日でも早く手がかりを見つけろ」

俺はその情報を心に留めた。

すると伊之助が耳をほじりながらいう。

「時間経ってるし嫁もう死んでんじやね?」

伊之助は宇髓さんに全力で腹を殴られた。

伊之助はあまりの痛さに気絶する。

「ご入用のものをお持ち致しました」

「おう、ありがとよ」

こうして俺たち7人は宇髓さんの化粧によって変装した。

「うわ、綺麗!こんなに変わるんだ」

「え、これが私?こんな初めて」

「いや、アリスさんも妖夢さんもお綺麗です」

「私の師範は化粧が上手いんだ」

女の子たちは化粧に喜んでいる。

「よし、終わったぞ」

男3人分の化粧が終わると女の子たちは吹き出す。

「なにそれ、変わりすぎでしょ」

「随分と雰囲気が違うわ」

「ふふふふ」

「はっはっはっはっ」

俺たちは気になったので鏡を見る。

そこには濃すぎて白っぽい俺、綺麗すぎる伊之助、そして、どうしようもない善逸が映っていた。

「いやあ、苦労したよ。男の化粧なんて自分の顔以外やったことねえから、それに炭治郎の額の傷を消したり善逸のどうしようもない顔を整えるのにも、猪頭は紅ひいただけだがな」

この顔で本当に潜入できるのかと俺は思った。

「ちくしょう!なんだよ!そんなに笑いやがって」

「いや、私たちよりも伊之助の方が何倍も綺麗だから」

「は!?ふざけんじゃねえ!」

伊之助は綺麗だと言われたことに満足いつてないようだ。

「は?これが俺…」

善逸は自分の顔に呆然としていた。

「よし、それじゃあ行くぞ」

「はい!」

吉原に着くともものすごい人がいる。

これが吉原という花街だからだという。

そこは売りに出された女が身を粉にして男たちに捧げる場所。

そこでは一万人もの遊女が暮らしている。

遊女として出世すれば裕福な家に身請けされることもある。

中でも遊女の実質最高位である散茶女郎、いわゆる花魁は別格であり

美貌・教養・芸事 全てを身につけている特別な女性

位の高い花魁には滅多に会えることができないので逢瀬をはたすために男たちは競うように足繁く花街に通うのである。

「あらくこの子綺麗ねえ、その白髪の子と青髪の子を頂くね。」

「ありがとうございます!400円です」

「いや〜いい子だからそんなに安いなんて、まあ安く買ったからいいもんだわ」

「ありがとうございます!」

こうして伊之助と妖夢は伊之里、妖子として荻本屋に売られた。

「思ったより高く売れた!俺の化粧技術、見たことか!」

「ふーん、そうですか」

「なんか不機嫌だな、女装させたからキレてんのか?」

「善逸はなんか嫉妬してるっぽいです」

「まあな!俺の男前の顔も合わせて派手に決まってるぜ」

そうして次の目的地に向かおうとすると人集りができている。

「おっ、ありや花魁道中だな、ときと屋の鯉夏花魁だ。一番位の高い遊女が客を迎えに行ってるんだよ。それにしても派手だぜ。いくらかかってんだ?」

善逸が反応する。

「嫁!? もしや嫁ですか!? あの美女が嫁なの!? あんまりだよ! 三人もいるの皆あんな美女すか!」

嫁じゃねえよ! こういう番付に名前が載るからわかるんだよ。

すると、小さな女の子がこっちに来る。

「お、ちようど欲しい人がいました! 旦那さん、その長い金髪の子と赤髪の子をください! お題は300円で払います」

「おう、ときと屋の針妙丸さんじゃないですか! それはありがたい! ではよろしくお願いします」

こうして俺は炭江として、アリスは亞里亞として売られた。

一方で善逸はと言うと、

「たーつく売れ残っちゃったな、仕方ねえ、この手を使うしかねえか」

京極屋に弁々と八橋を楽器の弾き手として売った時のついでで売られていた。

鯉夏花魁と屋敷の違和感

「ちよつとどういうこと！こんな傷あったら客なんてつかねえ！あの男すごい綺麗だったけど許さないよ！」

針妙丸さんは激怒していた。

「せっかく300円も出したのに！これじゃ大損じゃない！」

「やめましようよ！針妙丸さん！この金髪の子でもかなりいいお買い物ですよ。この綺麗でお胸もある娘ならかなりお客さんにも受けますよ。それに、この傷のある娘は裏方に回せばいいじゃないですか」「そうだね、私も取り乱したよ。それに、この子結構使えそうな気がする」

翌日

「炭江ちゃん！その籠を運んで！」

「はい！」

「炭江ちゃん！七輪の火が消えそう！炭入れといて！」

「はい！」

俺はテキパキと働いた。

「随分と腕が立つ子だねえ、わたしだったら過労で倒れちゃうよ」

「それに、昨日は針妙丸さんが烈火のごとく怒っていたけど」

色々話が聞こえる。この遊郭は騒がしいようだ。

「炭江ちゃん！お客さんからの差し入れを鯉夏さんの部屋まで運んでくれる？多すぎて、人手が足りないみたいで…」

「わかりました！すぐ運びます」

「私も手伝います！」

「亞里亞ちゃんもありがとう！ほんと、新入りなのによく働くねえ」

「はい！私みたいな傷物でも受け入れて下さることに感謝です」

「私も精一杯頑張つて散茶を目指します」

2人での潜入だが色々と順調である。

「この荷物、重すぎるわ。2人で持てる？」

「はい！大丈夫です！」

2人で籠を六個ずつ持ち、首には風呂敷も巻く。

「これでいいわ、じゃあ炭江、行こう」

「ありがとう！」

2人で鯉夏花魁の部屋へと向かう。

その姿を見た他の遊女が何人か腰を抜かしていた。

「何あれ、あの二人、そんなに力が強いのか？これは、期待の新人だわ」
「強すぎるわ、あれだけ重たい荷物を運ぶなんて、もしかして、柔道か空手でもやってたのかしら」

こうして2人は鯉夏花魁の部屋に着く。

「お邪魔します！差し入れです」

部屋に入ると2人の遊女が噂話をしていた。

「京極屋の遣手の女苑さんとお三津さんが窓から落ちて死んじゃったんだって、怖いね気をつけようね」

「最近足抜けしていなくなる姐さんも多いしね、番付の上の方でも足抜けする人がいるから怖いね」

気になったので割り込んでみる。

「足抜けって何？」

「え、炭ちゃん知らないのお、それに、すごい荷物、お二人さんの持つてるのって」

「鯉夏さんへの差し入れだよ」

「そうそう、足抜けっていうのはねえ、借金を返さずにここから逃げることだよ。見つかったら拷問とか折檻とか酷いんだよ。」

「そうなんだ…」

「好きな男の人と駆け落ちして逃げ切れる人もいるんだけど、この間も吉原番付でも小結の須磨花魁が突然消えちゃって…」

須磨花魁！宇髓さんの奥さんだ…ここにいたんだ。

「噂話はよしなさい、本当に逃げ切れたかどうかなんて…誰にも分からないのよ、それに、もう11月の話だし、今話すことでもないでしょ？」

「はあい」

「お二人が運んでくれたのね、ありがとう、おいで」

「はーい」

そういうと鯉夏さんは差し入れからものを取り出す。

「お菓子をあげようね。疲れた時にはこれを食べると元気になるから、1人の時に食べるのよ、亞里亞ちゃんもほんとよく頑張ってるね、私の次にこの吉原で番付に乗るのはこの娘かも」

「ありがとうございますー！」

「わっちも欲しいー！」

「鯉夏さんー！」

「だめよ、さつき食べたでしょ、それに、食べ過ぎると太るわよ」

遊女たちが鯉夏さんにお菓子をねだるなか、俺はきく。

「あの…須磨花魁は足抜けしたんですか？」

「どうしてそんなことを聞くんない？」

上手く聞かないと、須磨花魁の情報は大事だ。でも警戒されてる。

「ええと、実は…須磨花魁は私の…」

「実はね、須磨花魁は炭江ちゃんの姉なんですよ。それに、炭江ちゃんは須磨花魁のに憧れていたんです。それに、須磨花魁と炭江ちゃんは手紙のやり取りをしてたんですよ。そうですね。炭江ちゃん」

「そ、そうです。それに、姉は足抜けするような人ではないはずで…」

俺は嘘をつくのが苦手で変な顔になってしまうことがかなり辛かった。

この場でアリスがいなければ俺は気味悪がられていただろう。

「そうだったの…確かに私も須磨ちゃんが足抜けするとは思えなかった。しっかりした子だったもの、男の人に逆上させている素振りもなかったのに、それに、あの子はドジだけどやる時はやる子なのよ。だけど日記が見つかっていて…それに足抜けするって書いてあったそのなの。捕まったという話も聞かないから逃げきれていればいいんだけど…」

足抜け…これは鬼にとってかなり都合がいい。人がいなくなっても遊郭から逃亡したのだと思われるだけ、逃亡する人もそれなりの人ばかりだから鬼も潜める。それに、日記は恐らく偽装だ。どうか無事でいて欲しい…必ず助け出すから、須磨さん！

「私たちは他にも頼まれごとがあるので失礼します」

「ありがとうございます」

鯉夏さんの部屋から出ようとする。

だが少し違和感を感じる。

「失礼します」

違和感はこれか！

「あれ、襖の滑りが悪いですね」

「困ったわね、まだこの建物古くないのに」

鯉夏さんの部屋が歪んでいる。

誰かがこの建物に手を加えたのだろう。

部屋に戻ろうとすると少し軋む音が聞こえる。

「アリス、もしかすると、鯉夏さんは狙われているかもしれない」

「ええ、私もなにか違和感を感じたわ。何者かがこの建物を監視しているのかもしれない。それに、女将さんから聞いたんだけど、この店には4年前、蓬姫という花魁がいたらしいのよ。その人の稼ぎでこのときと屋は建て替えたのよ。だからもしかすると…」

「宇髓さんの読みは正しいかもしれない。でも、手がかりが足りない。だからもう少し深く探ってみよう」

「そうね、炭治郎、あなたも気をつけてね」

こうして俺とアリスは情報収集をするために色々聞いて回った。

箸と手がかり

「こんな可愛い子見たことない、短髪の女の子二人も手に入るなんて、しかもこれは間違いなく番付に乗るわ」

伊之助と妖夢、もとい伊之里と妖子は荻本屋に売られていた。

二人は仕切りのついた部屋で同室だった。

「こんな格好暑苦しいわーぬぎてえー」

「だめよ、ここは女性しかいない場所だからね、あなたが脱いだらバレちゃうでしょー!」

「あー、暑い!」

「少しは我慢しなさい、それに、あなたは裏声が掠れるからあまり喋らないように!」

「ちつ、わかったよ」

伊之助はイライラしている。伊之助はいつもならば上半身裸に腰巻きの姿。

なので伊之助が何度も脱ごうとするのを止めるのが今の妖夢の仕事である。

「おい妖夢、帯が緩んでるぞ。まったく、メスのくせに帯の締め方もできねえのか」

「うん、ありがとう…」

そして妖夢にしっかりと着物の着方を教えるのが伊之助の仕事である。

二人のところに女将さんがやってくる。

「二人とも、そろそろご飯にでもしましょうか」

「はい」

「はあくわかりました」

カラカラカラッ

「伊之里ちゃん、よく箸を落とすけど大丈夫?」

「あ、大丈夫です。彼女はちよつと箸の扱いが苦手なだけです」

「妖子ちゃんは伊之里ちゃんに献身的だね。もしかして、お二人さん

仲がいいのかい？」

そんなはずがねえ。俺とこいつとはこの任務を合わせてまだ二回しか顔を合わせていない。それに、俺は箸なんか一度も使ったことねえんだ。

「伊之里ちゃん、箸は親指と人差し指と中指だけで持つんですよ」

妖夢は俺に対して丁寧に教えてくれた。

「はい、よくできました」

妖夢の教え方が上手いので俺はホワホワした。

「どう、箸、使える？」

「あたりめえだよ」

それからは箸を使って飯を食うことができるようになった。

「はあ、食った食った。すげえ美味かった」

「ちよつとだらしないよ！今は女装してるんだから女の子らしくしなきゃいー」

「そうやってガミガミするところほんとアオイと似てるなあ」

「アオイさんと似てる？ふーん、いつもなら名前覚えなくせにアオイさんの名前は覚えるんだ」

「何言ってるんだよ妖糸、ぶっ飛ばすぞ？」

「しっ、ちよつと隠れるわよ」

そういうと妖夢は俺の手を引き噂の場所の近くの角際まで行く。

噂話が聞こえてくる。

「まきをさん大丈夫かしら、最近部屋に閉じ籠もって出てこないけど具合が悪いつて言ったきりで病院にも行かないし、そろそろ青蛾さんに引きずり出されちゃうわよ」

「そうそう、私今ご飯持って行ってあげたのよ。とりあえずまきををさんの好きな紫蘇の天ぷらも乗せてとりあえず部屋の前に置いてきたけどさ」

噂を聞くとやっとな話が聞けた。

「宇髄さんの嫁のまきををさん、もしかしてまだ生きているのかも、でも具合が悪いみたい、でもそれだけで連絡途切れるかな？」

「いや、3週間たったんだぜ？生きてるのはわかったが一通ぐらい手紙を寄越すだろ？」

「それもそうね、怪しいから行ってみましょう」

「おう」

俺たちは西側の花魁の部屋へと向かった。

「ここがまきをさんの部屋のようね、暖かいうどんの置いてある部屋だからすぐにわかった」

「だが妙な気配がするぜ。こんな時にこんな暑いのを脱げたらすぐにも」

「ダメよ！もし見つかったら、あんた男だってバレちゃうでしょ」

ギシッ

「何かあったようだぜ」

「ええ、行くよ」

物音のあるまきをの部屋の襖を開けると至る所に斬られたものや壁に斬り傷があるなど無惨な状況だった。

だが、部屋には誰も人がいない。それに、微かだが風を感じた。

俺は全力でうどんの入った器を天井へと投げつけた！

「おいコラー・バレてんぞ」

すると至る所からギシギシと物音が鳴り響く。

俺は全力で走る。

どこに行く。どこに逃げる。天井から壁を伝って移動するか？

よし、その瞬間に壁をぶん殴って引きずり出す。

何かが蠢く壁に向かい全力で殴ろうとする。

だが、

「おおっ可愛いのがいるじゃないか」

勢いがつきすぎた俺には止められず、そのまま男を殴ってしまう。

「キヤー！殴っちゃった！」

「あ、ごめんなさい！」

クソっ、しくじった！下に逃げてる。

謝る妖夢を後目に俺は下の階を探したり入口の方まで探した。

だが、着物が邪魔で気配が分かりにくい。

俺は齒ぎしりした。

「見失ったアクソツタレえ！邪魔が入ったせいだ……！」

俺は地団駄を踏む。

すると女がやってきた。

「ちよつと、何かあったの？」

妖夢はそれに対して説明する。

「すみません、彼女が何かを追っていたら勢い余って人に拳を打ってしまったようで」

「あら、大変ね。すぐにでもお客さんを手当しないと」

「あんた、人を殴るなんてどういふことなの！お客さんがすごい泣いていたわよ！これじゃあ人前に出られないって、しかもあの人は最近本書きになろうと頑張っている方なのよ」

「申し訳ございません！伊之里も」

「申し訳ございません」

俺と妖夢は女将の青娥さんに謝っていた。

「さつき芥川さんは許してくれたから良かったもの、もし、これで訴えられていたら大変だったんだからね」

俺と妖夢はただただ畳に頭を擦り付けるしか無かった。

「まだ入ったばかりだから大目に見るけど、次はないからね」

こうして俺と妖夢はひとつの手がかりだけを見つけたがそれ以上に迷惑をかけてしまった。

京極屋と太夫の存在

一方、京極屋では、
音芸の会が行われていた。

そこには弁々、八橋、善逸の三人が派手な音楽を奏でていた。
その音楽は現代であればプログレッシブに当てはまるほどの高等
技術だった。

「あの三人、すごい演奏ね」

「あの三人の中でも真ん中の金髪の子、迫力もすごいし、それについて
いく二人もすごいわ」

「最近入った子たち？」

「あの子たちは耳がいいみたいよ。一回聞いたら三味線も琴もマンド
リンも笛もできるらしいわ」

「でも真ん中の子不細工よねえ……よく入れたわねお店に……」

「あの子連れてきたのがものすごい男だったらしいわよ」

「ほんとに？見たかった！」

「遣り手の小鈴ちゃんがぼっとなっっちゃってさ。アタイにはわかる
よ、あの子のし上がるね」

「ええっ？」

「自分を捨てた男見返してやろうっていう気概を感じる。そういう子
は強いんだよ」

「そ、そうなんだ……」

そして善逸はというと

（あー……ふざけんじゃねえよ！俺が売れ残ったからって弁々
ちゃんや八橋ちゃんまで巻き込んで売りやがって！見返してやるあ
の男！アタイ絶対吉原最高の花魁、太夫になる！）

演奏を終え、観客からは拍手が巻き起こり、その最中に三人は屏風
の裏に向かう。

「はあ、ここの奴ら、音がまるで合っていない楽器で弾いてるとかどうか
してるよ」

「確かにそうでしたね。私たち三人で全部の楽器を一晩かけて調律しましたからね」

「ここは吉原一の遊郭ですが、意外と音楽に疎い人も多いのかな」

三人は色々と京極屋に愚痴る。

「それに、善逸さん、いや、善美さん。あんな難しい曲、よくすぐに弾けましたね」

「え、あれは簡単だよ、音がズレただけで実際には抑えるところそれほど無いし」

「私たちよりも上手です！これからもよろしくお願いします」

「俺の演奏技術についてこいよ！」

「はいー」

俺は少し落ち着く。

あれ、なんか俺自分のこと見失ってたわ…そうだよ、俺は太夫になるためにきたんじゃねえ！宇髓さんの奥さんの雛鶴さんを探すんだつたよ。楽器の腕上げたってどうしようもないだろうよ。

善逸たちは三人で手分けして聞き耳を立てながら歩き回っていた。でもなあ、どうしょ。雛鶴さんの情報ないぞ。五日前に死んだのつて楼主の奥さんかな？みんな暗いし口が重いな…

するとかなり遠くから女の子の啜り泣く声が聴こえた。

「一大事だ。今すぐ行かなきゃ」

俺は全力でその場所へ向かう。

部屋をのぞくとあちこちがぐちゃぐちゃになっており、部屋も散らかっていた。

「ちよつとーどうしたの？この部屋」

すると女の子が俺に泣きついてきた。

「実は…先ほど、華扇さんと蕨姫太夫さんが喧嘩してしまって、それを私が止めようとして…」

「喧嘩!?大丈夫なの？その傷、痕残らない？」

女の子はまた泣き出す。

「ごめん！ごめんね！君を怒ったわけじゃ…ないのよ！ごめんね！何か困ってるなら…」

俺の後ろに突然何か気配を感じる。

その音を聴き、俺は絶句し心臓が強く鼓動する。

「アンタ、人の部屋で何してんの？」

鬼の音だ。今後ろにいるのは鬼だ。人間の音じゃない。声をかけられる直前まで全く気づかなかった。こんなことある？これ：上弦の鬼じゃないの？音やばいんだけど静かすぎて逆に怖すぎるんだけど。

「オイ、耳が聞こえないのかい」

俺は体がすくむ。すると他の遊女が話しかける。

「蕨姫太夫様、その人は3日前に入ったばかりだから…」

その鬼は一息を入れる。

「は？だったら何なの？アンタたちには関係ないでしょ！」

女の子たちは蕨姫太夫の威嚇に怯えて立ち去る。

「勝手に入ってすみません！部屋がめちゃくちゃだったし、あの子が泣いていたので…」

俺は言い返す。すると蕨姫太夫は睨みつけながら、

「ほんつと不細工だね…。お前気色悪い…。死んだほうがいいんじゃない？何だいその頭の色！目立ちたいのかい？部屋はさつき喧嘩して荒れたにしちゃったね。片付けとくように言っただけけど」

すると蕨姫太夫は女の子の耳を思い切り引っ張る。

「ぎゃあー！」

「五月蠅い！さっさと部屋を片付けな！」

「ごめんなさいごめんなさい！すぐやります！許してください…」

女の子の耳の付け根からは血が出ている。

いてもたってもいられない俺は蕨姫太夫の腕を掴む。

「何よあんた」

「手を離してください！」

俺は全力で掴んだ腕を握る。だが、女の腕と呼ぶにはあまりにも頑丈だった。

一瞬で吹っ飛ばされる。

俺は斜向かいの部屋の襖を破られるほどの勢いで。

だがすぐに受け身を取る。

「気安く触るんじゃないよ。のぼせ腐りやがってこのガキが騾がいる
ようだねお前は、キツイ騾が」

すると楼主が駆けつけ呼び止める。

「蕨姫太夫！この通りだ頼む！勘弁してやってくれ！もうすぐ店の時
間だ、客が来る！

俺がきつく叱っておくからどうか今は…どうか俺の顔を立ててく
れ…」

「旦那さん顔を上げておくれ…私の方こそごめんなさいね。最近ちょ
いと癩に触ることが多くなって、入ってきたばかりの子に辛く当たりす
ぎたね手当てしてやって頂戴」

そして、他の遊女に対し、

「支度するからさつきと片付けな！」

「はっ、はい！」

楼主も遊女たちに指示をする。

そこに弁々と八橋が駆けつける。

「善美さん！大丈夫ですか？」

「ものすごい音がして駆けつけたんですが…」

俺は思い切り殴られ鼻血を出していた。

「急いで手当場へ」

こうして俺は二時間ほど失神していた。

「いてて、ここはどこ？」

「善美さん！心配したんですよ。それに、左の頬が腫れていますよ」

「あ、さつきさあ蕨姫太夫に思い切り殴られて」

「え、蕨姫太夫！もしかして、吉原一の花魁にして唯一太夫として認め
られているあの！」

「そうだよ、実はさあ……………」

俺は二人に説明した。

「え、どどどどういうことですか！」

「鬼つて…それに、一番目立つ売れている花魁が…」

「おそらくだが一番売れているからこそ、選りすぐりの人しか会えな

い。つまりお金をたんまり積むような奴はお金持ちだから最悪柱とか食われてる可能性もある。だから揉み消ししやすいんだと思う」「なるほど……一番番付が高いと簡単に手出しできませんからね」

蕨姫太夫は鬼だった。しかもかなり強い鬼。

おそろく上弦相当の強さを誇る可能性も、そう思うと震える。

「善子さん、部屋まで送りましょうか。私たちが肩をかしますから」

「ごめんね、二人に手を煩わせて」

俺は二人の肩を借りて部屋へと向かう。

しかし、その直後、俺たちは何者かによつて縛られ、意識が落ちた。

失踪者と太夫の本性

俺たちは四人で屋根の上で報告をしあっていた。

「だーかーら、俺んどこに鬼がいんだよ。あちこちに潜むネズミみてえな感じだったたり部屋をズタズタにできるでけえ感じだったたり」

「いや…うん、ちよつと待ってくれ」

伊之助は精一杯腕を使つて表現してるがさっぱりわからない。

「伊之介さん、騒がしいのでシツですよ」

「それにそろそろ宇髓さんと善逸たちが定期連絡に来ると思うから…」

「善逸たちは来ない」

宇髓さんは突然現れ、俺たちに伝えた。それに俺は聞き返す。

「善逸たちが来ないってどういうことですか？」

「お前たちには悪いことをしたと思ってる。俺は嫁を助けたいが為にいくつもの判断を間違えた。善逸たちは今、行方知れずだ。昨夜から連絡が途絶えてる。それに、お前らはもうこの吉原から出る。まだ未熟すぎる。ここにいる鬼が上弦や元上弦だった場合対処できない。消息を絶った者は死んだと見做す。後は俺一人で動く」

宇髓さんは落ち込んでいる。

「いいえ宇髓さん、俺たちは…」

「恥じるな、生きてる奴が勝ちなんだ。機会を見誤るんじゃない」

「待てよオッサン！」

宇髓さんはそのまま消えるように去った。

「俺たちはまだ丁以下だから信用してもらえなかったのかな」

すると伊之助たちがそれに対して返す。

「俺たちの階級は全員丙だぞ？もうみんなな上位隊士だけ？」

「そうよ、それに、階級は右手を握れば出てくるわ」

3人は拳を握る。すると文字が現れた。

何それ…俺はどういうことなのかさっぱりわからなかった。

「藤の山を降りる前に全員、手に細い棒で弄られたでしょ？もしかして覚えてない？」

「なんかされたのは覚えてるけど、こういうことって知らなかった…」
「元氣出せよ！」

萎える俺に対し伊之助は背中を叩いた。

「そうだ、こんな場合じゃないんだった。ごめん、夜になったらすぐに伊之助のいる荻本屋へ行く。それまで待っていてくれ、二人だけで動くのは危ない。それに、今日で俺たちのいる店は調べ終わるから」

「何でだよ！俺らのトコに鬼がいるって言ってんだから今から来いっつーの！頭悪いなてめーはよ！」

伊之助は俺に対して色々と怒るがそれを妖夢が抑える。

「伊之助、よく聞け、夜の間店の外は宇髓さんが見張っていただろ？でも善逸たちは消えたし伊之助たちの店の鬼も今は姿を隠してる。もしかすると建物の中に通路があるんじゃないかと思うんだよ」

説明すると伊之助は止まる。

「通路？」

「そうだ、しかも店に出入りしていないということは鬼は中で働いている者の可能性が高い。鬼が店で働いていたり、巧妙に人間のふりをしていればいるほど人を殺すのには慎重になる。バレないように」

「そうね…殺人の後始末や人攫いには時間がかかる。血痕は簡単に消せないですし」

「ここは夜の街だ。鬼には都合がいいことも多いが都合の悪いことも多い。夜は仕事をしなきゃならない。いないと不審に思われるし、それに、聞いた話によれば失踪した人は全員昼間、つまり、それだけ目につく可能性が高い人だ。それに、宇髓さんの奥さんを含めて番付を見直すと、十番以内からほとんど失踪している。つまり上位の人間だ。それに、この人たちはみんな生きてると思う。そのつもりで行動する。必ず助け出す。みんなもそのつもりで行動してほしい。そして絶対に死なないでほしい。それでいいか？」

「全部持つてくくなよ炭治郎。俺の言いたかったことはそれだけ」

「わかりました。私たちも絶対に生きて帰ってきます」

「炭治郎、私たちはときと屋の人たちにお礼をしなきゃね」

「アリス！わかったよ」

俺とアリスは二人で鯉夏さんの部屋に入る。

「鯉夏さん、不躰に申し訳ありません。俺たちはときと屋を出ます。お世話になった間の食事代などを旦那さんたちに渡していただいけませんか?。」

「それに、私たちのことを色々と気遣ってください、ありがとうございます。ました」

「炭ちゃん、亞里亞ちゃん、その格好は…」

「訳あって女性の姿でしたが俺は男なんです」

「あ…それは知ってるわ、見ればわかるし、声も、それに男の子だったというのは最初からわかってたの。何してるのかなって思ってたはいたんだけど…、それに亞里亞ちゃんは男に見えてたけど女の子だったのね、そっちの方に驚いたわ」

俺はバレバレだったのか。ただアリスまで男だと思っていたは失礼な気がした。

「事情があるのよね? 須磨ちゃんを心配してたのは本当よね?」

「はい! それは勿論です。嘘ではありません。いなくなった人たちは必ず助け出します」

「ありがとう、少し安心できたわ。私ね…明日にはこの街を出て行くのよ」

「そうなんですか! それは嬉しいことですね」

「こんな私でも奥さんにしてくれる人がいて…今は本当に幸せなのでも、だからこそ残していくみんなのことが心配でたまらなかつた。嫌な感じのする出来事があっても私に調べる術すらない」

「それは当然です、どうか気にしないで、笑顔でいてください」

「私はあなたたちがいなくなつて欲しくないのよ。炭ちゃん、亞里亞ちゃん。」

優しい人だった。少しズレてはいたけど。

俺たちは頭を下げてすぐに立ち去つた。

「はあー、まさかこの背中まである髪をしていながら男だと思われていたとはね」

「アリスのことを男だと思うとは、もしかして俺とアリスが大荷物を持ち運んでたからかな」

「おそらくそれかも…それに、ときと屋の楼主さんも男なのにかかなり長髪だったから」

「人を見た目ですぐ判断するのは難しいからな。それと、今からでもすぐに荻本屋へと向かわないと」

「そうね。向かいましょう!」

俺は急いで向かおうとする。

しかし、ときと屋の方から臭いを嗅ぎ取る。

鬼だ!鬼の臭いが近くにいます!

「アリス!今からときと屋に戻る!鯉夏さんが危ない、それにあの人は失踪する順番でも次だったはずだ!」

「そうね、あの人は今、番付で2番目にいます。そしてこの前失踪した人が3番の人だから、あー、なんで今襲ってくるのよ!鬼つてやつは!」

俺たちはすぐに引き返しときと屋の鯉夏さんの元へ向かった。

「鯉夏さん!大丈夫です…か?」

そこには、番付で一番、蕨姫太夫が佇んでいた。

「あら、鬼狩りの子?来たのね、そう…何人いるの?一人は醜いガキ、一人は青い髪の子、そしてもう一人は茶髪の子でしょ。柱は来てる?もうすぐくる?アンタたちは柱じゃないわね、弱そうなものね柱じゃない奴は要らないのよ!わかる?私は汚い年寄りと不細工は喰べないし!」

そこには帯でぐるぐる巻きにされ首からしたが無いようになっているが死んでいない鯉夏さんとその帯を操る蕨姫太夫だった。

それに鯉夏さんからは血の匂いもしない。

おそらくは吸収するものだろう。

「鯉夏さんを放せ!」

俺はそう言う。すると蕨姫太夫は怒り出す。

「誰に向かって口を利いてんだお前は…」

帯をしならせ凄まじい速さで吹き飛ばされる。

「炭治郎！」

「アンタも油断してるんじゃないわよ！」

アリスも別の方向に吹き飛ばされた。

「ゲホっゲホゲホゲホっ」

速すぎて見えない！手足が痺れる。だが、

受け身は取れた。そうじゃなかったら今生きてない。

手足が痺れているのは俺が怯えているからだ。

それに背中が痛いのは強打してるから当たり前。

あの鬼の武器は帯。帯の中に人を取り込める。建物を探してもほんのわずかしき隙間がなかった訳だ。それに。一寸でも隙間さえあれば人を攫える。これが奴の血鬼術。

「二人ともうまく受け身を取ったのね。ふうん、思ったより骨がある。そこの赤髪は目がいいし、そこの金髪の髪も捨てがたい。そこだけなら喰べてあげる」

俺は背中に手を回すと箱は壊れていないが、紐は片方ちぎれている。次の攻撃を喰らったら壊れる。

「彌豆子ごめん、俺はここに置いていく。背負っては戦えない。だが、箱から出るな。自分の命が危ない時以外は」

水の呼吸。肆の型 打ち潮・乱

俺に対して襲ってくる帯をすり抜け狙い目を斬る。

そしてアリスもすかさず。

恋の呼吸。弐の型 懊悩巡る恋

他の帯も斬られ、針妙丸さんや何人もの遊女も助ける。

「あら、なかなかやるわね、2人とも可愛いね、不細工だけど、なんだか愛着が湧くな。お前たちは死にかけの溝鼠のようだ」

ミミズ帯と集まる仲間たち

一方その頃、荻本屋では

「ああー！遅いぜ！いつまで待たせる」

「遅いですね。そろそろ日が暮れるのに」

伊之助と妖夢は炭治郎たちを待っていた。

「私はちよつと様子でも見に行つてきますね」

「おう、俺は待つてるぜ」

私は様子を見に部屋を離れる。

すると

「あああああ！洋次郎の馬鹿野郎が！待つてらんねえ！俺は動き出すぜ！猪突猛進をこの胸に！」

そう叫ぶと天井をつきやぶる。

「ネズミ共！刀を寄越せ！」

天井裏からムキムキネズミが現れ伊之助の刀を持つてくる。

「よし、2本ともあるな」

そして着物を脱ぎ、部屋の押し入れに置いておいたイノシシの被り物を被る。

「行くぜ鬼退治！猪突猛進！」

そういうものすごい勢いで屋敷内を駆け回る。

私はそれを聞きつけて伊之助の元へ向かう。

「キヤーーイノシシの化け物がー」

「どけどけどけ！伊之助様のお通りじゃー！」

「ちよつと、そんなにドタドタ回ると、怪我させちゃうよ！」

「そんなことはどうでもいい！隙間だ！隙間を探せ！」

私と伊之助で荻本屋を探して回る。

「はあはあ、全然見つかんねえ：どういうことだ」

「伊之助、そういえば空間識覚使えたよね…」

「そうだった！じゃあ、お前ら少し離れろ」

獣の呼吸。 漆の型 空間識覚

数瞬経つと伊之助は両手を下ろす。

「そこだ！北東の台所の近くだ！その床に凹みがある。おそらくはそこだぜ！」

「わかったわ、じゃあ行きましょ」

「おうよ！猪突猛進！」

台所の近く、その床を伊之助は叩き割る。すると、

「グワハハハ！見つけたぜ！鬼の巢に通じる穴を！ビリビリ感じるぜ！鬼の気配！覚悟しやがれ！」

「でもこの穴、小さくない？大丈夫？」

伊之助は穴に頭を突っ込む。

そして伊之助はすぐに頭をだす。

「甘いんだよ！この伊之助様には通用しねえ！」

「え、大丈夫？頭しか入らなかったけど…」

伊之助を心配すると、伊之助が突然ゴキゴキと音を鳴らし始める。

「俺は体中の関節を外せる、つまり頭さえ入れればどこでも行ける！猪突猛進！俺は誰にも止められねえ」

そう言つて穴の奥へと入つていった。

私はそれに少し驚愕し、私は外から回ることにした。

「すみません、私たち、今から行かなきゃならないので、今までありがとうございました」

「ちよ、どういうこと！わかんない！」

「説明は後でしますから！ほんとに今は急いでいるんで！ごめんなさいー！」

私は伊之助の声が聞こえる場所へと向かった。

伊之助はずっと笑い声を上げている。

これを手がかりに探せばいい！

そして向かっていくと。

「お、妖夢！もしかして、今から戦闘に向かうのか？」

「宇髓さん！実は伊之助が穴に入って、恐らく連れ去られた人がいる

場所に向かっているのだと思います」

「お、俺もそっちへ向かうとこだぜ。おそらくは、江戸一の近く、その地下にあるぜ！鬼の食料庫が！」

「わかりました！そっちへ向かいましょう！」

一方の伊之助は

「おつ、広いとこに出たぜ、ここは……」

伊之助の目の前には大量の帯がぶら下がっていた。

その帯には人間が描かれている。

「なんだこりゃ、いや、この感触……生きている人間だ。女の腹巻の中に捕まえた人間を閉じこめとくのか、それで好きな時に出して喰うんだな」

その帯の中に見た事のある柄があった。

善逸と弁々と八橋の3人が1本の帯にまとまっていた。

「何してんだコイツ……」

そういうとカサカサと音がする。

「お前が何してるんだよ……。他所様の食糧庫に入りやがって……汚いね

……気持ち悪いクソムシが！」

帯の化け物が突然喋り出す。

「何だこのミミズ、キモっ！」

「気持ち悪いとは心外だね」

伊之助は刀を強くもち、振り回す。

「ぐねぐねぐねぐね気持ち悪いんだよ！蚯蚓腹巻！」

そう言いながら帯を人のところを避けながら切り裂いていく。

「グワハハハ！動きが鈍いぜ！欲張って人間を取り込みすぎたんだ！

でっぷり肥えたミミズの攻撃なんぞ伊之助様には当たりやしねえ！

ケツまくって出直してきな！」

伊之助はいくつも切り刻み、ゆうに60は超えるであろう人を救い出した。

「チツ、取り込みすぎたか、だが、私はもつと速く動けるんだよ！」

伊之助の刀に帯が絡みつく。
斬れねえ!?!ぐねるせいかな!?

伊之助の刀を巻きついて折ろうとする。

しかし伊之助はとっさの判断で手を離し、刀を弾く。
すると固結びになろうとした帯がつかみ損ねる。

すぐさま伊之助は2本の刀をつかみ、技を繰り出す。

獣の呼吸。 陸の牙 乱杭咬み

帯は伊之助に対し語りだす。

「あたしを斬ったって意味無いわよ。本体じゃないし。それよりせつかく救えたヤツらが疎かだけどいいのかい?」そのことに気づき、伊之助は技を止める。

「アンタにやられた分はすぐに取り戻せるんだよ!」

やべえ!人間を守りながらの戦いをしなきゃならねえのに!

そう思っていると

「猪頭!あんたに助けられたこと、感謝するよ!」

「ありがとうございます!私たちを助けて下さり!」

帯がくなくで床に留められ、動けなくなる。

「ミミズ帯とは上手いこと言うもんだ!」

「ホント気持ち悪いです!天元様に言いつけてやります!」

2人の女が帯を往なしながら助けてくれる。

「誰だてめえら!」

「私たちは宇髓の妻です!アタシはあんまり戦えないですから期待しないてください!」

「須磨!弱気なこと言うんじゃない!」

「だってまきをさん!あたしが味噌つかすなの知ってますよね!一番最初に捕まったし!無茶ですよ!捕まってる人皆守り切るのは!あたし一番死にそうですもん!」

宇髓の妻、須磨は泣き言を言いながらもかなり強い、そしてそれを喝するまきをもまた強い。

「それに、私たちもいますからね!」

「そうよ、私たち九十九姉妹は強いんだからね!」

弁々と八橋も現れ、そして加勢する。

二人は刀を構え、技を繰り出す。

音の呼吸。 弐の型 柔韻

音の呼吸。 参の型 玉響

「お、あの姉妹も随分やるわ、私たちよりも強いかも」

「そんな訳ないよ！ 私たちに扱かれてるんだし、まだまだだよ！」

二人の妻が宇髓の弟子に対して評する。

そうしていると。

「女の子を食らうとはふざけるな」

ものすごい勢いで何かが駆け巡る。

そして止まったとき土煙が晴れると、善逸が着物姿に刀を持ち細々と帯が斬り刻まれた。

「善逸！ おまえも無事だったんだな」

「ああ、油断して連れ去られたが、居心地悪かったよ。それに、今ここには63人の女の子がいる。守らなきゃ、それに、あの蕨姫太夫、あいつが本体だ」

「おまえ、随分変わったな。」

「あの子も鬼殺隊？」

「なんであんな頓珍漢な格好してんの」

「私にはわかりません」

帯の鬼はいろいろ動揺している。

その時爆音が鳴る。

「なんだ！ この音は」

伊之助が気になり出すともう一発起きる。

天井から突然火が吹き出す。

「おい、なんだドンってのは」

「わかりません、でもこの爆発は」

土煙が晴れるとそこには宇髓天元、彼が刀を構えて佇んでいた。

そして一呼吸すると、凄まじい勢いで帯が一寸ほどの大きさに斬り刻まれた。

「まきを、須磨、弁々、八橋、遅れて悪かったな。派手にやってたよう

だ。流石俺の女房と弟子たちだ。こつからはド派手にいくぜ！」
そうキメていた。

そこに、
「宇髄さん！派手なものもいいですが、今はそんなとこじゃないですよ！」

妖夢はそうつつこんだ。

「おいおい、せっかくの格好がつかねえ、それに捕まってた奴らは全員助かった。それだけでも任務としてはいいことだ！」

「天元様……」

須磨は泣き出した。色々であったことの涙なのか、

そんな時、

「天元様、帯が逃げました。早く追わないと被害が拡大しますよ」

「おう、野郎共帯を追うぞ！ついてこい！さっさとしろ！」

こうして57人の人々を放置し、もう一つの戦いの場所へと向かった。

「ところで、雛鶴さんは？」

「ああ、切身世で囚われていたから助けてやったぜ。それに毒を仕込まれていたから解毒剤も飲ませた。雛鶴もおそらく大丈夫だ！」

「私たち3人を平等で愛してくださいさる天元様は素敵！」

「すごいわ、雛鶴まで助けていたなんて、見直しちゃう」

「当たり前だろ！俺は3人の嫁を等しく愛せる男だからな！」

太夫の変貌と二つの限界

ドオオン

「喧しいわね、塵虫が、なんの音よ、何してるの？」

大きな音がある方によそ見する。

「どこ？江戸一の方の第一食糧庫の方ね。それに雛鶴…、アンタたち何人で来たの？七人？」

俺たちに対してきいてきた。

「言わない。おまえなんかには絶対に」

「言う訳ないわ、教えたところで何されるかわからない」

俺とアリスは答える。

「正直に言ったら命だけは助けてやってもいいのよ？それに、ほんの少しの間斬り合っただけでアンタたちの刀、もう刃毀れしてる。それを打ったのは碌な刀鍛冶じゃないでしょう」

「違う！この刀を打った人は凄い人だ！腕の良い刀鍛冶なんだ！」

「私もよ！優しく信頼出来る素晴らしい刀鍛冶よ！」

「ふうん、じゃあなんで刃毀れすんだよ間抜け、それに、あっちでもこっちでもガタガタ騒ぎ始めた。癩に障るから次でお前らを殺す」

使い手が悪いと刃毀れする。それは俺のせいだ。やはり水の呼吸は使いこなせてない。俺は水の呼吸に適した体じゃないんだ。水の呼吸では鱗滝さんや富岡さん、智溜乃さんのようにはなれない。

俺は一撃の威力はどうしてもヒノカミ神樂の方が強い…体には合っているんだ。

でも、その強力さ故に、3連発までは出来なかった。だが今は違う。俺はやれるはずだ、いや、やる。そのために修行をしてきた。心を、燃やせ！

ヒノカミ神樂。 烈日紅鏡

鬼は怯む。

そこにもう一発、

炎舞

避けられた。だがもう1発！いや、危ない、こっちだ！

ヒノカミ神楽。幻日虹

ここだ！

ヒノカミ神楽。火車

「ふーん。遅いわね。欠伸が出るわ」

しまった、隙の糸が切れた。

俺は帯で弾き飛ばされる。

「炭治郎！」

受身をとるんだ！

俺は跳ねながらも最小限に抑える。だが、

ヒノカミ神楽を連発した反動で息が苦しい。

落ち着け。呼吸を整えるんだ。

「あのガキは技を出してへこたれるなんて、ダサいわね」

「炭治郎は必死よ、それに、私がいることをお忘れ？」

恋の呼吸。式の型 懊悩巡る恋

「さっきの子よりは速いけど、遅いわ」

アリスも弾き飛ばされる。

回復の呼吸をするんだ。

そういえば前に連発が初めてできた時は体温が高かった。38℃

を超える熱が出た時は調子が良かった。

それに、今も。

「くっ、はああああ！」

「なかなかやるわね、思ったより面白いわ」

戦えてる。強い鬼と、ヒノカミ神楽なら通用する。いや、通用するだけじゃだめだ。勝つんだ。持てる力全てを使って、必ず勝つ。守るために。そして二度と理不尽に奪わせない。もう二度と誰も、俺たちと同じ悲しい思いをさせない。

「はあああああ！」

俺は全力で体の熱をあげる。

「ふっ、不細工は頑張っても不細工なのよ」

そんな時だった。

「どけどけ！宇髄様のお通りだ！」

宇髄さんの声が聞こえる。

すると突然女鬼の体に大量の帯が吸収される。

なんだ？もしかして、分裂していた分や他の食糧庫の帯が戻ってきたのか？

今なら、隙ができる。

俺は刀を一振りする。だが、その瞬間、消える。

「あく、やっぱり柱ね、柱が来てたのね。良かったわ。あのお方に喜んで戴けるわ」

女鬼の髪は白くなり姿はより禍々しくなる。それに、何か危ない。

そんな時

「お前たち、何をしてるんだ！」

「せつかくのうな重を堪能してくださるために出前で来たのに、って、私の屋台が！」

しまった、騒ぎで人が、それに、水雉屋の人も、なんでここにいるんだ！

「うるさいわねえ、ごちやごちや言うんじゃないわよ」

女鬼が腹を立てる。帯の攻撃が来る。

「だめだ、建物から出るな！アリスも、水雉屋さんを！」

その瞬間に凄まじい斬撃が飛ぶ。

俺とアリスは体が切れて血が出る。

その2人の後ろでは、

「グツ、ぐああああああ」

「腕がああああああああ！私の両腕がああああああ！」

更に、斬撃は大きかったのか吉原の一通り分の建物が切り刻まれて崩れ落ちる。

そこには男も女も叫び声を上げて行く。恐らく被害に遭った人だけで数百はくだらない。

「お兄さん、落ち着いて、あなたは助かります。腕を紐で縛って止血を」

「落ち着いて、早く止血を、この羽織で、両手を結びますから」
俺とアリスは2人のことを気にかける。

すると鬼は人を沢山殺し満足したのか、優雅に立ち去ろうとする。

「さて、許さないぞ…こんな酷いことをしておいて」

「あなたのやった事は残酷です。巫山戯るのもたいがいにして…」

俺とアリスは鬼に対して怒りをぶつける。

「何？まだ何か言ってるの？もういいわよ不細工、醜い人間に生きてる価値無いんだから、それに、その金髪は大分短くなつて、いいわ、最悪の髪型だわ、じゃあ、仲良くみんな死に腐れろ」

怒りがふつつ込み上げてくる。

そんな時にふと思いつく。

煉獄さん達との話を

日の呼吸には選ばれた使い手は君のように痣をつけている。だからきつと炭治郎も選ばれし日の呼吸の使い手だ。

だが、俺の痣は5年前に弟が火鉢を倒した時に鉄薬缶を庇つて出来た火傷の痕です。

それに、加えて何戦も重ねてさらに負傷を繰り返し今の形になりました。俺の父も生まれつき痣はあつたようですが、俺は違います。選ばれた使い手では無いでしょう。でも力が足りずとも、人にはどうしても退けない時があります。人の心を持たない者がこの世に居るからです。理不尽に命を奪い、反省もせず悔やまず、嘲笑います。

そんな横暴を、俺は絶対に許さない！

俺は怒りに身を任せ、何度も刀を振るう。

「太夫、ふざけるな、失われた命は回帰しない！」

「ちつ、小賢しい」

「生身の者は鬼のようにはいかない。なぜ奪う？なぜ命を踏みつけにする？何が楽しい？何が面白い？命をなんだと思ってるんだ。どうしてわからない。どうして忘れる。人間だったろう、お前もかつては、痛みや苦しみにもがいて涙を流していたはずだ！」

太夫の表情は何かにつっかかっていたような形となり、そしてそれを振り払うように地面に拳を打つ。

その瞬間にアリスは、

「お前だけは！お前だけは絶つつつつ対に許さない！人の心を忘れ

たか！それが鬼のやることか！お前も人だったならわかるはずだ！」
太夫に対して斬りつける。

「なら、私は答えるわ。昔のことなんか覚えちゃいないわ。アタシは今、鬼なんだから関係ない、鬼は老いない。飢えない。病まない。死なない。何も失うことも無い。そして美貌を失うことも無い。美しい鬼は何をしても、許される」

「わかった、もういい、それが答えか」

俺とアリスは太夫に対し、斬りかかる。

その瞬間、

血鬼術。八重帯斬り

四方八方を埋め尽くす帯、だが、そんなもの効くはずがない。

ヒノカミ神樂。灼骨炎陽

恋の呼吸。参の型　恋猫しぐれ

さらに速度をあげる。

まだだ。まだ速くなれる。

そして間合いを詰め、俺は首に刃を入れる。

「アンタたちなんかアタシの頸が斬れるわけじゃないでしょ」

柔らかすぎる帯となった首が斬撃をおさえ和らげた。

だが、まだ速くできる。

それに、帯も20本、被害を抑えるには一纏めにする。

でも何だろう。遅すぎる。

「斬らせない！今度こそは、さっきあたしの頸に触れたのは偶然よ！」

太夫は足掻く。だが単調になっている。

帯を一纏めにし、地面に刺す。

さらにアリスも、帯をまとめ、地面に刺す。

これで両方から留められた。

帯を出している太夫の動きが完全に止まり、身動きが取れなくなる。

そして、一気に斬り刻む。

いける。このままなら、一太刀で…

「はっ！」

ゲボゲボゲボ：

俺とアリスは息をせずは何分も攻撃をしていた。

もう既に体力の限界を超え、命の限界寸前まで来ていた。

2人は噎せ、完全に勢いが止まってしまふ。

血涙も流し、顔じゆう血だらけであり一氣に来る反動。

これを超えるのは鬼ぐらいだろう。

「あくあ、惨めよね、人間っていうのは本当に、どれだけ必死でも所詮この程度なもの。気の毒になってくる。そうよね、傷も簡単には治らないし、そうなるわよね」

もはや俺たちは刀を構えるほどの力も残っていない。俺は死ぬのか。そう思った時、

凄まじい音とともに呻き声が聞こえた。

「ヴーーーーー……ヴーーーーー……」

禰豆子、助けに来てくれた。だが様子がおかしい。

もしかして。

暴走ともう一人の鬼

俺は顔をあげる。

その瞬間禰豆子は勢いよく太夫を蹴り飛ばす。

そのまま太夫は転がり、上半身と下半身が分かたれていた。

「ね…禰豆子…」

禰豆子の顔は血管が浮き出るほどの怒りに満ちている。

その禰豆子を見ながら太夫は怒りをぶつける。

「よくもやったわね。アンタ…あのお方が言っていたのは、アンタなのね。」

回復をすぐ済ませ立ち上がる太夫は吐き捨てる。

「なぶり殺してやるわ。苦しみなさい！」

「ブー…！」

禰豆子は太夫に襲いかかる。だが、帯が飛んできて禰豆子の片足を切り落とす。

そしてすかさず禰豆子を切り刻む。

「禰豆子…ゲホッ」

禰豆子は建物に吹き飛ばされる。

「あら、弱いわね。あんたは人を一人も食ってない。なのになぜあのお方からの支配を外せたのかしら？可哀想に、ズタズタになって動かないでしょ？あんたみたいな未熟者じゃその傷はすぐに再生できないでしょうし。同じ鬼だもの、いじめたりはもうしないわ。帯に取り込んで、朝になったら鬼の炭焼きの完成、鬼同士の殺し合いは時間の無駄だ…し？」

太夫はキョトンとなる。

禰豆子はそのまま立ち上がり、傷もほぼ回復している。

「どういふこと？ぐちゃぐちゃになったのよ？なぜもう回復してるの？」

禰豆子は変わっていた。兄の危機を察し、さらに鬼として進化していた。

その回復再生能力はもはや上弦の中でもかなり上に来るほどまで

上がっていた。

「フウウウウウウ、うああああああああ！」

禰豆子は角を生やし、強さを大きくあげていた。

禰豆子は太夫に向かい、再び、蹴りを入れようとする。

だが、帯で足を斬られた。だが、すぐに生えてきて。太夫を蹴り刺す。

「ぐげっ…なぜ、なぜ私の体に足が…」

禰豆子は太夫を蹴ると不気味な笑みをあげていた。

そのまま何度も踏みつける。

それに怒る太夫は帯で再び斬り刻む。

だが、禰豆子は、血を太夫にまきちらし、拳を握る。

血鬼術、 爆血

その瞬間悲鳴とともに太夫からは炎が上がる。

「ギヤアアアア、怖い！怖い！」

太夫は炎に焼かれてながら禰豆子に蹴り飛ばされた。

蹴り飛ばしたことで少し落ち着いたのか。一息をつく。

だが、周りには怪我人や死体が多く散らばる。

禰豆子は血の臭いに再び反応し、けが人の方に襲いかかろうとする。

止めなきや、禰豆子には絶対に人を殺させはしない。

ひどく痛む体にムチを打ち、全力で禰豆子を止める。

「禰豆子ーだめだー耐えるんだー！」

禰豆子の口に刀を噛ませる。

だが、周りの血の臭いは思っていた以上に充満している。

これでは抑えるのも難しい。

「禰豆子ー辛抱するんだー！」

禰豆子は身悶えながら俺を引き剥がさんと暴れる。

そのまま建物に突っ込み、暴れる。

「禰豆子、眠るんだー眠れば元に戻る」

「うあああああああ！ぐあああああ」

理性を失っている。このままでは、どうするんだ！どうすれば、

「炭治郎！よく…聞きなさい」

アリスは振り絞りながら俺に話しかける。

「子守唄、子守唄を歌えば、眠るはず」

子守唄、あの歌だ。あの歌を歌えば。

「ほう、あの妹、派手に鬼化が進んでるなあ、こりやあ炭治郎が死ぬのも時間の問題だな」

宇髄さんの声が聞こえた。

でも、俺にはこの歌を歌うしかないんだ！

「♪~~~~」

俺は子守唄を歌った。

「はあ、ひでえ歌だぜ、あいつ、かなりの音痴だな、俺が調律でもしてやろうか」

その言葉をよそに、禰豆子は少しずつ落ち着きを取り戻す。

母親のことを思ったのか泣きながら元に戻って言った。

「よ…良かった…寝てくれた」

「ははあ、やるじゃねえか、子守唄で寝かせるなんて、ただなあ、音痴なのも大概にしるよな」

「宇髄さん、すみません、禰豆子を暴走させてしまい」

「だがな、お前はよくやった、こいつはお前以外誰も傷つけてない。それだけでも、評価に値する」

宇髄さんは俺の事をほめてくれた。

そんな時。

「よくもまあやってくれたわね。よくもアタシの顔を、それに、なかなか治らないわ。ホント癩に障る」

「おうおう、こりやすげえやつだな、蕨姫太夫、いや、他の名前でも呼ぼうか、蓬姫太夫、それとも、菊姫太夫とでも呼べばいいかな」

宇髄さんは太夫を煽る。

「なぜ知っている。私の、昔の名を」

「俺は知っているぜ。お前が何度も顔を変えて太夫として何度も居座っていたことをよ。それに、ときと屋も荻本屋も京極屋もお前が全部吉原三大にまで仕立てあげたのも」

「そこまで知っているなら、なぜ！」

「いや、俺は共通点を見つけただけで今あげた名前もお前に出すハツタリだ。俺のあげた名前は歴代の吉原太夫だ。そこに気づいたのにお前は動揺した。つまり、お前が犯人だったって訳だな」

何を言ってるのかはさっぱり分からない。だがこの太夫が長年吉原で人を喰っていたことだけはわかった。

宇髓さんはそういうと凄まじい速さで刀を振るう。

「助けてーおにいちゃんー！」

キンツ

すると宇髓さんの刀を太夫の体から生えてきた刃物のようなもので止められる。

「なに？何が起こったんだ？」

「ふー、起こすんじゃないよ、俺はゆっくり寝ていたかったんだがなあ」

太夫の体からもう1人の鬼が生え出てくる。

それを見て宇髓さんは飛び下がる。

「俺の妹に、何しやがるー！」

その鬼は痩せこけたような体をし、鎌のような物を持っていた。

「お、お出ましか、あいつが俺が探っていたやつだ」

「泣くんじゃねえぞ、おめえはいつも俺に縋る。それに、顔の火傷を俺がしっかり治してやる。せつかくの美貌が台無しだぜえ」

鬼は妹の太夫を擦りながら治していく。

宇髓さんは双刀を振るう。

その瞬間兄鬼の方が消える。

現れた時には宇髓さんの額当てが斬られ、血が流れる。

「やるなあああ、俺の攻撃をとめたなあああ。殺す気で斬ったけどなあ、いいなあ、お前のその綺麗な顔お……」

「俺の顔が台無しだな、ただじゃおかねえ」

宇髓さんは兄鬼と斬り合いを始める。

「いいなあああ、その肉付きにその上背、俺は太れねえから妬ましいい」

「俺のことが妬ましい？上等だぜ！俺は派手にお前を倒す」

お互いの斬撃が早すぎる。ここは一度下がるか。

俺はそのまま禰豆子を抱えて下がる。

その時、

「俺が来たぞ！ご到着じゃ！俺を頼りにしろ！」

「ハイハイ、頼りにしますよ！」

伊之助、妖夢、善逸、弁々、八橋、みんなが来てくれた。

「みんな！頼む！宇髓さんを加勢してくれ！それに、あの太夫という鬼にも気をつけて！」

隊士はここに全員揃った。

ここからが本当の戦いだ。

兄妹鬼と決戦

「妬ましい妬ましい、お前は本当に、いい男じゃねえかよ、人間庇つてなあ、格好つけていいなあ。そいつらにとつてお前は命の恩人だよなあ、さぞや好かれて感謝されることだろうなあ」

兄鬼は俺に対し妬んでいた。

「まあな、俺は派手な色男だし、女房も3人、それに、継子もいるが2人とも女だ」

「お前は本当にイライラするうう、ふざけるなよなあ！許せねえなあああ！」

血鬼術。 飛び血鎌

この斬撃は庇いきれねえ、ならば、

ドオオン

宇髄さんは足元を爆発させ、建物の1階へと降りる。

「逃げる！身を隠せ！ここは危ない！早く！」

「はい！」

庇っていた人を逃がす。

「逃がさねえからなあ、俺が八つ裂きにしてやるよ」

途端に飛び血鎌がうねり、斬撃がぐねぐねと動く。

斬撃自体を操れるのか。敵にあたって弾けるまで動く血の斬撃、

あの兄妹は特殊な技を使う。ならば、

俺は火薬玉を投げ、斬つて爆発をさせた。

爆発が起き、建物は大半が吹き飛ぶ。

だがそこには帯の玉が現れた。

「まあ、一筋縄にはいかねえわな」

帯玉が解かれたところから兄妹鬼が現れる。

「俺たちは二人で一つだからなあ、それに、俺たちは強いんだよお」

「私たちは上弦なんだからね」

「何を言ってるんだ？お前らは違うだろ」

どう見てもおかしいことは分かる。目に刻まれた字が違うから。

「嘘言つてんじやねえよお、それに、お前の目は節穴かあ？」

「いや、お前の方が節穴だよ」

「やっぱお前は違うなあ、才能を持つてるんだろ？お前は早く死んでもらいてえなあ」

「俺に才能なんてもんがあるように見えるか？俺程度で見えるならてめえはおめでたいやつだよ。何百年生きてようがこの吉原にひきこもつてりやあ世間知らずのままでも仕方ねえか。この国は広いんだぜ、凄え奴らがウヨウヨしてる。得体の知れねえ奴もいる。女なのにいくつもの技を持つ奴もいる。心を読めるやつも、刀握つて二月で柱になるやつもいるんだぜ。俺が選ばれてる？ふぎけんじやねえ、俺の掌から今までどれだけ沢山の命が零れ落ちたと思つてんだ！」

俺は論破した。

「だつたらどう説明する？お前がまだ死んでない理由はなんだ？俺の血鎌は猛毒があるのにいつまでたつてもお前は死なねえじゃねえか」

「俺は忍の家系。耐性つけてるから毒はほとんど効かねえ」

「忍なんて幕府の頃に耐えたはずじゃ、どういうこと」

俺の一族は川越の最後の忍の一族だ。だが、徳川の一族に生き延びると言われた腰抜けの一族だ。それに、明治時代には日清戦争や日露戦争にまでこき使われしまいは俺の弟も死んだ。そんな時、俺を救つてくださったお館様は素晴らしいお方だ。広い心を持ち、どんな事でも受け入れてくれる。お館様に出来る数少ない感謝と報告、引つさげてやりますよ。

俺は少し視界がボヤけ、ふらつきそうになる。

「ひひひひつやつぱり毒効いてるじゃねえか、効かねえなんて去勢張つてみつともねえなあ」

「いいや全然効いてないね。全力で舞い踊つてやろうか、舞いながらも天井十杯食えるわ、派手にな！」

俺は全力で双刀を振り回す。2体の鬼を相手に、

妹の方を蹴り飛ばし、そのまま相手が怯んだところを、

「俺の妹を蹴るんじやねえ！」

「この糞野郎！」

火薬玉を飛ばして、お互いの武器に触れさせる。

ドドドドドドド

帯も鎌も摩擦で爆ぜる。その隙に、斬る！

兄の方の首が飛ぶ。だが、

妹の方は首を帯にして何とか耐えたか。

「ちっ、こっちは仕留め損なっただか」

「俺の頸を斬るとはなあ、やるじゃねえか、2年近くぶりだよ。首が飛ぶのは」

頸が飛んだのに何故か話せる。もしや、

「言っただろ？俺と妹は二人で一つだからなあ」

両方の頸を飛ばさなければ確実に倒せない。これが奴らの本当の強さか。

「ふふ、その様子だとじわじわと死に近づいているのに気づかない？」

「俺はまだいけるぜ。派手な戦いがよ！」

「俺たちはもうすぐお前に勝てるんだよ。お前の死によつて」

「それはどうでしょうか！」

「俺たちを忘れちゃいけないぜ！伊之助様とその手下がいるんだぜ！」

4人も来てくれた。これは助かる。

「なんだこいつら！隊士が何人来ようが俺たちには勝てねえ！」

そして、2階から飛び降りる人影、そいつは。

「俺たち鬼殺隊がお前たちお荷をこの場で斬る！」

炭治郎が現れる。5人が来た。これは勝てるかもしれない。

炭治郎は怯えていた。なにか重々しい雰囲気を感じ取り。そこで

俺は言う。

「勝つぜ！俺たち鬼殺隊はお前らなんか」

「勝てるわけないわ！頼みの柱は猛毒にやられてちやあね」

俺は確かに猛毒に冒されている。だがここで返さなければは格好がつかねえ。

「余裕で勝つわボケ雑魚があ！毒回ってるくらいの錘があつてトントンなんだよ！人間様を舐めんじゃねえ！それに、こいつらは全員俺の

優秀な継子だ！逃げねえ根性がある！手足が千切れても喰らいつくぜ！そしてテメエらの倒し方は既に看破してる！同時に頸を斬ればいい。二人同時に斬ればな、そうだろ！そうじゃなけりや能力分けて弱っちい兄を取り込まねえ理由がねえ！ちよろいぜお前ら！ハーーーーッハッハッ！」

強がりだ！俺も限界がかなり近い。思っていた以上に毒が強い。

「簡単だな！俺たちでもできることだ！ここにいる手下ここからも合わせればな！」

伊之助は鼻息を荒らげる。

「その簡単なことが出来ねえで鬼狩り達が死んでったからなあ。柱もなあ。俺が十五で妹が十三食ってるからなあ、それに、俺の頸を飛ばしたのは、そうだなあ、幽々子っていう鬼狩りだったかなあ、俺の毒が回りきって、そのまま死んだがな」

兄鬼の言葉に妖夢が反応する。

「お前があ！お前が幽々子さんを！よくもやってくれたなあ。私の刀で頸を刎ねてやる！」

妖夢が怒り出す。そして兄鬼に対し、刀を振るう。

「よっしや！螻蛄は俺と楊子とサンガツに任す。お前らはミミズ女を倒せ！わかつたな！」

こうして二手に別れての戦いが始まった。

兄鬼と攻略法

「お前は、絶対に許さない！私の刀で…」

「ほう…よくそのちいせえ体でやろうとしてるなあ。女の子は黙ってままごとでもしてろよお」

私の心は怒りがふつふつと煮えたぎっている。

倒さないと、絶対に倒さないと。

「妖夢ちゃん、はやるのもいいが、俺たちもいるんだ。力を合わせよう」

善逸が横に立つ。

「俺は親分だから子分の面倒をしなきゃな」

伊之助も同じく立つ。

「わかりました。やりましょう。私たち3人で、あの鎌野郎の首を」

「お前らは仲間がいて幸せだなあ…そういう奴から俺たちは取り立てねえと俺たちの不幸の分は取り返せねえ。それが俺たちの生き方だからなあ…お前らは3人まとめて鎌で刎ねとばしてやるよお」

妖夢が先陣をきって技を放つ。

魂の呼吸。 伍の型 荒御魂

兄鬼の方の左腕が飛ぶ。

「ちっ、逸らしましたね」

雷の呼吸。 壺の型 霹靂一閃 三連

両足を切り落とされ倒れそうになる。

しかし、

すぐさま回復をし、鎌を振るう。

血鬼術。 飛び血鎌

斬撃が大量に飛び回る。

「その技は既に見きった！」

伊之助は足元に転がっていた瓦を何枚も投げて止める。

「伊之助さん、流石ですね。技の特性を瞬時に察するなんて」

「そうだろう。俺を崇めよ！」

妖夢が伊之助に感心している。すると、

「危ない、よけろ！」

善逸が何かを察しすかさず避ける。

その瞬間を見ると、帯が大量に襲ってきた。

「なんとか…、なりました」

私の体には切り傷がいくつもついた。

善逸や伊之助も同じく、

「ひひひ、俺と妹の両方の技を使えるんだよ。今は俺と妹は、視覚が繋がってわかるんだよ。お互いにな」

共視覚、それに技の両打ち、これがこの鬼の本当の強さか。

「技を片方見きったところで、勝ったつもりになんかなあ！」

飛び血鎌がいくつも放たれる。

それを抑えるのにも私たちは必死だ。

帯も避けながら戦うのは至難の業だ。

ならば、

「伊之助さん！刃こぼれしたその刀で、帯を絡めとってください！それが今の得策です」

「なるほどなあ！ギザギザに噛ませれば絡め取れるなあ！なかなかやるじゃねえか」

伊之助は帯を何枚も刀に絡ませて、巻きとる。

そこへすかさず善逸の霹靂一閃も加わり、細々に切り裂かれる。

「どうやらあなたは、帯を使いこなせてないようですね。先程の妹の方が多く帯を出せたようですが」

出せた帯はそれほど多くない。

首を私は刎ね飛ばす。

だが、

「お前らは、俺の事を弱く見てねえか！俺の本当の強さはこれからだよ！」

血鎌の斬撃が大量にあらわれる。

血鬼術。円斬旋回・飛び血鎌

まずい、このままじゃ、みんなやられる。

音の呼吸。肆の型 響斬無間

凄まじい斬撃が、切り刻まれて消える。

「なんだあ、その技は」

土煙の先から現れたのは

「お待たせしました！吉原の人はほとんど避難しました！」

「私たちも加勢します！」

弁々さんと八橋さん、来てくれたんだ。

「助かった。死ぬかと思ったよ」

「俺も血の刃にはぶるっちゃまったぜ」

善逸さんと伊之助さんはほっとする。

「仲間が増えただとお、5人もいるなんて聞いてねえ、それに、5対1とか卑怯だろおよお」

「卑怯ではありません。それに、あなたも強い、だから私たちは力を合わせてるんですよ」

「鬼狩りにほめられたところで嬉しくねえ」

兄鬼は震えながら斬撃を放つ。

数も多い、それに、一つ一つが重い。

「どうしたあ、さっきまでの威勢はあ、お前ら人間は弱いから嫌いなんだよお」

斬撃に押される。

その時、炭治郎さんの言ってたことを思い出す。

「力と力がぶつかる時に、強い方が勝ってしまう。弱いならば、受け流せ！」

私たちは斬撃を同じ方向へと受け流す。

すると斬撃同士がぶつかり合い、相殺する。

「急に連携が取れてきたなあ。お前ら、やはり継子かあ？」

「正確には継子はこの2人だけです。私たちは宇髄さんの継子じゃないです。もしかして、信じてたんですか？」

兄鬼は地団駄を踏む。それをしながら斬撃を放つ。

「飛び血鎌を四肢全てから出すのは久々だあ、ここまで俺を怒らせたのは100年振りだよお！」

「そうですか！あなたには私たちに勝てないと思いますよ」

「それはどうかなあ、お前らはどんどん、俺の毒に蝕まれてるんだぜ？」

斬撃に触れたら最後、猛毒で死ぬ。呼吸で私たちは毒の巡りを遅くしているものの、その毒は強力だ。幽々子さんはこの血鎌をくらって死んだ。だからこそ奴を倒さなければならぬ。

「鈍くなっているのはあなたも同じでは？ 私たちは本気で戦っているんですよ！」

「ふん、だからなんだよお、俺はお前らを喰らいてえ、あの女を喰ってから、俺は一人も人間なんか食ってねえんだよ！」

「空腹でしたか、その姿を見れば一目瞭然ですよ」

私は散々煽った。相手も幾度となく斬られ、頸も2度刎ねられている。

つまり、こいつは上弦には値しない鬼だ。

「ふざけんなよ！俺がどれだけ苦労したかわかってんだろお！」

兄鬼は涙を流しながら斬撃を飛ばす。

だが、鬼の斬撃は単調になっている。

「ならば、もう一度刎ねられなさい！」

「や、やめろ！俺を取り立てるな！」

兄鬼は再び頸が刎ねられた。

だが、やはりおかしい。

なぜ、頸を刎ねられても死なないのか。

やはり、2人同時に飛ばさなければならぬ。

ならば、頸を持って逃げればいい。

私は頸を抱えて走った。

これなら、相手の方が頸を刎ねてくれれば終わる。

そう思った時、兄鬼が突然大声で叫び出す。

「やめろ！やめるんだ！それだけは絶対に！今すぐ目を瞑れ！」

その意味を知るのには私たちは少し時間がかかった。

誇りの崩壊と涙を流すもの

「なかなかやるじゃねえか、弱いと思っていたが、こっちの方が恐らく力じゃ上だ」

宇髄さんはそう見る。

「私は強いのだよ！私は上弦なんだから！」

妹鬼はそう叫ぶ。

「何を寝ぼけたこと言ってるんだ？鏡でも見て出直せ！」

「何を言ってるの？私は上弦の陸、堕姫よ！おかしいのはアンタたちの方よ！」

俺は堕姫の目を見る。そこには『下弦 弐』と刻まれている。

堕姫の言っていることは間違っている。何故だ。

そう考えていると斬撃が飛んでくる。

俺は全力で止める。

宇髄さんは帯を双刀で抑えながらアリスは攻撃を仕掛ける。

「あなたは記憶違いでも起こしてるんじゃないんですか！」

その時、帯から血鎌の斬撃がまとわりつく。

「アンタたちの動き、全部読めるわ！兄さんが起きたからね！これがアタシの本当の力よ」

アリスに斬撃が襲いかかる。刀で捌き切ろうとするも隊服が斬られ、右の袖に切り込みができる。

「私の帯からは斬撃も出せるの？今は兄さんと技を共有している。それに、兄さんの方の戦いもよく見える」

「厄介な奴だ。そんなことまでできるとはなあ、だが、お前の斬撃はあいつと違ってまだ弱い。とにかく、今のうちに手を打つぞ！野郎ども！」

俺たちは帯を斬る。だが、帯が掠った時、俺は気がつく。

「宇髄さん！帯に、毒が仕込まれています！もしかすると血鎌の！」

「ああ、そんな気がした。だからこそ、抑え込むんだ。奴の帯を纏めてそのまま両方で引け。そうすれば、あいつは動きが鈍る。その瞬間に俺があいつの頸を刎ねる」

宇髄さんは俺にそう伝えた。なら、それを実行するまで、
堕姫はおびただしい程の帯を飛ばす。それを俺は何本も串刺しの
ように刺し、纏めて引いた。

アリスも合わせて同じことをする。

だが、それだけで話が済めば良かった。

斬撃が帯から噴き出し、襲いかかってくる。

斬撃を防ぐためにも、纏めた帯を盾にしなければならぬ。

帯はまた細切れになる。これではラチがあかない。

宇髄さんは天井を火薬で爆破する。おそらくは目隠しのためだろ
う。

だが、天井を爆破したことにより2階にあった鏡台が落ちてくる。

そのまま鏡台は鏡だけを砕かれずに、台だけが砕ける。

「ちようど良かった！鏡でも見て自分の目でも見やがれ！」

宇髄さんは煽る。

「は、見たところで私は上弦なん…だ…か…ら？」

堕姫は鏡を見る。すると、突然、震え出す。

「私は上弦のはずよ？どうして私の目に刻まれたものは違うの？こ
れは夢よ。夢なら覚めなさい」

「夢じゃねえぜ！お前は下弦だ！その強さで下弦なら上弦はどんだけ
強えのか気になるぜ」

「私は私は私は…上弦…上弦…」

堕姫の心がピシツと割れる音がきこえた気がする。

堕姫は背を反らし頬を抑え、高笑いをあげる。

「キヤハハハハハハハハ！もう全部、無くなっちゃえ！」

堕姫は今までとは比べ物にならないほどの帯を体から飛ばす。

「まずい、奴が完全に壊れた。こうなりや、全力でやるしかねえ」

帯は毒々しい色となり、更には斬撃を纏っている。

それも今まで以上に強力なものだ。

帯は辺り一面を破壊し続ける。

「なんだなんだ！何が起こってるんだ！」

兄鬼の方で戦っているところでも伊之助が騒ぐ。

「妖夢ちゃんが刺された！それに、こっちも暴れだした！」

兄鬼が堕姫の方を操る。その主導権が堕姫の方に移っていた。

帯の数は増えていくばかり、切り抜けなければ、

「俺に考えがある。炭治郎！アリス！5分だけ耐えてくれ！俺は兄の方に行く！」

宇髄さんはそう言ってその場から離れる。

俺とアリスは暴走する堕姫の帯を躲しつつ攻撃の機会を伺った。

その頃、妖夢達は

「突然、頸を持ち去ったと思ったら体の方が技を出してくるなんて、卑怯です！」

「鬼を倒しきるまでは油断すんな！これは親分からの忠告だ！」

妖夢たちは傷だらけになりながら兄鬼の斬撃を切り抜けていた。

「妖夢、あの鬼は戦いを拒む音が聞こえる。おそらく、あいつは妹の方に主導権を奪われている。それに、あいつを見ろ！涙を流している。あいつに訴えかけるんだ！」

「わかりましたよ！奴の頸をまた刎ねればいいんですね！」

兄鬼の斬撃を掻い潜り、妖夢は刀を振るう。

「た…すけ…てくれ…妹を…妹が」

涙声をきいた妖夢は一瞬止まる。

その時妖夢を斬撃が襲う。万事休すか。

そう思った時双刀が斬撃を防ぐ。

「宇髄さん！どうしてここに」

「油断するなよ！ああ、話がある！実は…」

宇髄さんは妖夢たちに考えを話した。

「え！そのやり方ってできるんですか！」

「できるも何も、俺の継子ができるからやるんだよ！」

「でも、もし通じなかったら」

「その時のことも踏まえて俺はいくつもの”譜面”を組んだからな」
宇髄さんは譜面を組んでいた。それが宇髄さんの戦術だった。

「弁々！八橋！奏でろ！」

「はい！」

「♪」

2人は音を奏でた。すると、兄鬼の斬撃が弱まっていく。

「お前は妹を止めようと思わないか！お前だって、本当はそうしたいはずだ！なら、共感覚を切れ！」

「頸を…頸を斬って…」

「お前ら！あいつの頸を斬れ！」

「おう！」

「わかった！」

善逸と伊之助は襲いかかる斬撃を打ち消し、道を作る。

「これはあなたを恨む刃ではなく、あなたを救う刃です。因敵ですが、仕方ないです！」

兄鬼の頸が飛ぶ！その時、斬撃が消える。

「ハッ！俺は、一体…」

「あなたは乗っ取られていたんですよ。妹に」

「すまねえ、殺そうとしてたやつに助けられるなんて」

兄鬼は情けなくなつた。

「なぜ、あの妹は暴走したんだ？」

宇髄さんは兄鬼にきく。

「実はだなあ、俺たち兄妹は2年ほど前までは上弦だったんだ。だが、大血戦で俺たちは降格したんだ。それに、俺はあの時、妹には戦うなと言つて俺だけ戦つた。だが、新しい鬼があまりに強く、俺はなすべなく負けた。それを妹には知つて欲しくなかつた。だから俺が起きるまで妹の目に数が現れないようにしたんだ。俺が弱くなつたばかりに」

兄鬼は懺悔した。

「なら、お前はこうするんだ」

「俺は、全力で妹の暴走を止める。もう、俺たちの育つた吉原を壊す姿を見たくない。だから…」

「ここは一つ手を組むか。倒すべき相手も決まった事だし、お前は妹

とともに逝けばいい」

「ありがとう。こんな人間がもつと早くあつていたらなら、俺たちはこんなことにならなかつたかもな。名を名乗つてなかつたな。俺は妓夫太郎。そう呼ばれてたからその名しかない」

「妓夫太郎か、なかなかいい名じやねえか？じやあここは一旦停戦だ！」

宇髓さんたちは墮姫の元へと向かった。

共存願望と兄妹の最期

「まだ？少し遅い気がするけど」

「耐えるんだ！今はこいつを抑えないと！」

俺とアリスは帯を切り抜けながら交わす。

堕姫の帯は数をどんどんと増えている。

帯の斬撃も強くなり、隊服もボロボロになる。

その時、

「すまねえ、遅くなった。これから派手に行くぜ！」

「宇髓さん！」

「遅いわよ！」

宇髓さん達が駆けつけてくれた。

だが、そこには居るはずのない者が、

「目を覚ませ！俺のことが分からないのか！」

兄鬼がその中にいる。

「どういうことですか？宇髓さん！」

「話はあとだ！今はこの妹、堕姫の攻撃に隙を作らなきゃな！」

音の呼吸。 伍の型 鳴弦奏々

獣の呼吸。 弐の牙 切り裂き

魂の呼吸。 壺の型 乱魂

雷の呼吸。 壺の型 霹靂一閃 八連

大量の帯が瞬く間に切り裂かれ弾け飛び、堕姫の姿が現れる。

「今だ！堕姫の所に跳べ！妓夫太郎！」

「言われなくても、わかってるよお！」

妓夫太郎は全力で跳び、堕姫の体を抱く。

だが、完全に暴走しているせいか、全く反応しない。

「目を覚ませ！俺だ！お兄ちゃんが来たんだ！」

その言葉も虚しく妓夫太郎の体は切り刻まれる。

「お前は、俺のたった一人の家族なんだ！俺たちの育った吉原を壊す

のはやめろ！梅！」

妓夫太郎がそう叫ぶと突然攻撃が弱まる。

それだけすれば、俺は十分だ」

「お兄ちゃん…私は…私は…うわああああん」

堕姫は泣きじゃくる。これが吉原最後の太夫の泣き顔か。

「じゃあ、色々あったが、約束通り、俺の頸を斬ってくれ。俺は妹とも逝くと決めていたから」

妓夫太郎には覚悟が決まっていた。本当に死ぬ気だ。

「なら、私が斬りましょう。私にはこの鬼に因縁があるので」

妖夢は刀を構える。

「最後に言い残すことはありますか？」

妖夢は妓夫太郎に質問を投げかける。

「最後に、幽々子の言っていたことをお前に伝える。鬼と人間は仲良くなる。長い命があれば人を食うかもしれない。でも、それ以上に人への感謝と貢献をすればいい。私は人を食う鬼だから首を刎ねるんじゃない。人のことを恨み、妬み、人間のことを蔑むから首を刎ねる。その罪をもう重ねないためにも、私はそれを全うしているだけ。いつか人間と鬼が手を取り合い、共存できる世界が出来たら、みんながその世界で生きられたら、私はそれを言ってくれた姉弟子の思いも継いでいきたい。それを言われて以来、俺は幽々子以外の人間を喰っていない。そう、俺が最後に食ったのは、幽々子の心臓だけだからな」

妓夫太郎はそういうと、苦笑いをした。

「そんなこと言われたら、斬りにくいじゃないですか！バカ！」

妖夢は妓夫太郎の頸を刎ねた。その時、妖夢は涙を流していた。

2人の頸はお互いの顔が向かい合わせになる。

「お兄ちゃん！私は生まれ変わっても、お兄ちゃんの妹になる」

「俺もだよ。もし生まれ変わったら、俺はお前の兄になる」

2人は幸せそうな顔をする。

すると、妓夫太郎が俺のことを呼ぶ。

「お前たちに俺から教えることがある。俺たちを鬼にしたのは上弦の童磨という鬼だ。そして、その上に立つのは2人の鬼の始祖、それは…」

妓夫太郎が名を口にしようとするや突然、頭がふくれあがる。

「お兄ちゃん！どうしたの！そんな！そんなあああ！」

妓夫太郎の頭は膨れ上がり、破裂して、砕け散った。

「いやあああああああ」

その断末魔とともに堕姫は塵へと帰る。

「なんとも後味悪いぜ！死に際までぶち壊すとはとんでもないやつだぜ。鬼舞辻無惨というやつは」

宇髄さんはそう口にする。

だが、俺はおかしいと思つた。鬼舞辻無惨の呪いとは違う。もし本当に無惨の呪いなら、至る所から腕が生え、ぐちゃぐちゃに潰すはずだ。

「宇髄さん、これは無惨の呪いではありません！俺は見た事があります。奴の呪いは爆発とは違います。もしかすると、もう1人の始祖の方かもしれません」

「ほう、お前は見たことあるのか、無惨を見たことがあるというが、そんな所まで知つてるとはなあ。なるほど、面白くなってきたぜ！」

俺はそのことを聞きながら服のポケットから小さな刀をだし、妓夫太郎の血を取った。

「こんな救いのない終わりなんて、悲しすぎる。それに、あの兄妹はもしかすると俺と禰豆子だったかもしれない。そんな気がする」

俺はそう思い、その小刀を抱きしめながら、気絶した。

「おい！大丈夫か！しっかりしろ！」

「アリスさんも意識がありません！急いで手当を」

こうして俺は運ばれて行つた。

崩壊した吉原と新たなる戦いの兆し

「ふう〜、やっと終わったぜ」

俺は瓦礫の広がる吉原を座りながら眺めていた。

あとは全員の解毒を済ませれば終わり、なんとも複雑な任務だった。

「天元様〜」

「おう！雛鶴！まきを！須磨！みんな大丈夫だったか…」

俺は目が眩む。ここまでの激戦で毒をかなり受けた自分の体は限界が近づいていた。

「天元様！大丈夫ですか！」

「天元様あー！いやあああ！」

毒の巡りを遅らせるにも、あの鬼たちの毒は強く、俺の体を蝕んでいた。

そのまま俺は仰向けに倒れる。

「すまねえ、お前たちには言い残すことがある。今、俺は素晴らしい子たちに会えて本当に良かった！あいつらには俺が死んだあとの未来を助けて欲しい」

「そんな！天元様！死ぬなんてだめですう！」

「天元様！早く解毒を済ませなければ」

「天元様には生きてもらわないと！私たちは」

3人の妻たちが俺のことを気にかけている。いい妻達でよかった。

そう安心して死のうとした時、ひよこつと禰豆子が現れる。

「おまえ、どうしたんだ…？」

俺の体に触れると、突然俺の体が炎に包まれる。

その炎はすーっと楽になるやさしい炎だった。

「どういうことなの！火葬なんて早すぎるわ！」

「何を燃やしてるのよ！この女！」

妻たちは良くもわからず泣き叫ぶ。

「一体どういうことだ？」

俺の体を包んだ炎は鬼の毒を全て消すものだった。

覚悟を決めて死ぬつもりだったのに、生き延びてしまった。これでは恥ずかしい。

「彌豆子ちゃんのすごい力が俺たちの毒を飛ばしてくれたんだ！」

善逸が説明をする。もしかすると炭治郎の言っていた鬼の効力を消す血鬼術というものなのかもしれない。

その力が本当にあるのなら、おそらくこの先の戦いでも役に立つかもしれない。

だが、本当にあることは俺自身が体験した。

「すげえぜ！俺を救ったこと、感謝に値する。お前のその力！お前の兄の危機の時には切り札になるぜ！お前のその力！存分に使い！」

彌豆子という鬼は不思議なものだ。この鬼を連れている炭治郎という奴も、また不思議だと思う。

「みんなく、ケガは大丈夫ですか〜！」

「お前らが危ないって聞きつけてきたら、どういふことなんだよこれは！」

遠くから声がする。柱でもお似合いの組み合わせと言われる2人が駆けつける。

「遅えじゃねえか、全部片付いたぜ」

「遅えも何も、お前の継子に言われて俺と甘露寺の2人で吉原の人々全員を避難させていたんだ！それに、甘露寺が手当もした方がいいと思うからそこまでやってたんだよ！」

「私もアリスちゃんのことを気になって、駆けつけたらこれはどうなっているのでしょうか…」

俺は事情を説明する。

「なるほどな、お前らが倒したのは下弦の式だな。十二鬼月減らせたこと、実にめでたいことだな。褒めてやってもいい」

「お前に褒められたところで嬉しくねえよ」

「それに、お前はとうするんだ、まさか引退なんて考えてねえよな」

凶星を突かれた。引退してゆつくりと3人の妻と隠居でもしようと思っていたのに。

「引退はしねえ、だが、俺は暇が欲しい。3ヶ月の間この任務につい

てたからしばらくの間だけでいい、俺は家族の時間というものを満喫してえんだ」

俺は引退出来ないなら休暇なら大丈夫だと苦し紛れに言い返す。

「わかった、だが、新年会の時までには帰ってこい。それまでは休んでもいい」

「ありがとな、俺が休んでいる時は任務は押し付けてくんよ。わかったな」

伊黒に対して俺はそう伝えた。

甘露寺はというと、

「アリスちゃん〜！どうしてこんな傷だらけなの〜！私が送り出したばっかりに〜！」

アリスを抱きかかえて泣いていた。

「甘露寺、俺が手を回しきれなかったばかりに、すまねえ」

俺が妹鬼の方の戦闘を2人に任せただけに情けなく思う。

アリスは顔や手足にも深い傷がある。女は傷が付くと価値が下がると言われる。

だからこそ、こんな傷だらけにしてしまったのは俺の配慮不足だった。

「それに、アリスちゃんの自慢の長い髪はどうしたの〜！こんなに短くなっちゃって〜！」

その部分には気が付かなかった。思えば背中まであるほどのアリスの髪は肩ぐらいいまで短くなっていた。妹鬼との戦闘で髪を切られたのかもしれない。

「甘露寺を泣かせるとはどういうことだ！責任を取ってもらおうか〜！」

「わかったわかった！帰りにでも飯を奢ってやるよ！それならいいだろう〜！」

それを言われると甘露寺はものすごく喜んでいった。

「あと、報告がひとつあってだなあ、この吉原は、万世極楽教の繋がりが深い場所だった。ここの鬼が斃された今、おそらく、その教祖は焦ってると思うぜ！何せ、今となれば信者が九千を目前とする。大教

団にまで成り上がったって話まで来たぜ！」

万世極楽教は鬼との繋がり噂が絶えない密教だ。それに、その教団の支部を突き止めて乗り込んだ花柱、胡蝶カナエは帰らぬ人となった。だからこそ俺たち鬼殺隊はその教団の支部を鬼狩りの実績積みとして扱うことも時々ある。

その教祖、万世童磨という教祖が吉原に下弦の鬼を送り込み信者集めをしていたことまで情報が確定した。

そのことを俺は2人に伝える。

すると、2人はあまりにも大きなことに震えていた。

「まあ、仕方ねえか、でも、これで鬼の増加はかなり抑えられた。鬼が殲滅される可能性が出てきたってもんだ」

俺はそういうとみんなは希望に満ち溢れた顔していた。

「墮姫と妓夫太郎がやられた!? 大変なことが起きた! これじゃあ、信者が思うように増えなくなる! どうしよう! どうすればいい!!」

童磨は完全に焦っていた。信者の集まりやすい吉原が全壊し、それを斡旋していた墮姫と妓夫太郎も斃された。彼の計画は完全に狂いだしていた。

「童磨、私の作品のいくつかを売ってその資金で人集めをすればいいでは無いか」

壺から声がする。

「それは名案だね! やっぱ頼りになるよ! 玉壺」

壺からは異様な水が溢れ出しながら魚が転がっていた。

炭治郎覚醒までのそれぞれ編 善逸とこいし

吉原の激戦から数日、俺は一人、蝶屋敷の縁側にいた。

あの戦いでは多くの一般人が亡くなり、俺たちも重傷だった。

結果、吉原の復興とまでは行かず商売街として浅草に実質吸収された。

それに、あの戦いにいた隊士で目覚めているのは俺と宇髄さんの継子の二人を合わせた3人だけ。

炭治郎も猪頭も妖夢ちゃんも目が覚めない。アリスちゃんも一時は出血多量で危険な状態だった。だが、幸いなことに甘露寺さんと血液型が同じだったようで、輸血されたおかげで一命は取り留めた。

そして、俺はというと。

「はあく、なんで俺だけ昇進しないんだよ。俺だって頑張ったのに……」
報告があつて炭治郎、猪頭、妖夢ちゃん、アリスちゃんは乙に、弁々と八橋は壬から丁まで大出世。

なんで俺だけ未だに丙なんだ。鬼に攫われて途中まで参加できなかったから、それはあの継子の二人も同じなのに、あの二人のことを羨ましく思う。

「こうなりや、鬼をたくさん斬れる任務がないかきいてみるか」

俺は本部の方へと向かった。

俺が本部の近くまで来ると一人の女の子が向かってくる。

「あ、善逸くん。丁度よかった！話がある！」

その女の子は古明地こいし、霞柱の継子であり、心柱、古明地さとの妹だ。

「話ってなに？俺は任務がないか本部に行くところなんだけど」

「実はね、これから任務があつて、私一人だと心細いの。だから、善逸くんも一緒に来て欲しいんだ！」

女の子の頼みとあれば受けるしかない。そう思い俺は、

「もちろんだよこいしちゃん。俺が守ってやるから、安心して任務を

遂行しなよ」

そういうとこいしちゃんは笑う。

「次の任務もわからないのに守ってやるって？面白いね！善逸くんは」

「どういうこと？面白いって」

「次の任務はね、樹海に行くんだよ！富士の樹海」

樹海、その言葉を耳にしたときに背筋が凍る。

「えー！そんな危ないところに行くの！あそこは危ない場所だよ」

俺は知っていた。あそこは自殺や死体隠しの名所と言われている、俺も借金で取り立てられたときに樹海にでも隠すと脅されたことがあった。

「実はね、富士の樹海の中に万世極楽教の支部があるということ、私はその任務に行くんだよ。善逸くんの耳が頼りにもなるし、方角もわかると思うからあなたを誘ってるの」

「え、俺の耳が頼りになる！なら、こうしちやいられない！樹海に行くぞ！」

俺はこいしちゃんに言われてニヤニヤする。

「ちよつと待って、その前に前田さんのところに行かなきゃならないの。前田さんに頼んでいたものがあって」

「で、着てみたんだけど、何この服、よくわからないんだけど」

「これはね、万世極楽教の人が必ず着る黒装束だよ。変だと思うけど、これを着て潜入するんだよ」

「潜入？もしかして…」

「潜り込んでこつそり鬼の頸をいっぱい取るんだ！私の師範も、こうやっていくつもの支部を潰して柱になったんだよ！」

自分の思っていた任務がこつちからやってきたとは、運がいい。

「私は万世極楽教の支部を7つ潰したから、今は位は乙なんだよ。それに、大きい支部だったら、鬼は10〜20はいるからね」

「そんなにいるの!?!それに、もし囲まれたりしたら」

「大丈夫！支部に十二鬼月みたいなのはほとんどいないから、お掃除

だと思つて片付けようね！」

お掃除とかそういう話ではない。鬼を狩ることをそう言えるこいしちゃんかだんだんヤバい人だと思えてきた。

「じゃあ、いくよー西のほうの富士樹海まで！出発進行！」

「おーーー！」

俺はノリを合わせてこいしちゃんと任務をすることになった。だが、こいしちゃんからは一切音が聞こえない。

俺の耳がおかしくなったのかとそう思ってしまった。

その不安の中、俺とこいしちゃんは富士の樹海へと向かった。

富士の樹海の入りについた俺は、ガクガクと震えていた。

「善逸くん、大丈夫？」

「大丈夫だよ！俺が絶対に守つて見せるから」

こいしちゃんには嘘をついてしまった。本当は富士の樹海には入りたくない。

俺は強がっている。心の中で俺は葛藤する。

樹海の道を進んでいくと大きな建物が見える。

その建物は珍しい西洋建築のような建物だった。

「ここが万世極楽教の支部だよ。私たちが潜入する場所」

思つていたよりも違和感が半端ない建物である。

「お前たちは俺たちの仲間だな。さあ、入れ」

俺たちは奥へと誘導される。

その壁には何やら不思議な絵が飾つてある。

その絵は何とも気持ちの悪い絵ばかりだった。

「こんな気色の悪い建物、よく入れるよな」

「仕方ないでしょ、ここで数日かけて鬼をじわじわと殺すだから」

俺はこの建物で何日も過ごさないといけない。

そんな死刑宣告のようなものを告げられて、呆れた。

死亡志願者と初日の出

うるさい。

うるさいうるさい。

うるさいうるさいうるさい！

「あー！……こんなところ嫌だ！早く支部潰しておさらばしたい！」

俺は潜入3日目にして鬼の音がいくつも聴こえるのでイライラしていた。

「しっ！大声を出すと私たちが鬼殺隊だってバレちゃうよ」

「ごめん、俺さ、耳が良すぎるから鬼の音とか苦手なんだよ」

「そうだったね、やっぱりすぐにでも斬りたいのはわかるよ。でもね、じっくり泳がせるのがいいんだよ。それに、あと三日で大礼拝の日だからそれまで待とうよ」

「わかった、あと気になったんだけど、ここ女の子多くない？」

「多いも何も、万世極楽教の信者の6人に5人は女性だよ？それに、吉原から足抜けした人とかがこの教団に入信する人が後をたたないんだって」

「へえ、だから音柱のおっさんも吉原が怪しいって言ったのか」

「もしかして、吉原が全壊したあの事件の時、参加してた？」

「うん、女装して、吉原に潜入調査したら鬼に捕まったりで酷い目にあったよ」

「ご愁傷様」

「何だよその目は！俺のこと憐んでるのか？」

それから3日が経ち、その日がやってきた。

「ではこれより、万世極楽教の大礼拝を行う」

教団の団員がざっと100人はいるかと思われる状態で大広間に集められた。

鬼の音があちこちから響き渡る。

信者の中に鬼も何体も紛れているからだ。

「それではまず、膝をつきなさい」

俺とこいしちゃんはそれに合わせる。

「そして手を合わせ、高く掲げるのです」

みんなに合わせないと怪しまれる。

「そして唱えるのです。我らは極楽を求める。命は儂く尊い。我々は幸せになるのです。幸せになるためには皆、手を取り合い、協力しあうのだ。いつの世も極楽に行けるような魂となるため！我々は万世極楽の一部となるため！我々の導く預言者、童磨様のために！」

司祭は蠟燭の火を消した。

今こそ鬼を狩る絶好の機会だ。

俺とこいしは、闇の中でも見えるように目を素早く慣らした。そして、

「ギャー！」

「うわあ！」

前もって目星をつけていた鬼をいくつも斬る。

礼拝はそれだけ鬼も集まりやすいから、この日を狙ったのだ。

鬼の音が聴こえなくなるまで俺たちは鬼の頸を刎ね続けた。

騒ぎを聞きつけた信者の一人が急いで蠟燭に火を点す。

だが、俺たちの仕事はもう終わっていた。

「キャーキャーキャー」

血溜まりが床にでき、首のない鬼の体が転がっていた。

「何があつたの！これは一体？なぜ、首が…」

こいしは黒装束を脱ぐ。

「みなさん！騙されなくてください。この教団には鬼がいます。その鬼たちが、人を食うのを防ぐために、私たち鬼狩がここにきました。みなさん、万世極楽教は気をつけてください」

「どうして、鬼狩様が駆けつけてくれたんですか？」

「この万世極楽教は鬼が多くいます。あなたたちは先ほどまで食べられるかもしれないのです。だから私たちが助けたのです」

信者の人々の多くは自分が殺される可能性があつたことを知り怯える。

そんな中で一人の信者が立ち上がる。

そしてこいしのところにまで近づく。

パアン

こいしは信者に平手打ちをされた。

「なんて事してくれたの！私、死ぬつもりでここにきたのに」

俺は驚愕した。死ぬつもりで信者がいたなんて。それに、その声は聴き覚えがある。

「どういうこと?!死ぬつもりで来たって、それに、なぜここにいるんですか!?華扇さん!」

黒装束の頭巾を外すと、赤い髪のお団子巻をした髪と男なら確実に落とせそうな顔が現れた。

「私はね、太夫の暴れたせいで右腕を失ったの！それに、私はもう、この体じゃ人前にも出れない、だから私は鬼に喰われた方が幸せになれる。そう思ったの!」

俺はそのことに怒りを覚えた。そして言い返す。

「喰われりゃ幸せだった?そんな甘い考えだったのなら喰われた方がいい!でもな、生きていて幸せになる方が多いんだよ!生きていれば勝ちだ!死んだら負け!だからあんたには生きて誰かのところに嫁いで幸せになれるよう努力しろよ!あんたにはまだ、傷一つない顔があるじゃねえか!その顔を武器に男を一人でも二人でも落としてみろ!」

「ちよつと、それは華扇さんに言い過ぎじゃない?」

こいしが俺のことを止めていると、華扇さんは涙を流す。

「私、自暴自棄になってた。あなたのいうとおりね、私は片腕を失っても顔で男を落とせる。そのことを忘れてしまった私がバカだったわ」

華扇さんは涙を流していた。

こうして俺は任務を終えた。

「あ、善逸くん!今日って12月31日だよね?」

「そうだな、12時を過ぎたから今日は12月31日だね」

「あのさ、帰る前に一回登らない?」

こいしからその言葉を聞いた時俺はビックリする。

「え!登るってまさか…」

「富士山登ろう!今年も最後の日だし、富士山の頂で初日の出も見よ

うよー」

「え？でも…今って富士山って…」

「冬山だけど、まあ頑張ればいけるっしょ」

「え〜」

俺とこいしは昼過ぎから山を登る。

「はあはあ、こいしちゃん、速いよ〜」

「せっかくの初日の出を見るためなんだし、それに、一年の計は元旦にありっていうし、初日の出が出た時に二人で来年の抱負とかを心の中で祈りながら拝もうよ」

「だからって俺が山頂で暖を取るための薪全部運ぶばせるのはどうなの？」

「いいでしょ、私がご飯とか一式運んでるんだし」

山頂についた頃には日が暮れていた。

俺とこいしは山頂の小屋に泊まることにした。

そして、

「綺麗だね〜」

「ああ、これを見られるのが同期で今は俺だけってのは気持ちがいい」
俺とこいしは約束通り初日の出を拝むことができた。

そんな時、

「おお、盲目の私にも初日の出の暖かさがしみる」

ものすごい大男が手を合わせていた。

「あ、岩柱の悲鳴嶼さんだ。悲鳴嶼さん！お久しぶりです」

「霞柱の継子の古明地こいしではないか」

「姉がお世話になってます。あと、どうしてここにいるんですか？」

「私の管轄は静岡県です。私は月に一度富士山に登るので」

「へえ〜、私たちは任務のついでに初日の出を見たくて登りました」

「素晴らしい、体力をつけるには山登りが一番いい」

3人で初日の出を拝んだあと、俺は蝶屋敷に帰った。

幽々子の過去と形見

大正五年一月十一日

私は目を覚ますと点滴を打たれながら身体中を包帯で巻かれていた。

「妖夢ちゃんが目覚めました」

目が覚めたのを鈴仙さんが報告しにいくと、私の体は痛みで涙が出てきた。

右頬には大きな切り傷ができ、左肩には鎌の貫通した傷、それに加えて帯の攻撃によりできた細かい傷も合わせてあの時は出血多量で死にかけていたと鈴仙さんから伝えられた。

毒に関しては彌豆子ちゃんのおかげで何とかなつたものの体はロボロだった。

それから1週間、まともに病室から出ることも出来ないまま日がつた。

そして、

「はい、だいぶ良くなりましたね。これから回復訓練を始めてもいいですよ」

しのぶさんからお達しが出る。

でも私はしのぶさんに気になったことがあつたのできく。

「あの、幽々子さんってご存じですか？」

私が質問をするとしのぶさんの表情が険しくなる。

「ちよつと、私の部屋まで来なさい」

しのぶさんから指示された。何か怒らせることでも言ってしまうのだろうか、そう思った。

「失礼します」

しのぶさんの部屋に入るとたくさん書物や巻物が棚に収納され、薬品などが並べられた棚もある。そんな綺麗な部屋だった。

「私から、幽々子さんについての話をしましょう。そこに座って」

私は正座をし、話を聞く姿勢になる。

「幽々子さん、いや、西行寺幽々子さんは、実は私の姉、胡蝶カナエの

妹弟子なんです。彼女は姉が育手に弟子入りした後にその育手に弟子入りした子で、私の姉とは仲が良かったのです。そして彼女は姉の後を追うように、私たちの半年後に最終選別に受かり、私たちは3人で任務に出ることもよくありました。4年前のあの日、私の姉が亡くなった時、彼女は私に遅れて来ました。その時私は姉に言われたことを彼女にも伝えたら、私も姉弟子の夢を実現する。そう言って彼女も姉のように夢を実現しようとする人でした。ですが、1年10ヶ月に彼女も姉の後を追うように鬼に殺されました。2人とも、鬼が人間と仲良くなれる、その夢に犠牲になってしまった」

そんな過去があつたのか、私は複雑な気持ちになる。そんな時、前の任務のことを思い出す。

「実は私、この前の任務で、幽々子さんの因縁の鬼と戦いました。その鬼は言っていました。幽々子さんは鬼でもやり直せる。生きて償えば救われる。そう言われたそうです。その思いを強く受けた鬼はそれ以来一切人を食わなくなつた。だからこそ幽々子さんはカナエさんの遺志をより良い未来を見据えて行動してたのかもしれない。そう、私は思うのです」

私がしのぶさんにさういうと、私に返す。

「実は、あなたの持つている日輪刀は幽々子さんの持つていた日輪刀なんです。そしてあなたの使っている呼吸、魂の呼吸は、幽々子さんが派生しかけていたものなのです。それをあなたが使っているその呼吸を見る度に、私は幽々子さんを思い出します。もしかすると、あなたには幽々子さんが憑いているのかもしれない」

私に憑いている？もしかして、それが私の呼吸を導いてくれたのが幽々子さんの霊言だったのかも。そう思うと、凄い人だったんだなあと感心する。

幽々子さんのことをもつと詳しく知りたくなつた。

「幽々子さんって普段はどういう感じで過ごしていたんですか？」

「幽々子さんはものすごく大食いで、鬼殺隊の中では私が知る限り、甘露寺さんの次くらいにご飯の量が多かつたんです。なので、鈴仙さんの料理がスタミナ系なのも幽々子さんの影響なんですよ。それに、藤

襲山には月に1度、大量のおにぎりを持っていったりもしていました。私の姉よりも鬼と仲良くしたかった、そんな人だったのかもしれない」

幽々子さんはとても良い人だった。私は尊敬の思いになる。

しのぶさんはそう話すと立ち上がり、箆笥から物を取り出す。

「それはなんですか？」

「幽々子さんが使っていた蝶のリボンと羽織です。あなたにはこれを授けます。あなたには幽々子さんの思いを継いで欲しいんです。幽々子さんが本当にやり遂げたかった夢を叶えるためにも」

私は蝶のリボンをつけ、隊服を着て羽織を纏う。

「お似合いですよ。幽々子よりも素晴らしい姿です」

それから私は蝶のリボンと幽々子さんの羽織を纏って任務に出るようになった。

それを見た善逸は、

「かわいいね、でも、羽織大きくない？」

身長差で滑りそうなので隠の前田さんに調整してもらった。

伊之助とアオイ

「ああ」

俺は欠伸をする。

「伊之助さんが起きました！」

「良かった…うわああああん」

アオイは俺の布団で泣き出す。

「は？何泣いてんだ？」

「良かった…あなた2ヶ月近く寝てたのよ…一時は心臓も止まりかけて、本当に心配したのよ」

「え？俺そんなに寝てたの？」

「もう2月よ、寒いから布団も厚手にしたのよ」

「すまねえ」

それから3日で俺は機能回復訓練を終えた。

そして終えた日の夜、

「伊之助、明日買い出しに行くんだけど、よかったらあなたも行かない？行ってくれたら、晩ご飯はあなたの好きな天ぷらにするから」

「おお、ありがてえ、俺の好きな物わかってくれたんか。アオイ」

俺は名前を呼ぶとアオイは後ろをむく。

「どうしたんだ？様子がおかしいぞ」

「なんでもない、それに、明日は早いからはやく寝なさい」

「なんだよ、つれねえな」

アオイのことが気になりつつも俺は寝ることにした。

「起きなさい！買い出しに行くわよ」

俺はアオイに起こされる。

「たっくー、今何時だよ」

「朝の五時よ、これから築地に行くのよ。食材を多く仕入れなきゃならないから」

「ふわ、早くねえか？今から行く意味あんのか」

「築地の朝はかなり早いよ。今から行かないとお目当ての食材が無

くなつちやうから」

俺は着替えて準備を整える。

「じゃあ行くぜ！」

「ちよつと待って、人が多いから隊服の上くらい羽織りなさい。それに、外は寒いのも、風邪ひいたら承知しないからね」

「わかったよ…：しようがねえな」

俺は隊服の上を着る。

「あと、その猪の頭は置いていくこと」

色々注文が多いアオイに対し、俺は渋々従う。

「いってきます！」

「いってらっしゃい、私たちが頑張るので、存分にお買い物楽しんで来てくださいなね」

看護師3人に見送られる。

「じゃあ、急ぎましょ」

「おう、猪突猛進！」

俺たちは築地へと向かった。

「アオイ、気になったんだけどさあ」

「なに？」

「なんで八意の所のやつまで来てんの？」

「いいじゃない、それに、鈴仙さんは油や調味料を運んでくれる頼もしい方ですから」

「なるほどな」

「私、もしかして来ちゃダメでしたかね」

「鈴仙さん、気にしないでください」

俺たち3人は築地に着く。

「じゃあここで12時に、待ち合わせね」

「私は野菜とか油とか調達するからアオイちゃんは魚をお願いね」

俺とアオイは魚の市場の方に行く。

「うおー！ー！すげえ、これ全部魚か？」

「そうよ、全部東京湾で揚がった魚よ」

「この平たい魚はなんだ？」

「鯉よ。今が旬の魚ね」

「じゃあこれは？」

「鯖よ。それは今日買う魚よ」

俺は色々な魚に目を光らせていた。

待ち合わせの時間よりも早く買い物が終わったので待ち合わせ場所待つことにした。

「伊之助ってあまり海の魚を見たことない？」

「俺は山の王だからな、海のことにはさっぱりわからねえ」

「へえ、わからないこと多いのね」

「なんだよその態度は」

「いつも偉そうにしてるから、物知りだと思ってた」

「俺はなあ、親分として示しをつけるために偉そうにしてるんだよ。炭治郎は強えけど優しすぎるし、善逸は頼りねえし、妖夢はバカだし、だから俺が全力で士気を上げてるんだよ。そうでもしねえとあいつらどうしようもないし」

「そんなこと思ってたんですね。あなたはいいい親分だと思えますよ。私のことも助けてくれた時は、本当に嬉しかった、あの時助けてくれなかったら、鬼も斬れない私だったら足でまといにしかならなかった。だから、伊之助、あなたには感謝します」

そういうとアオイは俺に頭を下げた。

「俺は強いからな、お前を守らないとどうなるか分からない。だから俺はあの祭りの神からお前を助けたんだよ。感謝の気持ちなら今日の晩飯で返してくれ」

「じゃあ、今夜は伊之助の大好きな天ぷらをたつくさん用意しますからね」

「おう！嬉しいぜ！アオイ！」

アオイは俺に名前を呼ばれると顔を赤くする。

「なんだ、熱でもあるのか？お前、風邪でも引いたんじゃねえの？」

「風邪なんか引いてない。それに、これは……」

「体おかしいならとつと休んだ方がいいぜ。お前が俺の飯を作ってもらうためにもな」

アオイは顔を赤くしながら、モジモジする。

その時、八意の所の女が来る。

「お待たせしました！思ってたより油が手に入らなくて、色々回ってました。あれ？アオイさん、どうしたんですか？」

「なんか顔赤くして変なんだよ。風邪でも引いたんじゃないか？」

俺は八意の所のやつにきくとアオイが俺のことを平手打ちする。

「え、何しとんじゃこらー！」

「バカ、私のこともわからないでよくそんなこと言えるわね。私は…あんたのこと…、もういい！鈴仙さん、帰りましょう！」

「待てよ！言いたいことがあるのなら言えよ！アオイ！」

俺はアオイに対して言った。

すると、アオイは涙を流しながら、俺に言い返した。

「あなた、私の心を揺り動かしすぎなのよ！バカ！」

そういうとアオイは八意の所のやつと、2人で蝶屋敷に帰っていった。

その話を俺は任務帰りの善逸にきいた。

すると善逸は、

「は、お前バカじゃねえの!?アオイちゃんはなあ、お前のことが好きなんだよ！ほんと、お前は人の心だけはわからねえんだな！お前はアオイちゃんに謝ってこい！」

俺は何が何だかわからねえが俺のことが好きだということだけはわかった。

その後、晩飯前に俺はアオイを呼び出す。

「悪い、お前のごことが全くわかってなかった。俺のことが好きだったんだな、責任は取る。だから、謝る」

「謝らなくてもいいですよ。私もあの時はちよつと逆上させていました。だから、私の方こそごめんなさい」

俺とアオイは仲直りをした。

それからというもの、アオイが料理当番の時は天ぷらが必ず俺のところに出るようになっていた。

貧民街の鬼とカナヲの因縁

炭治郎が意識不明になって2ヶ月、私は毎日炭治郎のことを介抱した。

未だに炭治郎は目覚めてくれない。

「起きて…もう2ヶ月よ…どうして…」

私は起きない炭治郎に焦りを感じていた。

そのせいで私はなかなか任務にも出れない日々が続く。

その時、炭治郎は少し動いた。

「炭治郎！起きてー！」

だが目が覚めない。

どうしてだろう、私は師範に相談した。

「もしかすると、意識は戻ったけど眠りについたらのかもしれないね。」

炭治郎くんはかなりの重傷でしたから」

「私、炭治郎が起きるまで待つことにします。目覚めたらすぐにでも

報告します」

「でも、カナヲはそろそろ任務に出ないと永琳さんに怒られますよ。」

カナヲはちよつと気にかけてすぎだつて仰ってましたから」

そんな時、鏖鴉が飛んでくる。

「向島で女子供が多数行方不明！鬼の目撃が多数！カナヲは急ぐのだ

！弁々、八橋も向かっている。直ちに向かえ！」

向島？私の生まれた場所、そして思い出さなくともない過去がある場

所。

私は蝶屋敷を飛び出し向島へと向かった。

「カナヲ、どうしたの！」

「しのぶさん、何かあったんですか？」

「もしかすると、カナヲは…」

私は急いで向かった。私の中の何かにかき立てられるように。

向島に着くと、そこはいくつもの小さなボロ家が並んでおり、ボロ

ボロの服や汚い服を着たその日を生きるために必死な人々がいた。

「思い出した。私はここで」

「カナヲさん、どうしたんですか？」

「カナヲさん、様子がおかしいですよ？」

2人は私のことを心配した。

私が生まれたのはこの向島の貧民街、そこで私は親に虐待され、兄弟とともに暴力を振るわれ、私が心を閉じてしまった場所。

そんな過去を思い出した私は自分の体を抱きしめる。

「どうしたんですか！」

「カナヲさん！大丈夫ですか！」

私は2人を止める。

「大丈夫、少し悪寒が走っただけ」

「心配させないでください。それに、もし風邪ひいていたら、伝染さないでくださいよ」

私は苦笑いした。

そして夜になる。

「弁々、気をつけてね。この場所の鬼は集団ができているから」

「八橋こそ、気を抜いて足元掬われないように」

私たち3人は、向島の鬼を何体も斬る。

「あちこちで鬼が暴れてる。ここは3人で手分けして鬼を狩りましょう」

「はい！」

3人で分かれたあと、私は東側の方へと向かう。

私は貧民街の奥へと進んでいくと、なにか見覚えのある家を見つける。

「私の…生まれた家、そうだ私は、ここで…」

「おう、女の子がこっちにやってくるとは、こりやいいツマミになりそうだな」

私が過去のことを一瞬過ぎるとその家の中から鬼の声がする。

そして鬼が家の中から出てくると、私は驚愕する。

覚えてる。私のことを虐待した。その顔を、忘れない。

「お前、どっかで見たとあるなあ。その紫の目、思い出したよ！お

前、俺の娘だな？久しぶりだなあ。お前に名前をつけてなかったから呼べる名はねえがな」

私の中で怒りがこみ上げる。そして言い放つ。

「なぜ、私のお兄さんを殺した、なぜ私のお姉さんを黽つた。親として最低なことしかしていいない。あなたなんかこの世で最もクズだわ」

「よく言ってくれるねえ、俺はなあ、お前に会いたかったんだぞ？あの時蝶の髪飾りの女が端金をばらまいてる隙に奪われた時は本当に辛かったんだよ。俺の子を突然奪いやがって」

「ふざけないでよ、私を吉原に売ってその金で酒でも飲むつもりだったんでしょ！」

「お前は随分鋭いこと言うじゃねえか、さすが、俺の子だ」

私は怒りが頂点に達する。

「ホント、あなたは生きる価値なんて何も無いわ、さあ、さつさと私の前から消えて」

花の呼吸。肆の型 紅花衣

私はその鬼の頸を刎ねた。

「何があつたんだ？俺は頸を斬られた!?ちきしょう、お前は俺の父親だぞ！なんてことしてくれる！」

「私には父親なんかいない、それに、あなたは私の家族ですらない、私からあなたに言うことはそれだけよ」

鬼は断末魔を上げながら塵へと帰した。

「カナヲさん！こつちも片付きました！」

「カナヲさん！鬼は全て倒しました！あれ、どうしたんですか、涙を流して」

「ううん、大丈夫、私はなんでもない」

鬼になったとはいえ、実の父親を殺したことに少し後悔している。

でも、もう振り返ることは無い。私には師範にアオイ、鈴仙さんにきよ、なほ、すみ、八意さん。みんな私の家族だから。

私は任務を終えたあと、音柱の所の継子の2人と別れて、蝶屋敷に帰る。

「はあ、炭治郎、大丈夫かな。私がいけない間に目覚めていたら…そんな

「ことはいい。早く、手ぬぐいを取り替えないと」

私は炭治郎のことをずっと思いながらバケツに水を汲んでいた。

炭治郎が起きていたら嬉しい、そう思いながら炭治郎の眠る病室へと私は向かった。

刀鍛冶の里編

夢の誰かと目覚めたこと

「お茶が入りましたよ」

後ろ姿はどこか見覚えがある。

「ああ、ありがとう。」

「いやあ、よく寝てるなあ」

後ろから寝息が聞こえる。

「すみませんね。女房寝てしまったようで、本当に申し訳ない。客人に子守りをさせてしまつて」

少し雰囲気が違うような、

「気にするな、疲れているのだろう、子供を産んで育てるのは大変な事だ」

俺？は縁側に座る男にお茶とおにぎりのをせた盆を置く。

「これを飲んだら私は出ていく。ただで飯を食い続けるのも忍びない」

「そんな！あなたは俺たちの命の恩人だ。あなたがいなければ俺たちどころかこの子も生まれていなかった」

俺？はそういうとその男は茶をすすり、一息をつく。

「わかりました。ならばせめてあなたのことを後世に伝えます。せめてそれで恩を返せたら」

「必要ない」

「しかし後を継ぐ方がいなくては困っておられるでしょう。しがない炭焼き百姓を営む俺には無理でも、いつか誰かが…」

「必要ない。炭吉、道を極めた者が辿り着く場所はいつも同じだ。時代が変わろうともそこに至るまでの道のりが違おうとも必ず同じ場所に行きつく。そういう運命なのだ。お前には私になにか特別な人間のように見えているらしいがそんなことはない。私は大切なものを何一つ守れず、人生において為すべきことを為せなかつた者だ。何の価値もない。だから私は、この先、何かを為せるようになりたい。」

何年かかろうとも…」

ああそんなふうに

そんなふうに言わないで欲しいどうか

頼むから自分のことをそんなふうに

悲しい、悲しい人だ…

俺はその悲しい人が去っていく姿を最後に目が覚めた。

夢か…？　ここは…　俺は…？

俺が辺りを見渡す。

「どうやら俺は蝶屋敷に運ばれたようだ。

ガラガラガラ

ものすごい音がする。その音の方に目を向けるとカナヲがあつとした顔で立ち尽くしていた。

「大丈夫？…あなた、戦いの後二ヶ月以上意識が戻らなかったのよ」

「そうなのか…」

「そうよ…目が覚めて…本当に良かった…」

カナヲは俺のベッドに突っ伏し泣き崩れた。

「心配したのよ…目が覚めなくて…あなたが担ぎ込まれてから私はあなたのことをずっと介抱してたのよ…任務にも、あなたが心配で…1回しか行つてない…」

「カナヲ…それだけ俺の事を心配してくれたのか…」

俺のことをここまで心配してくれたカナヲのことを感謝してもしきれないと思つた。

そんな時、足音が聞こえてくる。

「あのー、カステラを持ってきました。もし意識がなかったら下げてくださいね。傷みそうだったらカナヲ様が食べちゃってください」

「あ…ありがとございます…」

俺は泣き崩れたカナヲのかわりに答える。

「お前！意識戻ってんじゃないやねーか！早く報告しろよ！」

隠の人は思いきりキレていた。

「それに、オメーはどうして泣き崩れてんだよ！さっさと人を呼べっ

つーの！意識戻りましたってよバカが！」

カナヲはハツとして顔を上げる。

「みんな心配してんだからよ！上とか下とか関係ねーからな今だけは！」

隠の人がそういうと、大声で人を呼ぶ。

「きよちゃんなほちゃんすみちやーん！アオイちゃん鈴仙ちやーん！

炭治郎の意識戻ったぜー！ー！」

すると3人の看護師は急いで向かって来る。

みんな泣きながら俺のベッドに突っ伏す。

「良かったです〜」

「心配したんですよ〜」

「一時はどうなることかと〜」

本当に心配してくれた。俺は落ち着く。

すると、なにかがものすごい足音を立てて走ってくる。

「あ、ちよつと待て、床が水浸しだから気をつけ…」

アオイちゃんにはその言葉が間に合わず、思い切り滑って尻もちをつく。

「いって〜」

アオイさんは盛大に転び、腰をさする。

さらに、

「うわあああああ」

鈴仙さんまでもが水浸しの床に滑って尻もちをついた。

「意識が戻って良かった〜！」

「私たちの代わりに行ってくれたからみんな…うわああああん！」

アオイちゃんと鈴仙さんはものすごく泣いていた。

「ありがとう…他のみんなは…大丈夫…ですか？」

そういうと隠の人ときよちゃんが説明してくれる。

「黄色いやつなら年越す前だっけ」

「はい」

「もう復帰してるし、任務にも出てるって、それで今はすげえ鬼を狩っ

てるらしいぜ」

「善逸さんは翌日には目を覚ましたんですよ。それに、初日の出まで拜んでくるくらい、回復が早かったんですよ」

「白髪の子は年を越したけど既に大丈夫だぜ。昨日には任務に出てたし」

「それに、音柱と継子の子達は普通にピンピンしてたぜ。隠のみんなは引いてたけど、それに、新年会の時なんか盛大に花火玉まで作ってきて打ち上げていたぜ」

伊之助とアリスはどうなったのか気になる。

「そうか…伊之助とアリスは…」

すると看護師3人の顔が悲しくなる。

「伊之助さんもアリスさんもかなり危なかったんですよ」

そういうとアオイちゃんが説明する。

「伊之助もアリスも状態が悪かったの、毒が回ったせいで呼吸による止血が遅れてしまって、それで、伊之助もアリスも…」

「そうか…じゃあ天井に張り付いている伊之助と奥の棚からこつちを見ているアリスは幻覚なんだな」

「え？」

みんなは後ろの棚と天井を見る。

「「うわあああー！」」

「よく気づいたわね」

「グワハハハ！流石だな炭吾郎！」

「俺…全部見えてたから…」

そういうとアリスは棚から出てきて、伊之助は天井から着地する。

「俺はお前より7日前に目覚めた男だ！」

「良かった…伊之助はすごいな…」

「へへっ、うふふっ、もつと褒めろ！そしてお前は軟弱だ！心配させんじゃねえ！」

「伊之助よりも私は3日早く目覚めたのよ。あんたの方が軟弱じゃない？」

「俺はそんなこと知らねえ！部屋が違うんだから分かるわけねえだろ

！」

アリスと伊之助が言い争っている。

「伊之助さんとアリスさんはふつうじゃないんですよ！しのぶ様や永琳様も言ってたでしょ！」

「そうだ炭治郎さん、見てくださいこの本を、ミツアナグマっていう外国のイタチです。分厚い皮膚は鎧なんですよ。獅子に咬まれても平気なんです。毒が効かないから毒蛇でもあっても食べちゃうし、伊之助さんはこれと同じだってしのぶ様が言っていましたよ。それに、アリスさんも動物並に回復が早くて全身傷だらけなのにすぐに治りましたからね」

「つまり俺とアリスはすげえってことだ！」

「まああつてるにはあつてるがな」

伊之助はそういうとベッドの上から下りた。

「伊之助は毒も薬も効きづらいから注射しないとだめってなったから注射器を見たら伊之助は最初グズってたのよ。今は、大人しく注射も打たれることに慣れたけど」

「あ？俺がそんなわけあるか！俺は山の王だぞ！そんな注射器で怯えるわけねえだろ！」

伊之助とアオイちゃんが言い争っているのがなんか微笑ましくなった。仲のいい2人だ。そう思って俺は眠りについた。

「あー！またコイツ眠った」

「静かにしなさい！今は眠ってるんだから、起こさないように！」

「じゃあ私は炭治郎のために重湯を作ってくるね」

こういう一時もいいかもしれない。

刀鍛冶の拒否と彌豆子の催眠

一週間後。俺は機能回復訓練に入っても良いと許しが出たので俺は道場へと向かう。

「おう、三四郎、やつと訓練か、俺とアリスはもう任務に復帰するぜ」「私たちは任務に出ますので、一足お先に」

「俺も早くみんなと任務に出れるように頑張るよ」

伊之助とアリスは任務に復帰してこれから任務に出るところだった。

俺は2人に挨拶をして、そのすぐ後に道場に入った。

「んー悔しい、やっぱりなかなか体力戻らないなあ」

「仕方ないですよ。あれだけの怪我だったんですから、無理もないです」

「みんな任務に出てること多いけど何かあったの？」

俺はきよちゃんにきくときよちゃんは少し言葉につまる。

「実は隠の人からきいたんですが、最近万世極楽教が活発化してきて、なんでも最近は芸術品とか売ったり、変な商売をしているとか、それでそろそろ本格的に危なくなってきたって言ってましたね。なんでも、最近信者が一万人を超えたことか…」

「そんなにやばい宗教初めて知ったよ。もしかして鬼との関わりとかあるの？」

「関係あるも何も、炭治郎さんの行つてた任務の本来の目的は万世極楽教と繋がりのある二人の鬼を倒すのが目的ですよ？知らされなかつたんですか？」

「知らなかつた…。宇髓さんの任務ってそれだったのか…」

宇髓さん、そういうことは教えて欲しかった。

「あっそうだ！俺が眠っている間に刀届いてない？刃こぼれしてしまつたやつなんだけど」

「うっ、刀ですか？ 刀はですね…」

「鋼鐵塚さんからお手紙来てますけど…ご覧になりますか？」

俺はなほちやんから手紙を渡される。

”お前にやる刀は無い。許さない許さない、呪ってやる、末代まで崇つてやる。憎い憎い、お前が憎い”

と殴り書きで何枚も書かれていた。

「これは…まづいぞ…」

「ですよね…」

俺は焦る。鋼鐵塚さんならやるとは思ったけどなあ。

「2ヶ月以上あったんですけど刀は届いてなくて」

「うーっ、今回は刃毀れだけだったんだけどなあ、前に折っちゃったり溶かされちゃったりしたからなあ」

俺は頭を抱えた。

そんな時3人の看護師が話してくれる。

「刀が破損するのはよくある事なんですけど…鋼鐵塚さんはとても難しい方ですね…」

「里の方に行ってみてはどうですか？直接会ってお話した方が良いでしょう」

「里って？」

「刀鍛冶の皆さんの里です」

「え？行っていいの？」

「いいと思いますよ。でもその里は極秘ですからね。鬼でさえ一度も見つけられないと聞きますからね。行く人は一部しか知らないうすからね」

そうなんだ、そりゃ鬼に見つかれば刀が仕事道具の鬼殺隊には命取りになりかねない。

だからこそ嚴重なのかもしれない。

「じゃあ明日までには出発できるように隠の人をお願いしておきますね」

「ありがとう。助かるよ」

明日には出発。用意をすることにする。

そして気がつく。

彌豆子がいらない！

俺はしのぶさんに聞きに行く。

「すみません、彌豆子は、どこにいるんですか？」

「彌豆子さんなら心柱さんのところにいますよ」

「ありがとうございます！では行って来ます！」

「あっちよつと…、行っちゃいました」

俺は心柱のさとりさんの屋敷に着く。

「ここがさとりさんの屋敷か…大きいなあ」

「ごめんください！」

「はーい」

さとりさんはいた。

「あら、炭治郎くんじゃない。お久しぶりね」

「お久しぶりです。しのぶさんから彌豆子がここにいると聞いたので来ました」

「なるほど、じゃああがって」

「お邪魔します」

「彌豆子ちゃんは今は箱の中で眠っていますよ」

「彌豆子！よかったら、大変だったろう」

俺は箱を抱いた。すると、さとりさんが俺の肩に手をかける。

「炭治郎くん、彌豆子ちゃんは、催眠術が施されているわよね」

「はい、鱗滝さんが、彌豆子は人間を襲わないようにと、そう言われました」

「やつぱりね、でもそれが施されてからもうかなり時間が経ってるのよ。それで、催眠術の掛かりが甘くなっていたのよ。だからね、私が催眠をかけ直しておいたわ。その鱗滝さんよりもずっと深い催眠を、私がかけたことよって彌豆子ちゃんは人間をもう襲うことは無いわ。私の催眠術はいちばん強いからね」

「ありがとうございます。本当に彌豆子のことを気にかけて下さって」

「いいのよ、それに、私は彌豆子ちゃんを生かしたからには、責任を持たないといけないと思ったから。だから…いいわ。彌豆子ちゃんの

こと、しっかりと守るのよ。もし危なくなったら彌豆子ちゃんも戦えるんだし、頼るのも大事よ。それに、この前の吉原みたいな鬼化が進んでも彌豆子ちゃんは人を襲わないから、安心しなさい」

「さとりさん。本当にありがとうございます。では、俺は準備があるので、失礼します」

俺はさとりさんの屋敷をあとにした。

翌日、隠の人が蝶屋敷に来る。

「はじめまして、お館様より許可が出ましたので私のご案内します」

「はじめまして、竈門炭治郎と申します。よろしくお願ひします」

「案内役の事情で名乗ることは出来ませんがよろしくお願ひします」

隠の人はそういういと俺に目隠しをし、耳栓をする。

「そういえばあなたは鼻が利くんですね。なら、鼻栓もしますね」

俺の鼻にまで巻紙を突っ込まれる。

そして俺は隠しの人に背負われて、刀鍛冶の里へと運ばれるのだった。

刀鍛冶の里とさいかいの同期

里の場所はほんの僅かな人間を除いて知る人はいない。

鬼に襲撃されるのを防ぐためだ。勿論隠の人も例外ではない。

一定の時間で次の隠へ引き渡される。

その上道順も隠の人も頻繁に変更するそうだ。

隠は次の隠の所まで鴉に案内されるがその鴉も頻繁に入れ替わる。

お館様のいる屋敷はもつと複雑な方法で隠されているらしい。

そのおかげで江戸幕府統治の時代でもさえも誰にも知られなかつたらしい。

頭のいい人つてすごい！

でも、刀鍛冶の里に着くまで何人の隠に渡されるんだろう。

感覚が正しければ既に20人以上に背負われている。

「外しますよ」

耳栓が外され、目隠しが外される。

夕焼けが眩しく感じる。

その眩しさが治まると、豪華な建物がズラつと並ぶ。

「すごい建物ですね!!しかもこの匂い!近くに温泉がありそう」

「ありますよ、ここはすごく気持ちがいいので柱たちの新年会もここで行われてましたからね」

つまり柱のみんなはここを知っていたということか。

「あの大きな建物を左に曲がった先が里長の家です。一番に挨拶を」

「わかりました」

「私はこれで失礼します!」

「ありがとうございます」

隠の人は帰っていく。その姿を俺は手を振った。

俺は家の前の守りの人に話しかける。

「鬼殺隊の竈門炭治郎です。」

「あ、炭治郎さんね。お久しぶり」

「もしかしてその声はにとりさん?お久しぶりです!」

「元気だった？心配してたよ。もしかして、里長の方に用？」

「挨拶をしに来ました。里に初めて来たので、挨拶はしないと」

「ほう、それはいい心がけだ。里長に一番に挨拶をした方が里長の機嫌も良くなるから」

俺は里長の部屋へと案内された。

「どうもコンバンハ。ワシ、この里の長の鉄地河原鉄珍。よろぴく。里で一番小さくって一番偉いの、ワシ。まあ畳におでこつけて擦るくらい頭下げたってや」

「竈門炭治郎です。よろしくお願いします！」

俺は全力で頭を下げた。

「まあええ子やな、おいで、栗入り饅頭をあげよう」

「ありがとうございます！」

俺は促されるように栗入り饅頭を頂く。

「蛭なんやけどな、今行方不明になってな。ワシらも探してるから堪忍してな」

「蛭？蛭って鋼鐵塚さん？」

「そうや、鋼鐵塚蛭。ワシが名付け親だよ」

「可愛い名前ですね」

「可愛すぎと言うて本人から罵倒されたわ、未だに名前を気に入っておらん」

「それは悲しいですね」

「あの子は小さい時からあんなふうや。すーぐ癩癩起こしてどっかに行きよる。まあいつもだつたら1週間程で帰ってくるんやけど今回は2ヶ月以上だ。それに、隊士を来させてしまつてすまんの」

里長は呆れてため息をついていた。

「いえいえそんな！俺が刀を折つたり溶かされたり刃毀れさせたりするからで…」

「いや、違う。折れたり刃毀れるような鈍を作つたあの子が悪いのや、刀が溶かされるのは仕方ないが」

里長の言葉に重みを感じる。俺はそのまま手が止まる。

「見つけ次第取り押さえて連れて参りますのでご安心ください。隊士

にわざわざ来させるのが悪い」

そういうと後ろの人がブンブンと腕を振り回す。

「あまり乱暴は良くないですよ…」

「あいつのことは1回たんこぶを作らないと覚えなからな。それに、君もまだ鬼狩りに行ける程体が回復してない上に、2日半も背負わされて疲れていると聞いている。もし蛍が刀を打たない場合は別のものを君の刀鍛冶にする。うちの里の温泉は弱ったり疲れたりした体によく効くから、まあゆつくり過ごしてや」

「ありがとうございます」

俺は里長の家を出た。

「どうだった？里長は」

「小さいけど貫禄のある方ですね」

「だろう、あの里長が優秀だから、今の刀鍛冶の里が進歩したんだからな。私も感謝してもしきれない」

「すごい人なんです。やはり、里長の方はそれなりのことをしたからなれるんですね」

「そういえば温泉はどこにあるんですか？」

「こつちよこつち、ついてきて」

俺は案内される。

「ここの里の西側の丘があつて、そこを昇る坂の上が温泉よ。ここの温泉はすごいからね。何にでも効くから」

「ありがとうございますー！」

俺は温泉へと向かう。

すると、坂をおりる人が来る。

「ひどいよね？無視するなんて」

「私たちを無視するなんていい度胸だよ」

「ほんと、あれが私の同期とは信じられません！」

「あ、咲夜さん、文さん、それと甘露寺さん！」

「あ！炭治郎くん！炭治郎くーんーん！」

甘露寺さんが急いで駆け寄ってくる。

その浴衣は大きな胸が揺れてはだけて乳房が零れそうになる。

「危ないです！気をつけてください！はだけてますよ！」

「聞いてよく！私たち今そこで無視されたの、挨拶したのに無視されたの」

「誰にですか？」

「なんか側面を刈られた野郎だった」

「不死川玄弥ですよ。あんな目つきの悪い同期なんて知りません！」

「その子がさあ、完全に顔も合わせないのよ？私、恋柱なのに。お風呂上がりのいい気分がもう全部台無し！」

甘露寺さんはメソメソ泣くし。文さんと咲夜さんは機嫌が悪い。

「甘露寺さん、もうすぐ晩ご飯ができるみたいですよ！今日は炊き込みご飯だとか」

「えー！ほんととお！炊き込みご飯だ！わー！いい！」

甘露寺さんはものすごく喜んでいて。それを見た2人は呆れていた。

甘露寺さんは歌を口ずさみながら2人の手をひいて坂をかけおりにいった。

俺は坂をのぼり温泉に着く。

すると何か飛んできたので掴んでみる。

掴んだものを見ると前歯が手のひらに乗っていた。

どこから飛んできたのか見渡すと湯気が開け人影が見える。

雰囲気は違うが俺は覚えてた。

「玄弥！久しぶり！」

「うるさい！」

俺は色々聞きたいことがあったのですぐにでも服を脱ぎ、風呂に入る。

「元気でやってた!?風柱と苗字一緒だね！今まで何してた？」

「話しかけんじゃねえ！風呂くらい静かに入れよ！」

俺は思いきり玄弥に風呂のそこに落ち着けられる。

「俺はあがるからな！」

「裸のつきあいでは仲良くなれると思ったんだけど、人間関係って難しいな」

玄弥は何か気にかけてるのかなあ、そんな臭いがした。

俺が晩ご飯を食べに部屋に入ると、甘露寺さんの前に大量の食器が壁となつて積まれていて、それを2人は驚いていた。

「凄いですね。これ全部甘露寺さんが?」

「そうかな?今日は腹八分に抑えるつもりなんだけど」

「甘露寺さんの腹八分は私たちにとっては2食分ですよ?」

「甘露寺さんの食べっぷりは凄いからなあ、この前なんか私が任務で一緒になつた時なんか牛一頭分近く煮込んだ牛鍋をぺろりと平らげてましたからね」

「文ちゃん!その話はしないで〜!」

俺もいっぱい食べて強くならなきゃ、そう心に誓った。

思い出したことがあるので甘露寺さんにきく。

「あつ、そういえば甘露寺さん、玄弥つて風柱さんとは同じ苗字だったんですけど何か親戚だったりするんですか?」

「不死川さんは天涯孤独だつていつてたわ。兄弟なんかいないつて…」

「炭治郎、玄弥は私の師範の弟だぞ」

文さんがとてつもないことを言い出し、場が一瞬止まる。

「「えー!」」

「どうということなの?不死川さんの言つてたことつて嘘なの?」

「似てるとは思つたけどまさか兄弟とは…」

「文さん!どうということなんですか!」

みんな文さんに詰寄る。

「師範は弟のことが一番大切でさあ、本当は玄弥には鬼殺隊に入つて欲しくなかった。でも入つたら真つ先に継子になるとか言い出す。だからその時私に継子になれつて言われて…」

「どうして継子になつたんですか?」

「私と師範は同じ育手に弟子入りしたわけだから実際には兄妹弟子つてとこ、それに、私は継子になつてからまだ1年ですし」

そんなことがあつたのか…なかなか複雑な関係なのかも…

俺は玄弥が来ていないことに気づく。

「そういえば玄弥はまだ来ないですね。一体何してるんでしょか」
「玄弥は2日に1度しか食事しないって里の人が言っていましたね。そんなに食べないで大丈夫なんでしょうか」

「俺が握り飯とお茶を持っていきます。もしかすると我慢しているのかも」

「それはいい考えだ。それに、炭治郎と玄弥で話す機会もできるし」
俺は握り飯とお茶を用意し、甘露寺さんと2人で玄弥の部屋へと行く。

その道中、

「甘露寺さん、この前はアリスがお世話になりました！」

「いいのよ！私の継子なんだから強くなくちゃダメなのよ！それに、任務先でいい男を見つけられたらとか、そんなの考えて私は送り出したのよ。それに、あの子も強くなってきたし。いつか柱の誰かとお見合いをさせたいわ！」

甘露寺さんはかなりいい人だ。真つ直ぐで恋多き乙女、そんな感じの人だと思った。

でもこんな人が鬼殺隊に入ること自体おかしいと思った。

俺は甘露寺さんにきく。

「甘露寺さんはなぜ鬼殺隊にはいったんですか？」

「恥ずかしいなく。聞いちやう？あのね…私は添い遂げる殿方を見つけるために入ったの〜！」

え？それだけの理由で鬼殺隊に入ったの？

「やっぱり自分よりも強い人がいいでしょ。守って欲しい！そんな人に私は守られたい！その気持ちだけで入ったの。入ったら柱つてのが一番強いつて知ってそれで私は柱に会うためについていたら私が柱になっちゃった」

すごい…スゴすぎるぞ甘露寺さんは…

「玄弥くんいないわね、どこに行っちゃったのかしら」

せっかく用意した握り飯も無駄になる。どうしよう、そう思っていた時。

「間もなく刀が研ぎ終わるそうです。最後の調整のため、長の工房の方へ来ていただきたく…」

隠の人が甘露寺さん呼びに来た。

「あらーもう行かなきゃ行けないみたい」

「気になさらず！お見送りします」

「いいのよ、多分夜明け前に発つことになるから」

「いや、でも…そうですか…」

そんな時甘露寺さんは俺の肩に手を当てる。

「炭治郎くん、今度また生きて会えるか分からないけど頑張りましたよ。うね。あなたは既に十二鬼月を何人も斬っている。更には暴走状態の鬼とも戦って生き残った。これは凄い経験よ。実際に体感してえたものはこれ以上ないほど価値がある。五年分十年分の修業に匹敵する。今の炭治郎くんは前よりもつとつと強くなってる。甘露寺蜜璃は竈門兄妹を応援してるよ」

すごい嬉しい。

「ありがとうございます。でもまだまだです俺は宇髄さんに勝たせてもらっただけです。もつともつと頑張ります。鬼の始祖に勝つためにー」

甘露寺さんは俺の言葉に響いたのかキュンとしたようだ。

「炭治郎くんは長く滞在する許可がでてるのよね？」

「あつハイ、一応は…」

「じゃあ教えてあげる。この里には強くなるための秘密の武器があるらしいの？それも二つも、探してみてね」

そう耳元で囁くと、すぐに行ってしまう。

「じゃあねー」

俺は何か心被打れたのか鼻血が出る。

「おうおう、なかなか良いもんじゃないか、もしかして甘露寺さんの胸とか見て発情したんじゃない？」

「そんなことは断じてない。俺は安い男じゃない！」

「そうだよ。炭治郎はカナヲが1番好きだからな」

霞柱と縁壺零式

翌朝、俺と咲夜さんと文さんの3人で武器を探すことにした。

「甘露寺さんの言ってた武器ってなんだろうなあ、やつぱり刀かな？埋まっていたりするのかなあ」

「もしかすると槌や斧かもしれない、現に岩柱もそんな武器使ってたし」

「それとも銚や細剣みたいな細身のものかも」

「どうなんだろうなあ、宝探してみたいでわくわくする」

探し始めようとするも俺の鼻は温泉の硫黄の強い臭いで利きにくくなっている。

だからこそ手当たり次第で探さなきゃならない。

そう思っていた。

探していると、何か声が聞こえる。

「あれ、なんかあそこで言い争いしてますね」

「子供？ともう一人は…」

「あのお方は、霞柱、時透無一郎さん！なぜこの場所に!？」

霞柱もいるということとはもしかして同じものを探しているのか？

そう思い俺たちは近づくと、

「どっか行けよ！何があっても鍵は渡さない！使い方も絶対教えねえからな！」

揉め事だったら仲裁しないと、そう思いながら急ぐ。

「まあ、手をあげるまで動かない方がいいかも、霞柱がどんな人か気になるし」

「文さん、手をあげてからでは遅い。だから、手をあげる前に…」

霞柱は手刀を子供の首に決める。

その子は倒れ込む。

俺はいてもたってもいられず文さんの手を振り切り、仲裁に入る。

「やめろー！何してるんだ！」

霞柱は子供の服を掴み高く引き上げる。

「手を放せ！」

俺は霞柱の手首を掴む。

「声がうるさい。誰？」

「子供相手に何してるんだ！手をはな…」

霞柱の手首はビクともしない。俺よりも細い腕をしているのに。

「君が手を放しなよ」

すると霞柱の肘打ちが俺の鳩尾に決まる。

俺は倒れ込み息が苦しくなる。

「すごく弱いね…よく鬼殺隊に入れたな…。ん？その箱から変な感じ
がする。鬼の気配かな…何が入ってるの？それ…開けて…」

パシイン

「触るな…絶対に！」

俺は怒りをぶつける。

その隙に咲夜さんが子供を霞柱の手から助ける。

「大丈夫？怪我はない？」

「はなせ！あつちにいけ！」

俺と咲夜は心配になる。さつきまで吊られていたのに。

「誰にも鍵は渡さない。暴力を振るわれたって、拷問されたって、絶対に
渡さない！あれはもう次で壊れる！」

子供は震えながらそう言う。

すると霞柱が子供に言い放つ。

「ねえ、君は拷問の訓練を受けてるの？大人だって殆ど耐えられない
のに君は無理だよ。度を超えて頭が悪い子みたいだね。壊れるから
何？また作ったら？君がそうやって下らないことをぐだぐだ言うつて
る間に何十人が死ぬと思ってるわけ？柱の邪魔をするつて言うのは
そう言うことだよ。柱の時間と君たちの時間は全く価値が違う。
少し考えればわかるよね？刀鍛冶は戦力としては無力。人の命さえ
救えない。武器を作るしか能がないから、ほら、鍵。自分の立場を弁
えて行動しなよ。赤子じゃないんだから」

俺は怒りがこみ上げ、霞柱の差し出した手をはたく。

「すごく嫌な気がした！なんだろう…配慮が欠けていて残酷です！」
「この程度が残酷？君は何を…」

「正しいです！あなたが言ってることは概ね正しいんだろうけど、間違っではないんだろうけど、でも刀鍛冶は重要で大切な仕事です。剣士とは別の凄い技術を持った人たちだ。だって実際刀を打つてもらえなかつたら俺たち何もできないですよ？剣士と刀鍛冶はお互いがお互いを必要としています。戦っているのはどちらも同じです。俺たちはそれぞれの場所で日々戦って、切磋琢磨するん…」

「悪いけど、下らない話に付き合ってる暇ないんだよね」

俺の首に手刀が打ちつけられ、転ばされ、意識を飛ばされる。その直前に、遠くに鋼鐵塚さんの姿が見えた。

「おっ、起きろ、こんなところで寝てんじやないよ」

俺は目を覚まし起き上がる。

「大丈夫ですか？急に起きない方が…」

「鋼鐵塚さんいた？さつき見えたんだけど」

「いないですよ。さつき見えたのって私のことじやない？」

「にとりさん！」

「俺はどのくらい気絶してたの？」

「そうね、15分くらい」

「柱の人は!？」

「さつきの霞柱？鍵を小鉄くんからもらったら行っちゃったよ」

「渡しちゃったのか…渡すしかない感じだったけど…いや事情もよくわからない俺がゴチャゴチャ言うことじやないけど…」

俺は首を押さえながらそう答える。

「そりやそうだよなあ、あまり口を出すのはよく…」

「嬉しかったです！見ず知らずの俺を庇ってくれて…ありがとうございますございました」

「いやいや役に立てず申し訳ない」

「あ…ならよかった」

すると咲夜さんも起き上がる。

「いてて、転ばすだけでは済まさず、手刀まで打たれるなんて…」
「こつちも起きたか…、だいぶやられたみたいだが」

咲夜さんの隊服は泥だらけになっていた。

「こりや大変だねえ。二人とも災難だったね。あと、そこで隠れてる奴！早く出てこい！」

「あちやー、バレてましたか」

文さんは茂みから現れる。

「コソコソ覗き見とかいい度胸してるよ。このことは風柱にも伝えておくからね」

「それだけはご勘弁を」

文さんはにとりさんに泣きついていた。

「ところで、結局鍵っていうのはなんの鍵だったの？」

「絡繰人形です。」

「ん？絡繰人形？」

「はい、俺の先祖が作ったもので百八つの動きができます」

「へえー凄い！そんなのがあるんだ！」

「人間を凌駕する力があるので戦闘訓練に長らく利用されてきました」

「そうか彼は訓練のためにそれを…」

「はい…だけど老朽化が進んで、壊れそうなんです」

「それってどういうものなの」

「実は…」

小鉄くんが言おうとするものすごい音が森の奥から聞こえてくる。

「さっきの人がもう訓練を始めてる！急がないと！」

そう言われて小鉄くんは案内される。

案内された先にはものすごい戦闘を霞柱と絡繰人形が繰り広げていた。

「あれが…俺の祖先が作った戦闘用絡繰人形の一つ、縁壺零式です」

小鉄くんがそういうと

「ありやくだいぶ鈍ってきてるなあ、まあ仕方ないか」

にとりさんはそういう、この速さで鈍っているというのはどういうことなのか。

ウザつたい鎧鴉と小鉄くんの決意

俺はその縁壺零式をよく見る。

見覚えがあるあの顔。

それにどういふことなのか俺は小鉄くんにきく。

「腕が六本あるのは何で？」

「父の話によるとあの人形の原型となったのは実在した剣士だったらしいんですけど。腕を六本にしなればその剣士の動きを再現できなかつたからだそうです。そしてその絡繰の試作として作られた巖勝零式というのもあります」

俺はその名を聞いて前に煉獄さんの父上の話を思い出した。

「これもしかして500年近く経ってるの？よく壊れないで動いてるね」

「よく知ってますね。俺も父から聞いたから実感湧かないですが、あの絡繰は凄い技術で作られてて今でも直せる人がいないですよ。もし二つとも壊れてしまったら、この里には絡繰人形が一つしかなくなっちゃうんですよ」

「その一つって？」

にとりさんが何故か自信満々で語り出す。

「よくぞ聞いてくれた！その絡繰人形こそ私が縁壺零式と巖勝零式を研究して作り上げた第三の絡繰！その名も矜羯羅零式！元は鬼殺隊が倒したとされる最後の上弦の鬼の剣士。その絡繰はこの里の門番をしている。私の最大の自信作よ！」

「にとりさんはすごいんですよ。俺でも作れない絡繰を作ってしまうんですから、それに引き換え俺は親父もお袋も死んじゃって兄弟もいない。だからこそ俺はこの二つの絡繰を守らなきゃならない。それが俺の大切なものだから…」

「それであんなに怒ってたのか…」

「小鉄くんは気持ちと行動がチグハグなところがあるからね。そこをなんとかしないと」

「それにしてもあの霞柱さん凄いですね。私たちよりも年下なのに柱

で才能もあつて…」

「ソリヤア当然ヨ！アノ子ハ日ノ呼吸と月ノ呼吸ノ使イ手の子孫ダカラネー！」

足元から声がした。この声は鏖鴉の

「アノ子ハ天才ナノヨ！アンタ達トハ次元ガ違ウノヨ！」

「霞柱の鴉だな。なんか偉そうだな」

「偉ソウジヤナクテ偉イノヨ！柱ニ仕エル鴉ハソレニ気安ク触ンナイデヨ、デカチチメスガ！」

「デカチチメスとはどういうことだよ。いい気になってんじやねえ！」

文さんは鏖鴉に煽られて怒つてた。

「そういえば二つの始まりの呼吸の使い手つてことはあの人はそんなに凄い人なのか…でも日の呼吸じゃないんだね…使うの…」

「アア！黙ンナサイヨ！クソガキ！目ン玉ホジクルワヨ！」

「痛い痛い！ハッ！思い出した！俺はあの人を夢で見たんだ！」

それをいうと鏖鴉が啄むのをやめる。

「ハアア？馬鹿ジヤナイノ？アンタコノ里ニ来タコトアンノ？非現実的スギテ可笑シイワ、戦国時代ノ武士ト知り合イナワケ？アンタ何歳ヨ？」

静寂が流れる。言い返す言葉が見つからなかった。

「なんかごめん…俺おかしいよな」

「いえいえ！それは記憶の遺伝じゃないですか？うちの里ではよく言われることです。受け継がれていくのは姿形があるものだけではない。生き物は記憶も遺伝する。初めて刀を作る時、同じ場面を見た記憶があつたり経験していかないはずの出来事に覚えがあつたりと、そういったものを記憶の遺伝と呼びます。あなたが見た夢はきつとご先祖様やその縁があつた人の記憶なんですよ」

「なるほど、つまり私が一度も小説を書いたことがないのに、スラスラとかけたりしたのも？」

「私が農家の育ちなのに花の呼吸が最初から使えたのも？」

「おそらくはそうだと思います。先祖に物書きがいたり鬼殺隊の剣士

がいたらそういうこともあり得ますからね」

「非現実的！ソナナコトアリエナイ！」

「優しいね、ありがとう俺は炭治郎、そして、この銀髪の女の子が咲夜さん、そして、黒髪の背の高い人が文さん」

「俺は鉤村小鉄です。その意地の悪い雌鴉なんて相手にしない方がいいですよ」

バキィ

ものすごい音とともに縁壺零式の鎧が飛ぶ。

「う…ううっ」

小鉄くんはいきなり逃げ出す。

「小鉄くん！」

俺が引き止めようとしてもきかず彼は森の奥へと行ってしまった。

「俺、探してきます！」

「頼んだぞ！お前の鼻が一番よくきくからな」

俺はみんなを置いて小鉄くんを探しに行った。

「小鉄くん！絶対に見つけるよ！小鉄く…ん？」

小鉄くんは高い木の上で蹲っていた。

「俺にできることがあれば手伝うよ、人形のこと諦めちやダメだ。君には未来がある。十年後二十年後の自分のためにも今頑張らないと、今できないこともいつかできるようになるから」

「ならないよ、自分で自分が駄目なやつだってわかるもん。俺の代で…俺のせいで終わりだよ。」

俺はそんな弱気な小鉄くんを見たくない。俺は木をよじ登り小鉄くんのあごを弾く。

「投げやりになってはいけない。自分のことをそんなふうに言わないでほしい。自分でできなくても必ずにとりさんや他の誰かが引き継いでくれる。次に繋ぐための努力をしなきゃならない。君にはできなくても君の子供や孫ならできるかもしれない。俺は鬼の始祖を倒したいと思っっているけれど、鬼になった妹を助けたいと思っっているけれど、志半ばで死ぬかもしれない。でも必ず誰かがやり遂げてくれる

と信じてる。俺たちが：繋いでもらった命で十二鬼月を何体も倒したように俺たちが繋いだ命が必ず鬼の始祖を倒してくれるはず。だから、一緒に頑張ろう！」

俺は小鉄くんの手を握る。

「うん、ありがとう……。俺、人形が壊れるの見たくなかったけど決心つけるよ。戦闘訓練は夕方までかかるはず、だからこそ心の準備して見届ける。ちゃんと俺の目で」

俺はそう言ってくれたことに喜んだ。

俺と小鉄くんはそれから木を降りてすぐに場所へと戻る。

バキバキバキツ

「ものすごい音がした。もしかして」

「大変だ！縁壺零式が！」

小鉄くんと俺は急いで縁壺零式の方へと向かう。

そこには倒れた縁壺零式と一本の刀を掴む腕が転がっていた。

「いい修業だったよ。誰だっけ：あっそうか。俺の刀がさつき折れちゃったからこの刀貰っていくね」

「そんな、縁壺零式が……」

「あ、それとこの刀は処分しといて」

そう言って霞柱は刀を投げ捨てる。そして立ち去った。

悪意の匂いは一切しない。それどころか彼からは意識の臭いさえ希薄だ。

わざとやってるわけじゃないんだろうな……でも……

「言ツタジャナイ！柱ハ強イツテ」

鏖鴉はそう吐き捨てた。あの鴉は全力で悪意があるな……凄い下に見える。

小鉄くんは縁壺零式の手を取り起き上がらせようとする。

「大変だなあ、こりや動くかわかんないぞ？腕一本砕かれちゃったし」にとりさんはそう言う。

「わからないじゃないですか！動けるかどうかは確認しないとー！」

小鉄くんは必死に起き上がらせる。それに俺は力を合わせて立たせた。

そんな中雨が降ってくる。

その雨は悲しみの雨なのか、やけに強い。

「動かない…：やっぱりもう…：」

「いや、こりや目のところの歯車に小石が詰まってる。石取ったらすぐにも動くよ」

にとりさんが小石を取り除く。

すると、縁壺零式は刀を構えだす。

「やった動いた！良かった。」

俺は喜んだ。

「そうですね。炭治郎さん、これで修業して、あの澄ました顔の糞ガキよりも絶対に強くなってくださいね…：それに、咲夜さん、文さん、俺が全力で協力しますので…：！絶対に見返してやりましょう。今、ここから！」

え、今から全員で、

「それに、今から巖勝零式も起動させます。さあ、本気でいきましょう」

その言葉が俺たちに降りかかる大きな試練だと言うことを俺は今はまだ理解できなかった。

小鉄くんの鬼畜戦闘訓練と渾身の一撃

小鉄くんの前に俺、咲夜さん、文さんが並ぶ。

「みなさん、強くなつて下さい。そして奴にはこう言うんですよ。その程度か？ゴミカスが、長髪なんだろう？引きちぎるぞ昆布頭。チビ、不細工、腑抜け、短足、童貞、切腹しろ恥知らず！」

「いやいやいや！」

「小鉄くん！それはちよつと言い過ぎだよ！」

「里中引き回しの打首獄門の方がいいですかね」

「いやそこまでは言えない！」

「言うんです！」

「いやいや」

「みなさん負けたくないですよね！あんな奴より弱いとか腹が立たないんですか？年下に力負けとかそれでもいい歳食つてきたんですか？」

何も言い返せなかった。

俺はまだまだ未熟者だ。そう思う。

「やってやろうじゃねえか？アタシの風の呼吸で切り刻んでやりたい！」

文さんは一人称が変わった。これは本気だな。

「私たちが強いことを証明して土下座させましょう」

咲夜さんもやる気だ。

「俺もやります！」

こうして俺たちは修業が始まった。

「うわああああ」

「きやあああ」

「炭治郎さん！咲夜さん！」

「死んでしまう！二体同時に相手はきつい！」

「二体合わせても腕はたった9本ですよ！あの糞ガキに縁壺の一本壊されたので人形の機能は落ちてます。この程度で死んでるようじゃカスですよ、頑張ってください！」

「いやあああああ」

「文さん！文さんも倒されたので一回止めますね」

強すぎる。連携も上手だからより厳しい。

「3人ともよく聞いてくださいね。あれは癖で動いてるんですよ。皆さん相手の動きを見てから判断してるんじゃないんだ。だから駄目なんですよ。わかります？要は基礎がなってない。本当に今までよく生きてこられましたね、鬼殺隊でギリギリですよ、全てが。俺はあなたたちの弱いところを徹底的に叩きますから俺の言ったことができるようになるまで一切食べ物をあげませんからね。覚悟してください」

「は…」

後にとりさんから聞いた話だが

小鉄くんは元々かなりの毒舌で父を少し前に亡くしたために落ち込んで毒舌もかなり鳴りを潜めていたが、霞柱によって腕を壊されたことにより完全復活した。さらに小鉄くんは非常に分析が得意であった。その優れた分析力故に自分の技術力の低さを正確に捉え絶望していた。十一歳という若さで未来があるにもかかわらず、つまるところ怒りというものは人を突き動かす原動力となる。だからこそ彼に俺たちは付き合う役目がある。

「あの糞ガキには言いませんでしたけど絡繰は首の後ろの鍵を回す以外でも動きの型を変えられるんです。寄木細工の秘密箱ってご存知ですか？」

「あ、知ってる！妹の花子が家族全員分作ってたなあ」

「正しい手順で動かなさければ開かない箱、あれと同じでこの二つの人形は手首と足首とそれぞれの指を回す数によって動作を決めるから刀鍛冶が剣士の弱点をつく動きを組んで戦わせる。そうでないと本当の意味のある戦闘訓練にはならないんですよ。拷問の訓練なんかうけなくてもな、ヒヒヒ、嫌いな奴には死んでも教えねえ。それに、縁巻零式と巖勝零式を合わせると196もの技を繰り出せますし、にとりさんの矜羯羅零式の77よりも圧倒的に多いですからね」

つまり絡繰は持ち主と二人三脚なのだ。時透さんは結局刀しか収

穫を得られなかったのだ。

それからというものの、強烈な戦闘訓練が続き、

俺たちは何度も打たれる日々が続く。

「みなさん、遅いです。全然ダメ！人形が持つてるのは素振り棒じやなきや死んでますよ！しつかりして、今日で五日目ですよ！明日から両方の人形に刀を持たせますからね！」

それを聞いた俺たちは悲鳴を上げる。

分析力高めの小鉄くん。しかし剣術の教えて 手としてはド素人、どのくらい人間の命の限界かわからないため訓練は鬼畜そのものだった。

言われた通りの条件が出来なければ水も食糧も休憩も与えないという暴挙、さらには隙を見て虫でも貪ろうものならばさらに訓練内容が激化する。それこそが小鉄くんの無知ゆえの純粹なる暴挙だった。

幸い雨が多かったことで命はつながったが恐ろしいほどの運動量の中絶食絶眠無休憩、そんな中で俺たちは何度も三途の川を渡りそうになるも、川に飛び込んで現世へと戻る。それを繰り返す。

そんな時、何回目かの川へと飛び込んだ時に川底に光るものが見える。その光るものを掴みに行くと思議なことにその光るものは水の中でも強い臭いがした。

行ける！この臭い、出てくるところがはっきりわかる。

その時はみんなも同じ感覚だった。

「そこだ！」

一瞬の隙が見えた。俺は絡繰に一発の攻撃を与える。

だが、体力の限界を幾度となく超えてきた時点で受け身を取る力も残されてなかった。

「一撃入りでしたね。炭治郎さん！あなたが一番乗りです。しよぼすぎて小指しか折れてませんが食べ物をあげましょう！」

その言葉に俺は安堵する。

「私たちは〜！」

「あなたたちはまだ一回も攻撃を入れられてないので続けてください

！」

「ひー！」

俺は10日間ぶりに食事をありつけることができた。

小鉄くんが食事を取ってくる間にも文さんと咲夜さんもとりさんが見てる中でしつかり一撃を入れられたことでご飯にありつけた。

「動作予知ってのかな、その動きをしつかりわかるようになるには普通なら育手のところで習ってくるはずなんだけど、あなたたちはそんなのも習ってこなかったの？私は習ってきたよ！それに、あなたたちはまだまだまだ未熟だからとにかく十二鬼月を倒すくらいなら柱よりも速い動きが出来ないとダメ！」

にとりさんは元々鬼殺隊だったのを忘れていた。それに、絡繰を自分で作る人だ。その説得力は折り紙付きだ。

そのことに俺たちは何も言い返せなかった。そして、

「これから縁壺零式と巖勝零式の最終段階に入る。これまでとは比べものにもならないほど速くなる。覚悟しろ！」

「はいー！」

わかる！わかるぞ動きが！食事のお陰で体力が回復した分、ずっとわかりやすくなっている。いける！

俺たちはほぼ同時に察知し、渾身の一撃…

でも壊れたら…

「思いつきり壊してください！絶対に俺にとりさんが直すから！」

俺たちは渾身の一撃を入れる。

入れた勢いで3人の刀はへし折れてしまった。

だが勢いが余ったせいでみんな背中から地面に落ちる。

「大丈夫ですか！」

「ごめん、借りた刀折れちゃった」

「いいんですよ！それよりすごい一撃がきまりましたね！」

ピシッ

ものすごい音がした。

俺たちがその二体の絡繰人形を見ると、頭と膝は砕け、人形は倒れ

る。

そこからは刀が二本飛び出した。

鬼の計画と鍛えすぎた鋼鐵塚さん

時は少し遡り、炭冶郎たちが修業を開始した頃、別の場所では、「無惨様！刀鍛冶の里が見つかりました！」

「ほう、それはよかった」

「つきましては、私が、刀鍛冶の里を滅ぼしに向かいましょう」

「いや待て、玉壺よ、お前だけでは力不足になるかも知れん、だから、上弦を一人つけることにする。それに、刀鍛冶の里をなぜ見つけられた？」

「実はですね、私の運営している陶磁器の会社がございまして、そのこの工房の近くを桃色の髪 of 剣士が通りまして、その道を社員に遡らせたらすぐに見つかりました」

「なるほど、さすが私の認めた十二鬼月だ。人を操るのは鬼にとっては造作もない。だが、その桃色の髪 of 剣士は仕留めたのか？」

「いえ、私の会社の社員が仕留めようとすると、特異な剣で切り刻まれました、それで今はどこにいますのか」

「玉壺。お前はそんなだから下弦に落ちるのだ。それに、元上弦としての誇りさえないのならお前を殺すことだってできるのだぞ、だがなぜお前を殺さないかわかっているのか？」

「私が、稼ぎ頭だからです」

「そうだ、お前の運営している会社が、この日本帝国でも十本の指に数えられるほど大きいからだ。海外にまで販路を広げるほどの陶磁器の会社など、お前以外には出来ない。だからお前はそのためだけに生かされているのだ。お前では力不足だ。だからお前には、半天狗をつけることにする。それでも刀鍛冶の里を滅ぼせなかつたら次はないからな」

「はい、わかりました」

そして玉壺と半天狗は玉壺のいる工房へと転送された。

「うわあああなんかでた！何これ！」

「いやいやわかりません！でもこれはなんなんでしょう！少なくとも

五百年近くは前の刀ですよ」

「そうだよね…これやばいね…どうする!？」

俺たち五人は興奮が収まらず過呼吸になる。

「みなさんで貰ってください!是非!」

「駄目ですよ!今までの蓄積があつてたまたま俺たちの時に壊れただけだろうし」

「とりあえず二本とも抜いちやいますか!」

「そうだね!見たいよね」

一本目の刀を抜く。

その刀は錆びていた。

「でも、もう一本あります。そっちの方はもしかすると…」

「抜けない!ふん!ふん!ふん!」

俺たちは力いっぱい踏ん張って引き抜いた。

その刀はさつきよりもより錆びていた。

俺たちは崩れ落ちる。

「いや、当然ですよ。五百年近くとか誰も手入れしていない知らなかったし…すみませんぬか喜びさせて…」

「大丈夫!気にしてないよ」

俺たち三人は涙が止まらなかった。

すると、

遠くからものすごくムキムキな人がやってくる。

「うわあああああ!」

「誰!？」

「鋼鐵塚さんだよ!その特徴的なお面は!」

あまりにも変わりすぎた姿に俺たちはびっくりした。

「話は聞かせてもらった…あとは任せろ…」

「ちよつと、その刀をどうするんですか?」

「そういうえば、今でも通じると思う」

にとりさんは突然、鋼鐵塚さんに飛びかかる。

「ああ、何だあああひやひやひやひやひやひやひやひやひや!」

「少年少女たちよ、鋼鐵塚さんの急所は脇です」

「そしてもう一つの急所は乳輪です。ここをなぞると鋼鐵塚さんは笑いが止まらなくなるんです」

鉄穴森さんにとりさんが二人揃って鋼鐵塚さんのことを擦るのは流石にちよつと酷いと思つた。

「鉄穴森さん、ご無沙汰してます」

「お久しぶりです。炭治郎くん。鋼鐵塚さんはくすぐられると数分間ぐったりしますので私から説明しましょう。鋼鐵塚さんを許してやってくださいね、

山籠もりで修業していたんですよ」

「え、修業？」

「そう、炭治郎くんや咲夜ちゃん、文ちゃんを死なせないようもつと強い刀を作るために、素直に言わないけれどね」

「俺のために…嬉しい」

「私のことを思ってくれたんだ…」

「申し訳ないと思うよ。私みたいに一年で八本も折っちゃう不器用なやつだから」

「え？」

「そういえば鋼鐵塚さんの担当している剣士は今は七人しかいないんです。そんな中で若い隊士が3人も頑張っているから嬉しかったんだと思いますよ。この人、気難しすぎて剣士さんに嫌われて担当外れることが多かったから」

「そうなんですか？で、他には誰が担当なんですか？」

「この人の担当はあなたたち3人の他だと柱なら心柱のさとりさん、炎柱の煉獄妹紅さん、音柱の継子の双子だけです」

「人付き合ひ下手すぎなんですよねこの方。だから未だに嫁の来手もないんですよ」

「ああ、俺に嫁が来ないって、うるせえよ！」

「あ、復活しましたね」

鋼鐵塚さんは起き上がる。

「この錆びた刀たちは俺が預かる。鋼鐵塚家に伝わる日輪刀研磨術で

見事磨きあげてしんぜよう」

鋼鐵塚さんは決める。

「じゃあ始めからそういえばいいじゃないですか一言、信頼関係もないのに任せろって馬鹿の一つ覚えみたいに……」

「お前は黙つとれー！ー」

「脇と乳輪です！ー」

いろいろ騒がしくもなるとかになった。

俺は訓練を終えて一日中寝た。

もはや疲れとか通り越して眠れないと思った。

でも呼吸を整えるとすぐに寝れた。

朝起きると玄弥が帰っていた。

今日はご飯を食べる日だったので美味しそうに玄弥はご飯を食べた。

「玄弥お久しぶり、最近見なかったけどどうしてたの？」

「あ？俺は銃の狙撃訓練だよ。文句あるのか？」

「いや……ごめん」

俺は何もいえなかった。

玄弥とにとり

なんで俺とあいつが隣の部屋なんだ。

いつもいつも隣だからよく来るんだが

友達のように話しかけてくるのがうるさい。

久々に帰ってきたと思えば話し相手がいなかったのか？

むしゃくしゃする。

炭治郎という奴は忘れっぽいのか？

「玄弥、昨日まで訓練してたんだけど、その絡繰から二本の刀が出てきて俺たちは驚いたんだ。そしたらものすごく筋肉質になった鋼鐵塚さんが現れて刀の研磨をするってことでいろいろあって大変だったんだよ。鉄穴森さんがいうには刀の研磨が二本とも終わるまで五日ほどかかるらしくて研ぎ終わるのが四日後になるんだ。その研ぎ方すごい過酷みたいであまりの辛さに死んじゃった人もいるとか言ってる心配だよ。絶対に来るなって言われてるんだけどさ、見に行ってもいいかな？玄弥はどう思…！」

俺は炭治郎とかいう奴に言い返す。

「えっ、俺たち友達じゃないの？」

「違うに決まってるだろうが!!てめえは俺の脚を折ってんだからな！忘れたとは言わせねえ」

すると炭治郎はスツとした顔でこう言う。

「あの時は階段から脚を踏み外した玄弥が全部悪いし仕方ないよ」

「下の名前でいちいち呼ぶんじゃねえ！」

「そういえばこの栗まんじゅう美味しいよ！食べる？」

「は？いらねえーってーの！さっさと自分の部屋に戻れ！」

俺が言い返していると炭治郎という奴が、何かに気がつく。

「あれ？歯が抜けてなかったっけ？温泉に入っていた時前歯を一本…」

あ、こいつ、俺のことに勘づいたか？だがここは黙ってはぐらかし

た方がいいな。

「お前の見間違いだろ」

「見間違いじゃないよ、歯とつてあるから」

「な、何で取ってんだよ気持ち悪い奴だなテメエは！」

「いやだって、落とし物だし返そうと……」

「正気じゃねえだろ、捨てろや！」

俺は奴に対して気持ち悪さを覚えた。

「てめあはおれに近づくな！つてか今後一切俺の部屋に入ってくんじゃねえ！」

俺は奴を締め出す。

ああ、あいつは何でそんな過干渉なんだ？

俺となんかまだ刀鍛冶の里以外で話したことないくせに、

それに、蝶屋敷ですれ違った時なんか俺は別のことを考えてたから話す気にもならなかった。

すると、襖を開ける音がする。

「誰だ！呼びかけもせずに開けるん……じゃね……」

戸を開けたのはにとりさんだった。

「おう、元気にやってるか？それに私の作った銃の調子はどうだ？」

「別に、おかげさまで、たくさん鬼を狩るのに役立ててますよ」

「玄弥、少しだけ話をしないか？」

「話をする気にならねえ、とつとと失せろ」

「あんたの兄も、何年か前に同じことを言われたよ」

その言葉を聞くと、兄貴のことが気になった。

「どういうことだ。兄貴の何を知ってるんだ！」

「そういえば言っただけじゃなかったな。実はね、アンタの兄、不死川実弥の刀を打ったのは私なんだよ。つまり、兄弟揃って私がいなければ任務さえつとまらないって訳だ」

俺はそれを聞くと兄貴のことを思っただけ何も言えなくなる。

「やっと大人しくなったか、お前の兄貴はなあ、私が初めて刀鍛冶として担当した隊士なんだよ。あいつは凄かったよ。私の刀を何本も折

りながら強くなつていったんだから、そういう所はお前とそっくりだよ」

「うるせえよ、兄貴のことを悪くいうんじゃねえ」

兄貴のことを言われて俺は顔を背ける。

「そう、不貞腐れんな、それに、お前は私と結構似てるところがあるんだよ」

「どういうことだ？」

「私はね、お前と同じく呼吸は使えないんだよ。鬼殺隊なのに全集中の呼吸が使えないのは変だと思うけどさあ」

「そ、そうなのか？」

というかにとりさんって鬼殺隊だったの？

「私はね、小さい時から歯車とか弄つて色んなもの作ってたんだ。そしたら気味悪がられて親に捨てられる形で育手に売られたんだよ。それから剣の才能があつてもものすごい数の型を覚えたよ。でも私はね、型は真似できても呼吸の適性は全くなかった。それでも私は鬼殺隊に入りたくて育手の人のことを無視して勝手に最終選別受けたら受かつちやつてさあ。それ以来、育手とは絶縁だよ。だけど、私には才能がなくてね。いったいどうやって鬼を倒すのかもわかんないで受かつちやつたから、そんな時、刀鍛冶の鉄穴森さんが私の刀を打つてくれた時に驚いたよ。こんな刀どうやって作つてるんだろうって、それで鉄穴森さんに言ったら初めてものすごく褒められたらしくてね。私が素晴らしい刀ですね、弟子になりたいですって言ったらすぐにでも私のところに来なさいって言われて、そして今に至るわけよ」

俺も確かに適性は無い。それに苦勞は何度もした。でもこんな生き方もありなんだな。

と、にとりさんのことを思う。

「玄弥、そういえばあなた、今思春期で女の子と話せないんだっけ？もしかして私の事女の子だと思つてない？それとも私だけなら大丈夫とかそういうの？」

俺は不思議に思った。この前の柱の人や同期の2人とすれ違った

時でさえドキドキして話せなかったのに、にとりさんとだけは話せる。女性なのはわかってはいるのに、

「私のこゝんな豊満な体で興奮しない男なんかなかなかいないぞ？お前の兄でさえ思春期の時はもじもじしてたぞ。おかしいな。私の体に興味無いとか？」

それを言われると赤面する。

「うるせえ、とにかく、銃は威力が上がってたからありがとよ」

「思春期だからやっぱりそうなるか、もしさあ、今度刀鍛冶の里に来る機会があつたら、私が刀の打ち方を教えてあげるよ。自分で刀を打てる剣士つてのはなかなか便利だからな、それに、もしよければ私の弟子になつてもいいよ」

それは、もしかして…

「なくに変なこと考えてんの？私はあなたの事を思つて言つてるだけだからね。恋とか愛とかそんなのは無いよ」

俺はそれを言われてほつとする。

「あ、そういえばそろそろ矜羯羅の型を変える時期なの忘れてた。玄弥も一緒に来る？」

「勝手に行けばいいじゃねえか！俺はいかねえ！」

「つれないなあ、あんたがついてきたら、スイカのぬか漬けをあんたにやる予定だつたんだけど」

「……じゃあ、いくよ……」

「そう来なくっちゃな」

なんか好物に釣られた動物のような扱いされた気がした。

俺にとりは里の門まで行く。

そこには、ぐちやぐちやに壊された絡繰人形が横たわっていた。

「うわあああああ！私の矜羯羅零式がああああ！許せない！私の絡繰を壊すなんて！」

その壊れた人形を俺はただ眺めているしかなかった。

「これは確実にやばい、私の矜羯羅零式を壊すということは、もしや、上弦クラスの鬼が！玄弥！里のみんなが危ない！」

「にとりさん！俺が里長に伝えてきます！あと、俺が必ずその絡繰を壊した奴を倒して見せます！」

「頼んだよ！私はこの絡繰の部品をかき集めるから」

この時、すでに鬼が里の中に侵入していることを俺はまだ知らなかった。

時透さんと分裂する鬼

俺は少し眠りについてた。

さつきまでは彌豆子のために三つ編みを編んでいて、その疲れで眠ってしまった。

そんな時、鼻をつままれる。

「んがっ」

「ねえ君？鉄穴森さんっていう刀鍛冶知らない？」

目を開けると時透さんがすごい近くに顔を近づけて聞いてきた。

「わあ時透さん！今俺の鼻つまんだ？」

「つまんだよ、何回も話しかけても起きないし、反応が鈍すぎると思う」

「いやいや！敵意があれば気づきますよそんな」

「まあ敵意を持って鼻つままないけど」

「鉄穴森さんは知ってるけど…どうしたんですか？多分鋼鐵塚さんと一緒にいるんじゃないかな？」

「鉄穴森さんは僕の新しい刀鍛冶、鋼鐵塚さんはどこにいるの？」

何となく方角はわかるけど、研いでいる場所までは俺も知らない。

「一緒に探す？」

「……、なんでそんなに人に構うの？君にはやるべきことがあるんじゃないの？」

「人のためにすることは結局、巡り巡って自分のためになっているものだし、俺も行こうと思ってたからちようどいいんだよ」

「……う？えっ？何？今なんて言ったの？」

「へっ？ちようどいいよって、だから一緒に鋼鐵塚さんのところに行こうって」

その時彌豆子が飛び起きて俺の顎に思いきり当たる。

「彌豆子起きたかー、ちよつと痛かったよ」

すると時透さんが興味を持つ目をしてきいてくる。

「その子、何かすごく変な生き物だな」

「えっ、変ですか？」

「うん、すごく変だよ。なんだろう、上手く言えない。僕は前にもその子と会ってる？前もそうだったのかな、なんだろう」

探られてはダメだ。禰豆子は鬼だと悟られたらすぐにでも斬られる可能性がある。話題を変えないと、

「そういえば時透さんって古明地こいしちゃんの師範でしたっけ？」

「そうだけど？彼女になんかある？」

「任務の時お世話になってます。こいしちゃんには何度も助けられました」

「あくそれならいいよ。彼女時々僕でも何してるのかわからないことするし、あの子僕より無邪気で猟奇的だから言葉に気をつけた方がいいよ？この前なんか伊之助くん？だっけ、思いきり拷問されてたからね」

うわあく、だからあの時拷問なんて言うとしてもない言葉を口にしたのか。

そう思うとこいしちゃんなんて呼ばない方がいいのかも。

「あと気になったんですが、こいしちゃんと時透さんって歳が逆だと聞いたんですが本当ですか？」

「そうだよ、僕が十五で彼女は十七、彼女の方が鬼殺隊としては先輩なんだけどね。さとりさんに彼女を紹介されて、それで今に至るわけ」なるほど、やはり時透さんは俺より年下だったのか。

そんな時、縁側の方から物音がする。

「ん？誰か来てます？」

「そうだね」

俺と時透さんは縁側の方の襖の方に注目をする。

「ヒイイイイイ、助けてくれええええ」

俺と時透さんは啞然とする。

見るからに老いる鬼という姿、それに、鬼の気配もほとんどなく、とぼけたように入ってきた。

目視するまで2人も鬼と認識出来なかった。

裏返っているのか目には数字が確認できない、だが間違いなく十二鬼月であると俺と時透さんはそう思った。

一瞬で俺と時透さんは刀を抜く。

霞の呼吸。 肆の型 移流斬り

凄まじい速さで刀を振るわれる、だが、

鬼は跳び、天井に逆さにしがみつく。

「やめてくれえ、いぢめないでくれえ、痛い痛い」

鬼は顔をさすっている。今のうちに、

ヒノカミ神楽。 陽華突

天井の鬼に刀を突いた。だが、当たったのは左の掌だけだった。

鬼はそのまま床へと落ちる。

その時禰豆子はそれを察知したように、覚醒状態にはいる。

そのまま禰豆子は老鬼に蹴りを放つ。

老鬼は蹴られて壁に頭をぶつける。

「禰豆子！今はその姿になるな！」

俺は禰豆子に言っている隙に時透さんが老鬼の首を刎ねる。

「ヒイヒイヒイ！頸が斬られたああああ」

俺はその転がる頭を見る。

だが油断してはいけない、前の戦闘のように頸を刎ねても死なない場合がある。妓夫太郎や堕姫のように2人とも頸を刎ねないと死なないこともある。

「時透さん！油断しないで！」

鬼の頭は転がり続ける。すると、

胴体の方から頭が生えだし、転がる頭からは体が生えだした。

分裂している。二体いるということはもしかして。

「後ろの方は俺がやる！時透さんは前の方を…」

突然ものすごい風が吹き、壁が大きく崩れる。

ものすごい突風俺は禰豆子に掴まれ、何とか飛ばされずに済んだ。

だが時透さんは遠くへと飛ばされてしまった。

「カカカツ、楽しいのう、豆粒が遠くまでよく飛んだよ。これは八町は飛んだかもしれないなあ、そう思わないか、積怒」

「何も楽しくはない、俺はただひたすら腹立たしい、可楽…お前と混

ざっていたことも」

「そうかい、離れられて良かったのう」

2体の鬼は話すほどの余裕を持っている。

2体とも俺が頸を同時に斬らなきゃ駄目なのか!?

すると一体の鬼が錫杖を振るう。

その瞬間、俺の体にバリバリと何かが走る。

意識が飛びそうだ。これほどの激痛は!

ん? 屋根に誰がいる。

その影は何かを構え、そしてパンパンと音がした。

鬼の首が2つ飛び、転がる。

すると鬼の攻撃が止む。

その鬼の目には上弦、陸の文字が刻まれている。

そして影は屋根から下りてくる。

その姿は銃らしきものを持ち、勇ましい後ろ姿だった。

「玄弥! 助かった!」

「油断するんじゃないぞ、一体頸を落とさず生きてねえから」

喜怒哀楽と敵の特性把握

玄弥はその鬼の頸を刎ね飛ばす。

「これは楽しい、おもしろい、初めて食らった感触の攻撃だ。貴様は銃使いか…」

鬼の頭は転がりながらそうつぶやく。

そしておかしな臭いを感じ、玄弥に言う。

「玄弥、駄目だ！どんなに強い武器でもこの鬼は倒せない！斬ったら斬っただけ分裂する！若返ってる！強くなるんだ！頸を斬らせるのはわざとだ！」

この鬼は頸を斬られることに全く頓着していない。つまり急所は別にある、

それに、玄弥が切り刻んだから五体に分裂、それに再生が早い。なにか規則性はないか？どこが1番早く治る？急所は必ずあるはずだ、探せ！見極めるんだ！

その瞬間足元が引っ張られる。

「カカカツ喜ばしいのう別れるのは30年ぶりじゃ」

俺は奴の驚のような鉤爪で俺の足をつかみ逆さにして飛ぶ。

能力はそれぞれ違う。

「禰豆子！俺に構うな！玄弥を手助けし！」

そつちには槍を持つ鬼が現れる。

「悲しい程弱いな、お主は」

玄弥は槍に腹を貫かれる。

「禰豆子助けるんだ！玄弥を！」

「人の心配とは余裕があるのう」

その鬼は衝撃波を放つ。

だが、こつちも掴まれる訳にはいかない。

俺はその鬼の両足を斬り、難を逃れる。

だがここは建物五階の櫓並に高いところ、落ちれば危険だ。

「ふふん、やるのう。これはなかなか喜ばしいぞ」

下には木々がある。枝に掴まれば、どうにか、

だが、高さもあり重力で太い枝が何本も折れる。

なら受身を取るにはこれしか

水の呼吸。 式の型 水車

着地は失敗し、腹を打つ。

立ち上がれ！里の人たちも危ない…守らなければ…くそ！体が痺れる。

その時、鬼の臭いが強まる。

後ろを振り返ると鬼の足から頭が生え、衝撃波を放とうとしていた。

俺は咄嗟の判断で斬ってしまおう。

まずい！斬ってしまつたらどうする。さらに増える！

その分裂した鬼の衝撃波を喰らう。

だがあまりにも弱く、その力は軽い平手打ち程度だった。

なるほど、そうか、攻撃の威力が格段に落ちてる！

恐らく、強くなっていく分裂は無限じゃない、ここまで見えた口の文字の喜怒哀楽、そして僅かな小さいが逃げるもの、おそらくあれが本体。それに、その四体の分裂体の状態が一番強いんだな？それ以上分裂すると弱くなる。

俺は2体の小鬼を串刺す。

その瞬間、後ろから鬼の臭い、危ない！

衝撃波が放たれ、木々がなぎ倒される。

俺はまた避けて何とかなった、だが一体だけでも倒して、禰豆子と玄弥の所に向かわないと。

振るう刀身を見るとさつきまで串刺にされたものが消えている。もしや、

その瞬間俺の胸元に切り傷が切り傷がつく。

鬼はさつきのやつを食つたんだ。

ならばこつちも、

「どうだ俺の爪は…この速度と切れ味！金剛石をも砕く威力だ！震えるがいい！歓喜の血飛沫をもっと上げて見せろ！」

俺は振り返り決める。

「お前もな」

やつの弱点は舌かもしれない。だが予想は当たっていた。鬼は頭から胸元まで切り裂かれ、舌も斬られている。

その隙が生まれ、奴は再生までに時間を要す、

衝撃波を放つ時間もなく、俺は顎を斬り、舌を飛ばす。

「どうだ、お決まりの舌がなければ、弱い弱い」

「お前みたいな強い剣士と遊べるのは最高に喜ばしいぞー！」

鬼は速さをあげ、飛ぶ。

そして建物から飛んできた一体を吸収する。

「俺は強くなる。可楽を吸収した俺についてこれるかな？」

鬼の速度はものすごく上がる。

攻撃は見えなくはないが、回避までは難しくなる。

「ぐっ……」

早く戻らなきゃ、2人のいる建物は目の前なのに……どうするんだ、考えろ！ そうだ、今ここで倒せないなら、もしかしたら余計に自体が悪化するかもしれない。でも迷うな！ 禰豆子、玄弥、死ぬな！ 今すぐ行くから。

文さんの言っていたことを思い出す。

「文さんって鴉とか育ててるんですか？」

「ああ、鳥が私は好きだからな、私が一番好きなのは鴉じゃなくて鷹なんだけど」

「なぜ鷹なんですか？」

「あのね、鷹は速く飛び、力強く、そして獲物は必ず逃さない。その強さが私は好きなんだよ。鷹匠って仕事もあるくらいだし、鷹ってのはそれだけ鳥類の一番の強さを誇る。それに、私は鷹を使って修行したこともあるし」

「そうなんですか、どうやって修行するんですか？」

「まず、飛んでる力は一切速度を緩めない、だが地面につき刺さらないように捻る。」

そして戻ってくる時はちゃんとゆっくりになるよう調整する。で

も、鷹つてのは人間と同じように前に目がついている。だから後ろからの攻撃にはとても弱いのだよ」

禰豆子たちのいる建物はすぐそこだ。あそこまで一息で行くんだ。方向を見誤るな。相手の飛行能力と勢いを利用する。

一刻も早く禰豆子と玄弥を助けるために、

俺は鷹のように飛ぶんだ！

そして、鬼を、

「なに、俺についてこれ…」

俺は刀を相手の舌に突き刺す。

やっぱりだ、軽い！そうでなければこの大きさの翼でこれほどまで飛び回れない。行ける。あの建物まですぐに！

俺はその勢いのまま、建物の壁まで抑え込む。

そして全力で鬼を壁りめり込ませる。

「ああああああ！」

壁はミシミシとひび割れ、そして崩れた。

その勢いそのまま俺は奴を真つ二つに切り裂いた。

「ぐわあああああああ」

鬼は悶え苦しむ。

うるさい隊士と魚の化け物

僕はどこまで飛ばされるんだろう。

そう思いながら体を捻る。すると温泉の湯気が出ているところを見つめる。

そうだ、ここで着地すれば、無事で済む。

僕はそう思い、刀を振るい、勢いを抑えて落ちる。

「はあ、スツキリした。なんか騒がしいなあ、もしかして鋼鐵塚さんとか暴れてたのかなあ。まあいいや、着替えだし、行ってみよ……」

ドボーン

「何？ものすごい音したけど、もしかして、化け物でも落ちてきた？何？」

湯柱が治まるとそこにはびしょびしょになった時透さんが立っていた。

「え!?!時透さん?どうしてここに!?!」

「僕の話聞いて、今、刀鍛冶の里に鬼が襲ってきている。刀鍛冶の人たちが危ない。だから、皆を助けないと」

「え、鬼ですか!?!なら急がなきゃダメですね。すぐに行きましょう!」

何この子、風柱の継子だからてつきり荒々しいと思ったらこんな口数の多い子だとは。

僕はこの子に呆れていた。

「いやあ、しかしかなり飛ばされたんですね。六町くらいですかね。それに、炭治郎さんたちの泊まっていた屋敷まで戻るのに結構時間かかると思いますね」

文という子はかなり話しかけてくるけど、本当に隊士としての自覚はあんのかな？

あ、あそこで子供が走っている。

鬼と子供、子供は刀鍛冶として技術も未熟なはず、助ける優先順位は低い。気配からしてあれは本体ではなく術で生み出されたもの、ここで足を止める理由は無い。里全体が襲われているならまず里長、技

術や能力の高い者を優先して守らなければ。

「小鉄さん！大丈夫です！今助けに行きますからね！」

文はなぜ助けようかと…

炭治郎くんが言っていたことを思い出す。

『人のためにすることは巡り巡って自分のためになる』

僕はその瞬間、術で出た化け物の腕を斬っていた。

「はあ、ありがとうございます…」

「邪魔になるからさっさと逃げてくれない？」

文は化け物の頸を斬る。

だが、崩れ落ちない。

ならばこつちかな。

背中の壺のような所を斬り砕く。

すると、化け物はボロボロと崩れ落ちる。

壺から力を得ていたのか…やはり血鬼術で作られたもの。

「うわああああ、ありがとうございます…！」

小鉄くんは僕に抱きついてきた。

「死んだと思った、俺死んだと…うわあああ」

「小鉄さんってやはり子供ですね。この前なんか時透さんのことを昆布頭だとか、酢昆布かワカメだとか言って引きちぎって魚に餌を上げてやるって言ってましたね」

「え？僕のことそう思ってたの？」

「わあああんすみませえん嫌いだったんです」

「こんなことしてる場合じゃないんだ、僕はもう行くからあとは勝手にして」

「待って！鉄穴森さんも襲われてるんです！鋼鐵塚さんが刀の再生で不眠不休の研磨をしているから…どうか助けてください！少しでも手を止めてしまってもうダメなんです、どうか…!!」

「そうですよ！小鉄さんが助けを求めているんですよ！」

「いや…僕は…」

記憶がなにかよぎる。

君は必ず自分を自分を取り戻せる 無一郎

なんだ、僕の頭の中に流れ込んでくる。

混乱しているだろうが今はとにかく生きるだけ考えなさい
生きてさえいればどうにかなる

失った記憶は必ず戻るきつかけを見落とさないことだ
ささいな事柄が始まりとなり君の頭の中の霞を鮮やかに晴らして
くれるよ

お館様…若しかすると僕は思い出せる気がします。

「時透さん、どうしたんですか？虚ろになってますよ？」

僕は小鉄くんを肩に抱える。

「文、急いで鉄穴森さんのところに向かおう。一刻も早く」

「はい、急ぎましょう」

僕と文は急いで森を駆け抜ける。

「うわあああ！ちよつちよつと!!もうちよつとゆつくりで！あともう
ちよつとだけ！」

「喋っていると舌を噛むから、今は黙ってて」

これは正しいのかな？こんなことしてたら里全体を守れないん
じゃ…

いや、できる。僕はお館様に認められた、

鬼殺隊霞柱、時透無一郎だから。

それからは何匹だろう、腕や足の生えた不気味な魚を文と斬り刻み
ながら鉄穴森さんのところに着く。

「鉄穴森さん！大丈夫でしたか！」

「おおつ時透殿、文殿、これはありがたい瞬きする間に全部斬られてい
る」

「鉄穴森さん！良かった、無事で」

「小鉄少年！そちらこそ無事で良かった。正直もう死んでると思いま
したよ」

僕は早く刀を直して欲しくて鉄穴森さんに話しかける。

「鉄穴森さん、僕の刀用意してる？早く出して」

鉄穴森さんは僕の刀を見る。

「おやつこれは酷い刃毀れだ！」

「だから里に来てるんだよ、これで2本目だよ」

「なるほどなるほど、では刀をお渡ししましょう」

「……随分話が早いね」

「良かったですね。感謝したらいいですよ」

鉄穴森さんは話し出す。

「実は炭治郎くんに少し前に頼まれていたんですよ。あなたの刀のこ
とを、そしてあなたをわかってやって欲しいと」

「炭治郎、炭治郎くんが……」

「だから私はあなたを最初に担当していた鉄井戸久道さんを調べて……
あつそうだ！鋼鐵塚さんが危ない！」

「良かった！魚の化け物はいない！あの小屋で作業してたんですよ。
それに、先程にとりさんも駆けつけてくれたおかげで守りも万全、中
には時透殿に渡す刀もあります。それを持つてすぐに里長の所へ向
かってください！」

僕は気がついて鉄穴森さんの服を引っ張る。

「既に来てる。そこに壺がある。あれがもしかすると」

「ヒョッ、よくぞ気づいたなあ、さては貴様、柱ではないか」

壺が動き出す。

そして、本体が現れる。

「うわあ、気持ち悪い！なんだあいつは！」

鉄穴森さんが腰を抜かす。

「そんなにこのあばら屋が大切かえ？コソコソと何をしているのだろ
うな？・ヒョヒョッ」

「お前、名を名乗れ！」

「おやおや、そう焦んなよ、お胸の大きなお嬢さん、初めまして、私は
玉壺と申します。どうかお見知り置きを」

入り乱れる戦いと絶体絶命

「哀しいのう、お前は突き刺されて、死ぬしかない。弱いということは哀しいことだ」

妹の方は扇を持つ鬼と戦っている。

「カカカツ頑張れ小娘、もう少しじゃ、ほらどうした？そんな力じゃ俺を倒せないぞ？」

「さつさと手足を腕いでしまえ、儂はさらに苛々してきた」

「手を出すな！この小娘は儂のものだ！お前と哀絶は他所へいけ！」

その時、斬撃が飛んでくる。

「なに、何が起こった」

怒りの鬼の方の足が削がれていた。

花の呼吸。 伍の型 徒の芍薬

「お待たせしました。先程まで化け物を斬って遅れました」

その声は咲夜か、ならこつちもやるしかねえ。

俺は腹の力を込めて槍が抜けないようにする。

「増えても哀しい、儂が止めを…」

「てめえの相手は俺だろうが」

俺は銃の引き金を引く。

すると鬼の頭が吹き飛ぶ。

「何をくらっているのだ哀絶、腹立たしい」

「そんなこと言ってる暇があったら私の相手をしなさい」

「くつ、小賢しいガキが何人も」

その時、槍を持つ鬼が槍を捻る。

くそつ、抜ける。

そのまま槍は縦に斬り抜かれる。

「ガハッ」

俺は吐血する。だが落ち着け、こんな時師範は経を唱えろといった。

「即死できぬというのは哀しいのう。早く死ぬるよう急所を狙ったが、槍を刺したままにしておいたので死ぬなかったかだがもうこれで

死ねる…ん？」

俺は阿弥陀教を唱え、落ち着かせる。

「何とまあ信心深いものじゃのう、阿弥陀経を唱えておる」

「まだ生きているだろうが、頭をかち割れ！哀絶！」

「わかつているからいちいち怒鳴るな、哀しくなる」

俺は髪で風を感じる。

今だ！

俺はすかさず避け、背後へと回る。

「死ぬまで何度でも頸を斬ってやるぜ！虫ケラ共！」

俺は斬ろうとする。

その瞬間、雷が走る。

くそつこの雷は避けようがねえ

あの錫杖野郎、俺が撃って止める。

咲夜も電撃を喰らい、必死に怒りの鬼の足を掴む。

「足元が疎かですよ」

怒りの鬼は転ばされる。

その時、哀しみの鬼に槍で横つ腹を打たれる。

そのまま俺は隣の間叩き込まれる。

「なんだなんだ、アイツの方が楽しそうだな、お前はもういいぞ、小娘」

そう言って妹の方は蹴りを入れられ、腹を貫かれる。

「積怒！哀絶の心配はいい！この鬼の娘は手足を腕いだ後お前の錫杖で刺して雷を落とし続けければ動けまいな！」

「儂は始めからそのつもりじゃ、だが、この銀髪の娘もうるさくて腹が立つ」

禰豆子ちゃんは逆に蹴りを叩き込み、そして鬼の頸を千切る。

そしてすかさず、鬼を燃やす。

「ぐあ、何だこの炎は」

その隙に禰豆子ちゃんは扇を奪い取り、すかさずその楽の鬼を扇ぐ。

その瞬間、ものすごい勢いで吹き飛ばされる。

「あなた一人になりましたね。だが、こちらは2人、さてどうしますか？」

「どうするも何も、こうするしかないだろう」

怒りの鬼は錫杖の2本目を現し、扇ごうとしていた禰豆子に突き刺す。

さらにもう1本を床に突き刺し、雷を放つ。

「ぐあああああ」

激しい雷に体が痺れ、動けなくなる。

もはや絶体絶命か。

「貴様、まだその傷で生きているのか？なんだ？お前は一体何なのだ？」

哀しみの鬼はそう問う。

「フハハハ、知りたいか？俺の名前は不死川玄弥、すっかり覚えろよ哀しみの鬼、テメエを殺す男の名前だア！」

「ほう、その名は哀しい、ならばお前を殺してしまおう」

槍は扱わずらい、それに、攻撃が単調になる。なら、場所を移すまで。

俺は、建物から飛び降り、森に入る。

「お前は逃げるのか、自分の弱さに哀しくて逃げるのか、なら、俺が殺してやろう」

追ってきた。あいつはまんまと策にハマったな。

森の中へと入り、そして木を背に前を向く。

「さあ、お前のその槍が通じるかな」

鬼はまんまと槍を振るう。

だが、その木に当たり、槍の力が止まる。

「何!?!」

「は！この木はなあ、俺がいつも銃で試し打ちする木だ！硬いだろう？お前の脳みそくらいなあ」

俺はすかさず腕を斬る。

そして、その腕を喰らう。

「貴様、一体何を？」

「俺はなあ、少しだけ特殊なんだよ。こうやって鬼の肉を食べば、体が回復するんだよ」

「なんだと、鬼を喰らうものがあるとは」

「これでお前は、俺に斬られることを恐れるようになる。ざまあ見ろ」

私はどうすればいい？体が痺れて動けない。それに、あの錫杖をどうにかしないと、

その時、壁が崩れる。

「禰豆子！玄弥！大丈夫か！」

「炭治郎、錫杖を…」

「咲夜、ありがとう」

炭治郎は怒りの鬼に斬りかかる。

鬼は対抗して三本目の錫杖を現し、炭治郎目掛けて突き刺そうとする。

だが、炭治郎は何者かの足を取り出し、錫杖を止める。

その瞬間、鬼は怯む。

その隙に、炭治郎は鬼の舌を飛ばす。

そして、禰豆子の錫杖を引き抜く。

私も鬼を斬りかかる。

すかさず錫杖の一本が半分になる。

「やりやがったなあー」

そして禰豆子ちゃんの血鬼術で鬼は燃え上がる。

「小賢しい術を…」

やはり禰豆子ちゃんの血鬼術は効いている。

今こそ斬るべき、

その瞬間炭治郎が明後日の方向を見る。

「楽しそうだのうー！わしも仲間に入れてくれ！」

楽の鬼！なぜ、飛ばされたのに、ここにいる!?

その鬼は扇で扇ぎ、炭治郎と禰豆子ちゃんに叩きこむ。

2人はものすごい重圧で押し込まれ、床に穴が開き、下の階で気絶

する。

「炭治郎！ 禰豆子ちゃん！」

「人の心配をするなど言ったのはお前だったな」

「これで3対1、お前に勝ち目はな

「さあ、ここでお前も死ぬ番だ」

万事休すか…。

狂気の芸術家と無一郎の不思議な感覚

「皆さま、今回は私の密かな作品展にお越しいただきありがとうございます。是非ともこの里で完成した二作品を見ていただきたいと思えます」

玉壺という鬼は笑いながら壺を二つ現した。

「まずはこちら、鍛人の断末魔で御座います！」

なんだこの異常なものは、僕は万世極楽教狩りの時に見慣れてるけど、他の人が見たら吐くと思う。

「ご覧ください、まずはこの手！刀鍛冶特有の分厚い豆だらけの汚い手をあえて！私は全面に樹木の枝のように押し出してあります」

その作品というものを見て、刀鍛冶の3人は震える。

「金剛寺刃殿、鉄尾明さん、鉄池遙さん、神鉋鋼太郎……」

「うわあ、鉄広叔父さんまで……酷い……」

「そう！おっしやる通り！この作品には五人の刀鍛冶を贅沢に！ふんだんに使っているのですよ！それほど感動していただけるとは！さらに、刀を五本突き刺すことでより、鍛人らしさを強調しております。そしてもう一つは剣士の置き時計です。この里に常駐していた鬼狩り子の要である。門番の絡繰から取り出した歯車が無様に、そして無意味に時を刻んでおります。この作品は今度、英国の品評会に送るので、見られるのはここだけですよ！」

あまりにもおぞましい作品を見て怒りがものすごくこみ上げてきた。

「ううわきつしよーこんなゴミ見たいな作品誰がみるんだか、あんたみたいな芸術家気取りのクズ野郎はさっさとこの世からいなくなれよ！」

文が煽り散らかしている。

「貴様、私の作品を侮辱するとは……」

相手が隙ができている。今なら出来るかもしれない。

僕は一瞬で間合いを詰め、刀を振るう。

しかし、玉壺はすぐさま消える。

「貴様ら、私の作品を侮辱しやがって、許しませんよ！」

小屋の上に壺が置かれ、そこから声がする。

「ほう、なるほどね、あんた、壺から壺に移動できるんでしょ、面白い奴だな、その考えだけは芸術的だな」

「ほう、私の芸術を認めましたか、でも遅いですよ、私の作品を侮辱した罪は重いですからね！」

その隙に僕は壺を割るがもう一つの壺からも声がする。

「危ないなあ、私があらかじめ200の壺を配置してなければ死んでましたからね」

200、つまり、有限ということか、なら全部壊せばいいのか。

「にとりさん！壺を探してください！そして叩き割ってください！奴はどの壺から出てくるのかわかりますから」

「は、そのこのデカ乳、なかなかやるのうだが、見破ったところで私は強いですからね」

玉壺は壺を取り出し、逆さにする。

そこから大量の魚が出てくる。

その魚は突然膨れ上がり、破裂する。

血鬼術。 千本針 魚殺

ものすごい数の針が現れる。それをすかさず避ける。

だが、それだけでは間に合わない、刀鍛冶の2人を助けないと、

僕と文は2人で刀鍛冶を守った。

「時透殿！文殿！」

「邪魔だから隠れておいて」

「あなたたちはまだ生きてもらわなきゃ困るんです」

「ごめんなさい、俺は……」

「小鉄少年！ここは話を聞いて逃げましょう！」

刀鍛冶は逃げる。

「そうはさせませんよ？」

また魚が破裂し、針が飛び散る。

それを僕と文で弾ききる。

「オヒョヒョヒョ、お二人とも針だらけで随分滑稽な姿ですねえ、どうです？毒で手足がじわじわと麻痺してきたのでは？本当に滑稽だ、つまらない命を救ってつまらない場所で命を落とす」

その言葉は聞き覚えがあった。

だが思い出せない。誰に言われたんだ？

そうだ、夏だ。ものすごい暑い日、戸を開けてた、暑すぎるせいかな夜も蝉が鳴いていてうるさかった。

「時透さん！どうしたんですか！」

「ごめん」

「ヒョヒョ！しかし柱ですからねえ、一応はこれでも、どんな作品にしようか胸が躍る」

僕は鬼が喋っている間に鬼に斬りかかる。

「うるさい、つまらないのは君の作品だろ」

その瞬間、もう一つの壺を出し、大量に水を吹き出させる。

「ハッ」

いけない、呼吸を止められる。

血鬼術。水獄鉢

「時透さん！」

「ヒョヒョッ、窒息死は乙なものだ。美しい、そして頸を少し斬られてヒヤリとする感じ、これはとてもいい」

駄目だ、斬れない。

「鬼狩りの最大の武器である呼吸を止めたり蹴き苦しんで歪む顔を想像すると堪らない。それに、里を壊滅させれば、鬼狩り共には大打撃。鬼狩りを弱体化させれば産屋敷の頸もすぐそこだ」

「それはどうかな？」

「何だど？お前一人の弱い鬼狩りに何ができる」

「残念ながら先ほどあの人が駆けつけて里長は保護されたよ」

「何だと、私の計画では、すでに里の方は」

「あんだ、馬鹿じゃない？もう一人、柱がすでにここに来ていることに」

「まさか、そんなはずでは、それに、来るのは明日の昼では」

「残念、あの人の任務はとくに終わっていて、こつちに向かつてる途中だったんだよ。芸術家だから頭が使えると思ったんだけど、結局バカでしかなかったわけか。そんなはずが起こるんだよ。恋柱の甘露寺さんは、ものすごく強いんだからな」

時透さん、ここは私が引きつけます。その隙に、術を破ってください。

文、頼んだ。僕は時間がかかるけど、抜け出す方法を考えるから。そうして文は玉壺を引きつけ、僕は術を破ることに専念する。

恋柱と義足

「急がなきゃ急がなきゃ、里のみんなが危ないわ」

私は文ちゃんやの鴉を追って里へと向かう。

「でも私の担当してる地区の中にあっただ刀匠さんたちの里、それに、さっきのご飯をご馳走になってたところから近かったなんて、びっくり！」

私は栃木県が管轄なんだけど、まさか栃木県内だったとは知らなかった。

「よし、あと少しで着くよ、がんばるぞお！」

私は全力で里へと疾る。

「鬼だー！敵襲ー！敵襲ー！各一族の当主を守れ！柱たちの刀を全て持ち出せ！長を逃がせー！」

刀鍛冶の里の方から鐘の音がする。

里の門が見えてきた。

もうすぐだよ。刀鍛冶の皆さん！

私は門を開けようとする。その時足元に変な感覚を覚える。

「ん？なんか踏んじやったか…」

足元には歯車が散らばり、無残な姿となった矜羯羅零式が転がっていた。

私は戦慄を覚える。これほどまで強い鬼が今、刀鍛冶の里にいるなんて。

でもこうしてはいられない。

私は門を蹴破り、里の中へと進む。

すると、目の前にはおぞましい金魚のような化け物が百はいようかという数で暴れ回っていた。

「うわあ！みんな逃げろー！急いで逃げるんだー！」

「気を付けろー！あの化け物は爪が刃物みたいに鋭く硬いぞ！一旦、森の奥へ逃げろー！」

刀鍛冶の人々が逃げる。後ろに金魚の化け物。

私は飛び、宙返りをして刀を抜く。

そして一瞬で金魚の化け物を切り刻む。

「遅れてごめんなさい！みんなすぐ倒しますから」

そして私は十、二十、三十と化け物を斬る。

「うおおおお！柱が来たぞー！」

「すげえ！強ええ！」

「可愛くて艶めかしいから忘れてたけどものすごく強いんだよな柱つて…」

私は急いで里長の元へ向かった。私の大切な刀を打つてくださった刀鍛冶の鉄珍様のもとへ。

「鉄珍さま…」

鉄珍さまはものすごく気持ちの悪い大きな魚の化け物に握られていた。

「ああ…たす…け…て…」

里を常駐で警護していた30人の鬼殺隊員があっけなくやられてしまった。

今、戦える隊士はおそらくにとりだけ、でも今にとりは鋼鐵塚の所にいる。

それに、里で最も優れた技術を持つ長を死なせるわけにはいかない。

でも大きすぎるこの化け物、攻撃がまるで効かん。それに異常に動きも速い。

どうすればいいんだ、どうすれば…

「遅れて申し訳ございません。それに動かない方がいいですよ！多分、貴方は内臓が傷ついているから」

「か、甘露寺殿ー」

なんだこの刀は、長が…鉄珍さまが打ったものか？

噂には聞いていたがなんと奇妙な…

ものすごい呻き声を上げて甘露寺殿に襲い掛かってくる。

恋の呼吸。壺の型 初恋のわななき

「私、いたずらに人を傷つける奴にはキュンとしないの」

魚の化け物はボロボロと崩れさる。

「鉄珍さま！」

私は落ちる長を抱きかかえる。

「大丈夫ですか鉄珍さま！しっかりなさって！」

私は泣きながら呼びかける。

「う……」

「鉄珍さま！聞こえますか！」

「若くて可愛い娘に抱きしめられてなんだかんだで幸せ……」

「やだもう鉄珍さまったら」

私はキュンとする。

「すまんが、そのものを拾ってくれんかのう……」

私は鉄珍さまの指さす方を見る。

「え？」

そこには鉄珍さまの左足が転がっていた。

「ぎやああああああ！」

私は悲鳴を上げる。

鉄珍さまの足がもげてしまったの？もしかして手遅れだったとか？

私は焦る。

「すまんのう……驚かせて、儂の義足を取って欲しかったただけなのだが」

私はピタツと止まる。

「鉄珍さま、義足って」

「儂は、もう3年もの間その義足にお世話になってる。それもこれもとりが作ってくれた義足があつたから儂はこうしてお主の刀を打てるんじや……」

「そうだったんですか！ありがとうございます！」

恋敵でもできてしまったような気がした。

でもにとりさんも素晴らしい人だったのは知ってたけど。

私は鉄珍さまの義足を取り、鉄珍さまに渡す。

その義足を鉄珍さまは足の継ぎ目にはめる。

「これでよし、では儂は避難する。甘露寺殿も、里のみんなを頼みまし

たよ」

「はい、わかりました！鉄珍さま…」

私は鉄珍さまが護衛の人におんぶされて逃げる。

「私も残りを倒さなくちゃね」

私は襲い掛かる魚の化け物をさらに倒し続ける。

「よし、これでひとまずは安心ね」

魚の化け物は見える限り全て斬り刻んだ。

「ありがとうございます！貴方がいなければ私たちは…」

「いいからみなさん！早く逃げてください！」

「その前に一度でいいから…その…胸を…」

「ちよ…何を言ってるんですか！言う暇があったら早く逃げてくださ

い！」

「ああ、その恥ずかしがる甘露寺殿もまた…」

男が多い刀鍛冶の里は非常に女性に飢えていた。

私はそれを嫌々としていると、

「てめえら！甘露寺殿に何をする！」

その声を聴いてふと振り向く。

「にとりさん！」

私はそう呼んだ！

「てめえらは女に飢える暇があったらさっさと逃げろ！それとも、私

の絡繰にしごかれたいのか？」

すると刀鍛冶たちは震えだし、そしてみんな逃げ出した。

「ありがとうございます」

「お礼はいいですよ、それに、私の絡繰は鬼に壊されちゃいましたか

ら、まあそれをあいつらは知らないと思いますけど」

「あ…」

忘れてた。里の門を蹴破る前に足元に散らばっていた矜羯羅零式のことを。

「それより、大変なんです。さっつき…」

バリバリバリバリ、バアン

ものすごい音が響く。

「この音は、もしかすると、炭治郎さんたちが危ない！」

「どういうこと？」

「この里に攻め込んできた鬼は二体いるんです！しかも、十二鬼月が！一体は壺のようなところから気色の悪いやつで下弦の壺、もう一体はおそらく、上弦かもしれない！」

上弦、その言葉を聞いた瞬間、ものすごく体が熱くなってきた。

「わかったわ、私は炭治郎くんたちのところへ向かいます。にとりさんは壺のようなやつのところへ！」

「わかりました！あ、あと、渡すものがあります」

するとにとりさんは胸元から物を取り出す。

「先日刀を打った時に鉄珍さんが忘れていた刀の鍔です。桃型の飾りが4つに増えた物です」

「ありがとうございます」

私は刀に鍔をつける。

「じゃあ私は壺の方に戻りますので、それでは」

「ありがとうございます！にとりさん」

私は手を振り、そして炭治郎くんのもとへと向かった。

爆血刀と鬼の本体

何か臭いがする。

何だろう…これは…

「…治郎！…炭治郎！早く起きて」

ハッ、俺は目を覚ます。

その時俺は禰豆子に担がれて雷から逃げていた。

「ええい！ちよこまかと逃げるな！」

俺は禰豆子もろとも雷撃を喰らう。

「ぐはっ」

そうだ俺は鬼の団扇の攻撃を受けて気を失った…！禰豆子が先に意識を取り戻してたんだ！

「危ない！避けて！」

目の前に飛び込む鬼、俺はギリギリで躲す。

その鬼は舌打ちをする。

その隙に俺は鬼の見えぬ建物の奥へと逃げる。

「ええいまだるっこしい！可楽！この建物ごと吹き飛ばしてしまえ！」

「カカツ、言われなくても、そのつもりじゃ！」

その瞬間ものすごい暴風が吹く。

俺たち3人は吹き飛ばされる。

考えろ！考えるんだ！敵に大打撃を与える方法、すぐに回復させない攻撃。

その瞬間、禰豆子は俺の刀を掴む。

「カカツ、随分見晴らしが良くなったのう。さあこれでちよこまかと隠れる場所はほとんどない。あと吹き飛ばされたところを見るに、奴らは森の中か」

何とか着地をしたものの、禰豆子は大木に下半身を潰されてしまった。

「禰豆子！大丈夫だ！見捨てたりしない！刀から手を離すんだ！」

彌豆子は手を離さない、そして血が刀を伝う。

その瞬間、刀が火に包まれる。

彌豆子の爆血の能力で刀の色が赤く変わる。

もしかして彌豆子、あの堕姫との戦いの時の一瞬を…

俺は爆血をまとった刀、それを爆血刀と名付けた。

「赤くなるんですねえ、お侍さまの刀、戦う時だけ赤くなるのねえ。どうしてなの？不思議ねえ。普段は黒曜石のような漆黑なのに、とても綺麗ですね」

なにかが頭を駆け巡る。これは、遺伝した記憶。

お侍さまというのはあの耳飾りの剣士のことだろうか。

あの剣士の刀は俺と同じ漆黑だったのか？

そして今、俺の刀は赤く、色が変わった。

彌豆子の血によって赤くなった刀だからきつと、あの剣士とはやり方が違うけれど、今刀は同じようになっていた。

強くなつたと思つてと鬼はまた更に強く、生身の体は傷を負いポロポロになり、でもその度に誰かが助けてくれる。そして命を繋いでくれた。ならば、俺は応えなければ、俺に力を貸してくれるみんなの願いは、想いは二つだけだ。鬼を倒すこと、人の命を守ること、俺はそれに、応えなければ！

俺は、刀を振り、咲夜のぶら下がった木を斬る。

「炭治郎、ありがとう」

そしてそこに鬼がぞろぞろとやってくる。

「なんだ？あの刀は、少し見た目が違う気がする」

「まあよい、小細工したところで儂らには勝てぬ。斬られたとて痛くも痒くもないわ！」

喜の鬼が凄まじい速さで襲いかかる。

だが、俺は全ての鬼が隙だらけに見える。

俺は上段に構える。

そして、一気に――

ヒノカミ神楽。日暈の籠 頭舞い

三体の鬼はバラバラに切り刻まれて転がる。
ずっと考えていた。あの一撃のこと、堕姫の頸を斬った瞬間の不思議な感覚、

呼吸、力の入れ方、それに、燃えるように熱くなった体中、そして額が。

わかった、もうできるぞ。あと一体、哀しみの鬼だけだ。一度に四体斬らないと、あと一体はどこだ！

俺は辺りを見回すと遠くに長い槍を突き刺される哀しみの鬼が両手を前に出し怯えている。

「ひいひい！そんな、お前は！どうしてえええ」

その瞬間、鬼の頭を掴まれ、そして刀で頸を斬られる。

玄弥！無事だったんだ！それに、今、鬼の頸は斬られた。これは勝ったかもしれない。

「玄弥！勝……」

玄弥は振り向くと、鬼のような形相、いや、鬼みたいな顔をしている。

どういうことだ？よくわかんない。それに、玄弥の顔をした別の鬼かも、でも今、名前を呼んだら振り向いたよな。どういうことだ？

俺は混乱する。

そして玄弥は鬼の耳を食いちぎる。

それと同時に三体の鬼が声を上げる。

「何だこの斬撃は！灼けるように痛い！」

「おちつけ！かなり遅いが再生自体はできている。それに、まだ儂らは負けていない！」

攻撃は効いている！玄弥の状態がわからないが一体斬ってくれた事でわかった。

恐らく、斬ったところで堕姫たちのようには倒せないんだ！この喜怒哀楽鬼への攻撃は殆ど意味が無い。それに、ずっと気になっていたことがあった。あの時、転がる小さな肉片、そしてさつき吹き飛ばされた時、何故かこの季節にはありえない蚊の音が耳元でした。それに、その時臭ったもの、それはカナヲが弾いていたあの硬貨とかなり

近い臭い。つまり、本体は別にいる。その鬼の頸を斬ればきつと…
俺は突然、首を掴まれる。

「図に乗るなよ…、上弦を倒すのは俺だ！下弦たちを倒したのはお前の力じゃない。だからお前は柱になってない！」

「あつうん！そうだけど」

「お前なんかよりも先に俺が…」

「玄弥！涎が垂れてるぞ！どうしたんだ！俺の首を絞めてるし」

「同期で柱になるのは俺だ！」

「なるほど！そうかわかった！俺と禰豆子と咲夜が全力で援護する！4人で頑張ろう！あの鬼たちの本体がいるはずなんだ、探すから時間を稼いでくれ！」

「お前の魂胆はわかってるぞ！そうやって油断させて手柄を…」

その時、玄弥は俺を見て、言い返せなくなる。

その時、咲夜が俺に叫ぶ。

「炭治郎！玄弥！避けて！」

俺は瞬時に避ける。

「玄弥！本体を見つけたらすぐ教えるから！それに、禰豆子だけは斬らないように気をつけてくれ！俺の妹だから」

もう怒りの鬼だけは復活した。急げ！

探れ！集中しろ！どこだ！扇の鬼が風を使ったおかげで温泉の強い臭いが全くしなくなってる。

その時、木の根に違和感を感じる。

そこから声がする。

「大丈夫じゃ、俺は絶対に見つからぬ、大丈夫じゃ。悪い奴らはみんな喜怒哀楽が倒してくれる」

いた！見つけた！あんなに小さかったのか！

「玄弥——！北北東に真っ直ぐだ！本体は低い位置にを隠している。向かってくれ！援護する！」

それに、禰豆子もついて行かせた方がいい。

「禰豆子！玄弥を助ける！鬼に玄弥の邪魔をさせるな！」

その瞬間また暴風が吹き付ける。

飛ばされるな。絶対にこの場から離れるな。

まずい！雷の攻撃もくる！

禰豆子はそれを察知し、怒りの鬼に飛びかかる。

しかし、さっきの肉片からまた分裂した哀しみの鬼が禰豆子を槍で貫く。

目を逸らした。

その隙に俺は怒りの鬼の腕や足を斬る。

隙は必ずある。だからこそ、もつと速く、もつともつと速く動いて相手の隙の数を増やすんだ。

咲夜は喜びの鬼を斬り刻み、禰豆子は血を使い、哀しみの鬼を燃やす。

次は楽の鬼を斬る。

相打ちのように楽は扇であおぐ。

そして地面に叩きつけられる。

でも、両足は斬れた。

楽の鬼は拳で地面を打つ。

だが、俺には当たらない。

「玄弥……右側だ！南に移動している！探してくれ！」
俺は玄弥を急がせる。

玄弥の過去と鬼の変貌

どこだどこだ！

鬼は一体どこにいるんだ！

術か？また何かの術で見えねえのか！？

くそっ！長引けば長引く程こっちが消耗してしまう！

「玄弥・西だ！もつと右！近くにいる！かなり低い！」

どこだ！

俺は走る足元に何かを感じた。

「ギャーっ」

何か小石でも蹴ったのか？

俺は足元を見る。

そこにはカブト虫のように背を向ける小さな鬼がいた。

あいつの言っていた本体はこいつか！？

こいつが本体か！？

くそつたれが、見つけられるかこんなもん普通、カブト虫程度の大

きさじやねえか！

それに、俺は気づかず蹴飛ばしちまったわ！

あの四体が強力すぎんだよ！あんなのこの虫の大きさのやつが

操ってんのか！？あの四体を相手しながらこの虫捕りクソ面倒くせえ。

今まで鬼殺隊の人間がやられてきた構図が見えたぜ。

ふざけんな小賢しい！憤懣やる方ねえ！

俺は草を刈るように刀を振る。

「ギャッ」

よし、頸に入った、行ける！勝った…

その時、砂粒程度の手で刀を折られる。

は！？斬れねえ、それに硬え！馬鹿な！こんな米粒の太さしかねえ頸

だぞ！？

俺は銃で5発撃つ！

しかし、金属音がする。

そして煙からは無傷の小鬼が怯える。

効かねえ！どういうことだ！

その瞬間背後に飛びかかる鬼を感じる。

しまった！もたつきすぎた！避けられねえやられる！頸は回復できねえ！

俺はその瞬間走馬灯が走る。

兄貴、俺は柱になって兄貴に認められたかった、そしてあの時のことを、謝りたかった。

俺のお袋は体の小さな人だった。背は大体4尺半程、だから早い段階で俺はお袋より大きくなった。

お袋は朝から晩までとにかく働いていた。

俺はお袋が寝てるどころを見た事がなかった。

それとは別に親父は凶体がかい上にろくでもなかった。

お袋は朝から晩までとにかく働いた。

酒に酔って暴れているところを取り押さえられてその後も刃向かったせいで軍人刺されて死んだのは自業自得だ。

親父はお袋や俺たちをよく殴ってた。

あんな小さな体で六尺半ある親父に怯みもせず俺たちを庇ってくれたお袋は凄い人だと思う。

そんなある日、いつもなら女工として働いていたお袋が帰ってこなかった。

俺は兄妹達でお袋の帰りを待っていた、その時、ものすごい音が外からした。

弟たちや妹たちは帰ってきたのかと思い、家の戸に近づくと、するとなにかが飛んで、弟や妹たちがぐちゃぐちゃにされる。

俺は飛んできた戸の破片で顔を切る。

なんだ！あの怪物は、獣か!?野犬:いや！狼だ！

その時についていた家の電球が割られて何も見えなかった。

襲いかかって来た時、兄貴がその狼のような奴を掴み、全力で窓から外へと飛び出す。

「兄ちゃんー！」

その時、俺は弟たちや妹たちの手足が食いちぎられ、全く動かない

なっている姿を目にする。

全力で手当てをしようにも、血が止まらない。それに、息も弱くなっている。

俺は弟妹たちを応急手当をし、そして家にあつたすりこぎ棒を手に、兄貴への加勢に向かった。

そして、兄貴が見えてきた。そこにはお袋の首と胴体が別れて、手足も転がる無惨な姿だった。

「母ちゃん！うわああああ！」

俺は何度も泣き叫ぶ！

「なんで母ちゃんを殺したんだよ！うわああああ！人殺し！兄貴は人殺しだー！」

その時は酷いこと言つてごめん、兄ちゃん。全部言い訳にしかないけど混乱していたんだ。弟妹が全員命が失われていくところを見て、声も出せなくなつて、駄目だ！もう死ぬというのがわかつてしまった。あの狼は、いや、狼だと思つたものは、鬼になった母ちゃんだった。俺たちを守るために戦つて、夜が明け始めた外に落ち初めて、家族を襲つたのが母ちゃんだと気づいた時、兄ちゃんはどんな気持ちだったろうか。

最愛の母を手にかけて打ちのめされていた時に、必死で守つた弟から罵倒されて、どんな気持ちだったろうか、一緒に守ろうつて約束したばかりだったのに」

「家族は俺たち二人で守ろう。親父は刺されて死んじまつた。あんなの別にはいない方が清々するけど、父親がいねえとなると皆心細いだろうから、これからは俺とお前でお袋と弟たちを守るんだ、いいな？」

「これからはじゃなくて、これからもだよな、兄ちゃん」

その時俺の事に笑顔を見せてくれたことは忘れない。

その後俺と兄貴は離れ離れになり、やつとの思いで同じ鬼殺隊にまでなれた。

ごめん、兄ちゃん。謝れないまま俺は死ぬ。兄ちゃんに笑いかけてもらった時の都合のいい走馬灯を見て、俺、才能なかつたよ兄ちゃん。呼吸も使えないし、柱にもなれない。柱にならなきや柱に会えないの

に、頑張ったけど無理だったよ。

「テメエみたいな愚図、俺の弟じゃねえ、鬼殺隊なんか辞めちまえよ、それに、俺の継子はもう既にいる。だからさっさとどっか行け！」
なんてだよ！俺は兄ちゃん弟なのに！

その時、鬼は斬り刻まれる！

「玄弥！諦めるな！」

「そうだ！もう一度狙え！もう一度頸を斬るんだ！絶対諦めるな！次は斬れる！俺たちが守るから頸を斬ることだけ考えろ！柱になるんじゃないのか！不死川玄弥！」

炭治郎、咲夜、俺にそんなこと言ってくれるなんて。

その時、咲夜と炭治郎の背後に哀しみ鬼と喜びの鬼がいる。

「危ねえ！後ろ！」

劇涙刺突

その時、俺は、喜びの鬼の頸を撃ち落とし、炭治郎や咲夜の盾となった。

俺にしか出来ないこと、それが、鬼を喰らうこと。そして鬼を食っただけ回復すること、ここは俺が全部やってやる！

「行け！」

「玄弥！」

「玄弥！その傷！死んじゃうよ！」

「俺は刀が折れて斬れない。お前らが斬れ！今回だけはお前らに譲る！」

俺は四体の鬼を相手にもう一本の銃を取り出し、2挺の銃で戦う。

「どうだ！俺の弾は一味違うぜ！弾の餌食とな…れ…！」

その時だった、突然、怒りの鬼が両手を掲げ、1秒の間に、さつき頭を飛ばした喜と楽の鬼が握り潰されるようにして吸収される。

そして、俺が目をやると、哀の鬼の元へと移動し、手を出すが、「やめてくれ！それだけは！」

哀の鬼は抗議するように、手を出すが、すぐさま吸収された。そして怒りの鬼の体がものすごい速さで変わり、子供のような姿へと変貌した。

「この姿になるのは40年振りだなあ、さあ、お前たちの最期だ」

無一郎の記憶と覚醒

「オヒョヒョヒョー！お前みたいな女に私の頸でも取れるんですか？」
「てめえ、私は強いんだよ？それに、私一人でもお前なんか斬り刻んでクマの餌にでもしてやる！」

その時ものすごい轟音が上がる。

「おつ、半天狗の方もついに本気を出しましたかね！それじゃ私も本気を出させていただきます」

玉壺は脱皮をしだす。

そこには、気持ち悪い蛇のような姿へと変わった玉壺の姿があった。

「ご覧あれ、私が脱皮するのは50年ぶりです！どうですかこの姿！美しいでしょう？」

「おえ、気色悪い、美的センスどころか常識さえもないのかこの腐れ芸術家気取り、あんたの作品と同じでゴミにしか見えないよ！」

「はあ？私の体まで侮辱するとは！許せない！」

文は煽り倒している。

だが、水獄に閉じ込められて5分、残る息もわずか、どうにかして破らなければ、僕は焦る。

「おのれ！お前には死ぬよりも辛い、生かされる芸術品になりたいようだな！」

血鬼術。蝮壺地獄

壺からは大量の蝮足が溢れ出し、文を掴む。

さらに蝮壺はあばら家の壁を突き破る。

「くそつ、まだそんな技を！斬れない！なんなのこれ！」

「どうですか？私の蝮壺地獄を、しばらくそうしててください！」

玉壺はあばら家の方を見る。

「ほほう、あばら家はこうなっていたのですか、里の長でもいる訳ではなさそうだが、ものすごい鍛冶道具がずらりと並んでますね。素晴らしい、ん？」

玉壺の目にはものすごい集中をして刀を研いでいる鋼鐵塚の姿が

目に映る。

「すごい鉄だ！すごい刀だ！なんと技術…凄すぎる。作者は誰なんだ…どのような方がこの刀を…なぜ、自分の名を刻まずこの一文字のみを…いや…わかる…研げば研ぐほど…」

玉壺はふと壺を取りだし、毒魚を吐き出す。

それを見た文が焦り出す。

「お前だけには、鋼鐵塚さんを、傷つけさせはしない！」

風の呼吸。式の型 爪々 科戸風

文は全力で蝟の足を斬り刻む。

僕はそれを見て、文に全てを託そう。

そう思つて諦めかける。

どうしてそう思うんだ？

先のことなんて誰にも分からないのに。

なんだ？違う。炭治郎にはこんなこと言われてない。言ったのは

誰だ？

視界が狭窄して意識をが落ちかけている。

でもなぜ俺にこの言葉がかけられる。

自分の終わりを自分で決めたらだめだ。絶対どうにかなる、諦めるな。一人でできることなんてほんのこれっぽちだよ。だから人は力を合わせて頑張るんだ。

誰も僕を助けられない。みんな僕より弱いから、僕はもつとちゃんとしなきゃいけなかったのに判断を間違えた。

自分の力を過大評価していたんだ、無意識に柱だからって、いくつも間違えたから、文を置いて僕は死ぬんだよ。

「絶対に死なせない！時透さん頑張つて！俺が助けるから！」

小鉄くんは何度も包丁を刺し、水獄を斬ろうとする。

「くそお！なんなんだこれ！ぐにぐにして気持ち悪い！」

僕でさえ斬れないのに君が斬れるはずがない。

僕なんかよりも優先すべきことがあるだろう。鋼鐵塚さんを守れ。

そんなこと君には無理か…せめて持てるだけ刀を持って逃げろ。

後ろから魚の化け物がゆっくりと近づく。そしてものすごい数の

針を吐き出す。

「痛つ、うわあ、血だ！」

さらに追い打ちをかけるように魚は小鉄くんの鳩尾を刺す。

俺は必死に叫ぼうとする。でも、声を出せるほどの息もない。

小鉄くんに傷口を抑えろと言っても届かない。

よたよたしながらも小鉄くんは水獄の方に向かう。

そして大量の息を吹き込む。

人のためにすることは巡り巡って自分のためになる。

そして自分ではない誰かのために、

信じられないような力を出せる生き物なんだ。無一郎。

知ってる。思い出した！

僕は：

霞の呼吸。 式の型 八重霞

思い出したよ炭治郎。

僕の父は君と赤い瞳の人だった。

僕は水獄を破り、地面に倒れ込み、噎せる。

そして、顔に刺さった毒針を抜く。

くっ、痺れが酷い。この針：水獄から出られたところで僕は：

杓子定規に物を考えてはいけないよ無一郎、確固たる自分を取り戻

した時君は強くなれる。

お館様は言っていた。目も見えないのに僕に向かって。

「小鉄くん！大丈夫!? しっかりし：ゲホゲホ」

肺が痛い。水が入ったからだ。

母さんは風邪をこじらせて肺炎になって死んだ。

その日は嵐の日で薬草を採りに出ていった父は崖から落ちて頭を打って死んだ。

そして両親が死んだのは十歳の時だ。

「時透さん：俺の事はいいから：鋼鐵塚さんを：助けて：刀を：皆を

守って…」

小鉄くんは俺に言ってくれた。小鉄くんは十一歳、そうだ。僕は一人になったのは十一歳の時。

僕は双子だった。僕の兄は有一郎。

銀杏の散る頃、両親を失った僕と兄は柚人として暮らしていた。

「情けは人の為ならず誰かのためになにかしてもろくなことにならない」

「違うよ。人のためにすることは巡り巡って自分のためになるって意味だよ。父さんが言ってた」

「人のために何かしようとして死んだ人間の言うことなんてあてにならない」

「なんでそんなこというの？父さんは母さんのために頑張って…」

「あんな状態で薬草なんかでも治るはずないだろ？馬鹿の極みだね」

「兄さんひどいよ…」

「嵐の中を外に出なけりや死んだのは母さん一人で済んだのに」

「そんな言い方するなよ！あんまりだよ！」

「僕は事実しか言ってる。うるさいから大声出さな。猪や熊が襲ってくるぞ。それに、無一郎の無は無能の無、無駄口の無、こんな会話

なんか意味が無い。結局過去は変えられない。そういう運命なんだ。

無一郎の無は無意味の無」

兄は言葉がかなりきつい人だった。記憶のない時の僕はなんだか兄に少し似ていた気がする。

兄と二人の暮らしは息が詰まるようだった。僕は兄に嫌われていると思っていたし兄は冷たい人だと思っていた。

桜が咲く頃。山奥に人が訪ねてきた。

お館様の御内儀だ。あまりにも美しいので僕は初め、白樺の木の精だと思っただ。

だが結局兄はいつものような暴言を吐いてあまね様を追い返した。

「すごいね！俺たち剣士の子孫なんだって、しかも一番最初の呼吸法っていうのを使う凄い人の子孫で、ものすごい数の鬼を倒したんだって！」

「知ったことじゃない、さつさと火でも起こせよ」

「ねえ、剣士になろうよ。鬼に苦しめられてる人たちを助けてあげようよ。俺たちならきつと」

そういうと兄は鉈で鶏の首を刎ねる。

「お前に何ができるって言うんだよ！一人で火も起こせないような奴が剣士になる？人を助ける？馬鹿も休み休み言えよ！本当にお前は父さんと母さんそっくりだな！楽天的すぎるんだよ！どういう頭してるんだ！具合が悪いのを言わないで働いて体を壊した母さんも、嵐の中薬草なんか採りにいった父さんも、あんなに止めたのに！母さんにも休んでって何度も言ったのに！人を助けるなんてことはな、選ばれた一握りの人間にしか出来ないんだ！先祖が剣士だったからって子供の僕たちに何が出来る？教えてやろうか？俺たちにできること、犬死にと無駄死にだよ！父さんと母さんの子供だからな！結局あの女にいいように利用されるだけだ！なにか企んでるに決まってる！この話はこれで終いだ！さつさと晩飯の仕度しろ！」

僕達は口を一切効かなくなった。

週に一度家へ通ってくれるあまね様に水を浴びせかけた時だけ一度喧嘩をしたきり。

そして夏になった。その年の夏はかなり暑くて僕たちはずっとイライラしてた。夜も暑く、蟬も鳴き続けていて。

8月7日、その日は特に暑く、戸を開けて寝ていたら鬼が入ってきた。

そして目の前で兄は左腕を斬り落とされ、俺に泣きつく。

そして鬼はこう言い放つ。

「騒ぐなよ、どうせお前らみたいな貧乏なガキの木こりは何の役にも立たねえだろ？いてもいなくても変わらないつまらねえ命なんだからよ。じゃあ早速こいつでも食ってやるかな」

その時、目の前が真っ赤になった。生まれてから一度も感じたことのない、腹の底から嘔き零れ出るような激しい怒りだった。その後のことは本当に思い出せないら、途轍もない咆哮がまさか自分の喉から発せられていると思わなかった。

そして、気づくと鬼は死にかけていた。だけど頭も両手両足も潰れ
されても死ねないくらい苦しんでた。

間もなく朝日が昇り

鬼は塵になって消えた。

そんなこと心底どうでもよかった。

早く有一郎の所へ行ききたかったのに、体が鉛みたいに重くなって、
目の前にある家まで、這いつくばって行くしかなく。随分時間がか
かってしまった。

だが、兄さんはまだ声がした。

「神様仏様…どうか弟だけは助けてください…弟は俺と違う心の優し
い子です…。人の役にたちたいと言うのを…俺が邪魔しました…。
悪いのは俺だけです…。バチを当てるなら俺だけにしてください…。
わかっていたんだ…本当は、無一郎の無は…無限の無なんだ…お前は
自分ではない誰かのために…無限の力を出せる選ばれた一握りの人
間なんだ…」

「兄さん…」

「だけどな無一郎、どれだけ善良に行きたって神様や仏様も結局、守つ
て下さらないから…、僕はお前を守らなければと思ったんだ…。優し
くしてやれなくてごめん、いつも俺には余裕がなかった…。人に優し
くできるのもやっぱり選ばれた人なんだ…。だから…、僕の今まで生
きた時間の倍以上生きてくれ…それがたとえ…欲深いと言われよう
とも…」

僕は、いや、俺は生きなければならぬ。優しく、そして誰かを守
らなければ。

「文…今助けに行くぞ！」

俺は全速力で文のもとへ向かった。

被害者面の鬼と成長する鬼。

俺は全力で小鬼を追う。

小さい、でもいける！

俺は火を纏った刀で小鬼の頸に刃を入れる。

「ギャアアアアア」

ものすごい大声で小鬼は叫び出す。

だが、あと少しだ。肉は斬れる。骨まで断てば…

その瞬間、背後にもものすごい気配を感じる。

誰だ！俺の後ろに立っているのは、明らかに今までとは違う。

喜怒哀楽のどの鬼でもない、でも、あと少し！

だが、鬼の骨は硬く、斬れない！それに、禰豆子の血の効力も途切れた。

どうすればいい、攻撃が来る。避けねば！

地面が突然めくれ上がり、竜のような姿で襲いかかってくる。

だが、何とか禰豆子が助けてくれたおかげでその場から離れることができた。

そして禰豆子は着地する。

だが、そこで疲れてしまったのか、へたれこんでしまう。

「弱き者をいたぶる鬼畜、不快、不愉快、極まれり。極悪人共めが、貴様らは生かしてはおけぬ！」

その鬼はまさに子供のような姿と声をしていた。

六体目!?!いや、喜怒哀楽の鬼は全て消えた。

「炭治郎！奴は喜怒哀楽の全ての集合体です！」

咲夜がそう教えてくれる。

そして、鬼は小太鼓を鳴らし、木の根で本体を包み込む。

「待てー！」

その時、鬼は俺たちを睨む。

その気迫はものすごく強い。今まで戦った鬼とは全く比べ物にもならない威圧感。

これが上弦の鬼なのか！

「何ぞ？貴様、儂のすることになにか不満でもあるのかのう、悪人共めら」

ものすごい威圧感、もしかして成長しているのか、鬼は年老いない、だから成長はしない、そう思ってた。

だが、目の前の鬼は確実に強くなっている。

「どうして…どうして俺たちが悪人なんだ？」

「弱き者をいたぶるからよ。先程貴様らは手のひらに乗るような小さく弱き虫のような者を斬ろうとした。なんという極悪非道、これはもう鬼畜の所業、過剰な暴力にも程がある」

それを言われて、俺の中のかなにかがプツンときれた。

「小さく弱き虫のような者？誰が…誰がだ。ふざけるな、お前たちのこの臭い、血の臭い！そして臓物の臭い！喰った人間の数は百や二百、いや千でも足りない！その人たちがお前に何をした？その全員が命をもって償わなければならないことをしたのか!?大勢の人を殺して喰っておいて、被害者ぶるのはやめろ！捻じ曲がった性根だ！絶対に！許さない！極悪非道はお前の方だ！悪鬼め！お前の頸は俺が斬る！」

「ほう、斬れるものなら斬ればいい。だが、儂の頸を取れるほど、強そうには見えんがな」

鬼は、木の竜を発す。

「さあ、儂に近づけるかな？」

竜の間合いが分からない。さつきは纏まった形だったが、今は分かれている。

どこまで逃げればいい！

俺は全力で逃げる。

鬼にも限界はある。木の長さがあれば、限界はある。

零余子戦の時、あの時の距離の限界は20尺、だが、奴は上弦、その倍以上、下手すると一町はあるかもしれない。

「みんな、距離を取れ！そして相手の限界を測るんだ！」

「わかりました！玄弥！彌豆子さん！全員違う方に逃げて！」

咲夜が指示を伝える。

そして、鬼は咲夜の方を狙う形で凄まじい速さで追っていく。
しかし、距離には限界があった。

竜は一方向に進むと止まった。

「ここかー」

咲夜は足跡をつけ！飛び跳ねて鬼までの距離を目方で測る。

「83尺です！竜の伸ばせる限界は」

「ありがとう！咲夜！」

83尺、それが限界。

これなら、距離をとりながら戦える。

そして竜の今出せる数は8が限界、ならば、その頭を、斬れば。

俺は、振り向いて、全力で、頭を斬る。

だが、竜の頭は硬く、そして砕けてもすぐに修復する。

これでは埒が明かない。

どうすればいい、逃げるしかないのか。

その竜の口からものすごい風が吹き出す。

「これは…喜の鬼の…」

あの扇の風を受けてしまう。

だが、耐えないと、

俺は脚を木に絡ませ、何とか耐える。

しかし、そこから刺突撃も襲いかかる。

油断もない。避けるしかない！防戦一方なのか。

その時、一瞬だけ、鬼はよそ見をする。

何をしている。まるで何かを窺っているようだ。

「今だ！咲夜！」

花の呼吸。伍の型。徒の芍薬

「やったか」

咲夜の斬撃は遠くまで飛ばせる。

だから、鬼にも届くはず。

しかし、鬼には斬撃は1つしか届いておらず、他の斬撃は竜の頭が身代わりになっていた。

「ほう、面白い技を出すのだな。今で儂の鼓に一つ穴が空いた。だが、儂の鼓はまだ替えが多い。一つ穴が空いたところで痛くも痒くもない」

鬼はさらに小太鼓を増やす。

数は8から倍以上の20まで増えた。

「さあ、宴といこうかのう。極悪人共に制裁を下す。その宴じゃ」
鬼はさらに竜の頭を発す。

さらに絡みながらも増えていく竜、それに、攻撃も四方八方に飛ばす。

とにかく逃げながら、考えるんだ。

打開策はないのか！

俺は跳び、高いところから攻撃を仕掛ける。

まず一体を砕かなきゃ、奴は増やした時点で一体一体が弱体化してるかもしれない。

ヒノカミ神楽。碧羅の…

ギヤイイイイイイイイ

竜が発した衝撃波に俺は吹き飛ばされる。

そして、意識が飛びながら、木の枝に背中を打ち、受け身も取れず、耳から落ちる。

俺は衝撃に耐えきれず、嘔吐する。

目を開け、立ち上がるうとしても目が回る。立てない。脳震盪を起こしたか、それとも耳の奥がやられたか。

だが、こうしてはいられない、早く逃げないと。

俺は鬼の攻撃を避ける。

だが、避けきれなかったのか、左足首の骨が折れる音がする。

どうすればいい、足も痛い。それに、相手は喜怒哀楽全ての攻撃も使え、技も増やし攻撃力は格段に上がっている。

それに、4人を相手にしていてあの強さ、それに呼吸をする暇がほぼない。息が苦しい。

攻撃予知で攻撃が来るとわかってても対処が出来なくなってきた！
どうすればいい。

83尺逃げて様子でも窺うか。

だが鬼はさらに攻撃の種類を増やす。

竜の口がまるで繰り出し人形のように竜を吐き出し、伸びてくる。対処しないと！だが、技を出す暇が…

俺は竜の口の中に引きずり込まれる。

そして押し潰される。

死ぬかもしれない。

そう思った時。

ものすごい音がする。

そして竜の頭が切り刻まれる。

「きやー！ー！すごいお化け、なあにアレ！」

俺は桃色の髪が目の前に映る。

「ごめんね！みんな！遅れちゃって！ギリギリだったね！」

「かつ甘露寺さん！」

俺たちは甘露寺さんに助けられた。

甘露寺さんは皆を木の竜から助け出す。

「ふう、みんな休んでいいよ！頑張ったね！偉いぞみんな！」

そして甘露寺さんは鬼の所へと向かう。

「待って、甘露寺さん！奴は上弦です！今までとは桁違いです」

咲夜がそう忠告しても、甘露寺さんはウキウキしていた。

「上弦を倒せば114年振りの悲願！私がやってやるわ！」

甘露寺さんは聞く耳を持ってくれない。

大丈夫なのかこの人。

俺たち4人はそう思った。

新たなる刀と悪口合戦

「なかなかやりますねえ、2人の刀鍛冶を背に、そこまで私の攻撃を防げるとは」

「てめえなんかみたいなの芸術に現抜かしてる弱つちい鬼の攻撃なんか、屁でもねえ！」

「でも、それにしたって随分とボロボロじゃないですか」

「女の体を注視してるから弱いんだよ！」

「失礼しました。私はボロボロの服装とかには性的興奮を覚えるので」

「うわあきつしよ！やっぱり芸術家気取りは特殊性癖しか持たないんだろうな！」

だが、まずい、鋼鉄塚さんは集中して研いでくれるけど、さつきは魚は防ぎきれなかった、顔に傷つけちゃってごめんなさい！

でも、私は耐えなくちゃ、時透さんが来るまでは、絶対に！

私は強く願う。そして相手の意識を散漫にさせないと。

時透さんが水獄鉢に囚われて30分、そろそろ防ぎきれなくなってきた。

その時だった。

刀が振るわれ、玉壺が壺へと引っ込む。

「貴様、不意打ちとは、許さんぞー！」

玉壺は怒り狂っていた。

「ごめん、遅くなった」

私はその姿を見て、思わず呼んでしまった。

「時透さん！遅いですよ！」

時透さんは来てくれた！これでこつちが優勢。

そう思ったが、少し時透さんの様子がおかしかった。

顔には不思議な紋様が浮き上がっていた。

「おのれ、貴様、私の美しい体に傷をつけやがって！許さん許さん許さん！」

刀で斬ろうにも、より弾力のある蝮足のせいで時透さんの刀が折れる。

更にはものすごい勢いで飛び出たため、あばら家が全壊する。

「ヒョヒョ、どうだこの蝮の肉の弾力は！マダコ型よりもより大きなミズダコ型だ！これは斬れまい！」

私たちは蝮にギチギチと締められる。

「先程は少々手を抜きすぎた。今度は確実に潰して吸収するとしてよ。そして、さつき取り逃した刀鍛冶はどこか…」

突然蝮足は斬り刻まれる。

「何!?!」

そして地面に降り立った時透さんは言う。

「俺のために、刀を作ってくれてありがとう、鉄穴森さん」

その刀はものすごく美しい白に近い刀だった。刀身には悪鬼滅殺が刻まれている。

「いや、私はあなたの最初の刀鍛冶のかきつけ通りに作っただけ…」

「そうだったね、鉄井戸さんが最初に俺の刀を作ってくれた。心臓の病気で死んでしまった」

私は、なにか覚醒した時透さんがものすごく綺麗に見えた。

ああ、しつくりくる。これほどまで良い刀だったなんて。

俺は力強く刀を握り、思い返す。

「俺は心配だよ坊や、誰がわかってくれようか、お前さんのことを。お前さんがどれだけ手一杯か、どれだけギリギリと余裕が無いか、物を覚えていられんこと不安がどれだけか、そして血反吐を吐くような努力を誰がわかってくれようか。俺はお前さんが使った刀を見ると涙が止まらなくなる。俺ももう長くない、命を惜しむ歳、いや、もう傘寿を超えた俺には思うことではないが、どうにもお前さんが気がかりじゃ、お前のことを最後まで見ることができずすまんかった。この鉄井戸久道、お前には申し訳ないと思う」

鉄井戸さん、ごめん。心配かけたなあ、だけど俺は、もう大丈夫だよ。

霞の呼吸。伍の型 霞雲の海

蛸足がぐちやぐちやに斬り刻まれる。

「素速いみじん切りだが、壺の高速移動にはついて来れないようだな」

「そうかな？」

「何？お前は…」

「随分感覚が鈍いみたいだね。何百年も生きてるからかな、それとも鋼鐵塚さんの超集中に見とれてたとか？」

玉壺の手足が斬られ、下弦と刻まれた目が潰される。

「次は斬るから、お前の下らない壺遊びにいつまでも付き合ってもらえないし」

「舐めるなよ小僧、これくらいの傷、私ならすぐに完治できる」

「いや、舐めてるわけじゃないよ、事実を言ってるだけで、どうせ君は僕たちに頸を斬られて壺も割られて死ぬんだし。だってなんだか凄く俺は調子がいいんだ今、どうしてだろう」

「その口の利き方が舐めていってると言ってるんだ糞餓鬼め、たかだか十年二十年やそこらしか生きていない分際で」

「そう言われても君には尊敬出来るところが全く無いからなあ、見た目も喋り方もとにかく気色が悪いし」

「私のこの美しき、気品、優雅さが理解できないのはお前が無教養の貧乏人だからだ、便所虫に本を見せても読めないのと同じ。世界的評価をされている私には効かぬ」

「君の方が何だか便所に住んでいそうだけど、それに、便所に陶器が最近使われているって聞くし」

「黙れ便所虫、お前のような手足の短いちんちくりんの刃で私の頸には届かない」

「いや、さつき思いきり届いてたでしょ、そもそも君の方が圧倒的に手足短いし、ああもしかして自分に対して言ってる独り言だった？邪魔してごめんね」

「ヒョヒョツ安い挑発だのう、この程度で玉壺様を取り乱すとても？

勝ちたくて必死なようだな。見苦しいことだ」

「うーん、なんかね、すごい気になることがあるんだ」

「何だ？、便所虫」

「気になっちゃってね…なんか今まで見てきた壺さあ、全部形歪んでない？真円を描こうとしてるけど、楕円なんだよね？ヘツタクソだなあ、それに、絵柄も完全な五角形に描こうとしてるけど、なんか2枚目と3枚目の花びらの内角が8度ほど狭いんだよね」

「貴様、それは貴様の目玉がくさっているからだろうがああああ！私の壺のおおお！どこが楕円だと言うんだああああ！」

「血鬼術、一万滑空粘魚」

「溢れ出る一万匹の刺客が骨まで喰らい尽くす！私の作品の一部にして品評会にでも飾ってやろうか！」

「悪いけど、そんな攻撃弱いし、鱈なのかな？その魚」

「霞の呼吸。陸の型 月の霞消」

「全部斬りおった！この速度と攻撃範囲！、私の毒は何処へ行った。想定外だがしかし問題ない」

「これ全部毒でしょ、わかってるよそんなこと」

「霞の呼吸。参の型 霞散の飛沫」

「なにいい！お前、まだそんな技を」

「後ろががら空きですよ！便器でも作ってれば良かったのに！」

「文が玉壺の頸を刎ねようと斬りかかる。」

「だが斬ったのは、玉壺の皮だった。」

「あーめんどくさい！何回脱皮するんだよこいつは」

「避けて木の上に逃げるのやめてくれないかな？変態特殊性癖野郎」

「玉壺は月の光の影で蠢く。」

「お前たちには私の真の姿を見せてやる、この姿を見せるのは鬼狩りには初めてだ！」

「へえ、じゃあ普通の人間とかには見せたことあるんだなあ」

「黙れ！私が本気を出した時は生きていられた者はいない。私の本当の姿が見られるのは工房にいる一部の社員のみだ！」

「すごいねー」

「口を閉じてろ馬鹿餓鬼共が！まあいい、この透き通るような鱗は金剛石よりも尚硬く強い。私が壺の中で練り上げたこの完全なる美しき姿に平伏すがいい！」

「……………」

「何とか言ったらどうなんだこの木偶の坊共が！本当に人の神経を何回逆撫でするんだ！」

「いやだつてさつき口を閉じてろつて言われたし…そんな吃驚しなかつたし」

「なんか人間っぽくなつちやつたから、面白みも弄りがいもない平凡に見えちやつたから拍子抜けしちやつたし…」

玉壺は文と無一郎、2人に対して殴りかかった。

そこには大量の魚が溢れかえっていた。

「お前ら、木の上に逃げるなど言わなかつたか？面倒なことだのう」

「いや、単純に生臭かつたから、鼻が曲がりそうだよ」

「どうだね、私のこの神の手の威力、拳で触れたものは全て愛くるしい鮮魚となる。そしてこの速さ！この体の柔らかくとも強靱のバネ、更には鱗のような波打ちにより縦横無尽自由自在よ、まるで葛飾北斎のような芸術そのものだ！震えているな、恐ろしいか？先程の攻撃も本気ではない」

「どんな凄い攻撃でも当たらなかつたら意味無いでしょ、それに、戦闘に使ったのはこれが初めてっぽいし」

私、射命丸文は時透さんのその顔に少し引きました。

なにあの顔、正義とかそういう顔じゃない。強者であり、獲物を狩るまさに猛獣の笑み、怖すぎるよ！それに、私に、口数が多いって言うだけで私よりも喋っているじゃないですか！そっくりそのまま返したい！

「あ、文、気になってたけど、腰周り、今下着姿だから、後で隊服の替え、あげるからね。さすがにそんな姿で戦うのは甘露寺さんだけで十分だから」

私は少し恥ずかしくなった。

でも、ここまで来たらあと少し、切り抜けなきや。
私は片手で股を抑えていた。

策士の溺れと巡り巡り

お館様の仰った通りだ。確固たる自分があれば両の足を力一杯踏ん張れる。

自分が何者なのかわかれば、迷いも、戸惑いも、焦燥も消え失せ、振り下ろされる刃から逃れられる鬼はいない。

あの煮え滾る怒りを思い出せ。

最愛の兄に蚊も寄り付かず、蛆が湧き腐ってゆくのを見た。

自分の体にも蛆が湧き始め、僕は死の淵を見た。

運良く助けられなければ俺はそのまま死んでいただろう。

記憶を失つても体が覚えている。死ぬまで消えない怒りだ。

だから僕は血反吐を幾度も吐く程自分を鍛えて叩き上げたんだ。

鬼を滅ぼすために、奴らを根絶やしにするために！

「さあ、私の華麗なる本気をしかと見るが良い！」

血鬼術。 陣殺魚鱗

「さあどうかね、私のこの理に反した動き、鱗によって自由自在だ予測は一切不可能。私は自然の理に反するのが大好きなのだ！おまえはどのように料理してやろうか、醜い頭を挽ぎ取り美しいカサゴの頭をつけてやろう！」

玉壺のは笑みを浮かべ襲ってくる。だが、そんなのお見通しだ。

霞の呼吸。 漆の型 隴

「なんだと？消えた？」

この技を見せるのは初めて、だけど万世極楽教狩りで身についたこの技は俺以外には絶対に出来ない。俺にしか出来ない、幻惑に近い技。

「どこだ！姿を現せ！」

玉壺はあたりを見渡し、見えたところをいくつも狙う。

だが全く当たるわけが無い。

それに、君の振る拳は手応えはあつたとしても俺に当たることは絶対無い。

「おまえ！私は頸を斬られたところでまだ余裕がある。私に勝てると思うのか？」

「君は本当に馬鹿だね、なんでこの場所には僕と文しかいないと思っただの？」

「なんだと、どういうことだ？」

「気づかないなら気づかずに死ねばいい、わからないまま死ぬってのは、それはそれで面白いよ」

僕は玉壺の頸を斬る。

「どういうことだ！私は！何故だ！何故だ！」

「お終いだね。さようなら、お前はもう二度と生まれて来なくていいからね」

玉壺の頭がコロコロと転がる。

「くそおお！人間の分際で！この魚壺様の頸をよくもおお！だが私の頸が斬られたところでまだ私には勝ち目が…」

「そいつはどうかね？馬鹿な芸術家さん」

森の奥からぞろぞろと人がやってくる。その先頭にはとりさんが立っていた。

「あんた、勝ち目があると思ってるけどね、こっちはもう全部わかってるのよ？あんたの策略を！ほら、これを見なさい！」

「おお！それは私の壺！大量にしかけてあったもの一つではないか！」

玉壺はそれを見て喜ぶ。

「あなた、しかけてた数は全部わかっているね？」

「108だ。だがそれがどうした？」

するとにとりさんは笑みを浮かべる。

「やっぱりね！みんな、これが玉壺の仕掛けた最後の壺よ！」

「どういうことだ！何故200もあつた壺の最後なんだ！」

「教えてあげますよ！あんたが仕掛けた200の壺、そのほとんどをあなた自身が魚にしたのよ？自分の攻撃で、自分の逃げ道を潰すなんて、ほーんと目先の集中しか考えてないお馬鹿さん」

そう、俺が臍を使っている間、俺の方に意識を向けている間に、拳

が放たれそうな場所に、文にとりさんが壺を積み上げていたのである。

そして、この鬼が壺を勝手に鮮魚にしてくれる。

あとは僕が全部回しておしまい、そういうことを玉壺の所に向かう途中でにとりさんから伝えられた。

これを思いついたにとりさんって本当に何者なんだよって思う。

「じゃああんた、地獄に落ちて、せいぜい針山の針で遊んでなさい！」にとりは壺を逆さにして手を離す。

すかさず俺が壺を斬る。

玉壺は少しづつ塵へと帰っていく。

「最後に、私の言葉を聞いてくれぬか」

「最後だけならいいよ」

「私の作品は、この世に残り続ける！そして、私は名前という永遠の命を手に入れた！北斎のように、この日の本で私は永遠に語り継がれるだろう！この身は死すとも、名は生き…」

俺は腹が立ったので玉壺を踏み潰した。

「うるさいよ、そんな戯言だけは聞きたくなかったよ」

「ああもう最悪！あんな糞壺野郎！最後まで自慢ばかりとか腹が立つ！」

「私も絡繰は作るけどあんなに自慢とかはしない」

「芸術とかそういう言葉を言って欲しくなか…」

俺はふらついて倒れる。

「大丈夫ですか！もしかしてかなり無理してませんでした？」

「そうですよ、ムリは禁物で…オロロロロロロロロロロ」

文はその場で嘔吐する。

「文さんまでどうしたんですか！それにものすごく顔色悪いですよ！」

「文、そんな無理しすぎて死んだら元も…げほっ」

「うわあ！お二人とも！早く治療を！」

泡を吹いて俺は意識が朦朧とする。

「やばいやばい！どうしよう！鋼鐵塚さん！鉄穴森さん！小鉄くん！いるんだったら返事してください！」

「はい、私はここにいますよ！鋼鐵塚さんを守るのに必死ですみません！」

「鉄穴森さん！ところで鋼鐵塚さんはどうしたんですか？」

「ああ、あそこの木の近くで今2本目の第一段階をやってます。一本目は先ほど終わりましたから」

「ほんと、鋼鐵塚さんって奇妙な人だからなあ」

「うわあああ！小鉄少年の亡霊！」

「いやいや全然死んでないので亡霊じゃないですよ！」

「いやー！亡霊って自分でわからないものなんですよ死んでるのが」

「いや、生身ですよ、それに俺、さつきまで壺探ししてましたし」

「その血は何なんですか！鳩尾刺されてそんな出血して死んでないはずないでしょうが」

「ああ、これですか？切られた腕の方の血なんですよ。押さえたからついちやつて、それに腕の傷はにとりさんたちが包帯を巻いてくれたお陰で大丈夫です。あと腹の方には…炭治郎と咲夜さんから預かってた鏢を入れてたので助かりました。お二人とも新しい刀につけて欲しいって言われてたんですよ！」

俺はその二つの鏢を見て思い出す。

炭治郎の鏢は引退した煉獄さんの鏢だ。

それに、俺が死にかけていた時に駆けつけてくれた幽々子さんの鏢だ。

二人のことが蘇ってくる。

俺は涙を流す。

ほら全部うまくいった。

父さん…母さん…兄さん…

頑張ったなあ。

巡り巡って俺の元へ帰ってきた。

俺は、倒したんだ！

俺は少しだけ、目を瞑る。

「無一郎さん！しつかりしてください！」

「しーっ、さつき私が薬を打っておきました。30分くらいで解毒が全部終わると思います。私も、こんな時のために、八意さんの薬を持ち歩いてますから、まあ応急的なものですけどね」

文、すごいよ。それに、紋様が出てるし。俺も出てるのかな、鏡を見てみたい。

でもさあ、そろそろ自分が下着姿なのにもう一回気がついて欲しいよ。

流石にはしたない姿を見るのは嫌なので目を瞑ったのに。

恋柱の過去と新たなる覚醒

「ちよつと君！オイタが過ぎるわよ！」

「黙れあばずれが、儂に命令して良いのはこの世で御一方のみぞ」

あばずれ！私のこと!?!信じられない！あの子なんて言葉を使うのかしら!?

私の末弟とそんな変わらない年格好なのに！あら!?!でも鬼だと実年齢と見た目は違うわよね。それにしたって酷いわ！

狂鳴

雷殺

「甘露寺さん！気をつけてください…」

恋の呼吸。 参の型 恋猫しぐれ

「私ものすごく怒ってるから！見た目は幼い子でも絶対に許さないわよ」

「か…か…甘露寺さん!?!」

私の技にみんな驚いていたかもしれない。

それもそのはず、

私の刀はものすごく柔らかく、ものすごく薄い、技の速さは柱でもしのぶさんについて2番目、それにしなりに加えて私の体の柔らかさ、可動域の広さがあってできるの。

それに、この刀を扱えるのは私だけ、継子のアリスちゃんもみんなと同じような日輪刀をしているから私より技が少し硬いの。

鬼がものすごい数の技を出してきた。

でも、私の速さに追いつける鬼はほとんどいない。

「この煩い蠅のような分際で、ならばこれはどうだ！」

血鬼術 無間業樹

キヤー！広範囲の術！受け切れるかしら！

恋の呼吸。 伍の型 揺らめく恋情・乱れ爪

いけるわ！そんなに速い技じゃないし、それに。

鬼は何とかしようとか口を開けてる。

でも頸を斬っちゃえばこっちのもん！

「甘露寺さん！そいつは本体じゃない！頸を斬っても死なない！」

えっ！やだホントに!?

まずいまずい！判断間違えちゃっ…

狂圧鳴波

私…まともに食らっちゃった…

どうしよう。とっさの判断で全身に力を入れたから大丈夫だけど

…

「甘露寺さん!!」

「お主、何者だ！儂の攻撃を受けて肉の形を保っているとは！なぜだ、この小娘、もしや、ならばお主を喰らい、再び上弦の肆に返り咲くきっかけにでもなれ！」

もしかして私死ぬのかな？なんかみえてきた。

「あなたの食事は異常すぎる。これでは海軍の中将の息子である私でもお金が足りません。あなたと結婚できるのなんて熊か猪か牛か、それとも鯨くらいでしょう。それにそのおかしな髪の色も私の子供に遺伝したら真っ先に狙われてしまう。いや、真っ先に海軍内の暴力で死んでしまう。このお見合いは無かったことにして、私のことは一切忘れてください、さようなら」

そうだ、私は鬼殺隊に入る少し前に、海軍のお偉いさんの息子さんとのお見合いで破談になったんだ。

私は特殊な体で筋肉の密度が8倍以上ある。

一歳二ヶ月の頃長男を身籠っていたお母さんを気遣い、四貫もの重さの漬物石を持ち上げて、お母さんを人生で初めて腰を抜かしたんだ。

そして私はものすごく食べた。相撲取りが四人がかりでやっど食べ切れるちゃんこ鍋を一人で食べきるほど。

私はお見合いを破談した日には隠して生きようと思った。

髪を染め粉で一時的に黒くし、食べたいものもぐっと堪えてフラフラになり、それでもいつばい嘘をついて力の弱いフリをした。家族みんなが私を心配していた。そして1ヶ月後、結婚したいという男が現

れた。その人は古物商のご子息の森近さん、とてもカッコいい人だった。でも、嘘つきでいるのはどうなんだろう。いっぱい食べるのも力が強いのも髪の毛も全部私なのに、私は私じゃない振りするの？私が私のまま出来ること、人の役に立てることがあるんじゃないかな？私のままの私がいられる場所ってこの世にないの？私のこと好きになつてくれる人はいないの？こんなのおかしいよ。

そう思つて私は夜、二人で街を歩いていると、鬼が襲つてきて、私は思わず、その鬼を殴つちやつたの、そしたら鬼の頭がポーンと飛んでいって、

それを見た森近さんがびっくりしてこう言ったの。

「君！そんな力があるんだつたら鬼殺隊に入りなよ！君なら、鬼殺隊に僕よりぴつたりの人が見つかるよ！」

そう言われて私は鬼殺隊に入った。

でも、私って、今…

「ぐわああああ！」

意識を取り戻す。

私気絶しちやつてた!?

「立て！みんな！次の攻撃くるぞ！」

「わかつてますよ！」

「いちいちウルセエんだよ！」

「甘露寺さんを守るんだ！一番可能性のあるこの人が希望の光だ！この人さえ生きていてくれたら絶対勝てる！みんなで勝とう！誰も死なない！俺たちは…鬼殺隊の期待の星なんだから！」

そう言つて私を抱えて逃げる。

すると、鬼が小太鼓を鳴らす。

その瞬間、雷撃が飛んでくる。

「やったか？これは呆気ない死に…」

「みんなありがと〜！柱なのにへましちゃつてごめんねええ！なかまは絶対死なせないから！鬼殺隊は私の大切な居場所なんだから！上弦だろ何が何だろうが関係ないわよ！私、悪い奴には絶対負けない！

覚悟しなさいよ本気出すから！」

「甘露寺さん！すげえ！」

「甘露寺さん！凄すぎます！尊敬します！」

「むーむー!!」

炭治郎くん、咲夜ちゃん、禰豆子ちゃん。本当に嬉しい。

思い出した。私はお館様に言われたんだ。

「素晴らしい、君は神様から特別に愛された人なんだよ密璃。自分の強さを誇りなさい。君を悪く言う人は皆、君の才能を恐れ、羨ましがっているだけなんだよ」

お父さんお母さん、私を丈夫に産んでくれてありがとう。鬼殺隊ではみんな私を認めてくれたの

鬼から守った人達はね、涙を流して私にお礼を言ってくれた。

伊黒さんがね、私に縞々の長い靴下と羽織をくれたのよ。

女の子なのにこんな強くっていいのかなってまた人間じゃないみたいと言われるじゃないのかなって怖くって力を抑えていたけどもうやめるね。

「任せといて！みんな私が守るから！」

「私も加勢します！」

「咲夜ちゃん、ありがとう、炭治郎くん！こっちは何とかするから！」
私はもつと速く、もつと強く！血の巡りも、心拍数も！もつと速く！

鬼は私の方を見ながら攻撃する。

だが、今は咲夜ちゃんもいる。

2人でこの攻撃を避けながら！戦わなきゃ！

「咲夜ちゃん、すごいね！私と同じ速さについていけるなんて」

「この戦い、炭治郎くんたちにかかってるんですよ。私と甘露寺さんが足止めをしないと」

「あと、咲夜ちゃん、気になってたけど右頬の紋様は何？」

「私にはわかりませんが、何か覚醒したみたいな感じですね。心地が良いです」

「私もよ！あの鬼の小太鼓も残り半分！さあ、畳み掛けるわよ！」

「はい！」

私と咲夜ちゃんは鬼を少しずつ押している気がした。

みんなの力と奇跡

「炭治郎！本体の入ってる玉は何処だ！わかるか？」
「わかる！こつちだ！」

甘露寺さんと咲夜さんがあの子供の鬼を何とかしてくれている間に、一刻も早く本体の鬼を斬らなければ！

その時、木が突然生えだし、俺たちの行く手を阻む。

「くそ、邪魔すんじゃねえ！」

「玄弥！流石に折れた刀では無茶が……」

玄弥は、木の壁を噛み付き、バクバクと食べる。

なんだ凄い硬い歯だ！

「玄弥！大丈夫か！お腹壊さないか！」

そして、そこに斬撃が飛んでくる。

木の壁は崩れ、道が開ける。

「倒れた！今なら！」

そこから木の鞭が飛んでくる。

だがその鞭は目の前で切り刻まれる。

もしかして、

「ふう、間に合った！間一髪だったな炭治郎！」

「文さん！ありがとうございます！」

「礼よりも先に鬼の方を追ってくれ！」

「はい！」

とにかく、繋いでくれたんだ、玉ごとやつを斬る！

ヒノカミ神楽、炎舞

玉がかち割られる。

だが、そこには鬼の姿がなかった。

また逃げた！

どこだ！近い！臭いはする。

どこだ！俺は東の方を見る。

そこには悲鳴をあげて逃げる小鬼。

「貴様ああ！逃げるなあああ！責任から逃げるなあああ！お前が今ま

で犯した罪！悪業！その全ての責任は必ず取らせる！絶対に逃がさない！」

俺は全力で追いかける。

すると、玄弥が木を持ち上げる。

「いい加減にしろこのバカタレエエエ！」

玄弥は木を思いきり小鬼目掛けてぶん投げる。

玄弥、どこにそんな力があるんだ！

「クソがあああ！いい加減死んどけてめえ、わかってんだろお！」

玄弥は木を土から剥がし、丸々一本鬼に向けてぶん投げる。

そのうちの一本が当たったかもしれない。

鬼は声を上げる。

だが、鬼は禰豆子の攻撃を避け、更に、速く逃げていく。

「足速ええ！なんなんだアイツくそがアアア追いつけねえ！」

速すぎる！くそつ、延々と逃げ続ける気だな！夜があける前に、甘

露寺さんと咲夜さんが潰れるまで、そんなことはさせない！俺たちが、お前には勝たせない！

その時、足に激痛が走る。

駄目だ！踏ん張りが効かない、左足がやられていなければ！

そうだ！善逸が教えてくれたことがあった！

「雷の呼吸って一番足に意識を集中させるんだよな、自分のさ、体の寸

法とか筋肉のひとつひとつの形ってさ、案外きちんと把握出来ない

からさ。それら全てを認してこそ本物の全集中なりって俺の育手の

じいちゃんがよく言ってたなあ」

筋肉の繊維一本一本、血管の一筋一筋まで、空気を巡らせる。

力を足だけに溜めて、溜めて！

一息に爆発させる。空気を切り裂く雷鳴の如く！

「何あれ！炭治郎！速っ！」

その声が一瞬だけ聞こえたけど、間に合う！奴を斬れる。

小鬼の頸に刃が通る！

いけ！今度こそ渾身の力で……！

「お前はあ、儂があ、可哀想だとは思わんのかあああ！」

「お前はあ、儂があ、可哀想だとは思わんのかあああ！」

突然鬼が大きくなり、俺の口元を掴む！

「弱いものいじめを、するなアアア！」

やばい！頭を砕かれる。

「てめえの理屈は全部クソなんだよ！ボケ野郎がアアア」

玄弥が、俺を口元を掴む鬼の手を剥がそうと必死になる。

そして、禰豆子が、背後から、炎を飛ばす。

鬼は燃え盛り、怯んだように俺から手が離れる。

「うおおお！」

玄弥は鬼の両腕を引きちぎる。

だが、禰豆子の炎に焼かれそうになったのか、焦って避ける。

もしかすると玄弥は鬼の細胞が入ってるかもしれない！

だが、鬼がよろけた先は、崖！

落ちる！

その時、俺は何か木に手を掴むことが出来た。

だが、禰豆子はそのまま崖の下に落ちてしまう。

「禰豆子！」

目の前には横たわる禰豆子とフラフラと歩く鬼。

鬼にはさつき半分まで頸を通した刀がそのままになっている。

掴んでそのまま斬ればいける。

「逃がさないぞ！地獄の果てまで逃げても追いかけて頸を斬るからな

！」

だが、鬼の逃げる先に、刀鍛冶の人！しかも5人！

急げ！早くしろもう一度だ！もう一度地面を全集中で蹴れ！

その時、目の前に刀が突き刺さる。

「使え！炭治郎！それを使え！」

その声は時透さん！

「ふざけるなぶつ殺すぞ！使うんじゃないやねえ！まだ第二段階までしか研いでないんだ返せ！」

鋼鉄塚さんにもものすごく殴られていたけど、ありがとう！時透さん

！

俺はこれまでよりも更に速く、鬼の頸に刃を入れる！

円舞一閃

更にもう1発!

円舞荒御魂

鬼の両足、そして頸を斬り落とす。

鬼は倒れ、地面に横たわる。

その時、空が青くなるうとしていているのに気がつく。

夜が開ける!この開けた場所はまずい、禰豆子!太陽から逃げろ!

だが、声を出そうと必死になるも、喉が乾いて噎せる。

禰豆子は俺の方に向かってくる。こつちに来なくていい!

お前なんだ!危ないのは!陽が射さると!

「禰豆子!逃げろ!日陰になる所へ!」

だが禰豆子は後ろを指さす。

その時、刀鍛冶の人々が大声をあげる。

「うわああどういうことだ!頸を斬られたのに!」

「みんな、別々の方向に逃げろ!」

鬼は何故か獣のような姿になり、何故か襲いかかってくる。

どういうことだ!俺は刎ねた頸の方を見る。

そこには恨みと刻まれた舌を出す頭が転がっていた。

本体は怯えだった、下の文字が違う!

「しくじった!止めなければあいつにトドメを!」

だがそこに太陽は容赦なく陽を射す。

禰豆子は蹲る。そこには焼け爛れる禰豆子、俺は全力で禰豆子を陽

から守る。

「縮めろ!体を小さくするんだ、縮め!」

禰豆子は陽に当たり悶え苦しんでいる。

まだ陽が昇りきってなくてもこれほど...!まずい!

「炭治郎!ここは私がかすむ!すぐ近くに落とし穴があるから、そこに飛び込む!炭治郎は気にせず、その鬼を斬れ!」

「わかりました!ありがとうにとりさん!」

俺はそういい、逃げる鬼を追う。

嗅ぎ分ける!まだ遠くには逃げてない!

本体が遠くへ離れたなら臭いで気づいたはず、
かなり近くにいます！どこだ！

鬼の臭いはかなり近い！

鬼から煙る気に臭いがする。

そこか、まだ鬼の中にいるな！もつと、もつと鮮明に！

俺は凝視をする。

すると、心臓のところに鬼が見えた！

今度こそお終いだ卑怯者！悪鬼！

俺は、鬼の這う手足を斬り落とし、歩みを止めさせる。

「お前は、命を持って、全ての罪を償え！」

俺はさつき落ちていた2本を合わせ、

鬼を切り刻む！

炎舞・切細裂き

鬼は、細かく切り刻まれ、

そして、凄まじい速さで塵へとかえる。

はあはあ、勝った！禰豆子は大丈夫か、死んだかもしれない。

日の光に焼かれて禰豆子は骨さえ残らず消えたかもしれない。

その時だった、

「竈門殿！」

「竈門殿、説明して欲しい！」

俺は刀鍛冶の人々は俺の肩を叩き、後ろを指さす。

俺は振り向くと、そこには焼け爛れもなく、傷もない、禰豆子が立っ

ていた。

「禰……禰豆子」

「おはよう、お兄ちゃん」

勝ちどきと空里

炭治郎さん

十二鬼月と禰豆子さんの血を沢山提供し、研究に協力してくださってありがとうございます

浅草で無惨に鬼化させられた2人が自我を取り戻しました。

禰豆子さんの血のお陰です。

無惨の支配からも解放され少量の血で生きておられます。

禰豆子さんの血の変化にはとても驚いています。

この1年間で血の成分が何度も何度も変化している。

私はずっと考えていました。

禰豆子さんが未だ自我を取り戻さず、

幼子のような状態にいる理由を。

恐らく、禰豆子さんの中では、自我を取り戻すよりも重要で優先すべきことがあるのではないか、

炭治郎さん、これは完全に私の憶測ですが、禰豆子さんは近いうちに太陽を克服すると思います。

俺は、嬉しさが込み上げてきた。

「禰豆子…よかった。大丈夫か？お前…人間に…」

「よかった、お兄ちゃん、大丈夫」

喋ってる…！でも目も牙もそのままだ…完全に人間に戻ったわけじゃない。

「いやあ、びつくりしたよ、とっさに穴に入ろうとしたら火傷みたいなのがみるみる治ったんだよ。そして、今こんな感じよ。太陽の下で歩ける鬼なんて初めて見た」

にとりさん、そんなことが起きてたなんて。

「みんなありがとう、俺たちのために…禰豆子ちゃんが死んでたら申し訳が立たなかった…禰豆子ちゃんの凄さには感謝するしかない」

「本当に、よかった…塵にならず消えたりしなくて…」

俺は禰豆子を全力で抱きしめた。

「うわあああ！よかった！彌豆子が無事でよかったあああ！」

「お前ら：すげえよ、今回は彌豆子と炭治郎に全部やるよ」

「玄弥、俺も玄弥がいなかったら俺と妹は死んでたかもしれない。だから、玄弥もありがと…」

俺は気が抜ける。

「おいおい、大丈夫か！」

「唐突に限界が来たみたいだな」

「竈門殿！しつかりするのだ！」

「あと少しです！太陽も上がって動きも鈍ってます」

「それじゃ、私が切り刻むわ！」

その時、鬼が突然崩れ、そして塵へとかえる。

「あれ、なんか消えちやっただけだ」

「もしかすると、鬼の本体の頸を討ち取ったんでしよう」

「すげえなあ、まさか炭治郎達がやってくれるなんてな、私が先に行かせて正解だったわ！」

「あの、文さん？何故袴なんですか？」

「ああこれ？時透さんから一時的に借りているだけ、私さあ、壺だとか魚とかみたいな下弦の鬼と戦ってたらスカート全部魚にされちゃつてさあ、それでもものすごくにとりさんに叱られたよ。時透さんって結構足長いんだね。服装見て気が付かなかったけど腰の位置意外と高いよ」

「ああ、なるほどね」

「炭治郎大丈夫？」

「あ…時透さん、良かった無事で…刀ありがとう」

「こつちこそありがとう、君のお陰で大切なものを取り戻した」

「え…そんな、何もしてないよ俺…」

「それにしても彌豆子はどうなってるの？」

「太陽を克服したみたいなんだ、俺の自慢の妹だよ、彌豆子ならやってくれると信じてた、もうすぐ人間に戻れる日が近いかもしれない」

「そうなんだ、すごいね」

「あつ、いた！みんなー！」

「ちよつと！色々と怪我してるんですから速すぎますよー！」

甘露寺さん、咲夜、文さんがこっちに向かってくる。

そして全員を甘露寺さんが抱きしめる。

「うわあああああ！勝った勝ったあああ凄いよおお！みんな生きてるよおお、よかつたああああー！」

「よかつたねえ、甘露寺さん」

「え？彌豆子ちゃん？喋れるの!?!」

甘露寺さんは驚きのあまり、引いてしまった。

「それにしてもみんな生き残るってすごいことかもしれないな、昔上弦を倒す際には鬼殺隊の剣士400人の死者を出す大戦闘だって言われてたから」

「え、そんな強い鬼と同格のものを俺たちで倒したんですか？」

「そうだよ、まあ、その時は火事も発生して焼け死んだ人が多かったって記録があるからね」

「それ、どこで聞いたんですか？」

「え？先代のお館様の奥方、産屋敷あまね様が私に矜羯羅零式を作る際に情報を教えてくださったんです」

凄い、お館様やその奥方様もものすごい方なんだ。俺たちはそう思った。

刀鍛冶の里の復興と移転が急がれる。

一晩なら守れるがそれ以上では危険だ。

それに、下弦一体、上弦一体の十二鬼月による襲撃を受けたにも拘らず、里の被害は最小限に留められ、死者29人という歴代でも最も少ない死者での上弦討伐となった。

だが、失った者たちを悼む時間はない。

鬼は待ってくれないし、人が命を落としてもこの世の巡りは止まらない。

俺たちは全身に鞭を打ち、へ口へ口になりながら空里へと設備を移

転させるために奔走した。

もしかすると鬼の討伐よりもこっちの方が疲れたかもしれない。

「はい！みんな！お疲れ様！新たな里でもう一度始めよう！それにこの里にはものすごい設備ができてる！みんな見に来ない？」

俺はへろへろだったのが好奇心には勝てなかった。

「この空里はね、今までにない最新の設備にしてるんだよ、こっちの方がバレなくて本当に良かった」

そこには巨大な建物があり、ガチャガチャと音がしている。

「これは何なんですか？」

「よくぞ聞いてくれた、実はね、私が前々から組み上げていた最新の製鉄所さ！おそらく、この製鉄所はもしかすると英米に並ぶ大製鉄所になるかもしれない、私はそのために2年かけて頑張ったんだよ！」

「凄い…ですね。にとりさんは…」

「大丈夫!?しつかりしてよ！」

完全に力尽きた俺はみんなと同じく蝶屋敷に担ぎ込まれた。

柱稽古編

緊急柱合会議とそれぞれの思惑

大正五年三月二十九日

午後二時十五分

炭治郎が目を覚ます前日、産屋敷邸、いや、旧産屋敷邸では緊急柱合会議が開かれていた。

実弥

羨ましいことだぜえ、何で俺は十二鬼月に遭遇しねえのかねえ

小芭内

こればかりはな、遭わない者はとんとな甘露寺と時透、その後体の方はどうだ？

蜜璃

あっうん、ありがとう、随分と介抱してくれたおかげで良くなったよ。

無一郎

俺もまだ本調子とまではいかないけど、

行冥

良かった、柱がまた欠ければ鬼殺隊が危うい…、死なずに十二鬼月二体、それに、上弦まで倒したのは尊いことだ。

天元

派手にやってくれたな二人とも、それに、直接戦闘での参加者の死者0人はすげえぜ！前の討伐では7人の柱の内3人が死ぬ大惨事だったって話だし。

永琳

宇髄さん、その時代はまだ柱が七人制のときですよね。

その後、九人までに増え、先代が更に11人にまで増やしたんですよ？

それに、今回の戦闘で関わった2人はその制度になってから入った柱ですからね。

天元

おお、そうだったな！

柱で3番目に在任が長い俺がそのことを忘れていたぜ！
しのぶ

それに、今回のお2人ですが傷の治りが非常に早い、先の戦いでさえ宇髓さんが20日間まともに動けなかったのに、お2人はわずか8日でこうやって会議に出席できるようになる、何があつたんですか？

義勇

その件も含めてお館様からお話があるだろう。

妹紅

珍しく私と意見が合うな。この前の任務帰りの時は、飯屋で目玉焼きの話で喧嘩したのにな。

さとり

あんたら何やってんのよ…。それに、最近になって鬼の被害が激減しているのも気になる。お館様からその話もあるかもしれないけど。

あまね

大変お待たせ致しました。

本日の柱合会議、産屋敷あまねと。

輝利哉

新当主、産屋敷輝利哉が務めさせていただきます。

あまね

そして前当主、産屋敷耀哉が現在も生きていることをご報告させていただきます。

行冥

承知：

前当主、耀哉様が一日でも長くその命の灯火を燃やしてくださいとを祈り申し上げます。あまね様も御心強く持たれますよう…

あまね

柱の皆様には心より感謝申し上げます。

既に御聞き及びとは思いますが、日の光を克服した鬼が現れた以

上、鬼の始祖たちは目の色を変えてそれを狙ってくるでしょう。己も太陽を克服するために、大規模な総力戦が近づいています。

下弦の壺・上弦の陸との戦いで甘露寺様、時透様の御二人に独特な紋様の痣が発現したという報告が上がっております。御二人は痣の発現の条件をご教示願いたく存じ上げます。

蜜璃・無一郎

痣？

輝利哉

古くは戦国時代、

鬼の始祖の1人である。鬼舞辻無惨をあと一歩という所まで追いつめた始まりの呼吸の剣士たち、彼ら、彼女らは全員に鬼の紋様と似た痣が発言していたそうです。

伝え聞くなどして御存知の方はご存知です。

実弥

俺は初耳です。何故伏せられていたのですか？

あまね

痣が発現しない為、思い詰めてしまう方が随分いらつしやいました。それ故に、痣については伝承が少なく曖昧な部分が多い、それは当時はほとんど重要視されていなかった、いや、かなり忌避されていたせいかもしれません。鬼殺隊がこれまで3度壊滅させられかけ、その過程で継承が途切れていたからかもしれません。

ただ一つはつきりと記し残されていた言葉があります。

痣の者が一人現れると共鳴するように周りの者たちにも痣が現れる。

輝利哉

始まりの呼吸の剣士の継人、煉獄橋平、そして江戸時代の上弦の鬼の討伐での唯一の柱での生存者、稀神紗紅愛の2人の手記にそのような文言がありました。

あまね

今この世代で最初に痣が現れた方、それは柱の階級ではありませんでした。

竈門炭治郎、魂魄妖夢、曲戸アリス、3名が最初の痣の者。

ですが御本人たちにもはつきりと痣の発言の方法はわからない様子で、共通で判明したことは一つしかありませんでした。

その1つが体温39℃以上という条件、ですが、実際に体温を39℃にするように頑張ってもらいましたが、それだけでは発現されませんでした。

そして、それに続いて、柱の御二人が覚醒された。

御教示願います。

甘露寺様、時透様。

蜜璃

はい！あの時はですね！確かにすごく体が軽かったです！えーつと、ぐあああつて来ました！さらに心臓がばくんばくんして耳もキーンとしてもものすごく頭が冴えてました！

申し訳ありません、穴があつたら入りたいです。

無一郎

痣というものに自覚はありませんでしたがあの時の戦闘を思い返してみた時に思い当たること、いつもとは全く違うことがあります。その条件を満たせば恐らくみんな浮き出す。その方法を御伝えします。

前回の戦いで俺は毒を喰らい動けなくなりました。呼吸で血の巡りを抑えて毒が回るのを遅らせようと思いました。が僕を助けようとしてくれた少年が殺されかけ、以前の記憶が戻り、強すぎる怒りで感情の收拾がつかなくなりました。

その時の心拍数は二百、いや、二百十を超えていたと思います。

さらに体は燃えるように熱く、三十九度五分以上になっていたはず。です。

永琳

そんな状態で、普通に動けますか？

しのぶ

その状態では普通の隊士なら命に関わる、いや、死んでしまう可能

性も高いんですよ!?

無一郎

そうですね、だからそこが篩に掛けられる所だと思う。

そこで死ぬか死なないかが恐らく痣が出る者と出ない者の分かれ道です。

輝利哉

心拍数二百十以上に：体温は三十九度五分以上なのですか？

無一郎

胡蝶さんのところで治療を受けていた際に俺は熱を出したんですが、体温計なるもので計ってもらった温度、三十九度五分、そして心拍数二百十で俺は鏡の前に立った時、痣のような紋様が浮き上がりました。

実弥

そんなすげえ簡単なことでもいいのかよ。

義勇

これをすげえ簡単と言つてしまえるすげえ簡単な頭で羨ましい。

実弥

何だと？簡単じゃねえか？

永琳

慎みなさい。それに、その条件だとうさぎ並の心拍数と体温ですよね。

さとり

では、痣の発言が柱の急務となりますね。

行冥

御意、何とか致します故先代の当主であるお館様には御安心召されるようお伝えくださいませ

あまね

ありがとうございます。ただ一つ痣の訓練につきましては皆様にお伝えしなければならぬことがあります。

蜜璃

何でしょうか？

あまね

もう既に痣が発言してしまつた方は選ぶことができません。

痣が発言してしまつた方は例外がほぼなく二十五歳を超えたものはないということ、それが書き残された二つの書物に記されてきました。ですが、鬼殺隊史上、最初の痣を持つもの、継国縁壹は八十五まで生きたという話も残っています。それに、痣を発現したものは今まで調べた鬼殺隊のいくつもの書物を調べてもわずか15人しかいないんです。だから、鬼殺隊歴代最強とも言われた継国縁壹程の実力がないと長く生きるのは難しいと思われます。15人の発現者の寿命が25歳以内でこの世を去る可能性が非常に高いことを皆さんには頭に入れてもらいたいです。

隠

あまね様！先程、耀哉様が目を覚ましました。

あまね

そうですか、では私たちは耀哉の食事を手伝うので失礼します。

行冥

なるほど、しかし、そうになると28歳の私は一体どうなるのか…南無三…。

義勇

あまね殿もお館様も退室されたので失礼する。

実弥

おい待て、失礼するんじゃないやねえ。それぞれの今後の立ち回りも決めねえとならねえだろうが、それに激減した仕事についてもだなあ。

義勇

十人で話し合うといい、俺には関係ない。

小芭内

関係ないとはどういうことだ。貴様には柱としての自覚が足りぬ。

それとも何か？自分だけ早々に鍛錬を始めるつもりなのか？会議にも参加せず。

実弥

てめえ！待ちやがれ！

しのぶ

富岡さん、理由を説明してください。さすがに言葉が足りなすぎますよ。

義勇

俺はお前たちとは違う。

実弥

気に食わねえぜ…、前にも同じことを言ったなあ富岡、俺たちを見下してんのかあ？

さとり

やめなさい、義勇にも理由はある。私が説明するから待って、

実弥

なんだと？おめえはあの富岡の擁護でもする気か？

ならお前も同罪だな。

蜜璃

喧嘩は駄目だよつ。冷静に。

行冥

みんな…座れ…。

話を進める…一つ提案がある…。

最近まで気になってたことだが、最近伸びてきた隊士も増えた。

だが、伸びた隊士はいずれも柱預かりの隊士、または継子たちばかりではないか…。

だから、より育成を強めるためにも、柱たちの稽古を隊士全員で回らせるというのはどうか…？

天元

確かに、今現在、甲の隊士というものは、1年前の最終選別者8人、それに俺たちの継子たちなどを合わせても15人しかいない。

これは隊士が育っていないのと同じだな。

永琳

それに、15人は妹紅さんが柱になったあとに昇格した面々ですか

らね。

妹紅さんが柱になったあとはしばらく甲の隊士は0人でしたし。

妹紅

そうか、私が兄いの跡を継ぐまでは私一人だったのか。

実弥

確かになあ、昨日文がものすごく喜んでたのも分かる。

蜜璃

私たちが力を合わせて、即席でもいいから、

柱に近い実力者をどんどん作った方がいいと思いますね。

小芭内

俺は甘露寺の意見にも賛成だ。

無一郎

炭治郎と同格の隊士を増やせば、もしかすると、この先の総力戦でも勝ちが見えるかもしれない。俺はそう信じている。

しのぶ

あの、実はなんですが…

天元

なんだ？

しのぶ

私と八意さんは合同訓練には参加できません、事情がありました。

行冥

どういうことだ…。

しのぶ

私と八意さんは、みんなが合同訓練をするよりももっと重要なことをしなければならぬのです。

それが、鬼の始祖を倒すためにも絶対に重要なことなのです。

行冥

ならば、仕方ない…。お2人を除く8人で合同訓練をすることにしよう。

さとり

私は義勇も入れた方がいいとは思うんですよね。

義勇はちよつとまだ心の準備が出来てないだけで、それに、誰よりも義勇は優しく情に厚いからね。

蜜璃

もしかして、さとりさんって富岡さんのこと好きなの？

さとり

は？私は恋愛感情とかないから、というかあいつが好きなのよ。あんなのぶさんだよ。私は義勇が言えないことを代弁してるだけで、あんなやつとは付き合うなんてごめんだね！

蜜璃

えーーーーー！

しのぶ

富岡さん、どういうことですか？

そういえば、姉さんが生きていた頃、よく、姉さんと話してましたよね？どういうことですか？

富岡

すまない、俺はお前のことが好きだ。だが、口下手で不器用な俺は言えなかった。だから、カナエに色々教えてもらっていただけだ。

しのぶ

え!?そうでしたの？

蜜璃

きゃーーーーー！

しのぶちゃん！

これは恋だよ！私も応援するから！

実弥

俺は今何を見せられているんだ。

行冥

話が大きく逸れている。

ここで話を終わりにしよう。

柱達で合同訓練を行う、

開始は四月五日から、それまでの間に、訓練の内容を考えておくよ
うに。

一同

はい！

午後三時五十分

閉会

早苗

みーんな私がずっといるのに気が付いていないの困る。
産屋敷の当主の妻になるってこういう仕事もあるのね。
それにしても柱の皆さん自由すぎませんか？

お見舞い客と柱稽古の報せ

俺は蝶屋敷に担ぎ込まれ、しばらくが経ち、意識が戻って2時間後くらいに、隠の人がお見舞いに来てくれた。

「いやお前すげえよ、柱でもねえのに上弦の鬼を倒したとか前代未聞だぞ?」

「そうなんですか!?俺、とんでもないことしました?」

「とんでもねえよ。まあ、その疲れで10日間も意識がねえのはしょうがねえ。でもそんなに握り飯15も食って大丈夫?」

「はい!甘露寺さんもいっぱい食べるっていつてたんで!」

「あの人は原理の外側にいる人だからあまり比べない方がいいぜ。それに恋柱さんも霞柱さんも1週間ほどで全快だったって?」

「はい、尊敬します」

「まあ、早く元気になるならいいけどよ、みんな生きてて良かったな」

「はい、良かったです」

「あつ、これ一番聞きたかったんだわ、お前の妹がどえらいことになってるらしいけど大丈夫なのか?」

「あつはい!太陽の下でトコトコ歩いていますね。この前はオオムラサキ捕まえたって妖夢に見せびらかしてきたって聞きましたから」

「やばくね?それマジやばくないか?今後どうなるんだよ、どういう状態なんだ妹は」

「今かなり深く調べてもらっているんですけどわからなくて人間に戻りかけてるのかそれとも鬼として進化しているのか?」

「それって胡蝶様か八意様が調べてるの?」

「いや、それだけじゃなくてもうひと?」

俺はものすごく言いそうになって噎せた。

「おいおい!やっぱ食いすぎだろうが、病み上がりなんだから控えろよ!」

「ごめん、ゲホゲホ」

「ていうか看護師3人と妹はどこにいんだよ、アオイちゃんも鈴仙

「ちゃんもいないし」

「今は重体の隊士もいないらしいのでずっと禰豆子と遊んでくれるんですよ。そのおかげで少しづつ喋れるようになってきて」

「ああそうなのか、平和だな、ただあの善逸というやつが来たらかなりどえらい事になるんじゃないかねえの?」

「えっ?それはなんかまずいですね」

「ギイイイイイイヤアアアアアア!」

外から叫び声が聞こえた。

「あ、噂をすれば、帰ってきてきたんだな」

「あちやー!」

俺は少し頭を抱えた。

「禰豆子ちゃん!可愛いよ!可愛すぎて死にそう!」

「おかえり」

「どうしたの禰豆子ちゃん!喋ってるじゃない!俺のため?俺のためかな?俺のために頑張ったんだね!とても嬉しいよ、俺たちついに結婚かな!」

「善逸さん!今はあつちに行ってください!」

「月明かりの下の禰豆子ちゃんもものすごく素敵だったけど、太陽の下の禰豆子ちゃんもたまらなく素敵だよ!素晴らしいよ!結婚したら毎日寿司とうなぎを食べさせてあげるから!安心して嫁いでおいで!」

「おかえり、妖夢、伊之助、善逸」

「え?.....。あいつらどこにいる?ちよつと折檻してくるわ!」

「物騒なこと言わないでください!それに、伊之助も妖夢ちゃんも今は出かけてますから」

「じゃあとりあえず俺は折檻の準備でもしておくか!」

「だから物騒すぎますっ!」

「ほおら、やっぱり用心すべきだったかもしれないな」

「すみません、あとで善逸に言っておきます。禰豆子に言葉を覚えさせたのは妖夢と伊之助だから…」

病室の戸が開く。

「あー！にとりさん！鋼鐵塚さん怪我は大丈夫だっ…た…ん？」

2人ともものすごく息切れしている。

「大丈夫じゃない感じですか!？」

「お前に渡す刀がやつとできた…」

「あつありがとうございます」

「とりあえずお二人とも座ってください」

2人は椅子に腰をかける。

「煉獄さんの鰐だ！小鉄さんを守ってくれてありがとうございます…」

「は…は……刃を…刃を早く……」

「刃ですね！刀身もみみます！」

刀を鞘から抜く。

そこにはものすごく息を飲む刀身があった。

「はあ…ゴクリ…凄い…、漆黒の深さが違う…」

「鉄の質がいい…前の持ち主が相当強い剣士だったんだろうって鋼鐵塚さんが仰ってます」

「滅の文字…」

「これを打った刀鍛冶が全ての鬼を滅するためについた刀だ。作者名も何も刻まずただこの文字だけを刻んだ。この刀の後から階級制度が始まり、柱だけが悪鬼滅殺の文字を刻むようになったそうだ、と鋼鐵塚さんが仰っています」

「そうなんですね、すごい刀だ…」

鋼鐵塚さんは言葉も出ないほど息切れしている。

かなり渾身の一本を研いだんだろうな。

「あれ？でも前の戦いでこれを使った時はこの文字が刻まれてなかったような…」

すると、鋼鐵塚さんは深く深呼吸をする。

「だからそれは第二段階までしか研ぎ終えて無いのにお前らが持つ

てって使ったからだろうが！錆を落とすまであと少しだったんだよ
ぶち殺すぞー！」

「すみません…」

「今もまだ傷が治りきってなくてずっと涙が出てるんだよ！痛くて痛くてたまらないんだよ！研ぎの途中で鬼やら柱やらにとりやらに邪魔されまくったせいで最初から研ぎ直しになったんだからな！お前に渡す刀よりも咲夜に渡す方の刀の方が2倍早く終わったぞー！」

「でも怪我の酷さならこいつの方も負けてないっすよ、肋の骨折れまくってるし、今も左脛の辺りの骨が折れてるからにとりさんにここまでおぶってもらったんですよコイツ」

「ぶち殺すぞてめえ…！」

「話通じねえな！」

「いいか炭治郎、お前は鬼殺隊である限り俺にみたらし団子とごま団子を持ってくるんだな！いいいな！」

「はい…持ってきます」

「じゃあ私たちは咲夜の所に行くから、それに、私は別件も頼まれてるから、その隠！鋼鐵塚さんを帰りにおぶってね！」

「え!?俺が!?マジかよ」

そして鋼鐵塚さんはにとりさんにおぶられながら2つ隣の病室へと向かった。

「噂に聞いてたけどすげえ人たちだな、特に鋼鐵塚とかいう人は」

「今日はかなり穏やかでしたよ、相当辛いみたいです」

「マジかよ…俺はアイツをおぶって刀鍛冶の里まで運ばなきゃならんのか…」

「さつきからうるせえ、俺の眠りを妨げやがって！」

「あつ、ごめん玄弥。もう済んだから騒がしくして悪かつ…」

病室の戸が思い切り蹴破られる。

「ああー！伊之助…！何してるんだ！戸を壊して！」

「お前バカかよ！胡蝶様に殺されるぞ」

「強化強化強化！合同強化訓練が始まるぞ!!鬼殺隊の隊士全員が集まって柱って言うやつらが稽古つけて…なんたらかたら言ってた

ぜ！」

「なんなんだ？それ？」

「俺にはさっぱりわかんねえ」

「伊之助！さつき本部で言われた話、ちゃんと聞いてなかったでしょ？」

妖夢が入口から息切れしながら入る。

「妖夢。ちよつと説明して欲しいんだけど」

「6日後の四月六日、全鬼殺隊の剣士、1460人が全員で柱に稽古をつけてもらい回る訓練が始まります。稽古をつけてくださる柱は8人、それぞれが内容を持ち合わせて行うというものです。その名も柱稽古、そしてこれは継子だろうと関係なく、参加が義務付けされてます。禰豆子ちゃんが太陽を克服してついに、昨日は鬼の出没が0になった。だからこそ、第2の竈門炭治郎達を育成しようという話です」

「いやあ、その話どういふことかなあ」

「あつ、善逸、どうしたんだ？」

善逸が血管を浮き上がらせた凄まじい形相で部屋に入ってくる。

「何も凄くねえよ、最悪だよ地獄じゃん。誰なんだよ考えた奴、死んでくれよ」

「善逸、自分より格上の人と手合わせして貰えるって上達の近道だぞ！」

「そうですねよ善逸さん！私たちは甲なんですよ！それに、柱になるまであと少しなんですから一緒に頑張りましょうよ！それに、グングン吸収して強くなれるんだから善逸さんも柱、いや、上弦の鬼を倒せる実力がつくと思いますよ」

すると、善逸は俺と妖夢の顔を平手打ちする。

「そんなこと言うんであれば俺とお前の仲もこれまでだな！それに炭治郎！お前はいいよな！まだ骨折治ってねえからぬくぬくぬくぬく寝について完治まで待てばいいんだろ？わかるか？この気持ち！」

「あつ善逸！言い忘れてたけどありがとう！上弦の陸との戦いで片足がほとんど使えなくなった時、前に善逸が教えてくれた雷の呼吸のコ

ツを使って鬼の頸が斬れたんだ、勿論善逸みたいな速さでは出来なかつたけど本当にありがとう、それに、伊之助や妖夢の技のコツも、しっかり活きた。本当にありがとう、こんなふうに人と人との繋がりが窮地を救ってくれることあるから、柱稽古で学んだことは全部きつといい未来に繋がっていくと思う」

「馬鹿野郎お前っ…そんなことで俺の機嫌が直ると思うなよ！」

「はっ！俺の子分だからな、親分の技を見て盗めるのが素晴らしい子分の務めだ！」

「あ…ありがとう…。私、そこまで誉められたの初めてです」

3人はものすごい笑顔になっていた。

すると、善逸は突然、何かを思い出したように表情が変わる。

「妖夢、伊之助、お前らちようど良かった。とりあえずこっちこい！」

「え、ちよつ、ま…」

「妖夢！伊之助！」

忘れてた、善逸はさつきまで禰豆子のことで2人にブチ切れていたんだった。

「あつ、ちよつと善逸！さすがに良くないよ…」

「炭治郎、この話はみんなには秘密だからな、絶対に言うんじゃねえぞ…！」

俺は今まで見たことない怒りの臭いを感じ取り怯む。

その時、鴉が俺の肩に乗っかる。

「うわあ、いきなりびっくりした！」

「先代ノお館様、耀哉様カラノお手紙ダ!!至急読ムヨウニ！」

「手紙？俺に？わざわざ？うーんなんだろう？」

俺は鴉から手紙を受け取る。

説得大作戦と繋ぐべきこと

「ごめんくださいーい！富岡さーん！こんにちはーすみませーん」

俺は富岡さんのいる清水屋敷の前にいる。

「義勇さーん俺ですー竈門炭治郎ですー」

俺が何度も呼ぶと、智溜乃さんが門を開けてくれた。

「あら、お久しぶり、元気にしてる？」

「はい、前の戦いで足の骨を折っちゃったんですがそれ以外は」

「富岡さんなら、今、稽古場でボーーーっとしてるよ？師範は一日の3分の1は稽古場にいるからね」

「そうなんですか、あ、あと、智溜乃さんにもお館様から手紙を預かっているどうぞ」

智溜乃さんは手紙を深く読んだ。

「なるほどね、お館様の考えはよくわかった。それに、私もいいこと思いついた。炭治郎とあたいならできると思う」

炭治郎、怪我の具合はどうだい？

情けないことに私は動けなくなってしまったね

義勇と話がしたいんだけど、もう出来そうにない。

今はとても大事な時だからみんなで一丸となって頑張りたいたい思っているんだ、義勇と話をしてやってくれないだろうか。

どうしても後ろを振り向いてしまう義勇が前を向けるように根気強く話をしてやってくれないか。

そうすれば、義勇は受け入れてくれると思う。

この手紙は炭治郎と智溜乃の2人が読んでいることを願う。

産屋敷耀哉

「あついた、師範！炭治郎が話があるそうなので連れてきました」

「…」

「反論しないと言うことは良いということですね。じゃあ炭治郎、ここに座布団を置いとくからね、あつ、もう一枚は足置きだからね」

俺は義勇さんの前に座る。

「義勇さん、そろそろ柱稽古が始まりますね。みんなで色々な稽古の内容を持ち寄って柱達でやるっての楽しみです。富岡さんはご存知ですか？」

「知ってる」

「あ！知ってたんですね」

「俺はあと十日ほどで復帰許可が出るから、その時は最初に稽古をつけてもらっていいですか？」

「つけない」

「どうしてですか？じんわり怒っている臭いがするんですが何に怒っているんですか？」

「お前には水の呼吸を極めなかったことを怒ってる。お前は水柱にならないければならなかった」

「それは申し訳なかったです。でも鱗滝さんとも話したんですけど、使っている呼吸を変えたり新しい呼吸を派生させたり、多数の呼吸を混ぜて使うのは珍しいことじゃないそうなので、特に水の呼吸は、技が基礎に沿ったものだから派生した呼吸も多いって、ほら、継子の智溜乃さんのように」

「そんなことを言ってるんじゃない。水柱が不在の今、一刻も早く誰かが水柱にならないければならない」

「水柱が不在？義勇さんがいるじゃないですか？」

「俺は水柱じゃない。話は以上だ。帰れ」

そういつて稽古場から立ち去った。

すると、入れ違いで智溜乃さんが入ってくる。

「どうだった？」

「やっぱりあの手を使うしかないですね」

「そうね、あたかも継子になる時にやったやり方よ、師範は結構我慢強いけど、師範は私がやった時は3日で折れたわ。とにかく、どんな場所でもいいからついて行く。私はそのまま熊谷までついて行ったわ」

「じゃあ、作戦開始ですね！」

「お互い頑張りましょう」

俺と智溜乃さんはいつまでも付き纏った。

「義勇さん、山椒はどうです？」

「俺はそんなものをかけない。それに、いつまでついてくるつもりだ？」

「どんな場所でもついて行きますよ」

食事の時も

「今日は、よく釣れる」

「見てください、俺、さつきこんな大きな魚釣り上げたんですよ！」

「あたいのも見て、これ、高級魚じゃない？」

「凄いですね！俺も釣ってみたい」

釣りの時も

「ここはこう詰めたら勝てる」

「なるほど、将棋って奥深いんですね」

「あたいも強いけどね。ちなみに師範と私は6対4で師範の方が強いんだよ。なかなか師範には勝てない」

将棋の研究をしている時も

「ふう、今日は月がなく星が見える。こういう日は星を眺めるのに限る」

「こんな綺麗な星が見える温泉があったんですね」

「でしょ？ここは関東でも数少ない混浴の温泉だから、凄い綺麗なんですよ。それに、義勇さんは月に2回はここの温泉に入っているの。あたいの焚いたお風呂よりもここが好きなのはちょっと羨ましいけど」

お風呂の時も

「義勇さん！とりあえずお布団を用意しておきました」

「3人一緒に寝るんですよ。私がここの宿代出したので師範はお金の心配はしないでいいですよ」

寝る時も付き纏った。

そして四月五日、明日にも柱稽古が始まるという日、

義勇さんは根負けする。

「はー、お前たちにだけは話そう。俺は最終選別を突破してない」

「最終選別って藤襲山のですか？」

「そうだ、あの年に俺は、俺と同じく鬼に身内を殺された2人、田島鍔兎と高山真菰、鍔兎は穴色の髪、真菰は藍色の髪の女の子、その2人とともに選別を受けた」

「え？」

「その時俺は十三だった、同じ歳で天涯孤独、すぐに仲良くなった。鍔兎は正義感が強く心が優しい、そして真菰は少しふわふわした言動だが、分析力に長けていた女の子だった。あの年の選別で死んだのは鍔兎と真菰の2人だけだった。」

2人はあの山の鬼を殆ど2人で倒してしまったんだ、鍔兎と真菰以外の全員が選別に受かった。

俺は最初の鬼は斬れたものの、2体目の馬頭の鬼に怪我を負わされて朦朧としていた。その時も鍔兎と真菰が助けてくれた。

2人はその場にいた村田誠一と言う少年に預けて助けを呼ぶ声の方へ行ってしまった。気がついた時には選別が終わり、俺は麓の博麗神社に担ぎ込まれていた。

俺は確かに七日間生き延びて選別に受かったが、一体の鬼しか倒せず助けられただけの人間が果たして選別に通ったと言えるのだろうか、俺は水柱になっていい人間じゃない。」

俺はそれを聞いて涙が出てきた。

「そもそも柱たちと対等に肩を並べていい人間ですらない、俺は彼らとは違う。本来なら鬼殺隊に俺の居場所はない。柱に稽古をつけてもらえ、それが一番いい。俺には何度やっても痣も出ない。：鍔兎と真菰なら出たかもしれないが、もう俺に構うな、時間の無駄だ」

きつと義勇さんは自分が死ねばよかったと思っているんだなあ、痛いほどわかる。自分よりも生きていて欲しかった大事な人たちが自分よりも早く死んでしまったり、それこそ自分を守って死んだりしたら扱られるように辛い。

鍔兎、真菰、狭霧山で俺に稽古をつけてくれた2人。

不思議な体験だった。もう死んでしまったはずの彼らが俺を助けてくれた。

そうか、鑄兎と真菰は、義勇さんと一緒に選別を受けたのか。生きていたら2人とも義勇さんと同じくらいの年になる2人。

凄いなあ、選別の時みんなを助けたんだ。俺には出来なかった。妖夢に助けられたりもした。それほど余裕がなかった。

鑄兎と真菰が生きていたらすごい剣士になっていただろうなあ、それもあつて義勇さんは自分が死んでいたら良かったと思っっているんだ。わかる。だって俺も似たようなこと思った。煉獄さん、全力で俺たちを守ってくれた、凄い人だ、誰よりも優しく強かった、剣士としての全ての人生をかけて守ってくれた。

煉獄さんの代わりに俺が引退していたら良かったんじゃないかと思つた。

煉獄さんならいつか無惨を倒せたんじゃないかって、でも、

あの無限列車の戦いのあと、伊之助は言つていた。信じると言つていたらそれに答えること以外考えんじゃねえ！

その通りだ。だけど、義勇さんになんて言つたらいいんだろう。

どんなに惨めでも恥ずかしくても生きていかなきゃならない。本人は認めてないけど柱になるまで義勇さんがどれだけ自分を叱咤して叩き上げてきたのかどれだけ苦しい思いをしてきたことか。

義勇さんのことを何も知らない、俺がとやかく言えることじゃない。だけど…一つだけ聞きたいことがある。

「義勇さん！義勇さんは鑄兎と真菰から託されたものを繋いでいかないんですか？」

「鑄兎…真菰…」

「自分が死ねば良かったなんて二度と言うなよ！」

「もし言つたらあなたとはそれまで、友達をやめる」

「翌日に祝言をあげるはずだったお前の姉もそんなことは承知の上で鬼からお前を隠して守っているんだ、他の誰でもないお前が…お前の姉を冒瀆するな！」

「あなたは絶対死んじゃダメ、お姉さんが命をかけて繋いでくれた命を、託された未来、そこに待ち受ける運命へと」

「お前も繋ぐんだ！義勇！」

思い出した。俺は両頬を張り飛ばされた衝撃と痛みが鮮やかに蘇る。なぜ忘れていたんだ？ 錆兎と真菰のあのやり取り、大事なことだろう、思い出したくなかった。涙が止まらなくなるから、思い出すと悲しすぎて何も出来なくなつたから薦子姉さん、錆兎、真菰、未熟でごめん：俺は、生きて未来へ繋ぐんだ…。

あれっ？

まずいなあ：ピクリとも動かなくなつたぞ、どうしよう、酷いこと言っちゃつたかな、義勇さん既に大分落ち込んでいた状態だったようだし、追いついてしまつたのかな？

「炭治郎、ここは私にいい考えがあるの、私が前にやった事があつてそれを提案すればいいじゃない」

「どういうことですか？何を提案すればいいんですか」

俺は智溜乃さんから話をコソコソとする。

「炭治郎、俺も明日から始まる柱稽古に参加する。だから、それで…」

「義勇さん、ざるそば早食い勝負しませんか？」

俺がそれを提案すると義勇さんは少し震える。

「なぜわかつた、俺が今、そばを食いたいということを」

「実はですね、さつきまで回つた場所に共通点があつて、俺がよく行く水雉屋という屋台を探してゐるって気づいたからです」

「炭治郎、今その屋台はどこにある」

「前の吉原での戦いでそこのお姉さんが両腕を失つてしまつて、今は、お店を運営してますよ。鰻と蕎麦の水雉という京橋のお店を」

「それじゃあそこに行くか」

義勇さんが食べていたものが全て蕎麦の時点で気づいていた。

そして俺は、水雉で早食い勝負に、勝つた。

「明日からの柱稽古に参加しますよね！義勇さん」

「俺は参加する。だからお前は早く怪我を治してから参加しろ」

「はい！」

こうして俺は富岡さんを説得できた。

しのぶの作戦とそれぞれの動向

私は今、師範を探している。

最近どこにいるんだろう。永遠屋敷の方にいるのかな？

それとも…

私は仏壇の前で座る師範を見つける。

師範は深呼吸をしていた。

「師範、お戻りでしたか。師範の稽古が楽しみです。柱稽古で隊士にしっかりと指導する師範、その姿を見てみたいです」

私は師範の姿を思う。

だが、師範からは思いもよらないことが告げられる。

「あのね、カナヲ、私は今回の柱稽古には参加できません」

「えっ…ど、どうしてですか？私は師範の稽古をより深く受けたくてきいたのですが」

私がそういうと師範は微笑む。

「カナヲも随分自分の気持ち素直に言えるようになりましたね。…いい兆しです。それに、もう硬貨を使っていないところを見てきたあたり、やはり良い頃合いだわ」

「師範…」

そういうと私は師範に手を引かれて永遠屋敷に連れていかれる。

「師範、どういうことですか？」

「あなたには話さなければなりませんね。私の実の姉、胡蝶カナエを殺したその鬼を殺すための計画について話しておきましょう」

「え、どういうことですか？カナエ姉さんを殺した鬼がいるなんて」

「ええ、私の姉、胡蝶カナエは万世極楽教の教祖、万世童磨によって殺された。そう、明治四十五年の一月、こいしちゃんと共に初めて万世極楽教の潜入をした時。こいしちゃんを庇ったカナエ姉さんは、童磨の血鬼術により…、私は近くで任務を終わらせていた時に報せを受けて駆けつけると既にカナエ姉さんは、両足首がなく、右眼も落ちていた。でも、カナエ姉さんはそれでも鬼と人間が仲良くなれることがある。そう言って死にました」

「じゃあ、その童磨という鬼を倒せばいいのね。でも倒し方は」

「そう急がなくても話しますよ。童磨は氷を扱う鬼、色々と煩わしい術を使います。ですがもし、童磨という鬼と戦うことになった場合、私はカナヲとは一緒には戦えない」

「どうしてですか！私と一緒に戦えばきつと勝て…」

「その甘い考えは今すぐ捨てなさい」

それを言われて私は引き締まった。

「上弦の強さは少なくとも柱3人分、いや、童磨は既に上弦の弐、下手をすれば柱の6人分の強さに匹敵します。しかし、隊士たちからの情報によれば、女を喰うことに異様な執着があり、意地汚らしい、それに身体能力が非常に高い、奴は優秀な肉体を持つ柱、それに、女であればまず喰うでしょう」

嫌だ、師範が喰われるところを見たくない。

「それに、私の体は鬼が天敵とする、高濃度の藤の花の毒が血液から内臓、爪の先や髪の毛の先まで回っている状態です。ですが、ここまで回るのに、最低でも一年は藤の花を摂取しなければならぬ、まず今から摂取し始めてもまず間に合わない」

「師範、もしかして…」

「あー、アンタ、さつきから聞いてたら自分自身を毒玉として喰われる気満々に聞こえるんだけどさあ、じゃあなんで私を呼んだんだよ。説明して欲しいねえ」

そういうと部屋の襖が開く。

「に…にとりさん!?!」

「お、カナヲ！久しいねえ、私の打った刀、結構大事に使ってるって聞いているよ！一年以上刀を刃こぼれもせずに使ってくれたのはカナヲと善逸くらいだよ」

「ちよつと、重要な話なのに入って来ないでください」

「おいおい、同期なんだしきあ、少しは優しくしてよ。それにきあ、本当は死にたくないんだろ?」

そういうと師範は黙る。

「実はなあ、藤の花の毒が回ってるのはほんとだけど、それはしのぶだ

「けじゃあないんだよ」

「どういうことですか？にとりさん」

「カナヲも知ってるよ、というか最近まで一緒に屋敷で暮らしてたじゃねえか、最近見ないかもしれないけど」

「もしかして…」

「そう、因幡鈴仙。彼女もだけど、藤の花の毒の被験者なのさ。それもこれも八意さんとしてのぶは藤の花の毒の研究を八意さんに弟子入りした時からずーっとね」

「じゃあ、師範が喰われないで済む方法はあるんですか？」

「そういうと師範が口を開く。」

「ええ、たった一つだけ方法があります。それは……」

「私はそれを聞いて絶句する。」

「そんな方法でなければならぬ。」

「でも、師範が生き残る術はそれしかない。」

「だから私、鉄河城にとりが呼ばれたわけだ。それに、既に打倒童磨についての作戦は既に動いている。おそらく、総力戦が行われる時にそれが実を結ぶはずだ。目に浮かぶぜ！やつが苦しみながら死ぬ姿が」

「にとりさん、あまり話しすぎないでください。それに、私はもう2つの手も打ってるんですからね」

「こんばんは、珠世さん、物騒ですよ。夜に窓を開け放っておくのはでも今日は美しい月が映える夜だ。初めまして、吾輩は産屋敷耀哉の使いの者です。いやあしかし隠れるのがお上手ですな。あなたを見つける間に産屋敷様は動けなくなってしまうました」

「どうしてここがわかったのですか？」

「人間の脈と炭治郎たちが血を送っていた動物の足跡です。貴方が浅草の後に買ったこの家の元の持ち主を特定し、それから昼間のうちに愈史郎くんやパチュリーちゃんの視覚や動物の動向を把握してました」

「凄まじい努力ですね。何故そこまで出来るんですか」

「いえいえ、吾輩は訓練を受けているとはいえただの鴉、そもそもそこまで警戒はされない、貴女方に一切の危害を加えるつもりは無いので安心して欲しい」

「では何の御用でしょうか」

「ふむ、不信心でいっぱいの様子も無理はない。吾輩が、炭治郎やしのぶのように貴女から信用を得るのは難しいですね、やはり…」

「愈史郎とパチュリーは……?」

「愈史郎くんもパチュリーちゃんも心配いりませんよ。パチュリーちゃんはそのドアの前でこちらを覗いてますし、愈史郎くんは三階から降りて来ようとしてますよ。ほらものすごい足音が聞こえますし」

「パチュリー、中に入りなさい。覗き見は良くないですよ」

「失礼しました。珠世様、その鴉、凄いですね。私たちの使い獣よりも優秀じゃないですかね」

「では用件を話しましょうか、鬼殺隊にも鬼の体と薬学、毒学に精通しているのは知ってますね」

「ええ、炭治郎からの手紙でしのぶという隊士が応援してくれるというの聞きつけてます」

「ですが、鬼殺隊にはもつと、優秀な人がいるんです。その人と合わせて3人で禰豆子の変貌も含めて一緒に調べて頂きたい。鬼舞辻無惨、及びもう1人の謎の鬼の始祖を合わせて倒すために協力しませんか? 産屋敷邸にいらしてください。設備については最新式のものを既に用意しております」

「どういうことです。鬼である私を鬼殺隊の本拠地へ?!」

「珠世さんはある時を境に血の検体数が激増したのはご存知ですか?」

「ええ、私が鬼の始祖が他にもいるという話を炭治郎に伝えたあとすぐですね」

「実は鬼殺隊には珠世さんには渡せない程の雑魚鬼の血の検体もご用意しております。だからこそ、より深く研究できます。安心して下さい。では、私は失礼します」

「珠世様！何があつたのですか？」

「愈史郎、パチュリー、今から産屋敷邸へと向かいます。ここからは三里半程で着くと思います。直ちに検体と道具の準備を」

「わかりました！珠世様のためなら」

珠世様は翌日の柱稽古の日に合わせて来て下さる。

そして。

「あら、童磨様、何を思い耽っているんですか？」

「おう、実はね、ついにこの万世極楽教の信者の数が一人になったんだよ」

「おめでとうございます。私も童磨様とその時を迎え入れられて本当に良かったです」

「そうだね、君が考えた案によつて万世極楽教はここまで大きくなった、それに、これだけの信者がいれば、神様も認めてくれると思う。信者がみんな集まれば神さえも超えることが出来る。そして極楽浄土に新たな世界を作ろう」

「そのお考えは素晴らしいですね」

「そうだよ、あと実は俺は鬼なんだよ」

「そうなんですか!?!童磨様が鬼だなんて」

「鬼なんだよ、しかも、俺は上弦の参、つまり十二鬼月の中でも三番目に強いんだよ。それに、このことを教えられるのは、特別だからさ、だから君は特別に最後まで食べない。そう、僕は君たちを食べて、最後の戦いをして、勝つて、更なる未来の人々が極楽に行けるように努める。そう思ってるんだ」

「素晴らしいお考えですね。つまり、私は、最後まで食べられないんですね」

「ここまで貢献してくれた君だからこそ、僕は最後に食べる。ありがとう鈴仙」

「いえいえ、私は童磨様のために行動しただけです」

「カナヲ、この作戦を私に選ばせるためにも、明日からの柱稽古、カナヲは8人の試練を突破しなさい！そう、私はあなたの事を信じているから」

「はい！師範、絶対に応えてみせます！」

「じゃあ、カナヲ、これが最終決戦の前の最後の私がカナヲに与える試練だからね。絶対やり遂げること」

「はい！」

私は明日からの柱稽古で必ず師範に認められる隊士となって帰ってくる。そう心に決めた。

柱たちの条件と4つの試練

俺はやっと、柱稽古への参加が認められた。

義勇さんの説得もあって少し伸びちやっただけど、一週間遅れで俺は柱稽古に参加した。

まず最初の試練は、腕鳴らしや足慣らしではなく、とにかく忍耐力をつけることだった。

「おいおい、お前ら怯えてんじやねえぞ！火が近くにあるからって火の粉を避けるようなビビリじゃダメだ！そんなんじやいつまで経っても他の柱への訓練さえ出来ないぞ！それに、お前らは痛みにさえ臆病なのか？そんな雑魚で生き残れるのか？」

最初の試練は妹紅さんによる護摩業、そして、

「てめえら、足の裏までしつかり踏みしめろ！その程度の痛みで耐えられないようじゃ、鬼に手足を食われたりする痛みなんか耐えられねえぞ！」

岩を砕いたかのような尖った石が敷き詰められた石畳の上を何度も往復する。御百度参りだった。

これは本当に足が痛い。でも、最初の試練のおかげか、すぐにでも終わると言われていた。

「よし、炭治郎、お前は我慢強い。そして、この試練を一日で終わらせた。これが出来ない隊士にはつくづく情けないと思うよ」

「妹紅さんも大変ですね。俺が我慢できたのは今までの戦いの成果かもしれない」

「そうだ、この試練は9割以上が突破できることだ。誰だつてできる序の口だ。よし、炭治郎、次は宇髄さんの試練だ！頑張つてこい！」
俺は次へと向かった。

「よお！久しいな！お前ついに上弦を倒したんだつてな、それに、五体満足とはすげえやつだ！ここで鈍りきった体を存分に叩き起しな！」

「はい！頑張ります！」

2つ目の試練は基礎体力向上、宇髄さんに言い渡された条件に見合ったものをすればいい。

その条件は、

川の流りに逆らい船を漕ぐ。

足に錘をつけて、九十九里浜の砂上を走る。

温泉掘りや水道作りをする。

という腕や足腰を鍛えるものが多かった。

これにより、俺は流れを読む力、そして透き通る世界を完全に会得した。

「よし、お前すげえな、歴代の隊士でもかなり速い部類だよ。それに、この試練で1番速かった伊之助の次くらいかな、それに、お前の同期は全員速い部類だったから同期も合わせてお前らすげえよ」

「ありがとうございますー！」

「じゃあ次は時透のところだ！次は高速移動の稽古だ。あいつは結構厳しいからな！気をつけろよ！」

「はい！わかりました！では！」

わずか6日でこの条件に応えた。

そして第3の試練、高速移動。

「炭治郎、あの時より随分速くなってる。君たちの同期も含めて優秀な隊士が見れるのは嬉しいよ」

この試練を乗り越えられるかどうかで半分の隊士が分かれたれる境界線だ。当然、妹紅さんのところや宇髄さんのところよりも遥かに壁が高く。現に、ここで何日も足止めになる隊士が続出していた。

「あの隊士速すぎない？」

「霞柱のあの高速移動を見るので精一杯の俺達には何が何だか」

「それに、霞柱を本気にさせるあたり、凄いとしか言えない」

何日もここで足止めされる隊士からはそう言われていた。

「炭治郎！俺の本気の速さに太刀打ちできるようになるなんて！それに、筋肉の弛緩と緊張の切り替えもかなり滑らかだ！それに、見る限り体力もかなり保てて疲れなくなってきた。ほら、汗も一切流さずに僕と渡り合えるのはなかなかないよ。それに、足腰の動きも連動しててバッチリだ！」

俺はそこまで強くなっていたのか、実感がより湧いて自信に繋がっ

ている。

「俺を本気にさせたのは伊之助、妖夢、咲夜、カナヲの4人かな。それに、善逸とかいう隊士には俺が初めて隊士相手に危機感を感じたよ。何あの強さ、俺が知りたいくらいだよ。本当に炭治郎の同期には驚かされるばかりだよ。じゃあ次の柱のところに行つていいよ！」

その時の時透さんはものすごく笑顔でものすごく心地よく喋っていた。

「もういいの？四日しか経つてないよ」

「だって炭治郎は対応力がすごいし、全部できてるもん」

「時透さん、俺達も出来てますかね……」

「何言ってるの？君たちは駄目だよ。それに、俺で止まってる時点で自分が物覚えが悪いことを自覚しようよ。それに体にも染み込んでないから出来ないんだよ。素振りが終わったら打ち込み台が壊れるまで打ち込み稽古しなよ」

その時、俺は時透さんの刀鍛冶の里で会った時のことを思い出した。

落差凄すぎない？

そして第4の試練へと向かう。

次は甘露寺さんか、なんだろう、大食いだったら止まっちゃうかもしれない。

そう思い、俺は門を通る。

すると、途端に甘すぎる臭いがした。

「あ！炭治郎くん！久しぶり！元気だったー？」

「ご無沙汰してます！お元気そうでよかったです！」

「養蜂と製糖をしてらっしゃるんですか？蜂蜜とサトウキビの香りがあります」

「あつ！わかつちやった？そうなのよー！巣蜜を発酵させて焼いた甘いパンにかけて食べると美味しいのよー！それに、バターを合わせるとものすごく美味しいの！それに、甘みもより深みが出て、もう最高！それに、しのぶさんのところから頂いた花紅茶も入れてケーキや

カステラ、それに、タルトも挑戦したからぜひご賞味あれ！」

カステラはわかるけどケーキ？バター？タルト？何だか聞きなれない言葉がずらりと並んでた。

だが、甘露寺さんの試練は甘くはなかった。

レオタードというような服を男女問わず着せられる。

これには思春期の隊士にとってはかなりの苦痛である。

何よりも、性欲というものの戦い、そして羞恥心との戦いが余儀なくされるからだ。

その格好で踊るといふこと、そしてそれが綺麗で、その舞が出来ないと、何度もやり直しになる。

甘露寺さんは何を指しているのかはわからない。

だが、彼女の本来の目的は少し違った。

「はい、脚を広げて、背中を反る！指先までしなやかにするといよいよ！」

甘露寺さんの試練は柔軟性が問われるものだった。

「痛い痛い!!無理無理無理————！」

他の隊士は地獄の柔軟を強いられていた。

何よりもその柔軟に求められるものが甘露寺さんが基本として行われているからだ。

その感覚的な物差しで量るせいで、何人もの隊士が腱を痛めたところを見てきた。

「ほら、伊之助くんみたいにもものすごい柔らかさが必要なの！伊之助くんはもつと柔らかかったのよ！」

甘露寺さんにとって伊之助は柔軟性の高すぎる体とその真っ直ぐな性格が滲み出ている舞が忘れられなかったようでよく引き合いに出していた。

「はい、炭治郎くん、凄いね！私くらいの柔軟な体になるなんて、対応力が素晴らしいわ！」

「ありがとうございます！おかげで体がものすごく動きやすいです！」

「じゃあ次は伊黒さんの所ね！伊黒さんはものすごく強い人だから気

を引き締めて頑張つてね!」

「はい!ありがとうございます!」

俺は3日で試練を突破した。

だが、俺にとつて1番キツかったのは何よりも食だった。

甘すぎる、濃すぎる、多すぎるの三重苦、これのせいで何人かの隊士は顔が丸くなっていた。

俺は太る前にこの試練を抜けられたことが本当に良かったと実感した。

「竈門炭治郎、俺はお前を待っていた」

「よろしくお願いしま...」

「黙れ、殺すぞ」

一言目からいきなり言われて俺は驚く。

「甘露寺からお前の話は聞いた。随分とまあ楽しく稽古をつけてもらったようだな、羨ましい...」

「ん?今から何か...」

「私語はどうでもいい、だが、俺は甘露寺のように甘くないからな?容赦はしないぞ!」

あれっ?初っ端からとてつもなく嫌われている気がする。

「そういえば、お前の同期も今ここにいる、白髪の女だったな。もうすぐ休憩を終えて戻つてくるところだ」

妖夢だ。今五つ目の試練で足止めをされているのかもしれない。

俺は伊黒さんの試練場を見ると絶句する。

「お前にはこの障害物を避けつつ太刀を振るつてもらう」

障害物?処刑場の間違いでは?

「この括られている人たちはなにか罪を犯したんですか?」

「まあそうだな...弱い罪、覚えない罪、手間を取らせる罪、イラつかせる罪、仲間を思いやらない罪という所だな」

その列挙された罪に俺はとんでもない試練を受けてしまったことに涙が出てくる。

「あつ炭治郎!お久しぶり!」

「妖夢!元気そうだな!」

「元氣じゃないですよ…私がここで少し手こずっている間に同期の私以外は既に六番目の試練に向かいましたからね。それに、伊黒さんの試練怖いよ、一瞬でも気を抜くと、みんな傷つけちゃうから」
「なるほどね」

「ここでの試練はまず1人で俺に掠る、または当てることが出来たら次は二人一組でお互いの間合いを確かめつつ、さらに俺を打ち負かすこと、それが条件だ」

俺はこの試練、長くなりそうな気がした。

太刀筋訓練と伊黒さんの過去

とてつもなく辛い試練だ。

使うのは木刀だとしても当たれば即大怪我、力加減を間違えればその人の人生さえも左右しかねない程の傷痕を残しかねない。

この可愛そうな隊士、200人の間を縫って伊黒さんの攻撃が来る。

それが、今までとは段違いにやばい。

その攻撃は、まるで蛇のようにグネグネと曲がり獲物に噛み付くようだ。

それに加えて隊士達には一切掠らない動き、これはもはや伊黒さんくらいまでの太刀筋は難しいかもしれない。

恐ろしい、それに、持っているのは同じ木刀なのにどうして曲がるんだ。

俺は何度も木刀を振る。

しかし、この異常なまでに細い隙間を狙おうとすると、仲間が涙を流して訴えてくる。

頼む。当てないでくれ！死にたくない！そう、何度も何度も訴えてくる。

今までにはない緊張感で手がブルブル震える。

この太刀筋は相当正確にやらないと被害者が増えるばかりでもはや試練所ではない。

だからこそ、俺はずっと観察した。

妖夢の太刀筋、伊黒さんの太刀筋、なにか癖がある。そこを伊黒さんは突いてくる。

妖夢の癖、そして伊黒さんの癖、そして俺の癖、そこを何度も何度も観察する。

自分の何度も頭で考える。

そして伊黒さんの突いてきそうな場所を探る。

そして伊黒さんの試練開始から4日目。

「そこだ！」

「甘い！」

俺は突いてきそうな場所を察する。

見えた！隙の糸！

「はうー！」

そこで一旦打ち合いが止まる。

そして伊黒さんは一息つく。

「だいぶ攻撃できるようになってきたじゃねえか」

「はい！伊黒さんの太刀筋を研究して、しっかり相手の弱点を見極められました」

「それに、これを見ろ」

俺は伊黒さんの指さすところを見ると、伊黒さんの羽織の裾が大きく切れていた。

「とりあえず、お前は一つ目を突破した。お前は自分を誉めろ」

俺は涙が出た。

「妖夢！やったよ！俺、伊黒さんに……」

「だが、まだ忘れてないか？ここでの条件は二つある。互いに連携をして、俺を打ち負かすという条件がまだ残ってる」

それを告げられた瞬間涙の意味が変わる。

まだ、終わってないんだ……。

俺はこれからの地獄のことが過り、ボロボロと泣いた。

「フン、その程度の動きで攻撃できると思うな」

俺は妖夢と2人で連携し、この狭い空間で伊黒さんを相手に戦っていた。

「相手はこの場所を一番熟知している訳ですから、その有利な所を埋めるところを見……キャツ」

「口でやるな、隙が見え見えだ」

伊黒さんは今までは全力ではなかったかのような程素速くなっている。

この速さについていく方法を考えなければ、お互いの動き、合図、それを相手により悟られずに。

俺は、目を薄める。

視力だけに頼るな、全感覚を研ぎ澄ませろ。

俺はとにかく、そうして何度も避ける。

そして、連携の試練3日目。

「フウウウウ」

「スウウウウ」

俺と妖夢は一切口をせず、とにかく全神経を研ぎ澄まし、伊黒さんの動きを把握する。

来る、その隙……今だ！

俺と妖夢は同時に木刀を突く。

すると、何かを感じる。

布？服か？だが何かが違う。

俺は目を見開く。

すると、そこには口が裂けた伊黒さんが目の前にいた。

「う……………」

「黙れ、黙らないと顎を握りつぶすぞ」

俺と妖夢は伊黒さんの言うことに従った。

そして、俺と妖夢は伊黒さんの部屋へと案内される。

「はあ、お前ら……………」

もしかして包帯を斬っちゃったことで怒ってます？いや怒ってますよね!?

「…だ…」

ちよつと聞こえずらかった。

「合格だ。それに、お前らを柱と同等と認めてもいい」

それを聞いた時、俺は目を丸くした。

「まさか俺の包帯を切るやつが現れるなんて思わなかったよ」

それはもう伊黒さんからは嬉しそうな臭いがした。

「伊黒さん？気になったんですけど、何故いつも包帯をしているんですか？」

妖夢!?それを聞いちゃダメな気がする。

「やはり気になったか、だが、絶対に他の奴らには話すなよ。この話を知っているのはお館様だけだからな」

それほどの話を甲隊士とはいえ、俺達に話すのはどういふ事なのか。

「俺は元々女ばかり生まれる家だった。男が生まれたのは三百七十五年ぶりだと言われた。そんな俺は生まれた時からずっと座敷牢で育てられた。俺の母や姉妹などの親戚は猫撫で声で気色悪いほど親切でとにかく毎日俺に食い物を大量に持ってきた。

だが、換気もままならない場所に充満した脂や乳の臭いには俺も吐き気を及ぼしていた。夜になり俺が眠ろうとすると、不気味に這い回る音が聞こえた。そして強烈な視線を感じた。粘りつくような視線、それも幾つもの。俺は全身から汗が噴き出し、音が止むまで全く動けなかった。

そして十二になった頃、初めて座敷牢から引きずり出された俺はものすごく大きな部屋へと案内された。そこは豪華とかどうかも分からなかった俺には分からなかった。だがそこにいたのは三体の下半身が蛇のような女の鬼達だった」

「ひいひい」

「妖夢、静かに」

「そう、俺の一族は蛇鬼達が交代交代で金持ちやら資産家やらを殺して強奪した金品で生計を立てていた非道の一族だった。そしてその鬼たちは一歳かそこらの赤ん坊が好物で、自分の産んだ赤ん坊や、資産家の妻を家畜みたいに産ませた子を贅として捧げていたんだ。それに、俺は珍しく生まれた男でこのように色違いの目をしていたために、蛇鬼共に気に入られて十五になるまで熟成して丸々肥えるまで生かされる予定だったんだとか」

「妖夢？大丈夫か？」

「うん……」

「俺はその時に蛇鬼に爪で口元を切り裂かれてそこから垂れる血を盃に溜めて飲んだ。そして座敷牢にあと3年もここには居たくないと思っていた俺はとにかく半年間にげることに、そして生きることだけを考えていた。」

食事に使われている金属の箸で壁を削ったり、食事の椀で穴を掘ったりもした。その時は毎日毎日神経を擦り減らし続けた。

その時、壁の穴から迷い込んできたこの鏝丸だけが信用出来る生き物だった。そして半年程の時間をかけて、俺は逃げ出すことが出来た」

「妖夢、大丈夫？手ぬぐい貸す？」

「ありがとう…」

「そして俺は知ったんだ、この住んでいた場所、それにその外に出た先にも絶望しか無かったことを。」

俺の住んでいた場所は八丈島という火山島、そこは絶海の孤島だと言うことを思い知らされた。俺はその島の砂浜で追い詰められている時に、岩柱の悲鳴嶼さん、当時炎柱の煉獄楨寿郎さん、そして元鳴柱の堀川雷鼓によって助けられた。その後、生き残ったたった1人の妹に全力で罵られた。お前のせいで一族60人、私以外みんな殺されたと、とにかく俺は何十年もかけて償わなければならない怨みや憎しみを」

「そんなことあったんですね……」

「伊黒さん、そんな過去があったとは……私、伊黒さんに酷いこと言ってますみませんでした……」

「誰だって悲しい過去がある。俺はこの全ての罪を償いきって、自分が生きてて良かった人生に清算すると決めている」

「すみません、童貞で納豆みたいなやつだと言ってしまつて」

妖夢、それはちよつと酷いと思わないか？

「残念だったな、俺は童貞ではない、既に事は済ませてある。だからお前が童貞と罵ろうと俺には効かない。それに、納豆を悪口には使うな。俺はとろろ納豆が好きだからな」

色々とおつたが、伊黒さんの話が聞けた。

俺は伊黒さんとは苦労話ができるかもしれない。

伊黒さん、俺も変な目で見えてしまつてすみません！

こうして俺は次の試練へと向かった。

だが、そこではとんでもないことが行われていたとは俺は知らなかった。

玄弥と文の大作戦

俺は兄貴と仲直りがしたい。

幾度となく襲いかかる試練を、兄貴に仲直りしたい。

その思いだけできた。

そして第六の試練、その試練は、兄貴、不死川実弥の試練だ。

無限打ち込み稽古。

条件はたった一つ、打ち込み稽古の時間、1度も木刀から手を離さずに、風柱の打ち込みに一日耐え続けること。

だが、これがあまりにも厳しく、現在同期では遅れた炭治郎を除けば善逸、カナヲ、咲夜が今足止めをくらっている。

だが、そんなことは関係ない。

俺はとにかくどうやってたら仲直りが出来るかを考える。

「おつ、玄弥じゃないか？久しぶりだな？何してるんだ？」

「うるせえ、文さんには関係ねえ！」

「もしかしてさあ、兄と仲直りしたいんでしょ？」

完全に当たっていた。俺は一瞬思考が停止する。

「やっぱなあ、あたしにはわかるんだよ。凶星だね。わかるよお、仲直りをしたいって悩むの、あたしにはいくつか作戦があるの、玄弥はやる？」

文さんはそうやって色々と案を出してくれる。

それを実践することにした。

「てめえ、なかなかやるじゃねえか」

「はい、不死川さんの速さ、しっかり対応できるので」

「よし、休憩だ、15分休む。しっかり休むように」

「はい！」

カナヲとの打ち込みが終わり、休憩にはいる所を見る。

「師範はおはぎが好物でさ、特にお米が全部跡形もなくなったものに粒あんをまぶしたものじゃないと怒るからな」

俺はその裏で文さんに言われた通りのおはぎを作り、お茶を注ぐ。

「兄貴、おはぎとお茶を置いときます」

「俺に兄弟はいねえ、それに、お前が何故出してくる」

「文さん、上手くいったかな」

「まあいい感じだと思う」

第1の案、お茶出しで喜ばせよう。微妙。

「おい、誰だ！カブトムシ増やしやがったやつ！」

「あ、結構この辺り見つかるようで隊士がよく拾ってますね」

「だからって俺のところには置くんじゃねえ！」

「これはちよつとまづかったかもな」

「兄貴昔からカブトムシ好きだったから喜ぶと思ったんだけどなあ」

第2の案、カブトムシこっそり増やす。失敗

そして第3の案。

「ふうふう」

兄貴が風呂に向かうところだ。

俺は兄貴を追う。

脱衣場で俺と兄貴は服を脱ぎ、手拭いを片手に入る。

兄貴はまず最初に体に湯をかける。

そして体を洗う。

ここまでは文さんの言う通りだ。

「兄貴、いや、兄ちゃん、背中流そうか？」

「はあく、いいぜ」

俺は兄貴の背中を擦る。

かなり傷だらけに見える胸元や腕とは違い、背中にはほとんど傷がない。

やはり怪我が多いのは仕方ないか。

「いつまで擦ってたんだ。早くお湯かけろ」

俺は言われた通りお湯をかける。

「はあく」

兄貴は湯船に浸かり、手ぬぐいを頭に乘せて和む。

俺も湯船に入る。

「あいつら全然来ねえな、いつまで風呂に入らない気なんだ？」

それもそのはずだ、文さんのお膳立てのおかげで、今この風呂に入っているのは俺と兄貴だけ。

今頃文さんが第4の案の準備でもしてるんだと思う。

これは絶好の機会、ここで言わなければ。

「兄ちゃん、なんで俺の事を弟と見てくれないの？」

俺が質問をすると兄はビクツとする。

そこに数瞬の沈黙が流れ、兄貴がそれを破る。

「俺はなあ、お前には普通に暮らして欲しいんだ」

「ならなぜ俺を……」

「だからだ、俺みたいな鬼との運命に紐付けされたような血を持って生まれたからには鬼を倒すまでは断ち切れない。玄弥には早く結婚でもして子孫を残すために早く引退して欲しい。俺はずっと思ってたんだ」

そうだったんだ、だから俺の事を突き放していたのか。

「俺は既に鬼狩りとして柱にまでなっちまったら逃れられない。誰よりも鬼を斬るものは家族とかそういう考えをまず最初に捨てなきゃならねえ。そう、昔から柱はそうやって隊士たちを指導してきたんだ」

言われると複雑な気持ちになる。

「それにだな、俺は稀血の中の稀血でなあ、鬼が酪酊するんだよ。お前の母親と戦った時、それに気づいたんだ。だから、俺は鬼狩りになるしかないんじゃないか。そういうことが頭を駆け巡ったんだよ。そして鬼狩を探すためにあちこちを転々としていたら、助けられたんだ。鬼狩に」

兄貴は昔話を始める。

「俺が十四の時だ。鬼狩りを探しつつ、鬼を殺して回ってた頃、俺は糸野匡近という隊士に育手を紹介された。そしてそこに、数日後に入門したのが文なんだよ。あいつは前からお喋りでさあ、とにかく口だけが多い、だが、あいつの作る料理だけは異常に美味えんだよ、特におはぎとかなんか食感がやさしくてさあ、あれ以来おはぎが好物なんだよ」

俺は兄貴の話にずっとのめり込む。

「そして俺は一年くらいして鬼殺隊に入った。それからは糸野との競り合いだったよ。とにかくそうやってお互い高めあった。俺の試練だって考えたのは糸野との打ち込みがそのまま継いだ形だしな。だが、今から4年前、俺は下弦の壱、姑獲鳥という鬼と戦ったんだ。その時、俺は匡近と共闘したんだ。だが、その戦いで、匡近は死に、俺は生き残っちまい、柱になったんだ。だが俺みたいなやつが柱になる資格なんかねえ。それに、俺よりも強く優しいあいつが死んだのが悔しくてなあ、俺はいつも来ている羽織は裏地があいつの羽織の紋が入ってる」

「ちなみにだがよ、匡近と文は親戚でなあ、確かはどこだったはず……どうした？なんか変だぞ？」

俺は逆上せたかのように体があつい。

「大丈夫か？おーい？」

「ごめん、兄ちゃんの話聞き入っちゃって」

「まあいい、ここは風呂だ。何も衝立なんかねえ、裸の付き合いだからなんでもいい」

「兄ちゃん」

「なんだ」

「ごめんなさい！俺、お袋が死んだ時、人殺しって言っちゃって、兄ちゃんを傷つけてしまったと思ってずっと思ってた。それが言いたくて俺は鬼殺隊に入ったんだ。兄ちゃんに謝りたい！その一心で」

俺はそういうことを言ったらぶっ飛ばされる。おれは身構える。

だが兄ちゃんは俺の頭を撫でる。

「いいよ。そんなこと、俺は許してる、俺が突き放していてもお前は鬼殺隊に入った。それだけでもお前は俺の自慢の弟だよ」

嬉しかった。とにかく、自分のことを弟と久々に呼んでくれたことが。

「俺、いま甲まで上がったんだ。呼吸も使えない隊士でもここまで来れた。あとは柱になるために必要なことを全て覚える。そして、いつか俺は兄ちゃんと柱同士として任務につけるよう頑張るから」

「そのやる気だ。玄弥、お前は柱だ。だが俺だけが認める柱だな」

「兄ちゃん……」

すると、外から物音がする。

兄ちゃんは桶で湯を掬い、窓の外へ投げる。

「うわあちちちちち」

「あついあつい！」

「痛てえー」

「てめえら！コソコソと聞き耳立てんじやねえ！それかお前らは明日の打ち込み、2倍に増やすかオラァ！」

外から悲鳴が聞こえる。

「文！お前が全部仕組んだこと、俺は全部知ってるからな！それに、お前は既に俺の試練は合格してるだろうが！なんで俺の屋敷にお前がいるんだよ！」

文さん！やばいよ！マジで逃げて！

「すみません、最後の試練があまりに難しくくて、それに、玄弥がとにかく仲直りしたそうだったので私が全て仕組みました」

文さんは土下座をしている。

「ありがとうよお前が場を立ててくれた事は許す。だがカブトムシの幼虫増やすとかふざけんよ！俺が育てていたのが分からなくなるじやねえか！」

文さんとはにかく謝り続けていた。

そんな時、文さんがとんでもないことを言ってしまう。

「玄弥は危機に瀕した時に鬼を食ったりなどして生き延びてました！この情報で免罪符になるとは思いますが申し訳ございません！」

いやいや、それ言っちゃう!?俺は兄貴だけには絶対に知られたくなかった。

「そんなことしてる隊士、玄弥だけじゃねえぜ？永遠屋敷の鈴仙や前回の藤襲山の選別にいた新人でもいたぜ！だからそんな情報なんかで俺が喜ぶと思ったか？」

マジで!?俺以外にもいたの？それじゃあ俺は全くの無能なのか？

それで甲までしまった自分を後悔する。

「まあ奴らは土壇場で一体か2体しか食ってねえけど」

それなら良かった。俺みたいにはぼ毎回鬼を食うことは無さそうだった。良かった。

そして、翌日。

「不死川さんの稽古場どこだろう。道が複雑で目が回りそうだ」

炭治郎は兄貴の稽古を受けに来ようとしていた。

不死川さんと花柱を継ぎたい隊士たち

「不死川さんの道場つてもうすぐかな？」

「迷イ過ギ！右二曲ガレバスグ！」

俺は鴉に案内されながら不死川さんの道場へと向かっていた。すると、道の端で行き倒れている人を見つける。

近寄ってみると突然俺に抱きついてきた。

「うわああああああ！善逸！どうしたんだ！」

「助けてくれええええ炭治郎炭治郎何卒！もう足が立たないんだ無理なんよ！やつとここまで逃げたんだ！地を這ってきたんだ！気配を消してヤモリのように！命に関わる！殺されるー！ー！ー！」

ものすごく怖がつているのはわかった。

すると、しがみつく後ろでもものすごい形相で腕を組む人が現れる。

そして、善逸の頭を掴む。

「選べえ、試練に戻るか俺に殺されるかあ」

「ギヤアアアアアアア」

善逸は汚い高音で叫び、俺にがちり掴まる。

「勘弁してえええええ！ギヤアアアアン」

「うるさい！静かにしろ！」

そう言つて思い切り善逸の首に手刀を食らわす。

善逸は舌を出しながら気絶する。

「運べ」

「あつはい」

不死川さんはものすごく怒りながら道場への方へ歩いていく。

「ごめんな善逸、一緒に頑張ろうな。」

「ご無沙汰しています。今日から訓練に参加させてもらいます。よろしくお願ひします！」

「調子乗んなよお、俺はてめえを認めてねえからなあ」

「全然大丈夫です！俺も貴方を認めてないので！禰豆子を十度も刺したんで！」

俺はそう言い切り、スタスタの善逸を背負いながら道場へと向かつ

た。

「いい度胸だ……思いきり扱いてやるからな」

不死川さんの訓練は善逸がああなるのもわかるキツさだった。

とにかく不死川さんに斬りかかっていくという単純な打ち込み稽古だったが、反吐をぶちまけて、失禁、脱糞、そして失神するまでがほぼ一区切りでそれまで休憩は夜眠る時しかない。

伊黒さんですら1時間半と30分の組み合わせで休憩もしつかりくれた。

そして善逸が目覚めると親の仇の如く俺を何度も責めた。ごめenne 善逸。

そして不死川さんは特に俺への当たりが強かった。

一瞬でも気を抜いたら大怪我して治療に逆戻りだ。

その治療が必要な人々を伊黒さんのところに送り付け、そして伊黒さんは木に括り付ける。まさに2人合わせての地獄の試練だった。

「何とか……失神1回で済んだ……」

だが、初日でこれはまずい。全身ボコボコで他人のゲロまみれ。心折れそうだな。

すると、女性隊士のいる部屋から喧嘩の声が聞こえる。

「私が柱になるのよ！とにかく！私は柱の妹！だから私が花柱になるの！」

「私は元柱の育手の弟子です。私が柱になるんです」

その声はカナヲと咲夜、同じような技を使うから仲がいいのかなあと思っっていたけど違うのか。

その部屋の近くで死んだフリをする善逸。

俺は善逸を抱き起こす。

「善逸、どうしたんだ？」

「炭治郎……俺が……2人とも花の呼吸の使うから気になって2人に話しかけたら喧嘩になっちゃって……俺……思いきりぶん殴られた……」

こいつが火種の原因か。

俺は置いて立ち去ろうとする。

「炭治郎！待ってよ！2人は炭治郎のことも争ってたんだよ！だから炭治郎が仲裁しないとだめだよ！」

なんか面倒事に巻き込まれた気がする。

俺はカナヲと咲夜のいる部屋に入る。

「私は91体倒した。」

「私なんか上弦と戦ってるんですよ！」

2人はとにかく言い争いをしている。

そしてそのまわりには喧嘩を止めようと近づいたのかスケベでも狙おうとしかのかわからない男性隊士の山が築かれていた。

「ちよつと、喧嘩はやめようよ」

俺が喧嘩を止めに入るとぴたつと2人が止まる。

「ちよつと炭治郎、今はこの場から離れて」

「炭治郎さんは今ここに来てはいけませんよ」

ものすごい喧嘩の矛先を向けられそうな臭いがしたので俺は引き下がる。

そして俺が2人の喧嘩をどうしようか考えながら、正座をしていると。

ものすごい弾ける音がした。

そこに立つのは不死川さん。

2人の頬を平手打ちし、2人を倒れさせた。

「てめえら、何喧嘩してるんだよ。女の争いとかそういうことする暇があつたら俺に何度も打ち込みしろよ。それとも、俺に殺されてえのか？」

2人はその気迫に押されて震える。

「それに、そろそろ飯だ。早く食って早く寝ろ。寝ちまえば喧嘩をする気も起きなくなる」

不死川さんってこんな人だったっけ？

俺はちよつと違和感を覚える。

「あら、2人とも、何かあったの？」

そこに現れるの緑色の髪の毛の女性だった。

「し、師匠！何故ここに!？」

咲夜は何故か声を発する。

「あら、咲夜。それに、カナヲちゃん？2人とも喧嘩は良くないよ」
緑色の髪の毛の女性は咲夜の師匠のようだ。

「それに、風柱が心配してさあ、私のところに相談に来てさあ、そしてこちらから来てみたら既に時遅しだったわね」

「ああ、すまねえ」

不死川さんが謝っている。

「あつ、私は風見幽香、元花柱で胡蝶カナエの前にいた柱。さすがに私
のこと知ってる人はここにはいないか」

ものすごく美しいがなにか血のような臭いを感じる。

「とにかくお前ら、俺の試練の最中は喧嘩は辞めるように」

そう言っつて不死川さんと風見さんは2人で飯のところへいった。

それ以降、2人は喧嘩はしなかった、だが、ものすごく触れたら喧嘩になりそうな雰囲気は感じた。

そして5日目、

「よし、炭治郎、善逸、咲夜、カナヲ、妖夢、5人は試練合格だ。次は
一筋縄ではいかねえから気をつけろよ」

そういわれ、それぞれが色々な感情を発露する。

不死川さんは俺に近づくと耳元で囁く。

「お前は柱の試練としての合格だからな。俺自身はお前のことを認め
てねえからな」

「俺も認めてませんので。妹に謝るまでは」

俺たちは5人は次の場所へと向かう。

あと2つ、ここを乗り切れるのかなあ。

岩柱さんの試練と同期の集合

岩柱の修行場まで歩く俺たち、

とにかく突破者が少なく、情報がほとんどない。

どんな修行なのか俺たちは歩きながら話す。

とにかく仲が悪いカナヲと咲夜だが移動時間が長くなっていく事にどんどん疲れて寄りかかっっていく。

そして善逸が泣き言を言ってくる。

「まだ山奥なの!?!岩柱の家馬鹿じゃないの!?!」

「この辺りは既に茨城の山奥ですからね」

「本当にこんな山奥なんでしょうか?岩柱さんの家は」

「岩柱さんの屋敷は甘露寺さんの屋敷からすぐだからここじゃないよ」

「え?じゃあわざわざこんな山奥の修行場まで通ってるの?どんな化け物だよ岩柱は!?!」

山の奥まで進むと水の音がする。

「はああああ、滝だ!やつと水が飲める!」

善逸は全力で走り、滝の近くの水を飲む。

「ぶはあ、美味しい」

俺たちは追いつくと絶句する。

「如是我聞、一事仏在、舎衛国、祇樹給孤独園」

滝に打たれる5人の隊士が合掌しながら経を唱えている。

「「「うわああああああああ!」」」」

俺たちはあまりの状態に驚き叫ぶ。

「心頭滅却すれば……火もまた涼し……ようこそ……我が修行場……」

袋田の滝へ……」

悲鳴嶼さんは熱い焼石の上に両足を乗せながら肩の上に丸太六本、それに、岩を括りつけながら中腰で合掌していた。

その様はまさに不動明王のようだ。

「最も重要なのは体の中心……足腰である。強靱な足腰で体を安定させることは正確な攻撃と崩れぬ防御へと繋がる」

俺は固まってしまっている伊之助を滝から救い出す。

「伊之助が、やばい、死にかけている！」

「伊之助！しっかりしろー！」

そこに駆け寄るのはアリスだった。

「アリス！2人でマッサージだ！」

伊之助をアリスと俺で蘇生マッサージをする。

伊之助はすぐに息を吹き返してくれたから良かった。

アリスを見ると黒装束が、張り付いている。

なるほど、これは善逸が喜ぶわ。

「はー！ー！ー！」

俺は滝に打たれる。

ものすごく冷たい。その上に滝が痛い。

念仏は集中をするためと意識があることを伝えるために唱えるそうです。

「滝に打たれるだけなのに本当にきついですね。高い位置から落ちてくる水があんなに重いなんて……体の力を一瞬でも抜いたら首や肩が折れそうだし……」

「いやいや……お前ら同期はみんなすげえよ……初日で滝修業できるようになったの夕方だったぜ……なかなか水に慣れなくて……とりあえず一時間滝に打たれ続けられるようになったから……俺はこれから丸太の訓練だ……」

答えてくれたのは那田蜘蛛山であった村田誠一さん……富岡さんの同期だとか……。

「すごいですね……村田さん」

「ここに十日いるからな……」

「みんな……ご飯の時間だ……」

「アイツすげえよ……玉ジャリジャリ大男」

「岩柱の悲鳴嶼さんな、変なアダ名つけちゃダメだよ」

「そうですよ！不死川さんに変なアダ名つけて怒られたのに懲りないの？」

「初めて会った時からビビッと来たぜ！間違いねえアイツ、鬼殺隊最

「強だ」

「あーやっぱりそうか」

「力の悲鳴嶼さん、技の八意さん、体力の宇髓さんで柱三強と呼ばれているからね」

「臭いは3人だけ全然違うんだよな、痣がもうでてたりするのかな？宇髓さんは出したくないから出てないのはわかってるけど」

「そりゃ出ててもおかしくねえ」

「いやー、魚うめえ、でも、甲隊士の話はなんかついていけない」

「そういえば、村田さんって階級どこですか？」

「俺？俺は乙」

意外と昇進してるじゃないですか。

「俺は信じないぜ、あのデカい人はきつと、自分もあんな岩一町も動かせねえよ、若手をいびつて楽しんでんだよ」

「いやいや、悲鳴嶼さんはあれよりも倍以上大きい岩を押してるそうだから、それに、この任務を他の甲隊士の女の子も押せているから」
「お前はなんで言われたことをすぐ信じるの？騙されてんだよ」

「いやいや……善逸も耳がいいんだから嘘ついてるかついてないかわらわいわかるだろ？それに、ちょうど悲鳴嶼さんとカナヲと咲夜が3人で岩を押してるし」

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

「うわあ〜」

「凄いなあ、みんな！俺もあんなふうになれるかな!？」

「ぎゃあああああ！」

善逸は泣きながら叫ぶ。

「よーし腹も膨れたし丸太担いで岩押してくるわ」

「いや、前向きすぎだろ！頑張らないと！」

それからわずか一日で滝修業と丸太担ぎの試練を終わらせる。

「はあ、これで残るはあとひとつ……」

「カナヲさんや咲夜さんには負けてられないですものね」

俺はあの二人のことを思い出す。

「負けないからね！」

「私が先に次へ行く！」

あ、完全に闘争心だけで終わらせたのか。

それにしても2人とも最後の試練に行ったのか。

今、同期で最後の試練に行ってるのは3人。

頑張らなくちやな。

「ぐおおおおお！ふんんんんんん！」

駄目だ、足の方が下がってしまう。完全に押し負けてる。

悲鳴嶼さんの試練は過酷だったけど何ひとつ強制じゃなくて、やり直したいと思っただらいつでも山をおりてもいいらしい。

俺は夜、みんなのご飯を作って食べさせていた。

「俺今回の訓練で気づいたわ、今の柱の継子に女の子しかいない理由」

「何ですか？」

「俺も何となくわかったわ」

「しんどすぎてみんな心がやられちゃうんだろ」

「ああ……他の隊士みたいに柱との違いに打ちのめされて心折れたりさ」

「こういうのを当然のようにこなしてきてんだから柱と女の子たちってすげえわ」

「そうですね……」

「ていうかめっちゃ上手くない？料理めっちゃうまいしよ」

「俺、炭焼き小屋の息子で元々母親と交代で料理作ってたんで料理得意です。料理は火加減から」

この後心が折れていく人々が続出し、今この試練を受けている人はほんのわずかになってしまった。

はあ、俺も追いつきたい。

悲鳴嶼さんの過去と反復動作

俺は焦っていた。

既に六日も経ち、アリスが次の試練に行く。

だが、俺は岩が動かず諦めそうになっていた。

「はあ〜」

長いため息を吐き天を仰ぐ。

今日も駄目だった……どうする？

鬼の動きが止まり1ヶ月、いつまで大人しくしてるかわからない。早く行かないと。

単純に筋力が足りないのかな、それともまた別に呼吸法がある？

これだけ訓練してるのにまだ痣を30分以上出し続けられない。

「お前の額の痣、かなり濃くなってないか？」

目の開くと玄弥の顔が近い！

「あつ玄弥！」

「大丈夫だったのか？今最後の試練なんだって？」

「ああ、今最後の試練がむずかしくてみんなで答えを探しているんだ」

「そうなんだ」

「まだ最後の試練を突破した人はいないぜ。それはそうとお前痣」

「あつ、痣濃くなってる？」

「ああ、かなり濃くなってる」

「誰にも言われなかったけどなあ」

「そりや毎日顔みりや変化がわからんだろ。それに、鏡持ってねえのか？後で貸してやろうか？」

「うん、ありがとう」

俺は玄弥に手鏡を渡され、鏡で額を確認する。

本当に濃くなってる。よかった。嬉しいぞ！

「そういえば岩の訓練してんだな、俺もやってるよ」

「いやあでも全然動かなくて、玄弥は動かせた？」

「動かせるよ。これより一回り大きいの」

え？もしかして、でも玄弥は呼吸が使えなかったはずじゃ……

「お前ら反復動作はやってんの？」

俺は首を傾げる。

「やってねえのか……まあ悲鳴嶋さんも教えるのは上手くねえからな、よく見て盗まねえと駄目だぞ。集中力を極限まで高めるために予め決めておいた動作をするんだ。俺の場合は念仏を唱える」

「あ、悲鳴嶋さんもやってる！」

「そうそう、南無南無言ってるだろ」

玄弥に教えてもらった反復動作というものは全ての感覚を一気に開く技だそうだ。

全集中とはまた異なるもので呼吸を使えない玄弥やにとりさんも反復動作はできる。

悲鳴嶋さんたちはこれを使う時は怒りや痛み、苦しみの記憶を思い出す。それにより心拍と体温を上昇させている。

色々話しているうちにももしかしたら俺の痣が出た状態はそれと同じなのではないかと指摘される。

だけど悲鳴嶋さんにも玄弥にもにとりさんにも痣はないから俺たち二人は首をひねった。

反復動作をすることによりいつでも一瞬で集中を極限までまで高められる。

痣が濃く出た状態をこれですつと続けられるようになるといいな。

俺の反復動作はまず大切な人の顔を思い浮かべること、それから、煉獄さんたちの言葉を思い出すこと。心を燃やせ、運命を変える。この流れで俺は極限まで集中を高める。

始めのうちは出来なかったけど、反復動作から全力を出す。何度も何度も、それを繰り返し返しているうちに体が覚え始める。反復動作から全力、この工程を

「ぐあああああ！」

「いったあああああ！炭治郎いったあああああ！」

「くそつ、負けたぜ！」

だがまだまだ……！一瞬で気を抜くと脱力して押し負ける！一秒で

も長く岩を押し続けるんだ。

腕だけじゃない。足腰で押す！上半身よりも下半身の方が筋肉量が多い！

俺が押し進める間に伊之助も追隨する。

「天ぷら！天ぷら！猪突猛進！」

そして伊之助に続き妖夢も

「白玉！豆大福！」

そして善逸も

「おっぱい！おしり！」

4人揃って岩を押し続ける。

そして20分押し続け、

「はあはあ」

全員一町動かせた！これで悲鳴嶼さんの試練は終わりだ！

俺たちは手を握ると全員倒れ込む。

脱水症状だ！急激に滝のように汗をかいて水を飲んでなかったから……

誰か……水を……

すると、大量の水がかけられる。

「あつ、悲鳴嶼さん……」

助かった！

「そなたたち、岩の試練も達成した。それに加えて、炭治郎、里での正しき行動、私は君を認める。君は刀鍛冶の里で里の人間の命をとにかく優先した」

「あ……それは……」

「恥じることは無い。君は剣士の鑑だ。自分の正しき行動を誇ると良い」

「いいえ、違います。決断したのはにとりさんで俺ではありません。俺は決断が出来ず危うく里の人が死ぬ所でした。認められては困ります。」

いつもどんな時も間違いのない道を進みたいと思っっていますが先のこととはわかりませんいつだって誰かが助けてくれて俺は結果間違

わずに済んでいるだけです。あの時も本当に危なかったんだ。だから俺のことを簡単に認めないでください。それに、水ありがとうございます。訓練も今日までありがとうございます！勉強になりました！」

そういうと俺は悲鳴嶋さんに頭を下げる。

「疑いは晴れた。誰がなんと言おうと私は君を認める。竈門炭治郎」

「ええ？わからない……どうしてですか？」

「私は昔、寺で身寄りのない子供たちを育てていた。皆、血の繋がりにそそりとこいし以外なかったが仲睦まじくお互いに助け合い、家族のように暮らしていた。私はずっとそのようにして生きていくつもりだった。ところが、ある夜、言いつけを守らず、日が暮れても寺に戻らなかった子供、そう、名は獺岳と言ったな。その子供が鬼と遭遇し、自分が助かるために寺にいた私と十一人の子供たちを鬼に喰わせると言ったのだ」

「獺岳……」

善逸は下を向いて怒りをじわりと出す。

「私の住んでいた地域では鬼の脅威の伝承が根強く残っており、夜は必ず藤の花や葛の花の香炉を焚いていた。その獺岳という子は香炉の火を全て水で消して始末し、寺の中へ鬼を招き入れた。」

寝込みだったため、すぐに6人が殺された。残った5人を何とか守ろうとしたが2人の子供たちは私の言うことを聞かなかった。当時私は食べるものも少なくかなり痩せ細っており気も弱く、大きな声を出したこともなかった。更には目も見えぬような大人は何の役にも立たないというあの子たちなりの判断だろう」

悲鳴嶋さん目が見えないのか……!?

「私の言うことを聞いてくれたのは、さとりとこいしの実の姉妹と沙代だけだった。3人は私の後ろに隠れた。他の2人の子供たちは私をあてにせず逃げ、暗闇の中で手足を引きちぎられ、喉を掻き切られて死んだ。私は、3人を何としても守らねばと思い戦った。生き物を殴る感触は地獄のようだった。あの気色の悪さを私は一生忘れない。生まれて初めて全身の力を込め振るった拳は自分でも恐ろしい威力

だった。鬼に襲われなければ死ぬまで私は自分が強いということを知らなかつた。私は夜が明けるまで鬼の頭を殴り潰し続けた。私はあの夜山ほどのものを失い、傷つき、命をかけて三人を守ったが、さとりとこいしは気絶していた。そこに駆けつけてきたもの達に沙代はこういった。あの人は化け物。みんなあの人がみんな殺した。怖い」

「そんな……恐ろしいめに遭い、混乱したのだろう、まだ四つの子供だ。無理もないこと……子供はそういう生き物だ。しかし私は、それでも沙代にだけは労って欲しかった。私の為に戦ってくれてありがとうと言って欲しかった。その一言があれば私は救われた。しかし子供はいつも自分のことで手一杯だ。鬼の屍は塵へと帰り子供たちの亡骸だけが残った。私は殺人の罪で投獄された。その後、さとりとこいしが近くの寺にいた白蓮さんに伝えて、お館様が救って下さらねば私は処刑されていた。それから私は本当に疑り深くなったように思う。君のことももちろん疑っていた。普段どれほど善良な人間であつても土壇場で本性が出る。しかし炭治郎、君は逃げず目を逸らさず、嘘をつかず素直でひたむきだった。簡単なことのようにだがどんな状況でもそうあるものはかなり少ない……君は特別な子供、大勢の人間を心の目で見てきた私が言うのだからこれは絶対だ。未来に不安があるのは誰しも同じ、君が道を間違えぬようこれからは私も手助けしよう」

「頑張ります……ありがとうございます」

俺は涙を流す。他の3人ももらい泣きをする。

すると、悲鳴嶼さんは俺の頭を撫でてくれた。

「私の試練は完了した……よくやり遂げたな……柱と同等として認めてもいい……」

その時妖夢はなにかを思い出す。

「あの、覚えてますか？ 私は8年ほど前、あなたに助けられた女の子です」

そう言うと悲鳴嶼さんは妖夢の頭を撫でる。

「覚えているとも、あの時の女の子か、母を鬼に喰われたものの、戻っ

て確認をする勇氣ある女の子。私はあの時、青山霊園の近くの寺を紹介したことも」

「あの時はありがとうございました！私はあなたがいなければこうやって鬼殺隊で再会も出来ませんでした」

「強くなったな、妖夢。柱として認めても良いほど……」

「炭治郎！妖夢！ずるいよ！あんなに誉められやがって！」

「そうだ！俺が親分なのに！」

「二人とも、あなたたちも柱から同等と認められてますよね。伊之助は、甘露寺さんと不死川さんに、善逸は、妹紅さんと甘露寺さんと伊黒さんに！」

「そうだったのか……ここにみんなは認められているんだな。」

「だって、伊黒さんの組み合わせにはイラツときたよ。俺は姉弟子とだよ？ 頭おかしいのか？」

「俺はカナヲとだぜ！まあ、殆どの俺がやってたけど」

「あの時は咲夜さんと玄弥の一組とものすごく競いあっていましたからね。伊黒さんが珍しく頭抱えてましたから」

「なんかわからなくもない。」

「次は最後の試練、さとりさんの試練だ。」

「玄弥からは答えを探しているとだけ情報が来てるが」

「何の修業なのかわからない。」

「俺はずっと考えていた。」

最後の試練と透き通る世界

「ついに来た！」

「ああ、最後の試練だ」

「俺はうずうずするぜ！」

「この試練を超えれば柱稽古も終わる」

俺たちはさとりさんの屋敷に着く。

「お邪魔します」

屋敷に俺たちは入る。

すると、そこには落ち込む人々が様々な状態でいた。

塞ぎ込むもの、諦めたかのように寝転がるもの、顔を下に向けて虚ろになるもの、頭を抱えるものなど、それを見てどれほど厳しいかがはつきりわかる。

どんな修業なのか、もしかすると俺達が今までやってきた訓練とは比べ物にならないほど厳しいのか、不安が伝播する。

「あ……みんな……ここまで来ちやったんだ……」

「どうせ私たちはこの試練は受からない」

「はあ……答えはどこなんだ」

「俺たちがわからないからこうしてさとりさんに答えを探して来いって言われるんだろ……」

その時、さとりさんがやってくる。

「あら、皆さん、こんにちは、もしかして最後の試練を受ける人達？」

「はいー」

「あつ、じゃあこっちに来て」

さとりさんに屋敷の奥へと案内される。

屋敷を奥に進む事に周りを見渡すが何の変哲もない普通の屋敷だ。仕掛けや罠があつてそれを襲ってくるのかと思つたが何も無かつた。

「はい、この部屋で私の試練を行うわ、一人ずつ入ること。それがこの試練での決まり事よ」

「じゃあ、まず……伊之助くん？入って」

「おっしやあ！俺が一番乗り！」

「ちよっ、張り切りすぎるんじゃないよ！」

俺たち3人はその間別室で待たされる。

そして30分後、伊之助が戻ってきた。

「伊之助！どうだった……か」

その姿は落ち込み、蝶屋敷で入院してすぐのような状態だった。

「ゴメンネ……俺……ヨワクテ……」

そういうと塞ぎ込んでしまう。

「じゃあ次、善逸くん」

「はい！俺はやってやる！とにかく、俺は合格するんだ！」

30分後、両頬が腫れ上がった状態で戻ってくる。

「さとりさん、やりすぎだろ……」

「はい、じゃあ、炭治郎くん」

ついに俺の番が回ってきたか、俺は覚悟を決める。

「失礼します」

俺は素晴らしい、部屋へと入る。

そこには、武器も何も無く、ただ広い部屋だった。

「さあ、座って」

「はいー」

俺はさとりさんの前に正座する。

「試練、始めるわ」

「はい……！」

「まず、あなたは、禰豆子ちゃんが本当に人間に戻れるという可能性はあるの？」

「あります！」

「どうして？」

「俺には珠代さん、しのぶさん、八意さんがついていきます。それに、今

3人は鬼から人間に戻るための薬を作っています」

「それは確実に言えるの？」

「いえ、わかりません、でも、俺なら完成すると信じています」

「わかったわ、次、あなたは、鬼殺隊に入ったあとの受けた任務の数は覚えてますか？」

「はい、20です」

「鬼を倒した数は？」

「確か、36体だったはずですよ」

「じゃあ次、鬼殺隊は何をする組織か、あなたの経験に基づいて答えて」

「はい、鬼殺隊は鬼を人から守る組織、そして、鬼にされてしまった人を救い、最期を迎えさせる組織です」

「なぜそう思ったの？」

「俺は鬼と戦い、そして鬼にされた人々が、涙を流しながら最期を迎えた所を幾度か見ました。鬼も人間だったこと、その人の生きる道を歪めてしまう。それが鬼の始祖、鬼舞辻無惨と、まだわからないもう1つの始祖だと思っています。だからこそ、鬼は悲しい生き物なんだと思います」

「なるほど、じゃあもし、鬼の始祖が人間の心を取り戻そうとしてたらどうするの?」

「その時は……わかりません。すみません」

俺は失敗したと思った。

わからないことは口にできない。

俺は嘘がつけないから。

「合格よー!」

その言葉を聞いた瞬間、俺は啞然とする。

「無理もないわ、なぜなら、あなたが初めての合格者だから」

「え? どういうことですか?」

「私の試練は、あなたは嘘をついているかを確認する試練なのよ。」

「どういうことですか?」

「鬼は嘘つきをする、そう思っていることが多い、でも、それは人間も

同じ、私利私欲のために動くのは人間だつてその心がある。自分自信に嘘をつきすぎると本当の自分を見失うから。でも、あなたは違う。まっすぐに嘘もつかない。その心を刃に鬼と戦うのよ」

「……」

「鬼を倒すのは日輪刀だけじゃない、倒したい、救いたい、その思い、つまり心がなければ、この先の戦いでも死ぬ。だからこそ私は質問したんです」

「え……」

「まあ、分からなくてもしようがないわ、でも、最後の試練、それは心の試練、あなたは心技体という言葉はご存知？」

「知らないです……」

「なら教えましょう。今までの試練というのは全て、技と体力が主とした訓練なのよ。つまり、根性論で出来ちゃうのよ。でも、心が噛み合わなければ本当の力を発揮できない。その心を強くすることも大事というわけ。私は心が読めるから、あなたの心も全て見えてました、だがここまでの心の鍛え方があなたほど出来ている人はいなかったのです」

「……なるほど……」

「そして炭治郎、あなたは答えというものを探している同期たちとあつたじゃない？」

「あ……はい、会いました」

「彼らは答えも見つけられず、ただ自分のやるべきことを見失つてるの。この1ヶ月、柱の試練で」

「それぞれが別の答えを持っている。だから、一度、答えを探しなさいって言っただけなのになぜあの子たちは柱の試練をしてる所を回り出したのかな？これが分からない」

うーん、そりや言われたらそうなりますよね。

「今、そうなるだろうなって思ったでしょ」

ビクッ

「やっぱりね。まあとりあえず合格。あなたは認めるわ。柱と同等として」

「あの、柱と同等として認めるっていうの、一体なんなんですか？」
「はあ、他の柱は一切話してないのね。既に定員なのよ。柱は11人までしかねない。そういう決まりだから、だからこそ、柱と同等の特別な隊士枠みたいなを作ろう、って話だったのよ。まさか誰にも伝わってないなんてね」

「あはは……」

「炭治郎、恐らく他の人も受かると思うから、ゆっくりと休みを取りなさい」

「はい！」

そしてそれから3日の間に、8人が合格した。

その全てが俺の同期だったというのはちよつと面白いと思った。

「はあ……みんなで第8の試練を考えろだつてさ」

「まさか、そのためのさとりさんの試練だったとは思いませんでしたね」

「自分で考えろつてーの！受かった甲隊士何人が集めて合格とか拍子抜けだ！」

「どうすればいいかなあ」

その時、俺は思いつく。

「刀鍛冶の里の時、俺は鬼と戦っている途中、鬼の体が透けて見えたんだよ」

「え？どういうこと？」

「ぎやああああ！何そのとんでもない話！」

「もしかすると、これが見えるかもしれない」

「それ？透き通る世界じゃね？」

「え？そんな技名なの？」

「ああ、悲鳴嶼さんが言つてた。正しい呼吸と動きを一本一本の血管にまで認識させる感覚なんだとさ」

「なるほど、それって玄弥は使えるの？」

「俺は使えないな、呼吸法が全く出来ないから」

「呼吸法使えねえのか？雑魚が！」

「は？ふざけんなよ猪頭」

そう言うとかナヲと咲夜が止めに入る。

「二人とも喧嘩はやめなさい」

「男どうしの喧嘩ほど見苦しいものは無い」

いや、あなたたちも相当喧嘩してましたよね……。

これにて第8の試練として透き通る世界をできるようになるという試練をみんなで決めた。

これは、鬼舞辻無惨が襲撃してくる11日前のことである。

無惨の過去と本当の目的

遡ること4月、私はとにかく嬉しくてしょうがなかった。

「ついに、ついに太陽を克服する鬼が現れた……！上弦が欠けてしまったが、それ以上の収穫だ！」

私の細胞を通じて見る事が出来る能力で半天狗の体越しに見えた。

禰豆子という特別な鬼が現れるまで私は1100年にも渡り探し続けた。

そして、現れた。

「あの娘の血を飲めば、恐らく、私は太陽の下で過ごせる鬼となる……」

長かった、私は全ての苦労が吹き飛ぶほど嬉しい。

私が鬼になったのは忘れもしない。弘仁の頃だ。

私を鬼にしたのは平安時代、腕の立つ素晴らしい医者だった。

私は当時、筋肉の衰えが尋常ではなく、今のままでは二十歳を超えることは不可能と言われていた。

だが私は少しでも生き永らえるように医者に懇願した。

「どうにか、どうにか私を、太陽の下で蹴鞠が出来て、人々に尽くせるようにしてください」

「君の病気は少し特殊だね、私でも実験的な薬しか用意出来ない。筋肉が衰える病気はまずわからない。だが私は君がこれ乗り越えられることに賭けている」

そう言ってくれた時は本当に嬉しかった。

だが、弘仁7年、既に体が衰え、息も苦しくなってきた頃、私はあまりにも苦心する医者のことを省みず、殺害した。

だが、その日処方された薬は時間が経つと、息が苦しくなくなってきた。

私は強靱な肉体を手に入れたような気がした。

筋肉は衰えなくなり、鍛えれば強くなれる。

それも無尽蔵に。

だが、私は外へ出ようとした瞬間に鏡に反射した太陽により、私は痛みを覚えた。

その痛みの場所を見ると、その部分が焼け爛れてしまっていた。日の光の下では歩けない。

その現実が私を襲った。

どうにかして日の光を浴びても生きていけるからだにはなれないか、そう考え続けたが道筋さえもわからなかった。

そして人の血肉が欲しいという衝動までもが襲ってくる。

私はそれを恐れていた、だが、私は耐えきれず、同じ家族を一人喰らってしまった。

するとどうだろう、体がより強くなったような気がした。

これが鬼の力か、私は人間に戻りたいという感覚はこの時に捨てた。

だが、太陽の下で過ごせるということが全くできていない。

だからこそ医者を作った薬の調合を調べ尽くした。

だが、まだ試作段階であり、青い彼岸花というものが多く使われているということしか記されていないかった。

だからこそその薬を完成させるためにも私は夜しか動けない体で幾年もの間、駆け回った。

だが、彼岸花は元々赤い、青い彼岸花というものの自体存在するのは危うい。だが、医者の記事したものには書かれている。

それを手がかりに私は太陽の下で歩ける体になるために青い彼岸花を探し続けた。

私が鬼となつてからは鬼を倒すための武士というものが出来、私は殺される訳には行かない。そうおもしろい、1人の武士に血を浴びせた。

すると、その武士は私と同じ鬼になった。

これか、鬼は増やせるのか。

それから私は鬼を増やし続けた。

そして鬼の中にもしかすると太陽を克服できる体質のものが現れるのではないか、私は考え続けた。

そして大正5年、鬼となり丸1100年でやつとか。

私は妻にも報告をした。

「妻よ、ついに太陽を克服したものが現れた！」

だが、返ってきた言葉は冷ややかだった。

「ふーん、ついにやったのね」

「なぜそんなに乗り気では無いのか」

「あなたは一番に太陽を克服したい。そう思っていたわね。それが実現したのは嬉しいことよね」

まるで他人事のようだった。

「なぜ喜ばない、お前も太陽の下で過ごすのが夢だったろう」

「私もそう思っているわ、だけどここまで増やした鬼も全員そうなるのにはもう少し時間がかかると思うのよ。それに、鬼を日本軍に売るという計画が完遂されるまでは喜べないわ」

「なるほど、そういうことか」

私は少し喜びすぎていたかもしれない。

反省をする。

「太陽の克服が達成され、鬼殺隊が全滅しないと、私たちは世界を取るのには夢のまた夢ね」

私はそれに、少し引つかかった。

鬼殺隊が全滅するのはわかる。でも世界を取るというのはあまりに大きすぎる計画ではないか。

だが、私と結婚する時、妻はその当時から話していた。

それに、妻と結婚していなければ、今頃鬼どうしで争いも起きていたかもしれない。

それだけを避けるためにも私は結婚という選択肢を取った。

1週間後、

「鬼殺隊を全滅させ、世界を取らなければならない。だからこそ私たち鬼は強くならなければならない。無限城を増築し、現在の100倍の広さにしようと思う。そして、いざというときは鬼殺隊を全員引き込んで叩き潰す」

私は私が鬼にしたもの全てを無限城に呼び寄せ、演説した。そして、無惨様という慕う声が響く。

これは鬼の王としては当然のことだと思う。

だが、私は本当にこの行動をしてよいのか悩む。

私の本当の目的は太陽を克服し、太陽の下でも生きられる、ただ一つのみ、そのためにも鬼殺隊は邪魔である。

鬼殺隊がいなくなれば私は鬼を増やすこともやめ、ゆっくりと過ごしたいと思っている。その目的のため禰豆子という鬼を私は手に入れないならならぬ。

私はなぜ悩んでいる。

鬼の始祖となり、ここまで大きな鬼の王となった私が悩むのか、長らく生きてきてこんなことは初めてだ。

演説を終え、私は一人、自分の部屋で茶を飲み、一服する。

そして私はひとつの決断をする。

「鳴女、聴こえるか？お前にしか出来ないことだ」

私は鳴女に命令を出す。

「わかりました。私、鳴女、無惨様に900年仕えて来たこと、そしてその血鬼術、存分に発揮してまいります」

「そうだな、お前は私が鬼にしたものの中で最も古株だったな」

鳴女が提案してくれなかったら十二鬼月という制度も生まれなかった。鳴女は私にとっては最もお互いを知る仲間なのだから。

私は鳴女を愛そうと思ったことは無い。だが、お互いを対等に信頼できる唯一の存在だ。

私がこれまでに愛したものは珠世だけだから、裏切りものではないが。

「産屋敷、お前と戦う日はそう遠くない。最後に地に足を踏み立ち上がるのは私だからな」

猗窩座と勇儀

無惨に血与えられ鬼となり、280年、俺は何も成し遂げられないでいた。

鬼になろうと誘い続けるも、誰一人として鬼になろうとはしなかった。

そして二年前、大血戦により上弦の伍に降格。

その辺りから他の上弦の鬼からも扱いがぞんざいになり、燻っている。

やり遂げなければと焦るが、何も思いつかない。

手当たり次第に思いついたものは全てやり尽くした。

だが、何一つ成功と呼べるものにはならなかった。

黒死牟は、新たな鬼を紹介し、それが俺の下、上弦の陸の猗岳である。

童磨は、万世極楽教を大成功し、大量の人間という食材を確保した。

だが、元上弦の参である俺は未だに無惨様の命令である青い彼岸花を見つけられていない。

その青い彼岸花探しも、昨日、ついにやらなくてよいと言われてしまった。

やり遂げなければ、俺は厄介払いされてしまう。あの元下弦の陸、響凱のように。

そう悩んでいると、俺の本拠地に、何か気配が近づいてくる。

俺は素速く動き、何者かを殴る。

「いきなり、拳を放つとは、だいぶ気が立ってるようだな、猗窩座」

「お前は、勇儀！なぜ俺の本拠地に！」

「ちよつと、話があつてだな。無惨様の命令ではなく、ちよつと気になったことがある」

俺はため息をつく。

「はあ、そんなことか、なら入れ」

俺は勇儀を中に入れる。

俺は本拠地の真ん中の大きな部屋でお互い向かい合う。

「へえ、だいぶすつきりしてるなあ、家具とかそういうのもほとんど無いな」

「当たり前だろ。俺はとにかく必要なもの以外は置かない主義でな」
「ほほう、やっぱり無惨様きつての武人は違うねえ、私なら酒を常備するがな」

「お前は本当に酒が好きだな。上弦の鬼は酒に酔わないはずだが？」
「そうだな、あたしは酒を飲んでいて自分に酔うのが好きでな」

勇儀はそういい、大きな杯を発現させる。

「またそんなに呑むつもりか？ 本当酒が好きだな」

「いいだろ？ 酔わないんだし、私にとっちゃ水と同じだよ」

「そうか……俺はあまり酒が好きじゃねえから」

「そう言つてこの前酒呑み合戦なんかやったのはどこのどいつだ」

「あれは……お前が酒蔵襲つて大量に酒を持ってきたからだろ！ あれ呑みきるまで一週間かかったんだぞ？」

「ははは、それはすまんかった」

「お前、花火は見たことないか？」

「あ？ 見たことはあるが、それがどうした？」

「なんだろう、俺は昔、花火に関して何かをしたような気がするんだ」

「……あたしも、何かひつかかるところはある……」

「本当か？ なら何か教えてくれ！」

「……思い出せない、いや、何かを思い出そうとすると目の前が真っ暗になる」

「なるほど……、実は俺もはつきりとは思いつけない。ぼんやりとだが、花火の音がする場所で誰かと会った気がする……。だが、誰だったのかは全く……」

「ははは！ お互い花火に関することは何かあるようだ」

俺は思いつくことだけを話す。

だが、何かは引つかかる。でもそれまでだ。

「勇儀！」

「なんだ？」

「お前はいつから鬼になった？」

俺はそれをきく。

「んー。はつきりと思い出せるのは享保の頃からだな。私が思い出せる範囲は」

それを聞いた時、俺はお猪口を落とす。

「そ……その時代……、俺も享保の頃だ。偶然なのかはわからないがな」

「まあ、偶然だろう、それにあたしとお前は元々別々のお方についていたからな。ほんの三年ほど前までは」

「そうだったな、俺と同じ時期に鬼になったやつなんかかなり多いからな」

享保、俺が鬼になった頃の元号、俺が鬼になったのは享保9年、そのあたりからの記憶がある……もしかすると、あるかもしれない。

「猗窩座つてなんであたしと戦った時、ちよつと打ち合っただけで負けを認めたの？」

「俺はなあ、女を絶対に攻撃しないと決めてるんだよ。それに、俺は絶対に女を喰ったりしない」

「なるほどな」

俺は実際に女の肉を食わない。

童磨が喜んで食いまくっているのを見ると反吐が出る。

「あ、そういえば、童磨、最近男の肉も食うようになったんだったって」

「何？あいつはほぼ女の信者を抱えながらか？」

「なんでも黒死牟殿に何度も指摘されてから食うようになったんだとか」

なるほどな、あいつ、黒死牟に何回も挑んで負けたから頭が上がらないんだろう。それにしてもあいつが俺よりも40年も遅くに鬼になったくせに上弦の参にるのは腹立たしい。

いつか絶対にあいつに勝って俺が上弦の参になってやる。

「忘れてた、本題に入る。猗窩座、最近あのお方から命令は来ているか

？」

「一つだけだな、鬼たちは絶対に人を食わないようにという話だな」

「なるほど、私もその一つだけだ」

「ならなぜ、話をしにきたんだ」

「実はだな、無惨様から話があつてだな、太陽を克服した鬼が現れた」
「なんだと？ということは俺たちは不死身になるのか？」

「その可能性は高い、もしそうなればあのお方は必ずやると思う。世界を鬼の支配下にするためにも」

俺はなにか壮大なことを聞いてしまった気がする。

4年前までは鬼殺隊を皆殺しにするぞとか青い彼岸花を探しだし、太陽の下で歩けるようになるぞ。

としか言つてなかつたあのお方がなぜそのような大層な野望を掲げるようになったのか。

それもこれも無惨様が結婚したことによるものだ。

無惨様は俺のことは一番のお気に入りだと言われたこともある。

なら、俺をここまで隅に追いやつたのは何故なのか？

やはりあの無惨の妻が関わっているかもしれない。

ベン！

俺たちは無限城に召喚される。

「勇儀、猗窩座、ついに私の増築した無限城が完成した。この大きな姿を見よ！」

そこには和を施した城とそれとは全く合わないであろう。西洋のような城が混ざる外観に変わっていた。

「面白いだろう、ほとんどの鬼をここに集めて増築したかいがあつた。これで1000人、いや10万人がこの城に突き落とされようとも余裕となる城になった」

「素晴らしいですーこれで今までよりも戦闘をできる範囲が確保できます」

「それにだな、ついに鬼殺隊の本部を発見した！」

場所は船橋、その近くでは鬼殺隊の隊士が何やら活発的に動いている。

それを全て見つけた鳴女は本当に優秀だ！

恐らく鬼殺隊は1000を超えるだろう。

だが、それに対抗しうる鬼たちもほぼ全て集めた。

私が鬼殺隊の本部に向く。そこで、産屋敷を殺す。

そして鳴女がその隊士達のほとんどを無限城に突き落とす。鬼殺隊を全滅させ、太陽の下でも生きてられる禰豆子の血を何としても手に入れる！それがお前たちの私からの最後かもしれない命令だ！」

最後かもしれない命令？という事だ。もしかして無惨様……。

不死川さんの好物と最終決戦の予兆

俺はある場所へと向かっていた。

義勇さん達が柱同士で鍛え合う場所、未来竹林というところに向かっている。

俺は柱たちの好物を把握している。

というよりも物知りの文さんが全部教えてくれた。

それに、今は義勇さんは不死川さんと手合わせするところだ。

2人の好物を重箱で2つ持って歩いている。

それにしても割と遠い、悲鳴嶼さんの稽古場ほどではないけど。

地図を頼りに道を進んでいくともものすごい音がする。

おそらく義勇さんと不死川さんが打ち込みを行っているんだろう。

俺がその場に着くと、ものすごい打ち合いが始まっていた。

風の呼吸。壺の型 塵旋風・削ぎ

水の呼吸。参の型 流流舞い

速い！でも見える！動きを完全に理解できる。

「オラオラどうしたアれてめえは俺たちとは違うんじゃないのかよお！」

それはそう意味じゃないですよ……。

水の呼吸。肆の型 打ち潮

不死川さんはサラリと避ける。

「おせえんだよ！」

風の呼吸。伍の型 木枯らし風

水の呼吸。漆の型。雫波紋突き

あ！2人とも木刀が折れた！

「そこまで！2人とも、何本も折るんですか？」

にとりさんが2人を止める。

「仕方ねえだろ？柱どうしとなりや木刀の5本や10本折れたって変

わらねえだろ?」

「その木刀は特別なんですよ。継子たち7人が柱たちのためにと思っ
て随分前から何本も削ってたんですよ?それも、不死川さんや伊黒さ
んは折りすぎなんですよ」

それを言った瞬間、不死川さんは無言になる。

「それに、そこで炭治郎が差し入れを持ってきたみたいだし、ここで一
時間休憩」

「義勇さんも不死川さんもすごい打ち合いましたね」

「あれくらいでもまだかなり抑えている方だ」

「炭治郎もだいたい強くなってたよなあ、この前、同期隊士みんなで試練
をやったのを見た時はすごいものを見てしまったと感心したよ」

「にとりさんって鬼とか斬ったことあるんですか?」

「まあ、鬼殺隊だし、私も鬼は斬ったことはある。72体かな。それ
に、私もこの前の刀鍛冶の里のおかげで甲まで昇進したし」

「えー!にとりさんってそんなに強かったんですか?俺なんか3
6ですよ?」

「いや、どんだけ強い鬼ばかり当たってたんの?あんた鬼の始祖から
狙われているとかそんなわけ?」

「その通りだ。炭治郎は鬼舞辻無惨を1度だが見たことがある」

「俺たちでも名前くらいしか知らねえのによくもこいつは見たもん
だ」

俺が見たのは確かに鬼舞辻無惨だった。確かにその時は鬼の始祖
はお前だけだと思ってた。だけど、鬼の始祖は複数、そしてこの前蝶
屋敷に呼び出された時には2体ということが事実となった。それに、
恐らくだがその鬼は鬼舞辻無惨とともに行動している。だが、もう一
体の鬼の始祖は見た事がない。一切情報がないのである。

「それにしても、文が作るおはぎはうめえ」

「不死川、もしかしておはぎが好物なのか?おはぎならいくらでも作
るぞ」

「は？てめえにおはぎなんか出されたくねえよ」

「そうか……」

「不死川さんって文さんの作るおはぎが一番好きなんだそうですよ」

「炭治郎……どこでその話をきいた……」

「え？文さんから直接……」

「あのバカ、軽々しく話すんじゃないかって何度言ったら」

不死川さんは怒って立ち上がる。

「不死川、今時期は牡丹餅の方が美味しいと思う。食べてみるか？」

「いらねえ！俺はおはぎがいいんだ！てめえに出されるものなんか食うか！」

そう言っただけで不死川さんは竹林を出た。

「まあ、あいつはこだわりを持つてるからな、仕方ねえよ、それに、義勇も空気を読むのが下手すぎる。とにかく話すことの練習でもした方がいいんじゃないか？」

義勇さんはそう言われて黙る。

「俺は嫌われていない」

「たくよ……あいつらといるとホント調子が狂う……」

俺は竹林を出て、自分の屋敷に帰る。その途中で、なにかが髪に引っかかる。

「なんだよ……ハエか？」

俺は何かを感じた髪の毛部分を掴む。

すると、プチッと音がし、拳を開くと、

そこには大きな目玉をつけた虫のようなものだった。

俺は気になったので柱たちを呼び出した。

「何よ、このおぞましいものは」

「知らねえよ。ちよっと前に俺の髪にくっついた虫だと思っただらこれでさあ」

「その目玉みたいなのやつ、この前私の屋敷のお風呂に何匹か浮いてた

わ！」

甘露寺はそう話す。

「不死川さん、この虫、微かにだけど鬼の気配を感じる、恐らくこれは、鬼が目玉の虫のようなものを使って鬼殺隊を探りに来たんじゃないか？」

さとりがそれを話すと柱たちがざわついた。

ついに最後の戦いの始まりを告げるようなものを見つけてしまったようだ。

「ということは下手すると柱稽古中に鬼の侵入を許したということか」

「その可能性は否定出来ない。なぜならこれまで1ヶ月以上鬼の出没が一切ない。それに、蝶屋敷からも鬼の気配がするし、もしかすると無惨が何かしらの鬼を水面下で動かしていたのかも……」

「蝶屋敷の鬼は、鬼舞辻無惨とは関係ありません」

しのぶはそう言い放つとまた柱がざわつく。

「どういうことだ、胡蝶」

「話さなければなりませんね。実は、私と永琳さんは珠世さんという鬼と3人でこれから起こりうる最終決戦に向けて薬を作っていたんです」

「なぜ、鬼と人間が一緒にいる、それに、珠世とかいう鬼は人間を食わないのか？」

「一切食いません、あの方は150m1程の血を飲む程度で充分だからです。それに、鬼舞辻無惨を倒そうと、何百年も研究をしていた方なんです。そしてこの研究は先代のお館様、産屋敷耀哉様の公認により行われているんです」

「私たちのお館様が鬼と関わりを持っていたなんて……」

「ふざけんな！なぜお館様がそんなものと関係を！」

「仕方ないですよ。お館様は鬼舞辻無惨を倒そうとすることを最後まで諦めていないお方ですから、それに、鬼舞辻無惨はもうすぐ鬼殺隊の旧本部に攻めてくると思います。だからこそ、そのためにも私たちは鬼であり、鬼舞辻無惨を倒すために研究をしていた珠世さんと約一

年もの間協力していたのです」

「なるほどな、それはお館様に感謝するしかないな」

「お館様はそこまでお考えだったとは……、俺たちが思っている以上にものすごい御方だな」

「鬼舞辻無惨が攻めてきた時は、私たちは全力で最終決戦に臨みましよう。そして鬼の始祖を倒すのです」

こうして柱たちは最終決戦に備えられるように動き出した。

無限城編

鬼を統べし者と鬼狩を統べし者

石畳を踏む音が聞こえる。

「やあ、来たのかい……初めましてだね、鬼舞辻無惨」

「何とも醜悪な姿だな……産屋敷耀哉」

「やはり……私の元へきた……今日の前にいるんだな……我が一族が1100年追い続けた鬼……あまね……彼はどのような姿形をしている……？」

「二十代半ばぐらいの男性に見えます。そして瞳は紅梅色、そして瞳孔は猫の目のように縦長です」

「そうか……君は来ると思っていた。必ず、君は私に……産屋敷一族に酷く腹を立てていただろうから……私だけは君が……君自身が殺しに来ると思っていた」

「私は心底興奮しましたよ。産屋敷耀哉、身の程も弁えず1100年も渡り私の邪魔ばかりしてきた一族の長というものがこの床に伏せた屍のような姿とは……」

「そうだろうな……私は……今年の夏に医者から年は越せないかもしれないと言われた……でも私はまだ生きている……それに……24も迎えられた……それには医者も言葉を失っていた……それもひとえに……君を倒したいという一心ゆえだ、無惨……」

「その儚き夢も今宵で終いだ。お前はこれから私がこの手で殺す」

「君なら知っているだろう……私とお前は同じ産屋敷一族、君が生まれたのは平安の初期だから血は遠いけれど……私は君の本当の名前を知っている……」

「ほう、ならば言い当ててみよ。」

「産屋敷……夢燦……だな」

その時、無惨の言葉は少し止まる。

「フフフ……その名で呼ばれたのは、1100年ぶりだな……素晴らしい……だが私はその名を鬼になった時に捨てた」

「君の名は…私が一族の家系図を調べた時に…あったよ…似た名前があるんだなあ…つて…やはり君だったんだな」

「だがなんのためになる？私になにか言いがかりでもあるのか？」

「君は人間だった頃…酷くいじめられていた…そのときに…無惨と呼ばれていたんだね…？」

「そうだ。私は憎き家族を何人も喰った。それはそれは不味かったがな」

「そのあとの産屋敷一族は…君のような怪物を出してしまったせいで…呪いがかけられてしまった…。生まれてくる子供たちは皆不幸や病弱なものが多く、十五までしか生きられないものがしばらく続いた…そして100年が経ち…絶えそうな時に神主から助言を受けた…鬼の因果というものにより寿命が奪われている…そのものを倒すために心血を注ぎなさい…そうすれば一族は絶えることは無い…実際に代々神職の一族から妻をもらい続け…子供も死にづらくなり…寿命も伸びてきたが…それでも我が一族の誰も三十を越えたものはいなかった…」

「迷言もここに極まれりだな…お前の病は頭にまで回るのか？そんな事柄には何の因果関係もない、なぜなら私には天罰が下ったことはほとんど無い。人間を殺しても私は生きることが許されてきた。この1100年で神も仏も見たことはない」

「君はそのようにものを考えているんだね…でも…君は天罰が下ったことはほとんど無いと言ったね…。当ててやろうか…、君が下った天罰を…」

「…」

「君は…結婚してるんだよね…私とあまねのように…」

「…：…：フン…」

「やはり当たっていたか…それに…君は…太陽のしたで過ごす…そして永遠の時を見続け人に手を加える神にでもなる…そう夢見ているんだろう…」

「…その通りだ、そしてそれは間もなく叶う。彌豆子という鬼の血が手に入りさえすれば」

「君の夢は叶わないよ、夢燦」

「彌豆子の隠し場所に随分と自信があるようだな。しかしお前と違い、私にはたつぷりと時間がある…」

「君は思い違いをしている」

「何？」

「私は永遠がなにか…神とはなにか…知っている。永遠というのは人の想い、その人の想いが繋がるからこそ永遠であり不滅なんだよ。そして運命は…誰にも分からない…それは神であつてもだ…運命は人が作るものだ…、神は何もつくらない…何も手を下さない…」

「下らぬ…お前の話には辟易する」

「この1100年間鬼殺隊は無くならなかった…それに一度は公認となつた時期もあるほどだ…今まで可哀想な幾人もの子供たちが決して無くなることはなかった。」

その事實は今君が…下らないと言つた。人の想いが不滅である。

大切な人の命を理不尽に奪つた者は許さないという想いは永遠だ。君は誰にも許されていない。

この1100年間1度も、そして君はね、夢燦、何度も虎の尾を踏み、龍の逆鱗に触れ続けた。

本来ならば一生眠っているはずの虎や龍を君は起こした。彼はずっと君や、その妻を睨んでいるよ。絶対に逃がすまいと。

私は殺した所で鬼殺隊は痛くも痒くもない。私自身はそれほど重要じゃないんだ。

この人の想いと繋がり、そして運命が君には理解できないだろうね。夢燦。なぜなら君たち鬼は、君とその妻が死ねば全ての鬼が滅ぶんだろう？日本、いや、世界中に潜む鬼が」

「空気が揺らいだね…当たりかな？」

「黙れ…」

「うんもういいよ、ずっと君に言いたかつたことは言えた。最期に、私自身は重要でないと言つたが…私の死が無意味ではない…私は幸運なこと鬼殺隊…特に柱の子や炭治郎たち甲隊士にはしたつて貰つ

ている。つまり私が死ねば今まで以上に鬼殺隊の士気が大きく上がる」

「話は終わりだな？」

「ああ…こんなに話を聞いてくれるとは思わなかったな…ありがとう
夢燦…でも…君の目的さえ実現出来なかったのは最後の後悔だよ」

「なん…」

「緊急招集！旧産屋敷邸襲撃！」

「なぜ、護衛を付けなかったんですか！最後まで安らかであって欲しかった！なぜ！」

「お館様！お館様！」

「蜜璃！泣くんじゃない！」

「伊黒さんだつて」

「お館様！まさか！」

「お館様！どうして！死に急ぐんですか！生き長らえた命を！」

「お館様！心中お察しします！でも、死ぬのだけは選ばないでください！」

それぞれの思いが旧産屋敷邸へと向かう。

だが、

ドーーーーーン

その思いは虚しく、屋敷が跡形もなくなるほどの爆発が起きてしま
う。

お館様く！

その声が虚しく夜を木霊する。

「ついに、起きてしまいましたか…」

「私たち五人きようだい、全員無事だったことを」

「私たちが未来を繋ぐんです。この早苗、全力で応援致します」

「ありがとう、僕みたいな小さい子の妻になってくれたこと、本当にあ

りがとう」

「さ、私たちには守ってくださる人がいるんですよ」

「そうだった、元柱であり育手である方々、本当に護衛に駆けつけて下さり感謝します」

「今回駆けつけてくださった、元水柱鱗滝左近次さん、元炎柱煉獄杏寿郎さん、元炎柱煉獄槇寿郎さん、元岩柱聖白蓮さん、元花柱風見幽香さん、元鳴柱堀川雷鼓さん。忙しい中新産屋敷邸を護衛に来たこと、本当にありがとうございます」

この日、最終決戦が始まった。

無惨の奥の手と無限城

「ぐっ産屋敷耀哉！貴様ー！ー！」

あの男は常軌を逸している。

仏のような笑みを貼り付けながら己と妻、そして屋敷諸共爆薬で消し飛ばした！私のもものさしよりも遙かに上を行く男だ。

なにか仕掛けてくるとは思っていたが、建物全てに爆薬を仕掛けていたとは…。

爆薬の中にも細かい撒菱のようなものも大量に仕込まれていて殺傷能力が格段にあげられている。恐らくあの撒菱は鬼狩の刀と同じ鉄。

一秒、いや、一分でも私の再生を遅らせる為に。

つまりまだ何かある。あの男はこのあとまだいくつもの仕掛けを仕込んでいるつもりだ。

人の気配が集結しつつある。

恐らくあの男が言っていた柱や甲の隊士ども、だがこれだけではなにもっと別の何か、私もいくつかかけているがあの男は自分自身を囚にする腹黒は。

私への怒りと憎しみや哀れみが大蛇のように真つ黒な腹の中で巻いていた。

あれだけの殺意をあ若さで見事に隠し抜いたことは驚嘆に値する。

妻は承知のうえだったのか？

よせ、今考えるのはこれではない。

奴らを無限城に落とすための隙を作る。

そのために私はここに来たのだ。

間もなく体も再生しきる。

その時目の前には大量の種と水の塊が浮いていた。

もしや、血鬼術！貴様私の呪いを外す鬼が他に…

ビシィ！

固定された!?

誰だこの血鬼術だこれは…

それに…水が氷となって手足が固まる。

それに、肉の中や骨の髄まで棘が細かく枝分かれして抜けにくい。

いや、問題ない、かなり多いが2分で吸収しきれる。

その時、体になにかが突き刺さる。

そこには見覚えのある姿が目の前にあった。

「珠世…なぜお前がここに…」

「この棘の血鬼術と水の血鬼術は貴方が浅草で鬼にした2人の女性の
ものですよ！」

目くらましの血鬼術で近づいたな。目的は？何をした？なんの為に俺の腹を貫いた？

「吸収しましたね夢燦、私の拳を。拳の中に何が入っていたと思いませんか？」

「何？…貴様」

「そう、鬼を人間に戻す薬ですよ！どうですか？効いてきましたか？」

「そんなものできるはずは…」

「完成したのですよ！状況が随分変わった、私だけではない、鬼殺隊の柱たちの力と検体のおかげでね！」

「お前も大概しつこい女だな珠世！逆恨みも甚だしい。お前の夫と子供と孫と親戚を殺したのは誰だ？私か？違うだろう、他ならぬお前自身だ！お前が皆殺しにした」

「そんなことわかっていれば私は鬼になどならなかった！老いて癌で死にたくないと言ったのは!!子供や孫がお金に苦しまないように幸せになって欲しかったからだ……！」

「その後も大勢の人間を騙し殺したのは私が見た幻か？楽しそうに人間を喰い荒らし死体の山を築いたように見えたがな、それに、私のことを愛したのは嘘か？」

「そうだ、私は自暴自棄になって大勢殺し、そしてあなたに近づいたのも本心だった。でも私はもうこれ以上鬼の被害者を出したくない！その罪を償うためにも私はお前とここで死ぬ！そして地獄とともに落ちろ！」

「悲鳴嶼さん！古明地さん！お願いします！この鬼の始祖を！」

「南無阿弥陀仏！」

「さあ！死に晒せ！」

心の呼吸。弐の型 恐

「やはり頸が飛んでも死なない！」

「ならば潰すまで！」

無惨の飛んだ頸は悲鳴嶼の鉄球により潰される。

「ははは！面白いぞ！私の首が飛ぶのはあの日の呼吸の剣士以来だ！」

血鬼術 黒血枳棘

岩の呼吸。 参の型 岩軀の膚

心の呼吸。 漆の型 慙

「てめえー！お館様に何しやがったあああ！」

「お館様！」

「お館様の仇！」

「無惨だ！奴は頸を斬っても潰しても死なない！」

全員が本気で技を打つ、その瞬間、全員の足元に多数の障子が現れる。

そして全員がその障子の開いた所から落ちていく。

「私を追い詰めたつもりか？貴様ら鬼狩1400人！その行先は地獄の果てだ！今宵皆殺しだ！それに、私が死のうとも全ての鬼は滅びぬ！」

「地獄に行くのはお前だ無惨！絶対に倒す！そしてもう1人の始祖も見つけだしお前のあとを追わせてやる！」

「やってみろ！竈門炭治郎！」

さて、私は無限城の核の部屋で珠世と、そして先程見えた2人の女鬼を吸収するとするか。

「やはり、無惨、いや夢燦は奥の手があると思っていました。ですが、私たちには鎧鴉1000羽を既にあの場所に待機させておきました。」

それに、珠世さんの言った通り、60人の隊士は補足されませんでしたね」

「私たちがまさか蝶屋敷から移動するなんて思いもありませんでした」

「神崎アオイ、あなたは鬼殺隊の中で人を看護することに最も長けたお方です。」

あなたが、私たちや怪我で参加出来ない隊士たちを繋ぎ、そして、鬼殺隊を絶対に無くさせてはいけません！

アオイ、そして3人の継子だった者の妹たち、頼みました！」

「はい！新たなお館様のご指示、私神崎アオイ、本気で取り組んでみます」

「私たちの」

「お姉ちゃんを殺した」

「童磨をカナヲさんやしのぶさんが」

「絶対に倒してくれます」」

「ひなき、にちか、くいな、かなた、早苗、千寿郎さん！」

「「「「はい」「」」」」

「この戦いで、鬼舞辻無惨を倒すために、私たちで無限城の地図を描き尽くし、鬼殺隊1460人の因縁と未来の鬼に殺される運命にあるも達の全て救うんだ！だから…」

パシン

「お館様！あなたが泣きそうになってどうするんですか！私たちの鬼の因縁の終焉を勝ち取るんじゃないんですか！しっかりしてくださいー！」

「早苗、ありがとう」

「無限城へと落ちた隊士たちの把握が先だ。そして、強い隊士を上弦の鬼たちの所へ導く、鴉たちも全力で動け！そして無限城を攻略するんだ」

雷の宿敵と繋ぐ2人の戦い

俺はものすごく怒りが込み上げてくるのを感じる。
だが、これほどまでにない機会には感謝しなければならぬと思
う。

無限城に落とされた時、俺はすかさず姉貴を助けた。

「すまねえな善逸、私がうたた寝してて」

「姉貴はそろそろ自覚を持った方がいい。俺も姉貴も甲の隊士なんだ
から」

リーン

音が聞こえる。この音は、獺岳の音。それに、音には濁りがある。
やはり鬼になっていたか。

「姉貴！こつちだ！」

俺は姉貴の手を引き無限城を走る。

雷の呼吸。 壺の型 霹靂一閃

「邪魔だ、消えろ」

「…善逸」

俺の心は怒り、憎しみ、恨みに溢れている。

音が大きくなっていく。

すると、目の前に顔がボロボロになり、全身から血を垂れ流す隊士
が転がっていた。

「おい！大丈夫か？しっかりしろ！」

「ま……り……さ……さ……ん……獺岳……が……上弦……陸……」

そう言っつて隊士は息絶えた。

「おい！おい！しっかりしろ！」

「姉貴、そこにいろ。俺は獺岳を殺つてくる」

「おい待て！」

俺は姉貴の止める声を見せず、少し奥へと進む。

そして大きな襖が経つ間の前に着く。

「いるんだろ、出てこい！そこにいろのはわかっている」

「口の利き方がなつてねえぞ！兄弟子に向かって、少しマシになつた

ようだが、相変わらず汚え高音の声してやがる。久しぶりだな、善逸」
獺岳は襖を開け、刀を構えながら歩いてくる。

「獺岳、鬼になったお前を、俺はもう兄弟子と思わない」

「変わってねえなあ、チビで出っ歯でみすぼらしい、少しは筋肉をつけようだが、柱になれたのかよ？それに壺と漆以外の型は使えるようになったか？」

「…」

「まあ無理だろうなあ、柱の席は満員、おめえは弱虫だから成長しねえ、そんな鬼殺隊よりも鬼は評価してくれて俺は上弦の陸だぜ？」
「適当な穴埋めで十二鬼月に入って運良く上弦入りできたことが随分うれしいようだな」

「へえ…言うようになったじゃねえかお前…」

「なんで鬼になんかなくてんだ？丙まで上がっていないながら」

「ははっ！お前には…」

「雷の呼吸の継承権を持った奴がなんで鬼になった。」

「アンタが鬼になったせいで爺ちゃん腹を切って死んだ！」

「姉貴を介錯に切腹したんだ！それに30分間、苦しみと後悔を噛み締めながら！」

「アンタのせいで姉貴まで巻きこんで！それもこれも雷の呼吸の使
い手から鬼を出したからだぞ！」

「俺は涙に目を潤ませながら獺岳に言い放った。」

「ははは、しまったことじゃねえよ、だから何だ？悲しめ？悔い改めろっ
てか？」

「俺は俺を評価しない奴なんぞ相手にしない、俺は常にどんな時も！
正しく俺を評価するものにつく！」

「爺が苦しんで死んだなら清々するぜ、あれだけ俺が尽くしてやった
のに俺を後継にせずてめえみたいなカスと魔理沙みたいなゴミと3
人共同で後継だと抜かしやがったくそ爺だ！」

「元柱だろうが引退から23年して耄碌した爺に用はないからな！
それに俺を丙にまでしかあげなかった鬼殺隊つてのもクソだ」

「姉貴がゴミ、俺がカスならアンタはクズだ、壺の型と漆の型しか使え

ない俺たちと壺と漆の型だけ使えないアンタ、後継に恵まれなかった爺ちゃんも気の毒でならねえよ」

「てめえと俺を一緒にすんじやねえ！」

雷の呼吸。肆の型 遠雷

その攻撃は見慣れている。俺の目の前で自慢してきた型だったな。そんなの見切るの簡単なんだよ！

雷の呼吸。壺の型 霹靂一閃

「おせーんだよ、クス」

獺岳の体を袈裟斬る。

何が起こったのかいまいちわかってない獺岳は焦っていた。

「お前は矜持も根性もねえカスだが強くなったじゃねえかだがな、お前らは死んで当然なんだよ！爺もてめえもあのゴミもおおお！」

雷の呼吸。弐の型 稲魂

速い、でも見えなくはない。俺は僅かに頬に切り傷を作りつつも避けきる。

「大勢人を喰ったな？万世極楽教の女たちを、もう善悪の区別もつかなくなつたんだな？」

「善悪の区別はついているぜ！」

雷の呼吸。参の型 聚蚊成雷

「俺を正しく評価し認めるものは善！低く評価し認めないものは悪だ！」

回転しながらの波状攻撃か！アンタもただ1年間何もしていなかった訳では無さそうだな。

雷の呼吸。伍の型 熱界雷

斬撃を避けきれない。俺はまともに攻撃を受ける。

「どうだい！血鬼術で強化された俺の刀の切れ味は？黒死牟さんのおかげで編み出したんだ！皮膚を！肉を！そして骨を罅割って焼く斬撃だ！」

雷の呼吸。陸の型 電轟雷轟

「食らった斬撃はお前の体で罅割れ続ける！目に、体に焼き付けろ！」

俺の力を！鬼になり雷の呼吸を超えた！」

俺は背中を壁に打つ。そして倒れる。

「てめえは俺とは格が違えんだよ！お前はどうせ未だに俺以下なんだろうな！」

「それは違うと思うぜ！獺岳！アンタはあたしらとは違って甲隊士なんだよ！アンタも諦めなければ今頃甲で肩並べてたところだろうがな」
「姉貴…」

「あたしが全部やってやるよ。それに、新しい技の使い所も見つけたし」

「ほう、面白いじゃねえか？てめえみたいなゴミまでやってくるとは」
「は？ゴミとは失礼だね？私の方が姉弟子のくせに何を宣うのだから、それに、ゴミ漁りをしてた所を師範とあたしが救わなければアンタはそのまま野垂れ死んでた可能性もあるのによ」

「ふん、俺を評価しねえで散々いじめたのは許さねえ」

「あれはあの時勝手に師範が育てた桃を盗み食いしてたからだろ？
自業自得だよ」

「は、そんな話もてめえが死ねば思い出すこともねえだろうがな！」

獺岳が俺のことを嫌っていたのは十分わかっていた。俺だって獺岳が嫌いだった。

でも尊敬してたよ、心から、アンタは努力してたしひたむきだった。1年足らずで丙まで上がるのも並大抵じゃない。そんな俺はいつもあんたの背中を見てた。

特別だったよ、アンタは、爺ちゃんや俺や姉貴にとって特別で大切な人だったよ。

だけどそれじゃ足りなかったんだな。

どんな時もあんたからは不満の音がしてた。

心の中の幸せを入れる箱に穴が空いているんだ。

どんどん幸せが零れていく。その穴に早く気づいて塞がなきゃ満たされることは無い。

爺ちゃんごめん。俺たちの道は二つに分かたれた。

俺は起き上がり、そして獺岳を見る。

「善逸はやる時はやる男だ、アンタの目は節穴なんだよ！」

「ふざけんじやねえ！お前ら皆殺しだ！」

ごめん、兄貴、

雷の呼吸。陸の型。電轟雷轟

雷の呼吸。捌の型 迅雷

雷の呼吸。玖の型 火雷神

凄まじい力により獺岳の腕は技を放った直後に姉貴の技で細切れにされ、さらに俺の斬撃により頸が斬られる。

「畜生！やっぱりの爺鼻肩してやがったな！お前らにだけ教えて俺に教えなかった」

「違う、爺ちゃんはそんな人じゃない。これは俺だけのと姉貴だけの型だよ。この技でいつかアンタと3人で肩を並べて戦いたかった」

七までしかない型からさらに玖まで編み出した？アイツらが？壺と漆しか使えない奴らが俺よりも劣っていたカスとゴミが？耐えられない！そんな事実は受け入れられない！あんな奴らに俺らが負けるのか？

だが、あいつらは俺の血鬼術で罅割れて血を流して死ぬんだ。

「人に与えない者はいずれ人から何も貰えなくなる。欲しがらばかりの奴は結局何も持ってないのと同じ、自分では何も生み出せないから、一人で死ぬのは惨めだな」

現れた男は獺岳の頭を踏み潰す。

俺と姉貴は獺岳が塵になる姿を目にし、倒れる。

そして目の前には川、そしてその反対側には爺ちゃんがたっている。

「爺ちゃん！ごめん俺、獺岳と仲良く出来なかった。」

手紙を書いたりもしてたんだ！でも返事してくんなくて！

俺がいなかったら獺岳もあんなふうにならなかつたかもしれない
ほんごめん！許して！

何も恩返しできなくなつてごめん！爺ちゃんが生きてる内に柱にもさあ：なりたかつたんだけどごめん爺ちゃん！俺の事嫌いになつた？何か言ってくれよ爺ちゃん：」

足元には彼岸花が絡みつき、前へと行かせてくれない。

「善逸！お前は儂の誇りじゃ：お前はまだやるべきことがある！お前は、魔理沙と共に雷の呼吸を繋げ！心配するな！儂は天からお前を応援するからな：」

「爺ちゃん：：、俺、行ってくる。みんなが待っているから」

「善逸：お前は本当に、やる時はやる男だ。行ってこい！そして獺岳を鬼にした首魁に一撃食らわしてこい！」

「ありがとう：爺ちゃん！」

目を覚ますとそこには隊士たちが俺たちのために鬼から護つてくれて、その後ろで俺と姉貴は横になり手当されていた。

「善逸：死ぬんじゃないよ：！私たちで雷の呼吸を繋ぐんだから：」

「姉貴もボロボロじゃないか：：。俺はやってやるよ。爺ちゃんの分、そして獺岳が生きるはずだった分、俺は生きてやる！」

「善逸：もう私のこと姉貴と呼ぶの失礼かな：。あたしの方が善逸を兄貴と呼びたいくらいだ：」

俺と姉貴は涙を流しながら手を繋いでいた。

二体の武人と二つの開戦

一刻も早く無惨のところに向かわねば。
それを一心に進んでいく。

水の呼吸。壺の型 水面斬り
鬼が大量に現れる。

それは数を数えるのが無駄だというばかりに。

水の呼吸。参の型 流流舞い

「義勇さん！ありがとうございます！」

「気を抜くな！炭治郎！」

この城に落ちた時、幸いにもすぐの所で足がついたから良かったものの、場所がずれていれば転落死もありえたかもしれない。

それでも3階くらいの高さは落ちている。

この城は上下左右という概念がほぼなく。

右に落ちるや下に登るなど目が回りそうだ。

俺と義勇さんが大量の鬼を斬り、全滅をさせ、一息をつく。

「炭治郎、強くなったな」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ進むぞ」

義勇さんが先導していく。俺はそれについていこうとしたその時、
「ぎやああああああ」

ものすごい叫ぶ声がある。

どこかで見渡すと、その瞬間に俺の目の前が真っ暗になる。

ん、なんか柔らかい。

「ちよつと何してるんですか炭治郎！」

思いきり顔を締め付けられる。

その声は妖夢、時間差で落ちてきたのか。

俺は太ももで締められながら前屈みになり、妖夢を下ろす。

「ほんと災難ですよ。まさかみんなが落ちていった後に私が落ちるなんて、しかも落ちた先が炭治郎の肩とか！」

「いや、それは不可抗力だって…」

「妖夢、偶然だから仕方ない」

「まあいいですよ、でも炭治郎？私の下着見ました？」

「いや…見てないよ」

「妖夢、もしかしてスカートなのか？」

「いや、違いますよ？長めのキュロットパンツですから」

「よかった、甘露寺や八意のようにスカートの隊士もいるから心配してた」

そんな時だった。

「善逸！魔理沙！二名ニヨリ上弦ノ陸撃破アアア！」

鎧鴉が飛びまわる。

それにあの鴉、愈史郎さんの目隠し紙をつけている。

「こうしちやいられませんね、私達も上弦を倒しましょう！」

「俺についてこい！」

義勇さんは俺と妖夢を連れて城の中を走る。

同時刻、別の場所では、

「お前ら！弛んでるぞ！」

「えー！酷いじゃないですか！私めちやくちや倒してますよ」

「そうですよ！妹紅さんが私たちより多く斬ってるだけですよ」

「お前らよりも、音柱の継子2人の方が倒してるぞ！」

音の呼吸。 弐の型 柔韻

音の呼吸。 肆の型 響斬無間

あ、あれは派手柱の所だから……

「とにかくお前らは柱として一度も認められてない！しっかりしろよ！お前ら甲だろ？」

「わかりましたよ！やれば！」

「取り返してみせます！」

「その意気だ！行くぞ！」

恋の呼吸。肆の型 燃恋の動悸
風の呼吸。弐の型 爪々科戸風
炎の呼吸。 星火燎原
鬼たちを斬り、城の奥へと進む。

すると、ものすごい音が城の中を響き渡る。

「なんだ！ものすごい音は」

「みんな！散れ！」

「なんですか？この音は！」

「それに、揺れまで起きている！」

「炭治郎！妖夢！生まれ！落ち着け！」

誰かが戦っているのか？それとも建物が崩れているのか？
いや違う！こつちに近づいている。

この匂いは！

「上だ！みんな！避けろ！」

天井がバキバキと割れ、目の前に何かが降り立つ。

「久しいなあ、約1年ぶりだな、よく生きていたものだ、お前のような弱者が、竈門炭治郎！」

「猗窩座あああ！」

「私もいましたよ。あの場所に、私もあなたが嫌いですよ」

ヒノカミ神楽 火車

腕ぐらい斬れないと頸なんか斬れない！

全力で斬るんだ！

俺は猗窩座の左腕を切り落とす。

斬れた！攻撃もゆっくり見える。通用する！戦える！

頸は狙えなかった！けど次は！

猗窩座の腕が来る。
でも避けられる。

ヒノカミ神楽 幻日紅

見える。そして、頸は斬れなかったが両耳は落とせた。

魂の呼吸。壺の型 乱魂

猗窩座の顔面に切り傷をつける。

しかし、すぐに治ってしまう。

「この少年は弱くない、侮辱するな、杏寿郎の言葉は正しかったと認めよう。お前は確かに弱くなかった、敬意を評する」

「私もあの場にいたんですけど?」

「おういたな、白髪の坊主かあの時はただ眺めるだけの弱々しい少年だったのになあ」

「少年ですって? 私は女ですけど!」

「そんな筋肉の付いた女など勇儀以外見た事ないわ!」

術式展開

「さあ始めようか、宴の時間だ」

「お前らは面白そうな鬼狩じやのう、私と同じ栗色の女、喋りが滑稽な女、青髪に茶髪、そして、炎柱、会いたかったのう。あたしの知り合いが先代の炎柱を引退に追い込んだというから見えてきたらまさか女に代替わりしてるとはなあ! こりや酒の肴になるわ!」

「お前の知り合いのせいで私の兄いは、杖無しでは生きていけないんだぞ! 許さない!」

「ほう、面白いのう、兄妹、いや、従兄妹だと思うが、お前らは仲が良さそうだな。あたしが兄ともども鬼狩をできなくしてやる!」

目の前には大きな体をした赤い角を生やす栗色の髪の鬼、その手には盃があり、そこには酒が入っている。

「おおっと、名乗らなければ武人の恥だ。あたしは勇儀、上弦の肆じや! さあ、お前ら全員、酒の肴にしてやる!」

血鬼術 金剛螺旋

脚旋風が巻き起こる。

硬い！それに、重い！

炎の呼吸。 漆の型 爛発

「なかなかやるじゃねえか、あたしの血鬼術を斬った鬼狩は初めてだ」

「私の炎の呼吸は兄いよりも強いぞ！」

「その強さ気に入った！これは私の宴も面白くなるぞ！」

「義勇！炭治郎！妖夢！上弦ノ伍ト遭遇！妹紅！アリス！文！弁々！

八橋！上弦ノ肆ト遭遇！戦闘状態ニ入レリ！」

鎧鴉の音が無限城に響き渡った。

唾吐きと強い者のするべきこと

水の呼吸。 参の型 流流舞い

「水の柱か！これは良い！遭遇したのは51年振りだ！

破壊殺・乱式

水の呼吸。 拾壺の型 凧

「見たことない技だ！以前殺した水の柱、村紗水星は使わなかった！」

ヒノカミ神楽。 烈日紅鏡

消えた？いや、後ろ！

ヒノカミ神楽…

魂の呼吸。 伍の型 荒御魂

妖夢！助かった！

「ちっ、白髪のがキは引っ込んでろ！」

水の呼吸 弐の型 水車

脚の方を狙えば行けるか。

ヒノカミ神楽。 炎舞

破壊殺・脚式。 冠先割

受けた！ちやんと刀で、

俺の鼻は少し掠っている。

それでこの威力、鼻血が止まらない。

「流麗！練り上げられた剣技だ！素晴らしい！名を名乗れ！お前の名は何だ！覚えておきたい！」

「鬼に名乗るような名は持ち合わせていない。俺は話するのが嫌いだから話しかけるな」

「そうかお前は話すのが嫌いなのか！俺は話すのが好きだ！何度でも聞くぞ！お前の名を！」

破壊殺・脚式。 流閃群光

凄まじい蹴りに義勇さんは何枚もの壁をも背で受ける。

「義勇さん！」

「富岡さん！」

「そうか、アイツは富岡義勇という名前なのか」

ヒノカミ神楽。灼骨炎陽

破壊殺。鬼芯八重芯

重い！腕が痺れそうだ！

踏ん張れ！

破壊殺・乱式。

魂の呼吸。 壺の型 乱魂

妖夢は全力で放つ衝撃波に耐えきる。

「いい動きだ。短期間でよくここまで鍛錬したな。褒めてやる、それにしても杏寿郎はいい仕事をしてくれたぞ。あの夜地面転がっていたお前らは圧倒的な弱者、雑草でしかなかった。

だがどうだ！今のお前たちは！目を見張る成長だ！俺は純粋に嬉しい！心が躍る！

杏寿郎はあの夜で鬼狩をやめて良かった。ともするとあれ以上強くなれなかったかもしれない。人間のまま痛がるようなくだらぬ価値観を持っていたし」

俺はそれを言われてふつつつと怒りが込み上げてくる。

「何だと…お前、お前はもう煉獄さんのことを喋るな」

「なぜだ？俺は称賛しているんだぞ、お前らのことも杏寿郎のことも」

妖夢も怒りを露わにする。

「違う、お前は侮辱しているだけだ。唾を吐きかけているだけだ、誰に對しても」

「勘違いだよ、炭治郎、白髪坊主、俺は嫌いなのは弱者のみ、俺が唾を吐きかけるのは弱者に對してだけ。

そう、弱者には虫唾が走る。反吐が出る。淘汰されるのは自然の摂理に他ならない」

「お前の言ってることは全部間違ってる。お前が今そこにいることがその証明だよ」

「生まれた時は誰もが弱い赤子だ。誰かに助けてもらわなきゃ生きられない」

「妖夢の言う通り、お前もそうだよ猗窩座。記憶に無いかもしれないけど赤ん坊の時のお前は誰かに守られて助けられ今生きているんだ」

「強いものは弱いものを助け守る」

「そして弱いものは強くなり、また自分より強いものを助け守る。これが自然の摂理だ。猗窩座！」

「私たちはお前の考え方を許さない」

「これ以上おまえの好きにはさせない！」

「そうか、その白髪の坊主は妖夢という名か、面白い」

「私は魂魄妖夢。私はあなたを絶対に許さない」

理解した。俺はこいつを体の芯から受け付けないのだ。

金属に爪を立てるような神経に障る嫌悪感、不協和音に吐き気がする。

勘違いがあった。初めはいつも通り弱者だから不快なのだと思う
ていた。

しかしどうだコイツは強くなっても尚不快感が消えない。

こいつの目が声が言葉が全て俺の臓腑を内側から鑢で削りつけてくるようだ。

「うるせえー！」

猗窩座が突然、後ろを振り向く。

「何？今何と無いところを裏拳で？」

「どういうことだ？」

「炭治郎、妖夢、やはりお前らは不快だ」

破壊殺・碎式。 万葉閃柳

速い！途轍もなく！いや速いというよりこれは…この感じ、この正確さ。

下だ！

破壊殺・脚式。 飛遊星千輪

「炭治郎！」

「お前も自分の心配をしろ！」

破壊殺・空式。 大牡丹。

「うっ…」

妖夢は刀で受けるものの、壁に背中を打ち付ける。

くっ…、何とか動作予知して攻撃を受けきれても威力が凄すぎて負傷を零にはできない。

正確無比な技…！羅針盤のように確実に隙を刺してくる。

人体の急所に向かって来る攻撃は磁石に吸い寄せられているみたいだ。

何故だ？何だろう、何に反応して吸い寄せられるんだ？

思い出せ、考えろ！何かあるはずだ。今までの猗窩座の言動を推理すれば。

ヒノカミ神楽。飛輪陽炎

魂の呼吸。肆の型 鎮魂歌

だが、猗窩座はすぐさま避け、2人の刀が当たる。

「ハハハ！面白い技だ！確実に避けた刀身が伸びたように見える。どういう振り方をしたのか、刃の切っ先が二本とも陽炎のごとく揺らいだな。興味深い」

やはり二つの幻惑型の技でさえ避けるか。

ヒノカミ神楽。円舞

バチイ

しまった！白刃取りされた！折られる。

「炭治郎！」

魂の呼吸。参の型 魂割り

パン

「あ…足で!?!」

ならばこっちが！

ゴシヤアン

俺は全力で猗窩座に頭突きをかます。

猗窩座は一瞬怯んだが手足はビクともしない。

「ふん、いい頭突きだ！」

俺はやつの頭を回し蹴りする。

だが、手を離さない！

その時、猗窩座の両手と左足が斬り落ちる。

「義勇さん！」

「富岡さん！」

そこには義勇さんの姿があつた。先程吹っ飛ばされたのにすぐに助けに来てくれた。

「俺は頭にきてる。猛烈に背中と頭が痛いからだ。よくも遠くまで飛ばしてくれたな上弦の伍。おかげで上弦の肆の盃まで割れたがな」

「何!? あいつも戦闘してたか。まさかここまで気が合うとはなあ。面白くなってきたじゃねえか！」

さつき飛ばされた所に上弦の肆、義勇さんは何もしていなかったわけじゃなかったのか。

妹紅の苦悩と乱入者

この女鬼今までとは比べ物にならないほど強い。

十二鬼月は上弦は女鬼がいないと兄いは言っていたが明らかに予想外だ。

情報が違うのか、それとも鬼側で何かあったのか？

それに凄まじい速さ、私を含めて5人で相手しているのに押されている。

血鬼術。大江山嵐

「ブン、私は強いものが大好きじゃ！お前らは強い、だが人間としての強さに留まるのみだ！鬼になれ！そうすれば至高の領域に到達できよう」

襲い来る攻撃は他の隊士たちに傷をいくつもつける。

「痛っ！あの鬼どんだけ強いんだよ！こんな狭いところでそんな技出せれたら逃げられない」

「文、心の声が全部出てる」

「ごめん」

勇儀という鬼は攻撃を仕掛ける隙もほぼ無い。

それにアイツは余裕で片手しか使っていない。左手で盃を持って呑んでいるのは腹立たしい。

「ほらほら、あたしの体に傷一つでもつけてみる？まあ付いた所ですぐ治るがねえ」

すると、勇儀がサラツと動く。そして勇儀の服の裾が少し斬れる。

「おっと、お前ら、鬨気というものを消せるのか？面白い奴らだな」

九十九姉妹が透き通る世界を発動させて、

「やはり、透き通る世界を使っても察知される」

「でも、私たちのことを気づくのに少し遅れてましたね」

透き通る世界か、炭治郎から柱稽古の時に聞いてはいた。

だが、私にはまだはつきりとやり切れたことは無い。

一瞬炭治郎がまるで解体新書のようなものに見えた時は焦る。

それもまだ一度しか起きていない。

あの状態は一体なんだったのだろう。
私は深く息をする。

奴は酒を呑んでいる。

その隙に！

炎の呼吸。 壺の型 不知火

手金剛

「ぐっ…ぶはっ…」

「人が酒を嗜んでいる時に攻撃するとは貴様は武人の風上にもおけぬな。まあこっちは半分之力も出していないが」

半分も出してない？

こいつの実力はどこまで底知れぬのか。

「妹紅さん！私たちが何とかします！」

風の呼吸。 参の型 晴嵐風樹

恋の呼吸。 弐の型 懊悩巡る恋

「遅い！」

文はその瞬間揺らめく。

「遅いと見えたのはあなたの方ですよ！」

風の呼吸。 拾の型 霧飄

勇儀の右腕が斬り刻まれる。

「ほう、なかなか滑稽な技を出すものだ」

「滑稽…」

勇儀は盃で頬を弾かれ、壁にめり込む。

さらにアリスは頭突きを食らわされ、床にめり込む。

「ガハッ」

「クッ」

完全に強いとしか言いきれない。

焦る。

まともに戦えるのは音柱の継子と私だけだ。

炭治郎も初めて上弦と戦った時はこれ程苦戦したのか。

そう思い知らされる。

ならば出すしかないか、痣というものを。
その選択が迫られている。

私は深く呼吸をし、空気を取り込む。

炎の呼吸。伍の型 炎虎

血鬼術 金剛一進

「お前、痣は発動しないのか？あたしはお前の痣が発動する所を見た
い」

「お前なんか痣なんか出すわけにはいかない！お前よりも強い相手
に出す、それが私の判断だ！」

「ほう、余裕を見せるか、ならば私も…」

恋の呼吸。 壱の型 初恋のわななき

風の呼吸。 伍の型 木枯らし風

「痣ものは既に2人この場所にいるからな」

「ほう、なるほど、お前らも本気ではなかったということか」

3人で攻撃しつつ、九十九姉妹を不意打ちに叩けば、確実に倒せる
かもしれない。

今この場所で透き通る世界が使えるのはアリスとあの姉妹だけだ
から。

技を放ちあい相手の隙を覗うように離れる。これを繰り返せば。

そんな時だった。

「おまえの考えはお見通しじゃー！」

血鬼術。 三步必殺

地面を深くうち、その瓦礫を辺りに散りばめる。

その瓦礫が容赦なく動けば体に突き刺さる。

私たちは完全に攻撃の手段を封じられてしまった。

「私のこの血鬼術は編み出すのに苦労したわい、ざっと110年かの
う。まあこれでお前らはただ私の攻撃をその場で耐えるしかない。
残念だったな」

万事休すか、もはやあの勇儀を止めることは出来ないのか。

その時、メキメキと音がする。

「ん？何が起き…」

後ろから壁を突破って富岡さんが吹き飛ばされて、勇儀の背中に直撃する。

勇儀は何もわからず前かがみに倒れ込む。

すると、奴の血鬼術が弱まり、隙ができる。

「いまだ！」

私は勇儀の力の源であると考えられる盃をたたつ斬った。

「どうだ、お前のその余裕の証の盃にもう酒は注げぬ。お前がそうやって油断しているからこうなるのだ」

八橋は富岡さんの所に近寄る。

「富岡さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ…先程硬い物に頭を打ったようだが」

「勇儀という上弦の肆です。先程あなたが飛んできたことよって倒れてます」

「んーーーーーー！あたしの上からどけやがれ！」

勇儀が本気を出し始めた。

「よくも私の盃を割ったな？お前らには本気で戦ってやる。覚悟しやがれ」

「富岡さん、どうして飛んできたんですか？」

「俺はさつき、上弦の伍と戦っていた。今頃、炭治郎と妖夢が戦っている」

「加勢しにいきましょう。私、八橋もついて行きます」

「ありがとう」

そういつて、八橋は富岡の方へ行ってしまった。

「1人減ったか、ならばお前らを私がぶっ潰して地獄に送ってやるよ。私の本当の力をな！」

血鬼術。怪力乱神

技が入り乱れる。その凄まじさに圧倒されながらも耐えなければ。

だが、相手の攻撃を受け止めきれず、私は壁まで追いやられる。

その瞬間、勇儀がものすごい速さで近づく。

「まずはお前が地獄へ堕ちろ！妹紅！」

ならば使うしかないか、

炎の呼吸。奥義、玖の型、煉獄

勇儀の拳から腕を斬り刻み、腕にはめてあった枷を砕く。

すると、勇儀は後ろに下がる。

「ほう、私の枷を砕いたか、お前、本当に大変なことをしてくれたな」

「何!？」

「私の枷はなあ、1つでも砕けば、私よりもはるかに強い鬼の封印が解ける」

それを聞かされた私たちはただ息を飲む。

戦場の女と本当の透き通る世界

俺は極力刀を抜きたくないし、

誰かれ構わず娯楽のように手合わせするのも好きではない。

けれども今、己が圧倒される強者と久々に出会い短時間で感覚が鋭く練磨されるのがわかった。閉じていた感覚が叩き起され引きずられる。

強者の立つ場所へ、ギリギリの命の奪り合いというものが、どれほど人の実力を伸ばすのか理解した。

顔に熱い感覚を感じる。

「義勇さん」

動きが格段に上がった。

痣を発動させた柱はこれほど強いのか。

「義勇さん、痣発動させましたね。あんなに強くなるとは、やはり柱ですな」

「八橋！どうしてここに？」

「義勇さんが炭治郎さんと妖夢さんを置いて吹き飛ばされてきたので私に加勢に来たんですよ」

猗窩座は義勇さんとの先頭の時、一瞬、八橋の方を見る。

すると、猗窩座は舌打ちをする。

「貴様、女を戦場に連れ込むとはどういうことだ！」

「俺が連れてきたのではない。八橋が勝手についてきたのだ」

猗窩座は義勇さんの速さに追いついていく、喋りながら戦闘ができるほどに。

どうすればいい、長期戦になれば永遠に体力が続くわけじゃない人間は圧倒的不利！無惨を倒すことが目的なのに、猗窩座で足止めされるわけにはいかない。早くしないと珠世さんも…どうすればいい。

猗窩座は闘気という言葉を使った。闘気ってなんだ？俺が臭いで色々なことを感知できるように、猗窩座も闘気で感知しているのか？

「ヒリヒリするんだよ敵が狙ってくる場所は」

「だから伊之助は厭夢の攻撃に気づいたんだな、後ろからだつたのに
凄いなあ」

「俺は人より体の皮が強いからな！後ろからだろうが誰かが見てりや
見てるってわかるぜ」

俺はじつと見つめる。

「腰の骨のところを見てるだろ！」

「当たり前！」

「特に殺気を込めて見てくる奴は一発でわかる。自分に害があるもん
はやべえからな、さつきって体の皮にグサツと刺さってくるんだぜ。

ただ殺気とかがいいが無い奴って気づきづらかったりするんだよ
な、あのチビ婆に紫の髪の毛のやつ！

恐ろしかったぜ、いつの間にか握り飯を持ってきたり水をかけてき
たりしたんだからな。

俺は思ったね。殺気を出さずに近づけりゃあ気づかれねえ。

だが、そんな技を使えるやつなんか、俺はあの大男と白髪のでけえ
女しか知らねえ」

これが核心をついているような気がする。猗窩座の感知すると思
われる闘気は何だろう？殺気とは違うのか？

闘おうとする意思？鍛錬した量や時間？

俺の臭いでの動作予知のようなもの？

「炭治郎さん、闘気というものは植物や物質のようなものには無いんで
す。何よりも楽器には一切の闘気が宿りません。私たちは闘気を消
すことによって音楽をより自らを楽器のようになることで奏でやす
くするんです。それこそが本当の透き通る世界なのです。炭治郎さ
んたちの透ける世界であり、まだ闘気が乗ってるんです」

なるほど、そういう事か、だから筋肉の動きが察知できても気づか
れるのか。

心を落ち着かせる。

自分は何もないようになる。俺は焼いた炭や、その辺の石ころのよ
うになる。

何も考えない。いや何も無い。

「フーーーーー」

「炭治郎！今は入らない方が…」

「オラオラ？技の数は1で終わりか？」

「チツ」

もどかしい！今少しの所で斬り込めない、浅い！実力差か、正確で強い攻撃をしても同じく正確な鋭い技で返される。

泥沼だ。攻撃の型も先読みされるようになってきた。

どんな成長力だ、これが上弦の伍。

この男は修羅だ。戦うこと以外、全てを捨てた男だ。

「やはり1までしかないか、充分だ、終わりにしよう。よくここまで持ちこたえた」

やばい！これは刀が折られる。そう思った時だった。

俺は猗窩座の拳が突然消えたのを見る。

「フーーーー」

目を逸らすとそこには異常なほど痣を強めた炭治郎が猗窩座の拳を斬り落としていた。

それに呼吸の音が違う。髪も目も紅くなっている。

俺は炭治郎に救われた…。

「チツ、貴様、最初に殺してやる」

術式展開。終式 青銀乱残光

また攻撃の速度が上がる！威力が増大している！受けきれるか!? 凧で…！

受けきれない。百を超える乱れ打ちなど、凧も防ぎきれなかった。

「大したものだ、生きているとは流石だな。致命傷は何とか躲せたか、炭治郎や妖夢のように死ぬことは無い。お前も鬼になれば、富岡義勇」

気づいていない！背後に炭治郎と妖夢がいるのに、気配がないのか!? これは…炭治郎斬れ！まだ動けるなら狙えれ気づかれぬうちに！ 頸を！

「猗窩座!!」

バカ正直に呼ぶとは…！

生きている！まさかコイツらがああ攻撃を食らって尚…いや問題ない。どんな攻撃でも俺の破壊殺・羅針は感知する。相手の闘気が強ければ強ければ強いほど羅針の反応も強まるだけ…何だ？この奇妙な気配は、なにか別の生き物になったようだコイツ。

闘気が消えた、いや、闘気が完全にない！落ち着け！来る！

ヒノカミ神楽 斜陽転身

魂の呼吸。陸の型 破魂

「炭治郎さん、妖夢さん、その成長力は、鬼よりもはるかに上を行きましたね。やはり、鬼は停滞した考えしか持たないからこうなるのだと思います」

その技が放たれた時、八橋はそう呟いた。

封印と恋

枷を碎けばはるか強い鬼の封印が解ける

私はその言葉の重みに耐えていた。

他の上弦、いや、もしかするともう1人の鬼の始祖か、この場にまで来られればジリ貧だ。

だが、ここで引き下がる訳にはいかない。

風の呼吸。拾の型　霧飄

「お前の動きなど見切ったわ！」

勇儀は金剛一進を放つ。

当たる訳が無い。私の霧飄は鬼殺隊最速最強なのだから。

それにその技が出るのを待っていた。やはり、私の速さはこれ以上だと気づいていない。

私は大きく

風の呼吸。肆の型　昇上砂塵嵐

私は勇儀の左半身を斬る。

「フン、残念だったな、僅かにズレて…」

「妹紅さん！今です」

炎の呼吸。拾の型　煉獄鳥

妹紅さんの髪が大きく燃え上がるように見える。

そして背中には炎の翼をまとうているようだ。

「私は痣など出さぬ。それよりも速く、そして強くあるべきものだ。それが柱の役目！」

勇儀の頸が浅く斬れる。

さらにもう一撃！

だが、勇儀のもうひとつの枷が碎けただけだった。

防がれたか、

「私に勝とうなんて百年はや…いい…」

勇儀は突然、震え出す。

そして頭を抱える。

何があったんだ。もしかしてもうひとつの封印が外れて自分自身

がより危険なものへと変身するのか。

その危険性がひしひしと伝わる。

だが、勇儀の髪の色は黒へと変わる。

更には呼吸も苦しくなる。

そして顔を上げた時には

片目が花のような瞳をしている。

「私は…私は…」

「なんだ、何が起きたんだ」

「私は…恋雪…私は恋雪！」

その言葉を私たちは聞いて驚愕する。

さつきまで戦っていたおには上弦の肆、勇儀だったはず。

だが、2つ目の枷を壊した時、頭を抱え、顔をあげれば別の女の鬼、
一体どういことなんだ？

「私は…今全部思い出した。私は200年近く前…」

「あら、初めまして、あなた、毒を盛られたのね？もうすぐ死ぬかもしれないわ」

「し…に…たく…ない…」

目の前にはこの国では余りみない履物を履いた女の子が立っている。

「一つだけ助かる方法があるわ…それはね…」

「どうなっても…いい…私は…生きなきゃ…」

自分は生きなければならぬ。来月には祝言をあげるからだ。

「生きたいんなら私があなたにできることはするわ。さあ、私の血を
飲みなさい」

私は垂れ流された血を藁をも掴むように飲み干す。

すると、体の奥がものすごく熱くなる。

自分が自分ではないかのような変化が起きる。

頭はクラクラし、目の前が突然回りだし、意識を失う。

「ふーん、まあ仕方ないわね。強そうな女じゃないし、でも強くなれる
可能性はあるから、楽しみね」

その意識のあるうちに聞こえた言葉はやはり異常だった。

そして2日後、私は目が覚める。

「あ、起きたのね？」

私は目を覚ますとそこは見たこともないような建物の一室だった。

私は厠を探す。

その時鏡に映ったのは栗色の髪をし、赤い角を額に生やした姿だった。

私は自分の姿に驚愕をする。

「あら、もしかして、鬼になつたら見た目が変化することに驚いたのかしら、ならば、私があなたの人間だった記憶をゼーくんぶ忘れてもらうわ」

そして私は鏡の前で手を床について座っている私に枷を嵌めた。

「あなたは今からは勇儀と名乗りなさい。そして、あなたは私のセブンスナイトとなるのよ」

「わかりました……」

それから私はあのお方を200年近く護るセブンスナイトの一員として戦い続けた。

そして3年前、

「結婚なさるんですか！」

「ええ、私たちの勢力だけではまだ世界を手に入れるには力不足、何よりこれからは日本が世界に戦いを挑める国として台頭してくると思うの。だから、私が日本の鬼の頭領と結婚すれば、その勢力をここに持ち込められる。私はそう見えるの」

結婚の前にその頭領は、十二鬼月と私たちセブンスナイトで大血戦をすることとなる。

その結果私は猗窩座という鬼を破り上弦の肆として十二鬼月に入ることとなった。

だが猗窩座には私は何かを感じていた。

もしかしてあったことがあるのかもしれない。

でも私には記憶がなく、何を訴えているのか理解が出来なかった。

でも私はよく猗窩座と酒を酌み交わしたり一緒に飯を食うことも

あった。

私は性格が変わっていて口調というのも鬼になってからのものであり、人間だった時とはまるで違った。

だが猗窩座は何かが違った。

過去のことに囚われているようだ。

自分のやってしまったこと、自分の経験が全て血鬼術に現れている。

私はその中でも雪の結晶のような術式展開を見た時は、少し懐かしさを感じた。

私はなにか、忘れていたような、私は鬼になる前は何を欲していたのか、それが私を悩ませ続けた。

だが今、私はその記憶を封じた枷が外れ、自分の本当のことを思い出せた。

「行かなきゃ、私は粕治さんと祝言をあげたくて鬼になったんだ。あの人の元へ」

そう言って恋雪と名乗る女鬼は戦いの場から逃げ出す。

「お前！戦え！私たちは鬼殺隊だ！私がお前の……」

「文、お前、あの好戦的な不死川さんみたいになってるぞ？それに、わからないのか？あの女鬼の本当にやらなきゃいけないことを」

「なんなんですか！教えてください」

「あの女鬼が探している鬼は恐らく、私の兄いを引退に追いやった猗窩座という鬼かもしれない。でも、もしそれが本当ならば、私たちは2体の上弦の鬼の最期を見届けようじゃないか」

「そうよ、文、恋というものは誰にだってある。それがたとえ鬼どうしであっても、変わることはないわ」

私はただただイライラするしか無かった。

でも私の心の知りたい欲求が駆け巡る。

「わかりました！行きましよう」

そう言って4人は猗窩座の所へと向かった。

運命のめぐりあいと奇跡の最期

闘気は一切ない人間をこの百数十年間俺は一度も見たことがない。赤子ですら薄い闘気があった。

だというのにコイツらはあの一瞬全く闘気が無くなった。そこにいるはずのない異物と対面しているような状態に。

感覚が混乱を起こした。俺の羅針は無反応、だがそんなことは問題ではない。戦いの場においては初めて遭遇する事態全てを即座に理解し対処しなければならぬ。俺はそれが出来るはずだった。

しかし、この短時間の戦闘でコイツらは何かを掴み俺の速度をはるかに上回った。

百数十年の武術の粋を正々堂々真正面から打ち砕かれた。

その瞳の中には怒りもなく殺気も闘気もなかった。おそらくその瞳が捉えていたものは、俺が求めていた至高の領域。無我の境地に他ならない。

その境地があるということを漠然と感じていたが今尚俺はそこにたどりつけずにいた。

まだ戦える！俺はまだ強くなる！

「猗窩座——！」

俺の頭は地面へと落ちる。

終われない！こんな所で！俺は強くなる！誰よりも強くならなければ！もつと強く……！

「頭が崩れました！」

「勝てた……!?!」

「何故だ！何故体が崩壊しない！」

俺は……まだ戦わなくちゃならねえんだ！

術式展開！

まだ終われねえん……

「狛治さん！」

誰だ！俺の名を呼ぶのは！

「狛治さん！もうやめて！」

俺は突然抱きつかれた。

「私……あなたと離れ離れになって190年間……勇儀として鬼になつてたの……」

どういうことだ、恋雪は死んだはずじゃ……

「私、あの夜、毒の入った井戸水を飲んで死にかけた……。でも私はあなたと祝言をあげたいがためにあのお方が助けてくださったの！」

そうか……もしかするとあのお方の妻が助けてくれていたのか……。

「そして私は、記憶の封印とあの危険な鬼の封印の枷をつけられ、勇儀として生きていたの！私は、あなたのすぐ近くにずっと居たの！」

俺は……なんで気づかなかつたんだ……。

いや、俺の無意識なところで俺は気づいていた。

体が反応してたんだ。

だから俺は、お前を……。

「狛治さん……、ごめんなさい……私がああ井戸の毒を飲まされたばかりに……」

そうだった……。あの時俺は恋雪と祝言をあげる前だった。

俺は罪を重ね、病に伏せた親父のためにと思っていた行動で自殺した。

そして俺はその時、周りのヤツらに当たり散らしていた。

そんな時だった。

「すげえな、お前筋がいいなあ、大人相手に武器も取らずに勝つなんて気持ちのいいやつだなあ」

俺はものすごく強い男に道場へと誘われた。

だがその時は若さの至りなのか俺は断り刃向かったがその男は俺を本の数瞬で気絶させた。

「いやあ、目覚めるのが速いなあ、あれだけ殴って半刻もせずに目を覚ますとは、大したもんだ！」

俺は慶蔵、素流という素手で戦う武術の道場をやってるんだが門下生が一人もいなくてな、便利屋のようなことをして日銭を稼いでるん

だ。

お前にまず、やってもらいたいののは病身の娘の看病だ。俺は仕事があるもんで任せたい。先日妻が看病疲れて死んでしまって大変なんだなあこれが、本当に俺が不甲斐ないせいで妻にも娘にも苦勞をかける」

「娘一人の家に罪人の俺を置いてっていいのかよ」

「罪人のお前は先刻ボコボコにしてやつつけたから大丈夫だ！」

「紹介する。俺の娘、恋雪だ」

その時、俺は可愛い、そう思った。

この娘をどうかしたい。

その思いで俺は四年間付きつきりで看病したおかげで恋雪は普通に暮らせる程回復した。

そして、俺は慶蔵に。

「この同情を継いでくれないか、恋雪もお前のことが好きだと言っているし、何よりお前は随分改心した。お前やってしまった過去はとりもどせないが、俺はお前を全て許す。お前なら、俺よりももつと強くなる。それにお前のことを尊敬してる子が来月門下生に入ることになった。頼んだぞ！」

その時は俺の人生で最高の瞬間だった。

それにこんな運命になるなんて俺は想像もつかなかった。

真つ当に生きよう、人生をまたこれから始めよう。そして俺はこの2人を守りたい。そう思っていた矢先。

「伯治！誰かが井戸に毒を入れた！そのせいで慶蔵さんと恋雪さんが死んでしまった！」

俺は過ぎった、隣の剣術道場が嫌がらせで素流道場に入ろうとした人を全て横からかつさらっていったという話は聞いていたがここまでやるとは…

俺は全力で2人の元へ向かう。

だが、そこに横たわっていたのは慶蔵だけだった。

「おかしい…」

俺はそう思いながら亡くなった慶蔵の手を握っていた。

そしてその場で話し声が聞こえた。

「さつき、剣術道場の坊ちゃんやんが素流道場の所から出てくのを見たんだけどもしかしてあの坊ちゃんやんがやったかもしれないわね」

「なんか壺みたいなのを抱えてたけどまさかね」

俺は怒りに溺れ、剣術道場の男、90人を皆殺しにした。

でも：俺は腑に落ちないことがあった。

何故あの場所に恋雪がいなかったのか、

何故、あの男はそんなことを言ったのか、

あれは嘘だったのか？

俺は全力で走り、そしてもうどうでも良くなった時にあのお方が俺の目の前に現れた。

「まさか鬼の配置していない駿河で鬼が出たとの大騒ぎで態々出向いてきてみれば、ただの人間とはな、なんともつまらぬ、だが…」

俺の頭をあのお方は貫く。

「十二体程の強い鬼を造ろうと思っているんだお前は私の与えられる大量の血に耐えられるかな？」

「鬼なってもいい、もし、恋雪に会えるのならば、構わない」

そして、190年もの時を越え、やっと、会えた。

「運命は：時に残酷だが：お前も鬼になっていたおかげで会えた…」

「この運命に私たちは感謝するしかないわ」

俺は全てが叶った。もうこの世に思い残すことも無い。

「恋雪、俺はお前とこの世で最期をともに出来て良かった。俺とともに行かないか」

「ええ、もちろんよ、地獄の果てでも、私は狛治さんについて行くわ」

「ありがとう恋雪」

「狛治さん」

そして俺たちは互いの胸に手を当てる。

破壊殺・滅式

血鬼術。金剛一進

パアン

「うとうつ…お二人共…お幸せに」

「逝ったか…2人とも最期は笑顔だったな」

俺たちは涙を流していた。

上弦といえど、悲しい者たちだった。

運命というものは不思議なものだ。

「俺は…胡蝶とあのような恋ができるか…」

「まずその前にまともに話せるようになってからになりましょう」

富岡さんはしゅんとなっていた。

「上弦ノ肆！上弦ノ伍！義勇、妹紅、炭治郎、妖夢、文、アリス、弁々、
八橋、八名ニヨリ撃破！」

鎧鴉が飛びまわる中俺たちは

無惨の方へと向かった。

彌豆子の脱走と育手たちの覚悟

地図を作成し始めて3時間が経つ。

この間に上弦が三体も倒された。

今までの思いが大きくのしかかってくるのを感じる。

「今どのくらい攻略出来ました？」

「まだ4割ほどだと思う。それよりも無限城がとてつもなく広い。

それに、石造りの空間があるなんて、それに十二鬼月は残り半分、ここから子供たちの本当の勝負が待っている。

私たちも手をとめない。そして明日の太陽を鬼の存在しない世界で見るんだ」

「天元は今頃何してるのかな、あいつのことだし、未だに上弦と戦えてないんだろうな」

「行冥は今頃、上弦の壱か弐の元へ向かっていると思う。私が教えた岩の呼吸をより強くしてくれたんだから」

「でも今その柱は28なんだろ？ 痣なんか発動したらほぼ死ぬんじゃない？」

「幽香！ 私の事をおちよくるのはやめなさい！ それに私の方が年上よ」

「はあ？ 60越えてその顔とかどんだだけ若作りしてんだよ。もしかして鬼みたいにも人でも食ってるのか？」

「玄弥くんとは違いますからね！ それに幽香も60よね？」

「あたしの歳やっぱりわかってたか、まあ、私もそろそろ育手引退かね…」

「あのお、すみませんがお二人共子供とかはいらっしゃったりするんですか？」

「子供？ そんなのいるわけ…」

「私は既に孫までいるわ」

「ふざけんのも大概にしるよ変態尼！」

「子作りして何が悪いの？ 子孫繁栄は大事なことですからね」

「私、子供を作るために引退して、最近鬼殺隊に復帰したら柱が全部埋

まっつて戻るに戻れなかつたんですよ……」

「それは仕方ないわね、先代のお館様がせつかく11人にまで広げてくださったのに入れないなんて残念ね」

一方その頃、隣室では、

「グルルルル」

大分苦しんでるように見える。

先代のお館様に協力していた珠世という鬼が寄越した薬、言われた通り使ったが……果たして禰豆子は人間に戻るのだろうか。

禰豆子が人間に戻れば無惨の目論見は潰える。

1100年かけて探し続けた現世の神への夢、太陽の克服はふりだしに戻る。

日光で消滅しない鬼はこの長い年月で禰豆子一人だけだ。

最終局面という言葉が何度も頭をよぎる。

この長い戦いが今夜終わるかもしれない。

まさかそこに自分が生きて立ちあおうとは、

炭治郎、思えばお前が鬼になった妹を連れてきた時からなにか大きな運命の歯車が回り始めたような気がする。

今までの戦いで築造されたものが巨大な装置だとしたならばお前と禰豆子という二つの小さな歯車が嵌ったことにより停滞していた状況が一気に動き出した。

そして今、上弦を倒せるところまで来た。

炭治郎、お前が無惨を倒すのだ。

そして私が鬼のいない世界で生きさせてくれ。

「行かなきゃ……」

突然禰豆子は目を覚ます。

「どうした……禰豆子、突然起きて」

私は禰豆子の手首を掴む。

「私を呼んでいる。私は行かなきゃならない。あの場所へ」

「禰豆子！」

禰豆子は突然起き上がり、私の手を振りほどき、屋敷を飛び出す。私は全力で追いかける。

「禰豆子！外へ出ては行けない！」
だが追いつかない。

禰豆子はどんどん小さくなっていく。
すると、ある場所で禰豆子は消えた。

私はその場所へと向かうとそこには一枚の障子がスーッと消えていくのが見えた。

禰豆子はやはり炭治郎の元へと向かったのか、もしかすると炭治郎に何かあったのかもしれない。

私は急いで新産屋敷邸へと戻った。

「なに!? 禰豆子が突然逃げ出した！」

「私の掴む手を振り切って禰豆子は無限城へと言ってしまった。もしかすると、炭治郎に何かあったのではないか」

「あるかもしれませんがね、やはり兄妹ですからお互いに何かあればもう1人にも過ぎるって言われてますからね」

「はあ、炭治郎と禰豆子が心配で汗が止まら…」

プチッ

「何か潰したようだが何が？」

そこには大きな目玉をつけた虫が潰れて死んでいた。

「うわー！ 気持ち悪い」

育手の女性たちはみな気持ち悪がっていた。

そこに、

「あらみなさん、何かありましたか？」

「ちよつとこれ！ 変な虫が入ってきてたの！」

幽香は布で挟んだ虫をにとりに見せる。

「あ、これ柱の人たちも言っていた鬼の操る虫かもしれませんね」

「ということはもしかしてここがバレた!？」

一大事だ。新産屋敷邸は愈史郎という鬼の血鬼術によって隠され

ているはずじゃないのか。

私たちは混乱する。

「落ち着け、まだ全てが割れてしまったわけではない。それに、この虫は禰豆子が横たわっていた所にいた。おそらくは…」

「鬼がやってきたぞ!!」

まさか、本当に場所が割れてしまったのか!

私は急いで屋敷の外へ出る。

すると、何体もの鬼があらわれ、そしてそこには影で見えないが女の鬼がいた。

「あら、みなさん、鬼殺隊の方々?」

「フン、私たちは名乗るものではない。それに、お前は鬼だな」

「そうですよ。でも、あなたたちは随分お歳を召しているのですね。私はあなた達に聞きたいことがあってここに来たのです」

「どういうことだ」

「私たちは禰豆子ちゃんを探しに来たんです。この先の屋敷にいるんですよ?」

こいつはなんなのか、そして先程の虫とは全く関係の無い鬼なのか、だが、私は命の危険を感じている。

鬼のいない世界で生きる。その生きている間に叶えられるか分からない夢が成就されようとしてきたところだ。

「禰豆子という鬼はいない。そなたは早々に立ち去れ」

「禰豆子がないなんてありえないわ、それに私は見えるのよ、あなたたちがここでヘトヘトになる所まで」

「何?」

「決裂ね、じゃあ鬼ども、この歳の食った老いぼれどもをやっつけなさい!」

鬼は襲いかかってくる。

「私たちも久々に鬼と戦えてうずうずしています」

「引退したからって強さはほとんど衰えてないんだからね」

「俺は父上とともに戦えることが嬉しい」

「気を抜くんじゃねえぞ杏寿郎、それに、俺もまだまだ戦える」

「子供たちのためにも私は頑張らなくちやな！」

「さあ、皆の者、行くぞ！」

お館様を守るため、私たちは朝まで戦うと覚悟を決めた。

1万人の教祖としのぶの怒り

「カナヲ！こつちです！」

「もうすぐ師範と私たちの因縁の鬼と戦うんですね」

「童磨、その鬼は一万もの信者を従えし邪教の教祖、思えばあいつの顔を一度も拝んだことは無かった。だが、従えるには相当の貌を持つてるんでしょうね」

「これでブサイクなら笑って殺せる」

「それはそれで面白いわね」

私は無惨と向かった時はカナヲと一緒にだった。

だからこそ無限城での探索も2人でできた。

おそらくこれほどの大きな城の中でここまで広いところはあと4つしかない。

そのうちの一つがこの城の食糧庫。一万人もの人を押し込むには絶好の場所。

私は大きな門を開ける。

「美味しいよ、君が最後に食べられたら言うから大切に食べてるんだよ…」

そこには冠をつけた金髪の男が背を向けて食っていた。

「おや、来客かな？おかしいな、無限城の中だから来客と言ったら種類しかないな」

そう言って振り向く。

「あなたが、童磨…」

「よく知ってるねえ、俺の名前、知ってる人そんなに居ないはずなんだけど」

「嘘ね、一万人もの信者を抱えておきながらその言葉、よく吐けるわね」

「そうだった、万世極楽教は一万人を超えてたんだった。でもね、君は勘違いしてるよ？」

「!？」

「一万人じゃなくて、今は600人だよ。俺たち上弦の3人でわけ

あつて食べたんだ。まあ猗窩座と勇儀は一切口にしなかつたんだけどね、それに、見てよこれ。君たちと同じ髪飾りの子がいてちよつとびっくりしてるよ」

私はその髪飾りを知っている。鈴仙に渡した髪飾りだ。

「やつぱり見覚えある？それとも君つてお知り合い」

「よくも……………、よくも鈴仙さんを！」

「カナヲ、ここはあまり動くところではないわ」

「師範…………」

「あなたは、その娘をいつ食べました？」

「いつつて？今食べてる娘がそうだよ。じゃあ僕は全部食べきつちやうからね。それと、口元にその布をつけているのは何？」

「あなたのことはよく知ってますよ、あなたの名前も、あなたのいる宗教の名も、そして、あなたの血鬼術もね！」

「ははは！そこまでご存知なら話が早い！俺の食糧になれば、すぐにも永遠の極楽に浸れるよ。それこそ俺の万世極楽教の本当の意味だからね」

「私たちは、あなたを拒絶します」

「どうしてだい？」

「私の羽織を覚えてますか？」

「ん？ああ花の呼吸を使つてた女の子、確か、胡蝶カナエだったかな。彼女はまさか僕の寺院を突き止めるとは思わなかつたからなあ、おかげで俺は本山を移さざるをえなかつたけどね。

それにあの子の左足首だけは美味しかったよ！まああの子は凍つた足を切り裂いて片足立ちになってまで俺と戦つてただけだね」

「私は胡蝶カナエの妹、胡蝶しのぶ、あなたを倒す者の名です。地獄へと土産にでもね！」

もうこの因縁を断ち切る！そう私たちは決めたんだから。

蟲の呼吸。蜂牙の舞。真靡き

花の呼吸。肆の型。紅花衣

血鬼術。蓮葉…

ドーン

「どおおりやあああ天空より出でし伊之助様のおとおりじゃあああ！」

獣の呼吸。 伍の牙 狂い裂き

伊之助はそのまま戦いに割った形で落ちてくる。

「カラスの道案内はドンピシャだぜえ!!上弦のつええ奴はどこだ!?!」
「痛いよ。突然どこからともなく現れて俺の目をさらつと斬っちゃつてさあ、なんてことしてくれたんだ」

「おおっと!お前か、お前が上弦か!それにおめえ!上弦の参だな!バレてるぜ!テメエのが上から3番目だつてことは俺は知ってる!テメエを倒せば俺は柱になれるかもしれないねえんだぜ!」

「別に隠してるわけではないけど、面白いね!猪頭の少年」

「俺は伊之助様だ!俺は柱になる男だ!よく覚えとけ!」

上弦の参?姉さんから聞いていた話と違う。童磨は上弦の式だったはず。どうして参になっているのかわからない。

まあ何かしらで降格したのだけはわかった。

「それに、しのぶ、カナヲ、元気そうだなによりだ」

「伊之助くん、その口の利き方は良くないと思いますよ」

「ああすまねえ、しのぶさん、お元気そうで」

「はい!よろしい」

「じゃあ、いっちよやったるか!上弦の鬼退治とやらをなあ!」

「俺の顔に傷をつけたのは君が二人目だよ」

童磨は扇を開く。

血鬼術。粉凍り

やはり、その技を使うか、だがその技は、姉から聞いた時点で既に察していた。

私は羽織の裾で口元を覆う。

カナヲも同じように袖で覆う。

「おおぅ…さみい…なんだアイツ、氷でも使うんか!?!それにしても寒いぜえ…」

伊之助のその格好はさすがにバカだと思った。

あの上弦が氷の血鬼術を使うと言うことを知らずに半裸で戦いに来るのは自殺行為と変わらない。だが、私たちなら痣の発動をすれば倒せる可能性が上がる。

「もしかして痣を発動させる気かな？」

!?

「無理だよ、俺の血鬼術はこの食糧庫全体に広げてある。

それに、黒死牟から聞いたんだけどさあ、痣の発動条件って39度5分以上と心拍数210以上、その両方がないと発動しないってね。

ならば体温を下げさせればいいって気づいちやっただ。

これで君たちは痣の発動は出来ないよ。この食糧庫にいる限りね」

まさか鬼の方にも痣の発動条件を知るものがいたとは!?

つまり、やつを倒すために痣の発動は一切使えない。

この選択肢を一つ削られてしまった。

だが、私は既に一つの勝つための策に奴は嵌っている。

そちらの方が大きいのであれば時間が経てば勝負がつく。

それまで持ちこたえられるかにかかっている。

童磨の過去と裏切り者

俺は子供の頃から優しくかったし賢かった。

可哀想な人たちをいつだって助けてあげたし幸せにしてあげた。

それが俺の使命だから。

「この子の瞳の中には虹がある。白椽の頭髪は無垢な証、この子は特別な子だ」

「きつと神や仏の声が聞こえてるわ」

俺の親は頭の鈍さは絶望的だった。

そうでなければ極楽教などという密教は作れないけど、

可哀想だったのでもいつも話しを合わせてあげてたなあ、神や仏の声なんて一度たりとも聞こえることは無かったけど。

初めは寄って集って崇められ祈られさすがに困ってしまった。

子供相手に泣きながら苦しい辛いどうしたらいいって僕は地蔵の生き写しかつてバカにしたくもなかった。

欠伸の出るような身の上話をした後、どうか極楽浄土に導いて欲しいと頭を下げられた。

俺は泣いた。

可哀想に極楽浄土なんて存在しないんだよ。人間が妄想して創作下御伽話なんだよ。

神も仏もこの世には存在しない。そんな簡単なことがこの愚かな人たちは何十年生きていて分からないのだ。

死んだら無になるだけ、何も感じなくなるだけ、脳が止まり心臓が止まり、血の巡りが絶えて腐って土に還るだけの話だ。生き物である以上須らくそうなる。

こんな単純なことも受け入れられないんだね。

頭が悪いと辛いよね。気の毒な人達を少しでも幸せにして死ぬるように助けてあげたい。そのために俺は生まれてきたんだ。

そして俺が20歳の時、時代は明和、俺の両親が死んでたった1人で教祖をしていた頃。

「はあ、なんで最近女ばかり来るようになったんだ？」

途端に信者が女に偏り出した。

だいたい来るのは吉原で足抜けして来た女ばかり。

まあそれもこれも俺が住んでる本山が神田川の近くだったことに他ならないんだけど。

その時やつてきた信者は花魁の格好をしたものだった。

「お前、面白い男だ。鬼にならないか？」

「あ、もしかして別宗教の方？悪いけど俺はこの宗教を広めたいんだ。だから、信者は全体に渡さないよ？」

「お前はその望みを叶えたいのか、ならば鬼になれば永遠に教祖となれば人を導けるぞ」

「それはいい！俺は人を導ければそれでいいから」

「話がはやいな、さあ、腕を出せ」

「はいよ」

俺はそれから鬼となった。

だがそれから100数十年が経ち明治末期、

「あなた、教団を運営してるのね」

「そうだけど？俺あのお方のせいであんまり信者増やせなくて困ってさあ、250人までじゃないとダメって言われてて…」

「あなたならもっと増やせると思うわ、それに、私が教示してあげるから」

「ありがとう、でも、あのお方との血の呪いは…」

「なら、私の眷属となりなさい。あの方の呪いをゼーんぶ壊しちゃって私の血で改めて鬼になるの。」

そうすればこの教団は日本、いや、世界中に信者を抱える大教団へと登りつめるのよ！

あなたはそこの大教祖となり、果てはキリスト教や仏教などの信徒を全員改宗させ、この世界の統一宗教になる。私にはその未来が見えるのよ」

「ほんと！俺の思いを組んでくれるなんて嬉しい！こんな気持ちになつたの初めて！」

「じゃあ私との契約ね。既に玉壺とは手を組んでるし資金面でもさら

に充実するわ」

「ありがとう！でもなんでそんなに手を貸してくれるの？」

「私はね、もうすぐあの人と結婚するの、その前に認められるべき者の増やさないとってね」

「ということとは俺を上弦の壺に？」

「それとこれと話が別だけど、いずれはそうなるかもしれないわね」
俺はとにかく喜んだ。

無惨様よりもあのお方の方に付いて言ったおかげで教団は信者が5桁にまで達した。

そしてその増加に気がついたのがカナエという柱だった。

「クククククツ」

「何を笑ってるんですか？」

「まさか君は姉と同じく痣を発動させようとしていた。やっぱり姉妹なんだね」

「何!?姉さんももしかして…」

「そう、痣を発動してたんだよ。あの時はホントびっくりしてさあ、顔に花柄の紋様が出てたし、何より僕を初めて傷つけたのはカナエだからね」

「ふ……ふざけんじゃないわよ！」

しのぶは怒りを露わにし、突きかかってくる。

「あゝ、その美貌が怒りで台無しだよ！」

蜻蛉の舞。 複眼六角

「痛いなあ、あちこち服がボロボロだよ、あ、そういえば君、鬼の頸を斬れないんだっけ」

「それがどうしたと言うんですか？」

「鬼の頸を斬れないならこの戦いにおいても邪魔な気がするんだよね！」

血鬼術 枯園垂り

花の呼吸。 式の型 御影梅

獣の呼吸。 肆の牙 切細裂き

「周りが見えなくなってるぜ」

「師範、私たちが絶対にあの童磨の頸を取ります。師範は補助をお願いします」

「わかりました。あともう少し待てば勝機はあります。あまり急ぎすぎないよう注意してください」

あの3人は連携が取れてる。

でも、勝てる見込みなんて生まれるわけが無い。

それに今この状態でも体力や体温を奪われているわけだし人間とは違って鬼は凍死なんてしないんだから。

血鬼術。蔓蓮華

「おせえんだよ」

「それはどうかな？」

血鬼術。散り蓮華

獣の呼吸。拾の型 円転旋牙

「ほほう、やるねえ」

「テメエの技なんて俺の感覚で全部わかるぜ」

俺は距離を取る。

血鬼術。冬ざれ氷柱

「近づけなきやこつちのもんだよ」

「俺のこと舐めんなよ！」

獣の呼吸。玖の牙 伸・うねり裂き

「え？」

その腕はあらぬ方向へと曲がり、俺の頸が半分斬れる。

「いやあ、何あれ、おそろしいわ」

「クソっ新技はまだ精度がイマイチか、だが、お前の頸に刃が入ったのはわかった。お前の命もあと少しだったってこともなあ」

「それはどうかな？俺と君たち、どっちが勝つかな」

伊之助の過去と乱入者

「俺はそこいらの有象無象とは訳が違うからな。俺ならお前のその面、ズタズタにしてやるぜ」

!?

なんかスースーする。

俺は一瞬身構える。

「伊之助！」

やはり被り物を取られている。妙に音の響きが違う。

「あ、やっぱりこれ被り物かあ、猪の頭の人間なんてそうそういないよ、オーガとかゴブリンとも違うからもしかしたらと思っただらやっぱりね。んーかなり年季が入ってるねこの猪の皮、目はどういう加工してるのかな？」

俺の形見。俺の毛皮！

「テメエ…、返しやがれ！」

「あれ？君の顔見覚えがあるよ。年はいくつ？」

「は？俺は歳なんか数えたことねえよ」

「俺と会ったこと絶対ある。俺は君の顔と似た人を知ってるよ」

「はあ？テメエみたいな蛆虫とあつた覚えは一切ねえ！それに汚ねえ手で俺の毛皮に触んな！」

「俺は会ったことあるよ。もしかして君、嘴平って苗字？」

「え……………？なぜ俺の苗字を知ってるんだ？」

「やっぱりね！そう、君の母親、嘴平琴葉という子、そしてその息子、嘴平伊之助。あれは16年半前、琴葉は赤ん坊だった君を抱いて僕の寺院に駆け込んだんだよ。」

旦那が殴るんだって毎日姑にも毎日いじめられて、俺の寺院に保護したんだけど、あの子には親も兄弟もいなくて頼れる所も行く所もない。

最初彼女を見た時顔が原型もわからないくらい腫れててあちこちから血が出たんだよ。酷いことするよね。

殴られたせいで左目の失明と右耳の失聴をしたけど顔は手当した

ら元に戻ったよ。今までの信者で一番綺麗な子で印象に残ってる」

「俺に母親なんかいねえ！俺を育ててくれたのは雌の猪だ！関係ねえ！」

「君は猪から産まれた訳では無いよ。人間なんだから人間から産まれているでしょう」

「うるせえんだよ！ポケカスがあああ！」

「まあ人の話を最後まで聞きなよ。こんな巡り合わせ、奇跡でしょ」

俺は突然斬られる。

「伊之助くん？あまり動かない方がいいですよ」

「落ち着いて！今は相手に乗らない方がいい！」

そして童磨という鬼は話を続ける。

「君のお母さんのことはね、喰うつもり無かったんだよ。心の綺麗な人が傍にいと心地良いだろう？お母さんは頭が少し残念だったけど直感や閃きはすごくてね。」

それに、美しかったし歌も上手で君を抱いてよく歌ってたよ。どうしてだか子守唄よりも創作の指きりの歌をさ。

ゆびきりげんまんってそればかり君に歌ってたよ」

なんだかわからないが懐かしいような声がする。

俺は赤ん坊のころ、歌われていたんだ。

記憶が少しづつよみがえっていく。

忘れていた、母の顔を。

「指きりの歌は毎回歌詞が違うんだよね。途中から狸の歌になったり節みたいたいになったりと可愛かったなあ」

思い出した。しのぶに似てはいたけどもっと髪が長い、それに、俺にそっくりだ。

「寿命が尽きるまで俺の付き人にして喰わずにいたんだけど、琴葉は鋭すぎる直感でバレちゃったんだよ。」

俺の本当の素性も、俺の教団が鬼との繋がりにあること、そして俺自身が十二鬼月の当時は式であったことまでね。

まあ罵る罵る。酷い、嘘つき、何度も肌を重ねた時間をかえせって

ね、それで俺の寺院を飛び出して行っちゃったから、追いかけたらさあ、伊之助がいないんだよ。

もしかしたら川に落つこととして先に逝ったんだと思ってさあ、探さなかつたんだ。まあ琴葉は骨も残さずぜーんぶ平らげたよ。

不幸だよねえ、幸せな時つてあつたのかな？なんの意味もない人生だったと思うよ。君のお母さん、琴葉はね。まあ俺と琴葉で撮った写真だけが唯一意味があつたくらいかな」

思い出が蘇る。

その思い出は俺にとつて忘れていたかけがえのないものだ。

「本当に奇跡だぜ。この巡り合わせは、俺の母親としのぶの姉を殺した鬼が目の前にいるなんてなああ！謝意を述べるぜ！思い出させてくれたこと！ただ頸を斬るだけじゃ足りねえ！テメエには地獄を見せてやる！」

「猪に育てられたというのによく言葉を知ってるね。だけど間違つたことも覚えたみたいだ。この世界に天国も地獄も存在しない。ただの空想、作り話だよ。

現実には善良に生きてる人間の心を貪る悪人がのさばつて善人を嘲笑うように甘汁を啜っているからだよ。

天罰も存在しないし悪人は死後地獄に行くって思わなきや精神の弱い人たちはやってられないでしょ？人間って気の毒だよねえ」

「地獄がねえなら俺が作つてやる！俺の母親を不幸みたいに言うなボケエ」

「あつ、そういえばそろそろ時間かな、もうすぐ猗窩座たちが死ぬ頃だと思う。ちよつと見に行こうかな。君たちの相手はこの子にして貰うよ」

血鬼術。結晶ノ御子。

「なんだそのチビは…」

散り蓮華。

「ぬあああ！」

「この子俺と同じくらいの強さの技出せるんだ。あとは任せるね」

「待てテメエ！逃げん…」

「たのもー！ここに強い鬼がいるって鴉が言ってたからあたいがやってきたぞー！」

逃げようとした童磨の前に現れたのは小さな女の子。

「君？こんなところに来て何も無いよ？ここには馬鹿な鬼狩たちしかいないか…」

「久しぶりだね…覚えてる？あたいの両親を殺した悪い鬼、その鬼がこんな場所にいるなんてね…、ここであつたが十年目！」

氷の呼吸。式の型 氷山割り

「おおっと！危ないなあ、まさかこんなおチビちゃんが鬼狩なんて、びっくりしたよ」

「あんた、あたいのこと覚えてないよね。そりやそうだよ。あたいはあんたと会うのは初めてだからね。」

でもあたいはアンタのことを知ってる。覚えてる？あたいは氷川智溜乃、氷川製氷の一人娘、アンタの教団と取引してた製氷会社だからね！」

「そんな！まさかあの製氷会社って…」

「そう、アンタがかき氷の氷の質が落ちたって気分だけで殺されたあたいの両親は気の毒だよ。アンタと取引すれば儲かるって私の両親は大はしやぎしてたのにさあ」

「ここでアンタをぐちゃぐちゃの粉々にしてやる！」

「ほう？できるかな？俺の事を」

血鬼術。 蓮葉氷

血鬼術。 粉凍り

これだけの技を打てばカナエのように肺がボロボロに…!?

「フウ、効かないねえ。そのくらいの寒さ、あたいは、対策済みなんだよー！」

「なんでだよ！俺の氷の血鬼術が効かないなんて！」

「あたいはねえ、修行したんだよ。富岡さんの指示で北の大地、大雪山近くで鬼狩りしてりや効かないんだよ！」

やべえ、とんでもねえやつがやってきた。

俺は同じ感じのやつが来たことで少し危機感を感じた。

童磨の崩壊と私の役目

私は時計を確認する。

あと少しで、私たちは勝てる。

既に罠にかかった童磨はもうすぐ倒せる。

「これならどうだ！」

血鬼術 寒烈の白姫

童磨は既に劣勢だ。

ここに来て予定外の智溜乃さんが加わったおかげでより勝つ可能性が見えてきた。

「伊之助くん！カナヲ！智溜乃さん！一気に畳み掛けます！」

「はい！」

獣の呼吸。式の牙 切り裂き

花の呼吸。伍の型 徒の芍薬 二十七式

氷の呼吸。壺の型 氷雨

「あーやばいやられる！なくんちゃって」

血鬼術 結晶ノ御子

「ちっ、まだそのチビを出せるのか？」

「甘すぎるよ、俺の結晶の御子は沢山出せるからね、それに、君たちの柱が一番大変なことになってるよ」

「な!？」

私は足元を見る。

膝から下が凍らされ、床に貼り付けられている。

「童磨、あなたというやつは！」

「人質だよ。君たちの師範の体の一部を失いたくないなら君たちはただ凍りついて死ぬだけだよ」

童磨はみんなを煽る。

だが、既に私は決めていた。

ここで話すのは少し早い気がするけど。

「童磨、あなたはまだ気づいていないことがある」

「なに？俺は賢いし気づかないわけないじゃないか」

「私は今まで、どちらの手を使っていたか気づかなかったの？」

童磨は少し止まる。

そして汗をかく。

「そんな、そんなはずは」

「そう。私は」

私は羽織をまくり、腕を見せる。

「私の左腕は、既に無いのよ。あなたは既に私の左腕を腹に納めてる。さらに言えば私の体は鬼の大嫌いな藤の毒で満たされている。

つまり、あなたは今まで毒に冒されたまま気づかずに戦ってたのよ。

それに」

童磨は狼狽える。

その姿は自分が馬鹿であることを突きつけられて動揺する万世極楽教の狂信者のようである。

「そんな、俺は…、こうなりややるしかない！俺のできる最強の技を！」

血鬼術。霧氷・睡蓮菩薩

床を突き破り、大きな氷の菩薩を出してきた。

「この菩薩は今までよりも遥かに強いからね！俺はもう節操なんてしない。本気でお前たちを殺すから」

氷の菩薩は腕を振り回し、壁や天井、床を砕く。

「次から次へと技を持つてるなんて卑怯よ！」

「そのチビっ子！俺を初めて怒らせたこと！本気で後悔させてやる！」

童磨を本気にさせればこの血鬼術が出てくることを知っていた。

この技はカナエ姉さんが唯一知らなかった血鬼術だ。

カナエ姉さんはこの技でやられた。

だが、既に相手の血鬼術の種類は出尽くした。

あと1分耐え抜けば。

「ほらほら！逃げ回ったって俺の菩薩で全員カチンコチンに凍らし

ちやうよ。そうだな、君たちを凍らしたらかき氷にして全員俺が食べちやうから…」

「え…俺の目が…俺の目がああああ！」

童磨の顔がズブズブと崩れていく。

やはり毒が回ってきたか。

そう、私の腕一本だけでは童磨を確実に仕留めるための毒の量には確実に足りない。

だからこそ、鈴仙さんの肉体56kg分が必要だった。

彼女は元々万世極楽教に潜入する隠密も行っており、彼女のおかげで支部潰しに一役買っていた。それに気づかず手元に置いていたという馬鹿教祖こそが童磨だ。

「おのれ！胡蝶しのぶ！謀ったなあ!!」

「謀るも何も、あなたが毒を食らってじわじわ蝕まれていることに気づくのが遅いのが悪いんですよ。あなたが鈴仙さんを食らった時に既にあなたの負けはほぼ確定していたわけですよ」

「お前を先にぶつ殺してやる！」

「そうはさせねえぜ！」

獣の呼吸。伍の型 切細裂き

菩薩の手が細かく切り刻まれる。

「あたいだって！あんたみたいなクズ野郎こそさっさと地獄に行きなさいー！」

氷の呼吸。肆の型 御神渡り

菩薩の下半身がボロボロに碎かれる。

「お前の目論見もこれまでだ！」

花の呼吸。終の型。彼岸朱眼

童磨は手足が崩れだしているものの、結晶ノ御子はまだいくつが残っている。

だからこそ、避けながら戦わなければならない。
しのぶさんは片腕を犠牲にしたんだ。

私だって右目くらい犠牲にしてもお前を斬る！

「まだだ！まだ終わりたくない！」

その時、童磨の体に刀が突き刺さる。

そしてその勢いのまま、壁に貼り付けられる。

「師範！」

「とつととくたばれ糞野郎！」

師範は怒りを込めて放った日輪刀、そこにはさらに強い毒が塗られており、童磨の崩壊が一気に加速する。

「「ここで、終わりだ！」」

童磨の頸はあっさりと飛んだ。

グズグズとなった頭はもはやブサイクとしかいいようがない。

「死にたくない！俺は！死にたくない！」

「無様ね、極楽を勧めるあなたが一番死を怖がるなんて」

「俺は……もう……」

「最後に言い残すことはありますか？」

「万世極楽教よ！永遠なれ！」

私は左足で童磨の頭を踏み潰した。

終わった。

私の右足首はさっきの投げた時の勢いで取れてしまいもうくつつくことは無い。

でも、私たちは生き残れた。姉の言うことも守れた。

私はこの戦いのために生きてきたのだから。

「師範！」

「カナヲ……」

カナヲは私をおんぶしてくれた。

「師範！無茶すぎですよ。あいつが憎いとはいえ、私に左腕を落としてなんて言った時は驚きましたよ」

「でも、私はもうすぐ死ぬのかもしれませんが。私はこの戦いを終えたら鬼殺隊を辞める予定でしたし」

「師範、いえ、姉さん。あなたには生きて欲しい。カナエ姉さんの分も、それに」

「おーい！みんなく！応援に駆けつけたぞ！って、もしかして終わったのか？」

「おせえぞ！ちよつと前に童磨をぶつ倒したぞ！」

「あたいたちのおかげで上弦は残り二体、でもしのぶさんは既にボロボロだから安全なところに」

「そうか」

「愈史郎くん、研究中に私に殺意を覚えたこと、忘れてませんからね」

「あの時はすまなかった、珠世様を取られて嫉妬してたから」

「それじゃ、俺たちはあの無惨という所に行くぜ！」

「師範、私たちが必ずあの鬼の始祖を倒してみせます」

「あたいたちは強いんだから、しのぶさんは頼ってもいいよ！一人を抱え込まずにさあ！」

そう言つて3人は無惨の元へと向かった。

その言葉が何よりも嬉しかった。私は涙を流した。

甘露寺の暴走と鳴女の涙

「伊黒さん！情報が正しければこの辺りかな？」

「ああ、この城で残る広い場所の中で最も広いのはこの辺りだ」

私と伊黒さんは城の中を駆ける。

「この扉かも！」

私は思い切り開ける。

するとそこには色々な間や物が浮かんでおり、

ものすごく大きな空間が広がっていた。

「ここまで広いとは、まさかその血鬼術を使う鬼は相当な手練か」

「伊黒さん、この先に気配を感じる、恐らく一体だけ」

私たちはこの大きな空間を探し回る。

「なんなのよもう！全然見つからないじゃない！どこにいるのよ！」

「甘露寺、あまり体力を使うな、鬼と対決する時に消耗したら元も子もない」

「そんなのわかっているわよ！伊黒さ…」

ベベン！！

「今の音？なに？」

「おそらく鬼は弦でも弾く鬼なのだろう、音の近くまで行けば自ずと見つかる」

「今どっちから聞こえた？」

「わからない、だが、割と大きな音だったから…」

ベベベン！！

「近い！あの間の方から聞こえたわ！」

「そこにいたか！やはり隠れていたんだな！」

音の響く方へと私と伊黒さんは跳ぶ。

「あーーーーー！見つけた！なんか黒いのがいる！」

「それに、あの手元、琵琶だ。あの鬼が弾いていたのか！」

その黒いのは髪で目元を隠している。

となれば見えていないのとはほぼ同じ、

それにさつき上弦の参もしのぶちゃんたちがやっつけてくれたら恐らく忒か壺。

私も、頑張らなくちゃ！

私は全力でその鬼の元へ向かう。

だが、目の前には襖が現れる。

ゴン！

私は襖に頭をうちつけ、弾かれる。

はっ…恥ずかしいわ！ちよっと焦っちゃった力みすぎちゃった！

私何してるのかしら！

私、上弦を倒せると思って舞い上がりすぎだわ！

「甘露寺！」

伊黒さんが私を抱きかかえてくれた。

嬉しい。

「甘露寺…相手の能力がわからないうちはよく見てよく考えて冷静に行こう」

「はい…！」

私のことを心配してくれた。

ものすごく嬉しい。

ベベン！

足元が開く。

「甘い！」

私は急いで襖の敷居を見極めて跳ねる。

ゴオオオン

するとその鬼は間自体をぶつけてくる。

「そこまで操れるとは厄介」

「伊黒さん！」

すると私の体が一気に重くなる。

「ぎやあああああ！」

私は思い切り背中から押される。

「わあああああ！潰される！」

目の前には別の間、やばい、何とかしないと！
心の呼吸。 漆の型 慙

「きやつ」

「甘露寺！」

「ほくと、周りが見えてないのね。柱としても注意力が散漫よ！私が指導してた頃から全く反省しないわね。蜜璃」

「さとりさん！」

「私が駆けつけてなかったらあなた今頃ペシャンコになってたわよ」
「ご…ごめんなさい」

私はさとりさんに怒られた。

私の師範はさとりさんと杏寿郎さんだ。さとりさんは私を杏寿郎さんの家に連れてつてくれた初めて会った鬼殺隊士だった。

そして私の恋の呼吸は杏寿郎さんとさとりさんが話してるところを見てこの2人付き合ったらどうなるんだろうって考えてたら派生しちゃったのである。

「私、やっぱり焦りすぎかも」

「その通りよ、躍起になるのはいいけど、あなたは恋の呼吸そのままに盲目のようになるから気をつけなさいね」

「はい」

私はさとりさんに下ろされる。

「甘露寺、大丈夫か？怪我はないか？」

「うん、大丈夫、心配しなくていいよ」

伊黒さんにも迷惑かけちゃったかな。

「危ない！」

また間が飛んでくる。

蛇の呼吸。 壱の型 委蛇斬り

「ふう、やはりあの鬼は建物自体を手足のようには動かせるようだな」

「おそらくあの鬼、戦闘以外に関してはずっちぎりの強さよ」

「それってもしかして上弦の式か壱の鬼ですか？」

「うーん、違うと思うわ、戦闘に関してでの序列そのものが十二鬼月の

数字と言われているわ、だけどあの鬼はおそらくこの城自体を操ることにのみ特化したもの、戦闘をするには明らかに貧弱すぎるし」

確かに言われてみればそうだ。

戦闘どころか動かしているのは腕だけだ。

だが、琵琶の音とともに建物が大きく動くこと、それを武器と捉えれば話は別になる。

「それに、あの鬼、あなた達ははつきりと見えてなかったと思うけど、泣いているわ」

「え？」

まさか鬼なのに泣くの？涙を流した鬼なんて一度も見たことがないから知らなかった。

でも、なんで泣いているんだろう。

「あと、さつきここに来る前にちらつと紙を見つけたんだけど、あの鬼の名前はおそらく鳴女、十二鬼月の会議録とかいう紙の端に名前が載っていたわ」

「え？どこにそれがあったの？」

「私が落ちたあと、一つだけものすごく巻物やら何やらが置かれた部屋があったの。そこには歴代の十二鬼月の名前や会議の話がものすごく丁寧に書かれてたわ。まあその鬼は私が全部倒したけど」

「そんなところに行ってたんですか！というかその間があるって事初めて知りました！」

「まあ、私がたまたま見つけたからね。そしてそこから出たらすぐにあなたたちが戦闘してたわけ」

「なるほど」

私はさとりさんがなぜ動きがなかったのか少しわかった気がする。

「鳴女！あなた、本当は無惨という鬼のこと好きなんですよ？」

すると、間の動きが止まる。

「やっぱり凶星ね」

え？さとりさんってこんなにすごいのか？それとも鳴女とさとりさんって仲間なの？

すると間が動き出し、鳴女という鬼のところへ誘われる。

「どうして私が無惨様を好きだとわかったの？」

鳴女は初めて口を開く。

「そうね、私は心柱、あなたの心が読めるのよ。それに、あなたの心はずっと泣いている。もしかして恋が叶わなかったとかそれとも嫌われたとか？」

「私は…無惨様を愛しています。この900年、ずっと無惨様のことを思い続けていました。そして無惨様も私の事をずっと信頼してくださってます。だから私は無惨様の呪いを一切受けていない」

「なに？無惨は鬼にしたものを必ず自分の細胞や呪いを持って名を口にした者を潰すと聞いていたはずだ」

「それは無惨様が刃向かったりするような輩を管理するためです。それに、私は無惨様に鬼にしてもらった鬼としては唯一呪いを受けていないんです」

「じゃあ、全部話してもらおっか、ただし」

さとりさんは鳴女に刃を当てる。

「嘘ついたらどうなるかわかってるよね？」

さとりさんは鳴女を脅す。

鳴女の過去と無惨への愛

私は今から900年ほど前、平安の中期に、公奴婢の子として生まれた。

その頃は屋敷から出ることは一度もなく、ずっと当時の公家によって奴隷としてこき使われていた。

その時の私は弱く、常に公家の暴力が怖かった。

更には他にも兄弟はいたものの全員、他の公家に人身売買をされていて、会うことさえまならなかった。

そんなある時、私は掃除をしていると、そのお方が趣味として琵琶を弾いていた。

私も弾いてみたい、そう思っていた。

だが、私のような身分が触れてはいけないものだ。

触れば汚れる。公奴婢の癖に何を触っている。

そう怒られると思っていた。

だけどそのお方は私が興味を示しているのを見て。

「お主、この琵琶に興味を持つか、面白い、お主に琵琶を弾かせよう。もし、時々疲れた時は私に聞くのじゃぞ。そうすれば私は琵琶を引くことも許そう」

私はそれからというものの、週に一度、疲れた時にそのお方に貸してもらっていた。

だが、私は騙されていた。

他の働いている女たちの話し声を聞き耳を立てると

「あの子汚いわね、旦那様に気に入られて琵琶弾いてるなんてね」

「私たちが全部旦那様がそのかしてあの女に琵琶が欠けることを押し付ければきつと旦那様が怒るわ、そしてあの醜女は追い出される。そして私たちは出世する、完璧ね！」

泣きたくなかった。私はまだ心が弱く、そのお方の家を全力で飛び出した、

私が逃げ出したとなれば追手が来る可能性も少しはある。だが、私は公奴婢、吐いて捨てるような身分だ。

全力で夜の森を駆け抜ける。
すると大きな洞穴を見つける。

そこに入ると、髪の毛がボサボサの男が1人座っていた。

「貴様、私の住処になにか用か」

「助けてください、私は、追われているかもしれません、匿って貰えないでしょうか」

私は涙を流しながらその男に訴えた。

「とても非力な女だな。だが、お前は私と同じ人としての扱いを受けなかったものだ。私の仲間にならないか」

そう誘われた。私は縋り付くものもない。選ぶ手段はこれ以外に存在しない。

私はその男の仲間になった。

「お前、名はなんという」

「私に、名前はないです。公奴婢なので、名前さえ与えられずに15まで生きてきましたから」

「なるほど、なら私が名をつけてやろう。今日からお前の名は鳴女だ」「なきめ?」

「そうだ、鳴る女と書いて鳴女だ」

「なんだろう、私は名前さえ付けられずに生きてきたから、名前というもので呼ばれるのは嬉しい」

「そうだろう、名前は大事だからな。私は無惨、鬼舞辻無惨だ。よろしくな」

「よろしくお願ひします」

私はそれから鳴女とあのお方は呼んでくださった。

そして2日後の夜。

「お前たちが鳴女という女を虐めるのか」

「鳴女? 知らないね。2日前に逃げ出したあの女なんか思い出したいくないよ」

「ほう、お前は思い出したいくないのか、ならば思い出す頭さえ潰されて死ぬがよい」

無惨様は私をいじめたもの達を片っ端から喰らい尽くした。

そして。

「お前が欲しがっていた琵琶だ。あの女たちが抱えていたのでお前にやる」

私は琵琶を弾く鬼となった。

その後鎌倉の時代に入ると順調に鬼を増やし続け、

珠世という女に恋をするなどもあった。

でも私は無惨様のためなら何でもする。

そう思い、続けて珠世のことを咎めなかった。

だが、あの女は口を一人の時にボソボソと呟いていた。

「私の家族がみんな死ぬなら鬼にはなりたくなかった。息子たち、孫たち、ごめんなさい」

珠世は鬼になったことを後悔している。

もしかすると裏切る可能性がある。

だが、無惨様はあまり聞きいれてくれなかった。

それもそのはずだ。無惨様は珠世を引き入れた時に鬼狩というものが存在するという情報を提供していたのである。

そして戦国時代、無惨様はあの男と対峙した。

継国縁壺、無惨様が以降ずっと悩みの種となる最強の鬼狩。

その男に無惨様は死にかけの所まで追い詰められる。

そんな無惨様を助けたのが私だ。

だが、無惨様に呪いを込められていた珠世は無惨様の呪いが弱まっている隙に解呪をし、無惨様を裏切った。

でも私はその間、50年間無惨様の回復に尽力した。

そして私と黒死牟だけでは無惨様をお守りするには力不足だ。

そう思い十二鬼月を結成することを提案した。

そして無惨様は完治した後、関ヶ原の戦いに目をつけ、そこで多くの鬼を増やした。

しかし、その鬼たちも大半は大坂で死に、生き残れたのは矜羯羅だけだった。

それからは本格的に十二鬼月を完成させるべく、私は大坂城を乗り取り無限城を本拠地として亜空間に隠した。

それから十二鬼月となる素質の鬼が続々と増えていった。

だが、産屋敷も眠れる獅子ではなく、関ヶ原より前に徳川幕府に公認となっており、数多くの十二鬼月が狩られ続けた。

そして1802年を最後に上弦の変更は無くなったと思った。

しかし今から5年前、無惨様が突然十二鬼月を呼び出しこう告げた。

「私はもうすぐ結婚をしようと思う」

そのことには私は全力で反対をした。

無惨様は私が反対するが聞き入れてもらえなかった。

それに無惨様はその鬼もまた鬼のもう一人の始祖であり、二つの勢力が合わされば鬼としての力も世界に大きな力として認められる日が来る、そう言っていた。

だが無惨様は元々それほど大きな野望を持っていたお方ではない。

無惨様の最初の頃の目的は太陽の下で過ごせるようになること、そして鬼狩がいなくなった後にただ密かに過ごすことの二つしかなかった。

なのに無惨様はあの女と結婚をしたことにより大きな野望への奴隷となってしまった。

だからこそ私は無惨様を元の目的を果たすものとして戻って欲しい。

そうただ願うばかりだった。

「なるほどね。無惨という鬼は野望が小さい鬼だったのね。そしてもう一人の鬼の始祖と結婚したことにより大きく変わってしまった。それを止めるためにも私たちに協力してほしいと」

「そう、私と無惨様は本当は密かに暮らしたかっただけなの。でもここまで被害を大きくし、鬼の数を圧倒的に増やしたのはあの女なの。だから、私は無惨様をあの女から解放し、そして無惨様と私の2人だけで夜明けを見ることができればそれでいいの。もう無惨様が翻弄する姿は見たくない」

「じゃあさあ、そのもう一人の鬼の始祖の名前って言えるの？」

「言えない。私はその鬼の始祖に呪いをかけられてる。口にすれば無限城は崩壊しかねない、でも、その鬼の始祖には妹がいてね…その鬼の名前は…」

私はその名前を聞き、ニヤツとする。

「ついに、あの鬼と戦えるのね…。私の両親を殺した鬼がまさかこんな場所にいたなんて」

「さとりさん。その顔、怖すぎるよ〜」

「その鬼の場所へと向かえる？」

「ええ、向かえることには向かえるけど、でも、私の血鬼術を使うにしても、この城は少し前に大増築されたせいで、ものすごく重いんだよ。それに、一つの間を動かすと、他の間まで連動して動いてしまうの」「え?。」

上弦の剣士と集まる柱たち

「鬼舞辻の居場所がかなり近い！油断するな！無一郎！」

「はい！」

俺は今、悲鳴嶼さんと合流し、無惨の元へと向かっていた。しかし、

足元が抜け、さらに、横から建物が突き出す。

「時透！」

「俺に構わず進んでください！悲鳴嶼さん！頼みました！」

俺は思いきり突き飛ばされ、そしてぶつかりそうになる。

一瞬の判断で俺は壁を斬り割く。

危なかった。あと少しで潰されるところだった。

だが、斬り裂いた先にはとても広い空間が広がっていた。

どこを支えているのか分からない柱が幾本か立ち、そしてはるか奥になにか人影が見える。

「来たか…鬼狩り…ん？」

その人影が近づくと目が6つを持つ鬼だった。

「お前は何やら…懐かしい気配だ」

上弦の…式！こいつが上弦の二番目の鬼か、他の上弦とは比べものにならない、重厚な様、威厳するある。

そして刀、歪な形だが刀を持っている。この男もしや元鬼狩りだったのか？

これまでに鬼殺隊で鬼側に寝返ったものは2人だけのはず、1人は稲葉獺岳、もう1人は宮古芳香というものだ。だが、その姿とは2人とは全く違う風貌をしている。

しかも相当な使い手の鬼だ。

それに、怖気づきそう。体が戦闘を拒否している。

こんなことは生まれて初めてだ。

「お前…名は何という…」

なぜ名前を聞くのか、今までに名前を名乗り出した鬼は数が少ない。それに鬼側から名前を聞きに回ったのは初めてだ。

「時透無一郎…」

「成る程…そうか…絶えたのだな、継国の家は…」

「継国…誰のことだ？」

「何百年も経っているのだ…詮方なきこと…私が…人間であった時代…戦国時代の時の名は継国巖勝。お前は私が継国家に残してきた二人の子供のどちらかの末裔…つまりは私の子孫だ…。お前からは私と同じ臭いがするのだ…」

その名前を聞いた瞬間にゾワツとする。

子孫!?俺がこいつの!?まさか…信じられない!

刀鍛冶の里でもうひとつあった巖勝零式の元であり、始まりの呼吸の剣士の一人、その本人が今俺の目の前に立っているというのか、戦国の世から今まで生きていたのか…。

落ち着くんだ。取り乱すな、戦いたいという感情を抑えろ。落ち着け!

「うむ…精神力も申し分ないようだ…ほんの三瞬で動揺を鎮めた…」

霞の呼吸。弐の型 八重霞

「なかなか良き技だ…。霞か…なるほど…悪くはない」

なぜそこにいるんだ!あの一瞬で逃げたのか!

伍の型 霞雲の海

「無一郎…」

速すぎる。動きが全く見えなかった。

「年の頃は十五、十六のあたりか…その若さでそこまで練り上げられた剣技…私に怯みはしたもののそれを押さえ込み斬りかかる胆力、流石は我が末裔の一人…血は随分薄くなっているだろうが…瑣末なことで…たとえ名は途絶えようとも私の細胞は増えて残っていた…」

「おちよくつてるのかな?もし仮に末裔だったとしても何百年も経つてたらお前後も細胞も、俺の中には一欠片たりとも残ってないよ」
「その痣…やはり私の末裔だな」

霞の呼吸。漆の型 臙

俺にしか出来ない技、まだ完成から半年しか経っていない。ならばこの技ならば。

「此方も抜かねば…無作法というもの」

月の呼吸。壺の型 闇月・宵の宮

月の呼吸!?

八意さんの使っている技と同じ月の呼吸が鬼になっても使えるのか、異次元の速さだ。

俺が少しでも後ろにそれでなければ右手も斬られていた。だけどこの際なら左手くらい犠牲にしてもお前には勝たなければ。

俺は左腕の隊服の裾を噛み、力を込めて引き、血を止める。

霞の呼吸。 肆の型…

その瞬間、刀を奪われ、右肩を貫かれ、柱に磔される。

「ぐっ…」

「我が末裔の一人よ…あの方にお前を鬼として使って戴こう。己が細胞の末裔とは思いの外しみじみと…感慨深きもの…そう案ずることは無い。

腕とならば…鬼となったらまた生える。まともに戦える上弦は最早私一人のみ…あの御方もお前を認めてくださるはず…

止血はしておこう。人間は脆く儂い…しかし仮に失血死したとしても…あの御方に認められず…死んだとしても…死とはそれ即ち宿命…故に…お前はそれまでの男であったということ…」

俺は玄弥の気配を感じる。

玄弥…この鬼は恐らく最強…上弦の式でありながら剣士としては最強の…。

「そうは思わないか…銃と刀を携えしお前も…」

その瞬間、玄弥の左腕がボロつと落ちる。

「玄弥…」

抜かなきゃ、俺は力を込める。

だが、なかなか抜けない。

その隙に玄弥のもう片方の腕も落ちる。

「ぐあっ…」

「鬼喰いをしていたのはお前だったか…玄弥という鬼狩りよ」

さらにもう1つ斬られ、上半身と下半身が分かれたる。

「ほう、まだ絶命しない…胴を両断されても尚…。三百年ほど前お前と同じく鬼喰いをしている剣士が2人いた。その剣士たちは私が胴の切断をしたことで絶命したが・お前の場合は首か…？貴様のような鬼擬き…生かしておく理由は無い！」

風の呼吸。肆の型 昇上砂塵嵐

「風の柱か…」

「その通りだぜ、テメエの頸を、捻じ斬る風だ」

「兄貴…」

「テメエは本当にどうしようもねえ弟だぜ、何のために俺が母親を殺してまでお前を守ったと思ってやがる。テメエはにとりと結婚して家族増やして爺になるまでいきりやあ良かったんだ。お袋にしてやれなかった分も弟や妹にしてやれなかった分も、おまえがにとりやその子供を幸せにすりや良かっただろうが、そこには絶対に俺が鬼なんか来させねえから…」

「ごめん兄ちゃん…ごめん」

「お前は戦うと選択した。ならばお前は早く腕を繋げろ…お前は…戦うと決めたんならな…」

「ほう、兄弟で鬼狩りとは…懐かしや」

「よくも俺の弟を刻みやがったなあ！糞目玉やろう！許さねえ許さねえ！」

実弥さんが本気を出した！

あの鬼は斬撃を振るう、だが、実弥さんは足元へと潜り込む。

風の呼吸。壺の型 塵旋風・削ぎ！

「はああ！こりやまた気色の悪い刀だぜ！なあ目玉野郎！」

「やはりあなたはここにいたのね」

「来てくれたんだ…」

「実弥が私と一緒に行動してたのに、上弦の臭いがして飛び出したん

だもの、本当喧嘩っ早いのは困るわ、あつ、刀は抜いてあげるは、でも止血はしっかりしなさい。この戦いは長くなるのよ。それに、私はあなたと同じ先祖を持つものとしてあなたが血を残さなきゃならないんだから」

「ごめんなさい、でも俺はこの戦い、絶対に生き残るから」

「それでよし、私はあの鬼を全力で倒す。あいつには本当にやりたいことがあるから」

「ありがとう…八意永琳さん…」

泥酔の稀血と実弥の過去

月の呼吸。伍の型 月魄炎渦

危ない、この間合いは！

俺はすかさず後ろに跳ぶ。

「はっハアツ振りなしで斬撃を繰り出しやがる。だがその技は見た事あるぜ」

風の呼吸。参の型 晴嵐風樹

「お主やりおる…肉体的にも技の全盛とみた…」

鳥肌が止まらねえ、こいつの技、一振りの斬撃のまわりに不規則で細かな刃が付いてる。それは常に長さ大きさが変化する定型じゃ無い。この技は八意との打ち合いでも見た事ねえ、時透がやられる筈だ。

避けたつもりの攻撃の形が変則的で歪、長い経験で培われな感覚が殆どなけりや無理だ。

さらにこの速さ！しかもコイツは呼吸を使ってやがる。そして顔には痣までおまけ付き。再生力、身体力が異常に高い、鬼が呼吸を使いさらに速度攻撃力を高めているとは。

だが、この力を持って上弦の弐というのは…

「おもしれえ！おもしれえぜ！殺しがいがある鬼だ！いつそ見て見えてよお前より強え鬼をな！」

風の呼吸 弐の型 爪々・科戸風

その刀で止めたか

だが、まだ隙はある。

俺は瞬時に右足の指で玄弥の刀を挟む。

そしてバレねえように上段で斬る。

やっぱり刃で止めたか。

俺は足で玄弥の刀を突き刺そうとする。

しかし鬼には顎に僅かに傷をつけた程度だった。

それに、お前はまだ、あまり動いてないんだろ？

遅いのが見え見えだぜ。

技を打ち合う、一瞬たりとも瞬きが出来ねえ、ほんの少し切っ先の振りをしくじっただけで即死だ！

「古くは戦国の世だった…私はこのように…そうだ…風の柱八坂神奈子とも剣技を高めあった…」

月の呼吸 陸の型 常世孤月・無間

周りの柱がボロボロと刻まれる。

わずかに反ったおかげで傷口はそれほど深くねえ。

それに…俺は。

「ふむ…随分堪えたがここまで…動けば臓物がまろび出する…」

やはりな、俺の血の臭いで奴はふらついたか。

「猫に木天蓼、鬼には稀血…」

くらいやがれ！

鬼は足元が揺らぐ。

「オイオイどうしたああ？千鳥足になってるぜえ、上弦の式にも効くみてえだなあこの血は！俺の血の臭いで鬼は酩酊する。稀血の中でもさらに稀少な血だぜ！存分に味わえ！」

さらにはおはぎの糖による発酵でより強いぜ！

自分の血が特別なんだと気づいたのは鬼を狩り始めてすぐだ。

そもそも鬼にされた母が俺が俺が出血した途端にヨロヨロと揺らいだ。母を殺めた後はこの世の全てが急速に色を失い擦り切れて褪せていった。

俺は夜の中を蹴き回った。

鬼殺隊も日輪刀も存在すら知らず山程の刃物で武装して鬼と戦い捕らえ、陽の光で灼き殺す。今思えばとんでもない自殺行為だが、死ななかつたのはこの血で鬼を泥酔させられたおかげ、運がかなり良かっただけ。同じ鬼を追っていて出会った鬼殺隊の糸野匡近が育手を紹介してくれたおかげ、でも知ってる。

善良な人間から次々に死んでいく。この世の不条理を、下弦の壺、姑獲鳥は匡近と倒したのに、柱になったの俺だけだった。匡近は治療が間に合わず失血死。

俺の弟にはそんなことさせねえ！

風の呼吸。陸の型 黒風烟嵐

血の臭いに酔ってるんだろ？お前の速さはかなり鈍くなってるんだよ！

俺は呼吸で止血だってできるぜ？

「どちらにせよ人間にできて良い芸当ではない…初見なり…面白い…」

鬼はだいぶ酔ってるようだ。さすが上弦、今頃ならほとんど決着がついてるはずなのにまだ酔いに耐えられるのか。面白えな。

「微酔う感覚も何時振りか…愉快…さらには稀血…だが…」

斬り込むと同時に鬼は俺の刀を踏んできた。

俺は力に押され倒れ込む。

まずい…斬られ…。

「頭に来るんだよ、人が苦しんでいるっていうのに笑っている奴が、自分の手を汚さず命の危機もなく一段高いところから涼しい顔で指図だけするような奴が、いいご身分だなあ、おいてめえ、産屋敷様よお」

「不死川…口の利き方というものがわからないようだな…」

「いいよ行冥、言わせてあげておくれ、私は構わないよ」

「ですがお館様…」

「とりあえずこの傷だらけの野郎に三日月の傷でも背中につけましようか？」

「大丈夫だよカナエ、永琳」

「白々しいんだよオ、鼻につく演技だぜ。隊員のことなんざあ使い捨ての駒としか思ってねえくせに、あんたは武術も何も齧ってすらねえだろお、見れば一発でわかる。そんな奴が鬼殺隊の頭だとお？虫唾が走るぜえ！ふざけんじゃねえよ！」

「ごめんね。刀は降ってみたけれどすぐに脈が狂ってしまって十回も出来なかった。叶うことなら私も君たちのように体一つで人の命を守る強い剣士になりたかった。けれどどうしても私には馬術以外

無理だったんだ。辛いことばかり君たちにさせてごめんね」

言葉が出てこなくなつた。

お館様の眼差しは母を思い起こさせた。親が我が子に向ける溢れるような慈しみに、優しく頬をくるまれる気がした。

「君たちが捨て駒だとするならば、私も同じく捨て駒だ。鬼殺隊を動かす駒のひとつに過ぎない。私が死んでも何も変わらない。私の代わりは既に居る。」

実弥は柱合会議に来たのが初めてだから勘違いしてしまつたのだと思うけれど私は偉くもなんともないんだよ。

みんなが善意でそれその如く扱ってくれているだけなんだ。嫌だったら同じようにしなくていいんだよ。

それに拘るよりも実弥は柱として人の命を守っておくれ。それだけが私の願いだよ。

匡近が死んで間もないのに呼んでしまつてすまなかつたね。兄弟のように仲良くしていたから尚更辛かつたろう」

「名前…何故それを…」

「不死川くん、お館様は当主になられてから鬼殺隊の全隊員の名前と生い立ちは全て記憶してらっしゃるのよ」

俺は告げられて驚くしか無かつた。

俺でさえ一緒に戦つて死んだ隊士全ての名前は覚えきれてない。

「実弥、鬼殺隊の子供たちは皆遺書を書いてるよね。その遺書の内容がね不思議なことに殆どが似通っているんだ。匡近も同じだよ。」

渡そうと思つていたんだ実弥に、匡近は失つた一つ下の弟とその弟と同じ歳の実弥を重ねていたんだね。光り輝く未来を夢みてる。私の夢と同じだよ。

大切な人が笑顔で天寿を全うするその日まで幸せに暮らせるよう決してその命を理不尽に脅かされることがないよう願う。たとえその時自分が生きてその人の傍らに居られなくとも生きていて欲しい。生き抜いて欲しい」

さつき銃も拾つという正解だったよ！

俺は銃を刀の威力止めにする。

そして鬼目掛けて3発撃つ。

だが、その弾は一切傷をつけられていない。

それにこの近距離、まずい！

月の呼吸。参の型 厭忌月・銷り

次々と降って湧く…鬼狩共…。

「黒死牟、あなたにはこれまでの恨み全部ぶつけるわ」

「我ら鬼殺隊は百世不磨、鬼をこの世から屠り去るまで」

「悲鳴嶼さん…八意さん…」

「その女…私と同じ血の臭い…まさか」

「ええ、あなたは勘が鋭いのね。そうよ、私は八意永琳、継国家の正当後継者よ。そして、私はあなたと同じ月の呼吸の使い手。さあ、私とあなた…本当の決着をつけようじゃないの」

永琳の過去と全ての因縁

私は元々八意家の令嬢だった。

私の家とはかく女の子が非常に多く、産まれてくる子供ほぼ女ばかりである。

男の子はかなり産まれるのが稀であり、何かと神職の人と結ばれることが多かった。

明治の時代にまでなるとさらに酷く、私のあとには妹が3人もいたが一切男の子は産まれなかった。

そんなある日、陰陽師の人に両親は告げられる。

「あなたたちの先祖には鬼がいます。その鬼を倒せば男の子はいずれ産まれてくるでしょう。そのためには長女の永琳が鬼狩になるしかありません。見たところ永琳が一番体が強そうだ。すぐにでも知り合いの育手のところに送り出してください」

そして私は育手のところに送り出された。

その送り出された先にいたのは黒髪でおかっぱに切りそろえられた女性の人がだった。

「初めまして、あなた、名前は？」

「はい！八意永琳と申します」

「へえ面白い子ね。その銀の髪の毛って地毛？」

「え？そうですけど、なにか文句ありますか？」

「いや、なんかその髪の色は珍しいなあって思っちゃって」

「名乗ってなかったわね、私は蓬萊輝夜、月の柱よ」

私はそれから月の柱、蓬萊輝夜の元で継子となり、永遠屋敷でひたすら稽古をつけてもらった。

さらに輝夜さんとはかく薬について詳しく、自分で薬湯を作り、私に実験で入らせることもあった。

私もその影響で薬に興味を持つようになった。

輝夜さんの話によると月の呼吸の使い手はかなり少なく、六つの始まりの呼吸の中でも他の呼吸よりも嫌われていた。その理由はその時はよくわからなかったが。

そして私が12歳になり、月の柱の継子になって3年、やっと最終選別への許可が出た。

私はその最終選別を受けた。

その代はあまりにも合格者が少なく、合格者は私を含めて3人しかいなかった。その同期は依姫と豊姫という2人の姉妹だった。

その2人は私と同じ輝夜さんのお抱え隊士となった。

それから切磋琢磨をし、順調に昇格をしていく。

そして私が丁に昇格した時、初めて柱合会議に呼ばれた。

そこで初めてお館様と対面する。

その時、私に衝撃的な事実が告げられた。

「永琳、君の家族を調べたらとんでもない事実がわかった。君は始まりの呼吸の剣士の一人、継国縁壺の血を引いた隊士だ。それに、君の一族は私と同じく血筋から鬼を出している。君の家族にはその呪いがかけられているんだよ」

衝撃的だった。私と同じ境遇のものがいるということ、さらにそれが鬼を狩るものの頭をやっている、それに最強の剣士の血を私は引いている。

私は疑問に思い質問した。

「なぜ、その2つのことが同時に起きているのですか？」

「君は最強の剣士の血を引いている。だが、それは間違いではない。それに、鬼をだしているのも事実だ。だが、それを両方起きているのはこうだ。」

君の先祖の名は継国巖勝、そして継国縁壺はその双子の弟だ。そして鬼になったのは兄である継国巖勝の方だ。

その男は鬼たちの中でも強いものの集まり、十二鬼月の上弦の壺に今はいる。つまりご先祖様は生きていらっしゃるんだよ、鬼としてね」

私は色々と言われて目眩がしそうになった。

私の先祖は鬼でその弟が最強の剣士で…私はその兄で鬼の子孫…

「困惑するのも無理はないよ。色々整理がついていないと思うし」

「なら、なぜ私を呼び出したんですか？」

「君は月の呼吸との相性がものすごく良いと輝夜からきいている。そんな君だからこそ、私から君にはお願いをしたい。君は月の呼吸、現在十六ある型を全て体得し、君のご先祖、継国巖勝を倒してほしい」私は心に決めた、私は継国巖勝を倒す。それが私の目標となった。そしてその運命の機会は一度目が訪れた。

「緊急任務！緊急任務！至急隊士タチハ松本へ向カエ！」

私は急いで向かった。しかし、ついた頃にはすでに周りに血や肉が転がっている。

その中には豊姫や依姫の姿もあった。

その目の前で、私の師範は腹を貫かれていた。

「月の呼吸を使いしものよ…私の糧となれ」

「輝夜さーんーん！」

私は全力で鬼に刃を向ける。

しかし、輝夜さんは手を止めた。

「もう…いいの…、月の呼吸を使えばこうなるって…わかってたから…」

輝夜さんは倒れる。

それを見るやその鬼はふっと消える。

「待て！私の仲間の命を返せ！」

「いいのよ永琳…月の呼吸の使い手は…今まで沢山いた…でも…誰一人としてあの鬼…黒死牟には勝てなかった…。元々…月の呼吸は七つしかなかった…、でも…継いだ人たちが繋いだことにより…技が多く生まれた…でもその度に黒死牟が現れ…月の呼吸の型を奪っていったの…そう転落私が十六の型を編み出したように…」

「どうしてなんですか…！黒死牟はどうして奪うんですか！」

「黒死牟は日の呼吸の隊士の出現を恐れている…。なぜなら…月の呼吸は…日の呼吸から最初に派生した…呼吸だから…」

「黒死牟…その鬼を私は絶対に倒して見せます！」

「それに…あなたには伝えてなかったけど…私たち月の呼吸の使い手の一つの目標…月の呼吸を生み出したものの子孫に…月の呼吸を教えることができ…良かった…」

そう言つて輝夜さんは息絶えた。

「輝夜さー！さー！さー！」

そして私は永遠屋敷の主となり、半年後、柱へとなった。

それからはしのぶという子を弟子として引き入れ、その姉が柱に昇格したりなど色々であった。

そしてついに、

「永琳さん！急患です！」

私は急いで駆けつける。するとそこには全身を包帯で巻かれた髪の毛の長い少年が横たわっている。

「お館様、この少年は…？」

「この子はね…君と同じ始まりの呼吸の使い手、名は時透無一郎というんだ」

その子はボロボロで、とても剣を振るうには幼い、だが私も剣を握ったのは9歳の頃、それから比べれば11歳は歳を重ねてる方かもしれない。

「永琳、君にはこの子が回復した時に、剣の稽古をしてもらいたい」

「私ですか？まあ私は今は継子がいないので大丈夫ですが…」

「なら頼んだよ。この子はいずれ柱になる存在だ。この子はたった一人で鬼を倒したんだ」

「本当ですか？強すぎませんか？」

そしてお館様のいうとおり、無一郎は柱となった、私が刀を握らせながら僅かな期間で、それも最後の粹、11人目の柱として

そんな彼の腕を切り飛ばした上に、私の師範、そして仲間を殺した黒死牟。

私はその鬼を倒すためにここまで来たんだ。

「不死川くん、腹の傷を今すぐ縫え」

「その間は私達に任せなさい。あと、玄弥の手当もお願いね」

「はい、わかりました。すみません」

黒死牟の畏怖と無一郎の決死の採取

目の前の大男は鉄球を振り回し、もう一人の銀髪の女は青白い刀を構える。

素晴らしい：極限まで練り上げられた肉体の完成系：これほどの剣士を拜むのは弟、縁壺以来だ。

私が見逃していた隊士がここまで成長をしていたとは：やはり私の目は間違っていないかった…。

その空気はビリビリする。

空気が引き寄せられる…。

そして男は鉄球を放つ。

だが、まだ見える。

その鉄球を砕けば良いのだな…

月の呼吸…

その瞬間視界に手斧が入る。

両手共武器を離すとは…

私はぐつと反って斧の軌道から離れる。

月…

岩の呼吸。弍の型 天面砕き

鉄球が突然軌道を変え、自分の頭の方へと飛んでくる。

危ない…だが鎖の辺りまで行けばよ…

私は鎖を断とうとする。

しかし鎖は斬れぬ！

鎖、斧、鉄球、全ての鉄の純度が極めて高い武器。

私の肉から作られたこの刀では斬る前に灼け落ちてしまうだろう。

これ程太陽光を吸い込んだ鉄は刀匠の技術が最盛期たる戦国の世にも発見されていなかった。

しかしそれも間合いの内側に入れば良いだ…

「あなたの考え、透けて見えるわ」

月の呼吸。捌の型 月龍輪尾

私の刀が折れた…だが、

「折られた所ですぐに再生するのだ…攻撃は無意味だ…哀れな人間どもよ…」

「いや、哀れなのはあなたの方よ…」

刀を見るとその刀は再生が遅くなっている。

更には頭が軽い。束ねた髪が殆ど落とされている。

何故だ…

「あなたの刀はあなた自身の肉で作っていると読んで私が発動しておいたのよ」

私はその女の刀を見る。するとその刀身は赤く変わっていた。

「あなたの弟さんの手記が残ってて助かったわ。私は既に…赫刀を発動させているからね」

その刀には記憶がある。

赫刀を発動した鬼狩は私が対峙したものではありません。

一人は弟縁壺、もう一人は輝夜という女だ。

輝夜という女は特に恐ろしかった。私が初めて女で畏れたものだ。

あの女は痣を発動し、赫刀を発現させた。

「あなたが殺した月の呼吸の柱8人分、償ってもらおうわ」

「お前…歳はいくつだ」

「39よ！それがどうしたの」

「痣のものは例外なく…二十五を迎える前に死ぬのだ…私は何人も見てきた…二十五を超えて痣を発動させたものは…二時間と経たぬうちに息絶えている」

「なら、私の人生全て、あなたを倒すためにかけてやるわ」

私はその女に唯一上回っていたものがある。

それが決定打となり、輝夜という鬼狩に辛勝した。

その女は耐え続けたのだ。

私の技を幾度も喰らい、右眼が潰れようとも、左腕が斬り落ちようとも、

十六の型を出していた。そして、その技を見た私はそれを記録するために帰ろうとした。

しかし、私は涙を流していた。

わからなかった…だが、今までの鬼狩とは比べ物にならないほど強い。

だから私はその達成感で泣いているのだと理解した。

その後しばらくは刀を作り出すことはできず悩む程だった。

そう、あの時の輝夜という鬼狩のように、いや、それを越えようとする女が今、目の前にいる。

「さあ、あなたも年貢を納める時が来るわね」

「ここで勝たねば話にならぬ。今発動してもよからう」

目の前の鬼狩たちは痣を発現させる。

「本気を出してきたか…ならば…私も本気を出さなければならぬ…」

刀を枝分かれさせて生やす。

「面白いじゃねえかあ！その敵勝つて鬼はよお！」

数分という時間で体を縫ったのかあの男は。

「実弥、ここは3人であの鬼を倒しましょう」

「上等じゃねえか！俺の体を斬ったこと、そっくり返してやるよお！」

「時透さん、すまないが俺の胴体をくつつけてくれねえか…」

「わかった」

俺は玄弥の胴体を押しつける。

「あともう一つお願いを聞いてくれませんか…」

「なんだ」

「あそこに落ちている上弦の髪の毛…取ってきて食わせて貰えますか？最後まで俺は戦いたいんです…兄貴を守り…死なせたくない…兄貴には…もうすぐ祝言を約束している人がいるんだ…こんな所で兄貴を…」

俺はとにかく玄弥を助けたくなくなった。だが、髪が落ちているところはすぐ近くにまだ悲鳴嶼さん達がいる。

何とかして取りに行く方法は無いだろう…
その瞬間、悲鳴嶼さんが鉄球を振るう。
そして投げつけた。
すかさず、不死川さんが攻撃を放つ。
だが、鬼の方の振りの間合いが広い。
そのためなかなか近づけない。
とにかく見ているだけではダメだと俺は走る。
とにかく髪の毛がごっそり落ちているのに取りに行かないわけが
無い。

これが今俺に出来る数少ないことだ。
その時だった。

風の呼吸。 壺の型 塵旋風・削ぎ
大量の髪の毛が舞う。

俺はその髪の毛を何房も空中で掴む。
とにかく大量に掴んで玄弥に食わせれば何かあるかもしれない。
そして、俺は玄弥の元へところまで戻る。

「どうだ…玄弥」

俺は両腕のない玄弥に髪の毛を食わせる。
すると、凄まじい勢いで体が治っていく。

「玄弥、大丈夫か…」

俺は玄弥の目を見ると赤くなっているのに気がつく。
その眼の色はまさにあの鬼と同じもの、玄弥の体がどうなっている
のか少し気になった。

「気分がいい…やはり上弦…反動もすげえが力もすげえ、それに…無惨
の声が聞こえる」

「ほんとか？なんて言っているんだ…」

「上弦の壺に…気をつける…その鬼狩を片付けたら・私を守れ…つて
何度も言っている」

「上弦の壺!？」

おかしいと思った。

文献を調べていた時に巖勝は数回鬼殺隊と戦っていた頃は目に上

弦の”壹”だったと表記されている。

しかし、今戦っている鬼は上弦の弐、おかしかったんだ。
この戦い、下手をすれば…

二つの月と玄弥の覚醒。

風の呼吸。壺の型 塵旋風・削ぎ

岩の呼吸。壺の型 蛇紋岩・双極

月の呼吸。式の型 珠華ノ弄月

俺たちは型を放つ。

だがあの鬼の刀は何度も伸びる。

厄介すぎる。

だが相手の服も少しずつ綻び、そこからは血が垂れている。

効いてはいないわけではねえ。

その時だった。

月の呼吸。伍の型 月魄災渦

まずい、この型は…

俺は避けようと反応するが、間に合わず斬撃の一部を喰らう。

俺の右手の人差し指は根元から落ちた。

だがそれだけなら軽い方だ。

八意さんは…

「ぐはあ…」

「銀髪の女よ…仲間を庇ったか…」

「当たり前…じゃない…」

八意さんの体は両耳が落ち、右目も潰れ、身体中には傷ができる。

あの一瞬で八意さんは同じ型を放ってくれなきや俺までボロボロになっていた。

負傷すればする程動きが鈍くなる。それにあの鬼は本気を出してから稀血の酔いが一切効かねえ強い鬼にこそ効くはずなのにこそつたれめ！

月の呼吸。漆の型 厄鏡・月映え

「ならば私が…」

月の呼吸。捌の型 月龍輪尾

八意さんは相手の型に合わせている。なんて強さだ。

これも、月の呼吸の使い手同士だからこそわかるのか。

手負いとはいえ、さすが技の永琳だ。

月の呼吸 玖の型 降り月・連面

くそ！そんな技まで出してくるのか。

月の呼吸 拾壹の型 上り月明

くっ、八意さんの力が落ちてきている。

俺の背中の滅の文字は斬られる。

「不死川、油断するな！」

「俺に構うな！悲鳴嶼さんは八意さんの援護を」

月の呼吸 拾の型 穿面斬・蘿月

「しまっ…」

その時、俺の体は宙を舞う。

「実弥さん！」

「時透！」

「死なせない！貴方は両腕で刀を振れる。まだ戦いは終わってないんです」

俺は玄弥の所へと引っ張られる。

「実弥さん…聞いてください。あの鬼は上弦の弐です。そしてさつき玄弥がああ鬼の髪を食った時、無惨の声が聞こえたんです。上弦の壹に気をつける…と」

「!？」

「おそらく上弦の壹は無惨の傘下ではなく、もう一体の鬼の始祖の方のものです。それに、無惨はこうも言ってるんです。鬼狩を片付けたら私を守れ。つまり、上弦の壹は無惨を狙っているからという可能性があるんです」

「本当か…つまりあの鬼は…」

「狙われている側なんですよ。おそらく、まだ一度も情報を出していないあたり、もう一体の鬼の始祖は相当な戦術の手練です」

俺はそれを聞いて笑む。

「どうしたんですか？実弥さん」

「面白えじゃねえか、上弦を倒して無惨も倒してもまだ鬼が存在するとはなあ！」

十二鬼月そのものが崩壊しかけている上にまだそんな隠し玉がいた事には笑いが止まらなかった。

「ところで玄弥はどうした」

「玄弥は今、あの鬼の折れた刀を食って震えています。あと3分経てば、玄弥はこの戦いを掌握できます」

「あと3分か…それまでにあの鬼の動きを誘えばいいんだな」

「俺も協力します」

岩の呼吸…

月の呼吸。拾陸の型 月虹・片割れ月

この型は輝夜の型…やはり、技を奪っていたか。

速すぎる。更には攻撃の速さが上回る。

下手すると攻撃動作に入る前から動きを抑え込まれる。

透き通る世界にまで至れない。やはりあの鬼も透き通る世界も発動させているのか。

深く意識を入れるのだ。

「やはりお前も透き通る世界に入るつも…」

月の呼吸。拾伍の型 星海月輪

「私も見えているわよ…。あなたの急所も全部ね…」

八意殿が隙を作ってくれた。

私は深く呼吸をする。

その時、鬼の筋肉や骨の動きが鮮明にみえた。

透き通る世界、やっとう入れた。

その鬼には僅かだが、傷がある。

その傷は刀で斬られた傷。だが、それはなにかをなぞるようだった。

内側に、間合いの内側に入れ、少しでも大きな隙があれば緩められ

る。

俺は片腕を失い。失血も重なり戦闘できる時間は殆どない。まだ動ける内にあの鬼の頸を刎ねて、上弦の壺との戦いまでの余裕をみんなのために作らないと…

「不死川！八意！」

悲鳴嶼さんが呼びかけると動きが思い描いた通りになる。

俺の意図を組んで合わせてくれた。

月の呼吸。拾肆の型　兇変・天満織月

入れ入れ入れ！抜ける！間合いの内側に！くぐれ！折り重なった攻撃の隙間をくぐれ！

その時、鬼は少し怯む。

「お前のために道を作るぜ！」

風の呼吸。塵旋風・削ぎ

鬼の技が止まった。更に、悲鳴嶼さんの鉄球で右上半身が吹っ飛んだ。

俺の狙いはただ一つ、血の溜まる場所！

脾臓だ！

鬼の脾臓に見事に突き刺す。だが、まだやることは残っている。

赫刀だ。赫刀を発現させれば、鬼の脾臓も回復に時間がかかる。

決定打にはならないが時間稼ぎには持ってこいだ。

俺は力を全力で刀に込める。

すると、刀がどんどんと赤くなっていく。

そしてもうすぐ、玄弥は覚醒する。

私の眼を謀ったか…透き通る世界を戦いの途中で発動させた。しかもこの子供も…更にはあの風の呼吸のものも透き通る世界を発現していたか…風のものゝ痣を発動させているからわかるが、何故あの鉄球の男は痣も発動せずに透き通る世界を発動できるのか…。

だが、まだ距離はある。私の頸には届かず、謀りも攪乱もわかつて

しまえば意味もなし

ドン！ドンドン！

鈍く音がする。

私は瞬時に刀で払おうとする。

しかし、その弾は弾いたにも拘わらず生き物のように曲がって体にめり込んできた。

私はその音の方を見る。

あの姿……！南蛮銃が大きく変形している。私の刀と同じ紋様……も
しやこれは……

黒死牟の焦燥と永琳の決死策

その時、腕や足に穿たれた弾から木が現れた。

「時透さん、あんたの働き…無駄にしないぜ」

その木は根を張り私の体を地面から離す。

動けない…。これほどまでの力を吸収できる鬼喰いがいようとは

…

全身を突き抜ける焦燥、生命が脅かされ体の芯が凍りつく。

平静が足元から瓦解する感覚。忌むべき、そして懐かしき感覚。

あれはあの赤い月が登る夜だった。

私は信じられぬものを見た。

老いさらばえた縁壺の姿はそこにあつた。

私の双子の片割れ…そしてその男はすでに八十八…本来なら死んでいるはずだった。

「あり得ぬ…なぜ生きている？皆死ぬはずだ、二十五になる前に、なぜお前は…お前だけが3倍以上の歳を食って生きている！」

「お勞しや…兄上…それ私も同じだ…私はあなたと約束を果たせなかつた…」

老化した醜い姿のかつて弟だった生き物に憐まれた。

だが憤りは感じなかつた。六十五年前はあれ程目障りだった弟だというのに。

兄上と呼ぶ声は酷く嘎れていた。感情の僅かな機微すら見せなかつた弟が涙を流している様に生まれて初めてこみ上げてくるものがあつた。

私は己の予期せぬ動揺に困惑した。

殺さねばならぬ。人だった頃の片割れが全盛期を遙かに過ぎ、脆い肉体の老人を。

奴が鬼狩りである限り刃を向けてくる者は一刀両断にせねばならぬ。

しかしこの感傷も次の瞬間には吹き飛ばすことになる。

その老いた弟はものすごい威圧をかける。

その威圧感は大岩を頭の上に乗せられているようだ。構えには一分の隙もない。

「参る」

その時私は気を引き締める間もなく、頸や両手が斬れる。

何故いつもお前が、お前だけがいつもいつも特別なのか、痣者であるというのに八十八まで生き永らえ、その老骨で振るう技は全盛期と変わらぬ速さ、そして威力。

鮮やかに記憶に蘇る。六十五年前の怨毒の日々、骨まで灼き尽くすような嫉妬心。

お前だけがこの世の理の遥か外側にいる。神々の寵愛を一身に受けて生きている。

そんなお前が憎い。殺したい。

だが次の一撃で私の頸は落とされるという確信があった。

あのお方をも極限まで追いつめたあの剣技。それは神の御技に他ならない。

焦燥と敗北感で五臓六腑が振じ切れそうだった。

しかし、奴は最後に言葉を残した。

「未完成だった…か…」

その言葉を発したあと、縁壺は直立したまま寿命が尽きて死んでいった。

もうひと呼吸、縁壺の寿命が長ければ私は負けていた。

生き永らえた為に鬼となっていた私はその屈辱を何百年も味わい続けた。

負けたくない。

たとえ頸が斬られようとも…！

生恥を晒したところで3度目の負けは絶対に！

「ふう、意外と呆気ないわね。こんなにもあつさり頸を斬られるなんて、拍子抜けだ…」

「八意さん！」

「八意殿！」

「ごめんね、ちよつと張り切り過ぎちゃったみたい。大分血を流して

このために私が編み出した十七の型を。

玄弥は全力で鬼から力を奪いつつ、私たちは4本の柱に向かった。
「やってやるぜ！」

「八意殿の策はかなり鋭い…、ならばやる以外に他ない」

「八意さん！」

「ええ、力を合わせて！」

月の呼吸。 捌の型 月龍輪尾

風の呼吸。 捌の型 初烈風斬り

岩の呼吸。 伍の型 瓦輪刑部

霞の呼吸。 参の型 霞散の飛沫

柱は4本崩れる。それと同時に、壁にも大きな穴が開く。

「行くぞ！」

そして私たちは天井が落ちる前に避難する。

そして私は間の真ん中目掛けて放つ。

月の呼吸。 十七の型 新月

間の崩壊とともに私は黒死牟の全身を斬り刻む。

「はあ……はあ……」

終わった…。私はもうすでに限界だ…。死の言葉が過ぎる。

私はすでにボロボロだ。

斬り刻む瞬間に私は右脚を斬りおとされ、左腕も斬り刻まれた。

どうにかして勝つ方法をさがさ…。

その時、私は無一郎に斬撃が飛んでいくのが見える。

私の身体はそれよりも早く動いていた。

「そ…そんな…八意さん…」

「心配するなら…あなたも…両脚を斬り落とされたことを…心配しな
やろ…」

「いやだ！いやだ！いやだ！そんな…永琳さん！死んじやだめだ
！」

「私は…もう…やれることはやりきったわ…黒死牟の頸を落とせたこと…それだけでも…私は…生きててよかったと…心から今思えるわ…」

私は目を閉じるとそこにはみんなが待っていた。

輝夜さん、依姫、豊姫、そして鈴仙。

もう私はやり遂げたんだ。

もう思い残すことはない。

「永琳さーろーん！」

俺は永琳さんの亡骸を強く抱いた。

「ふん、死んだか…私の…勝ちだな…」

その時、突然歌が聞こえだす。

「かーごめかーごめ、籠の中の鳥は、いついつ出会う。夜明けの晩に鶴と亀が滑った。うしろのしょうめんだーあれ！」

上弦の壱と絶望の真実

その歌声はなぜか少し幼く、どこか掠れているようなものだった。

「その声、何故だ。何故お前の封印が解かれ…」

バアアアアン

その瞬間黒死牟の体が弾け飛ぶ。

そしてその弾け飛んだ先には茶色い羽に宝石のようなものを散りばめた幼い女の子の姿があった。

「あら、あなただったのね。てつきり雑魚鬼だと思ってぶっ飛ばしちゃった」

その女の子からは恐ろしい言葉が発せられた。

「何故お前がここにいるんだ！今頃、無限城の奥深くに幽閉されているはずだ！」

「ぎくんねん♪あなたが気付くのも無理はないわ。だって、私とあなたでは仕える鬼が違うんだから、すでに勇儀はあの世に旅立っているわ。あなたの次に強いであろう、猗窩座とともに」

「くそ！何故私の体が回復できないんだ！」

「そうね、あなたの体にあった細胞をドカーンとしたから、あなたの体に流れる無惨の細胞はそこら辺の鬼と何ら変わらないくらいの量になってるわ、それに、あなたにはさっきの戦いで赫刀に刺されてるからもうあなたは終わりね♪」

なぜ知ってるんだ。もしかして俺たちの戦いを全て見ていたのか？

だとしたらすぐにでも逃げなきゃならない。

だが、俺の両脚は既になく、這いずるしか逃げる方法はない。

万事休すか。

「黒死牟、あなたは生き恥は晒すとか、死ぬなら潔く死ねって言うてなかった？その姿、醜すぎて目が腐りそうだわ。さっさとあなたは逝くべきね！」

女の子が拳を握ると黒死牟の全身が弾け飛び、辺りに血や肉を撒き散らす。

「はあ〜スツキリした!」

そういうともものすごい笑顔になる。

「あ、もしかして君、鬼狩り?」

その女の子は俺の近くに来る。

「え?そうだけど…」

「ダメじゃないか、こんなバイ菌をこの城に入れるなんて。まあそんなことするやつなんて無惨以外思いつかないけど」

女の子は突然口角を下げる。

その気配はおそろしいという言葉しか出ない。

「パァン!」

銃声とともに女の子から血が飛ぶ。

「なんなんだお前は!時透さんから離れる!」

玄弥は銃を女の子目掛けて撃った。

「血鬼術!」

「ダメじゃないか、私の服が汚れちゃったじゃないの?死んでくれる?」

その瞬間、玄弥の下半身が吹き飛ぶ。

「玄弥!」

実弥さんが玄弥の元へ駆け寄る。

「玄弥!死ぬな!」

「兄貴…ごめん…しくじった…」

「大丈夫だ!何とかしてやる!兄ちゃんがどうにかしてやる!」

もはや絶望としか思えない状況、このままでは俺まで死ぬ。

「その長髪くん、名前はなんて言うの?」

「時透…無一郎」

「ふーん、面白い名前だね。私はフランドール・スカーレット、十二鬼月の上弦の壺、鬼の始祖の2人を除けば私が最強ってわけ」

体が恐怖でこわばる。

逃げなきゃならない。でも、逃げようとすれば殺される。

生き残る方法はない。

そう諦めた時だった。

「そこまでよ!」

俺の体は持ち上がる。

「時透、ここまでよく頑張った。ここからは俺たちが頑張る番だ」

「伊黒さん……!」

「よくもやってくれたわね。私はあなたに対してものすごい怨みを抱いているわ。私の両親を殺したあなたのことは絶対に許さない!」

甘露寺さん、さとりさんも降り立つ。

そして、弦の弾く音がする。

「おおっ!いきなり走っていたと思ったら突然場所が変わったぜ!」

「不思議な力ですね。転移の能力を持つ鬼でもいるんですか?」

「お姉ちゃんも来てたんだけ!探しても見当たらなかったけどどこにいたの?」

そしてさらに、宇髄さん、咲夜、こいしも現れる。

「みんな…来てくれた」

俺は出血が多い中で嬉しさのあまり気絶する。

「時透!」

「無一郎くん!」

「大丈夫よ、彼は気絶してるだけ、出血が激しいから治療のできる隠の所に連れてって」

そして弦の弾く音とともに俺は転送された。

「ついに来たわね。あれが上弦の壱?」

「そうよ、よく見なさい、あの女の子の目にしっかりと刻まれているじゃないの」

「あはは…よく見たら刻まれてた…」

「甘露寺…」

「なんでこんなに鬼狩がいるの?こんなバイ菌を大量に入れたなんて無惨!絶対に私がぶつ殺してや…」

「私が引き入れたの。あなたを殺すために」

鳴女が姿を現す。

「鳴女、なんであなたが鬼狩と一緒になの?」

「私はね、あなたのことが大嫌いな。無惨様を脅かした上に、無惨様

の心を踏みにじった女、その妹であるあなたの事も」

「やっぱり日本の鬼ってゴミね。私たちみたいな世界の鬼と比べたら井の中の蛙大海を知らずってところね」

「え？世界ってどういうこと？」

「知らないの？私はね、日本生まれじゃないの。古くはワラキアという国、その国で私は生まれた、つまり私は日本語で言う西洋の鬼よ」

西洋の鬼、つまり世界中に鬼がいるということ。それを聞かされた柱や隊士たちは驚くしか無かった。

「ちよつとまで！世界って、どんだけ無惨という鬼は手を広げてんだよ！」

「違うよ？無惨は日本でずーっと1100年間この狭い日本で鬼の王様をやっていただけ」

無惨はまさに井の中の蛙だった。もう1人の鬼の始祖、つまり上弦の壱の姉は世界中に鬼をばらまいていたのだ。

そしてその鬼の妹が何故か日本の鬼の下にいる。

「どういうことだ。鳴女、説明しやがれ！」

「無惨様はあの女と結婚してるの。そして3年前、無惨様が行った大血戦により、今の十二鬼月になったの。だから本来ならいないはずの異物が混入してるの、それが無惨様を大きく狂わせた」

鬼同士が結婚しているということを聞かされてみんなが焦る。

つまりこの鬼の2つの勢力が1つになって大きな勢力となっていた。

それと鬼殺隊は戦っていたのである。

実際絶望的な状況から大きく人間側の勝利に傾いたところでまだ世界中に鬼がいる。

これでは戦いが終わらない。これが最終決戦ではないことを鬼殺隊の人々は知ることとなった。

さとりの過去とフランの血鬼術

とにかく埒があかない。

俺はそう思った、

「お前ら！ よーく聞け！ 混乱するのはわかる。だが、戦う奴は戦う。後衛に回るヤツはしっかり支える。それをはつきりしろ！」

俺は派手に決めた。

「なら、私が行くわ。あと、咲夜とこいしはまだ怪我もほとんどしてない。だから、2人も戦いなさい。そして甘露寺さん、伊黒さん、あなたたちはさつきまで戦っていた人々の手当をして」

「え？ 私も戦いたい！ さとりさんいいでしょ？」

「ダメよ、あなたは気合いが入りすぎると周りが見えなくなる。だからこそこの戦いであなたは使い物にならないわ、何せ私以外あの鬼を見たことがないんだから」

さとりは2人を牽制した。

「なんかみんな楽しそうね。十二鬼月は堅苦しくてつまんなかった」

フランはそう呟いた。

「私の恨み、全部あなたにぶつけるわ。思い出すわ、15年前、あなたに家ごと両親を爆殺されたことを」

「あ、あの時の小さいピンク髪の女の子かあ、覚えてるよ。ものすごく大きな家の前で泣いてたから」

私の父は政治家だった。

なので私の家はとにかく裕福であった。

とにかく何不自由なく暮らしていた。

その平穏はあの夜、壊されることとなった。

父はその日、ある女性と家で会談をしていた。

その女性はものすごく権力があるようで、日本についてのあれこれを話していた。

しかし、交渉が決裂したのかその女性は少し怒りながら帰っていつ

た。

だが、それから数分、家がものすごく揺れる。

「何が起こっているんだ！地震か!？」

「早く逃げなきゃー!」

私はまだ小さかったこいしをおんぶしながら家の外へと飛び出した。

すると外には小さな女の子が、家の周りをどんどんと爆発していた。

私はただ逃げるしかなかった。

全力で逃げていたそのとき。

ドーーーーーン!

ものすごい音とともに煙と炎が上がる。

そこは自分の住んでいた家、そこは跡形もなく消し飛び、両親と飼っていた猫は消し炭と化していた。

私は膝をつき、涙を流した。

私は誓った。私の大切なものを全て壊したあの金髪の女の子を許さない。

絶対に私はその女の子を倒すということ。

そしてその時の女の子が当時とほぼそのままの姿で私の前にいる。

ついに私は晴らせる。

この鬼、フランドール・スカーレットを倒せる機会が来た。

心の呼吸。肆の型 愚

霞の呼吸。弐の型 八重霞

鬼の体は四つに斬れる

血鬼術 フォーオブアカインド

突然フランドールは斬られた体からまた全身が現れる。

「あはははー！私はこんな技もできるんだ♪」

「ちっ、数を合わせてきやがったか!」

フランドールはそれぞれの隊士の元へ近づく。

さらにフランドールは技を放つ。

血鬼術 クランベリートラップ

個々のフランドールが技を放つ。

その技はあまりにもひしめき合い、彼らがお互いが息があつてなければぶつかってしまう。

「なかなかすばしっこいわね。よくついてこれるわねあんた達」

「柱稽古しててよかったなあ、お前ら！俺の体力訓練が効いたつてことだな！」

「その訓練確か大半の人が合格してなかったですか？私たちは2日で終わりましたが」

「私は一日で終わったよ、速すぎて宇髄さんはさすが柱の妹だつて褒めてたし」

そんな私は柱でありながら内容がみんなと被りまくつたせいで思いつかず最後の柱としての役目が出来なかつたことを思いだす。

フランドールの攻撃は意外にも似た動きをしていた。

私たちは癖を見つけ、技を叩き込む。

音の呼吸。壺の型 轟

心の呼吸。壺の型 志

風の呼吸。肆の型 移流斬り

花の呼吸。肆の型 紅花衣

その瞬間鬼の分裂したものは消える。

「へー、なかなかやるんだね。私の技を破る鬼を見たのは初めてだよ」

「このくらい朝飯前だ！地味な技しか持っていないのか？」

「そうだなー、これはどうかなー！」

血鬼術 スターボウブレイク

フランドールはものすごい勢いで雨のように攻撃を仕掛けてくる。

「さあ、踊りなさい！赤い靴のように」

僅かな隙間を縫うように攻撃を避けながら宇髄さんはフランドールに近づく。

「お嬢ちゃん、この速さ程度じゃ俺を止めるのは無理だぜ」

音の呼吸。肆の型 響斬無間

フランドールの服があちこち焦げる。

「あなた、私の服を汚したね、私はあなたのこと、大嫌いになったわ」

血鬼術　カゴメカゴメ

かなり近づいていたせいで避けきれず宇髓の左手が斬れ落ちる。

「くっ！そんな技まで持っていたか…」

宇髓は落ちた左手の持っていた刀を口に啣えて動く。

予想以上の強さである。

さらにフランドールは隙を見せない。

血鬼術　恋の迷路

その攻撃はフランドールの周囲を渦巻いており、逃げる場所がほぼない。

全員が一旦距離を取りながら攻撃を窺う。

「わはは、みんな面白いね！とりあえずぶっ飛ばしちゃうか！」

私たちは危機を感じた。まずい！やられる！

その瞬間、フランドールの腕が燃える。

「あーーーーー！熱いー！」

なぜ燃え上がったのか気づくのに少し時間がかかった。

そしてそこには着物の少女が降り立つ。

「みんな間に合ってよかった！」

その少女を見た瞬間、私たちは叫ぶ。

「「「禰豆子ちゃん!!」」」

爆血合戦と彌豆子の刻限

「あ、なんか醜女が来たね」

「私は醜女じゃないわ。私は彌豆子という名前があるんだから！」

「なんか私と近い臭いがする。もしかしてあなたってお姉ちゃんに鬼にしてもらったとか？」

「思い出せない、でも、なにかあなたとはどこか近いものを感じる」

私はここまで来た。

お兄ちゃんたちとの約束を破ったりしてごめんね、でも私にはやらなければいけないことだと思ったから。

「なぜ彌豆子ちゃんがここにいるの？」

「確か新産屋敷邸で薬を飲んでいた今頃寝ているはずだが」

鬼殺隊の人々は困惑する。

「私と呼んだのよ。もしもあなた達が倒せなかった時のために。無惨様から聞いた話だと、彌豆子という鬼は爆血という血鬼術を使うらしいのよ。その血鬼術はフランドールの使う血鬼術とかなり似ているって無惨様は仰っていたわ」

「なるほどな。目には目を歯には歯を、爆発には爆発をつてか、派手なこと思いつくぜあんたは」

「彌豆子ちゃんを危険に晒すのは良くないけど、今はこうしてもいられない。とにかく望みがあるなら信じるしかないわ」

「そうですね。似た血鬼術ならば相殺する可能性もありますし」

「あなたと私はコインの裏と表かもしれない。さてコインが上を向いているか」

「よく分からないけど、あなたとは戦うべき相手だっことはわかった」

「さあ、始めましょう、今宵の最大の火花を」

血鬼術。カタディオオプトリック

凄まじい速さで彌豆子に襲いかかる。

だが、彌豆子はそれよりも速く駆け、フランの近くまで来る。
爆血。

フランドールの服の左袖を焦がす。

「やっぱりあなた、私と似ているわね。私についてこられるなんて、面白いわね」

「私もよ。あなた、名前はなんて言うの？」

「私はフランドール、上弦の壱よ、まあそれも今となってはただの飾りだけ」

「それはその通りね。今となつては強い鬼は無惨とあなたぐらいですもんね」

「お姉ちゃんの存在を忘れてる！」

凄いい戦いだ。彌豆子がフランドールと互角に渡り合っている。

私たちも加勢しないと、だがこの戦いは隙が無さすぎる。

どうすれば勝てるのか。

そんな時だった。

「おーい！みんなー！」

ある男が善逸を背負って走ってくる。

「ちよつと！張り切りすぎ！」

「カナヲ、仕方ないわ。さつき鎧鴉が言つてたわ、上弦の弐が死んだつて」

「しのぶさん！カナヲまで！」

「いててて！俺のケツは鼓じゃねえんだから…、叩きすぎなんだよ！」

「それもこれも伊之助が悪い！」

「そうだ！勝手にあんたが村田さんを蹴飛ばしたせいだからね！あたいは止めようとしても聞かないのが悪い」

少し前に上弦の参を倒したものの、そして上弦の陸を倒したもののたちがこちらに着いた。

「彌豆子ちゃん、何故ここにいるんですか？」

「鳴女ちゃんがフランドールという鬼を倒すために切り札として呼んでいたのよ。もしも私たちが負けた時のためのね」

「彌豆子ちゃんは確か、人間に戻る薬を飲んでいるはず、そして彌豆子ちゃんが目覚めた頃には人間になっているはずよ」

「でも、彌豆子ちゃんは血鬼術を使っている。どうということ」
「そういうと鳴女は口を開く。」

「彌豆子という子は確かに薬を飲んでいたわ。確か時間は夜の10時くらいだったかしら」

それを聞いたしのぶは焦り、時計を見る

「今は午前3時、おそらく、彌豆子ちゃんが血鬼術を使えるのは、40分というところ。もしこの戦いで彌豆子ちゃんが先に人間に戻ってしまったら、私たちは終わりだわ」

「ということは私達も加勢しないとならない」

その時だった。

戦っている人と戦わない人の間に鳴女は壁を張る。

「どうということなの？鳴女」

「あなたたちにはまだ戦う敵がいる。その敵と戦うためにも休むなり治療をするなりしなさい。ここは私たちが決める」

鳴女はそういうと弦を弾く。

もうすぐ無惨様が目覚める頃だと思うけどそれまでにフランドールを倒さなければ。

血鬼術。禁じられた遊び

彌豆子たちは僅かな隙間を躲し続ける。

しかし、

「爆ぜなさい」

十字架は突然ボンと音を立てて爆ぜる。

「くっ、さすがに油断したわ」

「お姉ちゃん！左目が…」

「いいから集中しなさい！こいし」

「あ…うん！」

まさか血鬼術の複合もできるなんて、思ってもなかった。どんだけ強いよ。

玄弥の銃と上弦の壺の弱点

「隙が無さすぎる。どうにかして、勝つ方法を…」
私は考えていた。

フランドールの血鬼術は二つ以上同時に出せる。
これほどまでの強さを誇る鬼は見たことがない。
どうにかして勝つ方法はないのか…。

「キャハハ、随分と弱いわね。禰豆子は遊び相手になりそうだけどほかは全然ダメね！」

「あなたには絶対にみんなを傷つけさせない！」
「そうも言ってるけどさあ、あの宝石の人は左手がないし、あの桃色の髪の子はやられてるけど、どうなの？」

頼みの禰豆子ちゃんは時間が無い。

私は少し後退りをする。
すると

カチャ

何か金属のような音がした。

私は足元を見ると銃が転がっていた。

それを私は拾う。

見たことの無い紋様だ。

銃身には目が刻まれており、網目状になにかが張り付いている。

私はふと思い返す。

鬼殺隊にはたった一人だけ銃を使う者がいた。

そう玄弥だ。

玄弥は今風柱が手当をしているはずだ。

もしかしてこの銃って…

「ハハ、疲れてきたんじゃないの？あ、鬼は疲れななんだよね！」

「馬鹿にしているの？私は早くあなたを倒してあの鬼の所まで…」

私は銃口をフランドールに向ける。

「あ、なんかあそこの人、変な…」

ドン！ドン！

私は銃を撃った。かなり反動が大きい。柱稽古で鍛えてなかったら私の腕は砕けていたかもしれない。

「へへっそんな銃なんて私にあたら……」

弾の軌道が大きく変わる。

そしてその弾は、フランの右眼に命中する。

「くっそ！こんな銃があるなんて！」

「手が緩んでるよ！」

銃の軌道が変わった。やはり、玄弥はまだ生きている。

私は玄弥がなにか凄いことでもしてるはず、そう思った。

刀鍛冶の里で玄弥は半天狗の術で作られた木を食らっていた。

あの時の技をもしかすると玄弥は吸収したのかもしれない。

先程まで上弦の式と戦っていたのだから確実にその鬼の何かも食らっている。

私は銃を撃ち続ける。

何発も撃った。

弾も一切きれない。

無尽蔵に放たれる弾はおそろしい。

そして私は叫ぶ！

「玄弥！血鬼術だ！」

その声に呼応するように、フランドルの体からは木が生える。

その木がフランドルの視界を完全に奪った。

そこに彌豆子はフランドルの腹を脚で貫く。

「フッフ、なかなか面白い血鬼術ね。でもね。木は火に焼かれて死ぬのよ」

その言葉を聞いた瞬間、銃が熱くなる。

私は銃を手放す。

すると、銃が燃え上がる。

玄弥！もしかして……

「玄弥……！どうなってる！畜生！なんで燃えているんだ！」

「ごめん…これは地獄の業火なんだ…俺が鬼を食ったばかりに…」

「お兄ちゃんが火を消してやる！水は…水はどこだ！」

「もう…いいんだよ…俺は…兄ちゃんが幸せになるってことを知れただけでもよかった…」

「死ぬな！お前は…にとりさんと約束してるんだろが！」

「にとりさんにこれを渡してくれ…俺が…渡せなくてごめんって言うてたってにとりさんに伝えて…」

「おい…なんだよ！お前が渡せよ…！」

「兄ちゃん…文さんと…お幸せに…」

「玄弥………」

玄弥は火柱に焼かれて骨も残らずに死んでしまった。

「ふう、危なかった。まあ私の血鬼術なら術者を遡って焼き殺せるからいいけどさ」

フランドールはそう言う。

「くくく、おかしいわね…術者を遡って焼き殺せるってのはわかった…」

突然さとりさんが笑う。

「ならなぜ禰豆子ちゃんには直接でしか血鬼術を撃ってないのかね！」

さとりさんの言葉で私は気がついた。

確かにおかしい、術者を遡って焼き殺せるのであれば玄弥は確かに殺せることがわかった。

でも、もしこれが正しい答えなのだとしたら…

「さとりさん…やはり…」

「ええ…咲夜。わかるわね」

「しのぶさん…さとりさんと咲夜さんはなにか気づいたんですか…」

「ええ、禰豆子には鬼から人間に戻す薬を作り、そして与えたというのは知っていると思います。ですがその薬というものを作る過程で珠

世さんたちの力だけではどうしても作れないことに私たちは気がついたのでしたんです」

「どういうことなんですか？」

「実は禰豆子ちゃんを鬼から人間に戻すためには2体の鬼の始祖の血を調べる必要があったからです。炭治郎くんが任務先で無惨に鬼にされた2人の人間を元に戻す薬は無惨の血を調べるだけでよかったです。ですが、おそらく禰豆子ちゃんが鬼化したのは2体の鬼の始祖の血が特別な状況で混入したのだからだと、私たちは結論に至ったのです」

「フランドールという鬼とどういう関係があるんですか？」

「推測が正しければ別の鬼の始祖の血を持つものはかんとんに爆発で殺すことはできる。でも禰豆子ちゃんの体の中にはもう1人の鬼の始祖、フランドールの姉の血が混じっている。その血か細胞を持つものを遡って攻撃することは不可能。だからフランドールは直接攻撃を叩き込むことしか出来ない。なぜなら無惨の呪いと一緒で同じ鬼の始祖から作られた鬼は同じ細胞を壊せば、自分の細胞が暴走して死ぬ。それがフランドールの弱点……」

私はフランドールが禰豆子ちゃんとやり合っている所へと向かう。

花の呼吸。 伍の型 徒の芍薬

私はフランドールに攻撃を叩き込む。

更には禰豆子ちゃんも爆血を発動する。

フランドールの右足が燃える。

だが、フランドールはニヤリとする。

「私の近くに3人も来たか、ならば……」

血鬼術。 レーヴァティン

上弦の決着と無惨の復活

フランドールの右腕が赤く光る。
そして彼女が素早く腕を振る。
ものすごい数の血弾が放たれる。
その血弾の軌道で察する。
私はとにかく急ぐ、その攻撃の先が、こいしであるということに。

「さとりさん！」

「さとりー！」

私は妹の前に立ち、血弾を受ける。

「さとりお姉ちゃん……」

「油断しない方がいいわ……、こいし……ゴフツ」

「お姉ちゃんー！」

私の体は何ヶ所か抉られていた。

体が小さい私は失血するかもしれない。

だが、弱点がわかったからには、禰豆子ちゃんには勝利への道筋は
たった。

勝たなければ……どんな犠牲を払おうとも。

「あは、ピンクのお姉ちゃんは妹なんかを守って大丈夫なの？よくあ
なたにはその余裕があるわね」

「あなたには周りが見えなくなるということもあるのね。面白いこと
に……気がついた」

「面白……え？」

フランドールは脚を見るとそこには右脚がゴロンと落ちていた。

フランドールは焦る。

本来ならばすぐにでも回復しているはず、なのに、彼女の脚は少し
ずつしか元に戻っていない。

「これが……赫刀……やはり……炭治郎くんから聴いておいてよかった」

私は短い腕を力を入れて赫刀にすることが出来た。

しのぶとは違い、私は鬼を斬れる程の腕力をつけておいてよかった

と思う。

「おもしれえじゃねえか！そんなもんがあるとはな！」

宇髄も刀に力を込める。

すると、太い刀が更に赤くなる。

「これはまた派手だな…」

私は全力でフランドールの所へ跳ぶ。

血鬼術で抵抗をするが、脚が斬れたことに動揺しているため、血弾をがむしやらに放っているだけ。

それならば荒が出て隙もできる。

私は刀を振るう。

心の呼吸。捌の型 惣

「私の翼が…」

フランドールの翼を切り裂く。

その翼からは血が噴き出し、フランドールの顔には焦りが見える。翼を失ったことによりフランドールは落ちる。

フランドールは床に叩きつけられる。

「どうして…どうして翼が…治らないの！」

フランドールは完全に心がやられている。

やはり何百年と生きようとも、戦闘力が高かろうとも。

彼女自身は子供と何ら変わらない。

宇髄さんが技を放つ。

音の呼吸。陸の型 不響環音

フランドールの両腕が斬り落とされる。

更には禰豆子が血を飛ばし、拳を握る。

爆血！

フランドールの体は大きく燃え上がる。

だが、フランドールも力を込めて禰豆子を燃やそうとする。しかし、禰豆子の体は焼け焦げることはない。

フランドールは焦る。

そして咲夜とこいしが型を放つ。

花の呼吸。肆の型 紅花衣

霞の呼吸。肆の型 移流斬り
咲夜とこいしは力を込めてフランドールの頸を刎ねた。

一方そのころ、

「炭治郎…何を泣いている」

「もうすぐ無惨のところだ。しっかりしなさい！」

俺は涙を流す。

死んだ人が出てしまった。

上弦の参が終わるまでは誰一人として死ななかった。

だが、それに俺は慣れきっていたんだ。

鬼を狩ること自体が確実に命をかけての戦いなのだ。

死んでしまったのが寄りにもよって柱の三強の一角、八意永琳さん。

「炭治郎！」

俺は妖夢に平手打ちされる。

「あなたがしつかりしないと！私たちまで涙が出ちゃうじゃないの！あと少しであなたの因縁の敵と戦うのにそんな顔してちゃ同情もされずに殺される！」

「ぐ…ぐ…めん…」

俺は涙を拭い、全力で走る。

すると、鏖鴉が叫ぶ。

「無惨復活の兆シアリ！城ノ中央ノ繭が動き出シテイル！」

どういうことだ。無惨がもうすぐ復活する!?

その瞬間、ものすごい音がする。

その音は骨が絶たれる音、建物が碎ける音など様々だ。

もしかして、こっちに向かっているのか？

ドーーーーーン！

目の前に大きな肉が現れる。

そしてその肉が開かれる。

「千年以上生きていると喰い物が上手いという感覚も無くなってくるが、餓えていた今の食事は実に美味だった：まるでうな重のように：、私の為にわざわざ食糧を運んだ鳴女、そしてその食糧を作り出した産屋敷、褒めてやろう」

目の前には牙が至る所にあり、そこは口としてなっているのかよく分からない姿の男が立っていた。

だが、わかる。

「無惨！」

「炭治郎！久しぶりだな：。お前、この頭を知っているか？」

俺は、それを見て目を見開く。

「珠世さん：」

「最後にお前の顔が見たいと言ったのでな：なんでも：お前の顔が孫に似ていたと申すから」

「無惨！あなたは既に大きな過ちをおかしている。あなたの命も今日限りよ」

「ほう、確かに私は過ちをおかした。お前は私に惚れていると思えば裏切る為についていた。だが、それだけの話だ。今私は鳴女という女のことを好きだ。あの危険な鬼と比べれば、知も深く、何より私の事を一番に考えてくれる。そんな女に見向きも出来なかっただけが過ちか」

「いいえ、あなたはもつと大きな過ちをおかしている。いずれそれがわかるでしょうね。それに気づいたところであなたは死ぬことはわかっているのだから」

「それが最後の言葉か：言い残すことはもう無いな。ならばお前は地獄から私が現世の神となる姿を悔しがれば良い！」

グシャ！

その時、珠世さんは最後に無惨に言い放っていた。

「無惨に死になさい：」

その言葉が俺にしか聞こえてなかった。

悲しき死と鬼の目の涙

「終わっ…た…」

私は既に限界を超えていた。

血を多く流しすぎた。

私は倒れ込む。

「お姉ちゃん!!」

「こい…し…」

「お姉ちゃん! しっかりして! 早く手当を…」

私はこいしの顎に手を当てる。

「こいし…あなたは生きなさい…あなたには無一郎という人がいる…
でしょ…彼の人生にあなたは…寄り添いなさい…」

視界がぼやける。

もうこいしとは一緒に過ごせない…私は、弱かった…。

義勇のことを心配しすぎてずっとなついて行っていたが、私も義勇とほとんど同じ理由である。

姉のくせに力は弱く、妹の強さに必死にしがみついていたばかりだった。心が読める力で煽り、相手の隙を作り、不意打ちをすることでは鬼を倒せない私はなぜ柱に慣れたのかも分からない。

こいしの方が私よりもずっとずっと強い。

私はただそれに追いつきたかっただけだ。

私は結局こいしに追いつくことは出来なかった。

最弱の柱であり、ただ21という歳を重ねていた。

「お姉ちゃん…! 死なないで! 私はずっとお姉ちゃんを目指して頑張ったのに、お姉ちゃんと一緒に柱になって、お姉ちゃんと柱合会議に出て、お姉ちゃんと合同任務をして、お姉ちゃんと鬼を…」

「こいし…不甲斐なく弱いお姉ちゃんで…ごめんね…」

私は力尽きた。

もうすぐこいしの声も聞こえなくなる。

「お姉ちゃん!」

私は目が覚めるとそこには両親とそして飼っていた赤毛の猫が待っていた。

「さとり…お前が来てしまうなんて…」

「私たちのことはいいいから…、はやくこいしの元へ戻りなさい！」

私は言われた、でも私は既に命の火が消えてしまった。

もう戻ることは出来ない。

「お父さん、お母さん…ごめんなさい…。私…お父さんとお母さんの仇をうつためだけに生きてきた…。私は討つことが出来たから…もう…私は思い残すことはないわ…」

「さとり！こいしは！こいしはどうなるんだ！」

「こいしなら、やってくれる。それに、私はこいしに全てを託した。こいしならきつと生き残れる」

私は川の方へと走っていった。

「お姉ちゃん！」

「こいしちゃん、さとりさんは…もう…」

「咲夜！そんなことはもうわかっている…だって私は…お姉ちゃんと同じ力を持っているんだから…。でも…」

私はボロボロと泣いた。お姉ちゃんはもう逝ってしまった。

「あなたもついに終わりね。フランドール・スカーレット」

「フッフ、随分とお高く止まっているねえ…」

「あなたが死ねばあなたの陣営は日本だとあなたのお姉ちゃんだけよ。あなたが死んだらあなたの姉は無惨様が倒してくれる」

「だけどね…お姉ちゃんは強いよ？今頃城の外で鬼狩と戯れているころよ」

「でも残念ね。あなたたちの狙いでもある禰豆子ちゃんは、あと5分もすれば完全に人間に戻るわ。それに、鬼化していた時の禰豆子ちゃんの血は既に私たちが回収済み、太陽の克服は無惨様に軍配ね」

しかしフランドールの笑みがやまない。

その時だった。

私の肩になにかが突き刺さる。
それを見ると私は焦る。

「私が鶴ならあなたは亀ね。さあ一緒に命の盃の上から滑りましょう！」

その瞬間、私の体は燃え上がる。

「鳴女ちゃん！」

「鳴女！」

「鳴女殿！」

私は不覚だった。上弦の壱ともなれば死までにはある程度時間を要す。

その間にトドメを刺せばよかった。

私が死ねばこの城もいずれ崩壊する。

このままではみんな生き埋めになる。

私は最後の力を振り絞り、弦を弾く。

「あなたを道連れにすれば、あなたの勢力も無惨ただ一人……。さあ、地獄から無惨の無惨な最後を見届けましょう！」

フランドールは塵へとかえり、私は骨も残らず蒸発した。

「なんだと！」

突然無惨の様子がおかしくなる。

「無惨！」

無惨は頭を抱える。

「鳴女…お前ってやつは…」

無惨の足元に涙が零れ落ちる。

「もう…私は我慢の限界だ！鬼狩ども、お前ら全員！皆殺しにしてやる！」

その時、城がものすごい音を立てる。

床が揺らぐ。

「まずい！城が崩壊する！」

「今はとにかく、自分のことを優先しろ！無惨に構うのはその次だ！」

「炭治郎！お前が私を見つけ、一年が経つ。お前が私に初めて見た時に殺しておけばよかった。そしてお前の死に場所も私は決めておいた。鳴女には感謝するしかないな。最後の戦いの場所は私が用意した！」

「まさか…」

「そう！お前と初めて対面した！浅草でお前たち鬼狩は全員死ぬのだ！」

ものすごい轟音を立てて城そのものがせりあがっていく。

その重力に耐えきれずみんなが床に倒れ込む。

そして数分後、ものすごい音を立てて地上へと城は露出する。

「無惨が城自体を地上へと浮き上がらせました。ですが場所は…市街地！浅草です！」

想定の場所の1つではあった…でも浅草はかなりの市街地。このままでは多くの被害が出てしまう。無惨自身が最後の戦場を選ぶなんて思わなかった。

「ひなき！日の出の時間は！」

「今日は5月18日、推測が正しければ夜明けまではあと55分くらいです」

「まずい！1時間も…無惨の力があれば…帝都は壊滅する。どうにかしてでも無惨を食い止める！このままでは鬼殺隊はおろか…この国が終わりかねない」

その時、報せが来る。

「お館様！新産屋敷邸に襲撃してきた鬼は全て片付きました！」

「そうか！みんな、よく頑張った」

「ですが、声を発していた鬼が見当たりません。おそらく、無限城の方へ向かったのでは…」

まずい…彌豆子が無限城にいるということがバレたか…

みんな、あと55分、どうかして持ってくれ。

その鬼もろとも、太陽で灼いてこの世から消し去る。

目覚めぬ炭治郎と肉の壁

「カアアア！五十五分！夜明ケマデ五十五分！」

城は大きく崩れ、周りには街が見える。

「ここは…帝都の近くか」

「大変！このまま無惨を倒せなければ日本は終わるわ！」

「さあお前たちと私！どちらが明日を生きるか勝負だ！」

瓦礫から無惨は現れる。

その背中にはトゲや鋭利な牙のような先端がついた鞭のような触手が生えていた。

その攻撃はあまりにも速く、辺りにいた隊士たちをズタズタに斬り裂く。

「みんな！」

「くっ、どれだけの仲間を殺せば気が済む！無惨！」

蛇の呼吸。参の型

恋の呼吸。弐の型

水の呼吸。捌の型

炎の呼吸。陸の型

触手や無惨の体を斬る。

頸を斬っても死なないが、攻撃は確実に有効。体をバラバラにして少しでも怯ませ…!?

「えっ!?手応えはあったはずなのに！」

「何故だ！私の型は確実に触手斬り裂いたはず！」

違う、斬った！確実に！ただこの化物が、

斬られた瞬間に再生速度を調整して手応えを騙しているんだ！

頸を斬っても死なない。再生速度を操り切断自体が不可能。

無惨は触手を振るう。

まずい！間合いが近すぎる！

次の瞬間、目の前で多くの隊士が血を噴き出す。

「いけー！ー！すすめー！ー！！前に出る！」

「柱や甲隊士は全力で守れ！命を捨てても肉の壁を作るんだ！」

「少しでも無惨と渡り合える剣士を守れ！最優先だ！」

千を超える隊士がいるとはいえ命を失うのは辛い。

「今までどれだけ柱や甲隊士たちに救われた！その人たちがいなければとつくの昔にみんな死んでいた！その命をここで使え！臆するな！戦えー！ー！ー！」

「ダメー！ー！みんなやめてー！」

甘露寺さんの言葉を放つものも一般の隊士たちは聞く耳を持つものはない。

さらに、触手に斬られたものから異変が起きる。

「うっ……うわあああああー！」

突然体を押さえ転がる者たちが現れる。

「即死できた者はかなり幸運だ！即死が出来なくとも私に傷をつけられた者は死に繋がる」

その転がった隊士の傷口は肉のようなものが現れ、脈動をし、そして血を吐きながら息絶えていた。

「私の攻撃に私自身の血を混ぜる。鬼にすることはない、それほど大量の血だ、猛毒と同じ、細胞を全て破壊し、死に至らしめる。私の血に耐えられるごくわずかな者が鬼になってきたのだから」

その言葉に絶望した。

無惨の血に耐えたもの、そのものが鬼となり、さらに血を耐え切れたものが十二鬼月になったのだ。

だからこそ強かった。

その十二鬼月よりもさらに別格、そんな鬼がもう一体もいるとなればここで無惨を太陽で殺さなければまた鬼殺隊もやり直しになる。

「どうしてなんだ！命は一つしかない！それなのに！なぜ……」

「お館様、一つ良いですか……」

「え？」

パシン！

私は平手打ちされた。

なぜされたのかはその時わからなかった。

「彼らは必死になって勝利への橋をかけているんです。無駄死になんかじゃないんです。それもこれもあなたの子供たちがあなたを思っ
てやっているんです。それこそあなたが無駄だと思っ
てしまったら死んだ隊士たちが浮かばれません」

「そうだね…早苗、私は悲しんでいる場合じゃないな」

「その強い面持ちがあつてこそそのお館様なんですから」

「現在の状況はどうだ！にちか」

「はい、現在生きている隊士の数は572人、そのうち116名が戦闘不能状態です」

「とにかく、あと少しだけ足止めするんだ。無駄が動かなければ帝都は守られる。そして私の勝手な予測だが、もう一体の鬼の始祖は無惨のところに向かっているんじゃないかと思う。おそらく無惨とは仲が悪いか、それとも無惨を狙うものかだ」

「なるほど、やはり鬼の始祖は一枚岩ではないと」

「それに海外でも鬼の被害は報告がわずかながらあつたとされる記述も見つけた。おそらく、その鬼の始祖は海外からこの日本にやってきたと思う」

「どこなんだよー！炭治郎！」

俺は全力で探していた。

城が崩れた時、俺は他の甲の奴らとお互いで顔を合わせた
が炭治郎だけがいないということに気がつく。

「善逸さんの耳と伊之助さんの感覚が頼りですからね」

「そんなことわかってるよ！」

「やっぱりなあ、俺がいねえとなんも出来ねえんだよ。やっぱり俺が親分だな」

「はいはい、そうですね。親分伊之助さん」

全力で耳をすませる。

どこかにいな…

すると、俺は感じとる。

そして全力で走る。

「なんかあつたんですか？つてちよつと！善逸！」

とにかく感じ取った俺は近くの瓦礫をどかす。

「いたー！」

「善逸さん！なんか見つけたんで…」

「禰豆子ちゃん！よかったあ、生きてる！心配したんだよく！ごめん…」

ゴンツ

「酷いよく、せつかく見つけたというのにさあ」

「ここは戦場なんですよ？それに本来の目的を見失ってませんか？炭治郎をつてあれ？なんで禰豆子ちゃんがここにいるんだ？」

「あ？それか？脇毛だとかいうやつが上弦の壺を倒すために連れてきてたんだよ。お前が知らねえのも無理ねえか、あの時妖夢はいなかったからな」

「え!?!そんなことがあつたんですか？禰豆子ちゃんが戦闘してるなんて」

「禰豆子ちゃんから鬼の音がしない。人間の音だ。禰豆子ちゃんはどう鬼じゃない」

「え？人間に戻ったんですか？すごいですね。鬼が人間に戻れるなんて初めて知りました」

「しのぶが言つてた薬が効いてたらしいなそれに、そうなるともうこの子分は戦えねえわけか」

そしてその近くに手があるのに気がつく。

俺は周りの瓦礫を更にどかす。

そこには炭治郎が眠っていた。

右目は瓦礫によつて潰れてしまつているがまだ息はある。

「起きろー！炭治郎！まだ寝てる場合じゃないぞ」

だが、全く起きる気配がしない。

早く起きろ！お前の大切な妹の禰豆子ちゃんが人間に戻つたんだぞ！

揺する、頬を叩くなどをして目が一向に覚めない。

「炭治郎！炭治郎！」
夜明けまであと40分。

遺伝の記憶と縁壺の過去（前編）

ここはどこだ？

青空？夜が明けたのか？

いや違う、そんなはずは…

あれ？臭いが全然しない。

俺は前を向く。

そこには茅葺きの屋根の家があった。

これはうちか？いや…似てるけど少し違う。うちじゃない。

何をしているんだ俺は、薪割り？走馬灯を見てるのか？

足元に何がぎゅつと掴むものを感じる。

「とーたん、とーたん」

父さん？俺のことか？この子は誰だ？

「うー、んー」

子供が指さす先を見る。

そこには夢で見た男が歩いてきた。

始まりの呼吸の剣士…、縁壺さんか？

「久しぶりだな…また来てしまった」

「どうぞ！今日はどのような用事で？」

「誰かに話を聞いて欲しかった。随分考えて思い浮かんだのか、炭吉とすやこの顔だった」

もしかすると十三番目の型について聞けるかもしれない…

「二年ぶりでしょうか、お元気そうで良かったです」

ん？あれっ？どうなってるんだ？

「あの時の赤ん坊だった娘のすみれや息子の炭春もこんなに大きくなりました」

全然思ったこと話せないぞ？…うう…体が勝手に…

そうか当然だ。これは遺伝した先祖の記憶だから干渉は一切出来ないんだ。

「お前たちが幸せそうで嬉しい。幸せそうな人間を見ると幸せな気持ち

ちになる。この世はありとあらゆるものが美しい。この世界に生まれ落ちることが出来ただけで幸福だと思う」

縁壺さんは空を仰ぐ。

「私の母は信心深い人だった」

この世から諍いごとが無くなるよう毎日毎日祈っていた。太陽の神様に私の聞こえない耳を暖かく照らしてくださいと祈り、耳飾りのお守りまで作ってくれた。

私が口を効かなかったがために余計な心配をかけてしまい申し訳なかった。

私の兄はとても優しい人だった。いつも私を気にかけてくれた。

父から私に構うなと殴られ続けた翌日も笛を持ってきてくれた。助けて欲しいと思ったたら吹け、すぐに兄さんが助けに来る。だから何も心配はいらないと右目が開かなくなるほど赤紫に腫れた顔で笑った。

私は忌み子なので母が病死した後すぐに家を出た。

出家するよう言われていたが結局寺へは行かなかった。

どこまでも続く美しい空の下を思いきり走ってみたかった。

だが私は3日間走り続けても疲れて足が止まるということがなかった。

山の中でふと気づくところぢまりした田畑がある場所に出た。

誰かがぼつんと一人で立っていた。同じ年頃の女の子だった。

女の子は桶を持ったまま長い間ピクリとも動かなかった。

何をしているのか聞いてみると

「流行病で家族みんな死にしまった、1人きりになって寂しいから田んぼにいるおたまじゃくしを連れて帰ろうとおもって」

そういつてまた女の子は動かなくなった。

しかし日が暮れ始めると女の子は桶の生き物を田んぼに逃がした。

「連れて帰らないのか?」

「うん…親兄弟と引き離されるこの子達が可哀想じゃ」

「じゃあ俺と一緒に家へ帰ろう」

「えっ?」

黒曜石のような瞳のその女の子はうたという名前だった。

私とうたは一緒に暮らすことにした。

うたは朝から晩までよく喋る女の子だった。

私はうたのお陰で他人と自分の世界の視え肩が違うことを知った。生き物の体が透けて見える者など聞いたこともないそうさ。私はその時初めて漠然とした疎外感の理由がわかった気がした。

うたは糸の切れた凧のようだった私の手をしっかりと繋いでくれた人だった。

10年後、私たちが17の時夫婦になった。

うたの臨月が近づき出産に備えて私は産婆を呼びに出かけたら。日が暮れる前に帰るつもりだった。

途中で山三つ向こうの船岡山へ行こうとする老人に出会った。自らも心臓も関節も悪いというのに戦で負傷し死にかけている我が子の元へ急いでいた。

老人を送り届け、帰りに産婆を呼びに行ったものの日が暮れてしまい、うたは、家の前で腹の子諸共殺されていた。家には無かった槍によつて。

「自分が命より大切に思っているものでも他人は容易く踏みつけにできるのだ」

私は十日ほどぼんやりして妻と子供の亡骸を抱いていた。

鬼の足跡をおつてきた剣士、煉獄橋平に吊つてやらねば可哀想だと言われるまで。

私の夢は家族と静かに暮らすことだった。

小さな家がいい、布団を並べて眠りたい。

愛する人の顔が見える距離、手を伸ばせばすぐに繋げる、届く距離。それだけでよかったのにそんなことすら叶わない。

鬼がこの美しい世界に存在している為に。

私は煉獄橋平の誘いで鬼狩りとなった。鬼を追うもの達は古く平安の中頃からいたそうだが呼吸が使える者はいなかった。私には教えなかった。

柱と呼ばれていた剣士たちは非常に優秀で、元々使っていた炎・風・

水・雷・岩の剣術の型に上乘せをして呼吸を使えば飛躍的に力が向上した。

鬼狩りたちは凄まじい勢いで鬼を倒せるようになり、私の兄も側近を殺され鬼狩りに加わり、力を貸してくれた。

兄も素晴らしく、私の編み出した日の呼吸を一つだけ見て数分もせず月の呼吸を五つ六つと技を思いつくほどだった。

それから半年、鬼の始祖を見つけた。

出会った瞬間に、私はこの男を、倒すために生まれてきたのだとわかった。

その男は暴力的な生命力に満ち溢れていた。

火山から吹き出す岩漿を彷彿とさせる男だった。

ぐつぐつと煮え滾り全てを飲み込もうとしていた。

「呼吸を使う剣士にはもう興味が無い。鬼狩りたちも歴史の波に埋もれていくがよい」

そう言うや否や男は腕を打ち振るった。恐るべき速さと間合いの広さだった。攻撃を避けると遙か後方まで竹が斬り倒される音がした。かすり傷でも死に至ると感じた。私は生まれて初めて背筋がヒヤリとした。

男には心臓が七つ、脳が五つあった。

この瞬間私の剣技はほぼ完成した。

完成した型!! 十三個目の? 知りたい! 教えて欲しい!

男は自らの肉体を再生しないことに困惑している様子だった。

斬られた頸が落ちぬように支えていたが繋がることはなかった。

私の赫刀は鬼の始祖でも靦面に効くのだと知った。

私はこの男にどうしても聞きたいことがあった。

「命をなんだと思っている?」

男からの返答はなかった。男は私を見ていたが怒りの為か顔が赤黒く膨れ上がっていて、私の言葉は男の心まで届かないと思った。

ふと、男が連れていた鬼の娘に目をやると、

彼女は男を助けようともせず、前のめりにカツと目を見開き、頸を

斬られた男の姿を凝視していた。奇妙なことにその瞳はキラキラと希望の光で輝いて見えた。

私は彼女より先に男に止めを刺すことにした。

私が一歩男に近づくと、食い締められた奥歯が砕ける音がした。次の瞬間男の肉体は勢いよく弾けた。

千八百ほどに散らばった肉片のうち、千六百をその場で斬った。けれども残りの肉片はあまりに小さすぎた。

合わせればおそらく拳2つほどの大きさの肉片を逃してしまった。

私は立ち尽くしていると悲鳴のような泣き声のような娘の声と共に倒れ込む音がした。

「もう少しだったのに、もう少しだったのに・頸の弱点を克服していたなんて…」

言葉を絞り出して娘は頭を掻き毟った。

「死ねばよかったのに！生き汚い男！鬼舞辻無惨！」

私はその娘の元に近寄る。

「死なない…なぜ私は死なない？」

慌てふためく娘を宥めると堰をきったように男について話してくれた。

そして鬼の始祖、鬼舞辻無惨はもう、私が死ぬまで姿を現さないだろうとも言った。

私は無惨が弱った頃一時的に彼の支配から解放されたという彼女に彼を倒す手助けを頼んだ。

何十年でもいい、何百年でもいい。必ずしも鬼舞辻無惨を倒すために鬼殺隊に協力して欲しいと。

娘は始め戸惑っていたが承知してくれた。

彼女は珠世、人の頃は平珠世だったとも言った。

悲しい目をしていた。

珠世!? 珠世さんのことか…!?

その後駆けつけた仲間から兄が重傷を負い、鬼舞辻に鬼にされたことを聞いた。

私は鬼舞辻を倒せなかったこと、珠世を逃がしたこと、兄が鬼に

なったことの責任を取る為鬼狩りを事実上の追放をされた。

一部の者からは自刃せよとの声も上がったが六つの身で当主となったばかりのお館様がそれを止めて下さり、一つだけ命令をしてくだされた。

父を亡くし心の弱っている子供にさらなる心労をかけて申し訳なかった。

「縁壺さんは悪くない…」

「私は恐らく鬼舞辻無惨を倒す為に特別強く造られて生まれてきたのだと思う。」

しかし私はしくじった。結局しくじってしまったのだ」

私がしくじったせいでこれからもまた多くの人の命が奪われる。心苦しい。

言葉が出ない。あまりの多くのことが縁壺さんの身に起こりすぎていてかける言葉が見つからなかった。

もしかしたら俺の祖先の炭吉さんなら何か言ってくれるかもしれないけれど、しばらく沈黙だけが続いた。

どうにかしてあげたい。この人は深く傷ついてここに來たんだ。どうにか…

「だっ…お」

「あつ…抱いてやってください。高く持ち上げてやると喜ぶのであなたは私より上背もあるし…」

縁壺さんはヒョイと持ち上げる。

するとすみれはものすごく喜んでいた。

「炭吉さんただいまあ、見てこれ！今年の栗こんなに大きいのよ！それに舞茸まで見つけたのよ！今夜はご馳走だわ！」

「どうしたの…。あれえ？まー！縁壺さんじゃないそんなに泣いてどうしたの！きつと大丈夫よお。お腹いっぱいごはんたべさけてあげますからねっ！げんきだして！ほらあ」

戦いの最中だと言うのはわかつている。

それでも縁壺さんの心が何百年も昔に亡くなっているこの人の心

がほんの少しでも救われることを願わずにはいられなかった。

そして場面は変わる。

目の前には老いた縁壺さんが膝をついて泣いていた。

「二度ならず…二度としくじってしまった…」

その時、自分の姿が炭吉ではなくなっていることに気がつく。

遺伝の記憶と縁壺の過去（後編）

「すまぬ、炭吉。お前と30年も会えなくて」

俺は何故か似た人となつて墓の前で泣く縁壺眺めている。

「縁壺さん、生きて帰ってきただけでも父はお空で喜んでますよ」
それを自分で発した時気がつく。

今俺は炭吉の息子なのだ。

「私は…炭吉と別れたあと西に向かい、鬼を倒す予定だった」

私は船に乗りながら西の日向のことを思っていた。

しかし、私の乗った船は嵐に遭い、海へと投げ出された。

その時、波に流されて気がついたら見知らぬ島にいた。

私はそこに住んでいる肌の濃い人々と過ごした。

その島には言葉の通じぬものが住んでいた。

私はそこで3年を過ごした。

だが、私はそこに来た不思議な男たちに船に乗せられ、プルトウガルという国に連れていかれた。

私が連れてかれた先はオーガやゴブリンといった鬼によつて苦しめられていた国だった。

その国のものに私は呼吸法を教えた。

そのおかげもあつてか一時的にその鬼達は減少をした。

しかし、その鬼達は更に多くの大群を率いて襲いかかってきた。

私はあまりの恐怖に初めて逃げてしまった。

そのせいで更に多くの人が死んでしまった。

私は悲しむしかない。

私が逃げなければ生きてられると思つたものも多かつた。

悲しい。

それから私は自分の国へ帰るために東へと進むことにした。

その道中に見たことだが、鬼の始祖はこの世界にもう1人いる。

その鬼の始祖は幼い姿ながらオーガやゴブリンという鬼を率いる女王だ。

いつかその鬼の始祖がこの日の本に攻めてくるかもしれない。

私はそのことを鬼狩りのもの達に教えたものの30年もの間行方しれずのままいたせいでお館様が変わってしまい、私は本当の意味で鬼狩から追放されてしまった。

今この体でもとにかくやらなければいけないこと、

それは十三の型を完成し、いずれその鬼をも倒せる技になるまで頑張ります。

「炭吉、お前の息子が日の呼吸を踊りにして踊っておる。私は嬉しくてしょうがない。踊りや舞は長く受け継がれる。そして遠い未来、その鬼が日の本を攻めてきた時、倒せるかもしれない」

そう言って縁壺さんは立ち去った。

「これが私の生きてきた八十八年だ」

「うわあー！」

俺はびっくりする。

なぜ俺の目の前に若い頃の縁壺さんがいるのか。

俺は自分の体を確認すると元の自分へと戻っていた。

「あなたには教えなければならぬ。日の呼吸。十三の型を」
縁壺さんが何故か俺に教えてくれる？

十三の型が存在しているとは思わなかった。

「どうして教えてくれるんですか？」

「あなたの魂は私の魂が輪廻転生した魂だからだ」

輪廻転生、そうか。つまり俺の魂は縁壺さんと同じ魂だったのか。

「その型は……だ。もうすぐその技を使う時が来る。だからこそ私はあなたに教えなければならぬのだ」

その型を縁壺さんから直々に教えてくれるとは思わなかった。

「炭治郎!!起きるのよー！」

俺は目を開ける。

「起きたー!炭治郎が目を覚ましたー！」

「心配したんだよー!全然起きないからー」

俺は周りを見渡すと瓦礫が散乱している。

俺は無限城が地上へと露出した時に大きく弾き飛ばされた。

そしてそのまま瓦礫の下に埋まってしまい、瓦礫に右目が潰されてしまった。

そうみんなが教えてくれた。

「とにかく急がないと、無惨をまず倒さない」と

「炭治郎、その怪我で大丈夫なの？」

「ああ、まず無惨を倒さないともう一体の鬼の始祖が来てしまう。

その前に無惨を倒さなければならぬ」

「そうか、じゃあ俺達も行く。炭治郎だけじゃ心配だからな」

「自分が頑張っているのに親分が頑張らないと示しがつかないからな」

俺たちは無惨の所へと向かった。

日の出まであと30分

婚前隊士の撤退と無惨攻略の糸口

幸い近くに刀があったから良かった…だが、この速さ…異常すぎる。

速すぎる。4人がかりでも息が続かん！

僅かに攻撃を避けられている。だが、攻勢に転じる隙が一切ない。

その時、無惨は触手を甘露寺めがけて振るう。

「甘露寺！」

「お前の姿は弱点を晒してい…」

バゴン

その時目の前に鉄球が降ってきて無惨の触手を砕く。

「遅れてすまない。発動に時間がかかってしまった」

「悲鳴嶼さん…そんな…」

「私はこの戦いをもって最期となる。私の目的は無惨を倒す。それだけだ」

「悲鳴嶼さん…」

無惨は攻撃の手を少し緩める。

それを見逃さず、無惨は縦切りされる。

無惨は後ろを振り返るとそこには傷だらけの白髪の男がいた。

その男は何かの液体が入った瓶をいくつも投げつける。

無惨はその瓶を切り裂くが液体は降りかかる。

そして男は紙マッチを磨り、無惨に火をつける。

「小賢しい真似を！」

「てめえにはこれくらいがお似合いだぜ！俺の弟はこれより熱いの炎で塵も残らず死んじまった。」

ぶち殺してやる、お前ももう一体も」

「ふん、ならばお前らの望み通り、本気を出すか！」

その時、無惨の触手がさらに増える。

「ここまで力を出させるものたち、やはり柱は強い」

無惨はさらなる速さで触手を振る。

あまりの速さにあちこちに傷がつく。
そんな中。

「きやあああああ！」

思いきり叫ぶ声が聞こえる。

「甘露寺……！」

声の方を見る。

その先には両腕の肘上から先がなくなっていた。

俺は急いで甘露寺の元へ駆け寄る。

腕の無い柱は今ここでは足でまといにしかない。

「甘露寺！急いで撤退しろ！お前は生きるんだ！なんとしても！」

甘露寺を抱えて逃げる。

無惨はその隙を許してくれなかった。

「伊黒さん！」

目の前が真っ暗になる。

何も見えない。

何が起こったんだ。

「伊黒さん……私のせいで……」

甘露寺の声は聞こえる。

だが抱えているはずの甘露寺の姿は見えない。

「村田……伊黒を頼む！」

富岡の声か、その時俺は背中を引つ張られる。

俺は完全に失明した。そう理解した。

だが甘露寺は生きている。

それだけでも良かった。

祝言を来月に控えていた俺たちは生きなくてはならなかった。

「ふ、2人柱が減ったか。足でまといの柱はさっさと消えれば良い」

俺たちはふつつつと怒りが込み上げてくる。

その時、妹紅に異変が起きる。

「てめえ！婚前の女を傷つけやがって！」

妹紅の刀が赤くなる。

その色に無惨は一瞬怯む。

まずい、赤い刀だけは：

炎の呼吸。拾の型。煉獄鳥

私は無惨の腕を斬った。

無惨の攻撃はさらに緩む。

そして傷口を見ると、回復に時間がかかっていることに気がつく。

やはり、赫刀は無惨には効く。

「赫刀だ！赫刀を発動させろ！」

私は他の柱たちにそう伝える。

無惨は危険を感じるがそれももう遅い。

「厄介な…」

さらに無惨の触手は斬り落とされる。

だが無惨には何も見えていない。

「凄いわね。愈史郎という男はこんな紙1枚で私たちを無惨から見えなくするなんて」

「今は戦闘中よ。喋ったら無惨にバレちゃうわ」

アリスと文は愈史郎の血鬼術で密かに攻撃の機会を狙っていた。

そして赫刀に無惨が怯えた時、さらに加勢する。

「アリスはすごいよ。炭治郎と一緒に戦った時に赫刀を発動させてたなんてさあ」

風の呼吸。陸の型 黒風烟嵐

恋の呼吸。弐の型 懊悩巡る恋

文にアリス、2人の赫刀も増えたか。

花の呼吸。伍の型 徒の芍薬

「私も戦えない師範の分もやってやる！」

無惨の触手はかなり減り、回復も遅くなる。

3人も増えたか、よく来てくれた。かなり余裕ができた。アレをやるしかない。

私は斧と鉄球をかち合わせる。

すると鉄球も斧も赤くなる。

「富岡！刀を合わせろ！赫刀にするんだ！」

「わかった！」

富岡さんと不死川さんも赫刀を発動させる。

これで赫刀は7人。無惨の触手の数は7本。

「余裕余裕！あと少しで夜明けだ！無惨をここに止めておけばあいつは太陽で灼けるはずだ！」

無惨はその言葉を聞いて汗をかきだす。

「しまった。予想以上に解毒に時間をかけてしまった」

無惨は空を見る。

その空は黒から青へと変わる少し前、紫がかっているところだった。

無惨は戦闘の最中で逃げようとしだす。

「お前たちと構っていたいが私はやらなければいけないことがある」

そう言い残して体を膨らませようとする。

しかし、すぐに体が萎む。

分裂出来ない！

まさかあの女、人間に戻す薬だけではなかったのか…。

「フッフ、あなたは本当に脳が足りないのね。脳は5つもあるのに」

珠世の声が聞こえる。

「あなたのために全てをかけてきた。私はあれから数百年かけたけど薬ができたのはほんの3日前よ。それもあなたが嫌いな鬼狩と私は手を組んだことよってね。」

私はこの薬を作るために鬼狩たちと1年間協力して大量の血を集めたの。そしたらあなたの分裂する仕組みまですぐにつきとめられた。

あとは他の薬もかけあわせてあなたにぶち込む。それであなたは死に繋がるのよ。

まあ、6時間もかけて人間に戻すための薬を解毒していたあなたはこの薬を解毒することは到底不可能ね。それに戦場で気づいたとしても手遅れよ」

私は…まだやることがあるんだ！
力を込めて更に多くの触手を生み出し、辺り一面を破壊した。

夜明けまであと20分。

希望と絶望

凄い！これもしかしていけるんじゃないのか？

あと18分、夜明けまではもうすぐだ。

その思った瞬間、地面が大きく揺れる。

俺は壁から無惨の方を覗く。

いない！みんなはどこに行った！

俺はさらに身を乗り出して覗く。

すると壁際に岩柱が左足を失った状態で倒れていた。

水柱は右腕がそばに転がっている状態で気絶。

風柱は窓から足をだしている状態で気絶。

そして無惨の方に目をやると炎柱の髪が解けて立っていた。

「ケホッ」

「さすがは新たな炎柱、女と思って手加減したつもりだが、まさか立っていられるとはな」

「フ、あと少しで勝てる戦いよ。絶対にあなたをこの先には行かせない。たとえこの私の体が滅びようとも」

「妹紅さん…」

「心配すんな、あんたも女だろ？よく耐えたなあ、一瞬だけ右目を赤くして避けた。さすが、柱候補だな」

「でも…」

「このくらい平気だよ。髪ならすぐに伸びる。それに、無惨と同じ白い髪も私は好きだからな」

「私は既に限界が近づいていた。」

煉獄鳥は上限がある。

全身の呼吸を巡らせて力を燃やすのはとても大変だ。

さらにその燃やす力は体の色素を全て燃やす。

私はもう煉獄鳥は使えない。

万事休すか…

その時、

ヒノカミ神楽。輝輝恩光

雷の呼吸。壺の型 霹靂一閃 五連

獣の呼吸。弍の牙 切り裂き

魂の呼吸。 伍の型 荒御魂

無惨は両腕と両足を斬り落とされ、地面に倒れる。

「炭治郎…今までどこに言ってたのよ！心配したんだから！」

「ごめんね。遅くなって、カナヲの命が無事で本当に良かった」

「炭治郎おお…」

カナヲは涙を流す。

「善逸、どこいったのよ！」

「炭治郎が城が地上に上がった勢いでそのまま城外に飛んでいったから探してたんだ」

「悪いな猪頭。あたしが不甲斐ないばかりに」

「年上のくせにそんな弱いのか…なら俺の子分で決まりだな」

「妹紅さん、大丈夫ですか？」

「ああ…何とかな」

それぞれの女の子達を隠にわたし、俺たちは振り向く。

「二「無惨！お前の命もここまでだ！」」

ちっ、油断した。まさか炭治郎以外にも赫刀の発動者がいたとは…しかも3人…。

空も青に近づいている。

その前に一番にも逃げ出したい。

しかし、私の矜持が許さない。

一年前、初めて炭治郎という鬼狩に肩を掴まれた時からこうなるとわかっていたはずだ。

やはり、あの女は予言者か何かか。

イライラする。

私自身の手で殺したい。

私は分裂は出来なくともまだ手段を残している。

それさえ間に合えば私は明日を生きることが出来る。

一番最初に動いたのは炭治郎だった。

まっすぐに無惨の方へと向かう。
無惨はそれを察知し、触手を放つ。
伍の牙。狂い裂き

「俺らがいることを忘れんなー！」

無惨の触手は一本また一本と斬られる。
そして、

ヒノカミ神楽。 円舞

炭治郎のヒノカミ神楽の円環が始まった。

ヒノカミ神楽。 碧羅の天

くっ、まさかその流れは！

ヒノカミ神楽。 烈日紅鏡

そうだ無惨。俺のヒノカミ神楽はほぼ全て完成した。

ヒノカミ神楽。 灼骨炎陽

うっ、またも的確に心臓を…

ヒノカミ神楽。 陽華突

お前はもうすぐ死ぬ。

ヒノカミ神楽。 日暈の龍・頭舞い

ここまで来たんだ。やはり繋がるんだ！

ヒノカミ神楽。 斜陽転進

幻影が見える。なぜあの男と重なるんだ。

ヒノカミ神楽。 飛輪陽炎

既に片目が潰れた炭治郎という鬼狩にあの男が重なるのだ！

奴はとうの昔に死んだはずでは…

ヒノカミ神楽。 輝輝恩光

気づいたか無惨。俺の魂は縁壺さんと同じ魂！

ヒノカミ神楽。 火車

まずい！何としてもこの技の流れを止めなければ！

無惨は触手をさらに出し、炭治郎目掛けて突き刺そうとする。

しかし、見えていたはずの炭治郎の姿は刺さったように見えたが感

覚が無い。

ヒノカミ神楽。 幻日虹

あとわずかだ。あと1つ繋げてさらにこの型を叩き込めば無惨は消滅する。

無惨の心臓は残り1つ、これが縁壺さんが繋げられた最後の型。

ヒノカミ神楽。炎：

その時だった。何かにあたり、俺は弾き飛ばされる。

「危なかったわね。無惨…」

「お前は…」

「急いで飛んで来て見りやこんな子供達に手こずるなんて、あなたそれでもこの区にの鬼の頭でしょ？」

「すまない…それに私たちはもうすぐ太陽に…」

「その心配は無いわ」

その鬼は指を鳴らす。

すると、空の色が黒くなる。

そして空には沈んだはずの月が浮かんでいる。

その月もまた赤い色をしている。

「間に合って良かったわね。あなたもうすぐ太陽で死ぬはずだったのよ。時間の把握はしっかりしなさい」

俺は何が起きたのかわからず、倒れていた。

起き上がり、無惨の方を向く。

するとそこには六つの翼を持ち、西洋風のドレスのようなものを着た。女の子が無惨の前に立っていたのだ。

「その鬼狩さん、面白い力をお持ちね。昔なんか見た事がある力だけど、あなたってその子孫か何か？」

俺はその姿を見て縁壺さんの教えてもらった特徴を頭の中で照らし合わせる。

「何ぼーつとしてるの？もしかしてあなた、気が動転してるの？無理もないわね。せつかくこの無惨という鬼を倒せるチャンスだったのに！ざっくんねん！」

「お前……………」

「ん？よく聞こえないんだけど」

「お前は……レミアア・スカーレットか！」

「正解！初めてあったはずなのによく名前を知ってるわね。まあ私はほとんど名前を出したことはないんだけど、もしかしてあなた本当に継国縁壺とかいう戦士と繋がりでもあるの？」

やはり合っていた。

縁壺さんが初めて負け逃げをした時の鬼の大群の頭領にしてもう1人の鬼の始祖、レミアア・スカーレット。

縁壺さんにとっての八十八年の中で唯一の敗北をした相手だ。

「無惨、そういえばさあ、あなた、死ぬのはいつか知ってる？」

「!? なぜ私は死ぬ時期をお前から教えてもらわなければならぬ！」

その時、無惨の四肢は弾けとんだ。

そのまま無惨は地に土下座をする形となる。

「あく、無惨、あなたって本当に頭も無惨なのね。この状態でまだ理解できないのかしら？あなたが死ぬのはあと数分後よ」

鬼の始祖の史実と全ての因縁の敵

「なんなんだ！もうすぐ夜明けのはずだが」

「空が真っ暗だ！」

「午前4時35分、既に太陽は無惨を照らしているはずだが」

「一体何が起こっているんだ…」

育手たちは混乱する。

その声を聞き、私は全力で屋敷の外へ走る。

一体何が起きているんだ！

鏖鴉はほぼ全滅、子ども達との連携も取れない。

今から浅草まで鴉を飛ばしても30分は要する。

まさかこれ以上の鬼がこの世界には存在したというのか！

私は思いきり屋敷の障子を開き庭へと出る。

そこには赤い月が浮かんでいた。

「そんな…」

私は膝をつく。

鬼殺隊を率いてきた産屋敷一族、それもここまでか…。

せつかく父上と母上は無惨のために犠牲になったのに…。

どうしようもない。その鬼に関するものは極わずか、正体や弱点を

掴むには少なすぎる。

後ろからは泣き叫ぶ姉や妹たちの声が聞こえる。

もうおしまいだ…。この世から鬼を全て消すなんて無理だったん

だ…。

無惨だけなら良かった。でももう1人の鬼は無惨以上の術を発動している。

太陽を完全に隠し、赤い月夜を作り出すという血鬼術。

それほどの力を持つ鬼とも戦うには戦力が足りなさすぎる。

「御館様…お話があります」

「なんだよーもういいだろ！私なんか力不足なんだ！もう人間は鬼には敵わない。もうすぐこの世界はいずれ鬼に滅ぼされる…。もう…

終わったんだ…」

「お館様、そういうのはこの書物を読んでからにしてください」

私はその書物を見る。

そこには産屋敷あまねの日記と書かれていた。

「御館様の母上は私にもう一人の鬼の始祖が動き出した時にお館様に読んで欲しいと言われて渡されていたのです」

私は涙をを拭い、本を読む。

大正五年四月十九日

私は帝国図書館で調べ物をした。

そこには不思議な本があり、私は手に取った。

その本は英語で書かれたものであり、日本のものとはかけ離れた鬼の文化がこと細かに書かれていた。

そこに描かれていた挿絵で私は気がつく。

その絵は『レミリア王女に捧ぐ』と記されていた。

その王女は若くして病気にかかり、青い彼岸花を潰して飲んだことにより病気は回復した。

だが、それと同時に姿を消したと、

そして無惨は青い彼岸花という薬を飲んだあとから行方しれずとなったこととほぼ一致していたのです。

この記述が正しいのであれば縁壺がはるか西の国で会ったものはレミリアという鬼の始祖の可能性が非常に高い。

そして縁壺は一度だけそのものに日の呼吸を打ち込んだことがあると。

私は驚いた。縁壺という始まりの呼吸の剣士はもう一体の鬼の始祖と会っていた、そして…これが正しければ…。

炭治郎、この戦いは全て君にかかっている。

どうにかしてでも勝ってくれ。

世界中の人間のためにも。

「何故だ！私とお前はこの世界の鬼の王ではなかったのか…」

「うーん、半分正解だけど半分は間違いいね。あなたは確かに鬼の王だったわね。でもよく考えなさい。あなたの従えた十二鬼月は少しずつだけど羽振りが良くなっていることに気がついていなかったでしょ？」

「!?そうか、童磨と玉壺がなぜ上機嫌だったのか、お前が入れ知恵してたのか!」

「そうよ、あなただってせっかくの鬼材の使い方がなっていないから、私が教えてあげたのよ。それに、あなたはなぜ死ぬのか分かってる？」

「どういうことだ！私はまだ…」

「あなたの役目はとづくに終わってんのよ、鬼狩の戦力を大幅に減らすということだけど。口減らしご苦労さま」

レミリアは思いきり口を開き無惨をむしやむしやと喰らう。

その時に僅かに血がこちらに飛んできた。

その様に俺たちは震える。

「私は…私はこの世界の鬼の王となりこの日本を戦いから護るものとなるはずが…何故だ！私は！私は！…」

ぐしゃっ

無惨は完全にレミリアに吸収された。

「ふう、ごちそうさま、無惨、あなたは私の体の中で悔しがりながら世界中の人間を鶏や牛のように畜産物とするのを眺めなさい」

レミリアは恐ろしいことを口にしていった。

世界を完全に畜産物にする。

それがレミリアの本当の野望。

もしこの戦いで俺たちが負けてしまえば、世界中の人間は飼われるものとなる。

これほどの力を持つ鬼にどうやって勝てばいいのか…。

「ふん、腹ごしらえも済んだし、そろそろいい頃ね」

レミリアは両手を広げる。

すると、レミリアの姿は大きく変わる。

レミリアの背中からは触手が生え、腕や足には口が現れる。

まさに先程の無惨に近い姿。

そしてさらには身長が大きく伸びる。

「いいわね、漲ってくるわ。この世界の鬼の王、レミア・スカーレッツの誕生よ。喜びなさい。人畜ども」

俺は足が震えて止まらない。

でも今ここでレミアを倒さなければ…。

その時、俺の横に立っている人に気がつく。

「彌豆子……、どうしてここに…」

「お兄ちゃん、全部思いだした。私は竈門彌豆子、竈門炭治郎の妹、そして、あなたによって一度鬼にされたものだということもね！」

「あら、久しぶりね。3年前かしらね。あの時は可愛かったわよ。竈

門彌豆子さん！」

俺は衝撃的な事実を知った。

鬼舞辻無惨が俺の家族を殺したのではない。

俺の家族を殺したのは、あのレミアだったのか。

始まりの夜と終わりへの戦い

3年前、お兄ちゃんが炭を売りに麓まで降りて帰ってこなかったあの夜。

「お兄ちゃん遅いなあ、いつまで炭を売ってるんだ？」

「炭治郎はお節介だからね。色んな人のお手伝いをして帰ってこなかった日もあるわね。今頃麓の三郎さんのところに泊めてもらってるかもしれないわ」

「ちえつ、せっかくいっぱいの木を切ったのにさあ」

「それに、お兄ちゃんは頭が硬いからさ、全部売るまで帰らないって聞かないからなあ」

「明日の朝に帰ってくるんじゃないかな。お兄ちゃん、道に迷ってなきやいいけど、それに六太も寝ちやったからみんなも……」

その時、雪を踏む音がする。

こんな夜中に誰だろう。

私は戸を開ける。

「あの……夜分遅くすみません……」

その目の前には私と同じ背丈の女の子が立っていた。

「すみません……山菜を取りに来たんですが、道に迷ってしまつて……それで山を歩いていたらここが明るかつたので……泊めてもらえませんか?」

「いいですよー!こんな寒い中、山菜をとるのは大変ですからね……」

私は家の中へと招き入れる。

「少ないですがこちらをどうぞ」

「ありがとうございます」

女の子はご飯を食す。

こんな寒い中たった一人で……可哀想に。

女の子がご飯を食べ終わると、私に話しかけてきた。

「こんな大家族、よく養えてますね。女の子ばかりですが誰が稼いでるんですか?私は妹しかいないので貧乏で……」

「お兄ちゃんがいるんです。私のお兄ちゃんは麓に炭を売りに行って

るんだけど、私たちは幸せよ」

「そうなんだ。お兄ちゃんがいるのね、あと、日の呼吸って知ってる？」

「？私は知らないなあ、お兄ちゃんなら知っているとおもう」

「へえ、お兄ちゃんが知ってるかも、ねえ」

その時、女の子は変な笑みを浮かべる。

その瞬間、家族が切り刻まれる。

「きゃあー！」

「うわあ!!」

辺りに血が飛び散る。

私はそれに危機を感じ、全力で逃げる。

しかし、背中から思いきり切られる。

「あなたのお兄ちゃん…炭治郎って言うのね。帰ってきたらどう思うかしら、鬼になったあなたをどうするか見ものね」

「どうして……」

私は意識が薄れゆくなか何かをかけられた。

「あなたにはもつともつと特別な鬼なって欲しいって言われてね。」

あなたは日の呼吸を現在に伝える一族だって知ってるわよ。ヒノカミ神楽が日の呼吸の型を結ぶ舞だというのもね」

私はその言葉を聞いた直後気絶した。

そして私は鬼になったのだ。

「そうね…私はあなたたちを最初から知ってたの。私は運命が見えるからね」

恐ろしいことをレミリアは俺たちに告げた。

「あなた達の運命は本来はもつと違った、でも無惨とかいうバカが色々引つ掻き回したせいで鬼狩りなんか作り出しちゃうし、それにあいつは本当に視野が狭いのよ。探していた青い彼岸花はとつくにこの世から絶滅してるのに」

「どういうことだ、無惨は、その花を探していたのか」

「ええ、そうよ。青い彼岸花は本来この西の大陸に存在した花よ。私

も無惨も同じ花で鬼になったのよ。でも残念ね、私が絶滅させる前に日本の外にあることに気がついてたら今頃鬼の始祖は無惨だけだったのに」

俺はこの鬼を倒さなければ、そう体に言い聞かせる。

「そろそろ話も終わりにするわ。私は殺さなきゃならない奴がいるの。そうね、まず手始めにこの国の皇から殺すわ」

そうやってレミリアは飛んでいく。

俺たちは全力で追う。

その間にもレミリアは触手で人々を突き刺し続け、殺して回る。

雷の呼吸。壺の型 霹靂一閃 八連

しかし、触手は切れてもすぐに回復してしまう。

獣の呼吸。弍の型 切り裂き

「柔らかすぎて刃が通らねえ！」

魂の呼吸 伍の型 荒御魂

「何とか通りましたよ」

だが、日の呼吸を一気に使いすぎたようで肺がものすごく痛い。

「炭治郎！ここは一旦走ることだけに集中して！型を出すのはまだ無理だと思うから」

「ありがとう…」

だがあまりにも人々が食われようとしている。

どうすれば…

水の呼吸。拾の型 生生流転

「富岡さん！」

「炭治郎！お前が最後の希望だ！あの鬼の始祖を急げ！」

風の呼吸。肆の型 昇上砂塵嵐

花の呼吸。陸の型 渦桃

「危うかったぜ！起こしてくれてありがとうがとな！」

「あの時はどうなることかと思いましたがよ。愈史郎さんの血鬼止めがあったことを感謝しましょう」

不死川さんや咲夜も助けてくれた。

本当に嬉しい、

でもこの国の皇の元へ向かっている今、
俺は全力で走る。
レミリアを追い抜かなければ、そう思いながら走り続けた。

最後の戦いの地と十三の型

俺は前田まさお。

隠としては縫製部隊の頭である。

だが実際の縫製部隊は俺と森近の2人しかない。

そんな2人は今、皇居の周辺にいる。

お館様の命令により無惨が地上に現れるであろう候補として上がった場所の一つにである。

俺は空を見てムズムズしている。

「先輩、もしかして無惨よりも強い鬼が現れたんじゃ…」

「何を言ってるんだ森近！怖いこと言うなよ」

俺の心臓はバクバク打っている。

その言葉は現実のものとなった。

赤い月が見える方から何かが飛んでくる。

「皆のもの————敵襲————！」

やばい！俺たちは死ぬんだ。

このまま死ぬくらいなら恋柱の下着でも作っておくんだった。

そう思い死を覚悟した。

キン！

弾く音がする。

「大丈夫ですか！」

「こいし殿！ええ、無事です」

「前田さん！森近さん！お2人は早く別の所へ！ここは私たちが食い止めます！」

俺はそう言われて全力で逃げる。

「待ってよ——先輩！」

命の方が大事だ、それに俺がいなければ鬼殺隊の隊服を完璧に編めるものは新人の森近だけになってしまう。何としても！

「あら、よく追いついたわね。戦える鬼狩は…見たところ5人のよう

ね」

今、皇居の近くにレミリアは来てしまった。

間に合ったのは俺、伊之助、妖夢、咲夜、アリスだけだ。

こんな状態で勝てるのか心配だ。

でも、俺は落ち着いて構える。

炭治郎たちはまだ来ない、いや、準備をするのには時間が必要だ。

ここで足止めをさせれば陛下は逃げる時間ができる。

「そうだよ。お前を足止めするのには5人で十分だからだよ！」

俺はそう虚勢を張る。

実際にはあの無惨を食らった鬼の始祖だ。

膝が震えている。

このまま逃げ出したい。でも俺はもうあの弱虫だった善逸じゃない。

俺は深く呼吸をする。

雷の呼吸。 漆の型 大放雷

斬撃を飛ばす。

しかし、当たらない。

魂の呼吸。 式の型 乱魂

血鬼術 不夜城レツド

レミリアは十字を現し、妖夢の刀を止める。

「な、なんという…」

そのまま妖夢は弾かれる。

獣の呼吸。 伍の型 狂い裂き

血鬼術。 ハートブレイク

「伊之助！」

「伊之助さん！」

伊之助は心臓のある所を貫かれる。

「グフオア…」

伊之助はそのまま地へと伏す。

炭治郎、どうにかしてくれよ。

すぐ近くにいるのはわかってるんだからね。

「案外雑魚ばかりで拍子抜けだわ。あなたたちを最初にころす！」

ヒノカミ神楽。 円舞

レミリアは気付かないうちに左手が斬れる。

「遅いよ……炭治郎！どんだけ時間がかかってんだよ！」

「すまないみんな、足止めありがとう」

「やっと来たわね。てつきり力尽きてると思ったわ」

「お前は禰豆子の因縁でもある！禰豆子を鬼にし、世界中を恐怖に貶めたお前は絶対に許さない！この俺がお前を倒す！」

「あら、やって見なさい。さつきやったヒノカミ神楽というのはど……」

レミリアは気がついた。

自分の左手がまだ回復しきれていないことに。

「どういうこと……私の手が……」

「完成したんだよ！日の呼吸が！」

「まさか……私に傷をつけたあの男の使っていた技をなぜ……なくってね！」

血鬼術。 スピアザグングニル

ヒノカミ神楽 幻日虹

「さすがに痛いわよ」

「お前は！運命を見ている！そうだな！」

炭治郎はレミリアにそう言い放つと、レミリアは焦る。

「凶星だな。やはり、自分の有利な運命だけを見て、そうやって避けていたんだな」

俺はその運命を変えるためにここに今生きているんだ。

もうこの命が燃え尽きようとも、レミリアを倒さなければ、

十三の型を決めるためにも俺は覚悟を決めたんだ。

「炭治郎。そなたに教える十三の型は非常に危険で難しい。私でさえ一度しか出せなかった技だ。それに、私は力が衰えていたためにお前に託すしか無かったんだ。すまない」

「いいんですよ。俺は鬼がない世の中で禰豆子という妹は幸せに暮

「らせるようにも
「そうか…ならば、覚悟は出来ているな！」

円環の先と命の終わり

深く呼吸をする。

今だ！

ヒノカミ神楽。 円舞

「当たらないわね。それでも日の呼吸の使い手かしら？」

血鬼術 スカーレットデイスティニー

全方位に攻撃が飛ぶ。

「うわああ！危ない！」

「厄介な技を放ちますね」

「なりふり構ってられない感じに見えますね」

ヒノカミ神楽。 幻日虹

レミリアに隙ができる。

ヒノカミ神楽。 斜陽転進

僅かに髪を斬る。

その瞬間、レミリアが目を見開く。

それもそうだ。今レミリアの髪の色は青から白へと変わっているからだ。

「どういうことよ！無惨！早く説明しなさい！」

「ククク……レミリアよ、そのカリスマの頭でわからないというのであれば、既にお前は負けている」

「そう、あなたは無惨を吸収した。そう、薬を投与された無惨をね！」
「な……」

私は髪の毛が白くなっている。

それは人間でいう老化である。

無惨は既に老化していた。その薬は10秒で50年という凄まじい速さ、

私は運命の一つからそれを話すものを見た。
つまり、無惨を吸収してから既に一時間。

1万8000年！

老いすぎている。

だからこそ速さが落ちていたのか。

分裂は出来ない。老化は凄まじい速さで襲ってくる。
どうにかしなければ。

私はカリスマよ。世界を乗っ取るまであと少しなんだから！

ヒノカミ神楽。輝輝恩光

血鬼術 ミゼラブルフェイト

近すぎる！

俺は急いで距離を取ろうとする。

しかし、その術は俺を追い続ける。

「さあさあ、運命に抗うものよ！その運命からは逃れられない！」
全力で避けようとする。

しかし、避けきれず、左腕が斬り落ちる。

「ぐああああー！」

痛い！

だがここまで繋いだ。呼吸を止めるな！

あと少しなんだ！

俺は右腕だけで刀を握り、振る。

ヒノカミ神楽。碧羅の天

レミリアの右脚にあたり、右脚が落ちる。

何としても繋げるんだ！

ヒノカミ神楽。日暈の龍・頭舞い

右翼がごっそり斬り落とされる。

もしかして！来るのか！

やはり動揺してるな！

ヒノカミ神楽。飛輪陽炎

レミリアの左目が潰れる。

ヒノカミ神楽。烈日紅鏡

レミリアの体から生える触手が全て斬れる。

「私は！世界の鬼の王なのだ――！！」

血鬼術。デーモンロード

ものすごい光線と光球が放たれ、避けるのがやっとになる。

呼吸を止めるな！今ここで使うしかない！

ヒノカミ神楽。灼骨炎陽

くっ、左脚が痛い。

負けたくない。

勝ちたい。

私は初めて勝ちを渴望していた。

だがもうすぐ終わる！

レミリアよ！お前の戦いは既に負けだ！

レミリアの体に傷が浮び上がる。

その瞬間この傷に気がつく。

無惨、まさかお前までレミリアに抵抗していたなんて！

呼吸を整え、更に打ち込む！

ヒノカミ神楽。炎舞

レミリアの下半身が落ちる。

なぞるんだ。傷の部分に更に叩き込め！

ヒノカミ神楽。火車。

みえる！心臓が！そこを潰す！

ヒノカミ神楽。陽華突

「ぐはあああー！」

心臓を潰された。

私は血を吐く。

繋がってしまった。

十二の型が！私は逃げることにしか考えられなかった。

見えないのだ。もう、勝てる運命が！

「レミリア！お前の”運命”もこれまでだ！」

ヒノカミ神楽。十三の型 命運・日輪断ち

レミリアの体は限界を迎え、更に斬り刻まれる。

俺の体は熱い、このまま内臓全てを焼き尽くすのか！

これこそが十三の型、縁壺さんが死を迎える結果となった型。

刀からは炎が上がり、そしてレミリアと自分自身を焼き尽くす感覚に襲われる。

でもこれこそが、レミリアを倒す、最後の手段だから。

その瞬間、周りの世界が消える。

炎が止んだ瞬間、俺たちは炭治郎の元へ駆けつける。

目の前にはレミリアの残骸、そして…

「炭治郎！死ぬな！禰豆子ちゃんが待ってるんだ！」

「子分より先に死ぬなんて不孝だぜ！」

「起きて！どうして…どうしてこんな…」

微かに聞こえる。

でも、俺の命もここまでか。

俺はなぜこの場所にいるのかわからない。

俺は死んでいるはずだ。

内臓を焼ききり、もはや生きることなど不可能。

そう思った時、声がする。

「よくやった、炭治郎」

無惨の願いと太陽のある空

俺は真つ暗な世界の中で後ろを振り返る。

そこには無惨が立っていた。

「レミリアを止めてくれたこと、本当にありがとう。私はお前に感謝してもしきれない。お前がレミリアを止めてくれなければ私は失意のままこの世を去っていただろう」

「無惨…、止められたのは俺だけの力じゃない。魂の記憶、遺伝の記憶、そしてみんながいたからこそ、俺は勝てたんだ」

「炭治郎、お前は優しいんだな。自分だけではなくみんなも評価する。私はそれがほとんど出来なかった。この、レミリアという女が更に壊したせいだな」

無惨の足元で震えながら頭を抱える女の子がいた事に気がつく。

「うー、まさかあんな強い型が存在してたなんて、私の運命を見る力でも見れなかった。なんでよ、縁壺という最強の剣士さえも負かしたこの私が…」

レミリアは自分を振り返っている。

「お前の敗因はただ一つ、驕って自分の有利な運命しか見ていなかったことだ。もつと広く見ていれば確実に勝っていたはずだ。だが、お前のその幼い精神ではそれに気がつくことは無いと思うが」

「うるさいわね！私だって500年以上生きてるのよ！幼くなんか…」

「私の1100年から比べればまだまだ子供だな」

「その500年くらいの子に吸収されたのはどこのどいつだっけ？」

「うっ……」

無惨とレミリアはお互い言い争いをしているが、

何とも和むのは何故だろう。

「なぜ無惨とレミリアはこの真つ暗な世界にいるんだ？」

「ああ、実はだな、お前には本当に悪いと思っただが、その…、私の思いをお前に受け継いで欲しいのだ」

無惨はそう俺に言う。

「なんだ。俺は死ぬはずの体で受け継いで欲しいというのは」

「その心配はいらない。お前の体は私の僅かな細胞が最後まで働いて治しておいた。完璧とまではいかないが、失った左腕と潰れた右眼はほとんど元通りになっている。それに、お前の寿命も痣のせいで短くなってしまった分は元に戻した。お前は長く生きろ」

「無惨…、じゃあ聞こう。お前の思いはなんだ」

「お前には2つの思いを伝える。まず一つは、青い彼岸花をこの世界から完全に絶滅して欲しい。私やレミリアのような長い時間を生き続ける苦痛はもうコリゴリだ」

青い彼岸花はレミリアがほとんど絶滅させている。

更には無惨が見つつけられなかったのであれば日本には存在しない。「わかった。だが、俺だけの力では無理だと思う。鬼殺隊のみんなにも伝える。そうすれば、いつかは必ず青い彼岸花を絶滅に追い込むことはできるはずだ」

「ありがとう。そしてもう一つは、私だけの願いなのだが…、私は太陽を直接見たことがなくてだな…、お前の眼を通じて一度だけ太陽を見たのだ！それが果たされれば私はもうこの世に未練はない」

「わかった。だけど俺の体を鬼にするとかそういうのは無しだ。少しだけでいいと言うなら俺の右眼を通して見るんだ。そしてお前たちは地獄へと向かうんだ」

「ありがとう、炭治郎。お前は優しい鬼狩りだ。お前と会えたこと、その運命に感謝するしかないな。まさに優しい鬼狩りによる鬼退治だな」

「おい！炭治郎の様子がおかしい！」

「何が起きているんだ！」

「よくわかりませんが、急速に回復しています」

「それに、左腕まで生えてきたぞ?!どうなってるんだ?」

そして、俺は目を開ける。

そこにはみんなが俺をみんなで見ている。

「炭治郎…。良かった…。さつきはどうなることかと思った」

「突然回復して腕まで生えるとか何があったんですか?」

俺は体を起こし空を見る。

そこには太陽があり、青空が広がっていた。

無惨。これがお前の見たがっていた太陽だ。

頭の中に響いてくる。

ありがとう、炭治郎――。

そう聞こえた時右眼の視力が完全に失われた。

「無惨。お前もまた、悲しい生き物だったのだな」

俺はそう呟いて眠りについた。

「炭治郎！起きたのにまたどうした！」

「し――！静かに、炭治郎さんは寝息を立ててますよ」

「そうですよ！善逸さん、世界を救ったのですからここは眠らせて方がいいですね」

最後の任務と新たなる未来へ

「お兄ちゃん、おはよう、随分寝てたね。私は2年間、お兄ちゃんは4ヶ月、どつちにしてもお互い眠るのが大好きなんだね」

俺は目が覚めると蝶屋敷の天井がうつる。

「禰豆子…。今日は何日だ？」

「9月30日だよ。信じられないよね、あの戦いからもう4ヶ月も経ったんだよ」

俺は思い返す。

あの日、俺たちは多くの者を失った。

柱は八意さん、さとりさん、悲鳴嶼さんの3人を、

同期は玄弥を失った。

特に悲鳴嶼さんは俺たちが戦場を移した時も左脚を失いながらみんなを守って片足で立ったまま往生していた。

その出で立ちは凄まじい迫力と仲間への思いを一身に受けている様だった。

そしてそこ駆け寄って泣いていた隠、その子が悲鳴嶼の言っていた沙代ちゃんだったことには悲しまずにはいられなかった。

「ごめんなさい！私のせいで！私が……」

泣き崩れた沙代ちゃんに俺はもらい泣きしてしまった。

そんな俺はあの日にみんなで鬼殺隊へ戻る途中に気絶して以来4ヶ月、目を覚まさなかったようだ。

「起きてたんだ…。禰豆子ちゃん早く言ってよ！せつかくお見舞いに来たのに」

俺は声の方を見るとそこには涙を流すカナヲがいた。

「カナヲ……」

「無茶しすぎだよ！あの後体中を調べたら火傷がものすごく多くて何回も死にかけていたのよ！それに、あなたが寝ている間、みんな忙しかったんだから……」

カナヲからは色々と話を聞いた。

俺は寝ている間に日本中を歩き回り、鬼が本当に絶滅したのかどうかを見て回ったそうだ。

実際、無惨とレミリアという二体の鬼の始祖が消滅したものの、もしものことを考えて念には念をと。

そしてさつき。

「来てくれてありがとう。今日が最後の柱合会議だ。今回は特別に柱だけではなく、甲隊士にも来てもらった。話すことは2つだけだ。簡単に終わる。」

「一つ目は今日を持って鬼殺隊を事実上解散とする」

「御意」

「鬼殺隊が1100年もの間戦い続け、多くの子供たちが亡くなってしまった。だけど、私たちは鬼を滅ぼすことができた」

「長きに渡り身命を賭して世のため人のために戦って戴き尽くして戴いたこと」

「産屋敷家一族一同心より感謝申し上げます」

そう言って御館様たちは頭を下げた。

「顔をあげてくださいませ！」

「礼など必要ございません！」

「鬼殺隊が鬼殺隊で在れたのは産屋敷家の尽力が第一です！」

「それに、輝利哉様が立派に務めを果たされたこと、御父上含め産屋敷家御先祖の皆様も誇りに思っておられることでしょう」

「ありがとうございます……！」

みんなは泣いていた。

そして、もう一つのことを思い出し、手拭いで涙を拭く。

「もう一つの事なんですけど、これは鬼殺隊としての最後の役目となるでしょう。前に炭治郎という甲隊士が無惨という鬼の始祖から伝えられた思いがありました。それは青い彼岸花をこの世から絶滅させて欲しい、

と」

「青い彼岸花ですか、それは一体何なんでしょうか」

「実は青い彼岸花にはとてつもない力を持っていて、それを口にしましたものが鬼となった事例が2つあったのです。一つは鬼舞辻無惨、そしてもう一つは最後の鬼の始祖、レミリア・ヴラド・スカーレットです。」

その鬼になる力を失くし、この世から鬼という悲しき存在を二度と現さないように青い彼岸花をいずれ見つけ出して絶滅させる、それが私たち産屋敷、そして鬼殺隊の最後の役目です。それが終わった時、鬼殺隊は本当の意味で解散をすることになります。本当にありがとうございます」

「そうか…やっぱりまだ鬼殺隊の仕事は残ったんだ…」

「心配ない。たった一つだけだし、私たちが忘れずに伝え続ければいいか誰かがやってくれる。そう信じましょう」

その後病室には色々なお見舞いが来た。

「愈史郎さん！パチユリーさん！」

「炭治郎、よく頑張ったよ。お前のおかげで鬼は俺とこの娘だけになった」

「ちよつと、私だって頑張ってたんだからね！」

「お前は皇居の方の鴉まきしてただけだろ！途中まではなんも役に立ってなかったくせに」

「ひどいわーあんたあの戦いの後散々私のことを珠世さんと言いながらやってたの忘れないわよ！」

俺は流石に引いた。

てかどんだけ珠世さん好きなんだこいつは…。

「ごめんなさい。愈史郎は珠世さんが好きすぎておかしくなってるからしばらくは私が介抱するから」

そう言ってパチユリーさんは愈史郎を背負って病室を後にした。

「炭治郎、目が覚めてよかった！」

「心配したんだぞ！4ヶ月も寝腐りやがって！」

伊之助を見ると何故か少しおかしい、なんだろう。

「それにさあ、こいつアオイちゃんと先月祝言あげたんだぜ？同期で最速だぞ？羨ましいわ、それにアオイちゃんは今妊娠4ヶ月なんだと！」

「え！本当!？」

「こいつめちやくちや綺麗だったぜ？お前らどこで付き合ってたんだよ！」

「善逸！その話はやめろ！」

「はいはい、俺も来週には禰豆子ちゃんと結婚するからね！よろしく！お義兄ちゃん」

「は？いつの間にそんな話をしてたんだ!?善逸！お前に禰豆子は渡さぬ！女遊びとかするような気がしてならない！」

「お兄ちゃんいいでしょ？それに善逸さんにはちゃんとこの先のお金にも困らない見立てがあるんですからね」

「そうだぜ？俺は禰豆子ちゃんと結婚する。そして俺は禰豆子ちゃんには何不自由なく暮らしてもらおう自信がある」

善逸はそう言つて禰豆子を引つ張つて行つた。

伊之助はアオイちゃんのことを気になったよう病室を出ていった。

「炭治郎！良かった！目が覚めたんだ！」

「いつここを出るんだ？」

「来週です。禰豆子の祝言を終えたら俺は雲取山に帰ります」

「その前に私たちのうちにも遊びに来てくださいよ！」

「声がでかいんだよ！」

「いやあつ！まきをさんがぶつたあ！」

天元様見ましたあ!?今ぶたれたの」

「見てなかったわごめん」

「落ち着いたら遊びに来てね。これうちの住所とお土産のお菓子、あと1年に1回鬼殺隊の集まりもあるから」

「あ！ありがとうございます！」

「こんにちは！父上！兄上！早く早く！」

「あつ！煉獄さん！千寿郎君！槇寿郎さん！妹紅さんまで！ご無沙汰しています！」

「俺の鎧をつけて戦ったんだな！嬉しいぞ！竈門少年！」

「それに！僕たちも実は御館様のところで頑張ってたんですよ！兄上や父上が鬼を狩るところ、見て欲しかった！」

「え!?そんなことあったの!?御館様のところも大変だったんだなあ」

「ホントびびくりしましたよ。しかもあの時攻めてきた鬼の声がまさかレミリア本人だったなんて」

「レミリアはそんな所まで手を出してたのか…あの鬼だけは許さない！」

「炭治郎さん、顔が怖いです」

「妹紅さんってそういうえば大丈夫だったんですか？」

「ああ、柱の中で唯一欠損がなかったのは私だけだったらしい。

まあ強いていえば髪の色が真っ白になったことくらいかな」

「そうなんですか…ということはみんな苦労してるんですか…」

「蟲柱は右脚と左腕が義手と義足、水柱は右腕に義足、音柱は左手が義手、蛇柱は両目失明、霞柱は車椅子、恋柱は両腕が義手、あと風柱は右手の人差し指が欠損ってところかな。ん?どうした?そんなにビクビクして」

「みんなすごい状態で戦っていたんですね」

「そうだよ。お前も一時は左腕が肩の少し下から先がなかったからな。突然生えだした時はびびくりしたって風柱も言ってたよ」

それからというもの、来る日も来る日もお見舞いやらお土産で病室がいつぱいになった。

それを全て食べ切るのに同期たち全員で食べ回った。

そして彌豆子の祝言を見届けた俺は雲取山へと一人帰った。

そして雲取山の自分の家の前には花が咲いていて、それが秋風に吹かれていた。

俺は家族の墓の前で合掌をし家の中に入る。
あの時の幸せは戻ってこない。
ならばこの先の幸せを自分で作ろう。
そう決めて俺は1人で炭焼きを再開した。

そして1年後、

「ふう、今年が良い炭が焼けたぞ」

「ごめんください」

俺はその声を聞いて振り返る。

そこにはカナヲが立っていた。

「お久しぶり、炭治郎。迎えに来たよ」

俺はカナヲと結婚した。

そして時代は現代へと移り変わる。

青い彼岸花と最後の鬼殺隊

「はあ……。久々の休みだ。最近はずいぶん忙しかったなあ」

研究に没頭し続けた結果大学の他の教授からは仕事は休むのも大事だと言われてしまった。

「それにしても3日も休みが貰えたところで今は外に出れないからなあ」

最近噂の病気が流行っているらしく旅行をすれば大学にも迷惑がかかる。

そんな俺はちよつとした広いアパートに住む大学の教授だ。

そんな俺は一年前にマレー半島の奥地で新種の花を見つけた。

その花はヒガンバナ、だが、そのヒガンバナは青いのだ。

俺は早速その花を写真で取り、その国の許可を得て何とか輸出に成功した。

日本に帰った俺はすぐに大学で研究をしている。

そんな時、電話がかかってくる。

「ん？見たことない番号だ。誰だろう」

俺は電話に出た。

「もしもし、嘴平ですが」

「君かね？青い彼岸花を研究している。教授は」

「誰だか知らないですが、なぜその話をご存知で？」

俺は思い当たる節を探した。

後輩の宇髓は体操の選手権で忙しい。

同じ研究室の助手である煉獄紅里は現在育児休暇中で俺の研究を知らない。

となると先輩で室長の魂魄妖音教授が誰かに話したのか？

「君の研究している青い彼岸花なんだけど、実はね…その研究を取りやめてくれないだろうか」

「どういうことですか？それに、どちら様でしょうか」

「そうだね、名乗るのがスジってもものだな。私は産屋敷輝利哉。君のいる大学の元理事長だよ」

俺はそれを聞いて焦る。まさか俺の働いている日本博物館の創設者の方だとは、だが、本当なら御歳113歳というお方だぞ？

「何かの間違いじゃないですか？産屋敷輝利哉様ならご存知だと思いますが、あなたは鬼殺隊という組織を率いていたってのは本当ですか？」

「ええ、君の曾祖父である嘴平伊之助にはお世話になったよ」

なぜ知ってるんだ。俺の曾祖父の名前を！

「それで、なぜ私の研究を取りやめて欲しいと」

「実はだね、君の研究がしているものが正しければおそらくそれは人間が扱ってはいけない危険なものだ。もし、信じられないのなら実験用のマウスに食べさせてそのマウスを太陽の下に置いてみなさい。もしそのマウスが灰になったら、その彼岸花を全て消滅させるように」

「わかりました。青い彼岸花を食べさせればいいのですね」

俺は急いで研究所へと向かった。

そして青い彼岸花をマウスに食べさせた。

すると、マウスの目の色が変わり、紅くなった。

そのマウスは突然性格が変貌する。

俺はそれを瓶に入れ、出られないようにする。

そして外に出た。

すると、ネズミはパチパチと音を立てて灰になった。

こんなものがこの世に存在していたのか。

俺は恐ろしくなり、研究室にあった青い彼岸花を全て持ち出し、焼却した。

「俺はとんでもないものを見つけてしまったんだ。やはり、この世に存在してはいけないものだ」

俺はそう悟った。

その時、また例の電話番号からかかってきた。

「あなたの言うとおりでした。なぜその効果をご存知なんですか？」

「実はね、その花は昔、鬼という存在を生み出した元凶なんだ。それに

今は2020年、そして鬼が誕生したのは816年と1418年の2度、つまりこの年こそが鬼の始祖が再び現れる年だったんだ。だからこそ、嘴平青葉くん、君にこそやって欲しかったんだ。最後の鬼殺隊隊員、産屋敷輝利哉の指示のもと、それに君は若しかすると大学を追放されるかもしれない。でも心配はいらない。私の方で説得するかから安心しなさい。

もしそれでも気に入らないのなら胡蝶病院に来なさい。私が直々に説明するから」

そう言つてその人からの電話は切れた。

俺は胡蝶病院へと走った。

お館様の思いと鬼殺隊の終焉

胡蝶病院に着いた俺は面会の話をする。

「あの、すみません。産屋敷輝利哉さんという方と面会したいのですが」

「予約していた嘴平さんですね。すぐに面会の用意をしますね」

俺は面会室に通された。

そこに座っていたのは年若いながらもただならぬ風格を感じる男だった。

「君が最近話題の嘴平青葉くんだね」

「はい…。あなたが産屋敷輝利哉さんですか？」

「そうだよ。私が鬼殺隊最後の隊士、産屋敷輝利哉だ」

俺は気になった。最後の鬼殺隊というのはどういう事なのか。

俺はそれを投げかけた。

「実はね、104年前の初夏の頃、私たち鬼殺隊は鬼の始祖を2体倒した。だが被害も大きく6000人の一般市民と1300人の隊士を失う大事件だったんだ。私は国の人からのかなり詰め寄られたよ。お前のせいで一般人が多く亡くなったんだって」

「それは…気の毒ですね」

「でも私はそれ以降あまり追求はされなかった。理由は君が見た通りの実験結果と同じだよ」

「つまり、この被害を出した元凶は既にこの世にいないと…」

「そう。それに鬼というのは太陽に焼かれるか、それと同等の型によって倒されるしか無かったのな。その日は太陽が午前11時になるまで出なかったんだよ。太陽を隠す力を持つものそれが鬼の始祖の1人だったのだよ」

「もう1人の鬼の始祖ってのはどうなんですか？」

「ああ、もう1人はその力を持った鬼に吸収された。その後、僅かに残った細胞が傷ついたある剣士の傷をかなり治したがな」

「それってもしかして」

「わかったかい？それが明治生まれ最後の猛者と言われた男。竈門炭

治郎だよ」

俺はすごいことを聞いていた。

竈門炭治郎。当時痣を発動しながらも21世紀の始まりまで行き続けたと言われる男だ。

俺はそれをテレビでしか見たことは無かったがとんでもない人だとは思っていた。

「そしてこれが私たち鬼殺隊の事実上解散前に撮影した写真だ。君の家にもあると思うけど」

「はい……!?曾祖父つてもしかしてこのイノシシの被り物を頭に乗っているのですよね。そっくりじゃないですか……俺と」

「そうだね、君の曾祖父、嘴平伊之助は相当な野生的性格だね。場合を除いて上半身は裸だったんだ。それに彼の空間識覚には何度か助けられた」

「そんな人だったんですか……。だから家に飾ってある隊服が綺麗だったわけですね」

俺はそれから色々聞いた。

鬼殺隊の実情、彼らのその後、辛い人々の過去なども。

「それで、俺にやってほしいことってなんですか？」

「実はだね、この話の最後の部分、ここを君に書いて欲しかったんだ。青い彼岸花の実態についてだけが埋まってなくてね」

「なるほど、つまり青い彼岸花の解説を俺が加筆すれば良いんですね」

「これで完成できる。君がいなければこの本は完成しなかった。長く生きられて本当に良かった……」

そして俺は3日ほどかけて解説文を書き、再び胡蝶病院へと向かった。

その途中の電車の中で、見覚えがあるような女性を見つける。

その女性はしかめっ面をしている。

下の方を見ると女性は尻を撫でられている。

俺はすかさず男の手を掴んだ。

「てめえ！しのぶになにしやがるんだ！」

俺はハツとした。なぜ俺の口から”しのぶ”という身に覚えのない名前を口にしてしまったのだ。

「ありがとうございます。妹の詩乃を助けてくださって」

「姉さん！そこは私が言うことよ！」

2人は仲が良さそうな姉妹だった。

「いえいえ、あれは見過ごせませんよ、妹さんの詩乃さんでしたっけ」
「そうですよ。私は富岡詩乃と申します」

富岡？もしかして…

「もしかして胡蝶病院の院長と何か…」

「はい、よく知ってますね。そうです。私の父、富岡義太郎は院長をしています。それに私たちはちょうどその病院に向かうところです」

「奇遇ですね。俺も行くところだったんですよ」

俺はその姉妹と話しながら胡蝶病院まで歩いた。

彼女たちと話していると心がホワホワする。

病院に着いた俺はすぐに産屋敷さんの病室へと向かった。

すると黒い服の女性が病室の前に立っていた。

それを見て俺は病室へと走る。

そして戸を開けるとそこには布を顔の上に被せられた産屋敷さんの姿がそこにはあった。

「もっと早く…もっと早く来てれば…」

涙がボロボロと出て来る。

すると、近くに立っていた女性が俺に話しかける。

「嘴平青葉さんですね」

「はい、でもなぜその名前を？」

「私は産屋敷神奈子、産屋敷輝利哉は私の祖父です」

「すみません、ご親族の方でしたか、実は俺、産屋敷輝利哉さんから頼まれてましてそれで」

「ええ、亡くなる前日、祖父からは聞いています」

そういうと、神奈子さんは話し始める。

「祖父は凄い人でした。戦争の後、日本を大きく立て直すために尽力しました。それに大学もわかしくして立ち上げ、今では権威のある大学にまで成長しました。ですが父は言っていました。私よりもっと日本のために、人々のために尽力した者がいる。その人々の思いを私は未来に託すためにも、と」

そして俺の目を見てさらに話す。

「祖父からあなたに伝えることがあると言われました。青葉くん、この国の大和魂を呼び起こすためにもこの本は必ず出版してくれ。それが私の最後の願いだ。頼みました。」

そう言われ、俺は何とかしてこの世に本を出せた。

その本のタイトルは産屋敷輝利哉の遺言の通りだ。

『鬼殺隊の全て〜Another of Slayer〜』